アスリのルビーは砕けない！

音葉玲雨

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

アスリのルビーは砕けない！

【Ｎコード】

Ｎ０００７ＨＴ

【作者名】

音葉玲雨

【あらすじ】

「ママ、ごめんなさい…。」

サバンナの人知れぬ木陰でたった１人、少女アスリは牛飼いとしての暮らしの中に１つ見出した、誰にも伝えられない楽しみに日々興じていた。母への謝罪を呟かねばならぬほどに罪深いその行為の中で、成長の過程にあるアスリが呼び戻すのは、犯した禁の咎めを屈辱をもって受け止める、姉・ラダンの過去の姿である。

自らにも等しく課されたはずのその禁を破ることにアスリは背徳感を抱きながらも、記憶の中の羞恥を基底とした本能的欲求に屈服し、今や習慣化してしまった特別な休息のもたらす大きな波に幾度となく飲み込まれ、大胆にもサバンナの真ん中で、高い頂への到達を繰り返してきたのであった。しかし、ある日のその最中に生じた想定外の出来事から、アスリの日常は動き出していく。

明かすことの許されない、けれども本当は見てもらいたい、相反する秘密に次々ともたらされる、性の目覚めと翻弄、歪んだ性癖、人を恋する感情、そして大人になるために避けては通れない儀式。愛しきコンプレックスで大切に守られた、たった1粒の大きなルビーとともに、思春期を迎えるアスリの物語。

――― ※ 章別キーワード ※ ―――

【アスリのいつも】／【興奮の糧、あるいはラダンにとって悪夢】／【挨拶は内緒の庭で】
性の目覚め　お仕置き　罰　躾　全裸　剃毛　パイパン　陰核
クリトリス　性徴　オナバレ　自慰バレ　絶頂　オーガズム　露出

【木陰の異変】／【サバンナの疾走】
シリアス　恋の芽生え

【森に、カインタ、見ずにして】
シリアス　姉弟　皮剥き　絶頂　オーガズム

【4人の場所】
射精　絶頂　オーガズム　おもらし・お漏らし　ホラー

【ラリーヤの手ほどき】

女性優位・女性上位　男子拘束　ＣＦＮＭ　包茎　包皮　皮剥き
顔射　性教育　巨乳　パイズリ　フェラチオ　セックス　早漏
兄妹

【つながる日】
キス　クンニ　潮吹き　処女膜切開　処女喪失・破瓜　初体験
中だし・中出し

孤独な旅路と1つの楽しみ

朝まで和らいでいた暑さが、徐々に高くなる太陽によって再び昨日の勢いを取り戻そうというひと時、サバンナの乾いた熱気を帯びた風がそよぐ中、少女アスリは数頭の黒い牛たちとともに、黙々と歩を進めていた。

大きな二重の目元にかかる前髪を残し、背中の中ほどまでに伸びるストレートの黒髪を頭の後ろで1つに結び留め、整った面影にあどけなさを残すアスリは今、牛としては歩みが早いが、所詮牛たる速度の仲間たちを引き連れ、まもなく到着しようかというサバンナの希少な牧草地へと向かっている。アスリは今朝、ロマドウ族の村にある自宅を出発して以来、サバンナで獲物を狙う獣に気を配りつつ、ここまで牛たちの許す限りの早足で進んできた。

額に汗を浮かべ、時折いつになく強い風が吹き上げる砂埃に顔をしかめるアスリの任は、少女1人には重労働ではあったが、この地で暮らす牛を飼う家庭にとって、牛の世話は子供かを問わず概して若い女性の仕事であり、アスリ自身も当然のように今日もまた、牛たちを統率している。

アスリの日々繰り返されるこの道中も、最初から1人というわけではなく、今こうして勤めをこなせているのも、幼い頃から姉たちとともに、日によって方々に点在する草原まで、幾ばくとなく牛と出かけ、遊牧や野生動物への対処を学んできた成果によるものであった。ただ、それも十分なサポートがあったわけでもなく、アスリがまだ遊牧に出かけるようになってほどなくして、少し年の離れた2人の姉たちは、次々「半女」となり家を離れることが多くなり融通が効かなくなって、この行軍からは外れてしまい、最も年齢が近い、2歳年上の姉のラダンだけが、最後までこの毎日の小さな旅路

に同行してくれていたのである。
ところがそれも、２年前にラダンまで半女となって以来、弟を除けば最も年下となるアスリ１人が、牛を先導する役目を負っているのである。

日常の、慣れたいつもの歩みであったとは言え、１人で牛を引き連れ、背丈ほどの長さの槍を片手に危険な動物に警戒しながらの道程は易くなく、アスリはこの１人きりの日々が始まった当初、しばらくは疲労にまみれ、覇気を失った日々が続いた。そして毎晩、今日の一時の安堵を噛みしめるも、常に誰かかしらが近くにいる中で育ってきて、初めて感じる日中の孤独感を思い返し、こっそりと床で涙していたのであった。

だが、利発で忍耐強いアスリは挫けなかった。長く退屈な行軍中、アスリはなぜ今この寂しさを感じなければいけないのか、自分が納得できるまで考え、ある日その答えを見出した。それは半女となったラダンや、半女からさらに成人した姉たちもそうしてきたし、他の家の少女たちもそうしてきたから、というシンプルなものであった、一見、諦めに近い考えにも思えるが、この日々を乗り越えた少女たちは皆、必ず半女になったことにアスリは気づいたのである。
実際、半女と子どもがどう違うのか、どうやったらなれるのかアスリは知らなかったし、母に聞いても一生懸命働いていればなれるという、全く的を得ない回答しか得られていなかった。その上、アスリも家を出るようになると牛の世話が大変だから、そんなに急いで半女にならなくて良いとまで言われる始末である。
しかし、先行する半女たちが半女になる以前に辿った経緯を見れば、アスリの考えは事実として正しかった。半女になるということは、大人の女に近づけるということにあたる。普通の思春期の感性を持つアスリは、村で希に見かける上品に着飾った美しい巫女のように立派な大人の女になる希望を胸にして、まずその前段の半女に

なる日を待ち焦がれているのであった。この日々は終わりなきものでなく、近い将来にゴールを迎え、加えてその果実として半女になれるという論理は、アスリの描く将来への道筋にも合致し、痛めつけられた心を元の状態へと近づけた。

以来、孤独であることに変わりはなかったが、ラダンと過ごした頃と同じく、この日々をある程度は楽しむ余裕をアスリは保てているのである。

もう1つ、実のところアスリには、この辛い道のりを毎日歩き続けるための、誰にも話せない大きな支えがあった。乾燥したサバンナで牧草地となりうる場所は、水の恩恵を受ける小川や泉が近くにあることが多く、中でも危険な野生動物が少ない牛たちが安全に水を飲める所にあたる。こういう場まで来てしまえば、牛たちがたっぷりと草を食んでいる間、アスリもある程度緊張を解いて、のんびり昼食を摂って水浴びができる。

アスリはこの場所であれば、「特別な休息」もとれること、そしてそれは寂しさを十分に吹き飛ばすだけでなく、孤独であるからこそなしえることであることに、ある日ふと気づいた。そして今日もまた、飽き飽きするような延々と続く牛たちとの道のりの中に見出した、誰にも伝えたことのないやすらぎを目指し、高まる胸をはやらせているのである。

アスリは成長によってひざ丈よりかなり短くなってしまった腰布から、スラリと伸びる足を急がせた。

半刻ほど後、アスリの一行は目的地の小川へと到着した。アスリの暮らす村からはるか離れた位置にあるこの小川の近辺は、赤土色の風景の続くサバンナのすぐ近くとは思えないほど緑も多く、アスリが向かってきた側では草原が広がり、小川を挟んだもう一方には、ところどころ背の高い草木が茂るほどであった。牛たちはワニがいないことが明白なほど澄み渡った小川に近づくと、一斉に喉を鳴ら

し小川の水を飲み始めた。アスリの村のまわりにも水場はあるにはあったが、人間が飲めるほどの水質の水は、村の中に点在する古い井戸から汲み上げるしかなかった。

別世界のようなこのポイントは、アスリのお気に入りの場所の1つであった。牛たちは満足するまで給水すると、今度はまわりの草原で贅沢な食事を開始した。

アスリもまず少しぬるい川の水で喉を潤し、牛たちの身勝手な動きの遠くに不穏な脅威がないことを確認すると、ここまで手放さずに持ち続けてきた長槍を柄の方から、小川のすぐ近くに生えた木の下の陰の柔らかい地面に、勢いよく突き立てた。

次はアスリの番だ。

砂の感覚

出発前の明け方の薄暗い時間、大きめのボウルに並々と注いだ1杯のミルクを朝食として流し込んだきりであったアスリは、たしかに空腹を感じていた。しかし持ち合わせた食事を口にすること以上に、今のアスリには優先すべきことがあった。

アスリは立てかけた槍に昼食の入った布袋をくくりつけ、もう一度あたりに目を配り、少しもったいぶって、腰布の結びをほどいた。再度意を決して、はらりと腰布をはだけると、丸みを帯びた丘と、ほんのしばらく前に生え始めたばかりの、大人に成り変わっていく体毛が現れた。本当の大人のものに比べればずいぶんと薄く狭いその範囲の中で、わずかに密度を増す中央部には、大切なものをしっかりと包み守るように、大きな皮膚のクッションが挟み込まれていた。そして両ふともも間の狭い空間には、アスリの褐色の肌よりも少しだけ濃い色をした、しわのあるかなり大きな花びらが、左右いずれもほぼ均等にぶら下がっていた。

直後、アスリの露出する汗ばんだ羞恥に、サバンナから届く乾いた熱い風が強く注がれた。アスリの感覚は、自ら行った行為によって晒された箇所へと集中し、長く待望した鼓動はさらに高鳴った。アスリは今、恥ずべき少女らしさを無防備にしているのである。

胸の奥がツーンとするような強烈な本能の導きに、まだ上着も脱ぎ終えていないのに、アスリは耐えきれず立ったまま肩幅ほど足を広げ、少し腰を落とした。アスリが割れ目とは呼べないほどはみ出した、陰部を覗き込むように背を丸めると、その飛び出す大きな唇の奥から我慢に耐えた証があふれ出し、粘度のあるとろりとした雫となって、糸を引きながらふとももの内側へとたどりついた。アスリは淫らな液体には脇目もふらずに、短く薄くあまり縮れていない

陰毛のすぐ下の、中央に構える分厚い皮膚を、左手の人差し指と中指ではさんで丁寧にスライドさせた。小指の爪ほどの大きさで充血したルビーが、いとも簡単にサバンナの熱気の下に引き出された。
アスリは息をのみ、剥きだしになった少し大きめの輝く宝石に、右手の中指をそっと寄り添わせた。

「…んっ…、あぅっ！！」

優しく指を1周りさせた瞬間、アスリが今朝からずっと待ちわびてきた期待は、とりとめのない数粒の砂がもたらした、ざらりとした感覚によって裏切られた。同時に、確実に約束されていたはずの快感が違和感へと変わったギャップは、最も敏感な一点への痛感となってアスリに襲いかかった。

甲高い悲鳴をあげたアスリは、広げていた足を瞬く間に閉じ、思わず尻を後方に突き出した。突如の異変を実感したアスリは、一瞬、間をおいて体勢を元に戻すと、おそるおそる包皮をめくって、慎重にクリトリスに傷がついていないことを確かめ、安堵した。改めて下半身に目をやると、足先はもちろんのこと、ふとももから腹部にかけて、ここまでの道中の乾いた風で吹き上げられた砂粒が、汗ばんだ箇所を中心に広く付着している。
アスリは冷静さを取り戻し、次に今日1日の時間の配分を思い出して、太陽の位置から早めに目的地に到着できたことを割り出した。まだ十分な時間が残されていることがわかったアスリは、あたりの牛たちを見回し、特別な休息を続ける前にまず、水浴びを優先することにした。

アスリが本能に直面しようとする間、アスリの同行者たちもまた、アスリとは全く別の方向への本能に対して、満足に向き合っていた。アスリの注意は先ほど来、牛たちにほとんど向けられていなかった

が、よく慣らされた牛たちもアスリからあまり遠く離れることもせず、ただ食事を続け、気ままに尾を揺らし、蝿が近づけば鼻を鳴らして、くつろいでいた。何よりも、弱いからこそ危機への感度の高い牛たちがリラックスする姿勢は、この場には危険が迫っていないことを、遠巻きにアスリに知らせていた。

腰布をまとわないままのアスリは、結んでいた髪をばらし、わさわさと頭をゆらして簡単に砂をはらうと、髪飾りを布袋にしまった。そして腰布と同じ色合いの白い上着の、胸から腹にかけた　結び目を上から順にほどいていった。そのまま袖のない上着から腕を通して脱ぎ、小さな2つの膨らみを明らかにした。下半身の発達した立派な包皮と小陰唇に比べれば、ずいぶんと小ぶりなものであったが、少女らしさのある大きさであった。その両方の先端は、アスリの股間からはみ出た肉片よりさらにもう少し淡い色合いで小さく、まだ固く興奮を保っていた。まわりの輪もほぼ同色で、淵には粒状の隆起が数カ所あった。

アスリは上着の砂をはらって軽く槍にしばり、先ほど無造作に脱ぎ捨てた腰布も拾い上げて、ばさりと砂をはらって同じく槍に結ぶと、木陰の平たい大きめの岩に腰をおろし、座面に冷んやりとした感覚を得ながら、右足、左足と簡素な履き物の留め紐をほどいて外した。スレンダーな裸体の引き締まったウエストのへその下あたりに、二重に巻いた細い紐の腰飾りだけの姿となったアスリは、履き物を手にして立ち上がると、尻の方に何かを感じた。履き物を持っていない手で尻を触りながら、今座っていた岩を振り返れば、そこにはいつのまにか染みができており、手には股間のはみ出した箇所の元からあふれた、ぬるりとする先ほどの残滓が付着していた。半透明のぬめりを持つ液体の正体をアスリはよく知らなかったが、いつもこの休息の時ばかり出てくるそれに恥ずかしさを感じると、そそくさと槍の元に履き物を揃えて、少し猫背になってたゆみもしない胸元を左腕で押さえつつ、裸足で歩く川辺の地面に気を配りなが

ら、小川へと向かっていった。

水際まで来ると、アスリは右足のつま先をいれてパシャリと水面を蹴ってから、ぬるい川の水にゆっくりと浸かっていった。胸までが水に隠れると、アスリは息を大きく吸ってざぶりと頭まで水中に潜り、また頭を出しては潜り、というのを3回繰り返した。顔の水を払い髪を後ろにかき分け、空と、牛たちのいる草原を眺め、アスリは心地よい川の水と爽快感に浸った。今日ここに到着して以来、いやらしい気持ちが先行し続けてきたが、その支配を越えて、アスリは束の間の清々しさを堪能している。朝から断続的に吹いていた強い風も収まり、今は穏やかに凪いでいる。

しばらくの間アスリはそのまま、のんびり牛たちの様子を眺め、くつろいでいた。そして改めて、1回頭まで水につかったあと、腰飾りほどの深さの位置まで戻り、首を傾げて髪を洗っていった。川面に照りつける日差しは、手ぐしをかけながら洗う美しい黒髪と、水気をはじく華奢なブラウンの背中を光らせた。

続いて、両腕、両脇、首筋とうなじ、小さな胸から腹部、ウエストからわずかな陰毛の生えたまわり、背中から尻と、上半身をくまなく流していった。一通り頭から胴まで洗い終えると、アスリは膝下ほどの浅さの水辺まで上がり、髪を後方に送って束ね、後ろ手に髪を軽く絞り水を落としてから、ふとももからつま先までを、片足ずつアンバランスになりながら洗った。特に足先は水の中に入っていたというのに、履き物に覆われていなかった箇所を中心にして砂がなおこびりついており、少し前にぶつけられたざらりとする感覚がなぜもたらされたか、納得のできる具合であった。

足まで洗い終え、アスリの全身で洗われていないところは、一か所を残すのみとなった。

先ほどは不本意な中断を挟むこととなってしまったが、今度は失敗しないように残った箇所を洗うべく、アスリは水辺のさらに浅いところで両脚を開いてしゃがみ、水をすくってまず、一番後ろのやや色素の濃い綺麗な門へと流しかけると、その場に腰を下ろした。水はくるぶしが沈むくらいの、座ったアスリの性器が半分ほど水に当たる高さだった。ぬるいとは言え、体温より低い水の中にあったアスリの性器から飛び出た部分は、先ほどよりも丸まって1つにぴったりと閉じ、縮み上がった分、少し色合いも濃くなっていた。
　アスリは全体がよく見えるように背を丸めると、色が最も濃い先を、両方まとめたまま指でつまんで前の方へと引き出し、離した。まだくっついた2つはほどけなかったが、その一方をはがしながら両手で上下につまんで、もう1度伸ばすとアスリの耳ほどの大きさだった肉厚の小陰唇は、元の倍近い大きさまで広がった。アスリはそこに水をかけながら、丁寧にしわをのばして、砂と、白っぽい小さな固まりを落としたあと、小陰唇を内側に軽く伸ばし倒して、すぐ横の境目とその外側の別の唇も流した。はみ出しの両側や尻にかけては、アスリは全く発毛しておらず、少し色は帯びていたが少女を保っていた。片方が終わると、もう一方の大小の陰唇も同じように洗われていった。

　そして、清潔になった両方の花びらの内側の元には、左手の人差し指と中指がそれぞれあてがわれた。アスリが指を左右に開くと、奥に隠されていた桃色の庭の下半分が水面に触れた。水面上の小さな穴は、尿の出所とアスリも知っていたが、水面下でさらに薄いヒダのようなもので囲われている、後方のもう1つの穴に対しては、確証を持った認識がなかった。肛門と違うところから子牛が生まれ

るところを何回か見てきたアスリは、何となくそこからいずれ赤ん坊が出てくることは察していた。しかし、胸が少し膨らみ陰毛が生え出して、なお立派な外性器を備えていても、未だ半女ですらないアスリに、誰もその穴の意味や月の周期の知識を与えていなかった。それは周囲の子どもたちにとっても同じで、性に対しての知識は皆ほぼ持ち合わせていなかった。アスリ自身もこの奥行きある箇所から何か快楽を得た経験はなく、よくわからないがいけない遊びの最中やその前後に、今日のように透明なぬるぬるとした液の出てくる穴以上のものではなかった。

大きくはみ出た部分で守られていた粘膜の範囲に砂はほとんどないようで、小陰唇に付着していたものと同じ、白いちいさなかけらを洗い流しただけで、アスリの興味はさらに上部の一点に移った。

アスリは到着直後に触れた時のように、小陰唇を押さえていた2本の指を今度は包皮へと当てて後退させ、美しい中身を剥き出しにし、そこに水をかけた。この段階で、すでにアスリの高揚感は十分に回復していた。先程の轍を踏まぬようにそっと、アスリは右手の親指のはらで本体に触れた。そしてごくゆっくりと、表面を拭うように親指を押し出していった。

「…んっ。」

痺れるような快感に、アスリの腰がビクンと跳ねる。しかしこれだけでは、清潔とは言いがたい。アスリはもう少しだけ親指を押し付けて、さらに広い面で清掃を繰り返した。

「あんっ…、あんっ…、あっ…、う。」

アスリが親指を動かすたびに、アスリの普段よりも高い声が、くぐもって川辺に響く。アスリの局部は覗き込む頭で陰となり、日差

しをうけていなかったが、クリトリスは輝きを増したかのように見えた。アスリから見てクリトリスの上面が過剰なほどに綺麗になると、次は人差し指で裏側から、指を引くようにして洗い始めた。

「あぁぁあ！…うっ、うっ、うっ…。」

強い刺激にアスリは呻きつつ、ふとももや腰をビクつかせ、また数度指を往復しながら、断続的に生じる快感に耐えた。そしてやっとアスリは全身にまとわりついていた砂と、恥ずかしい汚れを落としきったのであった。

アスリの水浴はもう十分にその目的を達成していた。これ以上この場で裸を晒す必要はない。もちろん、アスリはその合理性を無視した。もっと正確に言えば、そんなこと、頭の片隅にもなかった。一時は解放された本能の欲求は、再びアスリに覆い被さり、いつもは理性的で物分かりの良いアスリの性器と、心を支配下に置いた。今や欲望に与しその虜となっているアスリは、ここまで与えてきた強すぎる刺激では、あまりにも簡単に難しい山に登りきってしまうことを直感した。もちろんそのまま登山を続けるとどうなってしまうのかを想像すると、それだけで頭がおかしくなりそうであったが、今日のアスリはもう少し遠回りする通い慣れたルートでその頂をまず目指し、頂上で狂人となる登山を続けるか決めることにした。

アスリは留めていた左手の指を離しながら、軽く包皮を元の方向に戻した。すでに固く熱くなってしまったクリトリスは、分厚い包皮を被せてもわずかに顔を見せていた。丸めていた背中と首には疲労が出始めてたため、アスリはそのまま左手を後ろにまわしてつき、上体を楽になるように少し仰け反らせ、小さな乳房を突き出した。アスリは右手の人差し指と中指の２本のはらの部分を、包皮の上からクリトリスに当て、手慣れた一定の速度でくねくね、くるくると

回転させ始めた。よく知ったおなじみの快感の波が、すぐにアスリの元に届き始めた。

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ。」

アスリの顔はその波に飲まれてゆがめられ、顎を引いて頭を左の方に傾け、目は半開きに、口元は横に薄く開いて、白い歯を覗かせた。リズミカルに与える刺激によって、アスリはこもる息を吐き出しながら自分自身の手によって、求愛する動物のように鳴かされていた。

少し前の直接的な刺激を与えている間、アスリはクリトリスの亀頭への感覚のみに頼った、最も原始的な方法で快楽を得ていた。本来のやり方と異なる進め方をしたのは、あくまで脱衣と水浴びが主たる目的行為であったためだが、強すぎた刺激はアスリに考える余裕を与えなかった。その後、開き直って自然の中で大胆に始めた自慰では、厚く覆われた包皮がクッションとなって快感もマイルドとなり、徐々に登山は進むも、先ほどよりは余裕があった。アスリはそのゆとりに、思い出すとなぜかまさに触れている箇所がジーンとする気持ちになってしまう記憶を展開させた。

過去、異性と性的な雰囲気となったこともなく、子どもたちに性を隠すロマドウ族の中で生活するアスリにも、希少であるがその類の思い出はあった。希少であることはかえって、毎度こうして繰り返し頭の中に広がることにつながり、鮮明な記憶は時間とともに薄くなるどころか、色濃く補強されていた。今、ほぼ閉じかけのアスリの目の奥に浮かぶのは、下半身裸のまま大きく両脚を広げ、丸出しにさせられた剃毛済の若い女性器であった。驚くべきことに、その持ち主は姉のラダンであった。

アスリは今、一生懸命指を忙しく動かし、ラダンにとっては悪夢でしかない記憶からアスリにとって脂の乗ったところだけを切り取って、興奮の糧としている。アスリが同性の、しかも姉の恥部を思い浮かべて自慰をするに至った経緯と飛躍を埋めるには、この時点から2年前、ラダンが半女となる1ヵ月前頃のある夜の出来事から、アスリが今都合よくよけてしまっているところ、つまりアスリの性への原点まで含め、しっかりと振り返る必要がある。

起点となるその日のアスリは珍しく朝から熱を出しており、日中はラダンだけが牛を連れて出かけて行った。天気も悪くないのに家に残るのは久しぶりで、アスリの心は少し踊ったが、それ以上に体調は悪く、アスリはほとんど眠るか、横になって過ごした。

幸い、陽も落ちかけて炊事場から良い香りが漂い目を覚ませば、熱は下がり快方していた。家族揃っての夕食を済ませ、すっかり元気になったアスリは、しばらくラダンとともに、まだ今よりもっと幼かった、アスリから2歳年下の弟のダカクをからかって遊んだ。やがて父が部屋の中の燭台の灯を消してまわり、子どもたちにもう寝ろという合図が送られると、アスリは夕方まで過ごした、固められた土の床よりも高い段に布が引かれた寝床の、開け放たれた東側の窓に近いところに頭を奥にして転がった。ラダンはアスリよりさらに窓に近いアスリの左隣に、右隣にはダカクが入り、父と母は定点となる反対側の部屋の1番奥の壁際で横になった。かつてはここに2人の姉だけでなく、その姉たちとラダンの間の双子の兄も加わって息苦しいほどであったが、それぞれ半女、半男となって主な生活の場を移してからは、5人が寝ても各間隔が大きく空いていた。

ダカクは床につくと手足を大の字にしたまま、あっという間に寝

入ってしまい、父と母は何か囁いていたが、そちらもすぐに静かになった。ラダンは窓の方を向いて右半身を上にして横向きになっており、寝てしまったようである。

困ったのはアスリだった。夕方まで寝ていた上に、直前まで姉弟たちと声を出して笑って、眠気など一切なかったのである。薄暗い中、しばらくただ長い時間を感じ、体の向きを２、３回変え、また時間を感じ、我慢の限界となったアスリは、もよおしてもいないのに用を足そうかと一度外に出ることにした。

こっそりと床を抜けようと、真上を向いていた体を静かにラダンの方に向け、手を床につけようとした時、アスリはラダンの右腕が小刻みに揺れているのに気づいた。一瞬ラダンも起きているかに思えたが、直後に尻がびくりと動いたのを見て、疲れた日にまどろむ体が突然動いてしまう体験を思い出した。今日の昼はラダン１人で牛を連れていったのだから、さぞ大変であったに違いない。相変わらず腕をもぞもぞと揺らして、再び尻を急に動かす姉は、疲労にまみれ槍をまわす夢でも見ているものと理解し、その背中を心の中で労った。

納得したアスリが当初の目的を変えず、そっと体を起こすと、ちょうどラダンの腕の動きも止まった。そのままできるだけ気配を消し、音を立てないようにアスリは寝床を抜け、忍びながら戸を開け閉めして家の外へと出たのであった。外気は５人で横になっていた屋内よりも冷んやりとした空気で、正円に近い形の月が夜闇を照らしていた。夜風に当たったアスリは改めて尿意がないことを実感し、目的を変えようと考えたが、この時間のこの空間でそんな望みも叶わず、少しだけ家の近くを周ると、またすぐに元の場所へと戻ってきた。とは言え再び家の中に入れば、そこに果てしない時間が待っているのは明白であった。

退屈しているアスリは、外から見た寝床横の窓下に、父や弟が作

業によく使う台が置かれているのを見つけると、静かにそこに乗って、少し高い位置にあった窓の中を、何の気なしに覗き込んだ。まず見えたのは、家の中に差し込んだ月明かりを受けるダカクのはだけた腹で、その奥には両親の足先も照らされていた。アスリはあと1名の様子も見ようと、手前の壁沿いの方へ目をやった。

　ラダンの寝ている辺りは月の光を受けていなかったが、先ほどから外をうろうろしていたアスリの目には、様子を伺うだけの明るさに不足はなかった。今覗いている角度もあって、暗がりの中に胸より上は見えなかったが、アスリが外に出てから姿勢を変えたのか、仰向けになって広げるように両膝を立てたラダンの下半身があり、股には右手が置かれていた。

　いや、動いていた。先ほどは手を動かす夢でも見ているのかに思われたが、明らかな行動意思を感じたアスリは、ラダンがまだ起きていることを確信した。腰布の上の右手は小指と薬指が少し立てられ、ラダンの人差し指と中指は股間にめりこんでいた。目を凝らすと、股間の特に前方の1箇所で、繰り返し小さな円を描くように回しているようであり、寝床で見た時と同じく、動作の合間には触っている箇所を中心に、腰全体がびくりと動いている。

　動きの全体像が掴めたアスリは、まずラダンが今触っている箇所に痛みを感じているのではないかと疑い、心配した。性に無知だった当時のアスリでも、ラダンが今いじっている部分は体の中でも特に恥ずかしいところであるという認識は十分すぎるほどあり、真面目で控えめなラダンは、そこに何か異常があっても誰にも言い出せないまま、痛みに眠れず患部をさすって、ただ耐えているのではないかとも考えた。

　しかし、その触れ方は性器に食い込むようで、仮にそこが傷ついたり腫れたりしているとすれば、痛みを良くするどころか、火に油を注ぐはずであり、想像するだけで自分の股間まで痛くなってくるようで、アスリはすぐにこの考えを取り下げた。

眠れない中に降って湧いた、ラダンの不思議な行動への興味はさらに深まっていったが、見下ろす先では徐々に指の動きが速まっていった。アスリはその様子を眺めながら、２つ目の仮説を立てた。
ラダンは今、汚く、とても恥ずかしいところをこねくり回して、気持ち良くなっているのではないか。

突如、自由に脳裏に浮かんできた新しい考えは、アスリの常識を凌駕し、純粋無垢な少女に野生的な本能を突きつけた。瞬時に、アスリの胸の奥にこれまで感じたことのなかった言い難い感情が植え付けられた。アスリは痛みの説を考えた時と同じく、与えたことのない性器への気持ち良さを想像し、顔だけでなくラダンの触っている箇所と同じところまで熱くなるのを感じた。

アスリが初めて性に直面したのと同時に、先に性を知るラダンは腰を少し浮かせ硬直させると、その指をここまでで最も早く回し出した。直後また腰を落とし、体中に月夜の火照りを感じるアスリの観察の下、ラダンは数度下半身全体をビクビクと小さく痙攣させた。そしてやっと、ラダンの描く円は大きくゆったりとしたものとなった。ラダンの柔らかそうな腹部は、深く息をしているのか大きく膨らんだり凹んだりを繰り返していたが、しばらくして指の動きは完全に止まり、また暗がりは平静を取り戻した。

アスリの心臓はバクバクと鳴り焦燥していたが、姉がまだ起きていることに改めて気づき、アスリがいないと騒がれないよう、静かに家の中に戻り腹をさすりながら、さも大きな用でも足してきたかのように装いつつ、自分の寝床に入った。
ラダンはアスリが外に出る前と同じく、また壁側の方を向いていた。その腕は、今度は揺れていなかった。

床に着き安堵したアスリは、引き続き眠気など一切感じず、直前の熱い興奮によってむしろ高まってしまっていた。果たして本当に気持ち良さのためにラダンはさっきの行為を行なっていたのか、できることなら本人を起こして直接確かめたいところであったが、それ以上にアスリはただそれを自分の性器で試してみたいという強い衝動に駆られていた。

ラダンの方に目をやると、さすがにもう起きている雰囲気はなく、かすかに寝息が聞こえてきた。ダカクも明らかに寝ている。両サイドの安全が確保できたとわかり、アスリは姉の淫らな姿を真似をして、仰向けのまま両膝を立てると、おそるおそる両足の間へ右手を伸ばした。そして腰布の上から、人差し指と中指でラダンが触っていた前方のあたりを、ゆっくりと回転させ始めた。当時のアスリは陰毛を有していなかったが、外観はもっと以前から今の様態に近く、アスリが触れたあたりには分厚い皮膚が挟み込まれていた。

ファーストタッチはさわさわと触れただけで気持ちよさなどなく、期待外れであった。アスリはラダンが指を食い込ませるように触っていたことを思い出し、もう少し強めにその部分を押し回した。

「きゃっ…。」

何かコリっとする感触を、包まれた皮膚の中から得た瞬間、感じたことのない、くすぐったい感覚が一気に体に走り、アスリは小さく声を上げてしまった。幸い、その程度の音では誰も起きず、アスリはまたその不思議な部分を、今度は声が出ないように気をつけながら、触り続けた。

アスリはこの無駄だと思っていた皮の下に、まさかこんな固い豆が隠れているとは思ってもいなかった。経験のなかったその粒に加えられる、強さを間違えばあっという間に痛みに変わってしまう刺激を、腰布と包皮は程よく二重に緩和させており、指を回転させるとその中から生じる、コリッ、コリッとする感覚は、アスリをどんどんこの行為の虜へと変えていった。最初に感じたくすぐったさも、短い時間のうちに、気がつけば快感へ転化していた。

アスリは確信した。ラダンはこの点を触って、快楽を得ていたのだ。

先ほどよりも少し高くなった月からの光は、ちょうどアスリが立てた足元の方から差し込み、撫でている腰布の中まで照らそうとしているように感じた。しかも今、これまで汚い場所としか思っていなかったところを、徹底していじっている。もしかすると先ほどまでラダンを見つめたのが自分であったように、アスリのこの行為も何者かの目の下にあるかもしれない。万が一にもそうだとすれば、それを知った上で今行なっているのであるから、アスリは覗かれているのではなく、アスリの方から見せつけているのであって、見てもらっているのだ。

こんなことをしているところを絶対に見られたくはない、だからこそ誰かに見てもらいたいという相反する欲求は、アスリをひどく羞恥させた。ところが、恥ずかしいと思えば思うほど余計にアスリの快感は強くなり、ラダンの時のようにビクっと腰を動かし、それでも指の動きは止まらず、むしろ早まっていった。

ふいに、心をどこかに持っていかれるような、何かが強く引いていく感覚がアスリを襲った。アスリは全く整合性のとれない、崖下を覗き込んだ時のようなその感覚に驚きと恐怖を感じ、その手を直ちに引き離した。しかしその判断は、ごくわずかに遅れ、アスリは崖から突き落とされてしまった。

直後に、歯をくいしばって声を抑えるほどに大きな切なさの塊が、暴力的な快楽となってアスリに直撃し、アスリの頭の中を真っ白に変えてしまった。アスリの下半身は姉がしたように腰を浮き上がらせて硬直し、すぐビクビクと揺れ動いた。いつのまにか花びらの方から溢れ出していた液体も、持ち上げた腰から尻の方へと伝っていくのがわかった。

アスリはやまない快感に打ちひしがれ、自然と涙していた。そして初めての絶頂に、サバンナの真ん中で立ち尽くすかのように、汗だくのままただ呆然と天井を仰いでいた。アスリが先ほど得た確信は正しかったが、正しかったのはわずかだった。ラダンの行為の本質は、この大波であった。

続く余韻にしばしアスリは動くことすらできなかったが、ラダンとダカクが合わせたかのように体の向きをアスリの方に向けたため、アスリはなんとなく恥ずかしい顔を見られているような気になり、やむなく左腕を枕にして、やっとの思いでうつぶせになった。そして右手は、自分の意思でなく、今知ったばかりの遊びに飢えた性器の導きのまま、陰部のフードに包まれた部分へと再び当てられ、同じく腰布の上から、今度は円でなく、中指と薬指で上下にするような動きをとっていった。

ビギナーズラックで容易に登山を成功させたアスリは、うつ伏せの2回目も難なく成功を重ね、それでも飽き足らず貪欲にトライし、都度やってくる大波に何度も飲まれ、また再開してを繰り返した。アスリは4回目までは大波の数をカウントできていたが、そこから先は馬鹿になってしまったようで、絶え間ない快感と多幸感の中、いつのまにか意識を失っていた。

翌朝、アスリはラダンとともに母に声をかけられ、前夜の代償となる倦怠感とともに目を覚ました。その後はいつものように牛の乳を搾って朝の支度をし、頭を乗せたまま寝たことで固まったように

痛む左腕と、こすりすぎてしまった部分への違和感を携えつつ、今日もラダンと牛たちとともに出かけていったのであった。しかし、1日を終えた後の就寝前には、アスリは昨夜のことが忘れられずモジモジし、今夜も壁に顔を向けて横になるラダンの腕が小刻みに揺れているのを見て、耐えきれずうつ伏せになって、また意識が飛んでしまうまで馬鹿になった。

　さらに翌日もまた仔細するまでない、近い結末を迎え、結局アスリは新しい日々を繰り返し続けた。ラダンも何もしなかったように見えた夜もあったが、こちらもこちらで常習犯であることに違いはなかった。

　アスリはラダンとのいつもの昼の旅路の最中、何度か腹を割って、あれこれとラダンに質問してみようかとも考えた。しかし、それは即ち、自分が何を最近覚えたのかを開示することに他ならず、絶対に避けて通りたかった。で、あればしらを切って毎晩何をしているのかということから話を広げることも考えられるが、ラダンの落ち着いて屈託のない顔には、その腰布の中に向けてほぼ毎晩行なっていることとの猥褻さは一片もなく、自分の恥ずかしさをラダンに全て被せてしまうことはあまりに酷であるように思えた。

　一方で、そのかわいらしさからは誰も想像できない、自分だけが知ってしまった本当のラダンの姿が暴かれ、絶対に見られたくないけれど見てもらいたい、あの羞恥が現実となってしまった時、果たしてラダンはどんな風になってしまうのか考えると、アスリの包皮の中身も熱くなり、その光景も見てみたいと心のどこかでは感じているのであった。

　アスリの到底初心者のものとは思えない、幾分サディスティックな気のある欲望は、ほどなく達成された。ただしアスリも当事者であり、対価の一部を支払うこととなった。

2枚の布

アスリの遊びが始まって2週間ほどが過ぎた朝、父とダカクが先に狩に出かけ、ラダンとアスリも牛たちの乳搾りの作業を終えて身支度を整えていると、外の方から2人を呼ぶ母の声が届いた。家の表に出てみれば、井戸のそばの背の低いアカシアの木の下に、積まれた服と水を張った桶状の大きな器があり、濡れた服の入った別の器もあって、洗濯の途中であるようだった。その横に仏頂面をした母が、腰に手を当て立っていた。何も考えずに近づいていったラダンとアスリは、母の足先に広げられた2枚の布を目にして、一気に青ざめた。

布は2人の寝巻き用の腰布で、裏面が表に向けられており、そこには2枚とも小さく黄ばんでいるところがあった。汚れやすい外で着る腰布のように毎日洗うものでもないこれら2枚には、過去数日分の成果が積み重なっていて、特にラダンの身につけていた方は色も濃く、すでに数度の洗濯を乗り越えた後のようであった。加えて、何らかの乾燥した結晶のようなものが朝の光をわずかに反射していて、昨晩のまた新たに追加された事実を主張していた。

「これは何？」

母が腰布に目をやりながら投げかけた問いかけに、2人とも押し黙った。

「女の子はね、多少腰布や前垂れにどうしてもこういう汚れがつくことはあるの。でもこんな風に1箇所に全部つくことはないでしょ。ラダンのは前からこうなってて気になってたんだけど、最近はアス

リのまで。」

母が前から感づいていたと知ったラダンは、耳まで赤くなっていった。一方アスリの方は、さらに顔色が悪くなってしまった。続けて母は、日焼けした赤と青の2色たちに、とどめの一撃を放った。

「2人とも、お股のところ、いじってない？」

バレてしまっていた。母にはすべてが見通されてしまっていたのである。アスリはぐるぐると目が回るように感じた。強烈なストレスは先ほど飲んだばかりの牛乳を、一瞬でアスリから吐き出させ、広げられていた布に駄目押しの汚れを与えた。

アスリは手で口を押さえ、その隙間からこみ上げたものをこぼしながら、その場にしゃがみこんでしまった。突然の嘔吐に母とラダンも驚き、慌ててすぐにアスリの背を撫で始めた。

「大丈夫？アスリ？」

母の問いにアスリは無言のままうなずき、手を口につけたままゆっくり立ち上がった。母は察してすぐ側の井戸に紐のついた釜を投げ込み水を汲み上げ、姉としての威厳など跡形もなくなってしまったラダンも、どうにか保った矜持で頭を下げたままのアスリをその水の前に連れて行き、アスリに促した。

あまりにわかりやすすぎるアスリの無言の白状に、母は半ば呆れた表情を浮かべ、手と顔を洗い口をゆすぐアスリと、その背中をさするも弁解する余裕も残されていないラダンへのこれ以上の追及を取りやめた。

「もういいから。その服にもかかったでしょう。ついでに洗うから着替えて持って来なさい。」

２人とも目で返事をした後、なぜかラダンまでよろよろとしながら家の中に向かいだしたところで、去り際の背中に母は、呼びつけた目的である釘だけは容赦なく刺しこんだ。

「それと、もうお股を触るのはやめなさい。そこは子どもが遊ぶのに使って良いところじゃないの。次見つけたら本当に怒るからね。わかった？」

ラダンとアスリはちらりと振り返り軽くうなずくと、一拍間を置いて、２人の後ろから洗濯を再開した水の音が聞こえ出した。

家に入りアスリはラダンに背を向けて上下着替えてから、朝の支度の残りを片付け、再度家を出た。母に合わせる顔はまだなく、着替えた服を持っていくのはためらわれたが、幸い今の間に母は何か取りにでも行ったのか、少し前に布が広げられていたところには誰もおらず、２枚の布も水に浸されていた。アスリは積まれた洗濯前の服の山に、手にしていた服もさっと加えると、すぐにラダンとともに牛たちの元に向かって、急ぎ出発したのである。

案の定、この日は終始、２人とも非常に気まずかった。最悪の事態だった。アスリは誰かが知ってしまったらどうなるかなどと、のんきなことを考えていたが、最も知られたくない相手に知られてしまった。加えて、ラダンがしていたことは知っていたから、それはまだ良いが、自分まで同じことをしていることをラダンにまで知られたのは、痛恨だった。今や性への欲求は消え去り、あるのはこのまま風になって消え去りたいという当面実現する予定のない感情だけである。いつもなら続くおしゃべりもこの日は皆無で、暗い顔をしたラダンも近い気持ちであることは間違いなかった。

濁った目をした魚のようなラダンとアスリは、帰宅してからもあ

まり元気なく過ごし、その夜は母の言いつけを破る気分にもならず、と言って何もない夜には味気なさしかなく、不貞寝したのであった。

翌日も牛を連れて出かけ帰るまでは2人ともぎこちないままだったが、今日の分の旅を終えて家に着いてみれば、いつになく母が昼から寝床で横になっていた。聞けば、体がだるかったから少し休んでいただけだと言うが、どう見ても体調が悪そうであり、アスリが額に触れるとかなりの熱が出ていたのであった。そこから母の体調が戻る3日後の朝まで、ラダンとアスリはいつもより早起きして母の分も働き、牛を連れて行って、帰ってきてからも働くこととなった。そして、母が治ったと思えば今度はラダンとダカクも同じ熱が出始め、今度はこちらの看病のほかに孤独な牛との旅までせねばならず、しばらくの間アスリは多忙を極めた。

少し前に熱が出た時に免疫でもついたのか健康体であったがために、アスリの分担する負荷は一時的とは言え大人でも厳しい量となってしまっていた。しかし、疲れきって寝床に入れば泥のように眠る日々が数日続いたことで、アスリが毎日行ってきた覚えたてのことと、嘔吐するほど嫌な出来事は、いつの間にかアスリの思考の範疇から外れていったのであった。

ラダンの企て

１週間ほど経って家中の流行病も収まり、アスリもようやく過重労働から解放されたある日、父は泊まりがけでダカクに野営を教えると言って、大荷物を背負ってダカクと一緒に朝早くから出かけて行った。おそらく父はダカクに、熱が下がったら野営に連れて行くとでも軽口を叩いていたのだろう。ラダンとアスリも普段通り出かけようとして表に出ると、いつもと同じ場所で洗濯をする母に突然呼び止められた。

一瞬でこの前並べられた腰布の出来事を思い出し、アスリは何事かと身構えたが、今日は女の会があるから２人が帰ってくる頃には家にいない、夜は遅くなるし男たちもいないから、２人で夕食を用意して食べるように、とだけ伝えられたのであった。女の会とは言うが、どうやら同年代の女性同士で世間話や噂話を延々とするだけの集まりのようで、定期的に母も呼び出されては、決まって夜に酒の匂いを漂わせて、ずいぶんすっきりした表情で帰ってくるのであった。

ラダンはその後、牛を連れる準備をする間、何か考え事をするような顔をしていた。通常であればこのあたりの時間に、どちらかが今日はこの場所へ行こうと声をかけるのであるが、こういう時は適当な返答しか得られないとわかっているアスリは、特段声はかけずに、静かにラダンの思考を優先させた。そして当然のように、検討を踏まえたラダンから今日の行程の提案が出されたのであった。

「ママも遅いって言ってるし、帰ったらご飯の用意もしなきゃいけないから、あんまり遠くないところにしようよ。今日は早めに帰ろ？」

連日の疲労がかなり蓄積していたアスリも、二つ返事でこの案に同意した。あとはいつも通り行軍し、違和感のない短い休憩を挟み帰ってくるというだけで、ラダンの歩みが速いように感じること以外に変調もなく、短めの旅程はやや不満そうに見える牛たちを除いて、当初の計画通り早めの到着として達成された。

牛たちを安全な囲いの中に戻し、家の中に戻る最中、ラダンは少し言いにくいような表情をして、今日２つ目の提案をアスリに投げかけた。

「アスリ、その、なんか髪の毛におうかも。別に臭いわけじゃないんだけど、ちょっと匂いが濃い…かな。今日まだ早いし、せっかくだから川まで行ってきたら？」

ラダンの言葉はかなり配慮されたものであったが、アスリはすぐに頬の横のあたりの髪をつまんで、鼻に近づけた。特段臭いわけでもなく干した布ような匂いに近かったが、たしかに数日忙しかったこともあって、連日暗くなってから家のすぐそばの、あの井戸でくんだ水で手早く髪と体を流していただけであったことは気にかかった。アスリは一旦家に戻ると、今持って行った荷をほどき、改めて準備を整え長槍を手にして、少し離れたアスリが水浴びによく使う浅瀬に今度は１人で向かって行った。

少し歩いたところで、アスリの進行方向正面から、母らしき人影がこちらに向かってくるのが見えた。女の会が終わるのにしてはあまりに早い時間で、アスリは人違いかとも考えたが、次第にやはり母で違いないことがわかってきた。確信のとれたところで、アスリは小走りで母に近づいて行った。母も手前でアスリに気づいていたのか、２、３度手を振った。

「ママー！」
「アスリ、もう戻ってきてたの？これからまたお出かけ？」
「うん。早く帰ってこれたから、川で水浴びしてくる。ママも早かったね。」
「それがね、ちょっと今日は集まった人たちが良くなかったっていうか…。今日は少しおしゃべりしたらそれでもう終わり。あ、そうそう！でも珍しい果物もらってね！これアスリ知らないでしょ？」

母は道端であるにも関わらず、アスリに見せようと手にしていた布袋を開いて覗き、ハッとした顔をした。

「返すの忘れてた！ちょっとまた行ってくるね。アスリも気をつけてね。」

何を返し忘れたのか聞く間もなく、母は踵を返して来た道に戻り始めた。アスリもこの後途中までは一緒の道筋を辿るが、母の意識はそんなことよりも今目の前の忘れ物のみに向けられており、急ぎ足ですぐにアスリから離れて行ってしまった。アスリも疲労が残る中、無理に追わずのんびり川に向かって行ったのであった。

ほどなく川辺のすぐそばに狭い間隔で枯れ木が何本か立った、アスリの風呂場に到着した。アスリはほぼ確実に人がこない場所以外、特に村から遠くもないこのような川で水浴びする時はいつも、まず川沿いの場所に1枚布を張ってから、次に川の中に槍を立て、布のつけられたところからあと2枚、槍に向けてさらに布を張り、布の三角柱を作成する。今日であればその2つの頂点は枯れ木であり、あと1つはいつも通りの川中に立てる予定の槍がそれらの3点で、この一時的に作った間仕切りの中に入って、誰が突然来ても裸の姿を見せないようにするのである。

このやり方は別にアスリが発明したやり方ではなく、大人、半女、

半男たちが水浴びや着替えの時にごく普通に行なっていたことであった。ロマドウ族では性器を下位の者、つまり大人から半女や半男、子どもに、半女と半男は子どもに見せるのは禁忌とされており、たとえ家族であっても、親が子にその部位を見せることはなかった。上半身については定めはなく、男は腰布だけで仕事をすることもあったが、女は幼子にこっそりと乳をやる時を除けば、胸をはだけるようなこともなかった。一方で同位の者同士や、下位の者から上位の者の場合は男女を問わず裸を晒しても問題はなく、子どもであるアスリもその意味ではこんな面倒な警備をする必要はないのであるが、ほぼ例外なくある程度大きくなって羞恥心が芽生えて来れば、みんなで集まっての水浴びからは誰しも卒業していた。

この時もアスリは近くに荷を下ろすと、持ってきた大き目の布1枚を広げて、その端につけた狩猟の罠に使うフック状の留め具を、川に最も近い枯れ木に差し込んだ。そしてもう一方の端を持って、反対側の枯れ木に向かって布を引いた時、パキッという乾いた音とともに、布は地面に落ちてしまった。アスリは枯れ木の表面が割れたのかと思い、もう一度最初からやり直そうと、布とともに落ちた留め具を拾い上げてみれば、割れたのは枯れ木ではなく、留め具の方であった。

アスリは少し考えてから布の端を木に直接結び止め、布を引っ張って残った方の留め具を、どうにか反対側の木にかけた。が、川沿いに微風が吹いて布がなびくと、またパキッという音がして、留め具の側から布が落ちてしまった。不運なことにこちらの留め具も壊れていた。

困ったことになった。持ってきた布ではこれが1番大きく、また枯れ木の間隔が狭く水に近いのはここくらいで、この布を今狙っている枯れ木2本の間に張るしか手はない。両方を木に縛るほど布の長さに余裕はなく、布を対角線上で折って木に結ぶ長さを確保すると、大分中が見えてしまう形になる。落ちている草を紐がわりにし

ようと、いくつか適当そうに見えるものを拾ってはみたが、大きな布を支えるだけの強さはないようだった。

残る選択肢はここでの水浴びを諦めることのほかなく、アスリは広げた布をたたんで水浴び用のセットをまとめあげ、次に来るまでに布に結び紐をつけておこうと強く誓いながら、無駄足となった道をまた戻って行った。

誰のせいでもない、ぶつける先のない苛立ちを抱いたままのアスリが空振りで家の前まで戻ると、中に入る戸の近くには、泥のついたままの芋の入った釜が置いてあり、戸は体１つ分ほど開け放たれていた。ラダンが夕食用に今から芋でも洗いに行くのかに思えたが、ラダンの姿は見えない。

何となく不自然な気がしたアスリがふと地面に目をやると、その釜の側から戸に向けて2滴ほど、わずかだったが水が落ちたかのような痕があった。こんな水はすぐ乾いてしまうので、アスリが到着する直前に落とされたもののようである。芋はこれから洗うのだから、水などついていない。何か別なものを洗ったとしても、井戸の方から水滴が続くはずである。

あと考えられるとすれば、汗か、血だ。そしてそれを流した可能性が最も高いのは、ラダンである。

嫌な予感がした。考えにくいがラダンは動物に襲われたのか、または、これまで村でそんな事件など聞いたことはなかったが、まさか何者かが我が家に訪れたのか。

家の中は不気味に静まり返っている。水滴が血なのか確認するのに戸に近づくのも不用心に思えたアスリは、家の右手に回り込み、あの月夜にしたように、高窓の前の作業台に乗って、そっと中の様子を伺った。

ラダンはいた。アスリの不穏な考えは憶測に過ぎず、間違いなく無事だった。アスリの見たその時のラダンは、寝床の普段頭を向ける方の壁に背中を預け、両膝を立てて座っていた。その頭は右手の

方に少し傾けられ、髪も顔にかかっており表情までは伺えなかったが、それだけ見ればおかしな姿勢で気を失っているようにも見えた。
ところが、その上着の真ん中の結び目はほどかれ、ラダンの左手がそこから入り、上着の中で右胸へと当てられているようであった。そして腰布の前は、腹まで大きくめくり上げられ、少し開かれた足の麓には、右手が潜り込んでいた。
アスリは今ラダンの横側面、左半身の方を中心に作業台の上から見下ろすように眺めており、実際にラダンが下の方に追いやった右手で何をどうしているのかまでは見えなかった。だが、少なくとも右胸を揉みしだくような左手の動きは上着の上からでもわかり、右手も絶え間なくもぞもぞと動き続けていた。あまりよくは見えなかったが、そこには黒い毛もあるようであった。

アスリはまたこの場所から、見てしまった。前回と違って今回は瞬時に、ラダンが何をしているのか理解できた。この台の上に乗る直前までの推理は外れてしまったが、今度は全てが1本の線でつながった。
ラダンは母から禁じられたあの遊びを、止めることができなかったのだ。

この前母に腰布を広げて見せられた後、ラダンは少なくともしばらくはアスリと同じくこれのことを忘れていたはずである。それを思い出してしまったのは、おそらく体調を崩して寝込んで、とは言いながらも実際はよく眠れず、暇を持て余した時だろう。しかしその前のこともあった手前、同じような手口は許されるわけもなく、ずっと悶々としていたのかもしれない。そしてたまたま今日は父とダカク、母がいないということを知って、深遠なる悪巧みを企図し、急いで帰ってくれれば、あとは残ったアスリを水浴びへと誘導したのだ。
家の前の雫は汗なのか、それとも違うところから溢れてしまった

のか、そればかりは不明瞭である。いずれにしても芋の入れられた釜が非常に中途半端な位置にあったことを考えれば、いつもの真面目な姉がそこまではどうにか理性を保ち、健気にも夕食の準備を進めようとする最中、何らかのはずみでその我慢が限界を迎えてしまったのであろう。そのままよくわからない汁を垂らし、釜などは横に追いやって、戸も開けたまま行為を開始したはずだ。

アスリは一度ラダンの習性を知っていた分、今回は比較的冷静で、確証もないまままつないだ推測を真相として勝手に合点した。ただ、今日のラダンの組み立ては2点、前回と大きく異なっていた。

１つ目は、今回は明白に胸を揉みつつ、上着に浮かび上がる左手の様子から、どうやら親指と人差し指でその先端をつまんでいるように見えることである。ここまでアスリはあまり意識したことはなかったが、ラダンの胸はすでにそれなりに発達しているようである。一方、当時のアスリの胸は太った少年と良い勝負で、同じように揉んだところであまり良くなる想像はつかなかったが、少なくとも先端に至れば、状態は近いはずである。であれば、やはり尖ったこの部分も、つまむように転がせばどうなるのだろうか。

この部位に性の意識を向けたことのなかったアスリは、新しいおもちゃを与えられた子どものように、すぐこの場で広げたくなってしまった。母の言いつけに抵触するようにも思えたが、母が禁じたのは股を触ることであり、胸を触るなとは言われていない。アスリは屁理屈も整え、早速結び目と結び目の隙間から右手の人差し指を入れて、ラダンとは反対側の乳首のさらに先を、指で優しく回し転がしてみた。さすがにラダンのように上着をほどきはしなかったため、指でつまむことは叶わなかったが、届いた指でなぞるとすぐに、両太ももの付け根についている粒ほどの硬さに膨らんだ。

触れてみてまずすぐの感想は、快感というより、かなりくすぐったいというものであった。ここでやめてしまっても良かったが、アスリが数日前までこすり続けていたところのように、しばらく続け

ると何かよくなる希望もあり、ラダンの観察と並行して胸部の一方の突起での遊びを続けた。

もう1つの異なる点は、今回、ラダンは以前の腰布越しの手法でなく、大胆にも腰布を大きくめくりあげていることである。たしかにこの方法であれば、腰布の内側が以前のようにひどいことになる心配もなく、おそらく洗濯の時に発覚することもないだろう。これはアスリももう少しよく考えていればもっと早く気づけたことであり、ラダンのその発想に感服した。

とはいえ、ここまで腰布をめくってしまっては、相当な恥ずかしさもラダンに降りかかっているはずだ。アスリもこの姿を自分に置き換えて想像してみたが、正面から誰か来た時には中身が完全に丸見えになってしまうわけであり、考えただけで鼓動が一気に早まってしまった。しかし、誰かにこんなところを見られたらどうしよう、絶対に変態だと思われる、嫌だ、見ないでほしいという思いは、見てもらったらどんなに恥ずかしいんだろうという被虐的な疑念から、なぜか本当の自分の恥ずかしい姿を見てほしいという欲求につながるようにも思えた。

飛躍の多いアスリの気持ちを、今ラダンも抱いているのかはわからないが、今の妄想はアスリにとってはかなり堪えて、静穏に推理を巡らせる余裕もあったはずであるのに、サキュバスにでも見初められてしまったがごとく、短い時間で感情が高ぶり始めてきた。そしてアスリがここ数日忘れていたはずの、あの包皮の内側が熱くなる感覚まで、呼び覚まされそうであった。

加えて、今日のラダンはその部分に直に触れているのである。アスリはこれまですべて腰布を介した刺激しか得てこなかったのだから、今ラダンが局部で直接的に受け止めているそれは、確実にさらに大きなインパクトを伴っているに違いなかった。アスリは乳首の次は、こちらまで試してみたい衝動に突き動かされそうであり、現

に何かの液体が太ももの内側を一筋、伝っていったようだった。

アスリの我慢も、もう継続できないところの近くまできてしまっていた。先ほどからいじっている乳首からは、アスリがラダンを見ながら妄想をしているうちに、いつの間にか性的な気持ちよさがにじみだしてしまっており、ラダンのようにこの上さらに股間で皮にくるまれた箇所へ刺激をどうにか重ねたい欲求で、頭の中はいっぱいであった。

この先に踏み込んでしまったら、もう母にも言い訳できない。だが、普段の真面目で控えめな様子からは全く想像できない、時折上下の唇から淫らな音を出し、本能のまま貪るように愚直に快楽と対峙する今のラダンは愛らしく、姉妹でありまた同性でありながらも、艶っぽい姿に性への欲求を抑えることはもう限界だった。

アスリは禁を破る決意を固め、腹を少し凹ませて腰布と腹の間に隙間を作り、左手を腹に当てた。

（ママ、ごめんなさい…。）

アスリが心の中で呟いて、その手を腰布の中に潜りこませようとした時、視界の隅で何かの光がよぎった。

すぐそちらに目をやれば、開いていた戸からまさに今入ろうとする鋭い槍の穂が、薄暗い家の中のわずかな光に鈍く反射していた。その下には、人の影が続いていた。

アスリは大きな瞳をさらに大きく見開き、一気に真っ青になって完全に固まってしまった。その身も心も全く目の前の事態についていくことができておらず、全身の毛穴という毛穴から汗が吹き出すとともに、思わず上げようとした叫び声すら息が喉をかすするように

抜けていった。一方、ラダンは相変わらず耽っていて、全く気づいていないようだった。
もう一度戸の方を見て、金縛りの最中に叫ぼうとする時と同じく、振り絞るように声を上げかけた瞬間、槍を持った者の頭がゆっくり中を覗き込むのが見えた。

母だった。
アスリは上着から差し込んでいた指を抜き、パッと口を覆って立っていた作業台の上でしゃがみこみ、部屋の中に聞こえないように大きくため息を吐いて、上げかけた叫び声を緊急停止させた。

本当に良かった。まさかとは思いながら、万が一にも不審な者であれば、大変なことになっていた。どちらのせいによる興奮なのか曖昧だが、アスリの心臓はドカドカと鳴り響き、確実に数日分の寿命が短縮してしまったことを実感した。
一旦深呼吸をしてから、アスリも当初は警戒があってこの台に上ったことを思い出し、返し忘れたものを届けてきた母も同じく、無用に槍を家中に向けているわけではないことを把握した。しかし緊張からの解放も束の間、もう1名は全く危機を脱していないことにアスリは気づいた。

急いで再び作業台の上に立ち上がると、母はすでに中に入っており、家の中に危険はないことを認識したのか、槍を手にしたまま佇んでいた。もっと近い表現をするなら、立ち尽くしていた。その視線の先にはもちろん、寝床の壁に寄りかかっているラダンがあった。緊張本人は目を閉じて集中しているようで、この期に及んでもまだ手を止めておらず、時々ビクッと体全体を揺らしていた。
今の母の位置からは、淫らなラダンを正面から全て俯瞰できるはずである。危険を顧みずに家に入った母を出迎えたのは、ラダンの丸出しになった股間の中身なのであった。

娘たちを心配して警戒して入った屋内の状況が、想定のはるか外側すぎるところにあったためか、母は微動だにせずしばし呆然としていた。または、観音開きされたラダンの両脚の奥深くまで、神妙に拝観しているようにも見えた。

アスリはこの一時に、ラダンの、ラダンとしての終わりを迎える時が迫っていることを、切に感じていた。もう少し早くその影が母だとわかれば、ラダンの近くに小石でも投げて注意を促せたかもしれない。それも母が注目している今となっては、かえって事態を面倒なことにするだけである。

アスリにはもう、見届けることしかできなかった。母は数秒かけてやっと状況の整理がついたようで、槍の剣先を地面に向けると、なぜか警戒を続けるように気配を消したまま、獲物に忍び寄る獣のように、水っぽい何かの音だけが響く家中、静かにラダンの方に向かっていった。

ラダンの方も指先を回すような右手の動きを早めきており、こちらもこちらでまもなく終わりを迎えそうだった。いつのまにか開かれた両足はつま先だけを床につけ、折り曲げた膝から下をピンと伸ばしていた。寝床前の段差下のラダンの真正面についた母は、ラダンの動きがさらにもう一段早まり、胸に当てた左手に力がこもり、つま先がわずかに浮き上がったと同時に、ラダンの足の間で動きまわるその右手の甲に槍の穂先を向けた。

直後、ラダンはビクン、ビクン、ビクンと体全体を痙攣させ、アスリも知る大波を受け止め始めた。激しい快感が身体中を走り回りついに頭部まで達したのか、それに合わせてラダンはゆっくりと頭をもたげた。

歯を食いしばり、苦悶に満ちたかのような表情を浮かべ快楽に耐えるラダンの、薄く開かれた目は、即座に大きく見開かれた。

「あっ！！えっ！？えっ！？えっ！？」

ラダンの脳は全く今の状況に追いついてこれず、体はもっと先に行ってしまっているようであった。どうにか股で動き回っていた右手を口に当てるところまではできたものの、まだまだ大波に揉まれている最中、一言発する度に腰を中心にした下半身が前後に荒ぶってしまっていた。なぜ女の会に行ったはずの母が自分の前に、しかもこの真っ只中にいるのか、全く理解できている様子はなかった。

母は非情にも、ラダンの痴態を全て見終えたこのタイミングで声をかけた。

「ラダン、何をしてるの？」

アスリは唖然とした表情とは何たるかを知った。ラダンはまだ体をビクつかせているものの、矢で頭を貫かれたガゼルのようなどこを見ているかわからない目をし、口を手で覆おうとしながら呆けてしまったかのように開いた顎に触れるだけで、よだれまで垂らしそうであった。

ラダンはそのまま、母の手に構えられた槍の柄から剣先に向けて、ゆっくりと目線を下ろしていった。その刃が自分の性器に向けられていると分かると、両脚をぴたりと閉じ、すぐに腹までめくりあげていた腰布の裾を両手で掴み腰を少し浮かせて、一気に膝まで下ろした。そして立てていた両膝は落とし、両足をハの字型に広げると、腰布の裾を両手で押さえたまま、俯いてしまった。

もうこれ以上はアスリも見ていられなかった。ラダンを見ていた自分までが、大きな声で叫んで暴れて、この世から消えてしまいたいという思いでいっぱいになり、胸の中がもうどうしようもないほどに苦しくなってしまった。アスリはそっと高窓から離れ、作業台

を降り、近くに雑多に置いていた水浴び用の荷物をまとめだした。
家の中からはいつになく落ち着き払った母の声が聞こえてきたが、ラダンが押し黙っていたのか、2、3言後には雷鳴が轟き、合わせてラダンの泣き叫ぶ声が聞こえ始めた。アスリの予感通り、ラダンは終わってしまったようだ。過去、ラダンもアスリも飛び抜けて酷い行動を取ったことはなかったが、母も普段は優しく、ここまで怒ったことは覚えている限りアスリがもっと幼い頃、ふざけて家の中で槍を振り回して、ダカクの太ももに突き刺してしまった時以来だった。対するラダンも決して泣き虫なわけでもなく、ラダンの赤子のように号泣する声を聞くのは、アスリも初めてであった。

荷物を持って表に回る間も家の中では暴風雨が止まず、アスリは戸の前まで来て、小康状態となるまでの間をしばらく待った。アスリが取り越し苦労した、戸の前の得体の知れない液染みは、すでにすっかり乾いて消えていた。

数分ほどで母の怒声は止み、ラダンのすすり泣く声だけとなったタイミングで、アスリはそっと家の中に顔を出した。ちょうど、怒りが収まりきっていない表情の母がこちらに向かってくるところで、奥の寝床には顔を突っ伏して丸くなって泣いているラダンが見えた。

「アスリ、おかえり。ごめん、もしかしてびっくりして外で待ってた？」

アスリは何か感づかれたかとも思ったが、平然と続けた。

「大丈夫、何かあったの？」

顛末は全て知っていたが、ここはあえて尋ねる一手をアスリは打った。

「ラダンが悪いことしちゃってね。あ、そうだ。アスリ、ちょっと手伝ってほしいんだけど。」

母はそう言いながら外に出てきたので、アスリも持っていたものを件の芋の入った釜の横に置き、母について行った。母が向かった先は、少し前までアスリの乗っていた作業台の方であった。アスリは一瞬、見ていたことがバレたかと肝を冷やしたが、台の片側の前に立ってその縁を掴んだため、アスリも反対側で同じようにし、母が台を持ち上げようとしたのに合わせ、アスリも台を持ち上げた。

「井戸の横の木の下までお願い。」

母の声がかかると、アスリは後ろに目をやりつつ下がりながら移動し、そのまま井戸の横まで母と台を運んで、１本生えたアカシアの木陰のところに設置した。

「ありがと。あとはもう大丈夫。」

そう言うと母は、また家の中へと向かって行った。アスリもまたつられるように後から向かっていったが、家の戸の前まで来て、中の雰囲気が淀んでいることが外まで伝わってきていることを感じ、戸の横に置かれた釜を持つと、芋を洗うためにまた今来た井戸の方へ戻っていった。アスリが芋を洗い始めるとすぐ、キセルを手にした母がまた出てきて、戸から少し離れたところで、左腕だけを腹の前で組むようにして、どこを見るでもない難しい顔で静かに一服を始めた。

気まずい空気はまだまだかなり残ってはいたものの、アスリはどうにか嵐が去ったと、まず安堵した。芋を数個洗い終えた時、一服を終えた母は、少し離れたところから声をかけた。

「アスリ、あとはママが後でやるからいいよ。アスリは中に入ってて。」

母は一声かけて、戸の横に置いていたアスリの水浴び荷物をついでに拾って、中に入っていった。アスリも母がそう言う以上これよりさらに芋を洗う理由もなく、井戸で水をくんで軽く手を洗うと、気は向かなかったが、やっと純粋な意味で帰宅を果たした。

先に入った母は何か次の仕事の準備をしているのか、しまってある物をあれこれ探しているようで、ラダンは変わらず何かの化石のような姿勢を保ったまま、ぐずぐずしていた。アスリは寝床で固まるラダンの横に行って腰を下ろすと、背中に優しく手を置き、頭を

ラダンの耳元に近づけて、母に聞こえないよう小さく声をかけた。

「大丈夫？　何があったの？」

ここでもアスリは、あえて問いかけた。かわいそうなラダンに、少なくとも妹の前では尊厳が崩れていないことを知らせる目的もあったためである。もちろん、涙するばかりのラダンから返事は得られなかった。

アスリは嘆くラダンの背からぬくもりを感じるうちに、こんな状況下ではあったが、次第に自分の中に余裕が出てきたことを自覚し始めていた。先ほどは観察を続けることができないほど、ラダンにぶつけられた最悪に共感しすぎてしまっていたが、冷静になってみれば今回はあの腰布の件の時とは異なり、その槍玉となっているのはラダン１人である。

またそれだけでなく、アスリが興奮のきっかけの１つとして妄想した内容が、まさかの形で実現しているのである。ラダンは絶対に見られたくないところを、母にとは言え真正面から見られてしまったのだ。そして、もし見られてしまったらどうなってしまうんだろう、というアスリが自分自身を高めるための疑問への答えが、涙が止まらないほどの羞恥で生身を焼かれ、このように丸まってしまったラダンなのである。アスリはその全てを受け止めようとすると、以前と同じく気分が悪くなったが、用量を調節し自分に与えると、あの大波が来る前のような切なさを覚え、ラダンには申し訳ないが、内心ゾクゾクしていたのであった。

再びあの中央部の一点に意識が向きかけた時、母が調理場の近くからアスリに声をかけた。

「アスリ、ちょっと来てもらえる？」

アスリはラダンの背中を軽くなでてから、すぐ母の元へと向かう

と、母はアスリがさっき水浴び用に持っていった大き目の布を手にしていて、川辺でパキッと割れてしまったところを見せながら語りかけた。

「アスリ、これ壊れちゃったの？」
「そう。だから水浴びできなくて帰ってきちゃった。」
「これさ、さっき運んだ台の上に広げといてもらえる？」

アスリがその布を受け取りながら頷くと、母は続けた。

「あと、それも持っていって待ってて。やっぱり…、アスリも一緒にいた方がいいから。」

母が目をやった先には、畳んだ別の布が入れてある平たい器が控えていた。母はそう言ってすぐまた寝床の方へ行ったため、アスリは依頼通り受け取ったものを持って、木陰の作業台へと向かった。

アスリは台の前までくると、左手で器を小脇に抱えたまま、右手だけで大きな布をパサリと広げ、うまく広がらなかったところを成形し台全体を覆うようにして、その上に今持ってきた器を置いた。今の動きで、器からは何か硬いものが当たるような音も聞こえてきており、布の下にも何か入っているようであった。アスリが布を少しめくると、別の小さな器も入っているのが見え、まだ他にも何か入っているようだった。

間もなく、まだ厳しい顔つきのままの母が家から出てきた。続いてすぐ後には、母に手を引かれもう一方の手で目元を押さえた、前かがみのラダンまでも出てきた。アスリは今から母が何の作業をしようというのか、全く見当がつかなかったが、何をしようとラダンは今の状態で仕事になるのか、アスリにはかなり疑問であった。

母は木の下までラダンを連れてくると、アスリの方にも体を向け

た。

「アスリ、改めていうけど、ラダンはさっきとても悪いことをしてね。２人には前ちゃんとお願いしたんだけど、ラダンは口で言ってもわかってもらえなかったみたい。」

アスリはここで母の意図を察し、恐怖した。まだ空気は淀んでいるとは言え、ラダンの行為はもう水に流れ、次の何かに向かおうとしているものとばかり考えていたが、母にしてみれば全く違ったのである。

つまり、さっきの雷鳴は逮捕の現場でしかなく、アスリが今ここに用意したのは、ラダンに裁きを与える場であるのであった。ダカクに槍を刺した時ですらここまで段階を踏んで叱られるような事態にはならず、一体ラダンをどのようにしようというのか、アスリは想像だにしえなかった。

母はうつむくラダンの正面を向くと、一呼吸置いて、静かに裁判を始めた。
「ラダン、今何で怒られてるのか、アスリに教えてあげなさい。」
ラダンは両手で顔を覆い泣き、答えない。
「さっき家の中で、何をしてたから怒られてるの？」
母はもう一度問いかけたが、沈黙の中にはラダンのすすり泣く音しかなかった。
「わかった。何も喋らないんだね。もういい、ママがアスリに説明する。まず、着てるもの、全部脱ぎなさい。」
アスリの目は点になった。ラダンも顔を上げ、涙の奥の驚きを隠しきれていなかった。
「ほら、早く脱ぎなさい。アスリに教えてあげられないでしょ。」
母はラダンの上着の1番上の結び目にパッと手を伸ばし、あっという間に解くと、両肩のところに手をかけ脱がせにかかった。
「やめてっ！」
「何、喋れるなら何で今まで何で黙ってたの！」

ラダンは両手で胸の辺りを押さえ、上着が脱がされないよう必死に抵抗している。母はその隙を逃さず、がら空きとなった腰布をむしり取るように解こうとした。

「いやっ！」

咄嗟にラダンは右手で股間を隠ししゃがみ込み、全身を固めるような体勢をとった。膠着したラダンを母は数秒見下ろすと、ゆっくりと地面に膝をつけて、ラダンにトーンを変えて語りかけた。

「ラダンはアスリのお姉さんでしょ。今アスリはラダンが言うこと聞かないでいるとこ見て、本当にお姉さんだと思ってくれると思う？それとも今そうやって押さえてるけど、またそこいじいじするの？お姉さんならどうするの？」

ラダンは再び声をあげて泣き始めた。母はそれでも続けた。

「ねぇ、どうする？もうお姉さんやめる？アスリにお姉さんになってもらう？」
「やだぁあああ！！」
「じゃあ、どうするの？こんなに大きいのに駄々こねるの？そんなだといつまで経っても半女になれないよ？」

内側から責め立てる母の言葉の攻撃に、ラダンは観念したのか、泣きながらよろよろと立ち上がった。

「ほら、脱いじゃいなさい。」

促す母にラダンは決して意を決したわけでないようで、母とアスリに背を向けると、うつむいたまま非常に渋々と残る上着の結び目

を解き、のろのろと袖から左腕を抜いて、その腕で胸を押さえながら右袖側も腕を通して、脱いだ上着を地面に落とした。ラダンの背には、肩甲骨のあたりまでの長さの、アスリと同じ黒い艶のある髪だけが残った。アスリは長いことラダンの服を脱いだ姿など見ていなかったが、普段服の下にある日に焼けていないラダンの背中が、アスリの肌よりもずっと薄い色をしていることに驚いた。

今度は腰布だ。ラダンは残った右手で腰布の結び目をほどき、こちらも地面にそのまま落とすと、背中と同じ色の、やや大きめで丸い綺麗な尻が現れた。ラダンは前の股のあたりを右手で押さえたようで、本人は気づいていないようだったが、それによってアスリたちの側にかえって尻をやや突き出すような格好になった。

アスリは先程来、ラダン自身の行動やその心中への想像によって、否応無しに生じる性的な衝動を高めては、直後に生じる驚き、ない恐怖でそれを冷ますということを繰り返してきた。ここでも同じく、裁きの場に唐突に現れた真ん丸の尻は、アスリの心の奥底をすぐに揺さぶり始めた。

一方被告であるラダンは哀れにも尻を出し肩を震わせ、手で受け止めることもできなくなった涙を足元に落としていた。母は静かにとその背に近づくと、ラダンの両肩にそっと手をのせた。触れた母の手に、ラダンは一度ビクッと肩をすくめたが、母はラダンの警戒を高めないよう、ゆっくり正面に向けまわしていった。

表を向いたラダンの両胸は、押さえられた左腕によって上下に乳房がはみ出しており、右手で押さえる股間の方では隠しきれなかった体毛があふれていた。

ここまででやっと1つ、母からの要請に応えきったラダンに、圧力を高め続けてきた母も、少し温もりある表情を浮かべた。

「そう、よくできたね。お姉さんだもんね。」

　母はそう声をかけながら、ラダンの固く押さえられた腕に優しく手をやりほどき、両手と両手を取り合うような格好を取っていった。合わせて、ラダンが厳しく隠してきたところが、アスリの目に飛び込んできた。

　記憶の外側の、出来事から2年経って性徴を迎える今日の川辺のアスリが、包皮に覆われた中央部を刺激しながら思い起こすスタート地点は、まさにこのポイントのビーズの腰飾りだけを身につけたラダンの裸体を見るところからである。

　当時のラダンは、今のアスリと同い年であったが、その今と比較しても2人の身体つきは全く異なっていた。その後の2年でアスリはすらりと背が伸び、線の細さを残すスレンダーな体型となった。しかし背の高さを除けば、大人らしさという意味ではすでにその時点でラダンが圧倒している。

　まず決して太っているわけではない、程よくふっくらとした肉付きは、丸みを帯びて女性らしさを強調していた。胸部は、アスリのものは先端とその周りが少し発達しているだけで、2年経過しても膨らみとしか表現のしようのないものである一方、ラダンのは椀状で両中央にしっかりとした桃色に近い乳首と乳輪が備わっており、乳房と呼ぶに相応しい風格であった。

　何より陰毛は今のアスリの申し訳程度のようなものではなく、両太ももと腹部で形作られたデルタ地帯いっぱいに黒々と広く茂っており、その下側に何があるのかなど、全く垣間見得なかった。日焼けした肌とそうでない肌の対比も見事で、大人顔負けのこの肉体に加えられる奇妙なギャップとなって、十二分なエロスをさらに引き立てるようであった。

相変わらずラダンは母の足下のあたりに目をやっているようで、髪で隠れたその表情はうかがい知れなかったが、どう考えてもその心の基底にあるのは自慰の場を現行犯逮捕されたところに始まる、強い羞恥であるに違いなかった。すでに尻を見た時点で大分おかしな気持ちを増幅させていたアスリは、ラダンの裸体も加わったことで心の余裕をかなり消費していたが、さらに被虐対象のラダンの心中を思いやりつつ、辱めに加担しているのは傍観する自分に他ならないことまで考え、ゾクゾクとする感覚がどうにもならないほど強まってしまっていた。

母はラダンの体に目をやり性徴の経過を確認すると、再び頭をあげた。

「ラダン、こっちを見て。」

ゆっくりと上げられたラダンの顔は、目の周りが腫れぼったく、すでに枯渇したのか涙は流れていなかった。ラダンにとっては嘆きよりむしろ、こうして公然と全裸になっている羞恥が上回っているのか、茶色く日焼けした顔を紅潮させており、アスリの想起はあながち誤っていないことを裏付けていた。

「ラダン、体は大人っぽくなってきたけど、ラダンはまだ半女でもなくて、子どもなの。この前やっちゃダメだって言ったこと、やったらどうなるか、今日はわかってもらうからね？良い？」

母は少し厳しいトーンで、怒り以外に意図の測りきれない訓示を行うと、アスリの方に顔を向け１つ依頼をかけた。

「アスリ、水を汲んでもらえる？」

アスリは全身に熱さを覚えつつも、井戸に紐のついた釜を落とすと、母の要求どおりすぐに1杯の水を汲み、母の足元に置いた。母はラダンから手を離し、その釜を持ち上げながらラダンに言った。

「ちょっとそのまま。ごめんね。」

「ひゃっ！」

バシャリと、辺りに水しぶきが舞った。母はラダンの陰毛の近くを目がけて水をかけていた。驚いたラダンは脇をしめるように両腕を上げ、腰を引いて内股の体勢をとって一歩後退した。

母は濡れたラダンの手を再びとると、先ほどアスリが布を引いておいたすぐそばの作業台の前に連れていき、台の上の別な布の入った器を地面に移した。

「この上に乗って、座って。アスリ、もう1杯水をお願い。」

アスリが今一度水を汲み上げ、釜の水を台の横まで持っていく間、ラダンは履物を脱いで台に上っていった。

「足こっちに向けて。手は両方後ろ。お尻はもっと前に出して。」

母はラダンに指示を出しながら、しゃがんで器の中のアスリも一度見ていた小さな器を取り出し、釜から水をすくってラダンの足元の台の上に置いた。ラダンが台の上で後ろに手をつけば、豊かな両胸の突起は、頭上のアカシアの葉の裏側を眺めているように上向きとなった。ラダンはここではうつむいたり顔を横にやったりもせず、服を脱がせた上に突然水をかけた上にこの台まで連れてきた、予測

不能な母の次の行動をただただ伺っていて、それはアスリも同様であった。

2人は、母が続けて器から取り出した物を目にして、唖然とした。剃刀だった。

アスリはやっとこれから母が何をしようとしているのか、理解し始めていた。母のさっきの子どもであること云々の発言はつまり、ラダンの成長の証を没収し、当時のアスリのものと同等にするという判決であったのだ。

母は剃刀の刃の部分を今の水を張った小さな器に浸すと、ぴったりと閉じられたラダンの両膝に手をかけた。

「えっ、ママ…。何するの？」
「何って、そんなところに毛なんか生やしてるから、調子に乗るんでしょ？」
「えっ！やだ！やめて！」

ラダンは足に力をこめたが、母はここでも言葉による力を行使した。

「じゃあ髪の毛にする？どっちが良い？」

ラダンは何も返せず、足の抵抗を取りやめる代わりに、赤らめた顔を右方向へと倒し背けた。母はラダンの足の力が抜けたのがわかると、ゆっくりとその膝を開き、まず両脚で歪んだ菱形を作ってから、揃えられている足首を掴んで外側へと追いやり、見ている側まで恥ずかしくなるほどにラダンを大きく開脚させた。

母の背後に立つアスリからも、その聖域が見えるかに思われたが、ラダンの陰毛は足の付け根の両側から肛門近くにかけてびっしりと

生えており、まず印象としては毛そのものでしかなかった。だが、かけられた水は粒となって陰毛の上で光を弾いてキラキラと輝き、ラダンが大人に向かっていることを声高く伝えていて、これからそれが否定されると思うと、アスリはその前にラダンの女性らしさを優しく撫でてあげたいという願望とともに、自分の性器に向けて全身の血液が集まってくるのも感じていた。

もちろん、母はアスリが姉に抱いてしまった許されざる興奮など微塵も気づいておらず、濡れた剃刀を手に取ると、いよいよラダンの成長の否定を開始した。母はまずへそに近い方の最も上のところから、剃刀を縦方向に上から下へと繰り返し滑らせていき、何回かの動きの後に水の入った器に剃刀をくぐらせて、また剃ってを続けていった。

程なくして、ラダンが立っていた時に正面から見えたであろう範囲まで、母の搾取が完了した。しかし大陰唇より下はこれからであり、まだまだ半分といったところであった。母はラダンの足の付け根をもう一度押しひらくと、今度はその両側を剃り進めつつ、一言つぶやいた。

「…結構濃いね。」

「やめてっ！」

自分でも内心気にかけていたのか、突如としてラダンは足を閉じようとした。

「こらっ！動いたら危ないでしょ！いじってたとこも切っちゃうよ！」

しかし、ラダンの惨めさと羞恥も、もはやとうに限界を超えてし

まっており、母の喝を前にしても足は閉じかけたままで、ラダンの横に向けられた頬には枯れたはずの涙が再び流れ始めてしまっていた。それを見て母も、ラダンが自分の意思で足の位置を保つことができないことを把握したようで、大きく一息ついてから、アスリの方を振り返った。

「お願い。危ないから膝のとこ押さえといてあげて。」

母のこの依頼を断る道理など見当たらなかったが、アスリにとってはギリギリのものになりかねなかった。と、言うのも、今はまだ母の背や手などもあって、アスリにはその中身はチラチラ見える程度であるが、足を押さえる係になれば、確実にいろいろとよく見えることが確かなのである。しかもここから、最も重要なところの覆いを外していくことになる。

この時点ですでにアスリの渚は時化てしまっており、どこにも触れてすらいないのに、あの大波が押し寄せてくる前に吹く風が、徐々に強まりつつある状態であった。この状況で何らかの弾みであとひと押しされるか、場合によっては目の前のラダンがさらに扇情的な状況に置かれれば、アスリが到達してしまう恐れは大いにあった。

アスリ自身、そのギリギリの感情と大波の予報の正体はこの時点でよく承知していたし、自分の性の対象が紛れもなく姉の裸体と、特に性器に向いてしまっていることを自覚していた。無論、アスリはラダンのことが大好きである。しかし、それは姉と妹の関係の中にある家族としての好きであって、現在に至るまで抱いたことのない、恋心や愛する心によってもたらされる興味とは異なっていた。

また、子どもに引き戻されるラダンより、さらに子どもであるアスリの性は、アスリが知る由もない女性同士の恋愛や、近親での関係性といった複雑なものでもなく、もっと純粋な、つい先日知ったばかりの性器という不思議な甘美と、秘匿と暴露によって織りなさ

れる羞恥、それを受ける側ともたらす側に対する共感が主であった。
簡潔に言えば、恥ずかしそうに晒される性器と、半ば強制的にそこまでせざるをえない状況に置かれてしまったというシチュエーションが、アスリにとっては大好物なのである。そしてこの性癖はその後2年経過しても全く抜け切らず、こうして思い出されるたびに徐々に強いフェチズムとなって発展しており、残念ながらアスリが生涯にわたって付き合わざるをえない慢性病となる可能性は高いのであった。

当時のアスリに戻って、この時たしかにアスリはギリギリであったが、結局正直なところは二つ返事であった。もちろん、アスリも台に乗ってラダンを後ろから抱えるように支えつつ、ラダンの頭の後ろに隠れるようにしてしれっと目を背けていれば、はっきりとラダンと直面しないこともできるにはできる。しかし、その選択肢は採らないことに決まっているのである。
アスリはラダンの腰の右横に立つと、台の上に手を伸ばすような形で、ラダンの恥部がよく見えるように、再び両足を広げて押さえた。母も作業を再開し、ラダンの左右の大陰唇の外観をアスリと同じ、少女のものへと変えていった。

アスリはお姉さん

アスリがラダンの足を支え出してすぐに感じたのは、辺りに漂う独特の匂いであった。発生源は確実に1箇所であり、乾いたサバンナの中で自分たちのまわりだけ湿度が高まっているようにも思えたが、例え難いその匂いは決して「臭い」ではなく、芳しくも思えるものであって、これだけでまたアスリの心中の波風は激しくなった。

そしてラダンの中央から見て両サイドが剃り上げられるにしたがって、アスリの抱くコンプレックスが、ラダンにはほとんど存在しないこともわかってきた。ラダンは年齢にしては剛毛であり、アスリも最初にその陰部を見て、何も出ていないようであるとは捉えていたものの、その毛の下には、アスリと同じようにゴタゴタと何か隠れていると考えていた。

ところが、いざ母が芝刈りをしてみれば、幼い頃の水浴びで見た昔のラダンそのままの、縦筋が浮かび上がってきたのである。アスリは母によるラダンへの剃毛が続く間、この一直線と、自分のような枠から飛び出す形の、果たしてどちらが真に恥ずかしいのか思案したが、いずれにしてもアスリのギリギリをまたギリギリにすることに違いはなく、苦しくなるだけの蛇足な思考であった。

母の剃刀を使った作業も、残るは剃りにくいところだけとなると、母は落とした陰毛を大きく払ってから一度立って腰を伸ばし、アスリに向けてラダンの上体を倒すような仕草をした。アスリも作業台の横隣から手を伸ばすような姿勢をとり続けてきたが、同じく腰の辺りに疲労を感じてきていたため、サッと履物を脱いで、ラダンを倒すこの機会に作業台の上がって、背面からよく見える位置を取ることにした。

アスリはラダンの後方に回って両足をハの字に開いてぺたりと座

ると、ラダンの肩に手をやりながらそっと倒して、アスリのへその下にラダンの後頭部をのせた。その上下反対に向いた顔は、大きな二重の目元から涙を流し、口元を半開きにして歪めながら、真っ赤になって屈辱に耐えており、アスリはラダンの顔に欲情だけでなく、愛おしさまでも感じていった。

「大丈夫。あと少しで全部だから。」

アスリはラダンを見つめながら、両頬を優しく押さえて親指で涙を拭い、頭に手を置いて小さく呟いた。

「本当にアスリの方がお姉さんみたい。」

母は少し呆れた表情を浮かべつつ感想を述べてから、アスリの運んだ器に入れていた布と、他にも器に入っていたようだった革の小物入れを台の上のラダンの足元に置くと、釜の水を器に移してこちらも近くに配置し、自分も台に上ってラダンの足の間に割って入って正座するように座った。そして、母はそのままラダンの両膝をアスリの方に持ち上げ、浮き上がったラダンの腰の下に少し両膝を差し込んだ。

準備が整うと、母は閉じかけのラダンの両脚を大きく開いて、ラダンに性器を強調させる体勢を取らせた。母とアスリに上下に挟み撃ちされ、恥ずかしいところを完全に曝け出しているラダンは、もっと真っ赤になり、今更ながら左腕で胸を押さえ、右手のひらを上に向けて、こちらは顔を隠した。

仕上げに母は、押さえているラダンの両膝をさらにアスリの方にやって、受け取るように促し、アスリがその膝を上方から抱えると、ラダンの腰と少し大きめの綺麗な日焼けしていない尻はさらに浮き上がって、肛門の方まで母の膝の上に展開される格好になった。

ふっくらとしたラダンの大陰唇の上部は、わずかにY字を呈し始

めていたが、すぐ下から尻までは、ここまでの姿勢を取らせてもなおまだ1本の筋状を保っていて、ラダンを最後まで守り抜こうとする意思すら感じられるものであった。

「随分可愛らしい。赤ちゃんの頃と全然変わってない。」

母の状況報告に、ラダンは左手をするすると下ろしていったが、その手はすぐによけられてしまった。

「また剃刀使うからね。危ないよ。」

そう言うと母はラダンの無毛となった丘に左手を逆さにして当て、親指と人差し指で欠けた輪を作ると、ついにラダンに残された最後の門を開いていった。

ここでやっと、奥の聖域に近いところに、やや色の濃くなった、小指の関節の半分ほどの長さもない、小さな内側の唇が姿を見せた。そこには先ほど来の匂いの源と思われる、小さな白っぽい粒もいくつか付着していて、中は美しさといやらしさを併せ持った、小さな桃色の空間があった。

アスリが驚いたのは、開く前にYの字を描いていた上部の箇所であった。そこにはとても小さな桃色の突起が、皮膚の間から顔を出していたのである。当時のアスリはあまり自分のものも含めてここまで性器をくまなく見たことはなく、この敏感な部分にコリコリとした感触はあっても、まさか中身を外に出せるとは思ってもいなかったのだ。パッと見ただけではっきりと違うと言い切れるほど2人の性器の外観は大きく異なっていたが、アスリもこの中身が剥き出せるか、このあと用を足しに行く時にでも早速確認しようと心に決めた。

アスリの火遊びに繋がりかねない決心など、もちろん母は全く知るはずもなく、ラダンのヒダの横側に生えた毛に丁寧に剃刀を当て、慎重に処理の続きを始めた。ここで母はあろうことか、究極の肉質をとる中で、言葉を介した刑まで加えていった。

「ラダン、恥ずかしいね。こんなに大きくなったのに、お股の中までママとアスリに見られちゃって。でもラダン悪いことしてたからしょうがないよね。ラダンもこっち見てみなよ。つるつるになっちゃった。もしかしたら、お股はもうアスリの方がお姉さんかもよ？でもさっきもヨシヨシされてたから、やっぱり全部アスリがお姉さんかな？」

これはきつかった。少なくともアスリにはかなりきつかった。淫臭が立ち込める中、アスリは今の母の言葉で朦朧としそうなほど、急激に興奮してしまった。ラダンの方も正常な方向性でかなり堪えているようで、身をよじらせようと少し動き、アスリに乗せていた頭まで小さくぐるりと動かした。

その瞬間、ラダンの頭の下にある、アスリ本人はその存在を知り得ない将来を育むための部屋は、キューンとするような悲鳴をアスリに向かって叫びあげた。アスリが何かとろりとしたものが外に流れていくのを感じると同時に、近いとは言えいささか距離のあるあの中央の部分もジンジンと疼くのを始めてしまったのである。アスリは丸出しのラダンへの注目を一時取りやめ母の奥の遠い方を眺め、平静を装いながら、押し寄せた波をどうにか押し戻したのであった。

「こら！ホントに切っちゃうよ？」

突然動き出すラダンに、母も危険を感じたのかそれ以上は責めず、あとは静かに剃っていった。アスリも少し落ち着くと、再びラダンの聖域に目を戻し、ラダンの両側が綺麗になって、最後に肛門の周

辺に剃刀が這っていく様子をつぶさに見つめた。このあたりの処理は見ているだけでもくすぐったそうであり、アスリも尻がムズムズする思いであったが、その他に比べれば発毛する範囲自体は狭く、剃毛によって生じる音だけが響く中、ラダンの尻の中央部も順調に幼体へと還っていった。

これでラダンの性器は、丘の上がやや青味を帯びてはいるものの、ようやくアスリと対等になった。全て剃り終えた母は剃刀を小さな器に入れ、近くに置いていた水の入った器に持ってきた布を浸し、軽く絞った。

「はい、次はお股綺麗にしようね。」

　母は濡れた布で、周囲に張り付いている剃り落とした陰毛を綺麗に拭き取っていった。完全に無毛になったラダンの直線は、改めて非常に美しく猥褻であった。一通り毛が拭き終わると、母は台の下に向けて布をバサバサと振り、改めて水で濡らしてから、またラダンの奥の門を開き、桃色の場所の清掃も始めた。

「この真ん中のところ、ラダン、ちゃんと洗ってる？さっきちょっと臭ってたよ。あとカスみたいなのもついてた。」

　アスリはラダンの顔の方を一瞬見たが、さっきと変わらず手のひらを外に向けて顔を隠しており、反応はないようだった。反応できなかったというのが、正しいところかもしれない。

「ねぇねぇ。アスリ、見て。糸引いてる。」

　母がそう言ってラダンの庭から布を少し離すと、透明な汁が今にも下に垂れそうになりながら、母の言う通りに糸を引いていた。ラダンのそこは、見ている側まで恥ずかしくなるほどに、とろとろになっていた。今の体勢を取ってから、母がいじわるな言葉を繰り返

したためか、空に向いたラダンの膣の中は、粘液で満たされた器と化しているようであった。

「やぁ、恥ずかしい…。」

アスリはつい口走ってしまった。おそらくアスリも同じ姿勢を取り、ラダンより圧倒的な存在感を放つ花びらを開かれてしまったら、状態はあまり変わらないかもしれない。もし自分も、と少し考えた上で、ラダンは今、罰のために虐めを受けているが、こんな恥ずかしい蜜の器の開帳は、褒美に他ならないようにもアスリには思えていた。そして刑を執行されているラダンもまた、股間からまで涙を流しているということは、当事者として矢面に立たされている反面、実はアスリと同じように変態的な疼きにも苦しんでいるかもしれないことを示唆していた。

どうであれ下らない思考と濡れ切った膣まわりの光景は、すぐにラダンの頭の下の、アスリもよくわかっていない体内の火照ったコアから生じるズキズキとした感覚を、さらに加速させる一方であった。

「アスリお姉さんも恥ずかしいってよ。拭いてもまだぬるぬるしてる。恥ずかしいね。」

また母はラダンの火に油を注いだ。多少落ち着いてきていたはずのラダンは、終わってもまたすぐに始まる次の羞恥に我慢ならず、アスリの膝の上で嗚咽を漏らすのを再開した。

「さっきいじいじしてたところも、お掃除しようね。」

母はそう言いながら、唇を押さえた指をぐいとアスリの方に持ち上げて、アスリが今日その存在を知ったばかりの、小さな中身を露

出させた。そして、布のラダンの愛液がたっぷりと染みたところで、その部分を直接拭き上げ始めた。

「ひっ！ああああっ！んっ！んっ！ひっ！うわぁぁぁ！あんっ！」

ラダンは泣き声とも喘ぎ声とも言い難い、不思議な声を上げながら、腰をくねらせた。母もそこまで強くも早くも擦ってはいなかったが、ラダンのクリトリスのあたりからは今にも煙でもあがってきそうであった。剥き出しのまま荒い布で拭かれていることもあって、おそらくその痛みも相当なものと思われたが、流れる涙の中には、かなりの快楽が伴っていることが容易にわかった。

「やめっ！やめっ！あんっ！あんっ！てっ！うわぁあ！あんっ！」

あっという間にラダンはガクガクし始め、体全体が半狂乱の状態となってしまった。母が拭き始めてからものの数秒で、ラダンのその動きはピークを迎えようとしているようであった。

「うわぁあああ！あんっ！無理無理無理無理無理無理無理！！！もうダメ！！ねぇもうダメ！ああああああ！！！」

アスリの押さえる腰がさらに前に突き出された瞬間、母は動きを止めるとパッと布を手離した。垣間見えた少し前まで小さかった桃色の突起は、幾分隆起して真っ赤であった。すぐに母は、その尖ったところを指で強くつまみあげた。

「きいいいああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

ラダンは絶叫した。顔を覆っていた右手も、胸を隠していた左手

も、一気に両方胸の前に持ってきて、脇を締めて握りこぶしを作り、目は強くつぶって、表情は苦悶に歪められた。アスリが押さえる足にも、何とか閉じようとする意思ある力がかけられた。これには見ている方まで痛くなった気がしてしまい、アスリも腰を後ろに少し引いて、奥歯を噛み締めた。
ラダンにとって幸いだったのは、母が数秒でその指をゆるめたことであった。あわせて絶叫も止んでラダンの力は抜けていき、滝のような汗と涙がアスリの膝上に降り注いでいった。ラダンがつままれていた場所のすぐ下から肛門の手前までは、痛みによってなのか、またはアスリには計り知れない快感によってなのか、ヒクヒクと呼吸をするようにうごめいていた。
母はつまんだところからはまだ手を離さないまま、号泣するラダンへ授業を始めた。
「ラダン、何か今変な気持ちになってなかった？　なんか勘違いしてない？　何でこんなことされてるかわかってる？　ママは何しちゃダメって、ラダンに前言ったんだっけ？」
汗まみれで涙によだれ、下からも何か垂しているラダンは、虚空を見つめるように焦点の合わない目をして、肩で息をついており、何か答えられるわけもなかった。
「さっきからずっと、本当にシラを切るんだね。もう知らない。」
無情にも母はまた、同じところをつまみ潰すように力を込めた。
「あああああああああ！！！！！！！！！」
ラダンはもう壊れそうだった。アスリもまた腰を少し引いて奥歯を噛んだが、この時アスリは痛そうである光景を見ながら、外観こ

そ違えど自分の股間にもあるその加虐の対象が、どういうわけかワクワクするような、形容しがたい感覚を持ち出したことに気づいた。はっきり言って、痛みに耐えるラダンのクリトリスに、アスリは性的な興奮を抱いていた。

「アスリもさっきのラダンみたく、お股いじるのやめなかったら、こうなるんだからね。」

この恐怖、羞恥、つい一時の意図しない快楽と経て、今は痛みのフェーズにある母による授業はラダンだけでなく、腰布で悪戯した実績のあるアスリにも向けられたものであったようであったが、残念ながら目的通りにアスリを性から引き離すことはできていなかった。むしろこの機会は、後々何度も思い出しては自慰に耽ってしまうようになるほど、アスリの性的嗜好の基底を形作ることにかなり寄与していた。そして面倒なことにアスリは、先日来から実感していた性器を介した恥辱での興奮に加えてこの時にもう一層、性器への物理的な行使、すなわち快楽と痛みで織り成した徹底する責めにまで、興味を広げてしまったのである。

ラダンもそこまで変態的な気持ちで、罰に臨んでいるかはわからなかった。ただ事実として、ラダンは叫びながらも恥ずかしい汁を生産し続けており、母の思いが果たしてラダンにしっかりと伝わっているのかも微妙ではあった。

母も少しの間つまんだあとはそれを続けず指を離し、ラダンも再び弛緩した。しかしここで母は剃毛用具の方に手を伸ばしながら、ラダンに通告した。

「ラダン、もう次はやらないように、今から罰を与えます。」

2人は母の言ったことが、理解できなかった。ここまで母のやっ

てきたことは、母にとっては罰でなかったということであろうか。であれば、罰とは何を意味するのか。答えは母が手にした、革製の小物入れの中にあった。

平べったいケースのような中から母が取り出したものは、太目の縫い針であった。

「えっ…？」

涙のラダンも、思わず疑問が声に出た。母の針を持たない方の手は、小物入れを置くと、ラダンの性器の上部にあてて、さっき布で拭いた時のようにクリトリスの亀頭をめくり出した。

大変なことになった。アスリは全く目の前の状況についてこられず、頭が爆発するように感じられた。母が何をしようとしているか想像はつくが、その答えはアスリにとって性器の奥のけたたましい高鳴りでしかなかった。

「えっ！？嫌っ！」
「だってわかってもらえなかったでしょ？今もちょっと聞いてもダンマリだし。」
「いやっ！やめてっ！」
「ラダンもチクっとしたらわかってもらえるでしょ？」
「やだやだやだやだやだやだ！！！！！ねぇもう！！！！！いやああああああ！！！！！！！」
「やだしか言えないし、お股もつるつるだし、ホント赤ちゃんみたい。それじゃチクッとしようね。」

縫い針が真っ赤になってしまった小さなところへ向けられると、ラダンはすぐに両手で性器を押さえる母の手をどけ、頭を動かしたり、足を動かしたりし始めた。ラダンはどうにか今の状況から抜け出そうとしていたが、グリグリとアスリの性器の近くを圧迫するラダンの頭部は、アスリの方までどんどん追い詰めていった。

たまらずアスリの力も緩み、すぐさまラダンは開かれていた脚を閉じた。

「やだ！！！！！ねぇ、やだ！！！！！」

「そう、わかった…。」

少しの沈黙を経て、母はラダンに代替案の提示を始めた。

「…じゃあやっぱり今日からアスリがお姉さんね。ラダンはママの言うことちゃんと聞けないから、聞けるようになるまでずっと子ども。もし半女になれそうでも、ママは巫女様たちのところに連れて行ってあげないから。そのうちアスリが先に半女になって、大人になっちゃうかもね。」

「嫌っ！やだ！やだぁ！」

ラダンは母の言うように、赤子のごとく激しくぐずり始めた。

「あとラダンのお股、毛が濃いけど、子どもにはそんなのいらないよね。明日も今みたくつるつるにしようね。」

「嫌ああ！！」

「またぬるぬるになっちゃうのかな？恥ずかしいねー。そうだ、明日はダカクにも手伝ってもらう？ダカクもお兄さんかな？」

「嫌ああああ！！！！やだあ！！！！！」

「アスリ、ラダンはもうお姉さん辞めるみたいだから、今日はここまでにしとこっか。明日もまたお願いね。」

母が針をしまおうとした時、固く閉じられていたラダンの両脚はゆっくりと解放されていった。同時に股間を押さえていた両手は、今度は涙まみれのラダンの顔を覆って、再び一本の割れ目が表に出てきた。

「ラダン、良いの？本当にやるよ？」

ラダンは顔を隠したまま号泣を続けており、返答はなかった。母も足が開かれたことをもって承諾としたのか、黙ってラダンの性器へ手をやった。その上のあたりがグイと開かれると、ラダンはビクッと体を揺らした。

「アスリ、またお願い。」

母の要請通り、アスリはラダンの両膝をグイと広げ、先ほどと同じくさらに抱え込むような形をとり、母の指元の中身がよく見えるようにした。

もう、アスリは限界だった。呼吸の頻度はいつにも増していることが顕著であり、それに限らずアスリの股間からは、おそらく目の前のラダンのものと同じように、ひどく水に浸かってしまったような感覚が上がってきていた。頭の中はラダンの享受するあまりにも耐えがたい羞恥と陵辱に対する共感、ないし加担者としての自覚、これからラダンに加えられるまさに針を刺すような痛みというごく近い未来、その未来を自ら受け入れる覚悟、大人になることを否定された直線と舞台となる小さな突起、それらが複雑に入り乱れあって、しかし1つの協奏曲となって、着実にアスリをおかしくさせていった。

そしてアスリの胸中に流れるメロディーは、母の手にした針が徐々にラダンの原点に近づいていくにしたがって大きく鳴り響き、避けようのない大波がまもなくアスリの元に到着するという警告を、高らかに知らせていたのであった。

いよいよ針が刺されようかという時、露払いとしてアスリに体の

奥深くから届く、最近知ったばかりのあの切なさが到着した。今のラダンは頭も揺らしておらず、アスリに与えられる物理的な刺激は非常に乏しかったが、それを補って有り余るほどに、目の前の光景から生み出される刺激は過大であった。アスリは痛みに襲われる前のように、奥歯を噛み締めその続きに備えた。

「それじゃいくよ？」

母のラダンへの最終意思確認が、近いのに遠くからアスリの耳に入った時であった。ラダンが枕としているアスリの下腹部のさらに奥に、ついに彗星のように輝く閃光が着弾した。今日ここまで幾度もの抵抗を重ねてきたアスリであったが、そのせいで十分可燃体質となっていた全身は瞬時に炎に包まれ、激しく燃え上がってしまった。

そこに警報通りの大波が押し寄せてきたが、火の手は収まるどころか、アスリの心中一面を火の海へと変え、狂気の波をさらに生み出した。波はこれまで親しんできた、性器そのものの由来の牧歌的なものではなく、眼前の事実とそこから導かれる可能性のある着想から抽出されたより高次元なものであり、アスリはすぐその上質な脳内の炎の波に屈服し、快楽になされるがまま、身体中の徹底的な焼却を許した。

アスリの目にするサバンナは、あっという間に一面が燃え、灰となり、やがて真っ白な雪化粧へと目まぐるしく変化していった。アスリは頬に涙を流しながらも、全身は羽根のように軽くなり、一方で深く、深く、安寧の中へと落ちるように誘われていった。

短い間隔で連続する呼吸を続ける中、驚く母の顔の後にアスリが最後に目にしたのは、差し込む木漏れ日を受けて艶めかしく輝く、ラダンの美しい線状の性器であった。

「ママ、ごめんなさい…。」

過去を振り返る川辺のアスリも、この時点まで振り返ったところで、一言母への謝罪をつぶやくと、濃厚な記憶に加えて、当時より洗練された手技による性器への愛撫と、母に対しての罪悪感、背徳感までも加えた、触れずに絶頂した当時にも劣らない質感を持つ最高地点へと至った。そして到達後の余韻の最中には、アスリの指の動きは一時緩やかになったものの、すぐに早く動き出し、また到達しては、というのを繰り返していった。3度ほど繰り返し、包皮の中身がこれ以上触り続けることもできないほどに、どうしようもなくなってしまったところで、アスリはようやくその右手の人差し指と中指を股間の中央部から離したのであった。

出発時点ではここで狂人と化すために、さらにその分厚い皮の内側の、ラダンのものよりも大きな核を剥き出しにて、さらに鍛練を重ねることも線としてはあったが、もはや自分の意思だけでは、あまりに感覚が研ぎ澄まされてしまった場所へ刺激を続けることは困難であり、いつのまにか乳首まで刺激していた左手の方も、ここでお開きにした。

アスリは息を切らしながら背の方に手をついて、しばらくの間放心していた。やがて、アスリは落ち着きを取り戻すと、性のほかに満たされていなかった空腹感にやっと気づき、次はそちらを解消するべく、よたよたと水辺から引き上げていった。

槍の元に戻ってきたアスリは、まず布袋から櫛と髪飾りを取り出すと、髪飾りの方は口にくわえ、髪を洗う時のように首を傾けて、すっかり乾いてしまった黒髪をとかし、元のように後ろで髪を１つにまとめてセットした。続いて槍に縛っておいた服をほどき、上着を羽織って簡単に結び目を作り、下半身には腰布も巻いて、こちらも着付けようとしながら、さらに次に身につける予定の履物の方へと目をやった。

ここでアスリは、もう乾いてはしまっていたが、自慰に耽り出す前のこの場に到着した直後に、履物を脱ぐために座った岩に恥ずかしい染みを作ってしまっていたことを思い出した。また、この後岩に腰掛けて食事を摂るのであれば、このまま腰布まで着てしまうと、目一杯楽しんだ後の染みは岩の方ではなく、嫌な記憶のある腰布の内側の方に出来てしまう可能性が高いことにも気がついたのであった。

ひとまずアスリは腰布は身につけないことにして、今一度腰布を剥がして槍に縛りなおした。これだけ着ないでいると、自慰の前と同様にある部分にだけサバンナの風が集中してしまうことにはなるが、もっとも食後にもう一度休息を設けるのであれば、その方が扇情的で都合が良いという魂胆もアスリにはあった。

ついでにアスリは、布袋から大きな葉を紐で結んである弁当を取り出して、座る場所の横に置き、最後に岩に腰かけて履物にも足を通した。おおよそという言葉通りに身なりが整ったアスリは、弁当をくるんだ葉を腰布のかわりに自分のふとももの上にのせて、中身を紐解いていった。今日の昼食は蒸してつぶした芋に、香草を加えて煮込んだ肉を添えたものである。アスリは昨晩も同じものを食べ

ているが、弁当にくるんだものは残り物というわけではなく、傷んでしまうのを避けるために、出来立てのうちに取り避けて用意していたものにあたる。父とダカクと同じく、アスリもこうして次の日の昼食を準備することは日課なのである。

早速、アスリはいつものように手で直接端の方から芋と肉を混ぜ1口大にして、次々と口に運んでいった。弁当はもちろん冷めてはいるが、香りの良い肉が芋とよく絡み、味わいは昨晩と遜色なく、アスリの食事はどんどん進んでいった。そして、あっという間に大きな葉の上は空になり、葉に残るソースとわずかな芋を指ですくって舐めとると、また川辺に戻って手を洗って水を飲み、アスリは腹を満たす方の休息を終えたのであった。

人間も結局のところ動物的な本能を持ち合わせているわけであり、アスリもまた例外なく同じであって、2つの欲を満たして、なお次に出てくるものは誰にでも想像の容易いものに他ならない。アスリは食事をした岩のそばの、木陰の下の柔らかそうな草が生い茂っているところに向かうと、爽快感の溢れる自然のベッドへと身を横たえた。

木陰から寝転んで見上げる木の枝葉と、そこから程よく差し込む木漏れ日は、アスリが先ほどまで思い出していた、あの日の記憶によく似ていた。

記憶は、当時アスリが到達してしまったところで、一度途絶えている。アスリがその次に思い出せるのは、身体中に残る快楽の余韻の中、優しい逆光のもとに心配そうな表情でアスリを覗き込む母の、アスリに呼びかける声である。

あの時のアスリは、いつのまにかラダンの寝ていた台の上に寝転んでいた。まさか自分がラダンと入れ替わったのかと驚き、頭を少し上げれば、すぐ奥にすでに服を羽織ったラダンがいるのも見え、

続けて起き上がろうとすると、母の手がアスリの首の左側に当てられていたのであった。

「アスリ！大丈夫？」

母の問いかけを受け、アスリも首元に手を当ててみると、わずかにぬるりとした感触があり、手を離して見やれば、それは少量の血液であった。

「大丈夫そう？ごめんね、アスリ。」
「血…？」
「本当にごめん。ママが悪かったね、アスリが倒れちゃって、ママも手を引いたんだけど、間に合わなくて…。」

状況としては、アスリはあまりに強烈すぎる絶頂感によって、意識を失い前のめりに倒れ、母も針を避けようとしたが手の角度が悪く、アスリの首を針で引っ掻いてしまっていたようである。母もラダンも、以前突然嘔吐した実績あるアスリが倒れたのは、直前までの刑の執行を目撃したことによるストレスが要因と考えているのか、少なくともアスリの快楽は明らかとなっていないようであり、ただただ心配と、特に母からは申し訳なさがひしひしと伝わってきた。
アスリは痛がるようなこともせず半ば呆然としていると、２人もアスリに別状がないことがわかったのか、安堵の表情を浮かべた。

「大丈夫そうだね。本当に良かった…、アスリ、ごめんね。」

母はそう言うと少し涙ぐみ、アスリを抱きしめた。そしてラダンの方も振り返り、腕を大きく広げた。

「ラダンもごめんね、ママやりすぎだったね。」

「ママ…、ごめんなさい。」

ラダンもその腕の中に加わると、母は2人の肩を寄せ合って抱擁し、緊迫していた台の上には温もりの輪が広がっていった。

「2人とも大好きだからね。」
「ママー！ごめんなさい。」
「良い子だからね。」

ラダンはやっと全てが終わったことへの確信と併せて、母からの深い愛も感じ取ったようで、声をあげて号泣し、母も静かに涙していた。ただ1人、アスリだけは絶頂と失神の余韻によってどうにもそこまで感情が高ぶらず、あまり頭が働かないまま、母の思いだけはとりあえず受け取っていたのであった。

しかし、安寧のひと時は長く続かなかった。突然母は2人を引き離すと、感情のこもっていない表情でアスリの正面を向き、冷たく告げた。

「でもアスリ、アスリもやっちゃいけないことしてるよね？ママ、知ってるんだよ。何も知らないとでも思ったの？」

全身から一気に、冷や汗が噴き出してくるのをアスリは感じた。いつの間にか、ラダンはアスリの背の方へと回り込んでおり、あっという間にアスリを後方に倒して、仲間を道連れにするかのように、アスリの両膝を抱きかかえ、両脚を大きく広げさせた。昼食前に腰布を身につけなかったのは悪手で、今やアスリの大きくはみ出した蝶々の全てが丸出しである。

「ラダンはもう半女になって、2年だよね。アスリももうラダンが

半女になったのと同い年なのに、何でまだ半女になってないの？ママが知らないと思って、お股のところいっぱいお触りしてるからだよね？もしかしてラダンよりいっぱい、いじいじしてるの？全部知ってるけどね。」

アスリは逃げ出そうともがくが、手足には全く力が入らず、声まで出すことができない。そうこうしているうちに、母はアスリの分厚い皮膚を押し広げ、輝く核を剥き出しにしてしまった。

祭に使う表情のない面のような顔をしたまま、あの針を手にして、母は続けた。

「それじゃアスリもチクッとしようね。」

いよいよアスリのルビーが貫かれようという瞬間、アスリは川辺の木陰で飛び起きた。途中から、明らかに記憶から悪夢へと遷移していた。せっかく水浴びをしたばかりであるにも関わらず、身体中の各所からひんやりとした汗の感覚が伝わってきた。

アスリは激しく鼓動する心臓のあたりを押さえ何度も大きく息をつき、落ち着きが戻ってきたところで今の悪夢を打ち消すように、キラキラと陽光を反射する川面を見つめて、正史を振り返った。

アスリの正しい記憶では、もちろんあの出来事はラダンとアスリが母に抱きしめられるところまでであり、その夜は母が女の会でもらってきた名前の思い出せない、酸っぱさだけが記憶に残る果物を、夕食後に3人で食べて終わった。どこかで野営を張っている父とダカクはいなかったものの、日中の件など話題には上らず、アスリの卒倒、というよりも絶頂の手助けもあって、ひとまずラダンは受難から逃れ、母との和解を成立させることに成功したのであった。加えてアスリの見ていた限り、母の言うところのチクッとする罰も、執行直前で中止となったようだった。

だが、さすがにあれだけの羞恥を経ていつも通りのように振る舞うのも難しかったのか、それから数日、アスリとの道中でラダンとの間には、何やら不鮮明なコミュニケーションしか交わされることはなかった。

腫物に触れるとまでは言えなくとも、何となくラダンとの距離感を保ったまま迎えたある日の早朝、アスリは家の裏の方から聞こえてくる、久しぶりに嬉々としたラダンと母の声で目を覚ました。ほどなくして寝床のアスリの元にもラダンが駆け寄ってきて、半女になったことを伝えてきた。アスリもそれを聞くと朝の眠気など吹き飛んで、自分のことのように喜び祝いの言葉を贈り、続けてラダンは父とダカクにも報告をして、家中はいつになくめでたい雰囲気で一色となった。そして上の2人の姉がそうであったように、ラダンもえんじ色で足元が隠れるほどの長さの腰布を身にまとい、一通り荷物をまとめると、父とアスリとダカクに見送られながら、母に連れられて巫女たちの元へと出発して行ったのであった。

それからは今のアスリの日常が、おおよそ2年続いている。

ところで夢の中で母から受けた、半女になった時のラダンと同い年となったのにアスリはまだ半女になれていないという指摘は、アスリの意識外の深層心理からにじみ出てきたわけでもなく、本人が日ごろから気にかけていることである。アスリは全くその制度の詳細を存じていなかったが、アスリの感覚的には半女・半男が成人して女と男になる時は、それぞれ半女・半男となってからだいたい３年程度経過した時で、子どもが半女・半男になる時は不定だった。ただし、男子の場合は半年程度の間隔で一度に数名が半男となることが多く、半女になるタイミングだけが、それこそ人によってまちまちで、早い者では今のアスリの３歳より年下でも半女になることがあった。

アスリはすでに適齢を超えて半女となるのが遅れている部類に入っており、現に同い年でまだ半女でない少女たちも残り少なくなってきているばかりでなく、すでに半女の期間を終え、一足先に大人になった年下の者もちらほらと現れてきているのである。もちろんそれ自体はロマドウの村の中で特段珍しい事柄ではないし、ラダンにしても半女となったのは比較的遅い方であって、おそらく当時は今のアスリのようにやきもきした気持ちを抱き、そしてやっと半女になったわけであるから、もう少しの辛抱で解決されることに違いはなく、アスリもその点への疑いはほとんどなかった。しかし、年下の女子たちに１人、また１人と先を越されていく度に、アスリのいつまでとも計れない待機から生み出される揺らぎは大きくなり、なぜ自分はまだなのか、いつになったら半女になれるのか、解のない苛立ちを伴った思案を繰り返してしまっているのは確かであった。

この時もアスリは、せっかく母から針で攻撃される幻想から逃れたにも関わらず、悪夢に起因する別な現実によって責め立てられたことで、結局消沈した思考へと囚われ、ぼんやりと眺めていた川面から視線を落としていった。

見下ろす先、真っ先に目に入るのは、先ほど何も身につけないまいまにしておいた、足を閉じても一本の線となることのない、自分自身の股間である。それはあの2年前の出来事で見たラダンの一直線とは、完全に別物である。アスリは少し足を広げ、その下でも大きく飛び出している唇を指でつまみつつ、どういう因果関係も思いつかないが、まだ半女になれないのはこの部分に余計な肉が余り過ぎているためなのではないかと不安を深めた。

この部分は成長に伴って以前より多少大きくなり色づいてもきているが、アスリが物心ついた時にはすでにこのような形状でほとんどが完成されていた。それでもかつて幼い時分は特段気にすることもせず、他の同世代の童女たちとともに水浴びをし、惜しげも無く立派な性器を晒していた。

アスリの意識がその肉片に向けられたのは、その最中にある1人がアスリの股から何かはみ出ているという指摘を発した時であった。そこで初めて、アスリは他の女子たちの股間が一本の線か、正面から何も見えないか、または何か挟まっていてもわずかであるかということを認識し、大きな衝撃と羞恥に襲われたのであった。

その日をもってアスリは集団の水浴びを一足もふた足も早く卒業し、以来、このような誰もこない場所でもない限り、アスリは川の中に三角柱を作って、誰にも見せたくない大きな持ち物を隠し続けてきたのである。

アスリは少し膝を立てると、両方の小陰唇をつまんで引っ張って紐のように結んだり、包皮をめくってクリトリスの中身を出したりしながら、改めて自身の性器を検分した。自分のものが他者とあまりに違いすぎることに気づいてから長い間、この部分はコンプレックスが塊となって、そのまま両太ももの間についているようなものである。しかし、自慰を覚えて以降、そうともばかり思えなくなっているのは確かであり、仮にも性器が大きすぎるために半女になれないとしても、体についている以上手放すことなど出来はしないが、

もはやなくてはならないほどの存在と言っても過言ではなかった。
　また、恥辱にまみれるラダンの割れ目を思い浮かべて特別な休息をとるほど性癖を歪めてしまっているアスリにとって、異形の性器は誰にも明かしたくない最大の羞恥の弱点であり、かつ性的興奮の原料でもあった。そしてグロテスクに思えるほどだぶつき飛び出ている皮膚を、なぜだか愛おしいとも思うのであった。

　こうして性器を愛でているうちに、追い払うことに失敗した悪夢由来の不安を、アスリはいつのまにか意識しないところで打ち消していた。だが、副作用として、先ほどしっかりと満たしておいたばかりの性欲はカラカラに乾きあがり、また性器をいじめ上げたい欲求も焚きつけられてしまっていた。その証拠に、大きな2つの唇を付け根に近いところで開いてみれば、中からは前回の残りなのか、それとも今新たに生産されたものなのかはわからないが、いずれにしても膜で囲われた小さな穴からは、白っぽく少し泡立ったような蜜が、いつの間にか肛門の方へ向けてあふれ出していた。
　またも我慢がならなくなってきたアスリは、その液体を右手の中指でたっぷりすくい取ると、もう一方の手で分厚い包皮で隠されていた大切な中身を剥き出し、丁寧に塗り上げて、優しくゆっくり、くるりくるりと転がす遊びを始めてしまった。

「うっ…、うっ…。」

　予想通り、指を1回転させる毎に生じる即効性の強力な刺激が、たった1か所から全身に突き抜けるように逡巡していった。今は直接的に中身に触れている分、快楽の物理的な大きさは苦しいほどであったが、自ら生み出したローションは、その重たさを紛らわせるだけでなく、体内へダイレクトに哀愁を送り込む手助けをしていた。

遭遇

昼食後にクールダウンを挟んだとは言えども、アスリのクリトリスはあまり冷え切っていなかったようであり、水浴び中に直触りした時よりもさらに敏感で、情けなく次々と続く液体が下方の穴から排出されていった。アスリは左手の人差し指と中指の指先で肉厚な花びらを開きながら、２本の指の根本でクリトリスの包皮が固定できるよううまく位置を調整し、無限の泉から湧き出る聖液で、美しく色づいた宝石の潤いを維持した。今回は快感自体があまりにも大きすぎることもあって、あまり頭を使ってあれこれ思い出す余裕はなく、直前まで感じていた哀愁があっという間に胸の奥の方までこみあげてきた。

「あっ！あっ！あっ！あっ！マッ、マ、ごめっ、んんっ！んー！あぅ！」

アスリが固く目を閉じ、顎を上に向け、唯一母に対する罪悪感と背徳感の味付けだけを快楽に追いがけした時であった。

突然、アスリから見て右手の奥の方から、いつにない牛の吠えるような鳴き声と、一斉に蹄で地面を蹴り出す音が聞こえてきた。タイミング悪く最も気持ち良いところに差し掛かってしまったアスリは、一瞬遅れてどうにかまず目だけを何かが起こった方向へと向けた。

アスリの横目に飛び込んできた光景は、川から全速力で離れる牛たちと、最後尾の一番小さな牛に向かって一直線に、低い姿勢を保ったまま駆けていく、サバンナの枯草のような色の獣の姿であった。

サーッと、アスリに冷静さが引き寄せられてきた。完全な油断だった。おそらく牛を追いかけているのはヒョウか何かである。アスリは性器いじりばかりに熱中していた自分を恥じた。過去これまでアスリが牛との昼の旅を始めてから、日々槍は常に携えてきたものの、実際に牛が野生動物に襲われるような事態に遭遇したことはなく、ターゲットにされてしまっている最後尾の牛を救う手立ては全く想像もつかなかった。

「あっ！えっ！えっ！あっ！」

牛に迫る獣をどうすることもできないアスリの頭の中では警鐘がけたたましく鳴らされ、脇や背中からダクダクと脂汗が流れ出しているのに対して、腰砕けとなった下半身はまだまだ存分に残る熱い快感を体の上方に押し上げようとしており、その両者がぶつかり混ざり合い、何とも間抜けな声をアスリはあげてしまっていた。今更ながら、かつて母によって股間に槍先を向けられたラダンが、あの時どのような感覚を抱いていたのかアスリは理解したのであった。

しかし、それを理解したところで何か状況が好転するはずもなく、アスリは一匹の牛の犠牲を覚悟するほかなかった。

その時であった。川の対岸の茂みから大きく葉を揺らす音が聞こえ、アスリもそちらを振り返ると、なんとアスリと同年代と思しき少女が1人、すっくと立ち上がったのであった。すでにアスリは別の理由で腰に力が入らない状態であったが、獣に続いて見知らぬ人まで突然現れたことで、さらに足腰がすっぽ抜け、十分早かった心臓の鼓動のペースはもう一段階ペースを上げてしまった。

その少女は獣の方に鋭い視線を送ったまま、すぐに背の方から矢を3本取り弓をやや上方に向けて構えた。弓で狙いをつける時間はごくわずかであったが、獲物を睨みつける表情はあまりにも凛々し

かった。

少女はキリキリといっぱい弦を伸ばし切ると、3本の矢を一斉に放ち、矢は弧を描いて風を切るようにして飛んで行った。アスリもその行く末を見守るように矢を目で追う一方、着地予定地では獣と牛の距離が限りなく近くなろうとしていた。そしていよいよ獣が牛の尻にかぶりつこうと飛びかかった瞬間、獣は宙に舞ったまま、頭に1本、胴に2本の矢で貫かれ勢いよく大地に転がった。

見事であった。かなりの速度で移動する獣を瞬時に仕留めただけでなく、矢を3本放って1本も外さなかったのである。アスリが直前まで感じていた緊張による心臓音は、大切な牛を守ってくれたことへの感謝と、颯爽とした状況判断に振る舞い、その実直な結果に、そのまま胸の高鳴りへ瞬く間に転化していった。

獣が動かなくなるのを見届けると、アスリは再びその少女を見つめなおした。少女はアスリとほぼ同じ肌の色をしており、後頭部の高い位置で同じく似た色の肩ほどの長さの長髪を縛っていた。背丈はアスリよりおそらく少し低く、アスリの着るものとあまり変わらない上着の下の胸部の膨らみもないようで、腰から下は茂みに隠れて見えなかったが、全身細身で筋肉質であるようだった。この人物をアスリは今まで見たこともなく、またこれほどの弓の名手ももちろん知らなかったため、確実に他の村の者であることに違いなかった。

少女の方も弓を下すと、川の向こう側からアスリの方に向き直り、アスリと目を合わせた。アスリは正面から少女の顔を見て、ハッとした。その顔立ちは格好良いというよりはかわいい部類に入るタイプで、何とも端正に整っていて、同性であるにも関わらず本能的にときめいてしまったのであった。

ところが、少女の方はアスリを見てみるみる顔を赤らめると、斜め下の方に目線を落としてしまった。ここでアスリは、ようやく自分の今の不格好さを思い出した。
初対面の相手へのアスリからの挨拶は、アスリが誰の目からも隠し通してきた大きなはみ出しと、おそらくあちらからは見えてしまったであろう、その中身なのである。

直後のアスリは尻の下の草に、火でもついてしまったかのようであった。まず一気に足を閉じ股間ではなく無意味に顔を手で覆うと、慌てて立ち上がり、２度３度何もないところでつまづきながら槍の元へ向かって、布袋や腰布が結びつけられたままの槍を引き抜いた。残念なことに火はアスリの体の中に入って燃え広がってしまったようで、まさに顔から火が出るような異常な焦りで焼ききられてしまいそうになりながら、少女に礼の言葉すらかけることもせず、逃げて行った牛たちを追いかけ、全速力で退却を始めたのであった。

穏やかさを取り戻した川辺に残されたのは、善意の矢によって命を絶たれた飢えたヒョウの亡骸に、顔を赤らめたまま呆気にとられている弓の名手と、ぬらりと輝く濡れた柔らかい草である。サバンナには牛たちに集合をかける指笛が響き渡る中、アスリの丸出しの尻はすぐに遠ざかっていった。

動転したアスリと牛たちであったが、先に平静さを取り戻したのは脅威が去ったことを把握した牛たちの方で、しばらく離れたところで1つの集まりを作り、スクランブルで切らした息を整えているようであった。自分が驚くほどの速さで走るアスリも、あっという間にその群れに追いつき、震える手で槍の柄を地面にやって寄りかかるようにして何度か深呼吸すると、のんびりしようとする牛たちをさらに追い立て急かし、帰路を進んでいった。
　事件のあった川からかなり離れた、湧き水の出るポイントまでたどり着いたところで、アスリは近くの木に槍を立てかけ、牛たちより先に湧き水をすくって顔を洗うと、ようやくもう誰にも見られる恐れはないという判断を下した。ここでやっと尿意に意識が向いたアスリは、湧き水から少し離れたところで、周囲に本当に人がいないことを入念に確認してから、両足を肩幅ほど開き腰を前に突き出し、両手で小陰唇を付け根の方までぱっくりと押さえて広げ、立ったまま放尿を始めた。

　最悪だった。あの少女が茂みから出てきた時、アスリは完全に性器を愛撫している真っ只中にあった。仮に少女が川辺に到着したタイミングがあの茂みから現れたあの瞬間であるなら、少女は獣の方にしか目を向けていないはずであり、アスリが行なっていた行為そのものは目撃されていないはずである。
　しかし、その後少女がこちらを見て目を背けたあの時は、今濃い色の尿を放出するこの自己主張の激しいところを、絶対に見てしまっているに違いはなかった。加えて、あの場所で下半身だけ脱衣した上で何をしてたのか、万が一にも問いただされたとすれば、納得できる回答を用意できるわけもなく、状況的にも自慰を行なってい

た と認識されれる可能性しかなかった。

アスリとラダンは見た目も性格もあまり似てはいなかったが、結局のところはやはり姉妹であり、気持ちが良くなれば周りが見えなくなってしまうのは同じで、アスリは過去のラダンの失態まで、今回しっかりと引き継いでしまった。ラダンの時よりまだ救いがあるのは、強制的な剃毛と針による罰を受けずに済んでいることである。だが、アスリの方がより苦しい点としての、見られた相手が誰とも知らない可愛らしい少女であるということに加えて、見られた性器があまりにも恥ずかしいほどに皮が余って飛び出ていることまで考えると、救いとなる点に見合っているとは全く言えなかった。

尿を出し切ったアスリは、ここでようやく槍に結んでいた腰布をほどいて身につけ、あとは無念とショックにまみれたまま、肩を落として帰宅したのであった。

起こってしまった現実にアスリが向き合えるようになるまでには、一晩を要した。前日は自慰の場を押さえられたことで頭が一杯になってしまっていたが、翌朝の道中でやっとアスリは冷静に出来事の分析が行えるようになった。

アスリは思考の最中、あることに気がついた。たしかにもろ出しの性器全てをあの可愛らしい少女に見られたことに変わりはなくとも、相手はどこの誰とも知らない村外の人物であり、牛に性器を見られたことと正味のところで大差はない。したがって、まず今回の件が村の者に伝わり、それがまた母に伝わり、アスリは捕らえられ、せっかく生えてきたわずかな陰毛を没収されて、挙句はクリトリスの中身を突き刺されるという事態までエスカレートすることは、まず起こりえない。この点についてはもはや心配は不要であり、気分が乗ってくれれば今日も特別な休息を行っても、問題はないのである。

ただしアスリは、牛に見られただけだから気にするな、という割り切った考えを抱いているわけではなかった。無論そこには、昨日

危うく牛を1頭失いかけたことへの反省も大いにあった。しかし、自分が最も見られたくないところに対して、最も見られたくないことを行なっているところを暴いたのは、同性とはいえ、牛ではなくまぎれもない同年代の子どもであるという爆発的な羞恥を実直に想うと、どういうわけか猛烈に性器を愛撫したい衝動に駆られていってしまうのであった。

朝も早い時間で股間を大分濡らしてしまったアスリは、休息の肴も早々に決めて、性器に突き動かされるかのように今日の目的地へと向かっていった。そうは思いながらも、さすがに昨日の今日で同じ場所で自慰をするほどの不敵さはアスリにはなく、足を向けた先は全く違ったポイントであり、また反省も踏まえて、到着後は少なくとも牛全体が見渡せ、近くに死角となるものがない場所に陣取ったのであった。

あとは昨日、大きくはみ出た自分の性器を見て赤らめられる少女の整った顔を思い浮かべつつ、見ないでほしい、もっと見てほしいという相反する感情を何度も反芻させながら、剝き出しにした中身を何度も磨き上げていった。

性器に罰を受けた過去のラダンも、その後アスリのように羞恥を糧に再び自慰に耽ったのか定かではないが、少なくともアスリにとって新しい実体験を基にしたテーマは怪我の功名とも言える格好のネタであり、そこから数日間、高い充足感を得ながら母に心の中で謝罪する日がアスリに続いた。

その一方で日を追うごとに、見ないでほしいという思い以上に、もう一度いけないところを見てもらいたい、消えてしまいたいほど、とびきり恥ずかしいと感じたいという願いも強まっていくのであった。

出来事から7日が経った日の朝、羞恥への欲求が頭の中から離れ

なくなり、家にいるうちから股間の奥が疼いてしまうようになったアスリは、ついに再びあの場所へと戻る決心を固めた。過去、あの場所には幾度となく訪れ、誰かの気配があったのは前回だけのたった一度きりである。今日、あの場所に戻ったとして、この前の少女がまた同じようにアスリの痴態に遭遇するとは思えない。

しかし、その可能性がわずかにでも高まると考えただけで、アスリの脳内では容易に興奮が増大し始めていった。まず羞恥の滲みついてしまった場所で自慰を行うということそのものが、アスリにとっては重要なのである。また、仮にも少女が現地にいたとして、その目の前で裸になって股を広げて性器をいじり出すほど、アスリに勇気はないし馬鹿でもなく、今ここで誰かに見られているかもしれないという状況を加えることが、過不足のないアスリの正解であった。

少しでも早くあの場で性器に刺激を加えたくて仕方のないアスリは、努めて平静を装って、いつものように乳搾りの作業に加えて朝の支度を整えると、すぐに牛の元に戻り彼らを引率して出立した。歩きながらも湿った花びらに感覚が集中してしまっているアスリの脳は、もはや思考のための機関と呼べるほどの働きもしておらず、概ねの権限を下半身に移譲してしまっていて、最低限残された理性だけが、アスリの目的地まで案内人となった。

急ぎ足で牛を追い立てるアスリが、もうまもなく件の川辺に到着するというところまで迫り、よく休む木陰を作り出すあの場所の木の像が、ただ続く平野の奥に点のようになって見え始めた時であった。アスリは木の下にできる影の形が、何やらいつもと異なって見えることに気がついた。砂でも目に入ったかと軽く目をこすってから、再度さらに目を細めてその地点に視線を注げば、どうやら木陰の薄暗くなった中に、アスリが座って染みをつけていた岩とはまた異なる、別な塊のようなものによって生じた影があるようである。

つい先日すぐこの近くで獣に狙われた時は、誰とも知らぬ誰かが獣を駆除してくれたが、今日もまたその獣の遺族か、あるいは親戚かが、あの木陰からじっと牛たちを眺め、着実に牛を仕留められる距離が取れたところで、また一直線にこちらに向けて駆けてくる線は想像しやすい可能性であった。アスリはここで今日初めて性的な思考の呪縛から解放され、手にする槍に力をこめ警戒を高めていった。だが、いくらアスリが警戒したところで、アスリの槍で獣を退治することはどう考えても難しく、ここで無理せず引き返してしまうのが最善手であることに間違いはなかった。

少し前を行く牛たちをUターンさせるべく、対象に意識を向け続けたまま牛たちの前に出ようとアスリが駆け始めたその時、見える影の左端の方のあたりで、何かがこちらに腕を向けるかのように動く様子をアスリは捉えた。そしてそのすぐ下のあたりでもう1つ、体を起こすかのような、ゆっくりとした小さな動きも続いてあった。

人だった。それも2人いる。影の大きさから察するに、2人はかなり近い位置で、寄り添うように腰を下ろしているようである。ま

だその全貌を掴むには程遠い距離ではあったが、今の一連の2者による所作を、一方がまずこちらの方を指さし、それに従ってもう一方もこちらに目を向けたものとしてアスリは理解した。

ひとまず獣が突然襲いかかってくる心配のないことがわかり、アスリは安堵の中、牛たちに対する注意の向け方を緊急性のより低い状態へと切り替え、直前に始めたばかりのスプリントも取りやめた。直後にアスリは、予定通りあの木陰に到着したとしても、珍しく、というより過去初めて先客がいる以上、彼らがどこかに去らない限り、今日の本来の重大な目的を達成することができないことを悟った。

まだあの場までは十分離れており、ここから自然な形でカーブを描くように進めば、別なポイントに向かうのは不可能なことではない。しかし、牛たちもこの場に何遍も連れてこられているわけであり、あと少し足を伸ばせば待ち望んだ食事がたっぷりと控えていて、先日のような危険がないことが明らかである以上、アスリの誘導にしっかりと従ってくれるかは未知数であった。また、仮にも牛たちがアスリの話す人語を完全に理解できたとして、急な行先の変更を彼らに納得させるのに足る論理の整った説明は、アスリに全く用意できなかった。

アスリは先方の2名の休憩が終わり、木陰を立ち去るまでは本望を抑制することにして、心の中に少しの苛立ちを隠しつつ、そのまま目的地に歩を進めていった。唯一、気にかかったのは、あの場にいるうちの1人が、アスリの大きな蝶々を目撃した張本人ではないかということであったが、実際もしそうだったとして、遠目で見ても1人と数頭の牛の組み合わせであるこちら側の正体は明白であり、あれほど顔を赤らめていた人物が、今ものんびりと木陰でくつろぎ続けるとは考えにくかった。そこまで頭を回したところで、アスリはそれ以上の心配はせず、時々動きを見せる2つの人影に、さらに

距離を詰めていった。
いよいよ川に近づき、地面もかなり草色が強くなってきたあたりで、いつのまにかアスリに背を向けていた方の１人の後頭部に見覚えのある、１つに束ねられた長い黒髪が携えられていることをアスリは発見した。残念なことに、アスリの算段は甘かったのである。
ところが、賭けに失敗したアスリが気まずい思いと、この場に来た後悔を抱いたのは、ごくわずかな間のみであった。というのも、後ろに手をついて座っている、茶色い短い髪の別な少女のこちらに向けられている顔が、離れたところから見ても呆けてしまったかのように具合が良くなさそうな様子であったのである。この２名は単にここで休憩をしていたのではなく、体調を崩した１名を前にして、この場で立ち往生してしまっていたのであった。

すぐにアスリは、あたりを一周ぐるりと見渡し、改めて牛たちに迫る脅威がないことを確認すると、残された木陰までの距離を全速力で駆けていった。アスリの走り出す足音に応じて、川の方を見ていた黒髪もアスリの方をすぐに振り返ってきた。アスリの予想通り、その人物はまさしく先日のあの時の少女であり、その眼は先日獣に向けられた時と同じように鋭く、強い警戒心が保たれているようであった。だが、たしかにその者の眼はしっかりしていたが、顔の血色は先日赤らめたときのおいしそうな果物のような色ではなく、面倒を見てもらっているもう１名よりもさらに血の気もない上に、悪寒があるのか歯をカタカタと揺らしていた。

アスリはここで初めて、普段であれば穏やかで優しい木陰が、今日は極めて緊迫した状況に置かれている事実を把握した。遠くからはただの休憩する影が存在するだけにしか見えなかったこの空間は、わずかな間は苦しむ者とそれを介抱する者のペアによる場に見えたが、今やその両者が他者の助けを要する、難しい局面を迎えている

のであった。

もはやこの期に至って、頭の中に余計な思考や欲望が入り込む隙など全くなく、柔らかい草の上でへたりこむ2名の元へとアスリが滑り込もうとした時であった。

「危ない…！」

力のない少年の声が、アスリの耳に届いた。声を発したのは今振り返ったばかりの、アスリの全てを知る者の方であった。その可愛らしい顔立ちと美しく長い髪から、アスリはその者を少女とばかり思い込んでいたが、まさか少年であったのである。
目の前の少女が少年へと突然性転換したことへの驚きと、何らかの危険を知らせる第一声にアスリは転びそうになりながら、その場で急減速した。バランスを崩した拍子にアスリは足下の方を見やると、元少女の指摘通り先端に血のついた矢が2本、地面に転がっていた。今度はそれを踏み抜かないよう、アスリは手にしていた槍を放り出し体の重心を一気に後方に移すも、ここでついに尻餅を一度つき、すぐさま立ち上がって2名のところに駆け寄った。

「どうしたの！？大丈夫！？」

声をかけながら、アスリは木陰でヘタリ込んだ両名の様子を迅速に観察し、頭の中に情報の断片を次々と取り込んで行った。
まず茶色いショートヘアーの方であるが、アスリを前にするのに目はどこか違うところを見ており、意識が遠のきつつあるようである。肌の色はアスリよりも元々随分色白なようであったが、そうであっても血色は悪く、上着の左肩の前面には血痕があり、同じとこ

ろの裏の背の方を見れば、破けたように受傷した箇所があった。胸部にはアスリよりも大きな2つの膨らみがあり、まだ何も声を発していないが、同年代の少女に違いなかった。

少女のような少年の方は、もう一方のように血まみれではなかったが、左のふくらはぎに茶髪の方の肩にあるものとほぼ同じ生傷があり、ここは出血をしていた。だが、容体自体はこちらの方が厳しく、怪我のない方の足を立て、矢筒を背負い左手には弓を持ちながらも、その手は震えており、気力で戦う姿勢を取っているようであった。

状況を総合すれば、すぐそばに落ちている血のついた2本の矢は両名に刺さって、どうにかこの場で引き抜かれたものであり、つまりここにいない何者かが殺意をもって、少年と少女に矢を放ったとしか考えられなかった。2人の怪我はどちらも急所を外していて、なぜ傷を痛がる以前に苦しそうであるのかは不明である。どうであれ、少年のこの警戒態勢はまだ続く攻撃がある可能性が残されていることを示しており、すなわちこの場は安全ではないことを意味していた。

アスリはそこまで考えが及んだところで血の気が引いたが、この場にいる全員が重大な危険にさらされている以上、何はともあれ2人をどうにか連れて、ここから離れることを最優先とした。

「大丈夫？　歩ける？　ここから逃げないと！」

アスリが2人の座る場所にしゃがんだ時であった。

「伏せて！！！」

少年が残る体力を振り絞るような声で弱く叫ぶと膝立ちとなって、アスリと茶髪の少女を川の方から遮る姿勢を取った瞬間、何か鈍い

音がすぐ横の木の幹の方から鳴った。直後にアスリの目の前の少年の右太ももからも、少し異なる重い音が聞こえてきた。

少年は、アスリがまだ掴めていない出どころから向けられた矢を、自分の足で受け止めていた。信じられないことに、まさに身を呈して少年はこの場の女性陣を守ろうとしているのである。

アスリもそこまで目にして、咄嗟に茶髪の少女を押し倒すようにして低い位置を取った。再び少年の方に目をやると、なんと少年は足に矢が刺さっているにも関わらず、すっと綺麗に伸ばした上半身を全く崩さないまま、すでに弓に矢を2本構えていた。

「外した！」

声の上がる川の向こうには、皮のようなものでできた胸当てをつけた、屈強な色黒の大人の男が2人、続けて矢を弓にかけていた。今の攻撃を仕掛けた犯人は、確定的にこの者たちであった。そして次の矢があちら側から飛ばされようとする直前、それよりも早く少年は先日獣を倒した時と同じように、一気に2本の矢を放った。矢は直ちに男たちの眉間に正義の象徴となって届けられ、力を失った主の手にする弓から、どこか明後日の方向に向いてしまった矢が2本、打ち上げられていった。

肉が崩れ落ちるような音が川越しに聞こえると、少年はアスリたちの方を険しい表情のまま振り返った。

「…大丈夫？」

格好良かった。アスリは先日に続いて、今日もまたこの少年に救われた。それも今回は自分の命を、である。この少年は極限の状況下にあって、臆することもなければ一切の迷いもなく自らの肉体を盾として用い、残る体力もわずかな中で冷静に危険の排除に挑戦し

て、見事実直にその行動を成し遂げたのだ。その防衛の灯の宿った瞳はずっと見つめていたくなるほど美しく輝いており、アスリの心はあっという間に煌びやかな2つの鏡面の中へと引き込まれていってしまっていた。

今、アスリは生まれて初めて誰かに殺されそうになって動転し、心臓が胸から外に飛び出して逃げてしまいそうなほど鼓動が早まっているのは確かである。しかし、その高鳴りは紙一重の命のやりとりの目撃によってのみもたらされたのではなく、むしろより大きな要因としてそれとは別に、アスリの中でまだ正確にその根源をとらえきれない、2つ目の生まれて初めてに接したことも影響している。それはアスリにとっては言語化しがたい、少年に対して芽生えてしまった1人の異性として向き合いたいという欲求以外の何物でもなく、今やアスリはすっかりその感情に魅了されてしまっているのである。

残念なことに今のアスリには、少年の顔を見入り続けるだけの余裕はなかった。腹ばいとなったアスリの真下で仰向けになっている、もう1人の少女のか弱い吐息がアスリの首元にかかると、アスリは飛び起きて少女に問いかけた。

「ごめんっ！大丈夫？今のは刺さらなかった？」

少女はアスリと少年をそれぞれ見ると、辛そうに黙ってうなずいた。少年もそこまで見届けると、前のめりに崩れ落ちるようになって地面に両手をついてしまった。

ここからはいよいよアスリの仕事である。アスリは四つん這いの姿勢になったときめきの相手の後ろに回り、腰布の上から刺さってしまっている矢をまず引き抜くべく、少年の太ももの患部に手をか

けようとした。

「触っちゃダメ！」

少年の苦しそうな力ない一喝に、アスリも伸ばしかけた手を引いた。少年は同じ姿勢のまま、矢の刺さった足の痛みをこらえるように少しだけ背を丸めつつ、小さくつぶやいた。

「これ、毒ついてるみたいなんだ…。」

アスリは面食らった。牧畜の他に狩猟も大きな収入源であるアスリの一家では、普段から父やダカクが弓と矢も頻繁に手入れしており、アスリにとって矢は身近なものであった。狩りで仕留めた獲物の肉は、アスリの家族だけでなく他の家庭でも調理され、無駄なく誰かしらの口に入るわけであり、矢に毒をつけるなどもってのほかであって、そんなことをする父の姿など一度たりとて見たことはなかった。アスリに毒矢の概念自体、今この少年から聞かされるまで、まずなかったのである。

一方で、少年の太ももに刺さるこの卑怯な矢の存在そのものにアスリは驚きを抱きながらも、傷の程度と連動しない2人の苦しみには、やっと理解が及んでいった。今、辛そうにする2人に言うことはできないが、正直なところ矢による傷だけであれば、アスリが以前ダカクを槍で突いてしまった時よりも大きくはなく、痛みを伴うとは言え、血が止まってしまえばとりあえずは動けるわけである。ただ、毒が付いていたとなれば、話は全く違ってくる。

牛たちが勝手に草を食べ進める川辺はよく晴れ渡り、いつもの爽やかな空気で満たされていたが、アスリは今たたずむ優しいはずの木陰が真っ黒い雲に覆われ、何か今にも土砂降りの雨が降り出しそうなように感じていた。

依然として、2人がここに来るまでに一体何があったのか、返り討ちにあった川の向こうの男たちは何者なのか、全く不明であったが、今から成すべき行動を決めていくのには、これで最低限度の状況証拠と情報がアスリの元に集約された。アスリはこの中で唯一、毒をもらっていないにも関わらず、腰布にまつわるあの時のように激しい吐き気を覚えており、心臓の鼓動が頭の中に1回ずつ響いて揺れるように感じていた。

反面、緊迫する状況下に置かれたアスリの頭脳はいつになく澄んでいて、冷静を保っているとは言えないにしても、わずかな間にこの場に適する解を探し出す余力は十分にあった。

襲撃側の状況がよく分からない以上、また矢がいつ飛んで来るかもしれず、両名を連れてこの場所から一刻も早く離れることは、攻撃のあった直前と変わらず、最優先すべき事項である。ここから離れて向かう先は、もちろんアスリの暮らす村しかない。だが、少女の方は矢を避けるのにアスリに倒されてから寝たきりであり、少年の方は手足を地につけて震えていて、この場を出発しても少し行ったところで力尽きることは明らかであった。

何か毒を緩和させる策はないか、頭を捻らせるアスリはここで、弁当や櫛を入れてきた布袋の中に、随分前に母がどこかからもらってきた、困ったときに服用する薬を入れていたことを思い出した。アスリは早速、近くに放り投げていた槍を取りに行き、結び付けていた布袋の中身を漁っていった。

アスリの記憶通り、袋の奥の方には薄い革でできた薬入れが入っており、中を開いてみると、黒っぽい色の土のようなものが出てきた。この薬はまだラダンも一緒の頃に、一度だけラダンが腹痛を訴

えて服用した実績がある。その時は粉薬であったはずであるが、長い間アスリが持ち合わせているうちに、ペーストに近いようになってしまっていた。当時、ラダンは結局家に着いてからも腹が痛いと言っていたし、しかも見た目まで変わってしまったこの薬を飲んだところで、むしろ腹でも下してしまうようにも思えたが、今はこれに頼るよりほかなく、腹を下すついでに毒まで流れるのであれば、それはそれで良いのではあった。

もう1点、アスリは2人の傷口が、矢を抜いてからそのままであることに気がついた。患部に何をすべきか判断のつかない中でむやみにいろいろすれば、かえって障ってしまう恐れもあり、不用意に治療めいた行動はできないが、少なくとも毒がついたままで良いはずはない。今なら綺麗な水も近く、アスリは2人に薬を飲ませるついでに、出発前に川辺で手早く傷口を洗い流してやることにした。

「これあったから飲んで。あと矢が刺さったとこ、少し流しとこ？あっちまで連れてってあげる。」

アスリの声には相変わらず四つん這いのままの少年の方が反応し、少女の方へ指を指した。少年の無言の指示に従って、アスリはまずは少女をゆっくりと起こしてやると、少女の怪我をしていない方の肩に腕をまわした。

「いったたっ…！」
「ごめんね、そこまで歩ける？」

少女はアスリの肩を借りながらどうにか立ち上がると、よろめく足を前に進め出し、アスリも少女を支えて、合わせて川の方に向かっていった。一応歩けるとは言え、このペースで移動することは不可能であり、この場からの脱出にあたって、次のネックとなるのは2人をどう連れ出すかということになりそうであった。

水際にたどり着くと、アスリは少女をその場に座らせて、水をすくって少女の口元に運んだ。

「お口あーんして？そのままね。」

少女は朦朧としているのか、その目と同じく口もすでに半開きであったが、アスリの呼びかけに応じて、上を向いてさらに大きく口を開いた。アスリは口の中に水を流し込み、続けて薬のペーストも半分入れてやると、少女は渋い表情を浮かべながら飲み込んだ。想像もつかないが、風味は良くないようである。

アスリは続けてまた水をすくうと、上着の上からそのまま、肩の怪我に数度水をかけていった。本当は服を脱がせたいところであるが、怪我のある肩から袖を通すのは難儀しそうであり、急ぐ今は控えるほかなかった。患部に水がかかる度に少女の顔はまた歪み、アスリも見ているだけで自分の肩まで痛くなりそうなほどであった。

「ごめん、痛かったね。もう終わり。あっちの子も終わったら出発しようね。」

「ありが…。」

「ああっ！！！！」

消え入るような少女の礼の言葉は、アスリの後方から上がった少年の短い叫び声によってかき消された。驚いたアスリがそちらを振り返れば、少年はいつのまにか姿勢を変えて座り込んでおり、自力で太ももに刺さった矢を引き抜いたようである。

「えっ、ちょっと！大丈夫！？」

アスリは慌てて、歯を食いしばって太ももを押さえる少年のとこ

ろに駆け戻った。
「大丈夫？無理しないで。あっちまで連れてってあげるから。」
少年の両足はもちろん歩けるような状態にはなく、アスリは少年の前に後ろ向きになってしゃがみ直し、背中で受け入れる体勢を整えた。
「背中乗れる？」
「ごめん、ありがとう…。っ！痛たたたたっ！！！」
「抱っこにする？」
「いったいけど！待って待って！っ！」
少年の大きく息を吐く音に続いて、アスリの背にずしりと、体重の乗った気合いが寄りかかった。その少女ののような見かけ以上に少年はタフで、また運動神経も優れているようであり、両足に怪我を負った上に毒に苦しむ中にあっても、地面からアスリの背にうまく体を乗せるだけの体の動かし方を即座に体得したようである。残念なのはアスリの方で、せっかくしっかりとその身を受け止めたにもかかわらず、あまりにも不注意に少年の怪我した側の太ももにまで手をかけてしまった。
「あああ！！！！」
「ごめん！左だけにするね？んじゃ立つよ？」
アスリは右手に回してしまった手をすぐに下ろし、少年の左のふともだけを持ち上げて、ゆっくりと立ち上がった。正直なところ、少年を支えて立ちきれる自信はアスリになかったが、困難な状況は往々にして人間の限界を拡張させるものであり、この時もかなりアンバランスな状態とは言え、アスリは少年を背に乗せて歩き出すこ

とに成功した。短い移動の間も、少年はアスリの耳元でカタカタと歯を鳴らしながら、苦しそうに息をしていて、どうにか意識を保っているようであった。
少女のすぐ隣まで来るとアスリはしゃがんで少年を下ろし、先ほどと同じように少年の口元に水を運んでやって、残る半分の薬も少年に与えた。その間、隣の少女も尻をずらすように少し移動して、震える手を川の水まで伸ばしてすくい、少年の太もものまだ生々しい傷口をかけ流していった。やはりこれは堪えるようで、傷に水をかけられる痛みのせいか、薬の風味によるものなのか、あるいはその両方か、アスリの惚れ込んだ少年の顔は、固まった牛の糞のようになってしまっていた。アスリも薬を与え終えると、少年のふくらはぎの方の傷に水をかけていった。

「…ありがとう。」

少年は肩で大きく息をしながら、アスリと少女をそれぞれ見て、ぽつりとつぶやいた。そして川面に目をやり、か細い声で続けた。
「あのさ、このあとここ出るよね？その子、連れてってもらえん？俺、足どっちも怪我してろくに歩けんし、このまま残るよ。」

「ダメ…。」

すぐに否定の言葉を発したのは、少女の方だった。少女はアスリを見つめ、弱々しく今の願いを繋げていった。

「私の方がもうダメだから。今みたいにおんぶして、ユニスを連れてってあげて。」

少女の続く言葉で、アスリは初めてこの少年がユニスという名であることを知った。

「俺は良いから、行って。さっきおばさんがやられて、ティサのことお願いされたんだ。」

この会話の流れになってしまえば、ユニスの方も譲らない。もっと正確に言えば、アスリの背を少女の方に譲ろうとする。

しかし、今ユニスの述べたおばさんについての内容から、また新しい推察がアスリに加わった。まずおばさんというわけであるから、叔母または伯母であるか、ユニスとは全く血縁がないただのおばさんかであるはずである。かつ少女を守る依頼をする立場であるということは、少女の母親であろうか。その上、さっき「やられ」たとのことである。この状況では意味するところは1つしかなく、襲われているのはこの2人以外にも、2人の家族やその周辺まで被害が及んでいるのかもしれない。

「やだっ！ユニス！死んじゃやだ！」

一呼吸の間、あれこれ考えを巡らせていたアスリは、弱った少女がユニスに泣きつく声によって目の前の状況に思考を引き戻された。先ほど少女の肩を支えて歩く時点で、どう2人を連れて移動するかは懸念としてすでに存在していたが、いよいよこの段となってしまった。この2人のうち1人を残していくことは、ここから逃れることだけを考えれば確実性の高い選択だが、アスリにしても救われた方にしてみても、一生悔やんでも悔やみきれない、後味の悪い結果となるだけである。

また、今人生で初めてユニスという1人の少年への何らかの想いがアスリに生まれかけているとは言え、まさかユニスを優先してもう一方を捨て置くことなど言語道断で、当然アスリもその良識は持ち合わせているわけである。この後、場合によってはそのような究極の判断を行わなければならない局面が出る可能性はないことはないが、現時点では機転と挑戦次第の何らかのチャンスを活かすほうが、この場にいる全ての者の未来にとって適切であることは明白であった。

二兎を追うアスリは、ユニスと同じように頭の中で2本の矢を弓にかけ、どうその矢を2匹の獲物に当てるか、必死で頭脳を回転させていった。すぐに、その矢は放たれ1つの案となって、アスリの中をよぎっていった。

安直であった。創案者であるのにできるかもわからなかったが、いつ次の攻撃があってもおかしくなく、2人もどんどん弱っていく中、もう試してみるしかなかった。アスリは務めて落ち着いた声で、未だ不足する情報への問いかけから、企図の実現に着手した。

「まず、こっちがユニスで、そっちは？」

「私、ティサ…。」

「わかった。ユニスとティサ。私はアスリ。あのね、もうここじゃこれ以上治せないし危ないから、今言ってた通り、２人とも今から私の村に連れてく。ロマドウの村。」
「２人？どっちも背負うん？」

ユニスの方がアスリを遮った。

「２人は無理。ティサの方おんぶしてく。」
「やめて！残るのは私！」

アスリが名前を把握したばかりのティサが、泣き声に近い力ない叫びをあげた。アスリはさらに続けた。

「大丈夫、だから２人とも連れてくから。それでユニス、ユニスって馬に乗ったことある？」
「馬？…何回か、かな？」
「じゃあ大丈夫かも。あのね、ユニスは牛さんの背中に乗ってってって。」
「牛！？無茶でしょ…。」
「大丈夫、１番賢くておとなしい子にお願いするから。」
「…鞍もついてないけど、マジで乗れんの？」
「まず試してみよ！」

ユニスはいろいろと言いたいことがあったようだったが、他に手も浮かばなかったのか、それとも会話のラリーを続けるだけの体力も残っていないのか、黙ってアスリに支えてもらいながら腰を浮かせたあと、すぐにその前に回って背中を向けたアスリに身を預けた。先ほどの１回でコツを掴んだのか、アスリは今度はすんなりユニスを背負って立ち上がった。

ふと、北の方から川沿いに吹き上げてきたそよ風の中に、何か焦げたような臭いが含まれていることにアスリは気づいた。アスリの背上のユニスも、地面に座るティサも同じようで、３人は一斉に風の出所の方に頭を向けた。

川の上流の方の、さらに木々の奥の遠い１箇所から、白い煙の柱が複数立ち上っていた。

「カインタだ…。」

ユニスのぼそりとした一言には、アスリも聞き覚えがあった。カインタはアスリの住む村から、ずっと西の方に行ったところの村なのか、または部族かの名前である。アスリは訪れたことなどなく、もっと遠い場所にある認識であったが、煙の位置を見る限り思ったよりは近い距離にあるようであった。

「え、あれって火事？え、待って、待って、さっき矢で狙ってきた人たちと関係ある？」
「わからん、でもあっちもヤバいんかも。」

先走るアスリの問いに、ユニスも答えは持ち合わせていなかった。たしかに矢を放ってきた連中と、カインタの火災らしき煙の関連性は全く掴めなかったが、ただ仮にも何らかの繋がりがあるとすれば、ここに留まることに対してのリスクの度合いは、加速的に上昇しつつあるはずである。

「すぐ出ないと。」

アスリは草を食む牛たちを見回し、ユニスを乗せたまま目当ての１頭の方へと近寄っていくと、牛の方も地面から頭を上げて２人を

見つめた。この牛はアスリが右と言えば右の方に、左と言えば左の方に進路を変えられる、とても賢い1頭で、何かを運ぶ時にはよくアスリが世話になっているのである。アスリは優しく、相手が人間かのようにその牛に語りかけた。

「今から男の子を1人載せるけど、いつもみたいに良い子にしててね？」

声をかけられた牛の方は返事なのか、気まぐれなのか、鼻を一度鳴らすとまた食事を再開した。

「牛さんも良いって。それじゃ牛さんに乗ろうねー。」
「マジか…。今の分かってんの？」
「超賢い子だから大丈夫！」

アスリがいぶかしむユニスを適当に収めて、一旦背から降ろそうと腰を下げかけた時であった。川向こうの藪のような茂みをガサリとかきわける音が、人牛を問わず、この場にいる全ての者たちの耳に割り込んできた。

「弓取って！」

ユニスがアスリに声をかけるも、しゃがみかけのアスリはユニスを乗せたままであり、依頼に全く対応できる体勢ではなかった。音の出所はカインタから上がる煙よりも少し右手の、川の上流の方で、アスリはまず首を伸ばしてそちらに目を向けた。

牛の背中越しに、黄色に近いような茶色い何かがまず見えた。その姿の一部をアスリが捉えた直後、移動する対岸の先方は牛の体によって遮られ、視界から外れてしまった。改めてユニスを背負いな

おしながら立ち上がったアスリが見定めた正体は、馬のように激しく前後の足を蹴りだしながら、川に沿って下流の方に向かって走る、まぎれもない１匹の獣の姿であった。

野犬だ。いや、群れも組まないあの1匹は、野良犬と言ったほうが正しいか。問題はあの犬が、真に野生化しているか、否か、仮に野生化してしまっているのであれば、腹を空かせているかである。最悪の分岐先が有効であった場合、状況はさらに苦しくなる。
瞬時にもたらされた懸念にアスリが囚われる中、犬は川を挟んだアスリたちのはす向かいのあたりでくるりと真正面に転じた。

「ファラール！」

耳元から、弱々しくも嬉しそうな呼び声が上がった。犬はアスリの肩の上のユニスの顔をまっすぐ見つめて、何の躊躇もなく一直線に川に飛び込むと、頭だけを水面から出したままザブザブと犬かき泳ぎでこちらに近寄ってきた。

「ユニスの犬？」
「そう、うちの。」

アスリは安堵した。まずこれで牛、ないし今アスリのケアの下から一時的に外れ地面に座り込むティサが、ガブリとやられてしまう恐れからは解放される。
しかし、その安堵は束の間とも呼べないほどの、ごくわずかな間しか保たれなかった。ついこの前、獣に狙われた当事者である牛たちは、川を渡る相手の危険性を誤認識してしまっていたのである。当初はアスリやユニスと同じく、牛たちも茂みから飛び出してきた犬を注視するだけであったが、川の半分まで犬が泳いできたところで、あろうことか賢いとの前評判のあった牛まで含め、どの者かの

雄叫びを合図に退避の行動を開始してしまった。

「えっ、ちょっと！待って！待って！あっ！行かないでっ！」

当然のようにアスリのかけたストップの声など馬ならぬ牛耳東風であり、あっという間に牛たちは駆け出して、川に対して垂直方向に離れて行った。砂ぼこりを上げながら走る、真っ黒な牛たちの後ろ姿は、まるでヌーの群れが一斉に移動したかのようであり、合わせて大地に響く蹄音は、アスリの描いていた脱出計画が脆くも崩れ去る最中にあることを告げていた。

「どっちにしても、あれに乗んのは無理だったわ…。」

呆然とするアスリの耳元で、ユニスがしみじみと一言をつぶやいたが、アスリの意識下に直前の判断の是非を十分に評価するだけの余裕は、もはや残されていなかった。去る牛たちに続いてすぐに足下から聞こえてくる、小刻みに連続する呼吸音の方をアスリが見やれば、計画破壊の張本犬が黒っぽい口元から舌を大きく出し満面の笑みを浮かべており、尻尾を左右に振って、アスリの背に乗る主人に媚を売っていた。そしておもむろに足を踏ん張り全身を震わせて、大きくないその身体中から水しぶきを上げると、アスリも思わず顔をしかめたのであった。

最悪である。今更ながら、アスリはこの場に到着してからの自分の時間の使い方と判断を悔やんだ。この犬にとっては、飼い主と合流できたことは大きな喜びであるに違いなく、またユニスにとってもそうであるはずである。だが、再会を果たしたこの1匹と1人には申し訳ないが、矢が飛んできた後、ユニスが的確に敵の処理を終えた時点で、患部の汚れ落としや薬の投与など後回しにして、速やかにこの場から離れてしまうことが正解であった。

ユニスは乗れないとは言っているが、牛が離れて行ってしまった今、それが本当かどうか試行することもできないだけでなく、ユニスとティサを2人とも救い出す可能性自体が潰えかけてしまっているのである。

「俺さ、やっぱり残るよ。」

アスリが犬を見つめて立ち尽くしたまま、マイナスの位置の振り出しから、もう一度救出作戦を練り直し始めた時、ユニスが小さく語りかけた。

「え?」
「ティサ背負ってさ、牛追いかけなよ。俺このままついてったら、ファラールずっとついてくるからさ、牛に追いつけないじゃん。」
「え、でもそしたら…。」
「ファラール来たし、まだ矢も残ってるから大丈夫。」

ユニスの提案に、アスリは黙ったままであった。いよいよ、最も行いたくない選択を、実行に移さねばならない時が近づいている。先ほどこの話題が出た時は、ティサが割って入ってユニスの方をアスリに推したが、今はその声も上がってこなかった。ティサの方を見れば座ったまま猫のように背を丸めこうべを垂れていて、もう意識が保持できていないようであり、ユニスよりもさらに症状が悪い方へと進んでしまっているのは一目瞭然だった。

ではユニスの言う通りティサだけを先に連れ帰り、大急ぎでここまで戻ってきたとして、弱った上に追撃の可能性にさらされ続けるユニスの命がそこまで繋がるか、繋がったとして村まで持つのかと言えば、正直なところ無理である可能性がほぼ10割であった。ユニスもそれは分かっているのか、返済のあてのない大きな借りをアスリに求める一言を続けた。

「ティサのこと助けてくれたら、何でも言うこと聞くから。」

万事休しつつある、その時であった。今、犬が出てきた茂みの奥の方から、再びガサリ、ガサリと藪をかき分ける音が聞こえてきた。

「弓！弓取って！」

ユニスの2度目の同じ依頼に、アスリが応じようとするよりも早く、茂みからまず人の腕が現れた。

アスリは絶望した。もう弓と矢をを拾い上げてユニスに渡しても、あちらから今すぐ狙われたら、間に合わない。今度はアスリがサバンナの弁慶となり、矢を受けユニスを守ろうにも、ティサを狙われればひとたまりもない。

手詰まりである。アスリは低い姿勢を取ることすらできず、金縛りにあったかのように固まって、まもなく正体を現すであろう相手の出所を見つめるほかなかった。

大人とも少女とも呼べない、若い女だった。ラダンと同じぐらいの年齢だろうか。その手に武具などはなく、丸腰のようであった。肩より少し長いやや明るい髪色をした先方は、こちらの存在を認識するとハッと目を大きく見開き、アスリたちの方へ声をかけた。

「………。」

いや、声はかからなかった。自分だけに聞こえるようにつぶやいたのか、辺りは犬の鼻息と、離れたところから時折聞こえてくる牛の出す音が響くのみであった。ただし、アスリはこの時、女の口元の動きを見逃さなかった。

女は確かにこう言ったはずである。

「ユニス。」

音にならない言葉を発した直後、女は即座に胸元を手で押さえ、さらに驚いたような表情を浮かべたが、一度川の周りを見渡すと、川下の方へと向かって走り始めた。走る姿を見る限り、特段何かの怪我をしているわけではなさそうである。そして、ユニスが射殺した敵が転がっているはずの草むらの前に差し掛かったあたりで、口に手を当て仰け反るような仕草を見せると、こちらの様子を伺ってから、焦るようにまた駆け出した。

「誰？」
「わからん。」
「今、ユニスって言ってたよね？」
「そうかな…？でも、そうかも。」

ユニスを知る女が誰なのか、ユニス自身もわかっていないようである以上、アスリも先に諸々を対岸に向けて確認したいところではあった。しかし、直前にユニスの名前を大きく呼ばなかった女の行動から、すなわち近いところでこちらを探しているかもしれない、まだ見ぬ敵に声を聞かれぬようにする意図としてアスリは汲み取り、あえてこちらから声を出すのは控えることとした。

すぐに、川を挟んだアスリたちの真向かいまで女は到達すると、鮮やかな複数の模様の入った腰布を膝上までたくし上げ、履物は履いたまま、足元に注意するように視線を落として川の中へと進んできた。

アスリは正面から改めてその女の顔を見て、思わずごくりと唾を飲み込んだ。大人びた美しい顔が誰のものなのか、アスリはもちろ

ん知る由もなかったが、表情自体には見覚えがあった。それは以前アスリの村で、ある母親が雷に打たれ命を落とした我が子の葬儀の際に見せたものと同様であった。

つまり、何よりも大切なものを失った、真の絶望の相である。

アスリは身を恥じた。この女が川辺に現れる直前、アスリ自身も絶望の淵に追いやられていた。だが、その現実にただ打ちひしがれるだけで、ユニスからの弓と矢を渡してほしいという要請に応えもしなかったばかりでなく、緊急避難すら怠たり、漫然と眼前の状況変化を傍観していただけであった。

実際のところ、この女が何を失ったのか、また幸運にも何も失わずに済んだのかは不明である。ただ、いずれにしても、今この女は絶望の中にありながらも藪を突き抜け走り、川を横切って、たった1本の藁をも掴もうと死力を尽くしていることは事実に違いない。絶望と真正面から対峙し抗う女の姿は、アスリに今自分の成すべきこととは何か強烈に問いかけており、アスリもそれに呼応するように冷静さを取り戻して、思考を張り巡らせていった。

瞬く間に、アスリはこの女がこの場からの脱出にあたっての必要な要素を、シンプルに全て持ち合わせていることに気がついた。先ほどまで、アスリは足りない人手を牛の背で埋め合わせようとして、そこに猫の手ならぬ犬の足が加わったことで結果的に牛が去ってしまったわけであるが、今度は正真正銘の、怪我もしていない人の手である。加えて、絶望の表情を伴ってわざわざこちらに近づいてきた後、急に1人で明後日の方に行ってしまうということは、まず状況的には考えられない。女にとってアスリたちが今唯一すがることの許された1本の藁であることは、アスリたちからしても同じことなのである。

アスリはこの女にティサを運んでもらうことを都合よく勝手に決めると、よく知る川の浅い位置の導線を、背上のユニスの痛めた太ももを支えられない右手で、空を切るように描いて指示していった。

対する女の方もすぐにアスリの誘導に気づいてわずかに顔を上げ、せっかく持ち上げた腰布を股のあたりまで水に浸しつつ、着実にこちらへと近寄ってきた。

「あっ？ いや、でも違うかな…。」

アスリから表情の見えない背中側のユニスは、ここで初めて何か心当たりがあったようである。ユニスは続けて、今出せるであろう最も大きい小さな声で女に問いかけた。

「ラリーヤ…！？」

川の中ほどまで差し掛かった女は目を潤ませ、大きく一度頷いた。

「シっ！ 静かにして。…あっちも黙ってるんだから、さっきのまだいるかもなんでしょ。」

アスリはラリーヤと呼ばれた女と無言で築いた防衛プロトコルに従って、一旦ユニスに注意をしてから、肩の上に頭のあるユニスにしか聞こえないように、より小さな声で確認した。

「ラリーヤって人で合ってるみたい。誰？」
「カインタのアレ。」
「…？ アレって？」
「あの、死んだ爺さんの兄さん、カインタなんよ。そん時の。」

ユニスは朦朧としているのか、それとも普段からこうなのかは分からなかったが、やはり両者の面識はあるにはあり、かつラリーヤは煙の上がっているカインタで暮らしているようである。間もなく、下半身をずぶ濡れにしたラリーヤは川を突破し、息を切らせてアス

リたちの側に到着した。

「襲われたんだよね？怪我してない？」

　間髪入れずに、アスリがラリーヤに小さく声をかけ、ラリーヤが頷くのを見ると、アスリはさらに続けた。

「今あっちで死んでる人見たと思うけど、こっちもさっき来てて。すぐここ出ないとヤバい。今からうちの村行くから、本当悪いんだけどそっちの子、ティサっていって、おんぶしてってもらえない？」

　ラリーヤは再び頷き、アスリはさらにもう1つの依頼をラリーヤにかけた。

「あ、ごめん。あと、ちょっとこのましゃがむの大変で…、そこに落ちてる弓、ついでに拾ってもらえる？」

　アスリの要望通り、ラリーヤは弓と矢筒を拾い上げ振り返ると、後ろのユニスが応じた。

「あ、それ、俺の背中に。」

　ラリーヤはユニスの願いも聞き入れて、アスリの背中の方に回り、ユニスも少し体を浮かせて、それぞれ頭の方から通してかけてやったようであった。さらに続けてラリーヤは気を利かせて槍まで拾って、アスリに手渡した。

「ごめんね、ありがとね。」

「ありがと。」

アスリとユニスが口々に礼の言葉をかけると、ラリーヤはティサの方へと向かっていった。今のアスリは、右手の槍は杖のように柄を地面につき、左手にはユニスの左太ももを携え、怪我するユニスの支えられない右太ももがだらりと垂れ下がる中、背中からユニスがずり落ちないように前傾気味の姿勢を取っていて、事情を知らない者が見れば、重い荷を背負いやや腰を曲げた、老婆とまでは言えないにしろ、かなり年齢を重ねた女のようである。

ラリーヤがティサを背負うのを待つ間、アスリは犬が現れて以来気を向けていなかった、牛たちの方をようやく振り返った。すでに牛が鼻を鳴らす音は聞こえており、数頭はまだ近いところにいることはアスリも認識していたが、散り散りになって遠くに行ってしまったものがいないかだけが懸念事項であった。幸いにして、牛たちは川辺から一定の距離を保った草のあまり生えていないところで、ある程度まとまって不満足な食事を摂っており、頭数にも問題はなかった。

このまま牛たちの方にアスリたちが移動すれば、犬もユニスに同行し、牛たちはさらに奥、アスリが来た方向から見て東の方へと向かっていくことになる。往路と同じ経路を取るのであれば、一度牛たちの南側から回りこむ必要があるのである。

だが、アスリの来た道筋は最短ではあるものの道なき道であり、すなわち道中、誰にも会わない道である。ティサとユニスの移動手段に目処のたった今、次の厳しいポイントは2人がアスリの村まで持つかということであり、不足するのは移動速度になる。やや腰を曲げてユニスを運ぶアスリは、まずそこまで早く歩くことはできないし、ラリーヤの方がティサの両太ももを抱えられる分、もう少し早くは動けるとは言え、そちらは村まで先導ができない。

一方、牛たちの導きに従って、あえてこのまま東に進めば、村から南に伸びる太い道に当たるはずである。やや遠回りになるとは言えど、アスリはここを誰かが、当然敵でない前提ではあるが、通り

かかって助力してくれることにワンチャンスを賭けることにした。

アスリの経路の設計が済んだところで、ティサを背負い終えたラリーヤもアスリの真横へと立った。

「行こっか。」

ラリーヤの方を向いてアスリは出発を宣言し、脱出の一歩目を踏み出した。異変だらけの木陰に到着してから、すでにかなり長い時間が経過したようにアスリは感じていたが、ただ広がる平野を照りつける太陽は、未だ南中の高度へと至っていなかった。

アスリたちが出発してすぐ、草むらで伏せっていた4本足も、背負われる主人を追ってアスリの足元へとやってきた。予想通り牛たちはやはり犬が嫌なのか、まだ十分に腹を満たしていないはずの中、渋々距離を取りながらまとまって東の方へと進み出した。先程牛たちが駆け出してしまったのは、犬の方も走った上に泳いでまできて驚いたからであるようで、アスリたちのペースに犬も寄り添って付いてくる限りは、急発進することもないようであった。

むしろ犬がいるおかげで牛の移動ペースも悪くなく、ユニスとティサをそれぞれ背負うアスリとラリーヤの方がついていくのに難儀するほどで、川の向こうの茂みから突然矢を放たれても届きそうのないところを通過するのに時間はかからなかった。アスリにとって鬱陶しい存在でしかなかったこの犬もパーティへの貢献をもって、やっと自らの価値を証明して見せていた。

「こっちで大丈夫？来た方と違うけど。」
「大丈夫。あっち行くと道あるから、誰か人通るかもだし。」

ユニスもアスリの進行方向を見て、このまま進んでしまって良いものか、気にかけていたようであった。川辺の木陰から離れ、追撃の危険性もだいぶ弱まり、幾分緊張の度合いも緩和してきたアスリから、今度はユニスに言葉をかけた。

「大丈夫？痛くない？」
「いや、そんなに痛くない。足が痺れてるかんじ。さっきみたく寒いのはなくなった。」

たしかに今のユニスは歯を鳴らしていなければ震えてもおらず、川で傷口を洗い流した時ほど悪い様子ではないようである。あのよくわからないペースト化した薬が、ユニスには多少なりとも効いたのであろうか。

説明をもらいたいことが山ほどあるアスリは、復調の兆しのあるユニスから行軍中の聴取を開始した。

「てか、あのさ。どういうこと？いろいろ全然わかんないんだけど。」

「俺も全然わからん。今朝、まだ暗いうちだよ。アイツら来たの。」

「え、さっきさ、おばさんがやられた、とか言ってたよね？他にもいるの？」

「いや、俺とティサとおばさんだけ。」

ユニスの説明は下手くそだった。加えてアスリの問いにほぼ一問一答の形でしか答えず、ティサとおばさんとユニスの関係性や、木陰での急襲に至るまでの経緯をアスリが知るのには、手間を要した。しかし、アスリの方も好意を抱く救世主をぞんざいには扱わず、欠けた情報を埋め合わせるように質問を組み立てていった。

ユニスの話をまとめると、このようになる。まずユニスとティサは幼馴染の同い年であり、その年齢はアスリとも同じである。２人は川の奥に広がる森の中の、北はカインタに続く道沿いに建つ隣合う2軒の家で、生まれてこの方暮らしてきた。おばさんと言うのはティサの母にあたり、そのうちの1軒でティサと住み、ユニスはもう1軒の方で1人で寝起きしているのだった。とは言いながらも、普段は食事も一緒に取るだけでなく、ユニスの捕まえてきた獲物をティサが解体・加工し、ティサの母がカインタにそれらを卸に行ったり、森で別途採集したりと分業していたそうで、実質的には同一の世帯のようであったそうである。

ユニスの両親は彼が物心つく前には他界していたが、元から1人であったわけではなく、ユニスが「爺さん」と呼んだ、同じく猟師の祖父が以前は同居していたとのことであった。しかし、その祖父も5年ほど前に亡くなって、一人娘しかいなかったティサの両親が、半ばユニスを引き取るような形となったのであった。一方、ティサの家の方でも一昨年にこちらも猟師の父を亡くしており、そこからユニスが動物由来の原料の仕入れを一手に担ってきたのだった。

昨晩も、ティサの家でいつも通り3人で夕食を摂り、自宅に戻って弓の手入れをすると、ユニスは就寝したそうである。その間、夜の森はたまに獣の鳴き声が聞こえてくる以外、静穏そのものであったそうだ。

ユニスが異変に気がついたのは、明け方前のまだ暗い時間帯であった。パチパチと何かが響く音と、開けていた窓から入り込む月によるものとは違った光で目を覚ましたユニスは、咄嗟に火災かと飛び起きた。しかし、知らない複数の男の声と、それらと言い争うようなティサの母の声から、火の気配は多くのたいまつによるものであり、火事とはまた異なった、只事ではない何かが2軒のまわりを取り囲んでいることをユニスは察知した。そして整備したばかりの弓と矢を携えるとこっそりと外に出て、裏口からティサの家の中に入り、ティサの元へと寄り添ったのであった。

だがこの時運悪く、家の表戸口を塞ぐように立っていたティサの母の肩越しに、口論の相手の皮鎧を身につけた男が、ティサの顔を照らすように、わずかにたいまつを家の中へと入れるような仕草を見せた。そこでティサの隣に辿り着いたばかりのユニスまでが、灯りに照らされてしまったのである。新たにユニスの存在を発見したところで、男は次のように言った。

「…んだよ。もう1人女の子いんじゃねーかよ。んじゃそっちも嫁にもらうわ。他何もねーし、もらっとくね~。」

要するにこの者たちは、3人が穏やかに暮らすこの場所に略奪に入り、目ぼしいものがないとわかるや、まずティサを拉致しようとしていたのである。その上、後から入ったユニスまで女子だと捉え、2人とも頂こうという魂胆に切り替えたようであった。
ティサの母はここで初めて、ユニスが中に入ってきていたことを認識し、驚きの眼差しでユニスの方を振り返ったが、男は一瞬向けられたその背中に、容赦ない言葉を続けたらしい。

「アンタ、ウザいから消えて？」

男が喋りながらやや後方に目配せした直後、ティサの母の胸からは、血塗られた槍の穂が飛び出したのであった。
すぐに、ティサの絶叫が狭い家を越え森中に広がっていった。同時にユニスの心中は強い憤りと憎しみで攪拌され、それは取り返しのつかないことをしでかしてくれた、薄ら笑いを浮かべる気色の悪い賊に対しての真っ当な防衛行動として表現された。ユニスは即座に弓を構え、戸口の男と、ティサの母を槍で突いた別の男の眉間を一射で同時に貫くと、2つの憎悪の対象は矢の勢いで彼らの後方側へと倒れたそうであった。
だが、2本の矢による反撃で事実を変えられるわけもなく、ティサの母はガクリと両膝をつき、最期の言葉を告げざるをえなかったのである。

「ティサ…、お願い、ね…。」

そう一言遺したティサの母は、そのまま戸口の前で、前のめりに突っ伏してしまった。戸口を塞いでいた敵と味方が倒れ、遮るものはティサの母の背から伸びる槍の柄だけとなり、ユニスはその奥の

光景まで目にすることができるようになった。
その先にあったのはいくら一斉射撃のできるユニスでも片付けきれない、おびただしい数のたいまつと、それらの一部がまさにこちらに向かって駆け出してこようとする姿であった。

もはやティサの母の介抱は諦めざるを得ず、ユニスはティサの手を引くと裏口から飛び出し、包囲のなかった東側の森をひたすらに突き進んだ。２人を待っていたのは後方からの矢の雨であり、それらはほとんど夜闇の中の木々によって遮られたものの、１本がティサの背中側の肩に刺さってしまったのであった。

それでもどうにか真っ暗な森を土地勘だけで移動したが、最初は痛がるだけだったティサの容態はみるみる悪化して、森の中でいつまでも潜伏することは不可能となってしまった。そして窮地に追い込まれたユニスが思い出したのが、以前アスリの一行と出会った川辺の木陰だったのである。ユニス曰く、まずあの場を目指した上で、アスリが獣駆除の後に駆けて行った方向にサバンナを進めば、アスリの住む村自体は知らなかったものの、どこかしらの街があるはずであり、そこまで逃れて助けを求めるつもりであったとのことであった。

２人は陽も登りだしてきた頃にはあの場にたどり着いたそうで、川を渡ったところで、やはりアスリが水辺に到着してまず行ったようにティサの怪我の処置を行なっていたが、そこには残念なことに、追っ手が忍び寄ってきていたのであった。ユニスはどうにか撃退はできたものの、ここで左足を射抜かれてしまった。こうなるとこれ以上弱ったティサとともに移動することも叶わず、あとは薄れる意識の中警戒を保ちつつ、誰か、というよりアスリが来るのに賭けて待っていた、というのがユニスとティサの辿った経緯であった。

「…じゃあ、ティサのママは？」

「今さ…、ティサ起きてる？」

ユニスの問いに、アスリは少し後ろをついてくるラリーヤの方を振り返り、やや横歩きのようになりながら、ラリーヤの肩に頭を預けるティサの様子を伺った。その顔はたしかに意識を失っているというより眠っているようではあったが、永遠ではないしっかりとした目覚めある眠りか、心配になるような表情でもあった。

「ティサ息してるよね？」

アスリからかかった念のための確認に、ラリーヤは大きく2回頷いた。ユニスもそれを見たようで、声のトーンを一段落とした小声でアスリに続けた。

「…おばさんは、正直ダメだと思う。俺、別に人の中身見たことないけど動物捕まえてっからさ、何となくわかんだけど…、あれ多分、心臓に入ってる。」

「マジ…。ティサにも言ったの？」

「言ってない。でもティサも俺が獲ってきたの捌いてるし、まぁ多分…。」

とんでもない輩が世の中にはいるものである。まずユニスの話の内容が正しいのであれば、と言うよりこの状況下で嘘など考えられず、説明不足や齟齬、あるいは過剰な脚色があろうにも大筋として正しいことは確定であるが、平和な森の中の小屋を圧倒的多数で略奪にかかり、平気で罪なき無関係な人を刺し殺す凶悪な集団が、ユニスが数名倒したとは言え、あの川の向こう側を現在も闊歩しているわけである。

過去これまで、アスリはここまで酷く惨たらしい公然とした犯罪行為を耳にしたことなどなく、しかもその被害者を目の前にして、強烈な怒りとやるせなさを感じていた。同時にそのぶつけようようのない感情は、特に目の前で人手によって母を失ったティサへの同

情も生み出し、結果的に全てはアスリの目から溢れんばかりの涙となって実体化した。

「ひどい…。」

アスリはそれだけ言ったあと、何も言葉をつなげることができなかった。ただ鼻をすすりながら、２人の受けた被害を心の中で見舞い、頬を流れようとする涙をこらえ、静かに歩みを進めながら、広がる平原を吹き抜ける乾いた風を受けつつ、黙っているほかなかった。その間、ユニスも余計なことは言わず、静かにアスリに身を預けていた。

しばらくかけ、行き場のない気持ちをある程度落ち着かせたところで、アスリは沈黙を自ら破って話題を変えるように、もう1名の当事者の方を改めて振り返り、再び横歩きの姿勢をとって声をかけた。

「…ユニスとティサはわかった。ラリーヤの方、どんなかんじだったの？」

今日アスリから初めて受けた「Ｈｏｗ」の形での問いかけに、ラリーヤは一瞬困ったような表情を浮かべてから、首を大きく横に振った。その、あまりに要領を得ないラリーヤの反応を目にして、アスリの脳裏には困惑や違和感よりも先に、ある不安がよぎった。

思えば先ほど出会ってからここまで、ラリーヤはただの一言も声を発していないのである。川辺の時点でアスリはラリーヤの無言を、敵にこちらの音を聞かれないようにするための配慮として受け取ってはいた。だが、現況を踏まえると、ラリーヤの発声に何らかの瑕疵が生じている可能性にしか、アスリは目を向けられなかった。

続くラリーヤの一言は、残念なことにアスリの直感の正しさを裏付けていた。

「……………。」

案の定、ラリーヤの言葉は空虚であった。いや、たしかにラリーヤは何か喋ろうと口を動かしたが、その声はアスリたちの耳に全く届かなかった。

「マジかよ…。」

アスリの肩の上から、ユニスが驚きの声を上げた。

「え、前から？」
「いや、前、もう結構前だけど。前に会った時、普通だった。え、いつから？」
「いつからって、答えらんないじゃん。」

アスリとユニスが続けるやりとりに、ラリーヤはただ小さく首を振るだけである。ラリーヤの反応を伺いながら、アスリは今一度、ラリーヤが対岸の茂みをかき分けて現れた時のことを思い返していった。あの時、ラリーヤがユニスの名前を呼ぼうとして声なき言葉を発した直後、ラリーヤは驚くような様子を見せていたのはたしかである。

「あ、でもさ…、さっき川に来るまでは、普通だったんかな？」

このアスリの問いにようやく、ラリーヤは首を縦に振った。

「え、じゃあ喉さっきの人らにやられてたり？え…、待って。喉怪

我してる？」

アスリの懸念に、ラリーヤは再び首を横に振った。声が出ないことと襲撃に、外傷的な関係はまずないようである。

ただ、参ったことになった。これでラリーヤの方で何があったのか、またユニスにティィサ、さらにティィサの母が襲われたことと、カインタから上がる数本の煙に何らかの因果があるのか、関連づけて見定められるだけに値する情報を、今すぐ詳細に知ることは難しくなってしまった。

アスリも自慢の牛乳を振る舞いながら、のんびりラリーヤとやりとりすることができるのであれば、１つずつ丁寧にラリーヤに首を縦か、横かに振るだけで答えられる質問をかけて、断片的な情報を集合化していっても良いのではある。しかし、怪我人たちを前にこんなことを言うこともできないが、前傾姿勢を取り続けながらできるだけ素早く移動しているアスリの疲労と、特に腰回りの違和感を越えた痛みは、正直に言ってかなり厳しいものがあり、今から蟹のような歩き方を続けてラリーヤの首の動きを追っていくのは、行う以前からできないものと分かりきっているのであった。

思った以上に苦しい重さのかかる前傾姿勢での横歩きを切り上げたいアスリは、あれこれ湧いてくる好奇心を抑え、まずすぐに思いついた点で気にかかるところだけ、最低限ラリーヤに問いかけることにした。

「あの、カインタに住んでんだよね？今、ユニスの言ってた、ってかさっき川で死んでた人ら！あの人たちカインタ襲ったの？」

ラリーヤの首は縦に1度振られたが、そこには同意よりも疑念が多く含まれているようであり、回答としては「わからない」に近い、

「はい」であるようであった。アスリはラリーヤの反応を見ながらもう1問、さらに続けた。

「今、家族とか、大丈夫？」

これは良くない一手であった。アスリは人の目に涙が満ちる、まさにその瞬間を目撃することとなってしまった。直後にうつむいて涙を赤茶けたサバンナの土の上に落とすラリーヤの姿は、音となって伝えられる言葉以上に、ラリーヤの家族、及びカインタに何が起こったのかをアスリに知らしめていた。絶望の淵に追いやられたラリーヤのあの表情の意味とは、すなわちこの涙であることに違いなかった。

声を伴わないラリーヤの言葉は、アスリの心の中を再びどうすることもできない感情で溢れさせていった。そしてアスリに十分すぎるほどに伝わった悲痛は、一度は留め置くことができたはずの涙を、再びアスリの頬へと押し出そうとしていた。

「ごめん。……っ。…分かった。」

鳴咽を漏らすことすらも叶わず、ただ静かに涙するラリーヤをこれ以上直視することに、アスリはもう耐えられなかった。

「…あの、声出ないと思うけど…。何かあったら、何でも良いから、すぐ教えてね。」

それだけ伝えて、アスリは鼻をすすりながら、再び牛たちが先を行く正面の方へと振り返った。これでまた、沈黙である。想像するほかないカインタの悲劇を享受し打ちひしがれるアスリはもちろん、自分で手を下さなければいけない状況を説明した時は飄々としていたユニスも、今度はただ聞くことしかできないアスリと心の位置は同じであったのか、感情的な息遣いをしていて、後方の2名のうち一方は言わずもがな当事者であり、残るもう一方は意識不明であった。

サバンナをわずか計４本の脚で移動しなければならない４名を取り囲む空気は、どこまでも続く青空の下、カラリと吹き付けてくる風とは対照的にひどくよどんでしまっていたが、声を出せるそのうち2名は黙ったままで、目論見通り東に位置する道までの距離だけは順調な消化を見せていた。

喋れるはずの前方のペアに関しては、少しどちらかに軽い気づかいがあれば、この湿っぽさを簡単にクリアする一言が放てるはずではある。しかし、人生の中で磨かれていくコミュニケーションの力がまだ高くない彼女と彼に、そこまでの配慮はできるはずもなく、

額面通りに息苦しさをそのまま受け取って、それぞれ自身に反映していた。
また黙々と進んでしばらくが経ち、ついにしびれを切らして、その気配りに先に取り組んだのはアスリの背に乗るユニスの方であった。

「あのさ…。」
「何？」
「ありがとね。もうちょっとで終わってたわ。」
ユニスの気配りははっきり言って不器用であり、先の広がりを考慮しない感謝の一言から始まった、そもそも話題の選定自体に問題のある、受け手にとっては拾いにくい1球であった。もちろん、アスリとしてもユニスは体を張って自身を救った守護神であり、かつ、今彼に抱く気持ちは圧倒的な好意しかないのである。
しかし、不用意な言葉から続けられる返答というのも、概して不用意である場合が多く、ユニスのこの出方に対して応じるアスリも、そういった積極的想いを反映するわけでもなし、重苦しい気圧に押し出されるまま、飛んできた字面に従って半ば適当に答えをつむいでいってしまっていた。

「いや、私だって。ってか、さっきもユニスが助けてくれたし。あとこの前も…。」

ここでユニスの初手の誤りが、顕在化してしまった。途中まで喋りかけたアスリは、先ほどのユニスの説明の最中では完全にスルーしていた、先日の自らの醜態が何たるかを今さら思い出し、言葉を詰まらせてしまったのである。これに続くのは目先の感情から出てくるもの以外にはなく、一瞬の間を置いて、アスリは一段と低く小

さな声でユニスに向けて囁いた。
「これから私の村着いたら、今日のことは多分話さなきゃいけなくなると思うけど、この前のことは絶対話しちゃダメ。わかってるよね？」
「…わかってる。」
「ってか、あの時、どこまで見た？」
「…っ。」
「何？」
「あの、来てから…。」
「…え？ウソでしょ、待って。最初からってこと？」
「…うん。」

アスリは今しがたまで悲劇への共感によって支配されていたことなど忘れそうなほど、激しい羞恥をぶり返してしまった。常々、もしかしたら誰かに見られているかもしれない、見られてしまったらどうしようと心のどこかで考えながら行う自慰が習慣化しているアスリにとって、初めて異性として意識する想いが生じかけている相手の盗み見の自供は、本来アスリに性的な興奮をもたらしても良いはずではある。

しかし、残念ながら自分から性を求めていない時に突如向けられる性を、好意を持つ相手からのもののみフィルタリングした上で転化し、素直に受け止められるほどアスリは大人ではなく、それとこれは全くもって別であった。今日、あの川辺に向かった原初の目的は、自らの恥ずかしい姿を再び見てもらいたいと願いながら股間の突起をまさぐることにあって、いくらさっき格好良かったユニスだからと言って勝手に好き放題覗いて良いわけでもなければ、以前の実績の報告を受けたいわけでもないのである。

アスリの勝手な理屈は、そのままきつい形でユニスの方に放り込まれていった。

「は…？サイテー。マジで。やっぱさっきあそこに置いてきちゃえば良かった。変態。」
「ごめん…。」

責められる側のユニスはアスリから顔こそ見えないものの、やはりかなりバツが悪いことは明白であり、直前までの雰囲気と打って変わって、弱い立場に追いやられてしまっていた。もちろんユニスにしても、あの日変態だったのは無防備で大胆だったアスリの方であるという、もっともな指摘をお返しする権利はあるにはある。だが、まさに今自身を救おうとして我が身を背負っている者に言えるはずもなく、理不尽に耐え、ただ謝罪するほか道はないのであった。
アスリが次に気にかかったのは、先日のアスリの行動を最初から見ていたと抜かすこのスケベが、同じく村に連れて行こうとするティサに、すでにベラベラと詳細を喧伝していないかということであった。仮にこの後ユニスは村で黙っていられても、元気になったティサからアスリの母に漏れ伝わってしまえば、待つのは剃毛と針の刑である。

「ティサにも話したの？」
「いや、言えるわけないじゃん。」
「ホントに？」
「マジで言ってない。」

この否定の言葉を、アスリはにわかに信じがたかった。先ほどユニスから川辺の木陰まで逃れてきた経緯を聞いたところでは、その前までに起こった重大な出来事にしか目が向いていなかったが、今の話を踏まえてもう一度振り返るに、どうにも腑に落ちない点が覆い隠されていることに、アスリは気づいていたのである。

「え、ってかさ、待って。私が前いたから、今日さっきのとこまで来たんだよね？　マジでティサに言ってないん？」
「いや、マジだって！」
「ありえん。ないっしょ。んじゃティサに何て説明してた？」
「いや、別に説明とかしてないし！　マジ！　ホントに！　だってもうティサもきつそうだったし、マジでまだ全然何もだから。」
何とも言えない答えである。アスリはたった今の本心を、極めて簡潔にユニスに伝えた。
「そう。言ったら殺す。」

杖のように槍を持つ右手に力をこめ、性的興奮を伴わない不快な羞恥をこらえるアスリは、正直なところ今はもうこれ以上、余計な会話を続けたくはなかった。だが、その思いを妨げるのは、この話題が俎上に上ってから始まった、背中を通して伝わってくるユニスの身に起きた新たな変化であった。

現時点の筆頭保護責任者としての務めを果たすべく、アスリはだんまりを決め込む前に最後、好意を抱きかけてはいるものの、ややその想いも下火になりかけている背に乗る変態に問いかけた。

「あとさ。」
「はい。」
「ちょっと前から、おちんちんのとこ、固くなってない？」

アスリも男子のこの部位が硬直することは、直近の1、2年ほどの朝、まだぐっすりと寝ているダカクの腰布全部の膨らみを目撃していたことから、ある程度の察しはついていた。無論、その中身を直に見たのはダカクが今よりもっと幼い頃でしかなく、アスリの目にしたどの場面も、それは柔らかな細い花のつぼみと袋に包まれた2つの球状の付随物で、硬くなった現物を直に目にしたことはなかった。ダカクの持ち物の数と、アスリが背中越しに感じ取る、背負った当初のユニスと今のその誇張を総合するに、ユニスが腫らしているのはつぼみの方に違いはない。しかし、アスリに今そのものがどのようになっているのかなど具体的に想像することはできなかったし、そもそもなぜ、どういった時にそのようになるのかなど、過去考えたことはなかったのである。

無知のアスリは直前までの怒りを伴いながらも、主に矢毒による

影響の考慮に、よくわからない男子の生態への好奇心も交え、何も答えないユニスに問いを重ねた。

「大丈夫？痛くなってきちゃった？」
「いや…、あの…。」
「何？」
「この前のこと、思い出してたら…。」
「ん…？どゆこと？」
「知らんっ！」
「シッ！声大っきい。」

アスリはユニスの大きくなりかけた声が、後ろをついてくるラリーヤの耳に入らないように制すと、さらに一段と声のトーンを落としてから続けた。

「えっ…。何、じゃあさ、私の裸思い出して、おちんちん固くしてるの？」
「いや…、あの、そうじゃなくて…。」

ユニスはアスリが臆せず発する言葉に、明らかに動揺しているようだった。

「そうじゃなくて、って何？そうじゃん、だって。」
「あの、いや、あと…。」
「あと何？」
「あの…今、アスリ、いいにおいして…。」

今度のアスリには怒りよりも、何ともいいがたい、心に響くような恥ずかしさが先行した。言い淀んだユニスは確実に自らの痴態のことを思い出しており、それによってユニスは固く自己主張した挙

句、まさか匂いまで嗅ぎ取って、その思いを高めているのである。
ここに至ってアスリは、背に当てられる硬直の原因として考えられる理由を、初めて正しく認識した。同時に、迂闊にも見惚れてしまった相手から自分自身に向けられた、性の意識を改めて実感したのであった。その感覚は即座にアスリの頬に限らず、体全体の褐色の皮膚に熱を帯びさせていき、なぜだかこの変態に言葉だけでないさらなる給餌、すなわち先日の獣処理の直前と同じような究極的な自己開示を、次は覗きでない形によって実験的にユニスに与えてみたいという興味でアスリの心を満たしていってしまった。
だが、今のこの状況とアスリの高いプライドは全くそれを許さず、アスリは刹那の感情による支配からはすぐに脱し、ここは冷静にあくまで怒りの感情に重きを置いて、まずは本心とは真正面向かい側の行動となる、ユニスを罵倒することに専念した。
「えっ…？何、マジどゆこと？何で私の匂いでおちんちん固くなんの？」
「いや…、あの。ごめん…。」
直前と同じく、ユニスはアスリの発する、１つのキーワードに弱いようである。
「マジ信じらんない！やっぱ変態なんだね。もうここに置いてくよ？」
「ごめん…。」
ユニスは今や針のむしろならぬ、ハリネズミの背中の上に乗せられているも同然である。当然であるが、アスリにユニスを実際背から降ろす現実的な選択肢など皆無であり、ユニスもまた安寧であるのは確実であった。それどころか、アスリは口ではユニスを罵りながらも、かつて羞恥に焼け焦がされ丸まってしまった罰を受

ける前のラダンを撫でてやった時のような、ゾクゾクと疼く気持ちまで、内心では抱きつつあるのである。
だが、弱者たる今のユニスには、自らの立ち位置を理解するほどの余裕もなければ、当然のようにアスリの怪しげな興奮など知る由もなく、状況を打破しうる言葉は何かないか考えるしかないのであった。

ユニスにとってはまた違った意味も加わっていたが、この場の全員にとって幸いであったのは、アスリの賭けたわずかな可能性が実現しようとする直前であることを、まさにこの時、ユニスが研ぎ澄ました感覚から得られた情報をもとに汲み取ったことであった。

「あっ！ごめん、待って！」
「何？変態。」
「いや、あっち！何か来てる！」
「嘘つき。来ないし。」
「いや、すぐ来るって！ほらっ！」

肩の上から伸ばされたユニスの右手が指す、進行方向に対して南側のあたりを改めてアスリは注目したが、相変わらず何かが来るような気配は皆無である。しかし、一面に広がる赤茶色のサバンナの砂の中、そのあたりに一筋の線状に、うっすらと地面の色が変わったところがあり、その色合いの部分はさらに北の方に向かって伸びているのは確かであった。正直なところ、アスリは川辺からどの程度まで進めば目指そうとする太い道に出られるのか把握していなかったが、ユニスによる何か来るという予言はまず置いておいても、どうやらその道まではもう近いところまで来られたようであった。

「道…、あっ！」

ここでようやく、アスリの方もユニスが一足早く感づいた何者かの存在を現認した。それは、南から北に向かって道と思われる地面の線をまっすぐと辿る、馬に跨り駆ける誰かであった。

布で巻いた何かを背負う馬上の人物の姿には、遠目ではあったがアスリに見覚えがあった。あれはアスリの村から他の村々に、早荷を届ける仕事をしている青年である。アスリはその青年の名前も知らなければ、話したこともなかったが、村の中で荷物を背負って馬を連れ歩くところは、幾度か目撃したことがあった。

「あれうちの村の人かも！」

「マジか！」

「ねぇっ！！こっち来てぇっ！！！！！」

青年はアスリの上げる救難信号にすぐに気づいたようで、馬を止め向きを変えさせると一呼吸の間見やってから、アスリたちの方へと一直線に駆け寄ってきた。

「おーい！誰だぁ？どしたー？」

「ねぇっ！！！お願いっ！！！こっち来てえぇぇっ！！！」

「ちょぉっと待っててなー！」

さすがに馬での移動は早く、あっという間に青年はアスリのすぐ目の前までやってくると、アスリがまだ何も伝えていないうちから険しい表情を浮かべ、馬を降り近づいてきた。

「…あれ？牛飼いの狩人さんチの娘さんよね？ラダンだっけか？」

「そう！だけどラダンはお姉ちゃんで、私アスリ。」

「アスリか。あと他の子は全然わからんけど、誰さんとこ？」

「あとはみんなうちの村じゃなくて…。」

「えっ？どういうこと？うーわ、ケガしてんじゃん。ちょっとまず、

そこにその2人下そか。」

そう言いながら青年はアスリの後ろにまわり、ユニスを支えたようだった。

「手離して良い？」
「良いよ。持ってっから。」
「んじゃ下ろすよ、あっ、痛てってってってっ！」

やっとアスリはユニスの体重から解放されたが、やや前傾を保ち、左手側だけでユニスがずり落ちないように支え背負い続けてきたアスリの腰からは、筋肉痛とはまた異なったひどい疲労による悲鳴が上がった。腰砕けとはまさにこのことで、アスリはそのまままっすぐ前の方に倒れるように両手と両膝を地面につけ、へたりこんでしまい、まず頭だけを後方に向けて、地面に降ろされ座っているユニスの様子を確認した。

川からの道中の、それなりの長さのおしゃべりが示すように、ユニスは今日最初に見たときよりかは顔の血色は良く、幾分調子は回復しているようである。ただ、左ふくらはぎの矢傷は紫色になって腫れあがっており、早急な治療が必要であることに変わりはなかった。アスリが背中越しに受けたハラスメントの根源は、青年を見かけて地面に下りるまでの間に主張をやめてしまったのか、見る限り腰布に不自然な膨らみは見られなかった。

ユニスに続いて、青年の介助を受けながらラリーヤの背から降ろされようとするティサの方も、顔色は多少良くなったようではある。しかし、依然として薄く開かれているようにも閉じているようにも見える目から、意識があるのかないのかは判別できず、青年に身をゆだねて地面に下りると、そのまま怪我する左側の方の肩を上にして横向きに寝かされた。青年はティサの頬を手の甲で1度優しくなでた後、直ちに手首をとって脈を取り出した。

ぐったりしているティサを心配そうに見つめるラリーヤは、相変わらず一言も発していないことを除けば、はたから見る限り健康そうであり、腰に限界を迎えかけているアスリよりかは体力的に余裕がありそうではある。とは言え、アスリはカインタからあの川辺まででどれほどの距離があるのか知らなかったが、大変な目に遭ってそこまで走り続けた上に、着いた途端に重症患者の運搬を任されたのであるから、こちらもこちらで見たところ以上に精神と肉体が疲労にまみれているに違いなかった。

「大分調子悪そうだけど、息と脈はとりあえず大丈夫か。」

下された診断に、アスリが安堵したのは束の間であった。青年は今度は犬に舐められるユニスの方に回って、ティサにしたのと同じように手首を掴むと、直後にアスリの不安を増幅させる結果をつぶやいた。

「えっ…。こっちの方が弱っててんね。」

青年はさらに続けた。

「アスリだよね？あとそっちの子、２人は大丈夫なん？」
「私は疲れただけで大丈夫。その子は声出ないけど、怪我はしてないみたい。」

アスリが腰を押さえながら起き上がって青年の方を振り返ると、ラリーヤもアスリの答えに静かに頷いていた。青年は改めてアスリの方を向き、深刻な表情で問いを重ねた。

「何あったん？」
「襲われた！毒ついた矢で！」
「えっ！？毒？」
「そう！元々その２人、あっちの方の森で住んでて大勢に襲われて、逃げてきたみたいで、私が２人見つけて。で、私着いた時もう怪我してたんだけど、追っかけてきたやつにまたやられちゃって、その後この子も逃げてきて。」
「えっ、んじゃアスリも狙われたん？」
「そう！」
「追っかけてきたのは？」
「殺した、男２人。」

会話に加わった少し高目とは言え男子のものでしかないユニスの声に、青年はやや驚いたようにユニスを見下ろした。

「あれ？男の子だったん？」
「そう、です…。あとはみんな女。」

やはり誰の目にも女子にしか見えないユニスを、アスリは茶化してやりたかったが、脈も弱っていると聞いた上に今の話題の中、余計な言葉を挟むことはできなかった。青年は青年でユニスが男子で

あったことへの驚きよりも、アスリから聞いたここに至る経緯の方への注目が勝っていたようで、ユニスの手首を静かに離すと、地面の方に目をやりながら首の後ろに手をやって、何か考え事をするような素振りを見せていた。

「マジか。いや、これはやべぇな…。」
「…一応ね、効くかわかんないけど、薬は飲んでもらった。」
「ん?薬?なんか持ってたん?」
「これ。もう空だけど。」

アスリは足元の槍に結びつけた布袋の中から、空になった薬入れを取り出し、青年の方に差し出した。青年もそれを受け取り、中を覗いて少し臭いを嗅ぐと言葉を続けた。

「これさ、一旦預かっとくわ。診てもらう時に、これ飲ませてあるって言っとく。んで、とりあえず先に怪我してる2人、馬で連れてくわ。アスリとそっちのお姉ちゃんはさ、悪りいけど後から来てくんない?2人連れてったら、また戻ってくっから。」
「わかった。大丈夫、私は牛さんも連れてかないとだし。」

アスリの返事を青年は受けると、背負っていた布に巻かれた荷物を下ろして、ユニスの両腕を自分の胸の前にまわし、怪我した両足に触れもせずユニスを背負い上げ、さすが荷物を運ぶのが生業なだけはあり、そのままいとも簡単に馬の上へと跨った。アスリとラリーヤも無言のうちになすべきことを察し、横たわるティサをゆっくり起こすと、2人でティサの肩にそれぞれ腕をまわして、馬上の青年の下へと連れて行った。

「後ろの姉ちゃん、じゃなくて兄ちゃん、腕は大丈夫そうよね?」
「大丈夫。」

「んじゃそのまましっかり俺に掴まってて。そっちの子は俺の前に乗せる、そうそう、良いよ。」

馬上から差し出された青年の腕に、アスリとラリーヤがティサを預ければ、こちらもひょいと引き上げられ、ティサは青年に相対し片腕で抱きかかえられる形となった。

「その荷物だけはお願いだ。中身重くないから。あの道出たら、まっすぐ村まで外れないでな。」
「わかった。」
「じゃ、お先。」

一言残して、青年は馬の手綱をティサを抱えていない方の腕で引くと、馬は勢いよく駆け出し、少し離れた所にいる牛たちの注目を集めながら、アスリとラリーヤからすぐに離れ小さくなっていった。もちろん直後にユニスの犬も青年たちの追尾を開始し、どうにも馬と犬では馬に速さで敵うわけもなかったが、根気強さは確かなものであるようで、やがて同じく小さな点となった。

アスリはしばし遠くなっていく馬と、後に続く犬の姿を、ただただ何も考えずに見送っていた。搬送された怪我人2名の容態への心配はありながらも、ひとまず彼らの保護という大仕事は片付きアスリの手から離れたわけで、ここに至ってようやく張りつめ続けてきた意識に余裕が生まれたのであった。
ふと、アスリが我に返り真横を見れば、すでにラリーヤは青年の置いていった荷物を背負って、アスリを待っているかのようであった。

「あ、荷物！ごめんね、ありがとう。こっちも行こっか。」

槍を拾い上げたアスリは、軽くラリーヤに目配せをしてから、少し先のちょうど道の真上のあたりで、サバンナにわずかに生えた枯草を食んで時間を潰す牛たちの方へと向かっていった。

牛たちと合流した後は、声の出せないラリーヤとお喋りするわけにもいかず、牛の出す音以外に大した音のない、アスリにとっていつもの旅の帰路と変わらない時間が、ひたすらに続いていった。いや、毎日と違う点は確かにあった。気を抜くことができない緊急搬送が終わった今、アスリにいつもと異なって感じているのは、純粋なひどい疲労と倦怠感である。

この間、本当であればユニスから「カインタのアレ」としか聞かされていないラリーヤとユニスの関係や、ティサとの面識はあったのか、ラリーヤに心的負荷のかからない範囲でカインタで何があったか等、アスリとしても聞いておきたい事柄は山のようにあったにはあった。しかし、「ＹＥＳ」か「ＮＯ」かで答えられるような質問をラリーヤに投げかけ続けるほどの元気は、もはやアスリに残されていなかったし、また仮にそうできたとしても、受けて立つ側のラリーヤもかなり消耗しているはずであり、答えを強いるのは酷である。故に２人は疲れを十二分に味わいながら、黙って足を動かす以外に術はないのである。

後ろ首に照りつける太陽も今日一番高い位置を過ぎて、早しばらくが経った頃、アスリとラリーヤに牛の一行は、道沿いにおそらく以前は建物であったと思われる、崩れかけた砂レンガの壁の建つ場所へと差し掛かった。普段、この道に沿ってまっすぐ歩いてきたことのなかったアスリは、特段気にすることもなくそのまま通り過ぎようとしたが、少し行ったところで、はたと足を止めた。

壁の裏に、井戸があった。

「…枯れてるかな。」

何の気なしに井戸に近づき、アスリが井戸のすぐ横に置かれた紐につながれた釜を投げ込むと、地面の下の方から水が跳ね返るような音が響いた。

「あっ！ここ水あんじゃーん！」

嬉々として水をくみ上げ釜を井戸沿いに置けば、我先にとまず近づいてくるのは牛たちである。アスリが2度、3度と井戸から水をくみ上げると、牛たちは順々に喉を鳴らしていき、最後にやっとアスリとラリーヤもくみたての水へとありついた。見る限り井戸の周りはここまで歩いてきた道と同じく、何もないサバンナの地面よりも踏み固められているようで、どうやらこの廃墟のそばの井戸は、道を通る者たちの休憩ポイントとなっているようである。

アスリは喉を潤すラリーヤに、今2人が最も欲している提案を投げかけた。

「ちょっとここで休憩してこっか。」

水を飲み終えたラリーヤも断るわけはなく、当然頷いた。先にアスリは、布袋の中からいつものように葉でくるんだ弁当を取り出し、日陰になっている崩れかけの壁に寄りかかるようにして地面に座ると、ラリーヤを手招きしようとした。

ところが、である。座り込んだアスリを待っていたのは、限界であった。ここまでどうにか自分を厳しく律し、ユニスをおかしな体勢で背負ったせいで痛む腰にムチを打ち続けてきたが、足腰の力を抜いた瞬間、アスリの全身は今日の全ての疲労で覆われれてしまったのである。今や食欲よりも裏表ない意味の休息を優先したいアスリは、手にした弁当を放り出して、倒れこむように日陰に横になっ

た。

「ごめん、超疲れたから、ちょっとだけこうしてるね。それ、私作ったごはん入ってるから。なんか今あんまりお腹減ってないから、全部食べちゃって良いよ…。」

そう一言ラリーヤに告げると、アスリの意識はすぐさま遠のいていった。

すぐに帰ろう

まどろみの中のアスリが次に得た五感は、遠くの方から耳に入るアスリの名を呼ぶ声と、肩を軽く数度叩く揺れであった。ハッとしたアスリがガバリと起き上がり、まず叩かれた肩の方を見ると、横にはアスリの槍を手にしたラリーヤが壁沿いに座って、指をさしている。示された真正面の方を見れば、北に続く道の奥から、数頭の馬に乗った何人かがこちらに向かって駆けてきているところであった。

「アスリー！！！」

その声と、先頭を走る1頭に跨るシルエットは、完全に母のものである。まさか母が馬に乗って直接迎えに来るとは思ってもいなかったアスリは驚きを抱きつつも、両手を大きく上げてゆっくりと振り、呼びかけに応じていった。母の横を走るのはアスリの村を統べる族長のようであり、その後ろは先ほどのティサとユニスを連れて行った青年で、それ以外は各々武器を手にした村の男たちであった。
瞬く間にアスリとラリーヤの前までやってきた母は馬を降りると、目に涙を浮かべながらアスリのもとに駆け寄り、アスリを包み込むように固く抱きしめた。

「アスリ！アスリ！」
「ママッ！」
「生きてて良かった…！本当に良かった！何もないっては聞いてたけど、遠くから見えたら、最初倒れてるみたいだったから、まさか、と思って…。」
「大丈夫、疲れて寝てただけ。」

母は少しの間、アスリの無事を噛みしめているようであったが、2度3度鼻をすすりあげると身を離して、改めてアスリとラリーヤを見つめ直した。

「アスリ、本当に怪我してない？」
「うん、大丈夫！」
「あと、その子は…？」
「そっちも大丈夫。声出ないけど。あっ！」
「何？」
「牛さんが！」

そこまで話したところで、ラリーヤは右手を自分の胸に当て、わずかに微笑んだ。

「…あっ、ラリーヤ、もしかして牛さんも見ててくれたの？」

アスリの問いに、ラリーヤは静かに頷いた。

「ありがとう！」
「大変だったのに、アスリだけじゃなくて牛さんまで見てくれてたの？ありがとう。ラリーヤっていうの？声のほかは大丈夫？本当に怪我はない？」

アスリを見つめる時と同じ、慈しみの眼を向けられたラリーヤは、母に向かって再び1度首を縦に振った。

「ありがとうね。今度ちゃんとお礼するから。」

安否の確認と礼の約束を終えた母は、族長の方を振り返った。

「それじゃもう、アスリとその子、ラリーヤは帰りで良いよね？」
「あぁ、うん。帰って休んどきな。あぁ、んでも１つだけ。」

いつの間にか馬を降り、アスリにラリーヤ、母の３者を取り囲むようにして集まって、母子の会話を眺めていた男たちの輪の中から、引き締まった体に真っ黒な顔の族長が１歩進み出ると、アスリを気遣うように見下ろししつつ、続けた。

「矢、やられたとこは、これまっすぐ行って、途中曲がるで良いんよね？どんな奴らか、俺らはそいつら見とかんと。」
「そう、まっすぐ行って途中で右！でも曲がるとこ…。」

何も目印のないサバンナのど真ん中の、どこで曲がれば良いと伝えれば良いか、アスリが言いよどむと、戻ってきた先ほどの青年がそれを察したのか助け舟を出してきた。

「あっ、俺がアスリたち拾った場所よね？」
「そう！そこから今度は私が歩いてきた方行けば着く！川の側に木が１本生えてて、下に石があるとこにいる時、矢飛んできた。」
「打ってきたやつらは？」

再び族長が、アスリに問いかけた。

「その川の向こうっかわから来た。先に村に行った子も矢打ってくれたから、川渡ると死んでると思う。」
「わかった。じゃ、お前案内して。アスリたちは村戻っときな。おい、イケメン！一応アスリたちと一緒についてってって。何も来ねぇと思うけど。もし何か来たら頼んだ。」

族長の呼ぶイケメンとは、ここ最近村の女たちの間でかなり人気であるとの噂が立っている、まだ成人したばかりの、また別の青年のことである。牛とサバンナにしか出かけないアスリの耳にさえ、その確かな評判は届いてはいたが、顔の彫りが深いだけの彼のどこが良いのかアスリには全く理解できず、はっきり言ってやや年配であるとは言え、イケメンよりもその横にいる族長の方がずっと男前であるようにアスリは感じていた。そのイケメンがアスリたちの護衛の担当に抜擢されたのは、おそらく彼が最も若く、つまりこの先の川辺の危険に巻き込ませまいという、荒っぽそうな見た目とは裏腹に配慮の人たる族長の、瞬時の気配りによるものであるようである。

「了解、それじゃぁ…アスリ、馬一緒に乗ろか？」

イケメンはアスリすら勘づいた族長の気遣いには全く気付いていないようで、ただ力のこもったような目つきで、アスリに声をかけた。

「いや、私牛さんたち連れてかなきゃだし。」
「アスリ疲れてるでしょ？乗ってったら？牛さんはママが…、ごめん、ママの乗ってきたお馬さん乗ってってもらえる？」
「えっ…、私が自分で乗るの！？私が牛さん見るから、歩きで良いよ。」

正直なところ、アスリは馬に乗りたくはなかった。たしかにアスリは、ロマドウの村の他の子どもたちと同じく、数年前に乗馬の教習自体は受けている。したがって、馬の基本的な扱い方の知識だけでなく、経験もあるにはある。だが、アスリがその上で乗馬をためらうのは、それ以来1度も馬の背の上に乗ったことがないことに他ならない。

母の次の問いは、母がアスリの躊躇を全て見通していることを示していた。
「ずっと乗ってなかったから、怖いんでしょ？」
「…うん。」
「大丈夫。昔乗ってた時、上手だったじゃない？」
「え、だってさ、もうずっと前だよ？何年前だろ。」
「ママも最初のお姉さんお腹にできてからお馬さんなんて乗ってなかったけど、さっき乗れたし大丈夫！疲れてるんだから、乗っときなさい。」

そう言われては拒否を続けることもできず、乗り気でないアスリは痛めた腰をいたわりながらその場に立ち上がると、母の乗ってきた馬の方に向かい、日々接する牛と同じように穏やかな目つきをした馬の首元を、まず軽く撫でてやった。そして、恐る恐る革でできたあぶみへと足をかけ、やや腰布を広げながら、ぎこちない動きで馬の背に跨り、久方ぶりの手綱を手にしたのであった。アスリは手始めに、少ない経験を頼りに馬を両足で挟んだり体重を移動させたりして、アスリたちが来た方向を向いていた馬を村の方へと向き直させていった。

「やっぱり上手じゃない！」
「大丈夫かな…。」

その場に立ち上がって褒める母の声とは裏腹に、アスリには不安しかなかったが、馬の方はたどたどしい手綱さばきにもしっかりと応えてくれるようであった。

「これ、どこのお馬さんなの？」
「俺んとこの。ここの馬、ほとんどうちのよ。そいつ速いから、飛

ばせっぞ。」

無論、安全運転を誓うアスリに母や牛の歩く速度を上回るつもりは毛頭なく、アスリは族長の言葉に、ただ苦笑いを浮かべるしかなかった。馬を操縦することに手一杯のアスリは、これ以上余計な手間が増えぬよう、馬上からラリーヤに向けて先手を打った。

「ラリーヤ、イケメンさんの後ろ乗ってったら？」

ラリーヤもアスリの勧めに頷いて槍を持って立ち上がり、早荷職の青年の方を向いて、近くに置いた預かっていた荷物を指さすと、青年も手を挙げ応じた。

「槍は私持ってくから。」

母の一言通りに、ラリーヤはアスリの槍を母に手渡し、静かにイケメンの元へと近寄っていった。

「よし、じゃあ俺たちも行く！アスリ、イケメンがその子に手出さんように見といて！」
「んな、何もしねぇって！」

族長の冗談にアスリ含む周囲は小さく沸いたが、当事者のラリーヤは何とも言えないような表情を浮かべていた。母はラリーヤの心中を気遣って、軽く族長を諫めた。

「こら、そんなこと言ったらラリーヤ困っちゃうじゃない。さっ、私たちも行こう。」

母がそう言って、その他の各位もそれぞれ乗ってきた馬の元へと

向かい始めて、アスリは進行方向に頭を向けた時であった。
「ったっ！」
「おっ、大丈夫か！？」
突然の驚きがこめられた母と周りの声に続いて、ドサリと何かが崩れるような音がアスリの後方から耳に入った。

「あっ！やばいっ！」

アスリが振り返るよりも早く、誰かの次の一言が飛んだ。一瞬だけ見えたアスリの後方の景色は、何もないのに転んだのか片膝をつき目を大きく見開く母と、馬の方尻にできた生傷に、地面に転がろうとする穂先に血のついたアスリの槍であった。
さらにその次にサバンナに響いたのは、アスリの乗る馬の雄叫びであり、馬上のアスリに与えられたのは急な加速と、髪を突然後ろに引かれたかのような大きな力である。

「えっ！ちょっ！！！！」
「アスリ！！！！」
「掴まれ！！！しっかり！！！」
絶叫するアスリの背後からは他にも何やら声がかかっていたが、馬の蹄が地面を蹴る音が響く中、すぐにそれらは遠く小さくなっていった。

馬上のアスリは、先ほどまでつい寝込んでしまうほどに感じていた疲労など忘れており、そこには生きた心地など全くなかった。今や、馬から振り落とされないようにすることだけが目下の命題である。ただ続くサバンナの赤茶色の土の景色の中を、ひたすら一直線に進む馬は、アスリに乗馬の楽しみなど微塵も与えなかった。
　馬の走りは適当としか言いようのないものであり、本来進むべき道からはかなり逸れてしまってはいたが、乗馬直後にアスリが村の方角に馬を方向転換させていたことで、方向性自体だけはおおよそ正しく進むことができたことは幸いであった。結局、馬の暴走は村の近くまで続き、その辺りまで来たところで、あまり変化のない風景の中にも何か見覚えがあったのか、馬の興奮も幾分収まって、ようやくアスリが試み続けてきた制御もまともに効果するようになったのであった。
　長かったのか短かったかも判別できない時間のうちに、アスリは急速に老け込んでしまったかのような感覚を抱きながらも、馬を決して刺激しないように注意しつつ村の南側の方へとゆっくり回って村に入ると、自宅の方へと向かっていった。

「牛飼いの狩人さんとこの娘だ！戻ってきた！」
「おい！矢が刺さったんだ？大丈夫かよ？」

　通りすがる数名から心配そうにかけられる声に、アスリはただ黙って手を軽く挙げることしかできなかった。すでに尾ひれが付いて伝わったと思われるアスリの情報は、今のアスリの弱々しい姿でさらに補強されるに違いなかったが、手綱を握るその手は未だに震えていて、声を出して二言三言答えることすら億劫であり、今更なが

らラリーヤがなぜ突然声が出なくなってしまったのか、アスリはある程度察したのであった。
　やっと自宅が見えてきたところで、さらにアスリが目にしたものは、家の前に何やらできている人だかりであり、多くは老人や幼子を連れた女たちであった。その近くには馬が1頭、井戸の横に生える木のところに停められていた。
　アスリがぼんやり眺めるよりも早く、そのうちの数名は馬に乗るアスリに気がついたようで、アスリに向けて駆け出してきた。そこには、やや遅れてラダンに、イケメンとラリーヤまでも続いてきていた。どうやらアスリが馬に村からやや離れたところに連れていかれているうちに、イケメンとラリーヤの方が先に到着していたようであった。

「アスリ！大丈夫！？」
「ごめん、すぐに追いかけてきたんけど、家まで来ても見つからんくて…。途中追い抜いちゃってたんかな。」

　ラダンとイケメンから口々に声をかけられると、アスリはやっと安堵し、張り詰めていた緊張は瞬く間に解け、同時に強張らせ続けてきた体中の筋肉から力を失わせていった。直後、アスリは自分でも何をしようとしたのか理解できないまま、馬の背から滑るようにして仰け反る体勢となった。

「あっ！！！」
「危ないっ！！！」

　ここで咄嗟に馬の真横に滑り込むようにして、落馬するアスリを受け止めたのは、倒れるアスリ側に最も近いイケメンではなく、ラリーヤの方である。抱きかかえられるアスリは、極度の疲労で朦朧とする中、むしろ身を引こうとさえしたイケメンの今の行動を見る

に、イケメンと呼ばれるに値するのはラリーヤの方であると、しみじみと感じていた。今のアスリにとって救いであるのは、今日はろくに飲食していないことである。仮にもいつもと同じだけ弁当を食べ水分を摂っていたら、おそらくはアスリはこのタイミングで嘔吐に加え失禁をし、村中の面々にさらなる醜態を晒すところであった。どうでも良いことにしか頭が回っていないアスリを尻目に、慌てるのはそれを見ていた周りの者たちである。

「ちょっと！大丈夫！？怪我してない？」
「えっ！マジで大丈夫なの！？痛かったり苦しかったりしてない？」

答える元気も残されていないアスリは、ただ1回頷いた。アスリをキャッチしたラリーヤ本人以上に、アスリはラリーヤのような仕草をとることしかできないでいた。

「ねぇ！お馬さんのお尻見て！切られてる！」
「えっ、何！じゃあやられたの！？」
「ってかどうしてママ帰ってこないの！？あと牛さんもいないし！」
「えっ！本当にどういうこと！」

イケメンとラリーヤはさておき、特にアスリを覗き込むラダンに、こちらも一報を聞いて駆けつけたようである、それぞれ赤子を抱えた年上の2人の姉にその幼い姪、さらにその他のギャラリーにしてみれば、まだ先着の2人から状況をしっかりと聞いていないのか、混乱を極める一方であった。

「いや、君らのお母さんは大丈夫よ。今、牛連れてこっち来てるはず。」
「そんなん早く言ってよ！」
「ってかそれなら、ママにまずアスリが着いたって言ってきてよ。」

「待って！ママも途中で襲われてないかな？」
「たしかに！じゃあ早く行ってきて！」
「わかった、わかった。すぐ行くから。」

姉たちによる矢継ぎ早の連想に基づいた問いに押し出されるように、イケメンは井戸の近くの馬の方へと向かっていった。ラリーヤもラダンに目で合図しアスリを引き渡すと、なぜかイケメンの後をついていった。そして注目はアスリに対して集まる中、誰にも引き留められぬまま、さも当然のようにイケメンに続いて同じ馬に跨り、2人はアスリたちの側から離れていったのであった。

そこからアスリに待っていたのは、若い女たちの質問の雨と、しっかりと状況も聞いていないであろう老人たちからの適当なアドバイスの山である。誰かの結婚に出生と死しか主だった出来事のないロマドウの村に、降ってわいた目新しいニュースは、耳にした者の大半にいち早くその詳細を知りたいという欲求を焚き付け、目先の仕事を脇に置きやすい者たちから、アスリの自宅の前にまで足を運ばせてしまっているのである。だが、ただ次々に浴びせられるそれらに、アスリは真摯に向き合うことなどもちろんできず、ラダンの手を借りて起き上がると肩を組んで、さらに姉2人にも囲われながら、ふらつく足で自宅の方へと向かっていったのであった。

口に含む直前の、肉と芋の混ぜ物のような状態となってしまったアスリの家の前の状況に対して、最も先に弱音を上げたのは2人の姉たちの抱く赤子であり、他の家の母親が連れてきていた赤子もそれにどんどん続いていった。ラダンを除く姉たちは戸口の前まで来たところで立ち止まり、喧騒に堪え切れず大声で泣き出す我が子をあやしながら後ろを振り向くと、赤子に負けず劣らず騒々しくあれこれ聞き出す野次馬たちに、それぞれ何やら適当な回答を始めていったのであった。そのタイミングを見計らって、ラダンはごくわずかに玄関の戸を開けるとアスリを押し込みながら自分も中へと入り

込み、アスリを寝床まで運び込んでいった。
　あとのアスリは、ただの抜け殻である。ラダンに支えられて寝床までたどり着くと、履物も脱がず突っ伏すように目を見開いたまま横になり、動転してしまった気を落ち着けるほかなかった。しかし、安静にしようにも馬上で揉まれたアスリの三半規管は未だに攪拌されてぐるぐると回っているようで、空っぽの胃袋は無駄な嘔吐を試みようとしつつあった。
「…っ、んうっ…。ぶぉおえっ！」
「うっわ！汚なっ！え、ちょっとアスリ、本当に大丈夫？あっ、でも出てないね。本当に怪我ないいんだよね？巫女様たちのとこ行く？」
　すぐ横に腰掛けアスリの履物を脱ぎにかかっていたラダンは、アスリが空嘔吐するのを見ると、その手を背中の方に回して、心配を伝えるような手つきでさすり始めた。
「…大丈夫。馬と…、ママのせいだから。」
「馬とママ？」
「そ…、ぶぉおえっ！」
「うわっ！ちょっと、マジでおじさんみたい！きったなっ！えっ、やっぱり出る？えっ、待って、ちょっとここでゲェしちゃダメだよ？ペッしても良いように何か持ってこよっか？それとも裏からちょっとお外行く？」
「いじゃ、食べてないから、お昼。大丈夫。ぎもぢわるいだけ。…んぅいっ。」
　ラダンもそれ以上はアスリを気遣ってか何も言わず、えずくアスリの側に座ったまま、過度な刺激のないようにただ背中に手を置くのみであった。外の会見は主役が屋内に引っ込んだせいか、ややト

ーンは下がってきており、それに合わせて赤子の泣き声も収まるには収まったが、依然としてやれどうだこうだの声は途切れることなく、姉たちもまたいい加減な推理を加えて、それらをいなしていっているようであった。

気分の悪いアスリが外のやり取りを耳にしながら、心配しながら慣れない馬を駆ってまでして、アスリの様子を直接見に来た母の、唯一、そもそもの今の吐き気の原因を作ったことに対してだけ恨みを募らせている時であった。

騒音のボリュームが再び上がった後、それを打ち消すように家中に響いたのは、戸口を慌ただしく開ける音であった。

血相を変えて飛び込んできたのは父であり、続いたのは同行していたダカクであって、履物もそのまま、父はアスリの転がる寝床に一直線にやってくると、アスリをきつく抱きしめ突如号泣し、同じくダカクもその背に抱きついて、父の脇のあたりに鼻をうずめていってしまった。吐き気に支配されているアスリにとって、このような急激な動きは害以外の何ものでもないストレスの根源であったが、かつて見たことのない父が嗚咽し弱くなって安堵する姿は、結果的にアスリの頭中をなぜか、川辺で弱るティサやユニスを見つけた直後のように、今は冷静に周囲を見定めねばならないという、意味なき強迫観念で充満させていった。

やや時の流れが遅くなったアスリの目に入るのは、開け放たれてしまった戸から家の中を覗き込む、村の方々から集まった人々である。ただ、生ける人間の意識下にゆっくり進む時間など長く続くはずもなく、次に訪れるのは時間の感じ方を変化させたことによる代償であって、一時の後にアスリに残されたのは、再びの吐き気に加えた猛烈な倦怠感であった。

そこからアスリを抱きしめたままの父から続くのは、怪我はないかの確認を起点とする一連の質疑応答である。熱い抱擁に胃液をかけてしまう恐れを感じ始めたアスリは、2、3言発したあたりで父とダカクをやや引き離して距離をとると、気分が悪い上に疲れてぼんやりとする頭で、投げかけられる問いに生返事のような回答をしていった。

そうこうしているうちに、外の騒音は嵐の日の風音のように強弱を変化させ、それが大きくなると、まずアスリの苦労をかさ増しさせることに寄与した母が、次に姉たちの伴侶である若い夫たちが、

その嫁いだ先の両親に夫の兄弟姉妹たち、さらにその妻に子、もはやどの縁なのかもわからない男女、最後にアスリの家の半男の双子の兄たちが順々に駆けつけたのであった。この際、繰り返されるのは父から聞かれたものと同じような質問であり、さて込み入ったところを話そうかというところで、何度も頭から大丈夫か、怪我はないかの下りへと戻され、生返事だったアスリの返答は、回を重ねるごとにその適当さを増していった。

一方で、戸から覗き込んでいる野次馬も含めた周囲のひそひそと喋りあう密度は、アスリが淡泊になるほど濃くなっていって、体に傷1つないものの、徐々に弱々しい回答しかしなくなっていくアスリに、実はひどい心的な外傷がもたらされているものとして認識されている気配をアスリは感じていた。しかし、それを覆すほど元気に振る舞うほどの余力はアスリになく、延々と続く問答に身を任せているほかなかったのであった。

高窓から差し込む陽はやや闇をまといながら今のアスリと同じほどにか弱くなって、それでも1つの蝋燭に火も点さないままの非日常から、ここに集まる全ての者を現実へと引き戻したのは、アスリへの問いと、ギャラリーたちの抑えた声のお喋りが途切れ、場に一瞬の静寂が広がった時であった。

「…ママ、お腹減った。もう帰ろうよ。」

いつまでも興味津々の年配者を尻目に、すでに退屈しか感じていなかったどこかの幼子が発した一言は、この場の面々を我に帰らせるには十分な威力があった。最初にその子の母親が立ち去ろうとすると、アスリの母に2人の姉、家中の親戚含め、各家の炊事担当者たちは、やっと夕暮れを実感したのか、突如そわそわと動き出したのであった。このまま残っていてもバツが悪くなるのは老人たちであることは、本人たちもわかっていたようであり、こちらもその動

きに乗るように、去り際家の中のアスリをそれぞれちらちら覗き込むと、ぞろぞろと散っていった。

　アスリの母はせっかくだからと、集まった親戚たちには夕飯を振る舞う宣言も行ったが、誰も遠慮して家の外の流れに任せて帰宅しようとしていた。ただ、アスリの父が何やらニヤニヤとしながらすっと家の裏手に出て、どぶろくの入った大きな甕を抱えて戻ってくれば、男たちだけは父と同じような笑みを浮かべて、では少しだけなどと言って、これもまた父が即座に用意した置きたいまつを取って外へと出ていき、夕闇を迎えようとするアスリの家の前で酒盛りを始めてしまった。今の父の行動を見る限り、このタイミングで酒を飲みだすということは、捌くものがない、つまり今日の猟はボウズであったということであり、実質的には何も成し遂げていないのに褒美だけはしっかりもらうのと変わらないのである。しかし、こうなってはもう、今日はうだつの上がらなったであろう父にしろ、また同じようにやや早いうちからアスリの家に駆け付けて、同じく仕事の方はどうであったのか不明である親戚の男たちにしろ、酒がしっかりまわるまでテコでも動くことのないのは自明で、女たちは呆れた表情でアスリの母を中心に調理に取り掛かるしかないのであった。

　母や上の姉たちが作業に当たれば、連れてこられた赤子の面倒を見る役はラダンに回り、わんぱくざかりの相手をするのはダカクである。では、双子の兄たちはと言えば、彼ら2人は昔から変わり者なのである。やはりこの時も親族の団らんに逆行して我が道を優先し、一番後に来たのにも関わらず、急に来たから何かやり残したと言って、このタイミングで今の自分たちの暮らす場へと戻っていってしまった。

　横になったまま残るアスリに声をかけたのは唯一、屋外で早くもほろ酔いの父で、それはただこっちに来いというだけの、アスリの武勇伝を肴にしたい思惑が見え透いた要請でしかなかったが、それ

に気づいた調理場にいた母からすぐに、いかにアスリが昼に疲れたのかの説教を食らっていたのであった。この説教をする側の人物も、アスリの今日1日の疲れの半分とまではいかないにしても、だいたい3分の1程度は今の気だるさに寄与しているのである。いずれにしても、ここでやっと夕食ができあがるまでの間、アスリは1人で落ち着いて、肉体と精神を休めるという意味での休息が、衆目の公認のもとに取れる状態となった。

寝床で横になるアスリの耳に入るのは、いつになく賑やかにアスリの自宅の内外で飛び交う声である。外では、父をはじめ男たちが家の前で馬鹿な話をして酒を飲んで笑い、その横でダカクたちはもう暗いというのにおかしな遊びを始めようとしている。調理場の方では何かを切ったり煮たり焼いたりする音とともに、母や姉に親戚の女性陣がおしゃべりしており、ラダンもアスリの近くで赤子にほほえましいことを囁いている。それらはたしかに1つずつに注意を払ってしまえば騒々しいように思えるものもあったが、先ほどまでの無制限で無軌道な混乱と好奇心によってもたらされたものとは明らかに異なり、随分と穏やかな響きを併せ持って、疲れ切った今のアスリに程よい耳当たりの癒しとなり、くすんでしまっていた気分を次第に落ち着かせていった。

誰かのふかすタバコの煙と、料理ができあがりゆく香りは、異なる色の染料を川に流したかのように入り混じって高窓の方へと抜けていき、暗がりにはいつの間にか灯された燭台からの柔らかな光だけが、横になったアスリの足先を照らしていた。

何とも大変な1日である。アスリは静かに目を閉じると、たった1日で一生分ほどにも感じられるほどあった難局を乗り切って帰宅できた無事を、安寧を得ながら改めて実感した。崩れかけのレンガの側で午睡を挟んだせいか、そこに睡魔は介在せず、代わりに閉じた瞼にふいに浮かんだのは、背に乗る前の身を挺してアスリを守っ

た、格好良いユニスの表情である。
しかしながら、ユニスの顔に続いてアスリの胸中に広がるのは、その後の病状に対しての不安でしかなかった。果たして、ユニスの容態はどうなったのか、彼だけでなくティサも大丈夫なのか、続報は今のところ全くない。あのような怪我であったり、重い病であったりを患えば、大概は村人を診療する役目を兼ねている巫女たちと、それらを統べる族長の妻である聖女の元へと運び込まれるはずであり、おそらく2人と、場合によっては声の出ないラリーヤも、そこで看病を受けていることは、アスリもある程度は想像がついていた。
ただ、その先どうかは、アスリにアスリの母、また今の様子を見る限り不足なく揃っているようである牛たちが帰ってきたことを喜び、のんきに酒盛りまで初めてしまった大人たちに聞いても、おそらくはっきりした答えはないのである。では、今からユニスたちを見に行ったとして、現地でおかしな古い薬を飲ませて傷を流した以外、ほとんど手を尽くせなかったアスリに何か手伝えることはなく、むしろ薄暗くなった今、痛む腰をさすりつつ出向いたところで、家族や親族に無用な心配をかけるだけであった。アスリに残されたできることと言えば祈りであるが、結局それすらも彼らに対しての直接的な良き介入がしえないことと同義であり、アスリがこれ以上考えたところで、ここまでにも進んでしまった世界線を切り替えることはできないのである。

無力を感じるアスリは、無意味であることを理解しているというのに、ただ悶々と今日の朝からここまでに起こった出来事を振り返っていくほかなかった。だがその最中、意識混濁でギリギリのティサの表情や、紫色に腫れあがったユニスの足の傷を思い出しても、今の精根ともにくたびれたアスリはその記憶をスキップせざるを得ず、結果的にアスリにとって都合の良いところだけが、ハイライトされる形で2点、残ったのであった。

そのうちの１つは、今の思考の堂々巡りを始めたきっかけたる、これまで誰に対しても感じたことのなかった、異性として見たユニスの存在への意識である。

そして残るもう１つは、まだ背中に押し当て続けられているかのように感じる、硬直して熱い、ユニスの男児としての自己主張なのである。

ごめんね、ユニス

アスリはクズである。

いや、これは見方によって、たとえば今日の状況判断や行動だけに限らず、日々勤勉に牛たちの世話をし、くだけているとは言え誰に対しても明るく理知的に接するところを見れば、否である。それはアスリ本人の自己評価もそうであって、別にアスリは決して自分のことを卑下していることもなく、むしろ他の牛飼いを営む家の娘より格段に優秀であると内心は思っているし、この生活を卒業していった姉たちよりも良くやれている自負が、アスリにはあるのである。

しかし、この切り取った断面の中にあって、アスリが自身に下す評決は、クズである。初めて恋心を抱いた相手は今、怪我に加えて毒まで盛られ、アスリの想像もつかないような苦しみに苛まれているはずであり、その幼馴染も同じ身の上で、加えて母の死の悲しみに暮れているのである。さらにもう1名は、何が起こったのかはわからないが、あの絶望の表情である。

だが、アスリが今、彼らに対して思う不安や心配、どうか命を取り留めて元気になってほしい、声が出るようになってほしいという思いや願いの水面下には、そもそもアスリがユニスと初めて出会った時に暴露されてしまって以来溜めに溜めてきた、性に対してのほとばしるほどの欲求が控えており、せっかく忘れかけていたそれは、日中に仕掛けられた背中越しの導火線によって、暴発の恐れが生じてしまっているのである。

さらにである。ユニスの馬鹿は、あの初回を最初から全部見てい

たとのたまった上で股間を怒張させて、いくら不可抗力とは言え背中にこすりつけ続けただけでなく、自分の髪の匂いまでこっそり嗅いでいたわけである。それは明らかにアスリに向けられた、本能から湧き上がる欲求である。

すでにアスリはこの前牛を獣に襲われかけて救われた時、何らかのときめきを覚えていたのは確かであった。だが、その時点ではまだ同じ性を持つ者同士の中での、ある種の憧れに近いような感情でしかなかったのであった。

ところが、先方が男子であることを背中を通してまで嫌という程に認識してしまった今日はもう、ユニスが好きになってしまっていることを自分が分かってしまっているのであって、彼の矛先がいくらいやらしいものであったとしても、それが自分に向けられた興味であることが嬉しくてしょうがないのである。だからもうこれ以上、余計なことは考えたくないし、もっと、もっと、心行くまで考えたいのである。

アスリの頭は、まもなく破裂を迎えるところまで高ぶってしまっていた。少女のような可愛らしい見た目に、自分を守った時のあの透き通った凛々しい瞳、秘所と対面し紅潮する頬にやり場に困った伏し目、その時の記憶を頼りにして、その上匂いを嗅ぐという変態的な行動、その帰結としての勃興から伝わってくる今の自分も抱く同様の本能、ギャップあるそれらをつなぎ合わせ、高まり過ぎたユニスへの想いを鎮めるためにアスリが自分に対して成しえる処方は、たった1つしかなかった。

アスリは蠟燭の灯から外れた、家中全体が見渡せるところに頭を位置させ、体を横向きにすると、ごく自然に股間へと右手を置きやった。馬の背によって、はみ出したところがヒリヒリとするほどに擦れてしまった今日、腰布につく汚れなどこれ以上気にする必要はなく、万が一にも後から何らかの指摘が入ったところで、満足な回

答自体はすぐに用意できるわけであって、むしろ今はチャンスである。
ただ、今、おそらくユニスはティサとともに毒と傷に苦しみ、辛い思いをしているに違いない。しかも死角にいるとは言えども、近くに大勢の親戚がいるのである。

「っ……！」

繰り返すが、アスリはクズである。
ゆっくりと動かした中指から身体中に広がったのは、約2年ぶりに感じる腰布越しの郷愁であり、触れるその真下には、脳の欠片がそのまま納められているかのようであった。孤独で甘美な刺激には、痛いほどに感じるクズたる自分の罪悪感に背徳感が、これでもかというほどにつけ合わされ、再び吐き気すら込み上げてきそうであった。

すぐにアスリは、慣れ親しんだはずのこの行為の中に、毛色の違う感覚が潜んでいることに勘づいた。普段からアスリは平然と禁忌を破っては、勝手に母に謝罪して盛り上がっているわけであって、今のそれもクズの度合いがいつにも増して強いとは言え、根本的に方向性は同じではある。
では、何が違うかと言えば、好いた人物の性を思い描いて行う休息の、特別を通り越した格別さである。そしてこの違いはアスリの優しい指の往復の度に研ぎ澄まされていき、究極的に背中に当てられた固さの根源はあの時どうなっていたのか、もしもあの時腰布をめくりあげてしまったら、どんなものが出てきたのか、どうにかしてそれを見ることはできないか、見たい、触れたい、自分も嗅いでみたいと、少ない手数の中であっという間に深化していった。

（ごめんね、ユニス…。）

毒で苦しむユニスに、今できる唯一の看病である謝罪を心の中でつぶやき、あとわずかな指の往復で、アスリが約束された最大の切なさを受け取ろうかという時であった。光の主役が星と蝋燭へと完全に交代し、いつの間にかほとんどの女たちも酒盛りに加わったのか、聞こえてくるのはコトコトと何かを煮込む音と外のおしゃべりだけとなった中、黙々と励むアスリの床側につけられた右耳は、遠くで地面を蹴るような、ごく小さな音を捉えた。

嫌な音である。あれは今日の昼すぎ、必死で食らいつく馬上で散々耳にした、テンポだけは良い蹄の音に違いない。これは重大な妨害であり、自己の内面でユニスの固槍と向き合うアスリにとって、これは重大な妨害であり、せっかくのアスリの集中は闖入者によって掻き乱され、音が大きくなるのとともに徐々に阻害されていった。当初は無視を決め込んだものの、アスリはついに耐えかねて一旦手を止め、蹄音が過ぎされるのを待とうとしたが、音の方は大きくなる一方である。

やがて音はアスリの家の軒先まで到達し、直後に父が始めた会話は、アスリの一時の中断は中止として固定化したことを告げていた。

「おっ！族長！」
「おう！アスリは？」
「中、ちょっと待ってな。アスリー！こっち来れる？」

続いて、すでに大分酔っ払ったと思しき父は戸口から顔を出すと、アスリを休ませていることなどすっかり忘れているのか、ニコニコと上機嫌に手招きをした。

台無しである。もうあとほんの少しのところで、アスリは満足して朗らかになれたはずなのである。吹き出す直前まで高まっていた

アスリのマグマは、大きさはそのままに即座にいらだちを越えて怒りへと転化し、生殺しにされてしまった熱い包皮の内側の感覚とともに、胸中では何かの球が激しく跳ね回っているかのようなむかつきが、やり場なく暴れ始めてしまった。

しかし、もうこうなってしまっては疲れているからと言ってこの場に留まっても、結局冒頭の高める段からやり直しであり、そもそも自然に身を任せるように進めてきたアプローチを、さぁ、始めましょうと頭だけで理解して仕切り直すことなどできないのである。

流す涙などどこにもなかったが、泣く泣くとはまさにこのことである。アスリはまだ痛む腰をさすりつつ、ゆっくり起き上がると、自分でも気づかないうちに脱がされていた履物をつっかけて、腰をいたわりながら戸口へと向かっていったのであった。

もてなせば、施される

アスリの不機嫌は、鏡など見ていないにも関わらず、自分でも分かるほどに顔に出ていた。ただ、父の声に合わせて調理場から様子を覗きにきた母の目には、腰を労わる姿も相まってか、アスリの休息がまだまだ全く十分でないように映ったようだった。

「ちょっと！酔っ払いは、もう！アスリに無理させないでよ。」
「あ、ごめん、アスリ。俺らがそっち行くか？」
「いや、大丈夫。そろそろごはんなら起きなきゃだし。」

アスリが表に出れば、族長は乗ってきた馬を井戸の近くのアカシアにつなぎ終えたところであった。

「悪りぃね、疲れてっとこ！戻ってから先、1回あの子らのとこ行ったんけど、全然ダメで。アスリに話聞きに来たんよ。」

あの子ら、つまりユニスたちがダメとはどういうことか、気になるアスリが問おうとするよりも先に族長に声をかけたのは、戸口のあたりで柔和な仁王立ちをする母であった。

「さっきあの後、大丈夫だった？うちでごはん食べてきなさいよ。」
「いやいや！いいからいいから！アスリにちょっと話聞くだけ、すぐ帰っからさ。」
「族長、いいから一杯やってけよ。」
「そうだよ、俺らもご馳走になってんだから。」

大人というものは誘惑に簡単に負けてしまうものであり、疲れた

ところに酔って楽しそうな人物が手渡そうとしてくる酒ほど、断ることが難しいものはないのである。ここでも、この短い間のいつ注いだのかわからない、なみなみとつがれた父の突き出す1杯のどぶろくは、ロマドウを率いる屈強な族長を容易に屈服させた。

「…では、少しだけ。」

悪そうな表情の奥から、隠しきれない喜びがにじみ出てしまっている族長は車座に加わると、真っ先に酒を受け取り、歩き疲れた牛が水を飲むかのように喉を鳴らして、あっという間にまず1杯目を飲み干したのだった。その様子を満足そうに父と親戚たちは眺めると、皆々族長に元の目的を忘れさせるかのごとく、すぐに次の1杯を勧めていった。

「さ、ごはんもできたから、みんな持ってって！」

酔っ払いの絡み合いを尻目に母が号令をかければ、反応するのは酒を飲まない腹ペコたちと、まだしっかりと理性を保つ女たちである。まもなく、手に布を巻きつけた上の姉たちが2人で湯気の立ち上る雑穀の乳粥が入った大釜を酒飲みたちの側に運んでくると、今度はラダンがそれを器によそっていき、輪に加わった子どもたちに女たちに酔っ払いにと、次々と器はリレーされていったのであった。

先ほど欲求不満の塊のようになってしまったアスリも、さすがに昼食も食べずに朝から過ごしてしまった上で、目の前にうまそうな食事を供されては、食べることにしか頭が回らないのである。帰宅後の吐き気などもはや一片も残っていないアスリは、熱々の器を受け取り父の隣に陣取ると、早速小さな木べらに粥の具に入っていた干し肉をのせて、口へと運んでいった。だが案の定、直前まで煮えたぎっていた肉は熱いことこの上なく、アスリはやけどしそうになりながら、あまりよく噛みもせずに肉をどうにか飲み込み、2口目

からはごく少量ずつ、本当は一気に掻き込みたい欲求をここでも我慢しながら食べ進めるしかないのであった。

「パパたちの明日の分、取っといてあげるね。」

突如、ラダンから声のかかったアスリにダカクは目の前の空腹感と、父については加えて目の前の酒とで、誰も全く明日の昼食のことになど頭が回っていなかったが、最後に自分の分をよそい終えたラダンは、傍に用意していた食事を包むための大きな葉を広げて、大きなへらで汁気を切るようにしてから、続けて粥を取り分けていった。一見すると気を利かせたようにも思えるものの、その取り分けるための葉の数を見るに、自分が土産として持ち帰る分も、しっかりと確保しようとしているようである。

姉妹とは言え、アスリはラダンに軽く会釈をして、一口分の粥を木べらにのせると、その一口を口に含めるようになるまでしばし冷ます間、少し前に抱いた疑問を、数杯飲んで早くも完成形に近づき、わざわざここまで赴いた当初の目的も見失いつつある族長に投げかけることにした。アスリは場の馬鹿な話が途切れるのをしばし待って、やや静まった一瞬を見計らい族長に声をかけた。

「ねぇ、あのさ、族長さん。さっきのあの子らダメって、どういうこと？」

「んぁ、そうそう！あの子らね！ヤべェんよ。しゃべれん子はしゃべれんだけで大丈夫だけど、あと2人。もう今夜が山だわ！」

「えっ…、どういうこと…？」

「あれ、髪短い方、あっちがまだマシね。んで足やってる長い方。あれ2発もらってたろ？持たねぇかも。」

「マジで…。」

絶句である。アスリは先ほど能天気にもクズな行為で満足しようとしていたが、実際のところユニスにこっそりと謝罪さえすれば許されるということもないほど、2人の容態は深刻であるようである。

「あれさ、うちのカミさん言ってんけど、おそらく南の方の魚の肝で作った毒だってよ。」

「えっ、魚で？」

「そう、この辺りにはいねぇの。麻痺すんだってさ。効いてくっと。だからあの子らそんなに痛がんなかったろうし、ぼーっとしてたろ？」

たしかにその通りであり、ユニスは両足に怪我を負っていたにも関わらず、股間を固くする思考や行動を起こすだけの余裕はあった。今になって改めて考えてみれば、自分の両足に1本ずつ矢を受けただけでなく、幼馴染の母の悲痛な最期や、命からがら逃げてきて声もでなくなってしまった知人なのか友人なのかの姿を目にして、なお性的な衝動を抱くというのもおかしな話であって、仮にも当事者が旺盛なアスリであったとしても、そこまでの気にならないはずである。ただ、傷まわりが麻痺して頭までぼんやりしてしまっているのであれば、ユニスがどうしようもない変態であるという前提に立った上で、一応話の筋自体は通る。

一方で気になるのは、あの時点ではユニスにも回復の兆しがあったわけで、族長が言うように生命の危機に瀕しているようには思えなかったことである。

「えっ、でも私が見たときは、最初よりちょっと良くなってた気がしたけど…。」

「そう！それよ！アスリ！」

族長はここで飲みかけの杯を地面に敷かれた布の上に置き、おも

むろに大きく手を1度叩くと、改めてアスリの方に向き直った。
「あれね、薬飲ましてくれたろ？あれが効いてんだってよ。あれ早めに飲ましてなかったら、もっと早くぼーっとして、んで終わりよ。今カミさんたちも、あれと似たようなの飲ませてるんよ。」
「そうなの！それならじゃあ！」
「いやね、それがでも2人ともまぁ、もらった量が多い。特に髪長い方。んで頭や心臓に効いてんのかな？村まで着いた時はもう意識なし。心臓も多分麻痺して弱ってんだろう、ここが勝負だぁな。」
「マジ…。」

話しながら父からまた酒の入った杯を受け取った族長は、ここで一旦その前の杯を空けてしまうと、頬を赤らめたまま真顔になって、さらにアスリへの言葉を続けた。

「でもアスリ、立派よ。いや、マジで。あの子らはうちのカミさんと巫女さんらが見てっから、心配すんな。そこまで持ってこれんかったら、こうはなっとらんからね。まだ半女にもなっとらんのに、立派。うちの息子らなら1人で逃げて帰ってきたろうよ。」
「ありがとう、ホントはもっといろいろやってあげたかったんだけど…。」
「十分、十分。アスリが気づかんかったら、あの子らもそうだけど、危ない連中も野放しよ。そうだ、良く頑張ったんだ、今日乗った馬やろうか？早かったろ？」
「えっ、馬は…。」
「えっ！族長！マジで！？馬くれんの！？」
「嘘！？ホントに！？」

たじろぐアスリなど全く意に介さず、先走る喜びに瞳が馬のようなつぶらさになってしまったのは、父と母である。

「お父ちゃんとお母ちゃんの方が乗り気ね！」

族長が声を上げて笑うと、一同は笑いの渦に包まれたが、父と母だけは笑いながらも何か諦めたのか、白目の面積も元の広さに落ち着いたようであった。

「まぁ、ホントのこと言うと、ちょうど他の家に立て続けに何頭か売ったばっかで、今頭数少ないんよね。でも、馬やるぐらい立派。だからそのうちね、そのうち。最近生まれたのが1頭、大っきくなったらな。…で、だ。本題。」

族長は飲み切ったばかりであるにも関わらず、今の続く一言で再び目を燦燦と輝かせている父から、またもや酒を注いでもらって一口含むと振り返り、後ろから赤茶色に汚れた布にくるまれた大き目の何かを取り出して膝の上へと載せ、結び目をほどいていった。

「これよ、やってきたやつらのよな？」

その布越しの形状からして、まずないことはわかってはいたが、布の色からして人の頭でも出てこないか、アスリは内心不安であった。幸いにして、紐解かれた布の中から族長が取り出したものは、アスリがあの木陰で見た敵が身に着けていた、革製の胸当てであった。

「そう、これ着けてたと思う。」

「まだ生きてんだったら奴らに直接聞くか思ってたんけど、川着いたらハイエナか？何匹もいてもうバラしてて、こんなんぐらいよ、残ってたんは。んでアスリ、頭から全部話してくれんか？」

族長の一言から、胸当てを包んでいた布がグロテスクに変色してしまっていた理由をアスリは汲み取ることはできたが、食事中にあえてそこを深堀りして、せっかくどこかに行った吐き気を再燃させる気はさらさらなく、アスリに向けられた依頼の部分だけしか聞かなかったことにして、改めて今日の出来事を木陰でティサとユニスを発見したところから語り始めた。帰宅直後は次々にやってくる家族や親戚たちによって、いくら話せども全く進まなかった説明も、今度ばかりはしっかりと込み入ったところまで間もなく到達し、アスリは時折、木べらにのせた粥を口に含みながら、また次の一口をすくい取って冷ましつつ、自分が見たもの、ユニスから聞いたものを順々に展開していった。

もちろん、ユニスとの前日譚や私念、背中を通して感じ取った固さなど、余計な要素に触れるわけはないのである。しかし、そこにアスリが省略した脇道が隠されていることに気が付く者などいるはずもなく、初めて聞かされる仔細を前に、たまに合いの手は挙がれ

ども、場の誰もが茶々を入れずにじっくりとアスリの話に耳を傾けていた。

ティサとユニスが森から抜け出したところまで話したところで、酒を飲むか、アスリと同じように粥を冷ましながら少量ずつ食べ進めるかしながら、滅多に起こりえない出来事からもたらされた情報というご馳走に舌鼓を打つ車座の面々で、最初に質問を挟んだのは族長である。

「んじゃよ、あの川の向こうの森ん中にもやられたんがいるんな？」
「そう、ティサのママがいるはず。ユニスはもうダメだろうって言ってたけど…。」
「まぁ、今日はもう真っ暗で無理、明日また森の方も見に行ってみっか。」

さすがに酒は十分なのか、族長は一呼吸をつく代わりにキセルを一度ふかして、さらにアスリに続けた。

「ところで、そのラリーヤってのは、どういう関係なん？」
「私も全然聞ききれなかったんだけど、ユニスのおじいさん系の知り合い？そんなのみたいで、もう何年も会ってなかったのかな？」
「ラリーヤは後から川に出てきたんよな？」
「そう、カインタから逃げてきたみたい。」

瞬時、キセルを手にした族長が、酔った中に不思議そうな表情を浮かべた。

「…ん？逃げてきた？」
「カインタも襲われたみたいで、ラリーヤの家族も…。」
「えっ？カインタ襲われたぁ？」

「ラリーヤに同じ人たちがカインタも襲ったのか聞いたら、なんか微妙なかんじで首振ってて…。あ、でも私が川着いた時は、カインタの方から煙が何本か上がってたよ。」
「はっ？煙？何本も！？アスリが見たんか！？」

たらふくの酒と煙草で満足気であった族長の表情は、みるみるうちに硬いものへと変わっていった。

「いや、そりゃ…。見たから話してんじゃん。」
「…いや、あの、そのさ、悪りいんだけどさ、そのアスリの言ってることは信じるよ？でもアスリが助けて来た子らの話、そっちはアスリが聞いた話だろ？だから、嘘ってことはねぇかもしれんけどさ、家のまわり囲まれただのはさ、そん時焦ってたかもしんねぇし、本当の数よりよっぽど多く見えたかもしれんし、だいたい、そんな大勢でどうしたって森ん中の小屋なんか襲うん？んだから、せいぜい川辺で食われちまってたやつらの他に、まぁいても４、５人くらいと思ったんよ。」

あれほど飲んだというのに、瞬く間に酒が体の中で切れてしまったのか、族長はここでまた杯に手を伸ばし、注がれてそのままだった一杯を一気に流し込んだ。

「んでも、アスリが自分で煙見たってんじゃ話が違う。どんなにキツくても、さすがに煙は見えんよな。火もねぇのに、煙はどうたらってことよ。だからヤベェのがうじゃうじゃいて、そのラリーヤってのも逃げてきて、んでもってカインタが大勢でやられたってことだ。」

族長の独特の優しい語り口調によって、角が立ってしまうようなことはなかったが、アスリからすれば誠意をこめて伝えてきたこと

は、ここまで族長としてはどうやら話半分程度のレベル感でしか受け止められていなかったようである。しかし、ようやくカインタから上がった煙の下りによって、事実の規模はしっかりと族長をはじめ大人たちの元にも届いた様子であった。現に、アスリの横に座る赤ら顔の父は、いつにない真剣な眼差しで、杯に入ったどぶろくをただただ凝視していた。

その父も見つめていた酒を一気に飲み干すと、ここで言葉を挟んだ。

「いやいや、カインタってまぁ小さいけど、十何家族か、そんくらいはいるんよね？だからそんだけの頭数いるってことか…。」

「そ、南から来て、森で調子乗って何人かはやられたけど、目的はカインタってことよ。んでちょっかいかけた奴らのほかはカインタ行ったんしょ。」

「物盗りか？でも、カインタなんて、何かあるんか？」

「まぁ、一応は物も目当てだろ？んでも、その、ティサか、あとユニス、その子らさらおうとしたんだろ？人さらいもあるんよな。」

父はまた酒をあおって、ため息をつくかのようにキセルを大きくふかした後、さらに一言続けた。

「いや、カインタから近いとこって、次…。」

ここに至るまで、アスリはただ今日起こった出来事として完了しているものを、素直に伝えてきただけであった。しかし、もはや今のこの場には先ほどまでのような娯楽の一環として情報を摂取するような雰囲気はなく、アスリは大人たちの目線がすでにその先の危険な可能性へと向かっていることを察したのであった。

「これ、今から男たちみんな集まってもらうしかないわ。」

「同感だ。まだどこの家も起きてんだろ。」
「ここじゃさすがに悪りいから、俺ん家にみんな来てくれんか。」
「わかった、じゃみんなで手分けして呼び行くぞ。」

酔っ払いたちは各々、まだやや熱いであろう乳粥を一気にかきこんで、それを酒で流し込み立ち上がると、赤らめた顔の中にどうにか男らしさを取り戻したようであった。

「んじゃ、ご馳走様！アスリもお疲れさん！ありがとな！」

へべれけになっていてもおかしくないはずの族長は、礼の言葉を1つ残すと、何事もなかったかのようにアカシアの木につなぎとめていた馬に跨り、たいまつを片手に颯爽と夜闇の中へと消えていった。

「じゃあ、俺たちも行くからね。ご馳走様、ありがとうね。」
「俺も行ってくるわ。」
「いっぱい飲んだんだから気をつけてね。」

族長の後に続くように、他の男たちもたいまつと槍を手に、父だけはなぜか真面目な表情にどぶろくの入った甕を抱えて、こちらはそれぞれふらつく足取りで方々へと散っていった。残ったアスリの姉や嫁ぎ先の女性陣に子どもたちも、先に出て行った男たちの不穏な空気を同じく感じ取っているようであり、各自残りをたいらげて器に杯、木べらを手早くまとめると、アスリの母に礼を述べて去っていったのであった。気づけばラダンもそこにはおらず、一刻も早く他の半女や半男たちに大ニュースを提供したかったのか、このタイミングに合わせて紛れて帰ってしまったようであった。

先ほどまでここで大集合の宴会が開かれていたのが嘘のように静

まれば、アスリにもたらされるのは不安でしかないわけであり、無言のダカクもおそらくアスリと近い感情を抱いているに違いないのである。アスリは先ほどのやり取りの中で導かれた重大な村の懸念を、そのまま母へと投げかけた。

「ママ、もしかしてうちの村もカインタみたいになるの…？」

「大丈夫。パパや族長さんたちが何とかしてくれるから。」

母からかけられる声には優しさと落着きが満ちていたが、ただ燃える置きたいまつを見つめてキセルをふかす母も、その言葉を自分にも振り向けることで、自身の安定を図ろうとしているようであった。カインタから煙が上がってしまった今日、まさかとは言え、次はロマドウからいつ煙が上がってもおかしくはないのである。

「あとはママが片付けるから、食べたらアスリとダカクは先に寝ときなさい。」

アスリもそれ以上質問を重ねることもせず、急激に味気を失ってしまった粥を流し込むと、ダカクと代わるがわる井戸で顔や口、手足を適当に流し、引き続きぼんやりと残った酒を飲みながらキセルをくわえて思慮に耽る母を外に残して屋内へと引き上げ、さっと寝巻に着替えると寝床に転がったのであった。

朝から晩まで1日中、気が遠くなるほどの出来事で溢れた今日の最後、アスリの胸中では不安だけが大きくクローズアップされていた。しかし、過去ないほどに感じる異常なまでの疲労感は、アスリにあれやこれやと考えさせることを許さず、加えるならユニスのどうしようもなさも想起させることももちろんなく、アスリはあっという間に夢すら見る余地もない、深い眠りの中へと落ちていった。

翌朝の、まだ夜に近い真っ暗な時間にアスリがまず耳にしたのは、いつになく甲高く響くダカクの声である。

「大丈夫だから！俺も連れてってよ！」

ハッと反応したアスリが直後に感じたのは、前日酷使した腰ではなく、まさかの左上腕の痛みである。若きアスリは一晩で大半の疲れを回復させていたが、昨日ユニスの太ももをおかしな姿勢で支え続けた左腕だけは、どうにも疲労が取り切れなかったのであった。やや勢いをつけつつ主に右半身を使って体を起こせば、祭の時にしか着ない帷子のように編み込まれた上着と派手な腰布をまとって、目の周りに白い戦化粧まで施した父が、ダカクと向き合っているところであった。

「ダメ。今日はどこの家も大人の男だけ。兄ちゃんたちらも行かんよ。」

「いいじゃん！いつも一緒に行くじゃん！」

「今日は危ねんだよ。最悪、俺もやられるかもわからんし。」

寝起きから父の物騒な発言を耳にしたアスリは、ここで割って入った。

「えっ？パパやられるかもって、どういうこと？」

「あっ、アスリおはよう。いや、結局今日さ、男ら総出でカインタと森ん中、様子見に行くことになったんよ。」

「マジ！？…大丈夫なの？」

「それが大丈夫かを今から見に行くんだ。こっちの村まで来たら大事だし、誰か残ってたら助けんとね。カインタに元々うちの村の出の男も、何人か住んでんだ、父ちゃんの知り合いも。」

父の言う通り、昨晩のあの雰囲気の後、このまま何もせずただ事態を放置することは村の安全保障上まず許されないことであり、カインタが果たしてどうなっているのか確認するというのは至極真っ当な判断で、実際カインタには逃れてきたラリーヤのほかにも、父の言う知り合い含め、まだ誰かが助けを求めて残っている可能性もあるにはある。だが、残っているのは善良な住民ではなく、その場に居座り続けている煙を上げた原因を作った張本人たちであることも十分に考えられるわけであって、それは今、近い未来に対しての警戒が、アスリが祭の時以外に見たことのない、戦いの装いを身にまとっている父の姿となって表現されているのである。

「だから父ちゃんだけじゃ危ないよ！」
「いい加減にしなさい！ダカク行っても、パパの足手まといになるでしょ！」

アスリが目覚める前から続いているようである堂々巡りに、ついに母も耐えかねたのか、濡れた手を布でぬぐいながら、調理場の方から騒ぎ立てるダカクの傍へと近づいてきた。母の方は今見る限りいつもと同じ恰好ではあるが、その目元にはくっきりと隈が出ており、危険な場に向かわなければならない父に対しての不安が、はっきりと顔に出てしまっていた。

「そんなことないよ！」
「ダカク、ありがたいんだけどさ…。」

父は中腰となってダカクと目線を合わせると、優しく言葉をつづ

けた。

「今日はさ、さっきから言った通り、結構危ねぇんだ。もしかすると俺も怪我したり、場合によっちゃ死ぬかもしれん。でもそん時、ダカクまで同じようになったら、誰が母ちゃんにアスリを守るんだ？兄ちゃんらが大人になれば帰ってくるんだろうけど、それまで2人とも毎日牛乳飲むしかなくなんぞ？」

「でも…！」

「今日はいいんだ。そうだ、帰ってきたら、久しぶりに一緒に野営に行くか？」

「マジで！？だったら今度は長く行きたい！海まで行きたい！」

「…マジか。まぁ、わかった。じゃあ、今日は母ちゃんとアスリを頼んだ。」

「約束！」

「あぁ、約束。」

これでどうにかダカクも落ち着き、あとは父も残る準備を整えると母と小声でいくつか何かを話してから、勇敢にもいつもと全く変わりない様子で出発していったのであった。父を見送る中、ダカクは何度も野営と連呼し、父もしばらくそれに呼応していたが、アスリとしては、このような形で結んだ約束が本当に果たされるのか、どういう訳かひたすらに不安でしかなかった。

父の姿が遠く小さく見えなくなれば、心配と無事を願う気持ちは毎分のようにアスリの心の中で湧き出し始め、それは野営で頭がいっぱいになっているダカクを除いて、浮かない顔の母も同じであるようであった。しかし、それでも見送りが終われば、そこに待っているのは日々の仕事である。アスリはいつも通り牛たちの乳を搾り、その搾ったばかりの牛乳を並々と器に注いで1杯飲み干すと、装いこそ異なれど、普段通りただ狩りにでも出かけるかのように振舞っ

た父を自身も見習って、昨日までと変わりなく準備を整えていった。
ただ、この日は出発の間際に母から、母もダカクを連れてアスリについていくことを伝えられたのであった。アスリはその訳を聞くまでもないようにも思ったが、一応母になぜ今日は一緒に来るのかを問えば、やはりそれは昨日の今日で、また何があるかわからないからということである。
珍しい組み合わせで出発した一行が向かう先として母が指定したのは、もちろんカインタの位置する西の方やティサやユニスを発見した南の方ではなく、東の方の村から最も近い草原である。昨日の疲労の抜けきらないアスリにとっても、この決定はありがたい配慮のようにも思えたが、当然そこにはいつでもすぐに村に戻れるようにするためという、然るべき理由があることに違いはなく、実際現地に到着してみると、同じように考えたはずである、複数人で連れ立った村で牛を飼う他の2家の者たちも、すでに放牧を始めていたのであった。

昨日の夕方、しょうもないユニスの主張のせいで一時的にクズになってしまったアスリも、さすがに今日は父の命が懸かっていることもあって、仮にも1人であったとして、いつものように特別な休息を挟む気は全くなかったが、牛たちの食事が終わるのを待つ間、母にダカク、さらに他家の者までうろうろしている今日は、アスリはその辺で適当に昨日の件を中心とした、おしゃべりでもしてやり過ごすものとばかり考えていた。ところが、草原への到着直後、母が子どもたち2人に命じたのは、祭を控えた前日のように、できるだけたくさんの枯れ草を集めることであった。見れば他家の者たちも、あちこちで草を刈ったり集めたりしているのである。つまるところ、祭で放牧に来れなくなっても良くするのと同じように、今のうちに牛の食事を用意する必要があるということである。
では、なぜ放牧をしない用意をしなければいけないのかというこ

とまで、さらにアスリがもう一段頭を回せば、状況を踏まえるに、最悪の場合への備えでしかないのである。今、母が下す判断の1つ1つは明快なほどの合理性を伴っているが、父が遠くカインタで向き合っている現実もそこに絡めれば、疲労の残る体で拾い上げる枯れ草に加えられるものは、アスリの想像の何万倍もの重さなのであった。

待つということ

降り注ぐ日差しがいよいよ強くなり、草原の空気全体が朝のものから昼のものへと切り替わろうかという頃には、３人で集めた草は相当な量となった。そして、今度はそれらを紐で縛って、まだまだ黙々と食事を続ける牛たちの背中に全て載せると、早くも母は村に戻ることを告げたのであった。不満そうな牛たちをなだめつつ、とんぼ返りのアスリたちは村へと戻り、荷下ろしまでも昼前までに済ませていった。せっかく持って行った、昨晩ラダンに包んでもらった弁当を開いたのは、休む間もなく洗濯をし始めた母のすぐ横、自宅の前のアカシアの木の下だった。

アスリとダカクは水分を吸いきってふやけてしまった乳粥を食べ終えた後、今度は母の普段の仕事を手伝い、午前中と同じく３人で得意先の各家に今朝搾った牛乳を配って、野菜や穀物、日用品などと交換していった。作業の終盤、３人が村の中央部を通りかかると、そこでは落ち着かない様子の夫人たちが集合し、しゃがみこんでタバコをふかしながら話し込んでいた。見たところひどい表情を浮かべているのは母だけではなく、どこの家でも家人の無事を気にかけ、どうにもできずやりきれない思いをこの場に持ち寄っては、手中の少ない情報を交換し合っているようである。

おそらくこの場の他の女性たちと同じ心境であるはずの母も、もうここで心の限界が近いことを感じたのか、布袋からキセルを取り出し、自然と本能に沿うかのように、輪の方へと向かっていった。アスリにダカクも母がそちらに向かってしまうのであれば後をついていく他なく、腰を下ろした母のやや後ろに手にしていた荷物を置いて、その横並びへと加わった。母の入った集合体の他にも、広場全体には同じく女性と連れられてきた子どもたちや、老人たちによ

る集まりも複数存在しており、通りがかった人々が今の母がそうしたように、ぽつりぽつりと入りやすいところに参加しているようであったが、そのいずれもが集まっている人の数に比して全般的に重く静かなトーンであり、誰かの葬儀の時のような、どうにも苦しいどんよりとした雰囲気で圧迫されているかのようであった。

今日の村の異様さを作り出すトリガーの役割を昨日果たしたアスリが来れば、もちろん当初はアスリをねぎらう会話の流れができるわけであるが、アスリが見たものや聞いた話はすでに昨晩のあの酒盛りの後に、続けて開かれた男たちの緊急会議である程度は各家に共有されていたようで、さらに昨日の宴会の席のように1から10までの説明を求められることはなかった。その分、アスリも気になるところが出たタイミングで場に質問を投げ、誰もが抑えるような声で話す内容から、現況の把握を進めていった。

その上で、この場の話をアスリが聞く限り、まず今の最大の懸念事項である父たちの安否や状況については、今の時点で誰にも一切の情報がないようである。もっともそれが分かるのであれば、誰もここに集まってたむろしないわけではある。

ただ分かったのは、昨晩の会議で決まった、体の確かな村の大人の約半分がカインタの方面へと向かい、残る半分は村の近くで警戒をしているということだけであった。心配なことに、猟師を行う者はほぼ間違いなくカインタに行く方のグループに振り分けられるとのことで、それもおそらく弓に長ける父は最前線で活発な動きを担当しなければならないようである。さすがにこの話を聞くと、野営の話に加えていつもと違う村の空気に浮かれていそうですらあった隣のダカクも、埃をかぶった釜のような表情のまま、口を真一文字に結ぶばかりであった。

一方で、アスリが大層ほっとできる明るい情報もあった。なんと、ティサとユニスの両名は族長の言っていた山場を今朝までには脱し

て意識を取り戻し、特にティサはすでに起き上がって食事を取れる状態まで回復したそうなのである。今、アスリに対しての質問が少ないのも、昨晩の会議での共有以外に、おそらくは2人が十分に受け答えを行ったからであるはずであり、遠回しにも2人の復調をアスリは実感したのであった。ただ、ラリーヤはまだ声を戻せていないそうで、いくつか薬を飲んだ以外に、効果はあるのか不明であるが、巫女の祈祷の儀式も受けつつ、引き続き休息を取っているとのことであった。ちなみにユニスを追ってきた犬は、到着以来ずっとユニスの側から離れないそうで、立派な忠犬であると、なぜかロマドウでの高い評価を確立しているようである。

そうこうしているうちに、広場も徐々に薄暗くなりはじめ、そうなると昨日のアスリの自宅の前で起こったことと同じく、ちらほらと腹をすかせたであろう子どもを連れる親たちから帰りだす者が出始め、やがてそれは全体的なムーブメントへと変化していった。アスリたちもきりの良いところで荷物をまとめて自宅へと引き上げ、3人それぞれ、今日やらねばならない残る仕事をこなしていったのであった。

すっかり陽も落ちて、今日は3人で静かに屋内で母の作った夕食を摂り、井戸の水で順番に顔や手足を流し終えると、普段であれば寝るまでに家族で無駄話やら適当にいろいろと何かするのであるが、父の無事を願いながら帰りを待つという、非常に苦しい課題を目の前にして、今日何かほかにやる気なども起きず、と言ってすぐ眠気がやってくるわけでもなく、アスリにもたらされるのは、途方もないほどの手持無沙汰である。先ほど村の広場で現実を直視したはずのダカクだけは、この中での最年少の特権たる無邪気さを、悪く言えばのんきさを遺憾なく発揮して、すでにポジティブな思考へと頭の中身を切り替えたのか、おそらく野営の時に持っていくためであろう、大分前に獲って放置されていた獣の革を、丹念になめす作業に取り組んでいた。

しかし、アスリもそうであるが、それ以上にこの時間と空間に耐えきれなかったのは、母の方であった。キセルをくわえて煙をくゆらせながら、そわそわと外に出たり中に入ったりを繰り返していた母は、ついに十数回目でたいまつに槍を手にして、何か新しく聞けることがあるかもしれないからもう一度広場に行くこと、遅くなるようなら先に2人で寝ておくこと、万が一にも何かあればすぐ広場に来ることを言い残して、再び真っ暗な外に出かけて行ってしまったのであった。

母が出かけてしまえば、次に家に入ったり出たりする役を担うのは、アスリである。だが、まだまだ大人でないアスリにあの煙たいキセルは何が良いのか見当もつかず、かと言っておかしな味のする酒など飲む気もなく、母には与えられていた安定剤をアスリは用いることもできないのである。仕方なさしか感じないアスリは、昨日家の軒先に置きたいまつを配置していたところに、枯れ木をいくつか運んできて火を灯し、昨日の母のように、ただその火が燃える様子を眺めるしかないのであった。

暗がりの中に、パチパチと火の燃える音だけが響く中、ふとアスリが家の方を振り返ると、先ほどまで家の中から漏れていた小さな光は、いつの間にか消えてなくなっていた。どうやら自分の世界に入り込んでいたダカクは、もう疲れたのか明かりを消して寝てしまったようである。

アスリには無限とも思えるような時間だけが残されてしまった。今更ながらアスリは、さっき母が広場に行くと告げたタイミングで、自分とダカクも一緒についていけば良かったと、心底後悔していた。あの時一緒についていけば、心労の大きさ自体に変わりはないものの、ひとまず心境を緩和するための話し相手ぐらいは確保できたのである。しかし、今から広場に向かおうにも、今日のように見えない危険に村が晒されている中、ダカクを1人家に残したとして、も

しダカクが目覚めてしまった時にどういう行動を取るかは読めず、では一度寝てしまったダカクを起こそうにも、果たして起きてついてきてくれるかと言えば可能性としては微妙であり、無闇なトライはかえってダカクに無駄な苛立ちを与えるに違いなかった。

別な手として、せっかくアスリは今1人なのであるから、昨日の夕方のようにクズになれば、時間などあっという間に過ぎてしまうのは確かである。ただ、今日はどういろいろ考えようにも、無事復調の途上にあるユニスの硬い自己主張などよりも先に脳裏によぎるのは、いつもの、弓を肩からかける父の大きな背中と優しい笑みであって、それより他にどうあがいても思考が動くことはないのであった。

そして、そもそも、遅い。父も母も、行ったっきりで帰ってこない。いくらカインタまで行ったにしても、アスリが昨日の昼に煙が上がったのを見た位置を起点として考えれば、まずどう考えてもここまでの時間はかからないはずであるし、村の中で移動しただけの母にしてみれば、なおさらである。

どうしようにもできない中で感じるのは、こみ上げてくる不安に加えて溢れ出ようとする涙の前兆で、それをこぼさないよう、アスリは火に足を向けてごろりとその場に仰向けに転がるしかなかった。無数に散らばる夜空の星の中、視界の隅をたまに流れる煌めきは一体何を暗示しているのか想像もつかなかったが、ただそれが吉兆であることだけをアスリは祈っていた。

どれほどの時が進んだのかわからないほど、時間が経過した。星たちの位置は、アスリが見上げ始めた時から大きく動いていた。それでも朝日が上がってくる気配はまだ全くなく、むしろ空の色合いは、さらに色濃い夜のものへと染まりつつある時である。

離れたところで女が叫ぶような声を、アスリの耳が捉えた。思わずアスリは飛び起きると、全神経をその音の方へと集中させていった。

声の出所はやや距離を挟んだ、アスリの家から見て最も近い、他所の家の方である。自宅に遮蔽され見えないその声のする方を見るために、アスリは気配を消して最大限の警戒を保ち、例の高窓の前に置かれた作業台のさらに裏手へ、ゆっくりと回っていって、建物の隅の死角になりそうなところにしゃがみこむと、見えなかったあちら側を覗き込んだ。その間も強くけん制するような女の声は、集中するアスリに伝わり続けていた。

　たいまつの光だ。

　と、アスリが認識した後、光は消えてしまった。いや、消えてしまったのではなく、真っ暗だったあちらの家の窓から、今度は光がのぞき始めた。光源が、家の中に入ったのである。未だ続く声の大きさは家の中にやりとりの当事者が入ってしまったために、かなり小さくなってしまったものの、おそらく罵っているような言葉だけは、しっかりとアスリの耳に届いていた。無論、その声の主は、ほぼ間違いのない確率であの家で暮らす、アスリの母よりもやや若い婦人のものである。あの家には、ダカクを兄貴分のように慕う3兄弟に加えて、その祖父母に当たる老夫婦も暮らしている。

　まずいことになった。たしかにあの家も、今日は家主がアスリの父と同じく、カインタに出向いたか、ないし近隣で警備に当たっていたはずである。仮に今帰ってきたのがその家主であったとして、アスリや母が抱く不安を同じように胸にしているはずのあの家の婦人が、何と言っているかまではわからなかったが、なぜあれほど強く攻撃するような口調で家主を責めなければいけないのであろうか。その理由はと言えば、当事者由来の良くない何らかがそこには鎮座

しているはずであって、常識的に考えて、こんな遅い時間までアスリの知る限り過去1番村で難しい問題へ対応した者に突然投げかける可能性は、今日1日の留守の間によっぽどの悪事が暴かれたということでもない限り、ないのである。

その可能性はたしかにゼロではなかったが、アスリが昨日の今日でそれよりも生じうるものとしてごく普通に考える線は、ティサとユニスが身をもって体験した、自宅への襲撃でしかない。あの2人に出来事が起こった時間帯は、今ほどの頃合いなのである。

もう一歩踏み込んで考えれば、アスリが瞬時目にしたたいまつの持ち主は、ティサとユニスに、ラリーヤの日常を奪いあげた悪の一党であるのかもしれない。ユニスは多くの輩に包囲されたとのことであったが、父たちが戦いの中でその数を一定数削減しただけであって、大きな流れとしては食い止めることができず、残党が各戸を訪問して、最後の仕上げをしているというのだろうか。

気が付けばアスリの手は、いつの間にか震え出していた。アスリがその震えを認識するうちに、次はあの家から漏れていた明かりは完全に消えてしまった。

動転するアスリは、少しでも冷静さを取り戻すべく、抱くこの恐怖の性質を分析していった。すぐさま、それは今思い浮かぶ過去の存在するおおよその記憶のうちの恐怖と照合され、直後、頭中でその最も近いものとして選定されたのは、眈るラダンのいる家中、戸口にまだ母の持つものとして認識していない槍の穂先が、にぶく光った光景であった。

残念ながらアスリがこの記憶を今と似たものとして呼び起こした時点で、アスリは冷静になることなどできないだけでなく、より一層、おかしな汗を全身から吹き出すしかなかった。たとえ、その後に待ち受けていた結果がアスリにとっての興奮の糧でしかないとしても、すでにいつもの何十倍ものスピードで回転するアスリの頭脳

は、切り取られたサンプルとしてのこの体験と、まさに現時点での状況を比較して、今の方が圧倒的に厳しい状況であることを示していた。

手元の情報を元に全容を辿ろうとすれば、父をはじめとしたロマドウの男たちは壊滅し、残る相手方が家々を略奪して回っている最中、母は広場でまずい状況か、場合によっては息絶えているのかもしれないというところへと導かれる。今、明かりの消えたばかりのあの家では、女が1人、男の子が3人に老人が2人、どうなるかわからないか、もうわかっているのかもしれない。そして、いずれカインタのように上がるであろう火の手は、どう考えても我が家にも平等に訪れるわけであって、先立つ者がすぐにも現れれば、身を潜めている自分よりも先に狙われるのは、おそらくいつものように腹を出してすやすやと眠る、ダカクとなる。

猛烈なほどに供されたストレスは、嘔吐の未遂と実績のあるアスリに対し、瞬く間に吐き気となって見舞った。ただ、今えずいて音を出すことは最も許されないことであり、つい喉のところまで戻してしまったおかしな味の一口を、アスリは静かに家の裏に吐き出すしかなかった。

加えて、アスリはこの小規模な嘔吐に併せて、股間でも不随意な動きの感覚と、不快感を抱いていた。喉の奥に違和感があるまま、しゃがんだ腰布上の根源たる尻の方に手を回せば、明らかに濡れている感触である。

最悪の連続である。無意識にアスリはその触れた手を、つい鼻の前までつき出して嗅ぐと、幸か不幸か、臭いは究極的な最悪ではなく、ごく少量、小さな方を失禁してしまっただけであったようであった。もはやこれほどの状況を前にすれば、アスリがしくじったもの の量など、無きものに等しく、アスリは砕ける腰を低く保ったまま、どうにかダカクを守るべく、家の戸口の方へとまわりこもうと

していった。
　遠く、広場の方から、まっすぐアスリの家の方へと向かってくる別の明かりが、１つ見えた。たいまつだ。
　終わりだ。

　しかし、状況判断の後、アスリの心に即座に思い浮かんだのは、昨日、川を必死で渡り切ろうとするラリーヤの表情であった。アスリは甘いのである。昨日のラリーヤはどうしていたか、それだけでなく、あの時の自分はあの顔を見てどう思い、何をしたのか。何もできなかったではないか。
　だから、アスリが今なすべきことは、自身が分析したことにただ怯えて震えることでなく、それを実直に受け止めて、まだ見えない可能性に備えながら、別な良い形で可能性を切り開くことなのである。

　理性によって身を制しようとするアスリの手は震えたままで、それを抑えるためにした身震いは、先ほど中途半端にした失禁の、さらに中途半端な残りを、その場に排出させていった。ただ、それでも１つの気づきを得たアスリの心は直前以上に強く、急いで家中に戻って槍を手にすると、いつも枕にする方向と頭と足を真逆にして寝ているダカクの、暗がりの中に仰向けではみ出した腹のあたりを、目などに当たらないよう気を付けながら、槍の柄の方で軽く数度突いたのであった。

「ダカク…、起きて。」
「…ん？」
「弓と矢、すぐ持ってついてきて。」
「んー…。」

起きる気配のないダカクを、焦るアスリが痛くない程度にさらに力をこめて、ダカクも体の向きを横に向けようと動いた、その時であった。

何かが引っかかり、それがダカクの足の方向に向けて、一気にぐにゃりとスライドするような感覚が、槍を持つアスリの手に伝わってきた。

「んあああああああああああああっ!!!!!!!!」

直後に、ダカクの叫び声が部屋中へと響き渡った。

「えっ!?えっ!?嘘!?」
「んああああああ!!!!!痛い!!!いったい!!!」
「えっ!?ちょっと!待って!えっ!?何っ?」

アスリは完全に動転した。たしかにアスリは今、槍を手にしていて、それで昔ダカクをふざけて刺してしまったことはある。だが、今のアスリがダカクを刺激したのは危険な方ではなく、手でしっかりと持てる方なのであって、また当然、別にアスリはダカクを突く手に、多少は雑であったとは言え、突如ダカクが騒ぎ出すほどの過度な力を入れたわけでもないのである。本来の槍による攻撃を受けたかのように痛がるダカクの状態は、アスリにとって全く意味不明であった。しかし、目先の光景を見る限りの結果は、大して明るくない中で、アスリが不注意にもダカクを傷つけてしまったということでしかなかった。

「んーーーーーーーあっ!あーーーーーーーーーーあっ!」
「えっ!?ちょっと見えないから、動かすよ?」

余計なことをしたせいで、全身から吹き出す汗にまみれるアスリは、そもそも今の自分とダカクが置かれている危険な状況など放りやって、すぐさま強引にダカクの両手をつかみ上げると、その肩が外れかねないほどの勢いでダカクを引っ張り、外から部屋に入る弱い光線のある位置へ、ダカクを転がしていった。

「あぎゃっ！！！」

弱い光に照らし出されたダカクは、横向きに寝ころび、両足を曲げ背中を丸めてうめいており、その両手は、股間へとあてがわれていた。

「えっ…。おちんちんに当たっちゃった？」

どうやら直前、アスリが小突いた槍の柄の先には、昔目にしたダカクのあの小さなつぼみと袋があったようであった。ただ、そうは言ってもアスリは強く突いたわけではないのであって、いくらその部分が、たとえばアスリなら非常に敏感で多感であったとしても、同じように1回突かれただけでこれほど痛がるはずはなく、むしろアスリであれば、声を上げて悦びを有してしまうはずである。
未だに目の前の状況が掴めないアスリは、転がるダカクが抑える股間の手を掴み、強引に剥がすように横へと除けてはみたが、やはり出血などは腰布にも広がっていなかった。代わりダカクの顔に広がっていたのは、外から差し込む薄暗い明かりを受けて光る涙である。

「ひぃっぐっ！んっ！ひぃっぐ…！いだい…！！いだい…！」
「ねぇ、何なの？何もないじゃん！？」

不可思議にピーピーと泣きわめくダカクに、やや声を荒げて出してしまった自分の声で、アスリはハッと現況を思い出した。ダカクはもうよくわからないが、それよりもまずさっき見たたいまつが、またはあちらの家の訪問者が、どれだけ我が家の方まで近づいてきているのかもわからないのである。

「今、超ヤバいかもしれないから。いいからとりあえず外出るよ。」

アスリが声色をいつになく真面目なトーンに変えて、小さくダカクの耳元で囁くと、ダカクもまだ父も母も戻ってきていないこと、アスリにたたき起こされたことを踏まえた、取り巻く状況をどうに

か認識できたようで、涙をしゃくりあげながら、起き上がって履物をつっかけたのであった。そして、アスリもダカクの弓と矢筒を取ってくると、痛みに耐えへっぴり腰となってしまったダカクの手を取り、戸外へと連れ出していった。

細心の注意を払いながら先に外にそろりと出たアスリが、真っ先に先ほど目にしたたいまつの方を確認すると、たいまつはまだ元の場所から位置を変えてはいなかった。ただ、点のようなたいまつの灯りが生み出す小さな影はどうにも動いているようであり、人があのあたりで何かをしているのには違いないようである。あの家の方はすでに静まり返っていて、アスリが高く保つ警戒をよそに、遠くのたいまつ以外、辺りはいつもの夜中と何ら変わりは見当たらなかった。即座に、今であれば移動可能であると判断したアスリは、痛がるダカクのように腰を曲げて身をかがめ、ダカクの手を引き、たいまつの方向からこちらを見た時に死角となる、井戸の横の位置へ急いで滑り込み、２人でその場に腰を下ろしたのであった。

これで一旦は待機である。だが、問題となるのは、先ほどの謎の受傷の直後ほどではないにしても、ここに移ってもまだ続く、ダカクのすすり泣きである。これではいくらアスリが息を殺して静かにしていても、全くもって意味がないのである。

「…ねぇ、ダカク。まだ痛いの？さっき私が起こした時から？」
「痛い？なんか変なかんじ…、アスリ何やったんだよ。サイアク…。ひぃっぐ…。」
「当たったのはおちんちん？」
「ひぃっぐ…、そう。」
「ちょっと見せてみて？」
「えっ…！？見せんの？」
「いいから！痛いんでしょ？」
「えっ、えっ、えっ！」

少しでも多く明かりを捕えようと散大しているダカクの瞳は、アスリの申し出に動揺し、さらに大きくなったようであった。それは普段であれば絶対に却下の上、仮にも実力行使でもされようものなら逃げ回るに決まっている提案であるはずであろうが、今も続く痛みや違和感の前にダカクも成す術などなかったのか、アスリがダカクの足にかけた両手は全く抵抗を受けることはなかった。アスリは地面に座り込んだダカクの両足を広げ、たいまつの方向からは死角となる状態を保ったまま、先ほどまで当たっていたたき火の光がダカクの下半身だけによく当たるように調整すると、その腰布の結び目をほどいていったのであった。

ここに来てアスリの心臓は、ややおかしな鼓動を鳴らし始めていた。今、両親と村はまずい状況であり、たいまつは遠くで不気味に留まり続けている。その中でこれから、出血もなく昨日の毒を盛られたティサやユニスのように急ではないにしろ、ダカクを黙らせるために、どうしても痛がる患部を診察しなければならないのである。だから、これは必要な行為にあたる。

しかし、その行為の実態は、もう何年も見ていないダカクの恥部を直接見ることに他ならない。アスリをたった今支配しているのは、冷静さであり、そこに余計な気持ちが介在する余地など、ないはずである。

だが、どうにも、それとは別に何らかの高鳴る思いが、アスリの中で焚きつけられようとしていた。そして、これからダカクが迎える、しかもそれは自分の手によってもたらされる、つい目先の未来には、アスリがこの2年間、何度も何度も何度も何度も思い出して自己の休息の共としてきた、ラダンのあの罰の時間に、なぜだかどうにも似通った要素があるように思えて仕方がないのであった。その要素はすなわち、状況によって強いられ、受け入れるということしか道が残されていない、羞恥に耐える姿であって、それをこれか

らアスリは目にすることになる。

改めて、アスリは冷静である。ただ、腰布の結び目もほどき終わって、あとはその布を手にして左右に大きく開くだけとなったアスリのその心中には、相反するように何らかの熱さもまた急速にこみあげてきているのであった。それに輪をかけるように、ダカクはあの時のラダンのように涙を浮かべながら口を真一文字に結んで自分の痛む部分を凝視しつつ、必死に何かをこらえるような表情を浮かべている。それは痛みによるものなのか、それともこれからもっとも誰にも見られたくないところを、実の姉に見せなければならないという爆発的な恥ずかしさによるものなのか、その両方なのかもしれないが、何にしてもアスリは外っ面の冷静さとは裏腹に、ひっくり返した中身の内側の精神は、目の前のダカクの姿のみに集中して注がれていった。

アスリはごくりと生唾を飲み込むと、ゆっくりとその腰布をまず右の方へと開き、続いてダカクの前面に直に触れているもう半巻きの腰布を、左の方に同じくゆっくり、めくりあげていった。

直後、ビクリとダカクが動き、ついに数年来見なかった、ダカクの男児としての証明があらわになった。

アスリは目を見張った。

そこにあったものは、昔アスリが見たものと、全くもって異なる形状のものであった。いや、もっとしっかりと見れば、全部が全部違っているわけではなく、だらりと垂れ下がったしわのある袋であったり、その中に入っている2玉も、野鳥の卵ほどの大きさほどにまでふっくらと成長はしては言え、構造としては変わりはなかった。違っているのは、前はつぼみであった方で、それは今、前よりも太くなって、ピンとまっすぐ上を向いている。これも昨日のユニスが

背中で伝えた何かを思うに、なぜ今そうなってしまっているかは置いておいたとしても、そうなってしまう以上、こういう形となることは理解できるのである。

では、何が理解できないのかと言えば、その先端の部分である。ここまでつぼみとしか思っていなかったように、昔はその先は穴を1つ残して、優しく閉じていたはずであったのに、今そこにあるのは、飛び出して真っ赤になっているグロテスクな肉であって、その赤い部分の下の方には、白っぽいような何かがべったりとこびりついているのであった。

「えっ!?何これ!?」

先に驚きの声を上げたのは、まさかのダカクである。

「シッ!静かにしてよ。」

アスリはすぐにダカクを諫めたが、腰布の中身の状態に対して正確な診断はできておらず、それは驚いたダカクにしてみても同じようであった。呆気にとられたままの2人であったが、やはり当事者の方が頭の回転は早くなるようで、ダカクの顔からは痛みや羞恥への何とも言えないこらえていたような表情がみるみるうちに消えていき、代わって満ちていったのは、明らかな不安であった。

「えっ…。俺、死ぬ…?」

「えっ、こうなっちゃったことってあんの？」
「ないし、こんなん！あるわけないじゃん！」
「シッ！だからうっさいってば！」

再びアスリはダカクに注意しつつ、剥き出しになってしまった先端を見つめながら、原因として考えられる線を１つ、まずはダカクに確認することとした。

「…えっ、じゃあさ、この上向きになっちゃうの、初めて？」
「いや、それは、別に。固くなったらこうなる。」
「なんで固くなんの？」
「知らん、寝るとこうなる。いつも勝手になってる。」

この質問は蛇足であった。前々からアスリは、なかなか朝起きださないダカクの腰布が張っていること自体、認識しているわけであり、仮にも硬直する度に毎回このように中身が飛び出してしまうのであれば、今のようにダカクが騒ぐこともないはずなのである。

「最悪だ…。わかった。このまま中身全部出るんよね？俺死んじゃうんだ！アスリに殺されんだ！」

ダカクはまたも声を大きくして物騒な思いを述べると、今度は痛みよりも死の恐怖に怯えたようで、一時は収まった嗚咽を、またもや漏らし始めてしまった。もうこれ以上ダカクに何か言っても埒が明かないことを察したアスリは、意を決するよりも早く、ダカクの固くなったそのものへと手を伸ばしていった。

「あんさ、ちょっと触るよ？」
「えっ？」
まさか今夜いきなり、ユニスも固く腫らしてしまったものと同じところに付属する、弟の槍を握りしめることになるとは、アスリは夢にも思わなかったが、状況を踏まえれば、何としてもダカクを落ち着かせて、黙らせることが最優先である。さすがにアスリも、その剥き出しの部分から直接手を触れるようなことはせず、その付け根のあたりを、投げ槍をする時のような手の形で握りしめた。
まずアスリの右手の中に、ダカクの温もりが広がっていった。ダカクのそれは、木の棒のようにカチカチに固まっているものだという、アスリの勝手な推測とは異なり、中にしっかりと芯があるような感触を保ちながらも、表面は他の皮膚と同じもののようで、骨の通った指を握った時とはまた違った、まさに肉で作られた棒のような質感があった。アスリはそのまま握りしめた棒を上下左右に動かして、改めてその全体像を見つめ直していった。その付け根のあたりは昔見た時と変わらずに1本の草も生えておらず、ひとまずは姉であるアスリの方が、弟に抜かされてしまっているということはなかった。
だが、直に伝わってくる硬さの中に柔らかさも伴った肉感は、いくら弟であるとは言えどダカクが男児たらしめることをアスリに切に訴えかけ続けており、それはアスリに対して何らかの高揚感をもたらしていった。同時に、突拍子もないものが出てきたことで中断されてしまっていた、ダカクの腰布をめくりあげる直前にアスリがこっそりと得ていた、こみあげてくるような熱を帯びた感覚が、アスリの体の奥底から再び湧き上がりつつあった。
興味津々のアスリが手にする槍にさらに顔を近づけ、今問題とな

っている最先端部分の様子をよりよく見定めようとした時であった。
アスリの鼻孔を、何とも言い難い刺激臭が駆け抜けていった。

「うっわっ！臭っ！何これ、めっちゃ臭っ！」

思わずアスリは、ダカクに触れていない方の左手の甲で鼻先を隠すようにしながら顔をそむけ、背中の方へとのけ反ってしまった。実のところ、ダカクの腰布を開いた時からすでに、アスリはややおかしな臭いを感じてはいた。しかし、先ほど少量とは言え失禁してしまった手前、臭いの源は自分のものによるものの可能性を加味して、特段何も言わなかったのである。ただ、今はもう、この真っ赤なところが異臭の原因であると、確信を持って断言できる。

臭いを指摘されたダカクも、自分が最もその臭いを感じているのか、直前まで流していた涙はぴたりと止んで、自分の持ち物であるというのに、真っ赤なところをにらみつけていた。だが、あまりに臭うからと言えど、アスリもこのままダカクの下半身を腰布でくるんで、お開きにするわけにもいかず、腕１本分の距離を取って鼻を隠して斜めの姿勢をとったまま、横目で汚いものを見るかのように観察を続けていったのであった。

できるだけサバンナの新鮮な空気の方を吸うようにしながら、見分を続けて間もなく、アスリはあることに気が付いた。それは、この剥き出しになったダカクの核と、自分自身の大切なあの中央部の、さらに皮で包まれた中身の部分に、どういう訳か親近感があるということである。たしかにダカクの方には、スリット状の縦向きの切れ目が走っており、他に穴もないことを考えれば、これがアスリで言えば尿の出てくるところか、とろとろと何かの出てくる泉の方か、またはそれが一緒になったものかが、こちらの方に開口していて、つるつるとしているだけのアスリのあの突起とは異なっていた。ただ、近い場所に近い形状とあれば、要素の構成も似たものとなるは

ずである。
　もしもアスリのその部位が、かつてまじまじと見つめたラダンのもの程度の大きさであれば、この着想に至ることなどもおそらくなかったであろうに違いない。しかし、このダカクの肉の芽と、自分の大切な中身は、ダカクの方がやや大き目であるとは言え、万が一にも勝負をしようと思えば、張り合うことはできなくもない規模感を有している。
　つまり、女子にしろ、男子にしろ、一見すると全く違うものを持ち合わせているように見えて、目や耳、鼻や口が誰に対してもあるのと同じく、結局は同じである可能性は高いわけであって、思えば胸であっても、大人になれば女は膨らんでくるものの、子どものうちは男女を問わずに同じであるのである。
　その前提に立てば、今のダカクに対して行える対処は、大したものに当たらないはずである。アスリには今のダカクのように、剥き出しのまま固定化してしまったことなどなく、手を離せばすぐに守り抜こうという固い意志がすぐに覆いかぶさってしまうのであったが、自分のものを基点として作りを考えれば、要は元に戻してやれば良いだけの話になる。

「…ねぇ、俺、やっぱり死ぬん？」
「バカ、こんくらいで死ぬわけないじゃん。」
「…嘘じゃない？」
「女の子だってこういうのあるんだから。死なない。」
「えっ！アスリもちんちんついてんの？」
「ほんとバカ！女の子なんだからさ、ないに決まってんじゃん。」
「えっ？どういうこと？アスリにもあんじゃないの？」
「ある…、いや違う！そんなんはない！バカ！」
　すでに仮説を組み立て終えたアスリは、口うるさいダカクの質問をいなすと、あたりを見渡して、ダカクの治療に必要となるものを

探し始めた。その間、目に入った遠くのたいまつは、相変わらずあのままであり、周囲の様子も同じであるようで、ダカクを治療するタイミングとして、今は適する一時であった。
アスリの探すものは、すぐに見つかった。それは水をくむための釜にかかった、1枚のぼろ布である。ダカクにはまったく告げていないが、あれほどの臭いのするものを直に触らないための、ダカクに対峙する上で最低限の防御壁として、この布は活用できるはずである。アスリはここでやっとダカクそのものから手を離すと、低い姿勢で釜の元へと近づき、何となく良かれと釜の中に残っていた水で布を湿らせてから、またダカクの前へと戻ってきたのであった。

「えっ…、アスリ、何すんの？」
「何って、そのままじゃ痛いんよね？」
「うん。」
「だから治す。」
「どやって？」

アスリは取ってきた布を、ダカクの真っ赤な部分の前へと広げかけた。

「ひやっ！えっ？」

布が先端に触れた瞬間あげられたダカクの声は、やはりこの部分がアスリや、過去のラダンのものと同じく敏感であることを示しており、アスリが描いた仮説を補強していた。

「えっ？えっ？えっ？何すんの？」

突然動き出した予測できないアスリに動揺するアスリを尻目に、アスリは布越しに、今度は両手でダカクの芽のあたりを包み込んで

いった。そして、地面に生えた草を引っこ抜くかのように、一気に力をこめてダカクが主張する方向の方へと全体をスライドさせたのであった。

「んぎゃああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

「ちょっと！！バカ！！だから静かにしてってば！」
「いだいいだいだいだいだいいいだいだい！！！！！！いだいよぉおおおおおお！！！！！！死ぬ！！！！！！！死ぬ！！！！！！」
「バカ！！！だからこんなんで死なないって！！！」

股間を抑えようとするダカクの手を跳ねのけて、アスリがダカクの上にかけていた布をよけると、残念ながらダカクの先端は真っ赤な肉が飛び出したままであった。しかし、白っぽくこびりついていたものはおおよそが綺麗にこすり取れていて、赤い中身の形状は、さらに一歩アスリの持ち物の方へと近づいていた。どうやらやはり、かつてラダンの股間についていたものや、自分もしっかりと洗い流さないといけないあの何かは、男子にも生じるもののようであって、先ほどまでのダカクのものはそれが積み重なってできた塊で違いなかったようである。

残る少しも綺麗にすべく、アスリがもう一度ダカクに布をかけようとすると、ダカクはこれでもかというほどに手足をばたつかせ始めた。

「やだ！！！やめろ！！！アスリやめろ！！！」
「ダメ！！！治せないじゃん！我慢！」

暴れるダカクの腹の上に、アスリはうまく体を乗せると、ひらりと反対に向き直って、両足でダカクの両腕を抑えながら、今度はうるさい声を上げられないよう、自分の股のあたりをダカクの口元へと乗せて抑え込んでいった。このような取っ組み合いに持ち込んでしまえば、いくら相手が男児と言えど、上背で圧倒的にダカクに勝

るアスリの過去の実績として、ダカクにもう勝ち目はない。あとはダカクの左足が浮き上がったのと同時に、アスリがその足首をとらえて、グイと上方へ持ち上げて、右ひじでダカクの右膝のあたりを強引に外側に開いてしまえば、ダカクの臭う弱点はアスリのなすがままの状態となった。

「んんんんんん！！！！！！」

アスリの股間はダカクの顔面に置かれており、むずむずとした触感をアスリに与えてくるが、今はそれどころではない。

「ちょっと、お股に息かけないで！あれ？でも最初より小っちゃくなっちゃったね？こうすれば小っちゃくなんのかな？先っちょ戻ったら昔のと同じかな？」
「ヴぅぅううう！！！んぐうううううっ！！んんん！！！」
「こらっ！戻るまで何回でもやるよ！」
「んうう！んう！んう！！」

激しい動きの中、最後にアスリはもう一度ダカクの随分小ぶりになってしまったそのものに布をかけ、まだフリーで空いている肘より先の右手で握りしめると、再び勢いよくダカクを引っこ抜いた。ところが、この瞬間、苦しみもがいて叫び声をあげようとするダカクの開かれた口は、それを抑え込むアスリの股間の中央部に、ちょうどぴったりとフィットしてしまったのである。

「んうううううううううううう！！！！！！！！！！」

直後に、先ほどまで比較の基準点として設けていたアスリの核に対して集中して注がれたのは、サバンナで吹きつける風よりもさらに熱い空気の集合である。その熱風は、アスリが近くの家から上が

った叫び声を聞いて以来、保持してきた緊張と警戒を減衰させるのに十二分なほどの威力があった。すなわち、腰布越しに加えられたダカクの強い吐息がアスリにもたらしたものは、前例なき身震いしてしまいそうな、へその下あたりへと突き抜けるように絞り上げてくる、抵抗不可能な肉体への訴求なのである。

思わずアスリは尻を上方に突き出して、一瞬ダカクの口から股間を離してしまった。このままもう少し上下に腰の位置をずらせば、今のような熱風を受けずにダカクを押さえることは、できるにはできる。ただ、今の熱風で完全に燃え上ってしまったアスリの本能は、残されていた冷静な精神から強制的に行動権限をすぐさま奪取すると、また直前までと全く同じところに、腰を下ろさせていった。

ダカクは今、アスリがごくわずかに手違いをした結果生じてしまった今の状況に強いられ、自分の恥部を姉の目の前へとさらけ出す羽目になっている。では、アスリはと言えば、アスリもアスリで自分で生み出してしまった怪物に、なすべきこと、やらねばならないことを封じられた挙句、ただ貪るように体の中心の一点に集中せざるを得なくなっているのである。

たった一発で呼吸がさらに荒くなってしまったアスリに続いて思い浮かんだのは、ダカクにとって非情な、しかしすぐにでもトライせずにはいられない、悪魔的な発想であった。まだなお、少しずつ熱い息を吹きかけられるアスリが布を取り払い中身を見れば、好都合なことに、いや、残念なことに、今の一打をもってしてもダカクの先端は真っ赤なままである。

今、アスリが得たいものは、ダカクの勢いある風である。もちろん、より高次元では父と母、村の無事と安寧であるに決まってはいる。しかし、そんなことは当然であって、今、アスリとダカクにできることは、警戒を保って待つことと、ダカクをアスリなりの方法で治療することしかないのである。では、万が一にも、今矢がどこ

からか飛んできて自分の頭に刺さってしまったとすれば、それで終わりであり、もしそうであるなら、そうなる前に人間としての楽しみをしっかりと味わいつくした方が心残りはないはずである。
だから、アスリが今、特に母にどんなに許されないような感情を抱いていたとしても、アスリは自身を許せるのであって、これが今のなすべきことであるのであれば、しっかりとやり遂げなければならないのである。

最初よりも随分と綺麗になった、目の前のたき火の明かりに禍々しく照らされ赤く光って揺れるダカクのコアを見つめつつ、独特な論理でアスリは自己の正当性を高め終えると、またもや布をかけていった。もうダカクは次に何をされるのか、嫌というほど理解しており、一段と全身にこめる力を強めていたが、アスリにはここから得たばかりの着想を元にした、確定的に強者になれるという自覚があった。

そして、布のかかったそのものの先端だけを、人差し指と親指だけでつまみ上げると、またしてもぐっと引っ張りあげたのであった。

「んぐうううぅぅうううううぅ！！！！！！！！」

予想通りである。アスリの期待した通り、アスリのあの真ん中にはしっかりと熱い息が吹きかけられ、その息は水面に一石を投じた後のように、アスリの体中いっぱいに波紋のように快感を押し広げていった。
アスリはあまりにも無慈悲である。仕組みが整ってしまった今、あとはアスリはこの動きを繰り返せば、自動的に好きなところに息を吹きかけてもらえるのであって、そうしない手などどこにもないのである。あとは続けて何度も、アスリはダカクを布越しにつまみ上げて引っ張れば、アスリの体にはいくつもいくつも石が投げ込ま

れていって、どんどんアスリの理性は失われ、馬鹿になっていくのであった。

アスリの本心にあるものは、両親の安否に対する心配と、このあとの村の将来に対しての不安であることに間違いはなく、その大きさは過不足なく、胸が張り裂けそうなほどである。ただ、今こうしてダカクを使って物理的に加える刺激は、そんなことに構うことなどなく、直にアスリにあふれんばかりの快楽をもたらしていた。アスリは自分で今手を動かしているとは言えど、これは自らの真意に関係なく、いわばこの場の状況によって犯されているのであって、これは同意なき性的接触なのである。したがってアスリ自身が同意していない以上、これは別に仕方のないことであって、アスリが何を享受して良くなったとしても、それは関係がなく、今得る感覚そのものに罪は介在しないのである。

もはやダカクへの治療は治療としての体を成しておらず、元の形状に戻す努力をアスリは行っていないばかりか、ただ単に布越しに、アスリであれば最も良いところをこするだけとなっていた。それはつまるところアスリが、一番最初にラダンを見て真似て得た、あの布越しの感覚をダカクにも塗りこんでいるということである。

そうは言えど哀れなダカクは、今や完全にアスリに良いように道具として使われているだけであるのが実態である。ダカクの挙げるアスリの股越し叫び声は元々くぐもっていたものの、徐々にアスリの動きに合わせて1回1回が短くなってきており、そこにあるのはアスリと同じ快楽なのか、それとも想像を絶するような痛みであるのか、全く見通すことはできなかった。ただ、一時小さく柔らかくなっていたはずの磨かれる槍が、再び固く大きく戻ってきているのは、紛れもなく事実であった。

一方でアスリの股間は、ダカクの湿った吐息に涙や鼻水だけでなく、アスリの泉から湧き出る何かによって、どんどん水っぽくなっ

ていった。弟の持ち物であるとは言え、今アスリの目の前に布をかけられているものは、昨日、突如として意識が向いてしまった男子そのものである。それは自分の配下の器官でないにも関わらず、アスリが刺激をするほどに、自分の方にも次々と返礼が供与されてきており、今や、お返しの方がアスリの心中からあふれ出して、さらに蜜となってダカクの口元へと届けられる、姉弟のアンバランスな半永久機関と化しているのである。

もうアスリの頭は、おかしくなりそうであった。いよいよ自分で投げ込んできた石でできた水面の波打ちは、大きな大きな、昨日の夕方迎えられなかったあの大波へ、今にも姿を変えようとしていた。

そして、ダカクが一瞬、ずっと開けていた口を閉じた時であった。ダカクの唇は、腰布を通してアスリの包皮の内側全体を、しっかりと捕え切った。

ついにダカクは、ここまでの執拗なまで与えられたアスリのいじめに耐え抜き、ここで初めてアスリをその水面へとたたき落とすことに成功した。水中に転落したアスリは、ダカクが意図せず続けて投げ込んでくる石によって打ちのめされ、溺れそうなほどの水の中に自らの泉から延々と湧き出す水を加え続けていった。

さらに、暴れるダカクがもう一押し加えた腰布越しの口づけは、水中のアスリに目がけて射られた矢となってアスリの小さくて大きな中央部へと突き刺さり、あのへその奥のあたりへの爆発的な哀愁を振りまいた後、脊髄から突き抜けるように頭部へと到達して、すでに馬鹿になってしまっていたアスリの脳の神経と細胞を、くまなく全て徹底的に破壊し尽くしていった。

アスリを取り巻く無数の水泡は、その1つ1つが肌を撫でるかのようにアスリの周囲を漂って、深く深くアスリのことを誘って、アスリが水底に近づけば近づくほどに、アスリの目にする真っ白な光

は、さらに輝きを増していった。その光の正体は、アスリが身にまとう水泡に触れる度に自身から発する、沈みゆくほどにかえって高くなっていく頂に到達した証に他ならなかった。

「ゃんっ！んぁっ…！」

ダカクを前にしてアスリはここまで、どうにか声だけは上げまいと必死にこらえてきたが、とうとう奥歯を強く噛みしめたその奥から、猫のような鳴き声を2言発してしまった。もうここでアスリもダカクを磨き上げる動作を続けることもできず、ただ全身を硬直させ、腰だけはアスリの方から前後にくねらせながら、本能の赴くまま、腰布越しのダカクの唇にアスリの中心部をぐりぐりとこすりつけていった。眼前の興奮と快楽に夢中のアスリは、その腰の前後の動きを2度、3度するだけですぐに到達し、また到達してを繰り返し、全てを放り出して自分の性器を満足させることだけに集中していった。

アスリが自分の意志で腰を動かせなくなってしまうまで、大して時間はかからなかった。ガクガクと腰を痙攣させながら身悶えし、アスリがダカクにへばりつくようになってしまったその時、今度は突き上げるような暴力的な刺激が、アスリのクリトリスに対して加えられた。驚くよりも先にアスリを見舞ったのは、不意にもたらされた追い打ちの絶頂である。

「あんっ！！！あっ！！！」

続いてアスリの全身は跳ね飛ばされ、さらにその次にアスリが得たのは後頭部に加わる衝撃だった。直後、地面に仰向けに転がされ、まだまだ快感の波を受けている汗だくのアスリは、頭を強く打ち付けたにも関わらず、気持ち良さしかないまま、ただただぼんやりと

夜空に浮かぶ星を眺めていた。馬鹿になっていたのに、急に頭まで打って脳みそがダメになってしまったアスリは、このまま溶けてしまいそうなほどに呆けていた。

「ぐぇっほっぐぇっ！！！ぐえっ！ぐぇっ！！」

耳に入るのは、ダカクが咳き込む音である。アスリがゆっくりそちらを見やれば、ダカクは涙なのか、それともアスリ由来の別の何かなのかでぐちゃぐちゃの、ひどい顔をしている。ダカクの咳の中には少なからず嗚咽が混在しており、アスリは初めて泣きながらむせる者の様子を目にしたのであった。

そして、未だ大きく開脚されたままの太ももの付け根に視線を落とすと、やはり硬く上向きにはなっているものの、事態の元凶であった真っ赤な肉の部分は見えず、すでにすっぽりと先端まで包皮で覆われていた。途中からアスリの目的からは完全に逸脱していたとは言え、どこかの1回はしっかりとした治療として、たしかにダカクに届けられてはいたのであった。ただし、絶え間なくアスリに熱風が吹きかけられていただけでなく、今や崩れ落ちた廃墟のようになってしまったダカクの様子を見るに、その1回はアスリが沈没する直前の、終盤の方までもつれこんだ模様である。

元来アスリの知るそのものは、可愛らしくさえ思えるような姿であって、今の形状は異質とも言えるほどにまっすぐ空を目指した状態にある。アスリは袋の方からその裏手にかけて続く、皮膚上の薄い縫い目のような筋をまじまじと見つめながら、荒くなってしまった呼吸を整えていった。

「げぇっほっ、ひっぐぃ…！最低だ！最低！」

「はぁ…、はぁ…っ、ねぇっ、治ってるよ。良かったじゃん。」

「最低っ！んおえっ！…死ぬかと思った！アスリ嫌い！」

「ん、何…？もっかい中身出したい？」

「ひっ！やめろよ！絶対！」

ダカクが顔をひきつらせながら、両足を折りたたんで小さく背を丸めた時であった。

声が聞こえた。

水底でただ満足感だけを堪能していたアスリは、突如汗だくの汗の中に、冷たい違った種類の汗をかき始めた。

愚かである。いくら馬鹿になってしまったとは言えど、耽って周りが見えなくなってしまうのは、これが初めてではないのである。アスリは内心、性に対しての制御の効かなくなってしまうこの自我に強い嫌悪の感情を抱いたが、それ以上に急加速して始まった思考は即座に、改めて真の意味での物事の優先順位を冷徹なまでに示していた。

直ちに上半身を起こしたアスリは、右の人差し指を立てて口元にあて、真っ先にダカクに目で合図を放つと、あのたいまつの方へと目をやった。

ゆらゆらと動くたいまつが、明らかにこちら側の方へと向かって移動していることを、アスリは認識した。とうとう、この時がやってきてしまった。アスリは、覚悟を固めた。

しかし、見定める先のたいまつの元から上がる声自体は、まだ距離もあって小さいものの、どうにも物騒なものである様子はなく、むしろ何か楽し気な気配すらあるようである。さらによくよく耳を傾けてみれば、それらの声にはアスリが普段から慣れ親しんだ響きがあるのである。

「…父ちゃんと母ちゃん、来た？」
　この時点で、真っ赤な先が頬に遷移してしまっていたダカクもハッとした表情を浮かべ、アスリに問いかけた。声の主は、父と母で間違いない。
　正直なところ、アスリには状況が全く解せなかった。無論、父と母が楽しそうな声を上げているということは、そんな声を上げられるだけの気力と体力が有り余っているということであり、すなわち父も大過なく帰還した上に、村の安全も保持されたということに他ならず、ひとまず抱くのは安堵ではある。では、何が解せぬかといえば、これほど深夜に及ぶまで事態がかかり、カインタで大仕事をした父と、昼におそらくアスリが抱いていた以上の不安をためこんでいたはずの母が、いくら事から解放され安心したからと言って、まるで子どもがその辺を練り歩くように、全く急ぐ様子も見せず、ここまで楽しそうに仲良く家路を進んでくる、落差なのである。
　アスリは瞬時に、何か偽物が父と母のふりをして近寄ってきているのではないかとも思いめぐらせた。しかし、そんな遠回しなことなどあるはずもなく、とにかく下半身丸出しのダカクにジェスチャーで腰布を巻く仕草を送ると、自分も重たくなってしまった腰を上げて槍を手に取り、井戸の陰ですぐに立ち上がれる体勢だけは確保していった。ダカクの方はアスリよりもさらに動きが鈍かったが、こちらもどうにか下半身の身なりを整えると、むしろアスリのことを警戒してか、アスリがすぐに手を出してこれない程度の距離を確保した上で、同じくしゃがみこんだのであった。
　相手方がもう9割以上父と母であるに違いない以上、そこにはもはや当初ほどの緊張もなく、かと言って両親の方まで駆け寄るほどの元気はアスリにもダカクにも残されてはいなかった。アスリはぐらぐらと沸騰するような脳みそのまま、意味のわからないこの状況を何となく捉えながら、冷汗が引いていくのとともに、精神は再び

直前までの余韻を楽しもうとさえしていた。

「…ねぇ、アスリ。」

ここでぼんやりするアスリのくすぶった快楽を、後方にいるダカクが小声で遮った。相変わらず、父と母は談笑しながらのんびり歩いているようで、もう間もなく、たいまつだけでなくはっきりと姿を現認できそうである。

「何？」
「あのさ…、女の子もちんちんってついてんの？」

「は？何言ってんの？」

不意を打つような一言に、近寄ってくるたいまつの明かりを見つめていたアスリは、思わずダカクのいる背中の方へと振り返った。ダカクは先ほどの仕打ちからまだ回復の途上にあるのか、神妙ともやつれたともとれる表情を浮かべていた。

「さっき、顔抑えてる時、アスリのお股に何かあった。」
「バカ！女の子なんだから何もない！」
「ってか、女の子も似たようなのあるって言ってたじゃん。あれがそれ？」

ダカクはさすがアスリの弟である。先ほどあれほど苦しそうにしておきながら、アスリの股間にぶら下がる大荷物を、ダカクは見破っていたのであった。

「バカ！変態！何考えてんの！だから、んなもんはない！」
「何だよ！アスリだって、俺のこと滅茶苦茶にしたくせに！」
「何？それじゃ治さない方が良かった？戻してあげよっか？」
「ヤメロ！！！絶対！！！」

ダカクの怯える声を耳にしながら、これは使えると、アスリは直感した。このネタを使えば、しばらくの間アスリはダカクを容易に脅すことができるし、いとも簡単にアスリの意を飲ませることもできるはずである。早速アスリは余計なことに勘づいてしまったダカクに、得たばかりの便利な道具を用いることとした。

「ダカク、さっきのこと、パパとママ帰って来ても言っちゃダメだからね？わかってるよね？」
「えっ、…うん。でも、なんで？それって、アスリのお股のこと？」
「バカ！だからそんなんはないって言ってんじゃん！でもそれも。わかってる？今の話したら、何でそうなったって聞かれんでしょ？そしたらダカクのおちんちんが変になっちゃったって、パパとママにも言わなきゃいけなくなるよ？」
「えっ…。」
「そしたらどうなる？見せてみって言われて、おんなじ風にされるよね？」
「えっ！やだ！」
「さっき汚かったし、臭かったでしょ。ママだったらきっと、洗濯みたくもっとごしごしするかもよ？」
「やだ！！！絶対！！！」
「じゃあ余計なこと言わない？わかった？」
「わかった。」

思ったとおりである。これでまず、ダカクが父と母にべらべらとあれこれとしゃべり散らかして、その端々から実はアスリがダカクの顔面と吹きかけられる吐息を用いて楽しんだことが明らかとなる線は、限りなくゼロに近くなった。もちろん、あれよあれよと、そこまでバレてしまうことなど到底ないに違いないのではあるが、万が一にも特に母がわずかな疑問点をきっかけにアスリを誘導し、結果的に全て自供せざるをえなくなれば、夜が明けた後、おそらくアスリは今身を潜めるこの場で以前のラダンとなり、あの時のアスリの役を務めるのはダカクなのである。そうなれば、ないと言い切ったはずなのに、実はあったという事実をダカクに知られてしまうだけでなく、その先には究極的な羞恥と、母による成長の否定に、針の刑である。

一方で、アスリはそこまで頭を回していく最中、同性である自分がラダンのあの恥辱にまみれた中身を全て見つくして絶頂した結果、2年にも渡って日々の糧としているというのに、今度は自分が持ち物検査を受ける側に回ったとして、弟とは言え異性であるダカクが強烈な自身のはみ出しを目撃すれば、いかほどまでにダカクの性が乱れてしまうのか、想像するだけであの中央部や腹の奥に血液が集まっていくのを感じていた。もうダカクを怯えさせるには充分であったが、アスリの脳でなく性器は、ダカクがさらにおかしくなってしまいかねない、本当のところは試行してみたくてたまらない事柄に関連する、サディスティックな言葉を投げかける選択を下した。

「それと、私の言うこと聞かなかったら、おちんちんの皮、また剥いちゃうからね。」

「…最低。」

「何？剥いちゃうよ？」

アスリがダカクにこれでもかというほどに釘を刺した上に、さらに圧力までもかけようとした時であった。

「あれっ？火つけっぱだな。おーい！起きてんのか？」

やや離れたところから、ついに2人に向けられた父の声が届いた。即座にアスリは井戸の縁から頭を出して、声の出どころへと目をやった。

父が、帰ってきた。その横には、母もいる。

「…パパッ！！！」

ついに視覚的な実体となって現れた父と母の姿は、立ち上がるの

も億劫であるほどに感じていた疲労や倦怠感を、アスリから一瞬で取り去っていった。それはまたダカクも同様であったようで、２人は同時に立ち上がると、直前まで全く何事もなかったかのように、父と母の元へと駆け寄っていった。

良かった。本当に良かった。すでに離れた所からでもその気配が十分すぎるほど伝わってきていたとは言えど、今こうして帰ってきた父と母を目にして、アスリはようやく安堵に包まれ、その嬉しさは涙へと形を変え、今にもアスリの目尻から溢れ出そうとしていた。

たいまつに照らされる赤らんだ父の顔からは、すでに戦化粧など落ちてしまっており、やや足元がふらついてはいるものの、朝出発した時と同じく、たくましい肩に弓をかけ怪我もないようである。もちろん広場まで行っただけであるはずの母も、出かけて行った時と同じ様子であった。正しく述べるのであれば、２人とも無事という意味では変わりないが、それぞれたいまつと槍を手にしていない方の腕の中になぜか大きな甕を抱えて、こちらに向かってきている。

さらに言えば、明らかに父も母も酔っている。いや、泥酔している。

アスリは２人までの距離を詰めながら、だんだんと事の次第を理解し始めていった。それとともに、無事の帰宅に対する喜びは徐々にしぼんでゆき、ダッシュでスタートした駆け足も小走りとなり、しまいには流れかけた涙もただのアスリの体液の一部として、再び吸収されていった。

どういうことであろうか。たしかにアスリは先ほどまで、ダカクをうまく使って沈没し、満足しきっていたことは事実である。だが、それは２人を待つ間に起こってしまった、ふとした事故をきっかけ

に生じた、どうしても避けようのない出来事であるわけであって、そのようにするしかなかったのであるから、その時どのようにアスリが感じたかはどうでも良いのである。問題なのは、そもそもそこまでせざるを得なくなった状況であって、その根幹の原因をたどっていけば、2人の帰りがあまりにも遅く、結果的には不必要であった警戒を、嘔吐に失禁し、おまけとしては絶頂するほどの極限にまで高めなければならなかったために他ならない。

ところが、ふたを開けて見ればどうだろう。父も母も、へべれけになるほどに酒盛りをしていたのである。酒盛りをしてきたということは、つまるところ、もっと早く父は村に到着していたということであって、しかもここまでしっかりと完成度を高めるためには、それよりもっと早くから打ち上げていたということに帰着する。挙句の果てに、アスリの心配をよそにして、随分前から2人で道中でのんびりと休憩し、だらだらと談笑しながら今頃の帰宅である。

「ねぇっ！！！！どういうこと！？！？どんだけ心配したと思ってんの！！！！！」

おかえりなさい、という一言よりも先に飛び出したアスリの喝は、東の方からやや白みかけてきたサバンナの夜空に、高く響いていった。今更ながら、アスリは自分の出した大声を聞いて、近所の家から聞こえてきた、あの家の女の罵るような叫び声の理由を掴んだのであった。要するにあの家の主人も、おそらく家人の心配などよそに、気の向くままに大酒を食らって、気持ちよく帰宅したところに雷を落とされたのであろう。しかし、あちらはまだもっとずっと前に帰宅していたのであって、父と母の方が、さらに数段悪質である。

「ごめん、ごめん！」

「へへっ、ごめんねぇ。もう2人とも寝てると思ってたぁ。ねぇ！見て見て！昨日のお礼だって、こんなにもらってきちゃった！」

「昨日1つ空にしたのに、2つになった！気前良くしとくもんよな！しかも母ちゃん持ってる方は族長んところんだから、うまいやつだ！」

叱られてもニコニコとしながら言い訳し、全く反省の素振りすらなく、真っ先に戦利品を誇る父と母を見ながら、アスリは怒りを通り越して、ただただ呆れかえっていた。これではもはや、どちらが親でどちらが子なのか、今の立場だけ考えれば逆転したも同然である。

「ちょっと、ホントにどゆこと、マジありえん…。」

アスリのひどく曇った声は、酒が回り切ってしまった父の耳にも、しっかりと今アスリが抱く感情とともに届いたようで、父はその場に重そうな甕に弓や矢筒だけでなく、不用心にもたいまつまで適当に置きやると、すっかり歩みを止めてしまったアスリとダカクの方へと、今度は自分の方からふらふらと駆け寄ろうとした。しかし、これほど酔いが回ってはうまく走れもせず、父は2歩前に進んだところで小石か何かにつまづき、前のめりに転倒してしまったのであった。

これにはいくらおかんむりであるアスリも驚き、倒れた父の元へ近寄ってしゃがみこむと、すぐ後に近づいてきたダカクとともに、突っ伏してしまった父を地面から起こし上げようとした。父は危険を冒して無傷でここまで帰ってこれたというのに、愚かにも自宅から ほど近い最後の最後のこの場所で、ついに手のひらを擦りむき、流血してしまっていた。

「いっ、てって…。」

「あーあ、もう。血出ちゃったじゃん。」

酔っ払いというものは、往々にして不手際に不手際を重ねるものである。この時の父も、そのセオリーから外れることなく、いらだちを抱きながらも、せっかく介抱に入ってくれた娘と息子に、たった今感じたことを容赦なく言葉にしていった。

「…ん？　なんか小便くせぇな。２人とも漏らしたんか？」

「……っな！」
「そんなんじゃなくて……！」
「えっ、お漏らししちゃってたの！？そんなに怖かった？えっ、ってか、２人とも砂だらけじゃん。」
「怖くてその辺走り回ってたんか？」

アスリもダカクも、ここで一瞬ひるんでしまった。たしかにアスリにしてみれば、粗相しているのはその通りである。だが、今の臭いのもとは揮発する尿に限らず、おそらくアスリの第一手でダカクの腰布の内側についてしまったであろう、あの強烈な臭いの源であったり、その後、アスリの方から湧き出てきた何らかであったりも、多分に含まれているはずである。アスリはもちろん余計なことはしゃべりたくないし、ダカクもまたアスリに中身を剥き出しにされてしまう恐れがある以上、おかしな言い訳をすることもできないのであった。

続けて、父と母はアスリとダカクが何も返さないのを見ると、大きく高笑いを始めてしまった。２人が恐怖に怯え失禁したということで収まるのであれば、この後に深くあれこれと詮索されることもないはずであり、本来ならアスリにとって好ましい状況ではあるが、怒りを通り越した呆れを感じていたアスリは、ただ馬鹿にされるように笑われたことで、通過していた地点まで、ふつふつと感情を逆回転させていった。

「バカッ！バカッ！バカッ！！！もうホントに知らないからっ！！！もうダカク、パパとママなんか放っといて寝るよ！」

ダカクの顔に股間を押し付けていた時とは、また異なった体の火照りを感じるアスリが踵を返して家の戸口の方へと向かおうとすると、その背中に、母はやっと母性を取り戻した一言を投げかけた。

「まぁ、あとで汚しちゃったのは洗っといてあげるから。2人とも体流して着替えときなさい。」

悔しいことに、母の助言はまともであった。今、母の言うことなど聞きたくもなかったが、思春期の少女が臭うと言われて、何もせずに寝られるわけはないのである。アスリはその足で井戸の方へと戻り水をくみ上げ、近くに置いてあった釜に水を入れてから、外で洗って干したままになっていた自分の服と布を適当に見繕うと、釜を手に小脇に服をはさんで、そそくさと家の裏手の方へとまわっていったのであった。

両親へのいら立ちはそのまま、薄暗い中で水浴び前から濡れてしまっていた個所を流し、服を着替え終え、水を入れてきた釜を戻して出しっぱなしの槍をしまおうと、アスリが再び井戸の横へと戻ると、空の具合を見るに、いつもであればもう起きだして寝ぼけ眼であれやこれやと始めようかという時間だというのにも関わらず、父と母はたき火の横でまだタバコをふかして酒を酌み交わしながら、何やらぼそぼそと語り合っていた。すでにそこにダカクはおらず、アスリが体を流しに行った後、同じく続いて行って、家の中に戻って寝たようである。

「…まだ飲んでんの?もうすぐ朝だよ?今日お仕事は?」
「あんなんあったら、今日はどこの家も休みよ。」
「パパ大変だったんだから、許してあげてよ。アスリ。」
「ママは大変じゃなかったでしょ。」
「パパの疲れを取ってあげんのが大変なの。」
「なんだよ?さっき喜んでたじゃんか?」

「こらっ！アスリの前で無駄なこと言わない！」

ニヤニヤと笑いながら母を見つめる父に、怒っているような口ぶりのわりになぜか嬉しそうな母の姿から、２人の話した内容の真意をつかむことはできなかったが、おそらくどんなに早くとも昼頃まで、この２人は使い物にならないであろうことだけはアスリに伝わってきていた。杯を持つ父の手に母によって巻かれたであろう、出たばかりの血の滲んだ布を見つめながら、情けないその姿にアスリは溜息交じりの一呼吸を挟むと、問いただすような口調で言葉を重ねていった。

「っていうかさ、どういうことなの？」

「あぁ、カインタか。あれは…。」

この時、アスリが父と母に問いたかったのは、なぜこれほど遅くなった上に、酔って帰ってきたのかということである。しかし、酔った父からこれから返ってきそうな内容は、どうにもそれよりも大分前の話であるようであった。

だが、アスリが遮ってそれを問おうとするよりも早く、父は直前までと打って変わって、ひどく落ち着いたトーンで、にわかに信じがたい一言を続けた。

「全滅だ、全滅。」

アスリは耳を疑った。今のたった一言を発すると、父からは直前までのどうしようもない酔っ払いであった様子は消え失せて、目の前にある杯の中のどぶろくの表面を、何かもっとずっと遠くを見つめ思いつめるかのように、覗き込んでしまったのであった。

「えっ…？どういうこと？全滅って…？」

「まぁ、かなり抵抗はしたんだろな。聞いてた数より全然たくさんいたんよ…。」
「たくさんいたって、それじゃパパも戦ってきたの？」
「いや、もう生きてんのはいなかった。随分すげぇのが、ごろごろ転がってて…。」

父はここで軽く咳ばらいをすると、目線は一切変えないまま、タバコを一度ふかした。

「家なんか全部ねんだよ、黒焦げ…。多分、あれ、子どもんはなかったと思うわ。男っぽいのと、あと家だったとこん中は…。だから若いのや子どもは連れてかれたんだろう。」

一晩で喜怒哀楽の全てを感じ、徹夜で朝を迎えかけているアスリの脳はすでに疲労にまみれていたが、父がひねり出すようにして小さくつなぐ言葉は、アスリをたたき起こすかのように強くプッシュし、カインタの実際を嫌というほど想起させていった。どうにもカインタは、父曰く黒焦げの状態で全滅しているらしく、随分すごいというのは、その状態や程度を指しているはずである。しかも、全滅と定義するのに足る、カインタに残されたものに対して、多分であるとか男っぽいであるとか、不思議な推量が付与されているのである。幸か不幸か、子どもたちのものはそこにはないようであるとのことであるが、連れ去られてしまった以上、命がつながっている保証はどこにもない。

「朝、ダカクに連れてけって言われたけど、連れてかんで正解よ。あんなん見たら…。んっおえっ、また気持ち悪くなってきた…。」

そう言って父は身震いすると、気持ち悪いと言いながら、手にしていた酒を一気に流し込んでいった。母はすでにそれ以上の詳細ま

で耳にしているのか、いつもなら絶対に父に酒など勧めないのに、この時ばかりは空いた杯をすぐに父から取り上げて、さらに近くに置いた甕から酒を注ぎ父に持たせると、父の太ももに優しく手を置きやったのであった。

「ありがとう…。」

父は自分の太ももの上にのせられた母の手の上に、酒を持っていない、布の巻かれた方の手を重ね合わせると、受け取った酒をゆっくり一口含んでいった。

ここに至ってようやくアスリは、なぜ父や近所の家の主人に、おそらく族長やその他今日駆り出された各面々までも含めて、全てが終わった後、盛大に酒盛りをしなければならなかったのか、その訳を掌握したのであった。今日、父の流した血は手のひらからのわずかな量だけであるが、今の父の心は大量の酒をもってして洗い流さなければならないほどに、カインタで流れていたであろう血や、または煙のすすかで汚されてしまっているのであって、母は今それを必死で清掃しているのである。

もはやアスリに父と母を責める気などは一切なく、せっかくある程度まで母が綺麗にしたというのに、思い出したくもない光景をわざわざ思い出させてしまったことに対する父への申し訳なさだけを、アスリはただただ感じる一方であった。

「そうだ、アスリ、これ。」

無言となったアスリを前に、父は何かを思い出したかのようにもう一口酒を飲んで地面に杯を置くと、近くに置いていた布袋を手に取って、その中身をまさぐっていった。続いて、父が取り出したものは、黒っぽいすすのようなもので汚れてしまったストラップ状の革ひもで、末端には透明で小さいながらも立派な石が1つくくりつけられていた。

「何これ？えっ、超きれい…！腰飾りかな？」
「あぁ、父ちゃん、森にも行ってきたんだ。」
「えっ！じゃこれって…？」
「そう、家はまぁ、たしかに2つあったようね。アイツら、物も盗ってったな、ありゃ。その片方の家の方、なんか光った気がして、行ったらこれあったから、これだけ拾ってきたんよ。なんて言ったっけか？あの子。もう1人は元々じいさんと住んでたんだから、そっちにはまずこんなもんねぇだろ？あの女の子の母ちゃんのもんだろな、これ。まぁ、もう1人の方の家だったんかもわからんけど。」

断定をしない父の説明の節々から、どうにもティサやユニスの住まいも厳しい状態のようであることがわかる。

「そうなんだ…。じゃあ、ティサのママもいたの？」
「あぁ、いたよ。」
「それで…？」
「聞いた通り、ダメだった。…あの子らはかわいそうだけど、森に

は戻れんよ。カインタから来た子もそうだ。そのうち族長からも話あんだろうけど、うちの村にいるしかねぇな。」

ユニスからも脱出するまでの経緯については聞いていたとは言え、今の父の雰囲気で語られるその後の話は、ティサの母への希望が一切絶たれる、苦しい内容である。父はまた杯を手にして、ちびりと一口含むと、自分でも厳しい表情を浮かべてしまっていることがわかるアスリに、言葉を続けた。

「アスリ、これ、あの子が元気になったら渡してやってくれんか？」
「うん…、わかった。」
「そん時、こう言ってくれんか？母ちゃんは綺麗に亡くなってた、これ拾った家の裏手に1つあった塚の隣に、もう1つ塚を作ってあるって。」

正直に言って、これはかなりセンシティブな任である。アスリにしてみれば父からの依頼を断る理由など一片もないが、任される分量のあまりの重量に対して、アスリは疑問を抱いた。アスリは父からゆっくりと腰飾りを受け取り、たき火の光をキラキラと反射して美しく輝く宝石を見つめながら、やんわりと問いをつないでいった。

「すごいきれい…。でも、いいの私で？パパや、族長さんとかの方がティサやユニスの家まで行ったんだし、もっと良く説明できるんじゃない？ティサもママが死んじゃって、いろいろ聞きたいでしょ。」
「だからアスリじゃないと、ダメなんだ。」
「えっ？」

父は意味を理解しきれていないアスリの顔を、真っすぐ見つめた。

「そう思ったよ。んでも帰りに族長と話してさ。気になんだろ、その子だって自分の母ちゃんなんだから。そうしたら何聞いてくる？根掘り葉掘り聞くだろ？」
「えっ…、それって…。」
「そんでそのあと、居てもたってもいらんなくなって、元気になったら森ん中に突っ走ってくだろ？今はあんな危ねぇのに…、目に見えるようだよ。」

父はここでまた、地面に置いた杯に目線を落とすと、濁ったどぶろく水面のさらにもっと深いところを見つめるようにしながら、大きく息を吐いた。

「だからアスリ、いいか。あの子の母ちゃんは綺麗に亡くなってた。俺も地面を掘って、本当に塚は作った。それだけだ。」

険しい表情のまま、見つめていた酒を一気に煽った父の、杯を手にしない方の手指それぞれの爪の間には、たしかに土のようなものが挟まり汚れていた。目を向ける先が地面しかなくなった父は顔を上げて、彼方から上がろうとする夜明け前の光の方を向きながら、さらにもう一言を繋げた。

「あれは人間がやっていいもんじゃねぇよ…。」

直後に地平線の奥から姿を現した昼のサバンナの盟主は、まだ薄っすらと戦化粧を施した後の残る、出かける前よりもややこけてしまったような父の頰を、静かに照らし出していった。

「アスリ、パパ大変だったのわかったでしょ？もうここまでにしとこ？アスリも頑張って疲れたでしょ？牛さんたちには昨日取っといた草、あとでママが食べさせて、お乳も搾っとくから。アスリはゆ

っくり寝なさい。」

母は父の太ももの上に乗せたままだった手を優しく撫でるように前後させながら、父の語る内容に圧倒され、言葉が続かなくなってしまったアスリに、静かに声をかけた。いたたまれない思いに支配されているアスリの方にしても、これ以上父の受傷箇所を開いて見せてもらおうという気は全くなく、母を見つめてただ無言でうなずくと、今度は朝陽を受けて手中で光る腰飾りについた透明な宝石に一度目をやって、それを固く握りしめてから家の戸口の方へ向き直って、たき火の前から離れていった。

「…さっ、もっかいするよ？」

去り際の背中の方からは、母の小声が一言、アスリにも聞こえてきた。しかし、明らかに父に向けられたであろうその言葉に、もはや心の重さしか感じていないアスリは反応することなどせず、寝ているダカクをまた起こすことのないよう気配を消して家の中へと引き上げ、寝床のいつもの定位置へと体を横たえていった。眠りにつく直前、アスリの耳に入ったのは、朝の光の差し込む東の高窓の向こう側から届く、父と母のぼそぼそとした小声と、水っぽい何かを動かすような、小さく連続する音であった。

その翌日、と言っても日を跨いでいたので同日となる日の昼頃、心ではもっと寝ていたいアスリを尻目に、自律神経はいつまでも寝ることを許さず、若さだけではカバーしきれなかった泥のような倦怠感とともに、アスリはぐずぐずと目を覚ました。ぐっすりと眠っているダカクと父を寝床に残してアスリが外に出れば、心配になるほどやつれた顔をした母が鼻歌を奏でながら、異様なほどに上機嫌に洗濯を始めようとしていた。本能的に母にこのまま働かせるとまずい事態となることを察したアスリは、やや強引に寝床へと母を連

れて行くと、今朝方、母が父にやっていたようにどぶろくを杯に一杯ついできて手渡し、その後の仕事を肩代わりすることを伝えたのであった。疲れる中で余計な仕事が増えたとは言え、この仕事はアスリがやらざるをえないものであり、そこに不満はなかったが、図ったわけでもないタイミングで始めた洗濯の最中、アスリは自分とダカクの身に着けていた腰布を広げて閉口し、結果として仕事を引き受けて正解であったことを実感していた。

洗濯を終え、簡単にほぐした干し肉と牛乳を摂った後、アスリが運べる分だけの牛乳を得意先に配りに出かけてみれば、父の言っていた通り、村の中で忙しく働いている者の姿はなく、牛乳を配りに行ったどこの家でも疲労困憊しきっていて、一部はアスリの一家と同じように家族の誰もが寝ている家もあった。それでも夕方になると、父は今夜は族長の家で集まって会議をすることになっていると言い残して出かけていき、アスリが寝ようという頃にも帰ってくることはなかった。

やや活気を欠いているとは言え、村がいつもと同じように活動する状態となったのは、さらに次の日のことである。ただし、森とカインタでの一件があった上で、そこからのアスリの日常もこれまで通りということにはならず、その朝、いつもと同じく牛を連れる支度を整えていたアスリは、前夜の会議で当面は子どもだけで遠出させることを控えさせることになったことを、父から告げられた。では牛をどうするかと言えば、アスリが牛を先導して出かけることは変わらないにしても、父とダカクもアスリに同行してアスリをできるだけ1人にならないようにしつつ、放牧をしている間に狩りを行うとのことである。

こうして、アスリに父とダカクの3人で、東の近場の草原へと出かける日々が始まった。しかし、表面的にはアスリと牛たちがより安全になったというのにも関わらず、残念ながらこの3人組での行

動は、1日ごとに、徐々に内包していた不整合を顕在化させていった。

まず、牛の乳の量が減ってしまった。元々、アスリの家の牛からは、保有頭数のわりに他家よりも多めの量の牛乳が搾れていたのであるが、食べる草の量は変わらないというのに、毎回近場にしか連れて行かなくなったのが何かに障ったのか、並程度の量しか搾れなくなってしまったのである。

それよりさらにダメになってしまったのは、父とダカクである。猟場が限られてしまった上に、アスリや牛が無事かをいちいち見に来なければならなくなってしまった2人は、この日々が始まって以降、弓矢を用いたメインの狩りで小さな鳥を1匹しか捕まえられなかった。もちろん、アスリの家には貯えや保存食が全くないわけではなく、また罠にかかった小動物や、牛乳で引き換えられるものもあり、突然困窮するということはなかった。ただ、アスリの家の食事からは大ぶりの新鮮な肉が消え、代わりに入る干し肉の量さえも徐々に少なくなっていってしまっていた。

そして1番アスリがいらだちを覚えたのは、これでは全く特別な休息が取れないということである。最初の3日の間ぐらいは、ダカクの顔面を使って気分を良くしておいたおかげで何ともなかったが、アスリを見てそわそわするダカクを見たり、草原で牛を眺めて待ちながら、ユニスの硬さを考えたりするうちに、アスリの心中はどうにも服を全て脱ぎ捨てて、思う存分に耽りたい気持ちばかりが先行するようになってしまっていた。だが、父とダカクはアスリから大して離れることもせず、行ったかと思えばすぐにアスリの元へと戻ってくるために、この前までのように好き勝手に股間をまさぐることもできなくなってしまったのであった。

それでも不満ばかりが募るこの間、アスリの意識の根底には、ティサにあの腰飾りを渡さなければならないということだけは、常にあり続けていた。しかし、あの父の反応を見た上で、果たして何と

ティサに声をかけるべきなのか、アスリは全く正解を見出すことはできず、父の言ったティサが元気になったらという言葉にかこつけるまま、1日、1日と日は過ぎていった。

搾れる牛乳も減り、狩りもうまくいかず、父と母はぼそぼそと話し込む時間が増え、アスリは突き上げてくるような欲求と1人戦い、ダカクはアスリを避けつつも、どっかに行ったかと思えば顔を真っ赤にして戻ってくることが増えつつある日々に、最初に痺れを切らしたのは父であった。半月ほどが過ぎたある日の朝、父はついに耐えかねたのか、今日からしばらくの放牧は午前の早いうちだけにして、それ以降は狩りのみに専念するということを宣言した。牛たちが仮にも喋れるのであれば、直近の減産傾向を踏まえるに、この判断を糾弾することは確実で、実際やろうと思ってできるのかはわからないが、口で抗議できない以上、牛乳の量でサボタージュの態度を示してくるはずである。ただ、もうアスリにしてもいい加減うまい肉を腹一杯口にしたかったし、それはおそらく母もダカクも同じであって、何より存分に狩りができない父は、アスリとはまた違った方向で爽快感を得られずに我慢しており、少なくとも人間側は誰もこの判断に異を唱えなかった。

この日、予告通り3人一行は早めの昼食を終えるとあっさり村へと帰り、牛たちを連れ戻すと、父はダカクと同い年の少年かと思えるほどにはしゃぎながら、家の中にすら入らず、その足で再び東の草原の方へと駆け出し、それにダカクも必死で追走して行った。この様子を見るに、先日あれほど深刻な表情を浮かべて、母の手を借りながら酒で心を洗い流すしかなかった父の頭の作りの基礎は、どうにもダカクとおおよそ変わらないようであり、それはひとまず現実に対しての柔軟な思考というポジティブな形で適合しているようであった。

残ったアスリはと言えば、アスリはアスリで宿題を抱えているわ

けで、その中でもまずは特に優先すべき、高まりに高まってしまったあの欲望をクリアすることが最初になすべきことである。すでにアスリは、今朝父からこの提案を受けた時点で、かつてラダンが1人になる策を練った時と同じように、村の時勢を踏まえながら、子どもが1人だけで出かけても咎められず、かつ脱衣しやすい状況として、安直とは言え水浴びが適していることを見抜いており、不満そうに鼻を鳴らす牛たちの面倒を見つつも、実のところその股間は、朝早くからかなり湿ってしまっていた。

走り去っていった父とダカクを見送ると、下腹のあたりでうずく感覚と、あと少しの辛抱で悪い芯をしっかりと抜ききれるという確定的な期待に心を躍らせながら、アスリは家へと戻り、何食わぬ顔で水浴びの支度を整えていった。さて、準備もでき、調理場の方で作業する母に一声かけて、アスリもまた出かけようとした、その時であった。

アスリが母の方に声を上げようとするよりもほんの少し早く、家の外からは聞きなれない、若い女の声が届いた。

「こんにちはー！アスリいますかー？」

厄介である。この前、族長が来た時もしかり、よりにもよってこれからアスリが楽しもうという時に、アスリを呼びに来たのである。誰だか知らない今の声の主は、数日ぶりに快晴となったアスリの胸中に、突如として1つの雲の形で、これからアスリがやらんとする大いなる行動の前に立ちはだかろうとしていた。

「はーい、だぁれ？」

怪訝な顔をして固まってしまったアスリよりも先に、母がその声へと応じて、手についた何かをはたいて払うようにしながら、戸口

の方へと向かって行った。誰なのかを母の方からも問う様子を見るに、母もこの声に聞き覚えはないようである。

「……あっ！！」

半開きだった戸を大きく開けた母が上げたのは、驚いたような声である。そして即座に母はその場で振り返ると、目を大きく見開いたまま親指を外の方へと向けて、家中で立ち尽くすアスリを呼ぶ仕草をしたのであった。

今日のアスリは別に直接性器を刺激していた訳でもなく、むしろこれから少しずつ火を入れていこうとするところであって、何かが台無しになってしまったということはなかったが、これで今しばらくという時間が、さらに延長されることは定まってしまった。アスリは水浴びの用具をやや乱暴に足下に置くと、硬い表情を浮かべたまま、戸口へと小走りで向かっていった。

このアスリの抱く小さな不機嫌は、アスリが母の横に立つまでの、短い間しか続かなかった。外に立つその人物を目にした瞬間、母の遺伝子を存分に引き継いだアスリの瞳は、母が直前にアスリの顔を見た時と同じように見開き、驚きに満ち溢れていった。

ラリーヤがいた。

アスリの目の前にいるのは、先日あの木陰で絶望の相を浮かべていた時よりもずっと美しく、両目の目尻に小さく赤い線状の化粧を入れ、かわいらしく髪をまとめた、同性のアスリですら思わずハッとしてしまうほど、艶やかなオーラを漂わせた女であった。しかし背丈や体型、肌と髪の色をもってして、間違いなくラリーヤに違いなかった。

そして今、ここにラリーヤ以外の者がいない以上、さっき聞こえてきた高い声は、ラリーヤのものに他ならない。

「ラリーヤ…！！！」

ラリーヤは声を取り戻したのだ。開いてしまった口元を両手で覆い隠し、そのまぶたをさらに持ち上げようとするアスリを見つめながら、ラリーヤはにっこりと笑顔を浮かべて、アスリへと近づいていった。

「アスリ！！！」
「…ラリーヤ！！！声っ！」
「そう！出るようになった！」

両名の様子を見てから、わずかに距離を保っていた母も近づいてきたところ見る限り、どうにも母は先日の悲惨な姿のラリーヤが、今のラリーヤ足るか認識できなかったか、またはそもそもラリーヤの名前を思い出せなかったようである。いずれにしても、母もまたラリーヤに対しては娘が困憊する間、大切な牛を見守ってもらった恩義があり、アスリの反応から目の前の者が誰であるかの確証が得られた今、母にとってラリーヤは丁重に扱うべき来訪者となった。

母はラリーヤの横まで来ると、優しく声をかけていった。

「声、本当に良かった…。この前はありがとうね。」
「いいえ、私の方がお世話になったから。あの、これ大したものじゃないけど、お礼にと思って。」

ラリーヤはそう言いながら、手にしていた不思議な模様の入った布を、アスリと母の方へと差し出した。見れば、色合いはやや異なれど、この布は今ラリーヤが身に着けている、村では見かけることのない、両肩のところに結び目のある上着と、短い丈の腰布が一体となったような服の原料と、近いものであるようである。

「これ、私が染めたんです。」
「えっ！？」
「嘘っ！？すごい！？」

こんな珍しい染め物を見て落ち着いていられる女など、ロマドウにはいるわけもない。アスリも母もさらに目を丸くしながら、ラリーヤから布を受け取るなり、はらりといっぱいに広げて、しげしげと布の模様に見入っていった。

「いやっ！あの、布はここの村でもらって、私は染めただけ…。」
「すごっ！」
「マジですごい！」
「いいの？こんな立派なのもらっちゃって？」
「えっ、立派なんて、全然！良ければまた作ってきますよ！」
「本当に！すごい！ありがとう！」
「ありがとうね！こっちもお礼しなきゃいけないのに…、うち今牛乳くらいしかないけど、飲んでく？」
「えっ！？牛乳！？」

今度目を輝かせたのはラリーヤの方である。母は腕の中で丁寧に布をたたみながら、アスリに目配せをすると、アスリもそれに応じて今朝採れた牛乳の入った甕と器を取りに向かって行った。アスリがまた表に戻ってくれば、母は大き目の敷物を地面の上に広げてラリーヤを座らせ、その前には弁当をくるむ葉を置いて、発酵させた牛乳でできた塊をスライスしたものや、干し肉を並べていた。

茶会ならぬ牛乳の会が始まると、ラリーヤは器にたっぷりと注いだ牛乳をすぐさま3杯もおかわりし、発酵乳もいたく気に入って食べ進めていった。ラリーヤ曰く、カインタで牛を飼う家はなく、牛乳やその加工品を口にするのは初めてであるそうであった。最近は

量が減ってしまったとは言えど、自慢の牛乳を喜んで飲むラリーヤが、元気に自分の声で語りかけてくる姿は、自然とアスリだけでなく、母の表情までも和らげていった。

ただ本当のところは、アスリにしても、それはおそらく母にしても、ラリーヤに真に聞きたいことは目の前に山積しているのであって、今はその多くの疑問点を解消する絶好の機会に他ならない。しかし、せっかくここまで穏やかでリラックスするような場ができた中、やっと声を取り戻したラリーヤに不躾に頭から話をさせることは、あまりにも礼を欠いた行為にあたる。

アスリも大人でないとは言え、そのあたりは心得ており、場の流れに沿うようにやりとりを続ける中で、あくまで普通の会話の一環として、ラリーヤを辿るためのきっかけを狙いすまして、にこやかに、それでいて慎重に、まずは１つ問いかけを行ったのであった。

「本当に声出て良かったよぉー。今日から出るようになったの？」

ラリーヤのこれまで

「ううん、もう声戻って3日目なんだよね。」

幸いにしてアスリの水面下の意図はラリーヤには全く伝わらなかったようで、ここからラリーヤはアスリと母の少々の合いの手とわずかな誘導で、あれやこれやと語っていった。会話の起点は声の戻った3日前であるが、ラリーヤが村に着いてからの日々をまとめると、このようになる。

まず、母とラリーヤ以外のアスリのみが今になって知った事実として、あの日、馬に揺られて気分が悪くなってしまったアスリが自宅で休んでいる間に、ラリーヤはイケメンとともに母を再度迎えに行ったそうである。たしかにあの時、ラリーヤは静かに違和感なくイケメンと一緒に馬に乗って離れていったが、自分も声が出ないのに、わざわざ母のところまで戻ったものとはここまでアスリは露知らず、やや驚きを覚えたのであった。当然、アスリに代わって牛を連れる当時の母も、同じくラリーヤが戻ってきたことにやはり驚いたそうで、アスリはイケメンの男としての気遣いのなさを、遅まきながら呆れ嘆いたのであった。

母と合流し、再び村へと戻ってきたラリーヤは、今度こそ正しい周囲の助言に従って巫女たちの元へと向かい、喉や胸部の診察を受け、その晩はアスリも伝え聞いていた通り、飲み薬を飲んだり祈祷を受けたりしていたそうである。ただ、ラリーヤはこの前見た通り、一足先に運び込まれていたティサやユニスと異なって、声が出ないことを除けば肉体的には健康であるとの診断も下りたそうで、翌日には族長宅に引き取られ、あとは毎日一度、巫女たちの場に通って自分も診てもらいつつ、ティサとユニスを見舞いに行っていたとの

ことであった。

しかし、いくら声以外は問題ないとは言えど、襲撃によって負わされたラリーヤの心的ダメージは、相当なものであったはずに違いない。アスリにはその大きさを全くはかり知ることができなかったが、先日父から聞いたカインタの状況を踏まえるに、少なくともアスリがラリーヤの立場に仮にも置かれてしまったのであれば、毎日めそめそと泣いて、自分の暮らす場を奪った賊に恨みを重ねることだけに注力していたはずであったであろう。

だが、ラリーヤはアスリもすでに見定めている通り、絶望の淵に置かれてもなお立ち止まらずに、さらに先へと進むことのできた強い女である。ラリーヤは族長宅で大き目の布を譲り受けると、染め物の原料となる素材を近隣で拾い集め、自分を救ったアスリに礼をするために、この立派な布をロマドウのやり方とは全く異なった方法で染め上げたのであった。

そうして布を仕上げて、ほうほうの体でカインタを飛び出してきたラリーヤが、ひとまず自分やティサ、ユニスのために服を一揃え仕立て終えた日のちょうど翌朝、ラリーヤは突然声を取り戻したのであった。声の戻ったその日は丸一日、ラリーヤは族長を始めとした村の面々に事情聴取を受けるしかなかったようで、その翌日にあたる一昨日、早速アスリの自宅に布を届けにあがったそうだったが、その時は誰も家におらず、昨日も来たが不在で、今日やっとこの場に至ったとのことであった。ちなみに、ティサとユニスの回復もかなり進み、今日のうちには巫女たちの元を離れ、族長宅に身を寄せるそうであり、仮に今日もアスリが不在であれば、明日からは２人も一緒に誘うつもりであったそうである。

ここまで聞いて、アスリはティサとユニスの状況に安堵したものの、さらにアスリの意識が向く先は、やはり川辺の茂みからラリーヤが飛び出してくる前に、一体カインタで何があったのかである。

そうは言っても、アスリはラリーヤとそれぞれ分担してユニスとティサを背負って引き上げてくる最中、すでに家族が大丈夫かを問いかけて、もらい泣きまでしそうなほどに悲痛なラリーヤの無言の回答を頂戴しているのであって、気にはなれど闇雲にストレートな質問をかけるわけにもいかないのが実状であった。

ラリーヤが一通りを話し終え、一瞬各自が牛乳を飲んだり発酵乳を口にしたりする間も、アスリは数手思いついた会話の続け方の中から、もっともラリーヤが傷つかずに、すなわちここまでのように自発的にラリーヤが流れを説明しやすくなる一言を探し続けていた。そして、ラリーヤが敷物の上に牛乳の器を置いたのを見るや、アスリはどうにか1つ見出した設計を元に、話を切り出していった。

「ラリーヤ、…この前大変だったのに、急におんぶして運んでなんてお願いしてごめんね。」

「全然！ごめんなんて全然！アスリいなかったらここまで来れなかったし！」

「それに、その…、あの時、余計なことまで聞いちゃって…。」

「えっ…、なんだっけ？」

「えっ、アスリ何聞いたの？」

アスリの企ては失敗したかに見えた。サバンナを進みながらアスリがあまりに不用心にラリーヤに行ったカインタに残る家族の安否確認は、今の質問を着実に行わなければならないという動機となるほどに、アスリの心に刻み込まれてはいたが、ラリーヤにしてみれば、一時的に涙をこぼす羽目になってしまったとは言えど、まだアスリの知らぬそれ以前も含めたあの日の記憶としては、存在感の薄いものであったのである。失敗の代償は、母による不穏な視線となって、アスリのもとへと即座に向けられていった。

「あぁ…、お兄ちゃんの話？」

ありがたいことに、ラリーヤは場の空気がおかしくなりかけたところで、何の話であったかを思い出したようであった。アスリはこの時初めて、あの時のラリーヤにとっての無事を気にしていた筆頭となる対象が、その兄であったことを認識したのであった。

ここからはアスリの計算通りである。見る限り先日のような悲痛さは不思議になるほどに全くないまま、おそらく3日前に族長たちにも話したであろう内容を、その生い立ちも含めて、ラリーヤはつらつらと説明していった。

話題が切り替わってすぐ、語られる話の中でアスリの驚いたことは、体形的にも大人びていて、心も強くしっかりとしているラリーヤは、なんとアスリより1歳年上でしかなかったということである。誕生日の時期まで含めて考えれば、年にしばらくの間とは言えど同い年である時期もあるわけで、決して老けて見えるとか、そういうことでなく、ラダンと同年代かそれ以上かのような雰囲気を醸し出すラリーヤをアスリは見つめながら、ロマドウでは半女ですらない子どもの身分である自分自身に対して、強烈な焦りを抱いたのであった。

さて、ラリーヤは襲撃の前まで、5つ歳の離れた兄と2人で暮らしていたそうである。7年ほど前までは、祖父母も一緒であったそうであるが、相次いで他界してしまった後は、幼いころから手伝っていた、祖父母たちの営んでいた染物や加工品を作る仕事を引き継いで、特に生活に困ることもなかったそうであった。まだ村にきて日が浅いというのに、自分たちが着るための服を仕立てた上に、今日の素晴らしい手土産まで手早く準備した様子を見るに、ラリーヤの仕事の腕は確かであるに違いなく、アスリの中でラリーヤは格好の良い理想的な女としての確固たる地位を瞬く間に築いていった。

なお、ラリーヤの母はラリーヤを出産した際に亡くなっており、

父も物心がつく前には、すでに鬼籍に入っていたそうで、カインタでは兄の他に身寄りがなかったようである。唯一、親戚であったのが、ラリーヤが生まれる以前のずっと大昔に森の中に生活の拠点を移した祖父の弟と、その孫であるユニスで、ラリーヤの祖父母がまだ存命であった頃は、大叔父がユニスを連れて、ときたまカインタまで遊びに来ていたそうであった。つまりラリーヤとユニスは、はとこの関係に当たる。

思えば、アスリがラリーヤと初めて出会った時、ユニスはラリーヤのことをカインタのアレであるとか、爺さんの兄さんの云々としかアスリに伝えなかったばかりか、ラリーヤはユニスのことを覚えている様子であったのに対して、しばらくの間は誰だか思い出せていない様子であった。どうにもユニスという奴は変態なだけでなく、いい加減でもあるようである。ラリーヤが大人に向けてずっと先を走っている一方で、同い年であるユニスのあの風体を見るに、直前にアスリが感じていた焦りは、２人を足して割った自身がちょうど中間地点であるという仮置きによって急速にしぼんでいき、アスリの心中には再び平静がもたらされていった。

アスリが気づけば、ラリーヤの話はあの出来事の場面へと差し掛かっていた。

「そうそれで、あの日。ただね…、あの。…ごめん。」
「あっ！ごめん、もう辛かったら良いよ。」
「そう、もういっぱい話したんだし、無理しないで。」

突如、言葉を詰まらせてしまったラリーヤの様子を見て、どうでも良いことにばかり頭を回していたアスリは即座に助け舟を出し、母も声をかけながら、父の心を先日洗い流していた時のように、空っぽになっていたラリーヤの器を取り甕から牛乳をすくって、ラリーヤへと手渡した。

「あっ、ありがとう。大丈夫だから！」

ラリーヤもいたく牛乳を気に入ったのか、すでに数杯は飲んだにも関わらず、にこやかに礼を述べながらおかわりの1杯を受け取ると、まるでどぶろくでも口にするかのようにしみじみと一口ふくんでから、小さく喉を鳴らして飲み込み、器を目の前へと置きやって、伏し目がちに真相を声にした。

「あの…。正直、あの日あんまり何があったか覚えてなくて…。なんか声出る前までは、思い出そうとすると、勝手に涙が出ちゃってて。」

「えっ？ねぇ、ホントに無理しないで、もういいよ？」

　ここまで言われて、母の声のトーンもラリーヤが持ってきた布のように、心配が色濃く模様付けされてしまっていた。ラリーヤもそれを察知し、下に向けていた目線を上げてアスリと母の方を向いてから、重くなりかけた流れを打ち消すように、続きを語りだした。

「いやっ、今は大丈夫！声出るようになってからは、もう大丈夫で！ただ、なんていうか、あの日のこと思い出そうと思っても、頭に布かぶせられたみたくて、全然出てこなくなっちゃうってか…。朝、お兄ちゃんと家の中にいて、そこまで。次はお兄ちゃんがすんごい顔してて、小声で、覚えてるか？昔来てたユニス、アイツん家南の道沿いにあるはずだからって言ってて。行こうよって言ったんだけど、俺は後から行くからって。なんでお兄ちゃんは後からにしたのか、全然覚えてない…。」

　ラリーヤは今の時点で、あの日何があったか思い出そうとしても、涙は出ないと述べていた通り、たしかにその頬を涙がつたうことはなかった。だが、アスリが見るに、２つの瞳の黒い部分には、何らかの深い暗がりが控えているようでもあった。絶句する母とアスリを前にして、ラリーヤも場の空気を振り払いきれないと諦めたのか、２人よりも少し奥の虚空へと目を逸らして、どこかの１点を見定めると、さらに続けた。

「で、その次はもう森の中走ってて。途中でガサッって音がして、あっ、私死ぬのかなって思ったら、ちょっと離れたとこから、ワン

ちゃん出てきたんだよね。ちっちゃい頃、カインタにユニスが犬連れてきたことがあって、なんかそのワンちゃんっぽい気がしたから、もうあとずっとついて行って。そっからは結構覚えてて、超速くてめっちゃ先行っちゃって、ワケ分かんなかったけど。そしたら、あの川に出て…。」

そこまで喋って、ラリーヤはアスリの方へと向き直ると、しっかりとアスリの両目を見つめた。

「…アスリがいて、助けてくれた。」

「全然！助けただなんて。」

もちろん、これが社交辞令でないことはアスリも理解していたものの、とっさに口から出てくるものは、謙遜する組み立てである。

「それに、なんていうか…。あの日の私、煙まで見て、ユニスにカインダだって言われたのに。…あと私のパパたちもラリーヤのお兄さんや、カインタの人たち、助けられなかった…。」

「そんな！アスリいなかったら私ここまで来れなかった。それに…。」

ラリーヤはここで言葉を区切ると、また牛乳を一口飲んでから、確信に満ちた声で言葉を発した。

「お兄ちゃん、生きてるから。」

この瞬間、アスリは自分が大きくしくじってしまったことを痛感した。ここに至るまで、ロマドウの誰もがラリーヤのたった1人の大切な家族を救えなかったということは事実ではあるが、そうであったとしても、今の話の流れでラリーヤにそれを突きつけたところ

で、彼女の心を無駄に責め立てるだけなのである。アスリは取り繕うかのように、ただちに弁明を開始した。

「あっ、その、ごめん。そうだよね、パパもカインタで、若そうな人は見つからんかったって言ってたし。」

「いや、あの。そのね、そういうんじゃなくて…。」

これもミスのようである。母が眉のあたりをさするような素振りをする横で、アスリの両脇の湿度は、ぐんぐんと高まっていった。ところが、ラリーヤは不快を顔に出すわけでもなく、苦笑いに近いようななんとも言えない表情を浮かべて、焦るアスリだけでなく、自分自身にも言い聞かせるように続けた。

「さっきも言ったけど、声戻るまでは何あったんだっけとか考えるだけで、すっごい涙出てきてたんよね…。それに、私もカインタがどうなってたか、行ってきた男の人たちがしゃべってるの聞いちゃって。もうその日はさ、アホみたいだけど、お兄ちゃん死んじゃったかもってずっと泣いてて、気がついたら寝てたんだよね。」

非常に苦しいムードであるが、アスリも母も、ここは石のように押し黙って、微動だにせずに耳を傾け続けた。

「そしたらさ、お兄ちゃん夢に出てきて。いつもみたく、その…、してくれて、ラリーヤ馬鹿だなぁ、俺は大丈夫だから心配すんなよって。それで私、夢の中でお兄ちゃん！って目いっぱい叫んだら目が覚めて、そしたらもう声出るようになってて。」

ラリーヤはこの内容を淡々と語る一方、アスリの胸中はどうにも言い難い、張り裂けるような思いが満ちていった。思わず鼻をすりあげたアスリに、ラリーヤは泣き落としにかかるような一言を付

け加えた。
「だから、お兄ちゃんは生きてる。」
ラリーヤの言説には、当然ながら一切の確定的な根拠はない。しかし、信念に満ち溢れたラリーヤの二重瞼の奥の、輝くような2つの瞳の中には、少なくともラリーヤの兄も浮かべたであろう優しさが宿っていることは確かであった。ついにアスリは、ラリーヤとその兄の2人の強さに対しての感傷に耐えきれなくなり、葉に載せられた発酵した乳の切れ端の方に目をやって、静かに落涙してしまった。
母ももう十分すぎるほどにラリーヤの身に起きた出来事を理解し、どうにか平静を保とうとしながら、次の言葉を探しているようだった。一拍の間を挟んでから、母は声をやや震わせつつ、ラリーヤの確信へと応えていった。
「…大変だったね。んっ、大丈夫。絶対お兄さんは生きてるから…。ごめんねぇ、長々といろいろお話させちゃって。」
「いえいえ、本当に私は大丈夫だから。」
ラリーヤはそう言って、残っていた牛乳を飲み干し、穏やかに口元を手でぬぐっていった。それを見た母は、ここまでこの話題から離れようとしつつも、その術が見当たらなかったのか、まずラリーヤにさらにおかわりをさせようと、少し腰をあげてラリーヤの器に手を伸ばしかけた。ただ、すでに相当牛乳を飲んだラリーヤは、器の上に広げた左手の甲と軽い一礼でその申し出を断って、代わりにすっかり目元が湿っぽくなってしまったアスリの方へ顔を向けたのであった。
「それより暗い気分にさせちゃって、ごめんね…。」

ここでも気を遣うラリーヤに、アスリがどうにか応じようと目頭を一度抑えてから顔をあげた時、言葉を先につなげたのは、突然何かに気がついたような表情を浮かべたラリーヤの方だった。

「あっ！　そうだ。今日さぁ、まだユニスとティィサのこと見に行ってないんよね。もう族長さんの家に来たと思うし、今から一緒に来ない？」

ラリーヤが2人へ水を向けるタイミングは、完璧であった。これでアスリたちの方から呼び起こしておきながら、勝手に鬱々とせざるをえなかった時間は、ひとまず区切りである。

この提案にアスリもごくわずかな間、明るい気持ちを取り戻しかけた。だが、次に待ち受けるのはユニスとティィサであることに気づくと、喉まで出かかった同意にアスリは躊躇してしまった。すでに2人に何があったかあったか知ってはいれども、ラリーヤでさえこの状況であるのに、あちらも相当なのである。特にティィサは母を失っているわけで、そこにアスリがどんな顔をして出向けば良いかなど想像もつかなかったし、それがちょっと行って一品渡して帰ってくるだけの仕事を、ここまで遅延させている理由にも当たる。

加えて、もう1人は会いたいし、いや、やはり顔を見るだけで恥ずかしい気持ちになるような会いたくない相手であるし、そうは言いつつも会ったらどんな気持ちを自分が抱くのか気になる、存在を考えるだけでアスリの頭の中をいやらしい思いで満たしにかかってくる変態である。直前にラリーヤとこういう話さえしていなければ、ユニスと数日ぶりに会えるという話が持ち上がった時点で、アスリはこっそり先に1人で抜け出して、最低でも3回程度は手早く爽快感を得ておこうという気にもなったであろうが、もはや今そんな気分にはなく、結局ユニスへの好意とティィサへの仕事をかけた天秤は、つり合いが取れずにティィサの方に傾いてしまっていた。

しかし、母はアスリの考えていることなどはお構いなしに、大分鮮度の落ちてしまったアスリの背中を後押しするように声をかけた。

「あっ！いいじゃん。アスリ行ってきなよ。」

「…そうだね、ママも行こうよ？」

どうせ行かなければならないのであるなら援軍がいた方が、アスリには助かる局面である。ところが残念なことに、母は少しだけ考えるような顔をしたあと、アスリの誘いを却下した。

「ママは…、ちょっとまだやることあるから。アスリ、この前パパから預かったアレ、忘れないであの子に渡してきなさい。」

今の反応を見るに、ここまであれこれ聞いた上で、母がアスリについてこないということは、父の言っていたように、ティサに余計なことを喋らないようにするためである可能性が高い。もうどうにもならないことを悟ったアスリは、覚悟を決めてから黙って頷いて立ち上がると、ゆっくりと自宅へと戻り、外出する時のいつもの布袋に先日来大切に保管しておいたあの宝石つきの腰飾りを丁寧にしまっていった。

アスリが槍と布袋を手にして戻れば、ラリーヤも支度を整え終えており、母から皿として使っていた葉で包んだ、先ほどまでおそらくこの場に並べられていたであろう、干し肉と発酵させた乳を土産に持たせられているところであった。

「ご馳走様でした、牛乳すっごいおいしかったー！」

「そう？良かった！ウチ、牛乳ならいくらでもあるから、また遊びにおいでよ。」

「それじゃ今度はまたそのうち違う色のとか、あと服もできたら持

ってくるんで。」
「本当に！でも気にしなくていいからさ。あ、アスリ準備できた？
ちゃんと持った？」
「持った。」
「じゃあ、アスリ行こっか。ありがとうございました。」
「じゃ、また。気をつけてね！」

高い声を上げながら手も挙げる母に、ラリーヤも軽く手を振り応じて背を向けると、ラリーヤはさっきの話の後だというのに、随分牛乳で満足しているのか、軽やかな足取りで族長の家の方角に歩みを進めていった。アスリも母に目で合図をしてから、その後を追い始めたが、ラリーヤの晴れやかな後ろ姿とは対照的に、アスリの疲労のない両脚は命からがら引き上げてきた直後であるかのように重たかった。とは言え、いつまでもラリーヤの後ろを進むのではあまりに決まりが悪く、アスリはすぐにラリーヤの真横まで駆けていったのであった。

ラリーヤと族長の自宅に向かう最中、場合によっては今から再びティサから暗然たる話を聞かなければならないかもしれないアスリに、これ以上ラリーヤに気を使いながら余計なことを聞きうるほどの余力は残されておらず、ここでアスリの方からラリーヤに対して何か問いかけるということはなかった。ただ、ここは配慮があってか、それとも無垢な気持ちからなのか、いずれにしてもラリーヤがアスリに会話の起点を提供し、その話題もロマドウの村の随所に驚くような内容ばかりであったのは、アスリにとって救いであった。

道中のラリーヤの話を聞く限り、ロマドウはカインタのすべてを圧倒した大都市であるそうで、ラリーヤは通りがかるあれこれに対して、ほとんど質問に近い話をアスリに振っていった。ラリーヤは生まれてこの方、つい先日初めてロマドウに訪れるまで、一度もカインタとそのまわりの森より遠くに出たことがないとのことであり、砂レンガ造りの家々や人々の数、農業に牧畜だけでなく、商人に大工や鋳物屋等、アスリにしてみれば当たり前の専門化した職業に、全く脳みそが追いついてきていないようであった。アスリもこれまで方々を散策してきたが、毎度牛たちを連れている以上、別の村に行こうなど考えたこともなければ、そもそもよその村に対する意識自体がなかったことから、父や母にどこかに連れていって欲しいとねだったこともなく、ラリーヤと同じでロマドウ以外の村を知らなかった。しかし、思った以上にアスリの享受してきた日常は、この近辺で暮らす者の中では恵まれたもののようである。ラリーヤがロマドウの日常に目を丸くしているところを見るに、仮にユニスにティサも同じく遠出した経験がないとすると、おそらく最大の街のイメージはカインタで止まっているはずで、アスリが改めて2人に後日ロマドウの中を紹介すれば、あともう一度このような反応が得ら

れれるであろうことは容易に想像がついた。

アスリがラリーヤから次々投げかけられる問いに答えるうちに、先日カインタに出向いた家族の安否を気遣う者たちが集っていた、あの広場へと2人は差し掛かった。昼下がりの太陽が照りつける今日の広場の人影はまばらで、数本の木々や周りの家の壁沿いの日陰に、老人たちが集まっているだけであったが、中央の何もないところには敷物が引かれていて、そこに男たちが数名、輪になって両膝をつけて、何やら指を指したり敷物の上にさらに引かれた動物の皮か何かに線を入れたりしながら、話し込んでいるところであった。

よくわからないその集団にまで興味津々のラリーヤを受け流しつつ、アスリが広場を横切ろうとした時、ちょうど輪の中で四つん這いの体勢だった1人が顔を上げれば、族長である。バッチリと目が合ってしまったアスリが小さく槍を手にした手を挙げると、族長は周りの者たちに時間をもらうような仕草をしてから、脇に置いていたキセルを手にして、すぐさまニコニコ笑みを浮かべながらアスリたちの方へと駆け寄ってきた。

「こんちはー。」

「いっす！アスリ、ラリーヤとどっか行くんか？」

「そう、ちょうど族長さんの家行こうとしてたとこ。」

「もうティサとユニス、戻ってきた？」

「ああ、もう戻ってんだろ。それよりラリーヤ、ちょっとだけ待っててもらえっか？アスリ、ちっと来てくれ。」

族長はキセルをふかしながらラリーヤを制して、日照りで暑い中だというのにアスリと肩を組みつつ、ラリーヤを背に向けるように少し距離を取ると、煙の残る息で小さくささやいた。

「今日アレよな？ティサに渡すんよな？」

「そうだけど…。」
「父ちゃんから聞いてっと思うけど、悪りぃんだけどよろしく頼むよ。俺からもある程度は言ってあっから。」
「大丈夫。」

正直なところ、アスリは渋々この仕事を請け負っているわけであるが、今からやらなければいけない以上、無駄な心配を与えない回答を返すのは筋である。

「すまんねぇ、ホント立派よ、アスリは。あとそれでもう1つ、お願いなんだ。」
「んっ…。何？」
「あの子らと仲良くしてやってくれん？ラリーヤも含めて。」
「えっ、そんなのもちろん…！」
「ありがとな、あの子らはもう帰るとこがさ…。だからしばらく、俺んとこにいてもらうしかないんよ。ただ、村でアスリと年近い子らは、頭でわかってても、すぐは難しいだろ？もしかすれば、あの子らに嫌なこと言う悪ガキもいるかもしれん。でも、アスリなら1番大丈夫だろ？」

たしかに、ラリーヤは村に着いてから染料を用意するのに、すでに数日は村の周りを出歩いていたはずであるのに、この広場に到着するまでの間、アスリに堰を切ったように質問を続けていた。この様子を見る限り、今のラリーヤには気になることを気軽に聞ける相手もいないようである。もちろんラリーヤには、言葉が出なかったというコミュニケーションの障壁がしばらくあったわけではあるが、それが解消されて早3日が経過した今もなお、まだロマドウの人々とかなり距離感があることを踏まえれば、怪我の回復に専念してきた他の2人にとっても、周囲と打ち解けるためにアスリの力が必要であることは明白だった。

「あぁ…、そういうことね。」
「まぁ、んな奴いねぇと思うけどさ。もしいたら教えてくれ。シバく。」
「わかった、大丈夫。」
「ありがとな。よろしく頼むよ。」

族長はここで暑苦しくアスリの肩にまわしていた腕を開放し、アスリの二の腕を軽くタッチして手のひらをアスリに見せてニヤリと笑うと、族長とは別途一服し煙草の煙で雲でも作りそうな元の輪の方へ小走りで戻っていった。

もう、この広場を過ぎれば族長の自宅はすぐである。広場から北に向かって伸びる通りに入ると、他の家々よりも二回りほど大きい、年季の入った砂レンガ造りの族長宅がアスリの遠目にも入ってきた。家の前では、近くの木々から家の前に立てられた高い棒に向かって張られた紐に、村では見かけることのない斑状の模様が入った大きな布が数枚、干されて風に揺れていた。それにしてもこの布もまた、離れて目にしているというのに素晴らしい仕上がりである。染め上げたのは確実にラリーヤであるはずで、アスリがその出来栄えをここでも称えようと、ラリーヤの方を向きかけたその時、風が強くひと吹きアスリたちの正面から抜けていき、あわせて布もふわりと大きく上方へと浮き上がった。

ティサが見えた。

その、ハッとした表情をアスリが認識した直後に、布ははさりと元の位置へと戻ってしまったものの、アスリに気づいたティサの方からすぐその横に飛び出して、にこやかにアスリへと声をかけた。

「アスリ！！！」
「ティサ！！！」

つい先ほどまで重苦しい気持ちに支配されていたとは言えど、数日ぶりの再会に沸くアスリは、布の横に立つティサの方に向かって駆け出していった。一方、ラリーヤは毎日様子を見に行っていたということもあってか、アスリを追いかけるスピードはゆったりとしたものであった。

「大丈夫だった？もう平気？」
「うん！もう結構良くなった！」

ラリーヤと同じ模様とデザインの服をまとったティサは見るからに元気そうであり、先日とはまるで別人のようである。もっともあの時は息も絶え絶えであったわけであって、大人のようなオーラを醸し出すラリーヤとはまた別の、少女らしい線の上にどこかボーイッシュさを感じさせつつも、爽やかな笑顔が放つ太陽のような存在感は、彼女が本来はこの姿であることを強く物語っていた。ひとまずこのティサをアスリは目にしたことで、ティサと会うということ自体に感じていた如何ともしがたい気持ちは、半分程度までは消滅していって、ティサに呼応するようにアスリの表情もまた自然と笑顔がへと変化していった。

合流した2人が今にも話し込みだそうというその直前、やや後ろから来たラリーヤが、先手を取ってティサに声をかけた。

「やっぱりもう戻ってきてたんだね。何してたの？」

「これも、ラリーヤが染めたんだよね？ちょうど戻ってきてすぐだったんだけど、すごい綺麗だなって思って、めっちゃ見ちゃってた。」

ティサはそう言って視線を送った先に干される布に触れつつ、布によって天幕のように形作られた空間の中へとゆっくりと進み、アスリとラリーヤも同じようにしながらその後に続いていった。

「そうそう！私も思った、超綺麗だよね！」

「マジー！ありがとう！これでアスリにも服作ってあげるよ。もちろんティサにもまた。」

「えっ！めっちゃ嬉しい！」

「待って！超嬉しい！ラリーヤすごいよね。」

「いやぁ…、あっ、ってかさ、ユニスは？」

「あ、ユニスも一緒に来たんだけど、歩く練習するって言って、またすぐ出てっちゃったとこ。」

「ユニスも大丈夫そ？」

「まだ動くと痛そうみたい。でも歩くのは歩けてるよ。やっぱまだちょっと、動かすと痛いよね。」

布の張られたちょうど真ん中のあたりで、ティサが肩を押さえて顔をしかめながら左腕を上げようとすると、アスリとラリーヤはその左の二の腕をそっと制するような動きを取った。ティサもそれに応じて上げかけた腕を下げて大きく息を吐いて、一瞬、布の狭間には静寂が訪れた。

ここを逃すと、またしばらくはモヤモヤとしながらタイミングを

図らねばならないことを直感したアスリは、ゴクリと生唾を飲んで、いよいよあの話題を切り出そうとした。ただ、ここでもアスリは先手を取れず、次に語りだしたのは今度はティサであった。

「…アスリ、この前本当にありがとう。本当に。」

「えっ、いや、そんな…。」

謙遜も込めた否定の言葉に対して、ティサはアスリの方へと改めて向き直り、目をしっかりと合わせた上で、さらに続けた。

「私さ、もうあそこで死ぬって思ってた。ってか、ユニスもダメかもって思った…。死ななくても、ユニスもう歩けないかもって。でも、今そうじゃないじゃん。アスリが来て、ラリーヤが来た。だからユニスも私もまだ元気で、生きてる。」

淀みなくどこまでも広がる空の下、やや強く吹く風に乗って、青一色の天にも浮かび上がろうとするかにも思える布に囲まれる中、ティサからもたらされるアスリに対しての感謝の言葉は、まだアスリの心に残置し斑点と化したティサに対する思いを、陽に照らされてわずかに透き通る布上の模様のように昇華させていった。ティサの今述べた内容は公明で実直な正しい流れに沿ったものであり、たとえこの先にティサに手渡す遺品と付随するエピソードが重いものであったとしても、それを適当にごまかしたり、またこれまでのように先延ばしたりなどできないことをアスリは悟ったのであった。

アスリはティサの誠意を真摯に受け止めて、自分の知る事実ありのままを、ようやくティサに伝えきる覚悟を整えていった。

「…ありがとう。ティサにそうやって言ってもらえて、本当に嬉しい。それで…、あのさ、私ティサに渡すのが、…ちょっと待ってね。」

アスリはその場にしゃがみこんで布袋を足元に広げると、中からゆっくりとあの腰飾りを取り出していった。すぐさま続けて、付帯する宝石が露となり、外光を受けて星のように煌めいた瞬間、ティサの心臓の鼓動が聞こえてくるような声が染められた布の天幕中に広がった。

「えっ！？えっ！？えっ！？…これって！！！」
「やっぱりそうだよね。」

ティサに呼応しつつ、まだアスリが手元の腰飾りに目を向けている中、何かが視界の隅を2つ、地面の方に向けて進んでいった。すぐにアスリがその落ちた先に目を向けると、赤茶色の地面には、真新しい雫の跡が2点つけられている。驚いたアスリが顔を上げようとするより早く、腰飾りを載せたアスリの右の手のひらの真上に、ティサが降ってきた。

直後にティサは両膝に、痛む左側まで含めて両手を地面につけ背を丸めると、アスリの右手には濡れた布を絞ったかのような、涙の豪雨が降り注ぎ始めた。

「っ…！！うっ…！！…んっう！！…ごれっ…！っ！！うっ…！！ん！わだしのママが、ママが…っ！！うっ…、ママがね…、んっ…！昔、…ふっ！！ん…、パパもいぎでだとぎ…！づげでた…。」

ティサは号泣した。アスリも泣いた。ラリーヤも泣いていた。先ほどのアスリの覚悟など、ティサの悲しみを前にすれば、どうでも良いものにしかならないし、いくら今3人で泣いても、アスリの右手の上でティサの涙によって洗い流される一粒は、決してティサの母になどなりえないのである。

もう、どうすることもできなかった。ティサはこれ以上何も喋れなかったし、アスリもラリーヤもティサにかけるべき言葉が見当たらなかった。アスリはもう一方の手でティサの頭を撫で、ラリーヤもティサの横にしゃがみこんで、背にゆっくりと手を置きやって、最大の悲しみに暮れるティサを囲むように身を寄せ合うしかなかった。

ティィサの支柱

ティィサが自分の心の制御を取り戻すまでには、しばらくの時間を要した。ここが乾いたサバンナでなければ、涙だけで水たまりができてしまいそうなほどに泣きつくしたティィサは、ひどく濡れてふやけてしまいそうになっているアスリの手の平からやっとのことで遺品を受け取ると、地べたにへたりこんで自分の手中の宝石を見つめながら、先ほど涙の中で喋りかけた内容を魂が抜けたような口調で改めて語っていった。

「…これさ、パパも生きてた時はさ、ママがわりと腰につけてる時があって、何かしててもキラッキラッて光ってたんだよね。そういう日のママはいっつも機嫌が良くて…、パパも楽しそうでいつもより早く帰ってきたりなんかして。でもパパ死んでからは、1回もこれママつけなくなっちゃってさ、もう何でだったのか聞けないけど…。だからこれ、パパとママがいた頃の、私の思い出。」

いたたまれない話である。この一石は、ティィサにとって母の遺産というだけでなく、ティィサが父と母と過ごした幸せな思い出を凝縮して具現化したそのものにもあたるのである。

アスリが一度うつむいて濡れていない左手で目頭を押さえてから顔を上げると、なぜかラリーヤは何か意味ありげな視線をアスリの方に送ってきていた。意図の汲めないアスリがティィサを遮らないように何を言いたいのか聞こうとしているうちに、今度はティィサの方が宝石からアスリの顔の方に視線を上げて、さらに続けた。

「アスリ、これどうやって…？」

「これね、もう聞いてると思うけど、あの日の次の日、村の大人の

男の人たちがカインタ行ったんだよね。それでうちのパパは、カインタだけじゃなくて、森の方も行って、ティサとユニスの家だったとこも見つけて。そしたら、キラッて光ったのが見えて、これがあったんだって。だから多分、ティサの家のじゃないかって、預かってたんよね。」

「そうなんだ…、ありがとう、アスリ。」

苦しい時間の真っ只中であるが、ここでもう1つ、アスリは父から託された話をあわせてティサに共有しておかなければならない。

「…、それでさ、あの。ティサのママ、とても気の毒なことになって…、ただパパがね、とても綺麗に亡くなってたよ、って。それで、その腰飾りがあった家だったところの裏に塚を作ったから、言っといてって言っててね。」

「えっ…、それって、その、なんていうか、1個だけ元々塚があった方？」

アスリも決していい加減なわけではないが、ティサの問いで父が伝えるようにと提示した情報の一部が不足していることを思い出した。

「あ、そうそう！これあった方の裏の、塚が1つあったところの隣に、もう1つ塚を作ったって言ってた。」

「ありがとう…、良かった、それならパパの隣だ。…いや、あのさ、わりと近くにユニスの家で、ファラール、あ、あの犬ね、あれ飼う前に飼ってた犬死んだ時に埋めてて、その横にも古い犬のお墓があるんよね。…さすがにママもユニスの家の犬と一緒じゃさ。」

今のティサの声には安堵とともに、ほんのわずかな冗談めいたトーンがかかっていた。ティサは喋りながら精神的な落ち着きを取り

戻し始めたのか、今の状況にも目を向け始めた。
「ってか、ごめんね…。めっちゃ取り乱した。」
「いやいや、そんなさ、しょうがないよ。」
「そうそう、全然大丈夫だから。」
「死んだことは分かってたつもりだったし、それも族長さんたちから聞いてたしさ、ママ刺されるとこは私も見てたし…。」

ティサはここで腰飾りの宝石を固く握りしめると、アスリやラリーヤよりも奥の干された布の方を見つめて、小さく呟いた。

「…絶対に許さない。」

今、ティサが抱いたのは、怒りではない。恨みと憎しみである。たった一言であれど、アスリもラリーヤも、ティサがあの賊に向ける気迫と剣幕に一瞬でひるみ圧倒され、そこに続けて何かを語ることはできなかった。直後に、ティサも自分の述べた言葉で場の空気を澱ませたことを理解したのか、強張らせた手だけでなく表情も緩めると、自分の方から話題の方向性を変えるように会話を繋げていった。

「…でも、ママがさ、パパが死んだ時に言ってたんだけどね。私その時もさ、今みたくすっごい泣いちゃって。ママその時、ママもいつかティサより先に死んじゃうと思う、だけどいつまでも悲しまないで、パパもママもティサがずっと悲しんでるところは見たくないって、言ってたんよね。」

ティサはここで一度鼻をすすりあげると少しうつむき、ややはにかむようにして続けた。

「それに…、私にはユニスがいる。ユニスは生きてる。だから私は大丈夫。」

そう言ってティサは泣き腫らした顔をアスリとラリーヤへと向けると、照れたように小さく笑みを浮かべたのであった。この瞬間、アスリの中にはかつて得たことのない、胸元を押えつけられ、喉の奥に指でもつっこまれたかのような、何とも言い難い感覚がこみ上げてきた。

ティサの言葉を踏まえれば、ラリーヤが強く前に向かうために大好きな兄への希望を見失っていないのと同じように、ティサにとってユニスという存在は、母の壮絶な最期とその後の想像もつかないほどの悲しみを転換し、自分の人生を歩んでいくための大切な支柱であるに違いない。その関係性は幼馴染として小さな頃から一緒に育ち、同じ物を食べ、ともに遊び働く中で、長い時間をかけて築きあげられてきたものである。また、ティサの母が死の間際にティサをユニスに託した理由も、おそらくそこにあるはずである。

今、ティサがなぜ少し恥ずかしがるようにユニスのことを引き合いに出したのかと言えば、ティサはユニスのことが好きであり、愛しているからと考えるのが、最も自然だ。それに対してユニスもまた相対する思いを持っているかもしれないし、もしかすると2人は将来を誓いあっているのかもしれない。そうであれば、いくら先日ユニスがアスリに興奮を抱いて、またアスリもそれにまんざらでもないどころか、それを新たな糧としてもっともっと高いところに気持ちを動かしていったところで、すでに濃厚に構築されきっているティサとユニスの間に、突然ぽっと出てきたアスリが割って入ることなどできないのである。

つまり、アスリがどんなにユニスのことが好きでも、ティサを前にしては自らの思いは不純であり、仮にもティサからユニスを取り上げるようなことをすれば、それはティサの人生に唯一残された未

来を奪うことにあたるわけで、そうなったティサはこの先、手のひらの中の宝石と向き合うことしかできなくなる。無論、アスリはそんな選択をしてティサを追い込むほど残酷ではない。

アスリはこらえるしかなかった。ユニスは、やはりどう考えても好きである。しかし、絶対に手は届かない。ごく短い時間にそこまで頭を回しきり、呆然とするように固まってしまったアスリの目尻からは、いつの間にか先ほどとは別の涙が溢れ出し、その頬を一筋の流れとなってつたっていった。

幸か不幸か、再び涙するアスリの姿から、ティサとラリーヤがアスリの真意を見抜くことはなかった。それはラリーヤもまた目のあたりを押さえて、涙をこらえるようにして押し黙ってしまったことからもわかる通り、アスリの涙は、健気にも自分の家族に降りかかった惨事から立ち直ろうとするティサの強い意志を前にした、言葉にできない哀れみによるものであると捉えられたことによるはずである。明るく振る舞ったつもりで、かえって場の雰囲気を暗くしてしまったティサは、これ以上何を話せば良いかわからなかったのか複雑な表情を浮かべただけで、布の内側の空間にはアスリのあげるおかしな呼吸の音だけがこだましていた。

この場の3人誰もが、次の会話の糸口をつかむことができないまま、非常に長くも感じられるし、そんなに時間が経ってもいないように思えるほどの間、沈黙していた。一方で布の外側からは、地面を突くような音が等間隔に少しずつあたりに響き始めており、やがてそこに獣の呼吸音も加わって、着実にアスリたちのところへと接近してきているようであった。今のアスリに音を響かせながら近づいてくる存在に対して関心を抱くほど心に余裕はなく、ひたすら内面に対峙して考えを巡らせて、感情の高ぶりに翻弄されるがままであったが、状況はその正体が発した一言で一気に打開された。

「ティサー！　いるー？」

ユニスの声だ。

ロマドウの仲間

「あ、ユニス？…こっちいるよ！」

即座に声に応じたのは、もちろん指名を受けたティサである。アスリにしてみれば、こちらに向けて歩を進めているのは、つい少し前まで顔を見たくてたまらないはずであったのに、今は最も顔を見たくない相手にあたる。そうは思いつつ、やはり見たいものは見たい。

アスリがユニスの声のした方向の布に顔を向ければ、つかつかと地面を突く音とともに、地面と布の間からは履物をはいた両足と2本の木の棒も接近してきた。その左足の方のふくらはぎのあたりには、狭い幅で柵状に切られた象牙色の布がぐるぐると巻きつけられており、近づく本人の先日負った毒矢による怪我はまだ回復の途上にあることが見て取れた。ほどなく、間仕切りとなっている染められた布の端は、外側から木の棒によってかき分けられた。

持ち上がった布の先にいたのは、まぎれもなくユニスであった。

「あっ…！」

中にいたアスリを一目見て、ユニスは驚いたような声を上げた。

相変わらずである。可愛らしくさえも思えるいでたちの中にも、凛々しく輝く2つの美しい瞳、これをアスリは見たかった。

今、ユニスを前にして、アスリは鎖骨の奥の気道を直に掴まれて、そのまま全身を上方に持ち上げられるかのような苦しさを感じていた。この、アスリの全てを知る変態は、悔しいことにアスリにとっ

て紛れもなく身を挺して自身を守ってくれた最高の男であるし、性の対象であり、恋する相手である。はっきり言って、もう一度見せろと言われれば、絶対に口では嫌だと断るが、最初から最後まで何から何まで広げて見せるし、それだけでなくアスリの持ちうる全部を捧げても良い。しかしそれは、何度も言うようにティサを前にしては不可能なのである。

葛藤するアスリと何を考えているのかわからないユニスは、お互いに目を合わせたまま、呆然としたように固まっていた。ここに割って入ってきたのは、ユニスの従者であった。例のあの犬はユニスの足元から短い間隔で呼吸をしながら出てくると、地面にしゃがみこんだままだった女子3人の前までやってきて、特にアスリの方から、しきりに何やら匂いを嗅ぎ始めた。

「あれー？どしたのー？もうアスリはこの前会ったでしょー？」

その様子を見たラリーヤが、不思議な猫撫でならぬ犬撫で声で語りかけながら犬の頭に優しく触れると、犬はすぐさま地面に仰向けになり、前足を折りたたんだまま、腹をラリーヤの方へとさらけ出していった。ラリーヤだけでなくティサもこの犬に甘く、2人とも犬の意図をくんで、その無防備な腹をラリーヤはわしわしと大きく前後に撫で、ティサは一定間隔で軽くたたくようにすると、犬の方は喜んでいるのか、何度か鼻から強く息を吐きだしながら、背中を地面にこすりつけるようにしていた。ティサもラリーヤもある程度犬に構ったところで、まずはティサが再び犬のオーナーの方へ顔を上げた。

「どしたん？だんまりして？」

石像のようになってしまった2人に、ティサが一声をかけた時、

突然ユニスの肩に誰かの手が置かれた。
「よっ！」
「うわぁああ！！！！！！！！」
これにはアスリも驚いたし、ティサもラリーヤも驚いた。満足していた犬までも、一気に首のあたりを起こして、だらしなく開け広げていた口をぴったりと閉ざしていた。だが、それよりも驚いたのは、肩に手を置かれた本人の方である。ユニスが声を上げてのけぞると同時に、2本の木の棒は地面の上に転がって、その姿は布の向こう側へと隠れてしまった。
さらに響いたのは高笑いである。3人とも急いでそれぞれ立ち上がって今度はこちらから布をめくりあげれば、腰を抜かして地面に尻もちをつけているユニスの前にいたのは、さっきの広場で広げていた筒状に丸めた革を手にした、族長であった。ここで3人も、どっと笑い始めた。3人が笑い出せば、してやられたというような表情を浮かべていたユニスも、つられるように笑い始めた。見事な気配の消し方であった。この場の誰もが、族長がいつ近づいてきていたのか、全く気づいていなかった。
ひとしきり笑いきったところで、ようやく族長はユニスに声をかけた。
「ヒッ、ヒッ！わりぃわりぃ、思ったよりビックリしたな！」
「やめてくれよー。足怪我してんだからさー。」
「いやいやごめんごめん。んでも来るとこ、さっき後ろから見てたけど、もう大分良さそうだな！杖にも頼っとらんし。」
「ね、もう大丈夫そうだよね。」
「わかる、最初と全然違うよね。」

回復の経過を間近に見ていたティサとラリーヤも、まだ少し笑いを含みながら口をはさんだ。一気に和んだ場の中、族長は穏やかな表情をアスリの方へと向けていった。

「でだ、アスリ。」
「あ、もうティサに。」

族長の言わんとすることを直ちに察知したアスリが、一足先に族長に返答すると、族長は一礼代わりに手を挙げてから、にこやかにしつつもやや真面目な顔になって、今度は４人全員に目を配るようにして続けた。

「まぁ、ラリーヤにはもうこの前俺ん家に来た時、ある程度言ったんけど、ユニスとティサ。カインタと、あと森ん中、危ねぇんだ。このままロマドウに居ていいからな。…いや、っていうか、このまま居なさい。」
「ありがとう。私の面倒見てもらっただけじゃなくて、ユニスも歩けるようになったし、ラリーヤも声戻ったし、本当に何から何まで…。」
「いいんだ、いいんだ。俺ん家なら、３人くらい増えたって大丈夫なんだ。ティサはラリーヤと一緒の部屋だ、ラリーヤにあとで案内してもらうんだ。ユニスは…、俺の息子らとでいいか？」
「ありがとう、俺は置いてもらえるなら、外でも良いくらいだよ。」
「じゃあユニスだけ犬と一緒に外か？」

ここでまたしても一同は、小さく沸いた。笑い声が小さくなると、族長はすぐに踵を返したかのように真剣なオーラをまとった。

「冗談は置いといて、３人ともしばらくはカインタや森には絶対勝手に行くなよ？マジで。もう次はアスリも助けに行けんぞ。」

「はい、大丈夫。行かないよ。」
「アスリも行ったらダメだかんな？もちろんアスリの弟もダメだぞ。」
「わかってる。」
「それならいいんだ。」

言いたいことを言い終わった様子の族長が、キセルを取り出して一服をつき始めると、アスリも一瞬広がった静寂の間に、ここまで族長が述べた内容を咀嚼し始めた。まさかこの状況で３人が村を離れるということはないということは、言わずもがなアスリもすでに認識はしていたが、今のやりとりを踏まえるに、族長は３人に村に残ることを要請し、３人はそれをしっかりと受諾した。これはひとえに、アスリの思い人が今後常在することを意味している。

ここまですぐにたどりつくと、とたんにアスリは踊りだしてしまいそうなほどに、胸の中をときめかせ始めた。いくら将来の見込めない恋であるとはいえど、とにかくこれからは好きな相手にいつでも気の向くままに会えるのである。アスリはふわふわとするような気持ちのままに、３人の方に向かって浮つくようなトーンで声をかけた。

「それじゃもう、ロマドウの仲間だね！」
「あっ、それは…。」

何か水を差そうとしたのは、煙を大きく吐き出した族長だった。

「えっ、違うの？」
「いや、まぁ。一応細かいこと言うと、正確にはちっと違うんだ。」

「どういうこと？」

何やら語りだした族長のこの言葉に、アスリだけでなく、当事者となる3人もわずかに固くなるような仕草を見せていた。

「なんていうか、別に大したことじゃねんだけどさ。カインタはまぁ、ひどいことになってっけど、どうも全員死んでるわけでもねぇようなんよ。どっかに、なんていうか連れてかれてるかもしれんっていうか…。」

「そう、私のお兄ちゃんも生きてるはずだし。」

ラリーヤも族長をまっすぐ見つめて、確証を伴った声を小さく上げた。

「だろ？そうかもわからん。だから、もしロマドウに生き残りがいるって聞いたら、もしかすっと引き取りたいって言って、迎えにくるかもしれんよな。もちろん引き取っても帰れんから、しばらくここに住むかもしれんけど。で、ユニスはラリーヤのぉー、その、あれか、…はとこだ。だから親戚で、ティサもまぁそういうユニスの近くで育ったんだ。そうすると、3人ともカインタになんだろ。迎えに来てロマドウだってなって、今度俺らが人さらいだなんて言われたら、大変なんよ。まぁ、普通よそに入るんなんて、別の村のと結婚するぐらいよな。」

族長の話す内容は、所属についてである。ラリーヤとやや薄くとは言え血縁のあるユニスがカインタの者として扱われることまでは

アスリも理解できたが、ティサもカインタ所属の扱いになる理屈はいまいち把握しきれなかった。しかし、このあたりは他の部族も絡んだ、何らかの取り決めかしきたりが存在しているのか、話す本人も大したことはないとは言いつつ、族長たる以上、規範に従わないということはできないようであった。

「まぁ、だからって別に何か変わるか言ったら、普段は何も変わらん。んで、しばらく待ってもそういうん来なくて、そのうち本当に仲間になった方が面倒もないだろってなった時だな。そん時は仲間になってもらう。そんなんいつになるかとかは気にせんでよ、俺らの仕事だ。３人は普通にしとけばいいんだ。」

ニュアンスとしてはアスリにも十分伝わってきたが、何となく掴みどころのないような結論だ。だが、それを族長に細かく問うても、おそらく回答は今の焼き直しであるはずであり、もっと不思議そうな顔をしている3人に、その真意がより詳細に伝わる可能性はほぼなさそうであることを、アスリはやんわりと察していた。族長も喋ったわりにはあまり反応が得られないことに、これ以上この話題を続ける意味を見いだせなかったのか、またキセルを吸って煙を頭の中に充満させているようであった。

ただ、さすがはロマドウを一手に取りまとめる器量を持つ族長である。一呼吸を置くと、族長は何か閃いたような表情を浮かべて、アスリの方に向き直っていった。

「そう、それでアスリ！今日も牛連れて行ったんよな？明日もだろ？」

「うん、毎日そうだけど。」

「せっかくだ、３人も、明日から一緒についていってったらどうよ？ユニス、怪我したところ元に戻すのに、ちょうど良いだろ。」

「えっ、いいの？行く行く！」

「この前みたく？　大丈夫！　今度は私たち歩くから！」

　直前までやや難しそうにしていたティサとラリーヤの顔は、唐突な族長の提案によって一気にほころんだ。ユニスの足の怪我はお構いなしに、勝手にアスリについて行くと言い出す2人を前にして、ユニスだけはやはり思うところが何かあったのか、大きく賛同の声は上げなかったものの、よく見ればその口角は微笑んでいるかのように上がっている。

　アスリにしても、別にここでこの話を断る気もなければ、その理由もない。正直に言って、あれやこれやとあるユニスと直接やり取りすると何となく複雑な気分にはなるであろうが、ユニスを眺める時間が増える以上は、むしろ大歓迎である。

「いいよ！　朝ちょっと早いけど、おいでよ。この前までと違って、今はパパとダカク、あっ私の弟ね。2人も一緒。そうだ、3人とも明日、牛乳搾りたてのおいしいから、一緒に飲んでから行こうよ！」

「マジ！　搾りたて！？　アスリん家の牛乳、めっちゃおいしいんだよ！」

「えっ！　私も飲みたい！　ユニスももう歩けるよね？」

　ここでやっとティサが、申し訳程度にユニスの足の怪我を気遣った。もっとも2人の高いテンションは、ユニスに歩けないなどと言う余地など与えていなかったが、ユニスも応じた。

「大丈夫。あとあのさ…、行くついでに俺、狩りしてもいい？」

「いいんじゃない？　パパとダカクもホントはそっちメインだし。一緒にやりなよ。」

「マジか！！！　ヤベェ！！！」

　ユニスは一気に引き締まった顔になって、転がっていた杖にして

いた棒を1本拾い上げて、それを支えに素早く立ち上がると、胸の前で固く拳を握りしめながら何かを全身に染み渡らせていた。どうやらユニスの脳みそも、今朝まで狩りに飢えていた父とダカクと大して変わらないようである。猟師になると、皆このような頭の作りになってしまうのであろうか。

　ここから各位が解散するまで、ほとんど時間はかからなかった。まずティサは、猟師の本能に支配されてしまったユニスを懸命にフォローすべく、ユニスが狩りをすると決めれば、元々の森での生活の分担に従って、ユニスが捕まえてきたものを捌きたいと言って、族長に刃物を貸してもらえるよう依頼したのであった。族長も無理はするなとは口にしながらも、リハビリを実利にまで繋げようとするティサの意思をないがしろにする訳もなく、刃を研ぎに行くと言ってその場を離れると、ティサとユニスに、犬もその後に続いていった。また、ラリーヤも干していた布をとりこみ始め、アスリはここでラリーヤに一声かけてから、帰ることにした。

　帰宅後、アスリには日が暮れきってしまうまでの間の中途半端な時間があったが、今日の午前中に描いていた当初の目的を達成することには執着しなかった。たしかに今日はユニスにも会い、思い出すあの顔は最高の糧に違いはない。ただ、その前にラリーヤとティサへの涙でかなり消耗していたし、ティサの手中に入るはずのユニスを想いながら慰めても、おそらく今日の後味は切なさしか残らないようにアスリは予感していた。それに、今のように我慢ができそうであれば別に無理せず、もっとどうしようもない時に徹底的にいじめぬいた方がずっと満足できるはずである。何より、もう明日からはユニスも来るのであるから、毎日顔を見てどんどん高めていくのも良い試みであるに違いない。

　結局、あれやこれやと考えたアスリは井戸でたっぷり水を汲むと、一人、家の裏手でひっそりと簡単な水浴びをしたのであった。考え

すぎたせいもあってか、特にあの場所は触れるだけで苦しいほどに膨らみ、まわりは大分水っぽくなってはいたが、明日からたっぷりとユニスに会えると自分に言い聞かせ、ここはどうにかアスリの忍耐が勝利した。

この後、昼前に元気よく出撃していった親猟師と子猟師も帰宅したが、戦果は大き目の蛇1匹であった。夕食の席で、アスリが臭みのあって苦手な蛇の肉と紛らわしの香草を一緒に口に放り込みながら今日の顛末を説明すると、父もダカクも大層喜んで、父はユニスにも狩りを教え込むと意気揚々と語ったのであった。

翌朝、アスリが牛の乳を搾って出発の準備を整えていると、予定通りラリーヤにティサ、ユニスと犬がアスリの自宅へとやって来た。3人と1匹が来たのを見て、母はこの前ラリーヤだけが来た時と同じように、3人に搾ったばかりの牛乳を振舞い、牛乳を口にするのは初めてだというティサとユニスも、2回目になるラリーヤも口々に絶賛して飲み干していった。牛飼いとしてこれほど嬉しいことはなく、アスリの今朝はいつも以上に清々しかった。

ほどなく、6人に牛と犬という大所帯は東の平原に向けて出発した。木陰から逃げ帰ってきたあの日と同じく、やはり牛は犬が嫌いなようで、いつもよりもやや離れた先の方を早めに移動していたものの、今日は肩に弓をかけて1本だけ木の棒をついているユニスの足取りも普通であり、怪我の回復は順調であることが見て取れた。

道中、ダカクは人見知りをしているのか、いつもよりも随分静かでやや気まずそうではあったが、父はユニスにかなり積極的に話しかけており、男3人と犬は固まって、熱心に狩りの話をしているようだった。

アスリたちの方もそれよりももう少し後方でまとまり、こちらはこちらであれやこれやと女だけで会話を楽しんでいた。昨日、辛気

臭い話を一通りし終えていた分、今日広げられる話題は質問であったり、とりとめのないものであったりが中心で、もはや涙など介在しなかった。つい先日までのアスリがたった1人で黙々と歩いていた日々はまるで嘘のようであり、アスリは姉たちが一緒だった頃以来、久方ぶりににぎやかとなった移動そのものから充実を実感していた。

爽やかな東風が吹き抜けるサバンナは穏やかで、今日も雲1つない空は、これからまたさらに濃い青色となって、陽はその空の真ん中まで昇っていくことを高らかに告げていた。にこやかに笑みを浮かべるティサの腰には、昨日アスリが手渡したあの腰飾りの宝石が朝日を受けて輝いていて、その煌めきはアスリの会ったことのないティサの母が、平原のどこか遠くから、この光景を優しく見守る眼差しのようであった。

東の草原は近い。その上、今日は心の弾む道のりである。近い草原はさらに近く、気づけばアスリはもう目的の位置に到着していて、本当はもっと遠くまで行きたいであろう牛たちも、犬からある程度の距離をとると、いつものように食事を開始した。
昨日は父の発案により早めに放牧を切り上げて、午後から本格的に狩りに励む運びとはなったが、牛を自由にさせている午前中の間も父とダカクは別に何もしなかったわけではなく、この数日間と同じように少しずつアスリや牛の元に戻って様子を見ながら、何か捕まえられないかトライを繰り返していた。今日も到着早々、父は一服しつつも弓を握る手に力をこめており、煙草の煙を十分全身に取り込みきってから、当然のように草原を巡回すべく、犬を従えてのんびりしているユニスに声をかけていった。

「じゃ、行くか！」
「あ…、俺は後で良いかな。」
「ん？どした？やっぱり足痛ぇか？」
「怪我してから1番歩いたから、ちっと疲れたね。あ、でも大丈夫。」
「？…そうか、じゃあ。」
父はユニスの言う意図が汲み取れなかったのか、不思議な表情を浮かべると、ここでティサが割って入ってユニスの補足を行った。
「ユニス、あれよね？帰る前ぐらいに、一番新鮮なの持って帰りたいんよね？」
「そうそ。あと今日牛いるし、血あったら動物来るし、危ないかな、

思って。」
　これを聞いて、父もダカクもわずかにたじろいだ。この日々が始まって以来、狩りの面ではロクな実績が出ていなかったこともあって、アスリも含め、そんなことには全く懸念したことがなかったのである。
　この意見は、たしかに非常に真っ当な内容である。ところが、父はすぐにおかしな笑みを浮かべ始めると、ユニスの立つ前提の方に指摘を入れていった。
「ひっひっ、そんなんよぉ、簡単に捕まえられる訳ないだろー？まぁいいや、ユニスは疲れたろし、少し休んどけよ！ヨッシャ！ダカク行くぞ！」
　そう言うと、父は年甲斐もなく草原の奥の方に向けて一気にスプリントし、ダカクも置いていかれまいと、その背を追っていった。
「そんじゃこっちも、ちょっとこの辺いろいろ見てっからねー！」
「気ぃつけろよ！」
　遠ざかる父にラリーヤが大きく声をかけると、父も振り返って一言応じて、走り去っていった。父とダカクが大分離れて点のようになったところで、ラリーヤも直前の宣言通りに染料や化粧の材料を探すと言い、ティサも食べ物や薬になるものを見つけたいと言って、それなら一緒に行こうと、すぐに2人の間で話はまとまっていった。採集の知識のないアスリはここに残って恋する相手と2人きりになっても良かったが、少し想像して何を話してその場をやりすごせば良いかも思いつかず、ここはひとまず残るユニスに牛の監視を任せて、さっきまでの女子だけの楽しい時間を続けることを選択した。

アスリにとってただの草が生えているだけだった草原は、ラリーヤとティサが入ることで一変した。２人ともここはなかなか厳しい土地だと言いながらも、それぞれ方々の草を指さしながらあれやこれやと知識を披露し、アスリはその１つ１つに驚いて、アスリも数少ない情報を披露すれば、今度はそれに２人が驚いたのであった。

ひたすら熱中して３人で使えるものを集めていく中、アスリはわずかな空腹を感じるまで、その思考の範疇からユニスと牛の存在を忘れてしまっていた。はっと我に返ったアスリが、２人にそろそろ昼の休憩を取ることを伝えたところで、やっと３人はユニスのいる場所の方へと戻っていった。

元の位置の近くまで来ると、ユニスと犬は最初の場所の近くにあった大きな木の元の方へと移動しており、たまに様子を見に来る父からキセルの種火をもらったのか、そこで小さくたき火を起こしていた。牛の頭数にも問題はなく、アスリの離れている間も平和であったようである。火のまわりで一足先に４人が持ち寄った昼食を食べながらしばらくすると、やや疲れた様子の父とダカクも戻ってきて、この輪に加わった。

強気な前提に立ったユニスに戦利品を見せるべく、父は大分ハッスルしたようであるが、午前の成果はゼロである。食事中、父はやはり東の草原は狩りがしにくいと言って、今日もここまでで一度切り上げて帰った後、午後からは別の場所に行くことを表明したのであった。対して、早めに食べ始めてすでに食事を終えていたユニスはこれを聞くと、近くに置いていた弓を手に取りしならせて、いよいよ仕事にかかる準備をし始めた。

「そんじゃ、出るまでにやってこか。」

「マジか！そんな短い時間で？まぁ、久しぶりだろし、練習か。」

父はユニスの言うことを、全く真正面から捉えていないようであ

る。もっともこれはアスリも同じで、もうしばらくしてここから離れるまでに、見渡す限り牛しかいない草原の中から何を捕まえられるというのか、非常に疑問であった。ユニスが弓の名手であることはアスリも十分理解していたが、獲物がいなければ矢を射る先もないのである。

「ファラール、今日は牛がいるから、逃げちゃうからあっち行ったらダメ、向こう。向こうから向こうの方に走ってってな。あと今日はこの後歩くから、あんまりでかいのじゃないやつ。」

ユニスは父にアスリや、おそらくラリーヤも考えているであろうことには全くお構いなしに、舌を出して伏せっている犬に向かって指示を出していった。アスリも牛と対話しがちであるが、こうして端から見れば、なかなかこれは阿呆のすることのようにも思え、今後は少なくとも人前では控えるべきであることだけ、まずは自分に言い聞かせていた。

「よし！じゃ行こ！」

ただ、これでユニスと犬はしっかりコミュニケーションが成立しているようである。直後にユニスが強く声を出して、弓を牛のいるのと反対の方の草原に突き出せば、犬はユニスの指示した方向へ猛然と突き進んでいった。

「えっ…、すご！ファラールって本当に賢いんだね。」

アスリのように牛の賢さを知らないラリーヤは動物の持つ知性に初めて触れたようで、かなり驚いた様子である。

「多分ユニスより賢いよ。」

「ティサ、黙ってて！ってかこれからよ、これから。」

ティサの軽口に適当に答えたユニスは、父を追ったダカクのように犬を追尾することもなく、そのまま犬が行った先をじっと見つめ続けていた。犬は草の陰に隠れてしまったのか、それとももっと遠くに行ってしまったのか、すでにどこにいるのか全く見当はつかない。しかし、風が吹けば草のかき分けられるような音は響いて、アスリにダカク、ラリーヤはがさりと音がする度にその発生源の方へと目を向けていった。一方、ユニスとティサは先程来もっと彼方に視線を送っており、唯一、父だけは子どもたちが始めた遊びを監督するかのように、たらたらと潰した芋を口にしながら、のんびりとした眼差しを送っていた。

そしてアスリの視界の隅で、牛が３回ほどくしゃみのような鳴き声を上げた時だった。ユニスとティサが見つめる先のかなり奥の方から、小さく激しい鳴き声が聞こえた。

「…来る！」

ユニスはぼそりとつぶやくと、目を離さないまま手元の矢筒から矢を２本取って、そのまま軽く弓にかけた。

「２本っ！？」
「マジ？」

すかさずダカクが上ずった声を上げれば、さすがに父もここで相対するような低い心の声が出てしまった。そうこうしているうちに地平線に近いあたりから、どんどん鳴き声が大きくなってくるのとともに、小さな角の生えた何かと、さらに続く犬らしき影が見えてきた。

「ガゼル…！」

次の父の声は、完全に驚いていた。

ガゼルの子どもである。その後ろをユニスの犬が必死に吠えて、追い立てている。この短い時間に、どこから獲物を見つけてきたというのであろうか。思えばあの犬はアスリの知る限り全く人前で鳴かなかったが、今はその分を取り返すかのごとく、野犬のように吠え尽くしている。しかも先ほどのユニスの指示に忠実に、牛のいない方向から出てきて、こちらには近づきつつも、犬とガゼルの体の傾き加減を見るに、また牛のいない方へと抜けていこうというルートを取っている。ティサの言う通り、あの犬はユニスよりも数段賢い。

ただ、ここから獲物までの距離はかなり離れているし、いくら子どものガゼルとは言えども犬の足よりは速く、円周の弧を描くように移動する2点の間隔は徐々に開きつつあった。そしていよいよ、ユニスを中心に広げていった円と、ガゼルと犬による円の接点となる地点の、やや手前の位置にガゼルが差し掛かろうかというところで、ユニスは対象から目を離さないまま、何もない上方の角度に向けていっぱいに弓を引いていった。

「そんな…！」

父が何か言いかけた直後、放たれた2本の矢は一旦高く上がってから放物線に乗るようにして高度を下げていき、続けてちょうど走りこんでくるガゼルの方へと吸い込まれていった。

もうここで、アスリは確信した。わずかにばらけたかのようにも見えた矢の軌道は、最終的に1本はガゼルの首元に、もう1本は尻

のあたりに、非常に的確に収束したのであった。

「うぉおおおおおお！！！！！！！！」

「あおおぉおぉおおおお！！！！！！！！！」

最初にガゼルが地面に倒れこむ音よりもサバンナ中に大きく響き渡ったのは、父とダカクの雄たけびである。叫ぶ2人はすぐさま、ガゼルの止めにかかっている犬がいる地点へと駆け出して行った。

「ひゃぁああ！！！うっそ！？うっそ！？すっごい！！！！」

「すごいすごいすごい！！！すごい！！！」

アスリも満面の笑みのラリーヤとハイタッチした上で思わず抱きしめあうと、飛び上がってジャンプし、またハイタッチした。アスリがユニスの華麗な弓裁きを見るのも、これでかれこれ3度目になる。しかし前の2度は迫る危機の回避が目的であり、特に2度目はユニスに惚れこんでしまうほどにアスリの心は動かされたとは言え人命までかかっていたわけで、今回のようにエンターテイメントの延長のような形での狩りを目にするのは、また格別であった。ティサにしてみても、アスリよりもさらに多くユニスが獲物を射る瞬間を目撃しているのか、盛り上がる4人に比べればやや冷静ではあったが、アスリがハイタッチを求めれば、嬉しそうに高く差し出された両手に応じていた。

盛り上がるその中、ヒーローとなったユニスの表情の中心にあるのは安堵であるようであった。黄色い声で称えられ、はにかむように笑顔を浮かべるユニスを見つめながら、アスリはやはり諦めきれないものは諦められないと、心底痛感していた。

村への帰路は、ユニス一色である。朝はまだまだユニスと距離感のあったダカクは、ずっと興奮したままユニスに弓について絶え間なく質問し、少しあとに続く女性陣の方は、特に初めてユニスの弓の腕前を見たラリーヤが、しきりにユニスのことを称え続けていた。

父はと言えば、来る時とは打って変わってダカクとユニスの話には入らず、人間側の隊列の先頭を取って、牛の後を1人で歩いていた。先ほどはダカクと一緒になって、仕留められたガゼルの周りを祭のステップで踊ってまでいたというのに、今はその獲物を背負って寂しささえ感じさせるように黙々と歩いているところを見る限り、こちらはいつの間にか冷静になって、別な意味でユニス一色となり始めてしまっているようである。父にしてもロマドウの腕の立つ猟師であるし、長い期間をかけて築いてきたキャリアがある。そのベテランが息子とは言え愛弟子とともに半日歩き回って何も捕まえられなかった中で、まだ年端もいかない少年はほとんど動きもせずに、このガゼルに同時に2本も矢を当てたのだ。アスリの位置から父が今どんな表情をしているのか目にすることはできなかったが、すでにこと切れてだらりとうなだれるガゼルの首は、父が今何を考えているのかを、無言で代弁しているかのようであった。

結局、わかりやすいほどに低いテンションの父は、村に近いところまで来たところでユニスの上げた成果物をティサに引き渡すと、今度はそそくさと再度狩りに出かけて行ってしまったのであった。

ダカクもその後を追う仕草までは見せたものの、まだユニスへの質問が尽きていなかったのか、ユニスとティサが早速ガゼルを捌くと言うのを聞くやいなや、父に着いていくことを取りやめ、自宅近くにある父とダカクが普段獲物の処理に使っている作業場に連れてい

くと言って、２人を引き連れ意気揚々と離れていった。解体を見るのが苦手なアスリは、残ったラリーヤとしばらくおしゃべりでもすることにして、牛を所定の場所に戻してから族長の家へと立ち寄り、この前ラリーヤが布を干していたあたりに採ってきた草を広げて、あとは種類ごとに草をより分け束ねる作業を手伝いつつ、のんびりと過ごした。

日も暮れかけた頃にアスリが自宅の前まで戻ってくると、すでに肉の焼ける良い香りがあたりに立ち込めており、調理場まで行けば、ほくほく顔で料理を作る母に、ダカクが一生懸命になって今日の話を伝えていた。直火に当てられうまそうに焼ける肉はかなりの量があったが、これでもユニスたちが半分は持って帰った上に、まだ使いきれていないそうである。このところは自宅でまかなう分すら心もとなかったが、今夜これだけ調理してもまだまだ残っているということであれば、明日は数日ぶりに牛乳のほかに肉も配るか、干し肉の備蓄を増やすかができそうである。

そうこうしているうちに、父もようやく帰ってきた。その手にあったのは、またしても蛇であった。夕食の席、舌鼓を打ちながら昼の出来事の話で弾むアスリとダカクと母を尻目に、父は酒ばかりが進んでいて、その合間に時折自分の手柄の蛇の肉を噛みちぎりながら、体調が悪くないか心配になるほどに静かにしていた。

翌朝も３人はアスリの家に来て、あとは昨日と同じである。もちろん、その翌日も、さらにその次の日も同様で、女子は充実し、ユニスと犬は称賛され、特に犬はついにアスリにまで腹を撫でられ、ダカクは興奮してユニスを質問攻めにし、父は午後から１人で肩を落として出かけるのであった。この間、ユニスはやりたい放題で、犬を使う方法だけでなく、突然どこかに矢を放って誰も気づかなかった獲物を射抜いたり、地面にいくつかあった穴を塞いだかと思えば、残った一か所の穴の前を燻して、中から出てきた小動物を一網

打尽にしたり、低い高度にあったとは言えど、まさに飛ぶ鳥すら落としたりしていた。

アスリはもう、毎日毎日楽しくて楽しくて仕方なかった。つい先日まで悪い行為をしたくて常にウズウズしていたと言うのに、この数日はそんな隙がアスリに生まれることはなく、昼は活発にティサとラリーヤと語り合い、ユニスの素晴らしい狩りを見て、夜は腹一杯うまい肉を口にして、あとは疲れ果ててあっという間に寝入っていた。快活な他の面々も、まさかアスリが普段やっていたようなことが習慣化していたのか定かではなかったが、いや、変態なユニスであれば万が一にもありえるが、とにかくアスリ以外もこの新しい日々に満足しているはずであったし、それは毎朝早い時間であるにも関わらず、倦怠感を一切感じさせない爽やかな集合からも明らかであった。

しかしただ1人、保護責任者とは言えど、父だけは明らかにその例外であるように感じられることだけが、アスリのわずかな気がかりであった。

何日かが過ぎ、ここまでユニスのものに比べれば小さいながらも、どうにか毎日実績を残してきた父は、ついに手ぶらとなって帰宅した。父は帰ってくるなり、すぐさま無言で酒を1杯ついで、軒先へと向かって適当な所に腰を下ろすと、酒をちびりちびりと飲みつつキセルをふかしながら、文字通り頭を抱えていた。アスリも気遣いの放置をして特に父に声をかけず、母の調理を手伝っていたが、もう少しで夕飯が仕上がろうかというところで、父は何らかの考えをまとめきったのか、族長と話をしてくるから先に食事をしておくようにと言い残して、出かけて行ってしまった。

その後、父が帰宅したのは3人の夕食が済んで大分経ち、アスリもダカクももう寝ようかという頃で、あの時間に酒を1杯引っかけてから出かけて行った以上、父はやはり相当飲んできた様子であった。族長宅では酒ばかり飲んで大して食べなかったのか、父は母が

取りよけておいた芋とユニスが捕まえた焼いた鶏肉が入った器を受け取ると、代わりに母の方にどぶろくを注いだ杯を勧めつつ、まだ火を消さずに残っていた燭台の前に座り込んで、まさに床に入ろうかというアスリと、すでに横になっていたダカクの方に声をかけてきた。

「…まだ起きてるか？」

「ん…？」

「何、パパ？」

父は帰宅後の仕上げの酒で喉を潤してから、2人に、と言うよりもダカクに対して、ややもったいぶったように続けた。

「良いか、すげぇからな…？明日からはまた、朝から日が暮れるまでずっと狩りだ！！！」

悔しくないのか

「えっ！？マジで！！！」

暗がりの中、早くも瞼がくっつきそうであったダカクは、途端に飛び起きて父の方に身を乗り出すような姿勢をとった。何か父に企てがあることを直感したアスリも、床に入りかけていた上体だけを持ち上げて、すっかり冷めてしまったであろう鶏肉にかぶりつく父に言葉を繋げた。

「えっ？じゃあ牛さん連れてくのは私と、あとユニスたち？あ…、待って、ユニスは狩りってこと？」

「いや、狩りは俺とダカク。アスリは言う通り、今朝までと同じで3人連れて牛。だからアスリも前までみたく、夕方まで行ってきていいかんな。」

「えっ！？待ってよ！んじゃユニスは俺たちと一緒に来ねぇの？」

ここで父は冷めた肉を流し込むように食べ進めたせいか、少しの間、何かをやりすごすような顔になると、ややしかめた表情のまま、ダカクの問いに答えていった。

「そう、それを今族長と話してきたんよ。この前カインタ大変だったろ？だから父ちゃんとダカクも、アスリがまた危なくなんないようにー緒だったし、村中全部、子どもいるとこはそうしてたんだ。だけど、ダカクもユニス見たろ？ユニスついててダメなら、おそらくだいたいダメだろ。もちろん族長も大賛成よ。」

「大丈夫…？アスリたちだけで？」

母も父から受け取った酒を飲み始めてはいたが、すこぶる冷静であり、その懸念の内容も妥当である。だが、父は単に楽観的なのか、それとも耐え難いほどにプライドを傷つけられた上での究極的な判断によるのか、ほとんどその意に介していなかった。

「まぁ、心配なのは心配よ。でもさ、考えてみ？この前のアスリにあったあんなん、普通は一生に1回ぐらいだろ？立て続けに何かあるほど運悪かったら、もうどっかで死んでんよ。それにカインタの西の方や、この前の南の方行かねんなら大丈夫よ。」

手早く食事を終えて器を目の前に置いた父は、そう言って笑顔になったが、ほかの3人は全くその笑みに追従しなかった。父もそれを見て分が悪いと感じたのか、族長には無事に通してきた自説を補強するために、目の前に立ちはだかる壁を見上げるかのような真剣な表情を浮かべてさらに続けた。

「でも、ユニスの腕が確かなのは本当だ。…アイツはヤベェ。アスリと同い年って言うのに、とんでもねぇ猟師だ。毎日何べんもアスリもダカクも言ってっけど、全部本当なんだ。」

「そんなにユニスってすごいんだ。私も1回くらい、狩りするとこ見せてもらおっかな…。」

今の父の言葉は母に対して有効だったらしく、明らかに母の留飲は下がったようであった。母が納得すれば、アスリの同意を得ていなくとも、父の障壁はほぼクリアになったも同然である。目論見通りに進みつつある場を前にして、父はとどめを刺しにかかる伝聞を追加していった。

「それに族長んとこにも、子どもだけでどうこうってのは、もうたくさん話あったみたいなんよ。どこの家も仕事になんねんだろう。

軒並み西と南は行くなってだけで、今はどこの家も前とおんなじだってな。」
「えっ？もうそうなの？…まぁ、そりゃそっか。でもアスリ、この前あんなんだったんだから、本当に気をつけないと。牛さんは何とかなるから、危なかったらすぐ逃げなね。」

これで明日以降の流れは決まったかに見えた。しかし、ここで最後に物言いをつけたのはダカクであった。

「…俺さ、ユニスの方についてきたい！」
「んっ！？」

この一言は予想していなかったのか、父はちょうど杯につけた口の横から酒をこぼしそうになって、とっさに空いている方の手を口の下へと滑り込ませていた。ダカクのこの反応は無理もなく、毎日あの腕前を見せつけられていれば、今の要望は至極当然なのである。父は酒を飲みこんで口元を指で拭きながら、続く言葉をわずかな間に思慮すると、諭すような口調でダカクに語りかけていった。

「………ダカク、悔しくないのか？」
「えっ…？」
「いいか、正直言って、今父ちゃんとユニス、どっちが格好いい？」
「えっ…、それは、父ちゃんも格好いいし…。」

そう言われては、ダカクももう近所の男児たちを率いるぐらいの立場にはあるのだから、すんなりユニスと言うことはできない。父もそれは理解しているのか、質問の角度を徐々に変えていった。

「じゃあ、どっちが弓うまかった？」
「えっ…。」

「…わかった、それじゃどっちの方が最近いっぱい捕まえたんだ？」
「それは…。」
「ユニスだろ？そしたら、今はユニスの方が腕が良いんだ。」

ダカクは何と言って良いのかわからないようで、無言になった。アスリも父がどういう着地をしようとしているのか見通しを立てられなかったが、どこかに、というよりも父の意図に向けた誘導が続いていることだけは汲み取っていた。

「だから、ダカク悔しくないのか？ダカクはまだ子どもでも、今までいろいろ捕まえてきたろ？父ちゃんとダカクで猟師２人だ。だけどユニスは１人と犬だ…？俺らも今まで頑張ってきたろ？」
「……。」
「それに、ダカク。兄ちゃんらには、父ちゃんもたくさん狩りを教えたんだ。でもアイツらは石集めなんかばっかり、全然やる気がなかった。それで今は鉄の方で食ってこうとしてんだろ？刃物になるし、釜にもなるしいいけどさ。ただ、父ちゃんの狩りは誰が継ぐんだ？」

酒の力も借りて饒舌になっている時の父の演説には、人の心を掴む力が宿っている。しんみりとし始めた陥落間近のダカクに、父は最後のひと押しをかけていった。

「ダカク、絶対に父ちゃんよりもっと立派な猟師になってくれ。ダカクならなれる。そのために全部教える。」
「…………。」

ダカクも役者である。ここで無言を決め込まなければ、ダカクがユニスと行きたいと言った意思は軽薄であるかのように思えてしまうかもしれない。加えて、ここでなんとか黙ったまま父を見つめ続

けて、父が耐え切れずに譲歩してくれることに賭けるのは、後がない以上は正しい判断であり、仮にアスリが同じ立場に立たされても、少なくとも部屋の中の明かりが燃え尽きて消えてしまうくらいまでは、返事をせずにただ待つはずではある。
　だが、ダカクはアスリよりも優しかった。

「…分かったよ、一緒に行く。」

　ついにダカクは落ちた。ここ最近、父は小物しか捕まえられていなかったが、今夜はダカクという大物を捕らえることに成功した。久しぶりに満面の笑みを浮かべた父は、手元の酒を一気に飲み干すと、自分に対しての歓声に近い威勢の良い言葉を続けた。

「ヨッシャ！俺らは今はユニスみたく1回で2本は射れんけど、俺とダカクで一斉に打つんだ！そうすれば絶対に、ユニスよりもっと凄くなれる！ダカク、一緒に超でかいの捕まえて、ユニスに見せつけっぞ！！！」
「ちょっと、もう遅いんだから静かにしてよ。お酒そこにあるんだから、倒さないでよね？」

　少年のように喜ぶ父は右手に拳を作ってその場に立ち上がると、すぐさま上着の裾を母に引っ張られて、これもまた少年のように注意されてしまっていた。その様子を落ちた側のダカクはじっと見つめながら、持ってきた品を説明する隊商のような顔をして、はしゃぐ父に取引の代価を提示していった。

「あっ…、父ちゃん！それなら海まで野営行こうよ！この前カインタ行った日に行くって言って、まだ行ってないじゃん。」

　父は一瞬はっとした表情を浮かべたが、ダカクに飲みにくい話を

飲ませた以上は観念せざるを得ず、翌朝から出発すると主張するダカクに、海まで行くにはあれが必要だ、これが足りないとどうにか説き伏せ、それらの準備ができ次第、東の草原のさらにずっと先のサバンナを進んで、海まで遠征することを決めていった。同時に、アスリが賛成も反対も示さないうちに、アスリ、ティサ、ラリーヤ、そしてユニスの４人で過ごす毎日が始まることも定まったのであった。

翌朝、ダカクは早くも野営のことで頭がいっぱいになってしまったのか、朝から飛び回る玉のように無駄なジャンプを軒先で繰り返しており、アスリが搾ってきたばかりの牛乳を飲み干すと、別に今日から海まで出かけるという訳でもないのに、いつもよりも随分早く父を従えるようにして、前夜の段取り通り2人だけで飛び出していった。ユニスに対抗したい父もダカクを仲間に引き入れるためとは言え、なかなかの苦労である。

ほどなくラリーヤ、ティサ、ユニスの3人も到着し、まずはいつも通り4人で牛乳を飲みつつアスリが昨晩の顛末を語ると、すでに3人も出かける前に族長から2班に分かれる話は聞かされていたそうであった。ただし、昨晩のアスリの母と同じく、族長も道中何事かないかだけは気にかけていたそうであり、ユニスの腕前は信頼しつつも、カインタや森には絶対行かないように、また西の方や南の方もできる限り行かないようにと、かなりしつこく念を押されたとのことであった。無論、アスリも族長と同意見であり、今日からは夕方まで放牧に出かけて良いとは言えど、昨日までと同じく東の草原に行って、もう少しゆっくりして帰ってくるつもりでいた。

しかし、この話題の中に、一石を投じたのはユニスである。

「まぁ、族長にめっちゃそう言われたからアレなんだけど…、夕方まで行けるんなら、もっと他どっか良い場所ないん？」

「えっ？」

上唇が牛乳で白いままのアスリは、ユニスの言おうとする意図がすぐには掴めなかった。

「あの場所さ、森の中より動物の数少なすぎ。毎日こんな風に捕まえてると、多分そのうちいなくなる気がする。」
「それさー。私もなんだけど、あの辺取れる種類少なすぎって思ってたんだよねー。これじゃ茶色っぽいのしか染められなそう。」

ユニスによる獲物の数から見たあの草原に対しての指摘には、採集の側面からラリーヤも同意していった。牛が食べる草と湧水があれば十分なアスリからすれば、あの草原は豊かな土地であるように思えていたが、毎日土産を作る側にしてみれば、意外にも厳しい環境のようである。捕まえてきた後の方が仕事であるティサだけは特に何も意見はせずとも、やはりユニスの方を見ながら頷いているのを見るに、森やカインタと比べると、連日アスリは大分痩せたところに3人を招待してしまっていたことは確かであった。

しかし、弱った話である。今、西と南の方は実質的にほとんど封じられている。加えてアスリ以外の3人は地元でない以上、地の利を生かすことはできない。では東でどこか適当な場所があるかと言っても、もっと先に進んであるのは、後日父とダカクが通過することになる、土とところどころに岩があるだけの、サバンナというよりも赤茶色の砂漠に近い土地しかない。

「いやー、あの場所よりねぇ、もっと奥行っても先はもっと何もなくなっちゃうかな…。」

アスリもどこかないかと考えつつ、東にさらに進む線を消し込むと、ティサが横から一声をかけた。

「北の方は?」
「北は…。」

3方向塞がれたら、そこに行きつくのは当然だ。だが、アスリは

ここで言いよどんでしまった。実のところ、北の方向はアスリの中では最初から取りうる選択肢として入っていなかった。それは別にアスリだけではなく、ロマドウの者であれば同じ状況になっても、おそらく北は避けるはずである。

「あのさ…。北はなんていうかさ、ちょっと不気味なんだよね。」
「えっ？どういうこと？何かあんの？」

ここで声を上げたのはラリーヤだったが、ティサもユニスも含め等しく、不思議そうな表情を浮かべている。アスリはやや言いにくいような雰囲気を醸し出しながら、ロマドウ独特の概念をどうにか簡潔に伝えようと試みた。

「そのさ、北の方にはロマドウのお墓があって…。村ではみんななあっちは避けるんだよ。」
「えー！お墓？うちなんて、ママがパパと離れたくないって言って、家の裏にお墓作ってたし、別に避けたりなんかしてなかったよ！ってか、ママも今そこなんでしょ？」
「あー、でもあれかな。カインタのはたしかにちょっと…、薄暗くて怖かったかも。ユニスも覚えてる？」
「うーん、昔、じいさんに連れてってもらった墓のまわりは…。いやでも、そっちの方向全部行かないってことはないっしょ。」
「たしかに、カインタでも別にお墓の近くでみんな木切ったり畑作ったりしてたし。」
「そうだよね？今日北の方にしようよ。」
「そうだね！ずっとあの草原ばっかりだったし！何採れるか気になる！」
「えっ…、ちょっと！」
「そうしよ！そうしよ！」

3人の反応は、どうにもアスリの方が異端であると言わんとしているようである。いくらここがロマドウの村であっても、3対1では押し切られるのは時間の問題であるのは明白であった。アスリは自分だけではうまく制御できないと見るや、少し離れたところで何か作業をしている母の方に助け舟を求めた。

「ねぇー、ママー！みんなが北の方行こうって言ってくるー！」

「えっ！北！？」

思った通りのためらいだ。母にしても娘たちから北に行くと聞かされれば、驚くに決まっているのである。しかし、さらに母が返してきた言葉はアスリにとって予想外の内容であった。

「…そう？わかったー。気をつけてねー！」

「えっ！ママ！良いの？北だよ？」

「あっちなら危なくないんじゃない？カインタとか森は絶対行ったらダメだかんね！」

参ったことになった。先日のあの一変を受けて、母の北に対しての畏れは変わってしまったようだ。いや、おそらくアスリが今も北に対して抱く気持ちそれ自体と変わってはいないのかもしれないが、少なくとも不気味なだけであれば娘が物理的に危険に晒されることはないわけであって、そうであれば北に行くのをむしろ勧めてくるのは、わからないでもない。

ただ、北である。アスリも幼い頃から北では誰もいないところで突然声をかけられるであったり、昼から骸骨が動き回っているであったりと、数多の事実なのかそうでないのかも定かでない話を聞かされ続けてきたし、北の野原に置いてくるというのは、ロマドウの脅し文句の定型で、それは子どもに限らず大人にも普通に使われる

ほどのものなのである。現に北の墓地は、アスリが生まれる少し前にロマドウで流行った伝染病の禍の時に、かなり規模を拡張したそうで、古くからある墓のそばに、できて十数年のものも幾多に入り交じり、何か気配すら感じられるほどのオーラが漂っているのであった。

アスリの見たことのない祖父母もそこに埋葬されているのではあるが、いくら近い親族とは言えども、一度も会ったことのなかった以上、もう随分前に行ったっきりの墓参りで感じたのは残念ながら親近感ではなく、つい呼吸を止めてしまいがちになるほどの息苦しさと恐怖であって、仮に父や母がこの先年老いて亡くなってしまったとしても、できることならあんなところで眠ってほしくはなかったし、ティサの父母のように家の真裏にいてもらった方がずっと良いに決まっているのである。もっと言えば、ラダンが以前悪い遊びをして母にひどく叱られた時の罰が、針でなく北の墓地の前に素っ裸にして置きざりにしてくるとかであったら、アスリは清らかな性を保っていたに違いない。

今日行こうというのは、別にその最大にハイライトされる墓地ではないが、もう北に行くというだけでアスリの気は非常に滅入ってしまっていた。アスリの説明不足も去ることながら、そんなことを意に介さない3人は、母の返答を耳にして、先ほどの出発前のダカクほどでないにしろ、一気に興奮を高めていった。

「よし！アスリのママもOKだって。」
「何捕まえられっかなぁ、シマウマとかいんのかな。」
「私、青に染めるやつ見つけたい！」
「えっ！？青とかできんの！？」
「できるできる！ティサも、あとアスリもそんな顔してないで一緒に探そうよ！」

もうこうなれば、アスリは覚悟を決めるしかなかった。牛乳を飲み切った4人は母に一声かけてから、牛たちを先頭にしてティサとラリーヤとユニスに犬、最後尾にアスリが続いて、曰くのある北の方角へと向かって発って行った。

今日のアスリの歩みは、牛の何倍も遅かった。今、アスリは吐き気を催すほどに最悪な気分であり、もし明日も3人が北に行くと言い出すのであれば、父とダカクの方についていくのに決まっている。無論、牛の担当がアスリである以上そんなことは認められるはずもなく、そうならないよう何としても3人を言いくるめなければならないのであるが、とにかくまず今日これからは、北に行って帰ってこなければならない未来が確定している。

すでに前を進む3人と、そのさらに先の牛たちとはやや距離ができており、気づけばアスリは北に向かう中にただ1人になりつつあって、時折吹く風はいつもと同じく熱いものであるというのに、なぜだか背筋が寒くなるような冷たさがあるように感じていた。このまま絶対に1人にはなりたくなかったが、かと言って自分で自分の首を絞めるように先に向かって距離をつめることもできず、正直なところアスリは幼い子どものように大声で泣き出してしまいそうであった。

いよいよアスリが置いてきぼりになりかけようかという辺りで、いつものように楽しくお喋りをしているようであった先を行く3人に、ようやくアスリの方に振り返る仕草があり、ここでやっとアスリとの差が開きすぎていることに気がついたのか、ユニスと犬だけはその場で立ち止まって牛の方を見張ったまま、ラリーヤとティサが小走りでアスリの方へと駆け寄ってきた。2人の浮かべる怪しげな笑みには、明らかにアスリを小ばかにしている感情がこめられているようであった。

「ねぇアスリ、怖いの？」

「別に…、そんなことないけど？」
「じゃあ早く行こうよ？」
ラリーヤはからかうような口調でアスリを急かすやいなや、槍を手にするアスリの右手をがっしりと掴んでしまった。同時にその反対側はにやにやしているティサによって、同じように押さえられてしまったのであった。
「えっ？ちょっと？」
「ほら！行くよー！」
ティサが号令をかけて走り出すと、ラリーヤもそれに協調して一斉に駆け出した。ひたすら最悪でしかないアスリは、へっぴり腰のまま転ばないようにしつつ、ただ声で2人を制するほかなかった。
「ねぇ！やめて！ねぇ！ねぇ！ねぇってば！」
こんなおもしろいおもちゃがあるというのに、途中で言われた通りに投げ出す若者などいないのである。そのまま後方に重心をかけ続けるアスリの思いがティサとラリーヤに届いたのは、程よい大きさの岩に腰かけて少し休憩するユニスの前まで来たところであった。
「はぁっ…、はぁっ…。最悪。ホント！やめてってつってんのに！！」
「はぁっ、はぁっ、ごめんってば！だってアスリ全然来なかったし。」
「ねぇ、はぁっ、はぁっ。アスリさ、やっぱ怖いんだよね？」
「うっさい！怖くない！」
アスリを除く3人はアスリのこの言葉を耳にすると、どっと笑い始めてしまった。アスリは怖いし、悔しいし、しかもこの惨めな姿

をよりにもよってユニスにまで笑われて、もう一刻も早く家に帰りたいという気持ちしかなかった。だが、帰ろうにもここまで飲まず食わずでやって来た牛たちが、そんなことを認めるはずはないのである。
ひとしきりの笑いの後、ユニスはむかつくほどに最高の笑顔をアスリの方に向けると、まっすぐ北の方角からは少し西に外れた方を指さして、にこやかに問いかけた。

「ってかさ、あれだよね？」

アスリがユニスの示す方に向きなおると、平らな赤茶色の土の奥に、豊かな緑色へと切り替わる場所があった。そして低く生えた草の中からは、広く地面に突き立てられた無数の槍が天に向かって伸びていた。
墓地だ。その様相は、アスリが最後に来た時と同じであったし、別にそれだけの場所だ。ただ、アスリは真偽不明の余計なことを知りすぎているだけなのである。

「もうちょぃいだね、行こっ！」

一体ユニスは何を言っているのだろう。アスリは、岩から立ち上がって尻をはたくユニスだけでなく、まだへらへらとしているティサとラリーヤにも向かって、必死の抵抗を開始した。

「あのさ…。私さっき言わんかったけど、あのお墓超やばいんだよ？っていうかもうこの辺も！もう今日はやめとこうよ！」
「やばいって、どうやばいん？何かいっぱい、ただ棒よね？あれ。」
「あれ槍！１本ごとに１人分！それに誰もいないのに人の声がするとか、骸骨が歩き回ってて見つかったら帰ってこれなくなるとか…。」

「ガイコッ…！？」

喋りかけのユニスが吹き出すと、またもや3人は爆笑である。自分の話すことを信じてもらえず、心中に徐々に怒りが先行し始めたアスリは、あえて理で責める取り口に切り替えていった。

「ってかさ、今日は牛さんたち連れてって、狩りして染物に使うの拾って帰ってくんでしょ！別にお墓に用事なんかないんだから行かないよ！」

「ねぇアスリー、そんな顔しないでよぉ。アスリは怖いんだよね？よしよし、ね？よしよしよー。」

ラリーヤはアスリに優しく身を寄せると、アスリもラリーヤも背丈はほとんど同じであるというのに、まるで幼子をあやすかのように頭をなで始めた。冷静に進めたいはずのアスリはついに耐えかねて、理性とは全く正反対の荒っぽい声を上げていった。

「バカ！バカ！バカ！もう知らない！勝手に3人だけで行ってきたら！？」

「いいの？そしたらアスリ1人になっちゃうよ？私たちが行ったら、その辺から急に声がしてきて…！」

「ラリーヤ！やめて！ホントやめて！ねぇ、行かないで！絶対置いてかないで！」

「じゃあ行くしかないよねぇ。…でもさ、このかんじだと、アスリだけさっきみたく離れちゃうんじゃない？」

「やだ！私のこと絶対1人にしないで！ねぇ、ホントお願い！ねぇ！」

さすがにティサは、泣きそうになりながら槍を握りしめて、怒りを向けている対象にすがるしかないアスリの姿に同情したのか、少

しだけ真面目な表情を浮かべると、まだまだ攻めの姿勢のラリーヤとユニスに風向きの異なる言葉を投げかけていった。

「ねぇ、ちょっとアスリかわいそうだよ。私たちこの前みんなアスリに助けてもらってんだよ？」
「うっ！それはたしかに…、ごめん。」
「それ言われたら…、アスリごめん。私もちょっと調子乗りすぎちゃった。…でもさ、ここまで来たのに？」

ティサは会話の流れがここに来ることを、すでに読み切っていたようである。その神妙なように見えていた顔になぜか不敵な笑みを浮かべると、さらに続けていった。

「そう…、せっかくだし、ってかアスリにそこまでおかしな話聞かされたら、もうちょっと近くまで行きたいよね。でさ、アスリこの前ユニス運んだじゃん？今日はユニスに背負ってもらったら？そしたらはぐれないし、怖くないでしょ？」
「えっ！マジ？」

この提案に、なぜか真っ先にためらったのはユニスである。ユニスが何を考えているのか知らないが、これでは結局墓地の近くまで行かなければならないアスリも、ユニスと同じ方に傾いた。

「えっ、いやでも…！」
「それ良いじゃん！ユニス良い？アスリ運んでも足大丈夫そう？」
「大丈夫っしょ。私ももう肩ほとんど痛くないし。ってか昨日とか、帰りダカクと走ってなかった？」
「いやっ、まぁ…。そう、走ってたけどさ…。」
「じゃあそうしよ！ほら、アスリ、今日はユニスが乗せてくれるってよー。槍とか私が持ってくからさ。」

「えっ！ちょっと、えっ！？」

アスリが先日のユニスとは反対の立場になるまで、あっという間であった。あれよあれよという間にアスリは半ば奪われるようにラリーヤに手荷物を没収され、こちらもティサによって弓矢を取られた上に体勢を整えられてしゃがむユニスの背中へと案内されていった。そうして、どうにもできなくなったアスリは、ユニスの背中に体を預けてその肩越しに両腕をまわすと、ユニスの方もアスリの両方のふとももをしっかりと抱きかかえて、アスリとユニスの間の距離はゼロになり、アスリの体表にはサバンナの風によるものとは異なった、ユニスの持つぬくもりが広がっていった。

「大丈夫？立てる？」
「いける。大丈夫。」

肩越しのアスリの問いにユニスはしっかりと答え、言葉通りまずはしっかりとその場にアスリを背負ったまま立ち上がった。

「良し！いけそう！じゃ、アスリもうこれで怖くても逃げらんないねー！」
「えっ、何！」
「ラリーヤ！先行っちゃおうよ！」
「へへっ、それじゃお先ー。」

ティサは心配する様子を見せていたが、結局はアスリをうまいことして、からかいたかっただけのようである。全ての策略が思った通りにはまったティサは、いたずらっぽい笑みを浮かべて、けたけたと笑いながらラリーヤとともに2人で墓地の方に向けて一直線に走り出すと、すぐに少し先にいた牛たちをも追い抜かしていった。残された側の方も、ユニスもまだ怪我からの回復途上にある両足を

自重してか走りはしなかったが、別段問題のない足取りで先に行ってしまった2人を追い始め、それに横で伏せって休憩していた犬も同調し、犬が動けばたむろしていた牛たちも移動を開始していったのであった。

愛しい背中

今、アスリの心臓は高鳴っている。

孤独であった毎日の小さな旅が賑やかなものとなって、すでに何日か経ったが、この間ユニスとだけで過ごす時間はほぼ皆無で、だいたいそこには父やダカク、ティサやラリーヤの常に誰かが傍に控えていたか、またはアスリの方が控えていた。加えて楽しいおしゃべりの場でも、アスリはユニスに対してそこまで積極的に話を振らなかったし、ユニスからアスリへの方向のものも同様であった。

はっきり言って、アスリはユニスと話したくなかったし、その一方では何時間でも、何日でも、この先一生、ずっと話していたかった。別にアスリは自らの裸体だけでなく、恥部まで含めてユニスに目撃されてしまって恥ずかしいから、ユニスに話しかけないようにしていたという訳ではない。いや、恥ずかしいのは恥ずかしく、それはそれとして良いのであって、ユニスにもっと間近で全部広げたところを見てもらいたいし、できれば反対にユニスそのものも何とかして目にしたい。では、何がアスリをそうさせていたかと言えば、すなわちユニスに支えられ将来的な伴侶となるティサの存在と、それをもってなお自らの心の中でくすぶり続け、ユニスと添い遂げてみたいと願う理性的野心と、彼を想うだけで湿潤する生物的な本能らの、激しいせめぎあいによる。

だが今は、2人っきりである。先ほどティサは本当のアスリのことなど顧みず、あっさりとアスリをユニスに託してしまった。今、アスリとユニスは、あまりに近い。

どうしてこうなってしまったのであろうか。アスリはほんの少し

前まで恐怖におののき、からかわれたことに憤りを感じて、すぐにでもこの場から離れたくて仕方がなかった。
　しかし、まさにこの今はどうだろう。自分の両腕の中には、ユニスの肩がある。すらっとして女子にしか見えないユニスをこうやって抱きしめてみると、見た目以上にこの背中は大きく、アスリとは全く違う異性であることが実感できる。後頭部で１つに綺麗にまとめ上げた長い髪は、ユニスの歩みだけでなく、時折吹き込む風によっても舞い上がり、それはアスリの頬や首筋を、少しくすぐったく、また優しく撫で上げてくる。

　大変だった木陰から脱出してくるあの日、ユニスは今と逆でアスリの背の上にあった。ほとんど同じように髪をセットしているアスリの髪も、きっとあの日はこうしてユニスのことを撫でていたに違いない。そして、ユニスはその中でアスリのことを嗅ぎ、アスリに対して興奮を抱いていた。
　今、ここでアスリがユニスの無防備な首筋を嗅げば、あの日ユニスをなじった通り、自分も変態の称号をいただくことになる。だが、そんなことはアスリにとってどうでも良かった。別に貸しがあるから、それを返してもらうということでもない。アスリは今、ユニスがこの前自分に対してそうしたように、今度は自分がユニスのことを堪能したいだけであって、そこに思考や論理などは必要でなく、目いっぱい本能に向き合いたいだけなのである。

　程よい風がふわりとユニスの髪を持ち上げ、アスリの顔の前を通り抜けた瞬間、アスリは思い切って、それでいて静かに、鼻から大きく息を吸い込んだ。
　直後、アスリの鼻孔から脳へと広がっていったのは、多幸感であった。別に、何か特殊な匂いがするわけではなく、たしかに人間であることが感じられると言うべき、自分とは異なる匂いがするだけ

ではある。ただ、そうではなくて、この匂いが自分の大好きなユニスに由来するものなのであるから、格別なのである。

アスリは今度はもっと大胆に、ユニスの首筋に近いところにまで鼻をよせて、もう一度大きくユニスを捉えた。2回目は1回目よりももっと色合いが強く、そこには少し汗っぽさもあった。しかし、この汗ばんだような香りはアスリに対して何か非常に訴えかけてくるものがあって、それはまた脳を壊しにかかってくる暴力のようでもあった。

正直に言って、アスリはもうずっとこのままで良いと思っていた。これから向かう先は、幼い頃からさんざん恐ろしい噂話を聞かされて、悪いことをして叱られる度に置き去りにすると脅された、あの墓地である。だが、もはやそんなことは一切アスリの心境に影響を及ぼさなかった。

今のアスリの世界は、ユニスだけですべてが完成されていた。

「ねぇ、アスリ…。」

急にユニスが発した呼びかけに、アスリはしくじったことを直感した。ユニスが歩き始めてから、アスリは無言でユニスの匂いにだけ没頭しきっていた。1回目は静かに呼吸したつもりであったが、2回目の首筋を嗅ぐ時は、ほとんど深呼吸であった。アスリは自分も変態扱いされる懸念を抱きながら、ユニスの耳元で小さく返答した。

「…何？」

「大丈夫、息？…やっぱり怖いん？」

この反応を見るに、幸いなことにもアスリの息遣いは、ユニスか

らしてみれば墓地に近づく恐怖によるものとしか捉えられていないようである。しかし、今のユニスの言葉そのものはアスリに向けられる優しさが主のようでありながらも、言葉尻にはわずかに含んだような上ずりがあって、未だにアスリのことを馬鹿にするような意味合いが多分に存在していることが、手に取るようにアスリに伝わってきていた。

ユニスにとって誤算であったのは、実のところアスリは居心地良くユニスの背中に収まっているのであって、ユニスが思っている以上に余裕があるということである。いくら匂いを嗅ぎたいと想う相手であっても、今のユニスの態度をアスリの自尊心は許さず、これ以外にも今日ここまでさんざんからかわれた上に、全ての忠告や制止を無視された仕返しを、ティサとラリーヤからお見舞いされた分までも含めて、アスリは全てユニスにぶつけて腹いせすることにしたのであった。

アスリがここから立場を逆転させるのは簡単である。例の件を蒸し返すような流れを作れば良いだけだ。アスリは直前までの自分のことなど棚に上げて、反撃ののろしを上げていった。

「別に、全然…。それよりユニスさ、今日も私の匂い嗅いでんの？」
「えっ、んなっ…！そんなんするわけないじゃん！」

ユニスの発する言葉から、ゆとりが消えた。狙い通りに追い込んだアスリは、すぐさま続けて次なる嫌疑をユニスへとかけた。

「ふぅーん…。今も本当はこの前みたく、おちんちん固くしてんでしょ？」

「えっ……！してないし！してないから！」
「……本当に？」
「ホントだってば！！！」

やはりユニスは先日と同じく、1つの言葉に弱い。実際のところは大した温度差がないかもしれないが、アスリが感じる限り、ユニスの背中は今の話で突然かっかと火照りだしているようであった。
またそれだけでなく、このやりとりでアスリの方まで体から熱を発し始めていた。では、何がアスリの熱源と化しているかと言えば、それはアスリがこの次の一手で、自身の背中にあの硬さをこすりつけられて以来、潜伏するウイルスのように脳の奥底に隠れ続けてきた自身の欲求の象徴に、ごく自然な形で触れられることにすでに気づいてしまったからということに他ならない。

今のアスリに、一切の躊躇はなかった。アスリにしてみれば、この機会に触れておけば、少なくともしばらくは1人の時にこのことを思い出し、あれやこれやとするための糧として、大切に保管しておくことができるのである。

「…どうかな？」

決意の勢いそのまま、アスリはユニスに両太ももを抱えられたまま、だらりと自由にさせていた膝先の足をユニスの腰まわりを囲い込むように前方へと回して、両足のかかとのあたりを、あの部分の方に伸ばしていった。

「あっ！ちょっと！ヤメロ！！」
「うわっ！えっ！？」

直後、信じがたい感触がアスリの両足の裏へと伝わってきた。アスリは直接ユニスのその部分がどのようになっているか、確認できる姿勢にはない。しかし、アスリの右足の裏からも、そして左足の裏からも、その感覚がある。

挟んでしまっている。アスリは今、両足の土踏まずのあたりをユニスの先端の方へと当てがってしまっている。

加えて、やや固い。その固さは、この前の背中で感じ取ったあの時ほどではなく、向きも腰布に抑えられているせいか、以前のダカクのように完全な上向きではなくて、ほとんど下の方に向かっているようであるが、足裏全体にあるのは半分ほど芯が入ったような肉感である。

冷静に考えれば、アスリは両足をユニスの前へと回したのであって、まさかこの前から今日までの間にユニスが女子になった訳でもないのであるから、別に帰結そのものは本来は信じがたいものではないし、得られた結果は当然ではある。ただ、固いことについてだけは、たしかに信じがたかった。アスリもここまでの流れに持ってくるために半ばふざけて、あえてユニスに疑ってかかっただけなのであって、まさか本当にここまで固くなっているということまでは想定していなかったのであった。

「えっ…。ねぇ、ちょっと固くなってない？…ねぇ？固いよね？」
「違っ！！固くないし！！」
「いや、固いじゃん？どういうこと？」
「違うって！！」

アスリは急激にゾクゾクし始めてきていた。ユニスはどんどん熱くなり、それによって何か耳の後ろのあたりからは、ユニスの匂いが強くなる一方で、アスリが深呼吸などせずとも、自然と一帯の空気全体はユニスになるばかりである。

たまらない状況だ。ダカクを治療した時とは仕組みや作り方が異なるが、最終的に男子はここを捕まえてしまえば、アスリの意のままに良い空気を醸し出してくれるのであろうか。とにかく、ティサもラリーヤもずっと先に行ってしまって、近くにいるのは犬だけである今は、ユニスを徹底的にいじめぬく絶好のチャンスである。アスリは挟みこんでしまっている両足の圧を、一段と引き上げていった。

「うわぁ！！！ヤメロ！！！」
「こらっ！何固くしてんの？」
「だから違うって！！」
「嘘つき！固いし！もっと挟むよ？」
「やめてっ！ねぇ！！あのっ！！あの！だから…！！！」
「何？また私の裸思い出してんの？それとも匂い嗅いでんの？」
「違うって！！」
「じゃあ何？なんで固くなんの？」
「あの…！だから…！」

ユニスは馬鹿だ。ここでだからなどと言ってしまえば、もうここからアスリに追加の詰問を受けるだけである。この短い間に、アスリの両足の中に挟み込まれているその箇所は、当初よりもどうにも大きく、固く膨らみ続けていた。アスリはぐりぐりと強く挟むようにしながら、声を低くして続けた。

「…だから何？」
「いや！だから、その…、あのさ…。」
「何？この前は嗅いでたって言ってた。今日も私のこと、嗅いでんでしょ？」
「違う！！！」
「じゃあ何なの！？ハッキリ言ってよ！じゃないと、このままおちんちん潰すよ？」
「ヤメロ！！！！！」

ユニスも1つのキーワードには弱かったが、アスリも自分で口にしながら、今言ったばかりの言葉になぜか、下腹の奥の方にほんのわずかな切なさを感じつつあった。

「もういいから！ハッキリして！」
「いやっ、あの…、その…。アスリの…。」
「私の？」
「……….。」
「何！？ねぇ？」
「……柔らかい。」

さすがだ。ユニスはアスリが見込んだ、変態である。ユニスが今発した言葉には主語がなく、これだけではユニスが何で固くなってしまったのかは不透明だ。しかし、今の流れで柔らかいとくれば、確定的にユニスはユニスでアスリを運びながら何らかの楽しみを感じていたに違いない。

「…はっ？」
「…………ごめん。」
「えっ？…どゆこと？今さ、柔らかいって言った？」
「…うん。」

「何が？」

「…………。」

「ねぇ！何が？」

「…………………………胸。」

アスリはユニスの発したたった一言に、耳を疑った。先ほどまでアスリは、ユニスが先日自分の匂いを嗅いだのと同じように、反対にユニスのことを嗅ぎ返してやって、悦に浸っていた。つまり所詮ここまでは、等価交換である。いや、この前のユニスはアスリの裸まで思い出していたのであるから、そこまで踏まえればアスリにはまだまだ貸しがあったはずだ。ところがアスリがそれだけで喜んでいる最中、この変態のユニスは背中越しにアスリの胸部の感触を搾取し、それでいてアスリのことをからかうような素振りを見せながら、股間を固く怒張させようとしていたのだ。

たしかに、現時点で発展の途上にあるのか、それともすでに完成されているかは定かではないアスリの乳房は、はっきり言って小ぶりであるし、たとえばかつてのラダンのもののように立派でもなければ、服越しに見ても明らかにアスリより優っているティサや、ティサだけでなくラダンも含むほとんどのロマドウの女よりも優っているであろうラリーヤよりも、随分と控え目ではある。ただ、そうは言えどアスリも女子であるし、それなりに膨らんではきているわけであって、膨らんだものが背中に当たってしまうこと自体で比較すれば、ユニスがこの前アスリに対して行ったものであっても、行為そのものは等しくはなる。ただし、注意しておかなければならないのは、アスリの膨らみは成長によって得られたものであって、ユニスのようにいやらしい気持ちを伴って大きくしたわけではなく、まずそもそもの質が異なるということである。

やはりユニスは、とんでもない。アスリもなぜこんな変態が愛しくてたまらないのか、全く理性では理解が追いつかなかったが、こ

の瞬間もユニスから自分に対して向けられている性の対象としての認識と、その結果としての、またしても固くなってしまった両足の中の1本を、アスリの本能だけがもっと奥深くへと追求しようとしているのは事実であった。

しばらく離れていた性への欲求が急速にアスリの中で高まっていく間、アスリはその他の一切の考えがまとまらず、ユニスの肩越しに見える赤い土の地面の一点を、呆然と見つめることしかできなかった。アスリはただユニスの肩を抱きかかえ、足でも抱きかかえ、このままユニスの一部になってしまいたいとだけ願い、漫然と回らない頭でぼんやりとしていた。

「……あの、だって。」

　押し黙ったアスリを背に、気まずくなったのであろうユニスが言い訳につなげようとする言葉を発しかけたところで、アスリは今の自分が置かれている状況に対して、ようやく意識を向けていった。あわせて、本音としてはやりたくないことではあるが、せっかく逆転した立場を守るためにも、真っ先になすべきことはユニスの背中から胸を離すことであることに、アスリは気がついたのであった。

「変態っ！！！変態！！！！サイテー！マジでサイテー！！！何！？今度は私のおっぱい！？」

　罵るアスリの声に、本心からにじみ出てしまっている喜びは全く隠しきれていなかったが、とにかくアスリはユニスの肩甲骨のあたりへと両手を置きやって、上体を後方にのけぞらせるような姿勢を取った。この形になると、アスリは転落しないように下半身にしっかりと力を入れる必要がある。それは同時に、アスリの両足で包まれている箇所の圧力が、より高まることも意味している。

「うわっ！！！！おいっ！！！！！」
「あっ！！！！ちょっと落ちる！！！！」

力の遷移はユニスのよろめきとなった後、アスリの尻の方へと伝わって、その位置はずるりと大きく下がった状態となった。ここでさすがに強く押さえつけていたユニスの股間からアスリの両足は離れて、アスリのユニスに対しての物理的な有利は失われた。

だが、この状況下、どんなに変態であっても、アスリを落下させない男前がユニスである。まだ怪我も治りきっていないであろう上に、直前にアスリに思いっきり固い槍を圧迫されたというのにも関わらず、ユニスはしっかりとした体幹でアスリ全体を一度真上の方に飛ばすように持ち上げて、崩れかけたアスリを見事に受け止め直そうと試みた。

ところがこの時、事故が発生した。まず、暴れるアスリがユニスから落ちかけ始めたところで少し、続いてユニスがやや激しく一連の動きをしたことでもっと、アスリの腰布がめくれあがってしまった。２段階合わせてどの程度めくれてしまったかと言えば、真後ろから２人を見ると、アスリの尻が丸出しになって見えてしまうほどである。もちろん、後ろがめくれていれば前もめくれているわけであって、ここからアスリの花園はユニスの服の背中側へ、直接面することとなってしまった。

そして、アスリは形だけの抵抗を示し上半身をユニスから離そうとして、それを受けたユニスが前のめりの体勢になってしまったせいで、アスリの腰の向きはユニスに対して、やや斜めに突き出すような恰好となった。ここでユニスの服越しの片方の背筋に密着するのは、アスリの股間の一番悪い部分である。

当然、ユニスの両手はアスリの太ももを掴んではいれど、尻を触っているわけでもなく、ユニスは今アスリの腰布がひどく上にずれてしまっていることなどに気がついていないし、自分の背中でアス

リが苦しい悦びに満ちる恐れがあることに対しても、全く感知していない。ユニスはただただ引き続き弱い立場で成す術もなく、最低限アスリを地面に転がさないことだけに必死なのである。そのままユニスはアスリを保持し続けるために、押さえる太ももの位置を調整したかったのか、ここで全身を軽く伸ばすようにして、一度大きくアスリを揺すったのであった。

その瞬間は、アスリがまずいと直感するよりも早く訪れた。ほんの少しだけ上方に持ち上がり、わずかにユニスと接触するところが外れたアスリの腰回りは、直後に再びユニスの背骨なのか腰骨なのか、とにかく何らかの固い部分にぴったりと位置すると、続いて重力によって下方へとスライドしていった。同時にめくりあがってしまった腰布の中では、アスリの有する中央のあの箇所が、ユニスの服との間に直に生じた摩擦の力を、真正面から受けることとなった。

「んっぁん！！！」

思わずアスリは、今ユニスが目の前にいるというのにも関わらず、何とも情けない一声を上げてしまった。すでにアスリは、ここまでで十分に熱がこもりきっている。このわずかほんの一擦りで、アスリは簡単に発火した。

火が灯された場所は、アスリが過去ずっと1人で磨き続けてきた、アスリの一丁目一番地に他ならない。仮にもこの奥に納められている本尊が、ラダンの中身程度のものであれば、同じ姿勢をとらざるを得なくなったとしても、大分苦しいことに変わりはないが、まだ煙が上がる程度で収まったはずではある。だが、承知の通りアスリのそれはダカクの核には及ばずとも、対峙できる程には大粒であって、その有する面積全体から十分すぎるほどに与えられた知覚は、締め付けるようなほどに感じられるもの哀しさへと、あっという間にアスリの体内で変換されていった。

良くない流れであるし、良い流れである。アスリはまだ火がついてしまっただけで、火そのものの勢いはそこまで大きくはない。しかし、延焼が始まりつつある今、もしユニスが少しでもイレギュラーな動きをすれば、あるいは自分であえてそちらへと導こうとすれば、火の温度は確実に高くなって、その色も赤から青へと変わりゆくのは自明である。

アスリはこんな時にユニスの背中の上で、まさか1人だけで勝手に最高になどなりたくはなかった。もちろん、ユニスが今やったようにアスリをあと数度揺すってくれれば、それはそれで仕方がないし、ユニスに責任を負わせて、もたらされてしまった快楽を渋々受け取るしかないことにはなる。とは言え、間に事故を挟んでしまったものの、上半身をユニスの背から離したアスリは、現状はもうユニスの背上で十分に安定しており、ここからその流れに向けていくには、アスリがもっと暴れる必要がある。それなら、さらに無意味に動き回ればどうかと言えば、そこまでしてはユニスもアスリを地面に下ろすしかなくなるに違いなく、それは全くアスリの求める解には当たらない。

それ以外のもっと穏やかな選択肢としては、まさに燃え上ろうとする火を、たき火でも見つめるかのように眺めて、この状況を切り抜けるということも、取りうる手段の1つとして、あるにはある。そうして火がゆるやかに弱まって消えるのを待てば、今アスリが悶えるように感じる下腹の奥の内側を殴られるかのような疼きも、いずれは静まりゆくであろう。

問題は、アスリは自分自身がその経過に耐えきるイメージを、どうしても抱けないということにある。はっきり言って、アスリは自ら率先して腰を動かして自分を甘美にするしか、今という目の前の一時をやり過ごすことができなくなっているのであって、それをア

スリも認めたくはないものの、分かってしまっているのである。
ただ、それはこの議論の出発地点である、ユニスの前で自慰は行いたくないということに立ち返ることになる。繰り返すが、アスリはこの状況の中で耽ってしまいたくはない。そもそも自分からわざわざ見せつけるように自慰をするほど馬鹿でないことは当然として、かつてのラダンがその後どういった罰を受けたかということも通して、見せつける云々以前に、それがいかに悪であり罪であるか、母による学習の機会もアスリはしっかりと享受しているわけである。その一方でやらんとする行為自体は、ユニスに真の自分を見てもらうという素晴らしい試みであって、そんな悪いことを当人の背中の上でやってしまったらどうなってしまうのか、考えるだけでアスリはとろけてしまいそうになりつつある現実もある。
依然として、理性と本能の押し問答は全く折り合いのつくところまで到達していなかったが、この間もアスリの体内の火勢は強まるばかりであった。そして実のところ、両者の決着は、すでについていた。
その優劣を公正に判断したのは、アスリの肉体であった。堂々巡りを続けるアスリに苛立つ肉体は、ユニスと密着する箇所よりも、もう少し下の方の油井から本気の鉱油を次々と湧き出たせ、ユニスの背中をアスリ一色で塗り替えることで、頑なに拒否の姿勢を崩さない一方の側へ、もうこれ以上の議論の余地は残されていないこと、アスリの本心がどちらにあるかということを、真摯に訴えかけていった。またその訴求は、これだけずぶ濡れにした背中の上で、最も苦しいところにほんの少しでも刺激を加えればどのような結果となるかという、アスリに対しての提起であり、誘惑でもあった。
もう、これ以上は我慢できなかった。ついにアスリは、自分自身の意思をもって、ユニスと触れ合う中でもっとも敏感な接点を良く

するためだけに、腰まわりを擦りつけるように動かし始めてしまった。

「ん…ぅ！！！」

最高だ。最高である。アスリの突起とユニスの間にあるのはユニスの着ている服がたった1枚であり、構成はアスリがラダンから1番最初に学んだあの方法と同じであるのだから、まずもって快楽は確実に保証されている。加えて、今アスリにもたらされている強い快感を踏まえるに、どうにも分厚い包皮はやや上方で押しとどめられて、中身の部分が直に背中に面してしまっているようである。

何より、今は大好きで大好きで大好きで、大好きな、ユニスと共にあるのである。

ユニス、好き

　アスリはここまで来てしまえば、もうユニスに何をしているか知られてしまっても良いとさえ思い始めていた。もとよりユニスに最初に出会った時に、あの遠目の位置からとは言えどアスリはユニスに諸々見られてしまっている以上、むしろ折角ならこの機会に全部、ユニスに何から何まで本当の自分を知ってもらって、ユニスと自分でどちらが真に変態なのか競い合いたかったたし、勝負に勝って変態だと罵ってもらって、この上にないほどに恥ずかしくなって、大きな左右の持ち物と、その間の真ん中も再度開帳して、さらに間から溢れ出る愛も、全てをユニスに見せつけたかった。

「おいっ!?えっ、アスリ!?何だよ!待って落ちる!!!暴れんで!」

　当たり前であるが、ユニスの方はまさかこの状況で、アスリが自分の背中で特別な休息を取り始めたと考えるはずもない。そもそもアスリの休息の真の概念をユニスが知っているのか、アスリは把握していなかったし、どうせならこの点についてもユニスに問うて、もしも知識がないのであれば、アスリが偉大なる導き手となって、手取り足取り、槍も取り、指導をしても良いのである。ただ、戻ってユニスはそんなことを考えるはずがなく、アスリのおかしな動きに、普通なら正解になるはずの反応を繋げていった。

「えっ!?アスリ降りたいん?降りる?」
「んっ…!!いやっ!!…ダメッ!!!ねぇやだっ!!!降ろさないで!ん…!ん…ぅ!……ねぇ、ユニスといっしょっ…んっ!ねぇ!いっしょ!いっしょね!」

アスリの声は、アスリが自分で発して驚くほどに甘ったるかった。こんなしゃべり方をするとは思ってもいなかっただけでなく、そこに並行して自由意志の下にユニスの背上で禁忌を執り行っていること、先ほどまで必死に抗っていた理性はもう気持ちが良くてユニスのことしか考えられないことも含めて、まるで腹側の肋骨が全て背骨に向かって伸びて行って突き刺さってしまったのかというほどに、アスリは一気に羞恥していった。

恥ずかしい。あまりにも恥ずかしい。恥ずかしくて、恥ずかしくて、苦しく張り裂けそうで、そろそろアスリの頭蓋骨は割れそうである。

激しい羞恥を噛みしめるように堪能するアスリは、なぜ今この姿勢をユニスの背上で取らなければいけないのか、もはや忘れていた。今の声を聞かされては、ユニスもアスリが何をしているか、分かってしまっただろうか。それともまだバレてはいないのだろうか。いずれにしても、今のアスリにとって目の前の本能との向き合い方は、普段の性から切り離されている状況で母に対して取るものと同じように、極めて従順であった。

いよいよアスリは遠ざけていたはずの上半身も、胸部も含めてぴったりとユニスの背中に寄り添わせて、自分よりもがっしりとしてたくましい両肩を強く抱きしめると同時に、再び両足をユニスの前に回すようにして、全身でユニスにしがみつくと、ユニスの首筋の匂いをいっぱいにかぎ取っていった。本当は今も両足でユニスのあの固いものを挟んで、最大限にユニスを感じ取りたいところではあったが、火が上がっているところへの対処の方が優先度は高く、ここはアスリが先行して良くなれる腰の位置を、ひとまずは取った。

「えっ！？えっ！？えっ？…え！？」

これで驚くのはユニスの方である。さっき自分のことを罵って身を離そうとしてきたかと思えば、もぞもぞと動き、今度はまたくっついてきたのであるから、ユニスにしてみれば、一貫性のないアスリの行動は不審という以外に言いようのないものであろう。この時点で自棄を起こしたに近いアスリは、ユニスが動転していることを良いことに、もっと大胆に腰のあたりを、と言うよりもあの1点がユニスの背面のどこかに良く当たるよう、ゆっくり、ゆっくりと、優しく擦りつけていった。

「んっ！んー………、ぁ！んーーーーー！」

アスリは幸せだ。今、アスリは自分が愛する人とともにあり、その背中で最も行ってはいけない行為をして、たった一点から全身に向けて熱を送り続けている。その火の手は、もはや戻れないところまで上がってしまっている。最初の最初、この動きをし始めてしまった時に良かったのはアスリの中心だけであったのに、今やユニスの体と接する全ての皮膚が、その中心の充血してつるりとした表面に置き換えられてしまったかのように、全てが最高だ。

相変わらずアスリの足の間からはユニスの背中に向かって、次々と産油が続いており、一方でアスリの内側の方でも採掘された油は気化して、どんどんアスリの脳にまでせり上がってきていた。実のところ、アスリは自分で思ったほど激しく動けていないし、ユニスからすれば、アスリは体調不良に陥ったか、それとも墓地への恐怖に怯えているかのように見えている可能性は、まだまだ十分にある。それは今はどうでも良いことであって、何にしても、アスリはもうかなり近い。

「ユニス！んっ…！ユニス！ユニス！ユニス！！！んっんっ！！！ユニス！！！」

愛する人の名前、アスリは今、愛する人の背中で、愛する人の名前を呼んでいる。

「えっ！？なになになに！？！？えっ！？アスリ！」

ユニスは驚いた声を上げている。だが、アスリの名前も呼んでいる。もう準備は、全てが完全に整いつつある。

アスリはより一層固くユニスのことを抱きしめると、ユニスの空気をもう一度深く吸って、連続する腰の小さな動きを速めていった。

「ユニスユニスユニス！！！ねぇ！ユニス！ユニス！！ああああ！！！んーーーーーーーっ！！！！！」

ついに、アスリの全身に広がっていた揮発油は、燃え広がっていた火によって引火した。まず、アスリの両足の付け根のあの起点が、一瞬流れ星のように強く輝いた。アスリが光るその中心地点を心で見定めようとした直後、真っ白な光は猛烈な暴風となって、アスリの体中の隅々までを吹き飛ばしていくのと同時に、更地になってしまったアスリの全てを、慣れ親しんだあの大波が洗い流していった。その波がまだほとんど引ききっていないうちに、ユニスに支えられる折り曲げた膝より下で、つま先だけをピンと伸ばした両足が不随意に伝える振動によって次の爆発が発生し、そしてその爆発の最中に、また次の爆発が起こり、さらに次の爆発があって、アスリはその度に波にもまれ、弱く、脆く、何より女性らしくなっていった。

絶え間なく続く光に囲まれ、本当に自分の身が輝いているようにも感じているアスリは、ただただなすがままに、肉体全てを快楽に委ねていった。ユニスの匂いと自分でそれを嗅ぐ行為、それを容易

に上回っていく変態なユニスに与えた自分の女子としての成長と、その帰結としてのあの固さ、そしてあの木陰で救ってくれた日の凛々しい瞳、どんなものでも射貫いて、褒めるとはにかむ表情、自分の全てを見せたという事実、事実を塗り重ねるようにまさに最中の挑戦と母に針を刺されかねないという背徳感、それによる唾を飲み込むことさえできないほどの悦ばしい羞恥、今ユニスと触れ合っているという代えがたい幸せ、午前の早い時間の晴れ渡って清々しいサバンナで星にならんとするアスリはそれら全てを総括し、最後に、アスリがユニスに気づいてしまって以来、何度も何度も何度も何度も抱いてきた、１つの結論へと到達した。

（…………ユニス、好き。）

「アスリ！？アスリッ！？」

近いのに遠くで、ユニスがアスリを呼ぶ声が響いている。さっきからユニスは何度もアスリに声をかけてきているが、鼓膜が破れてしまったかのように上の空になって耽っているアスリは、ひたすら淫らに呼吸するのみである。

ユニスの背中で完成したアスリは、ユニスに抱えられた両足と腰まわりだけを痙攣させる以外、もう一切動けなかった。その両腕は相変わらずユニスを逃がさぬよう固く抱きしめたままであったが、そのほか全身の筋肉はほぼ弛緩しきっており、水でも浴びたかのように汗だくの両太ももは、いかにユニスであろうとも、もはや支えきれずに滑り落ちそうな位置にまでずり下がってきていた。

「アスリ、大丈夫？ってかもう足落ちそう…、足おろすよ？」

ユニスもしばらくアスリの返事を待ったが、荒々しく息をするだけで何も言わないアスリを背に、ユニスはゆっくりと中腰となると、アスリの両足のつま先を地面へと触れさせていった。もちろん、アスリはまだまだ気持ちの良い余韻の真っ最中で、上半身はユニスにしがみつきその背に胸を押し付けたまま、下半身はガゼルの後ろ足のようにつま先だけで立ち、内股の姿勢をとって時折ビクビクしながら、粘り気のある液体を太ももにだらしなく垂らしていた。

一方ユニスはユニスで、先ほど自ら白状した通り背中にあたる2つの膨らみがやはりたまらないのか、アスリの足が地面についたのを確かめてから、再びある程度まで真っすぐ立つと、今空いたばか

りの両手でアスリが肩にまわしている両腕を優しく握って、その姿勢でしばらく動かなかった。今のアスリはほとんど耐久性がなく、ユニスに腕を握られただけでまた幸せになり、徐々に落ち着いてきたはずの絶頂感は、すぐにもっと直接的な刺激を求めるように高まっていった。

しかし、異常とも言えるアスリの状態には、さすがのユニスも不安になったのか、あまり長い時間をかけて胸による背中へのサービスを堪能しようとはせず、アスリがまたも何かトライしようとするよりも先に、正常な思考に基づいた言葉をアスリの方へと投げかけたのであった。

「アスリ、もしかして調子悪くなった…？それともやっぱり怖い？」

今度は茶化す気配もなく、ユニスは正真正銘の心配するような、または何かを配慮するかのようなトーンで声をかけながら、掴んだまま離そうとしないアスリの両腕をゆっくりとほどき下ろしつつ、静かにアスリの方へと振り返っていった。アスリもこうなってはさすがにユニスから身を離すしかなく、それでもなおユニスをもっと感じようと、正面を向いたユニスに応じるように、その左肩に額を摺り寄せていった。

このままアスリがまたも深呼吸をしてユニスを受け取れば、アスリが知覚したのは、体内のへその直下のあたりから何かがとろりと外に出ていく流れであった。その感覚に、ユニスの肩にもたれて目を閉じていたアスリがうっすらと目を開くと、まずユニスの苦しそうに張りあがってしまった腰布の前部が視界に入ってきた。こんなに腫れさせてしまってかわいそうであるが、これはアスリがユニスに精一杯女子であることを背中を通じて伝えて、それがしっかりと受け止められて、ユニスの中でアスリに対して向けている性の意識として仕上がっているという証拠なのであるから、素晴らしい成果である。

ところが、続けて落としていった視線の先にあるものを見て、アスリはそのまま両方の目の玉まで地面に落としてしまいそうになった。

ぴったりと閉じ、もじもじとする自分の両足の付け根の中央部に、薄く生えたばかりの狭い覆いが見えた。その直下には、やや腰を引いて足を閉じているのに顔を出している、真ん中で挟まれた肉があった。そして両方の太ももには、今出たばかりの新鮮な一筋の他にも、汗をかいたところに吹き付けられてしまった砂を、どうにかして洗い流そうとした複数本の痕跡も残されていた。

アスリの腰布は、めくれあがったままであったのだ。

「…えっ？」

ハッとしたアスリが小さく驚きの声をあげて、ユニスの肩から頭を離してユニスの顔を見れば、そこにあったのは久しぶりに見る、木陰で初めてユニスがアスリと、またアスリの全てと出会い、川を挟んだ向かい側で真っ赤になって伏し目になっていた、あの時の表情があった。ただ、１つだけあの時と異なっていたのは、ユニスの両目が今回は伏し目でなく、はっきりと大きく見開かれており、アスリが大人に変わっていこうとする1点を、すでにその奥に穴はあるが、穴が開くほど見つめているということであった。

ほんの少し前まで悪い行為をしていたアスリにとって、今のユニスの感情は何も聞かなくても容易に想像できるほどに、わかりやすいものである。ユニスは今、苛立っている。それは怒りによるものでなく、猛烈な欲情によるものであるはずである。

この変態に浸りきっている顔が見たくて見たくてしょうがなかっ

たアスリは、ユニスの色に染まった顔をただ見つめるだけで、ユニスによってもたらされた、見られるというハラスメントに没頭していた。今、両太ももで挟んでいる付け根の肉の中に少しでも指を這わせれば、おそらくさっきの背中と同等か、もっと良い波がくるに違いがなく、この勢いに任せてそのようにしてしまう方が、アスリとユニスのためになるに違いはない。

ところが、強く送られてくるアスリの愛の視線に、ユニスの方は耐え切れなかった。ついにユニスは申し訳程度の芝生と、そこに挟まるはみ出しを見続けることをとりやめると、紅潮した顔をアスリの正面に向けて、よだれでも流しそうに半開きのままにしていた口を動かした。

「…アスリ、下。」

恥ずかしそうにつぶやくユニスの一言は、アスリが一時忘れ切っていた羞恥を、一気に呼び覚ましていった。改めて現状を認識したアスリは、ようやく本来なすべきことである、ユニスに掴まれたままだった腕を振り払って腰布の位置を戻すことをすると、のんびりしていたのに突然外敵に襲われた二枚貝のように両手で顔面を覆って、その場にしゃがみこんでしまったのであった。

アスリは猛烈に恥ずかしがった。はっきり言って、アスリにとっては、この前ユニスに全部見られた時よりも、今の方がもっと恥ずかしい。なぜこの前よりも恥ずかしいのかと言えば、あの時よりも今はユニスの人となりを知っているし、それ以上にユニスは今や恋する人物となってしまったからに他ならない。

では、仮にも今、ユニスと初めて出会った時と同じように、身に着けているものを全部脱いで、ユニスが興奮してくれた小さな２つの膨らみや、さっき見せてしまった唇を広げきったところ、その奥

の桃色の庭や、１番アスリが良くなる一粒まで、ユニスに見てもらったら、アスリはどうなってしまうのであろうか。それだけでなく、背の上で達していたとは言えど、改めて母が禁じるあの行為を、ユニスの目の前で挙行すれば、さらにどうなるだろう。
すでに十分羞恥していたはずのアスリは、自分で自分の頭を砂レンガで殴ったかのような衝撃を１人で勝手に受け、本当に殴られた後であるかのように、頭が痛くなるほどに血液を逡巡させていた。それでもなお、あの部分だけは本能を訴求し続けていて、このまま頭が破裂しても良いから、両足を大きく広げて、思いっきり真ん中を擦ってみたいという欲求は、アスリの１人の社会性を持つ少女であるという立ち位置さえをも奪おうとしていた。

事実の摘示

「……あっ、アスリ。その…、ごめん、俺…。」

顔を隠したまま、何も言わなくなってしまったアスリが泣いているようにでも見えたのか、ここでユニスはか細い声で謝罪を述べた。ユニスの気遣いを尻目に、アスリは苦しいほどに良くなる一方であったが、本能の権化である真ん中のあの部分は、あえてその羞恥をさらに煽るべく、アスリをもっと余裕がない方向へと歩ませていった。

「……見てたでしょ？」

「…………いや、俺、別に。」

先ほどあれだけ見つめておいて、別にとは、白々しいにもほどがある。すぐにアスリは両手を顔から離すと、自分でも耳まで火照っているのが分かる顔を、困惑の中にもいやらしさの残るユニスの方へと向けた。

「嘘つき！！！見てたじゃん！」

「いや、だって……！ってかアスリだって、なんで脱いでんだよ！」

「はぁ？ユニスが背中の上で動かすから脱げちゃったんだし。ユニスが脱がしたのと一緒でしょ！？」

「はっ？そんなんだって、アスリが急に動くからじゃん？」

「だってユニスが私のおっぱいで、おちんちん大きくしたからでしょ！」

「それは………、でもじゃあ、それなのになんで1回離れて、もっかいくっついてきたんだよ？」

悔しいことに、これ自体はユニスの言う通りであり、アスリに返す言葉はない。アスリはまさかユニスに口論で優勢を取られるとは思ってもいなかったが、やはり母が釘ならぬ針まで刺そうとして阻止せんとする以上、あの行為をすると馬鹿になってしまうのは避けられないのかもしれない。ただ、仮にもそうであったとしても、今アスリの体を借りて自分自身に対して語りかける本能としては、この悔しさすら快感であって、これはこれで悪くない形勢である。

アスリが内々の様子を見ながら少しひるんだ姿を見せると、それを見計らったのか、ユニスはやや遠回りをしながら、さらに攻勢を強めていった。

「結局アスリさ、怖かったん？ってか、俺の背中で漏らしてね？」

「はっ！？漏らしてなんかないし！！」

「いや、俺の背中、今めっちゃびしょびしょになってんだけど。別に怖かったんならそれでいいから。」

「馬鹿！！体くっつけてて暑かったんだから、汗に決まってんじゃん！」

「いやさ、アスリの股がくっついてたとこが…。」

「変態！！！」

自分のことなど置いておいて、まずは相手を変態と罵っておけば、自分が同じレッテルを貼られる可能性は低くなる。定石通りのアスリの一言にはユニスも少したじろぎ、これでこの切り口からの攻撃はひとまず収まった。

しかし、実のところ今日のユニスにはまだ、アスリに対しての全ての配慮を排した、ストレート極まりない最強の手札が残されていた。その効力たるや行使する側までをもたじろがせるのか、ユニスはややためらうようにしながら、禁断の1枚をアスリに向けて切っていった。

「ってかさ、アスリさ…、そこまで言うなら、もう言うけどさ。」
「何？」
「怖くなかったんなら…、あの、さっきの…、あれってやっぱ…。」
「…だから何？」
「いや…、あの…、やっぱり何でもない。」

アスリは何かを直感するのと同時に、その胸の奥では急速に鼓動の間隔が早まっていった。これはひょっとすると、ひょっとするかもしれない。もちろんユニスのターンも終盤のようで、ここでこのまま終わらせてしまうことも、できるにはできる。しかも組み立てた予測に基づけば、この先に待ち構えているのは、最悪なのである。だが、万が一にも考えうるごく少し先の未来が正しかったとして、その事実を突きつけられた時、自分の精神がどうなってしまうのかという興味だけは、色に染まってしまったアスリの心中で極めて先行していた。

結局ここでも、弱いアスリはまたも本能に容易に屈した。そして、敗北した自分を隠すかのごとく、アスリは威勢よく強そうに一気に立ち上がると、ユニスを睨みつけるようにしながら、自分を追い詰める方向へと舵を切っていった。

「ねぇ！！！何なの！？はっきりしてよ！！！」
「…あの、アスリ。」
「いいから！」
「……アスリさ、俺、その…、薄々思ってたんだけど、さっきのって、アスリに助けてもらった時の、その前の時の……。」

終わる。この流れになれば、アスリはもうすぐ終わる。こうなることが見えていたというのに、アスリは無駄な啖呵を切ってしまったのだから、帰結は当然である。かつて、ラダンの犯行現場には母

が槍を携えて侵入した。今日、槍を持つのは愛するユニスであり、その先で控えているのは自分である。
アスリの脇では汗が雫となり、脇腹の方へと向けて流れていった。照りつける太陽になすがままにじりじりと焼かれながら、ただ押し黙っているだけのアスリを前に、ユニスは大層言いにくそうに、真っ赤な顔についにあの伏し目を浮かべて、アスリが自分の方から強く求めた回答を提示していった。

「あの時してたアレみたいなの、…………さっきやってなかった？」

バレた。いや、薄々やさっきからという言葉を受けた上で、今の言葉である。正しくは、やはりバレていたのだ。それもバレていたのは、直前までに自分がしていたことだけではない。初めて会ったあの日、ユニスはすでにアスリがしていた行為そのものも認識していたのである。

アスリは甘かった。ユニスをロマドウに連れてくるのにあたってかん口令を引いて以来、アスリは今日に至るまでユニスに深く事情聴取はしてこなかったこともあるが、正直に言って会話の流れがこのようになるまで、アスリの注意の向き先は、局部を見られてしまったということだけであって、あの日のあの時、何をしていたかということは、その範囲の外側にあった。それは決してアスリがその可能性に目を向けたくもなかったからなのではなく、単に性器を目撃されたというところで、十分満足できてしまっていたことによる。だが当然のように、変態のユニスがアスリの本尊を目にしたとして、そこでさらにどのような祈祷が行われているのか、見ないわけがないのである。

今更ながら、今日と先日の二段構成となったユニスの知る自分自身の事実を前に、アスリが直前に飲み込んだ生唾は、ぐらぐらと煮

立った湯のように、カーッと熱く喉から食道、胃に至って落ちていった。同時に、アスリは口の中で歯茎が一気に沸騰して、全ての歯が持ち上がって、そのまま体までが天の上に持っていかれてしまうかのように感じていた。

アスリは叫びたかった。耳をふさいで目もつぶって、ずっとただ、サバンナの真ん中で地面に向かって絶叫していたかった。

苦しい、あまりに苦しい状況だ。しかし、こんなに嫌で最悪であるというのに、アスリの下腹の奥はこれまでに感じたことのないほどに嬉しくなっていたし、ゾクゾクと体の中心から湧き上がってくる不思議な感覚を、一切とどめることもできなかった。アスリの本能は、どうしようもない自分に続けてムチを打たせるべく、ユニスを動かそうとしており、対するアスリの理性は最後の抵抗として、語りかける内容はともかく、やや低く、できる限り最大限の威厳を持たせた声を出すことで、どうにか自らの尊厳だけは守ろうとしていた。

「…ねぇ、どういうことなの？ってかあの時って………、私の何を見てたの？」

こんなことを聞いても、自分がもっと恥ずかしくなるだけである。だからこそ、聞くに値する価値があるのである。

「えっ！それは………。」
「いいから！ちゃんとこっち見て！！答えて！！」

アスリの叱りつけるような声に、なぜかユニスの方が暴露されてしまったかのように恥ずかしがりながら顔を上げると、アスリの両目をしっかりと見定めた。ユニスは一拍を置いて、続けた。

「………、あの時アスリ、その、…股の中身、指でいじってた。……今日もさ、俺の背中で擦ってたよね？」

完璧だ。これでアスリは、あの日のラダンだ。したがって、これからアスリは、ユニスから何らかの罰を与えてもらわなければならない。一体、ユニスは自分にどんなお仕置きをしてくれるのだろうか。やはり、大人に向かっていくことを示す証は、まず没収してもらわなければならないだろう。別にラダンのようにアスリは毛深くないから、大がかりなことをせずに、この場で全部ではなくとも、ある程度までは引っこ抜いてしまうこともできるはずではある。そのためには、どうしても全部広げて見てもらわなければならないし、広げる段階で、あの時は2人の間に川1本分あった距離を最大限に近づけて、ユニスにしっかり確認してもらう必要がある。そうなれば、グロテスクに思えるほどに発達した、誰のものとも異なるアスリの最大のコンプレックスや弱点も、詳細にユニスに調べられてしまうわけであるし、アスリも自分で見たことのない、後ろの方まで晒しあげることになる。

それが終われば何だろうか。今のアスリの体たらくを見れば、そこまででアスリも蜜にまみれてしまっているはずで、しっかりとこぼれてしまったものを赤子のように拭いてもらい、真ん中のところを包んでいる皮も後退させて、あの中身も磨くのが続く手であろう。ここまでやってくるまでに、アスリはもう波に浸ってしまっているかもしれないが、少なくともこの工程では幾度も大波に飲まれて、拭けども拭けども浸水するに違いない。想像するだけで、触ってもいないところは熱くなる一方である。

その先は、母がラダンにやろうとしたように、針をあの1点に刺されてしまうのだろうか。あの日、ラダンは結局は刺されなかった。もしもあれほど多感な場所に本当に刺されてしまったとしたら、ラ

ダンはどれほどの声を上げていたのだろう。そしてそれが自分の身であれば、どれほど過酷な痛みがもたらされ、穴を開けられることになるあの部分は、一体どうなってしまうのだろうか。
アスリにしても、痛いのは嫌であるし、そもそも母が相手ならそんな痴態を見せたくもない。だが、アスリの余罪は多数あるのであって、どうしても避けられないのであれば、しかもその執行者がユニスということであれば、罪を償いきれるまで、受け入れても良いのである。それになぜか、考えたくもない想像を絶するはずのその瞬間をあえて考えてみると、またここまでと違った作りの不思議な高鳴りがアスリの中で起こってきて、考えたくないことを考えて喜んでいるという背徳感までもが、動物の骨を投じてじっくりと煮込んだスープを口にした時のように、味わい深く全身に広がってくるのであった。

それともユニスが宣告する刑は、森の中だけで行われてきた、アスリがまだ知らない何かなのであろうか。場合によっては、その罰の場をたとえば同年代のティサやラリーヤも見せられて、そこで記憶された自分の惨めな姿は、今度は2人の、いや、ユニスも含めた3人の、日々満足するための糧にされてしまうのであろうか。
さらに踏み込んで言えば、その3人にユニスも含まれるということは、ユニスもアスリの知らない男性的な方法で、日々罪を重ねているのだろうか。そうだとすれば、男性的な方法というのは、一体どのようなもので、その先に待つ結果もアスリと同じものなのであろうか。

めまいがしそうなほどに興奮しきっているアスリは、もう立っていることさえも辛かった。この前の件にしろ今日の先ほどの件にしろ、適当なことを並べて言い逃れしようと思えば、多少筋が通らないとしても、できないことはない。ただ、アスリは罪を重ねてこうなったのであるから、そんなことは今はすべきではない。罪深きア

スリは、悪い悪い自分自身をユニスに徹底的に追いこんでもらって、許してもらいたくて、また、ユニスの男性としての所在を知りたくて、体の奥をキュンキュンと鳴かせながら、ユニスに触れんばかりのところまで、つい一歩近づいてしまった。

「アスリ…？」

異様な雰囲気のアスリを目前に、ユニスは少し前の恥ずかしがるような様子から、やや怯えているかのような、不思議な表情を浮かべた。アスリの本能は、ユニスの瞳の中に映るアスリの顔を見つめながら、次に成すべき行動を正しく啓示していった。

「ねぇ…、ユニス。絶対に言わないでね？マジで。絶対誰にも。今までも言ってないよね？」
「言ってないよ！！！」
「ホントに？」
「言ってないし、言わない！！！」

アスリの今の言葉は、ここまで起きた出来事に対して述べたものだと、ユニスは受け取ったはずだ。少なくともアスリが逆の立場で同じことを言われたのなら、そのように考えるし、そう捉えるのが普通である。
だが、アスリの本能の真意は、過去のことだけを意味するものではなかった。

「えっ！？！？ちょっと！！！アスリ？！？！」

直後に、ユニスは驚きの声を上げて腰をやや後方へと引くと、両手でアスリの右手の手首のあたりを押さえた。この反応は当然だ。なぜなら、今アスリの右手の中にあるのは、ユニスの背中の上に乗

りながら両足で器用に掴んだ、腰布越しのあの1本であるからだ。

ユニスを掴んでしまった。紛れもなく、ユニスそのものを掴んでいる。

実のところ、アスリは行動しておきながら驚いていた。それは自分の大胆さだけでなく、掴んだ先が自分の背中越しや足越しで感じ取っていた以上に、あまりに熱く、固く、大きかったからに他ならない。本来なら2本並べて丈比べをするのが最もわかりやすいのであるが、アスリの感覚としては、ダカクのものよりもユニスの方が1回りほどは大きいようであり、その有する肉感も大分強かった。もっとしっかりと記憶と比較するなら、今日の先ほどのものも含めて、これ以前にユニスに触れた2回よりも、ずっと固く、大きくなっているようにも思える。

何より、掴んだところはあまりにも湿っている。アスリはユニスのように、漏らしたのかと指摘しても良かったが、おそらくこれは尿でないことはアスリにもわかる。

これはアスリの井戸からも湧き上がってくる欲望の地下水であって、それが表面まで水位を上げて外にまで溢れてしまうのは、決まって我慢がならない時である。ダカクの作りに基づけば、男子の井戸は先端に1か所だけであるはずで、おそらくそこからユニスも滲ませてしまっているに違いない。だとすると、アスリも今大分熱っぽくなってしまっているが、ユニスはユニスでアスリの胸を堪能した上に、またもアスリの直の股間まで目撃して、実際はアスリと同様に、苦しくてたまらないのであろうか。

とにかく、アスリは今、掴んでしまっている。過去、背中を通してハラスメントを受けた時は明らかに変態のユニスが悪く、今日の先ほどは悪いことを考えていないかを検査するためであって、それ

ぞれアスリとしては正当な理由があるにはあった。もう1本、別物でダカクのものは直接内側の部分まで目にして、こちらも布越しに握ってはいるが、それも治療目的である。
だが、今のこの掴む行為には、合理性はない。しいて言うのであれば、アスリが触りたいと思ったから握っただけで、これではアスリばかりが悪者であるかのようである。もちろんこれで2勝1敗と捉えることもできるが、アスリはユニスに1回も負けたくなどない。

この事態を打開するのは、容易だ。アスリが不利ならば、戸惑い焦るようなユニスも同罪にしてしまえば良いだけだ。
もはやアスリは自分でも何をしているのかよく分からなかったが、アスリの右手を押さえようとするユニスの右手を左手で優しくとると、その手をゆっくりと持ち上げていき、自分の小さく膨らんだ左胸へへと当てがっていった。

「えっ…？」

一瞬、魂が抜けたような表情をユニスは浮かべた。これでアスリとユニスの双方が、お互いに非常に際どい個所を触れているのだから、相子になる。

ところが、もう十分だというのにも関わらず、アスリの本能はアスリ自身も信じられないような一言を、困惑した中に喜びを得ているはずのユニスに、小さくかけていった。

「………もっと見たい？」
「はっ……？」
「だから！もっと見たいかって聞いてんの！！！」

声を一気に強める中、どうして自分がこんなことを言っているの

か、アスリは全く理解できなかった。しかし、肉体の方はアスリのことなど置いてけぼりにしようとしていて、左胸の前でユニスの右手首を掴んだままであったその左手を、ユニスの手だけ胸に残るようにしておろしていくと、今度は腰布の裾をアスリに握りしめさせていった。

この先はまずい。ユニスに見せたばかりのところを、なぜまた見せなければならないのか。しかも今は、先ほどよりも真っすぐに近く立っていることもあって、腰布をめくれば、次はごくわずかな茂みの奥の中央に挟まる肉部が、もっとはっきりと見えてしまうはずである。

「…ねぇ？」

欲求と羞恥の真ん中にいるアスリが、熱で溶けそうになりながら発した最後の問いに、ユニスはアスリの腰布の裾に視線を落としたまま、こくりと首を縦に振った。ユニスの額には幾粒もの汗が浮かんでいて、ユニスの首の動きに合わせて、そのうちの1滴が周りの粒を巻き込んで、ユニスのこめかみから頬の方へと流れていった。

「バカ、変態。」

罵ることでどうにか主導権はまだアスリにあるように見せながら、今、アスリは通してしまった。この提案は、誰がどう見ても自分発信のものであって、それをユニスが承諾した以上、もうこの先はユニスに見てもらうほかない。

アスリは自分で自分を追い込んだ代償を支払う覚悟を固めると、湯気でも上がりそうなほどに蒸してしまったところをユニスの面前に晒すべく、少しずつ、少しずつ、腰布の裾を上方へとずらしていった。それに伴ってアスリの右手の中の高まりは、さらに膨らみを

増していくように大きく固く湿っていき、アスリが裾の位置を高めるごとに、その1本が脈打つ間隔は徐々に狭まっていった。

いよいよ、アスリの太ももの付け根が見えてしまうかというところまで、裾を持ち上げた時だった。握りしめる固槍がビクン、ビクンと2度痙攣した直後、アスリの手中に、じんわりとこみあげてくるように広がっていったのは、もっと熱い、何らかの感触であった。

「あっ！」
「えっ！？えっ！？ちょっと！？！？」
「あっ！あっ！うっ…ヤバいっ！だ…！…あっ！」
すぐさまユニスは声を上げながら、腰が砕けてしまったように尻を後ろの方に突き出したが、アスリの右手はユニスを掴んだまま放さなかった。アスリが放さなければ、その小さな左胸に置かれたユニスの右手も放されず、むしろアスリが痛みすら感じるほどに、強く力が込められていた。このわずかな間も、ユニスが発声する度にアスリの手にする先はさらに熱くなっていって、ついにそれはアスリの手のひらと腰布を貫通し、地面へ数度、ぼとり、ぼとりと落ちていった。

「うっ…！うぅっ…！うっ！」

アスリは完全に呆気に取られていた。まだユニスの異変は止まないどころか、うめき声１回ごとに震えまで生じさせている。汗にまみれて真っ赤になったユニスの顔は天に召し上げられるかのように持ち上げられ、両眉はハの字状となって、目は薄目なのか、完全に閉じられているのか、とにかく美しい二重の瞼は閉じられている。そして、半開きとも横開きともつかない、ユニスの口元を目にしたところで、アスリはついに事態の全てを掌握した。
これは、大きな波に必死に抗う時の、奥歯の奥であの感覚を噛み殺そうとする時に自分がする、あの口の形である。つまり、ユニスは今、あの大波を受けている最中にある。

大変なことになった。アスリは生まれて初めて、異性が大波にさらわれていった瞬間を目撃してしまった。男子というのは誰しも波に流されてしまうと、これほどまでに情けなく、弱々しく、苦しく、切なそうな表情を浮かべるものなのだろうか。それともアスリ自身も先ほどユニスの背中の上で到達した際には、こんなに煽情的な顔をしていたというのであろうか。

何であれ、このユニスの姿はアスリの脳を暴走させ、同時に複数の思考と欲望が一気に並行して、何本もの紐が解けないほどに絡まったようになってしまった。その間も、初手から2手目、3手目あたりの地面に落ちてしまうほどの熱いこみあげはなくなってきたとは言えど、アスリの手の中ではドクン、ドクンと心臓を直に握りしめているかのような躍動があり、まだまだ何らかの液体が少しずつユニスの外へと射出されていた。

また、液状化が生じていたのはユニスの側だけには限らず、間もなくユニスの前に丸出しになりそうなところまでまくり上げられていた、アスリの腰布の内側でも、再び甚大に水没し始めていた。すでに今日のアスリはユニスの背を十分が過ぎるほどにずぶ濡れにしていたが、頭脳は全く目の前の状況に追いついてきていないというのに、体の方はユニスの真似をしたかったのか、またも多量の蜜を湧き出させていた。凄まじいほどの下腹の疼きに耐えかねたアスリが、ほんの少しだけ尻の方に力をこめるようにすると、その後発の初回分は、短い状態の腰布の裾の真ん中あたりからとろりと流出し、外気にさらされた後、わずかに吹く風に乗りながら、糸を引くようにしてアスリのふくらはぎへと至っていった。

アスリは、自身を制御することが難しくなってきていた。ユニスは今、同じく大変になりつつあるアスリを目視することすらできず、ただ顔を空の上に向けて、苦悶とも取れるような快楽とともにある

表情のまま、ひたすらアスリから一方的に眺められているだけである。今なら、アスリはこの腰布をまくり上げている左手で、あの真ん中の一粒を撫で上げることができる。それは別に、ユニスが自分を見ていないから、こっそりと慰めたいということではなく、このあとユニスに見てもらうための事前準備に他ならない。

そう考えきるよりも、アスリの左手の方が動きは速かった。アスリはユニスが顔を下に向ければ芝が少し見えてしまうところまで腰布をずらすと、どうにも普段よりも何倍にも腫れあがってしまったようにも思える中央部の核へ、中指を配置した。もうユニスには全部知られてしまっているし、ユニスも興奮の限界に達した。

だから、これからが本番だ。アスリが普段どうしているのか、しっかりとユニスに見届けてもらうのだ。すぐさま、真ん中に押し当てたアスリの中指は、第二関節から小さく上方へと折り畳むような動きを取っていった。

「あぁんっ！！！」

アスリは大きく、甘い声を上げた。今の一押しだけで、アスリに中程度の波がやってきた。今日はアスリにとって、朝から本当に幸せな1日だ。おそらく次で、過去最も素晴らしい爽快感がアスリに届くだろう。

ところが、ここでアスリは今のごく小規模な動作の反動として、ユニスを掴む右手の方もスライドさせるように動かしてしまった。牛の尾の付け根が左右に振れれば、次は尾の先が振れるように、そのままユニスの方にもその動きが伝わることになる。

「あああぁあん！！！！！」

滴る一方だった先端からの漏出を、どうにか収めたばかりのユニ

スも、アスリが上げたようなやや高い声で叫ぶと、ここでアスリの右手からは、ユニスはとうとうぬるりとすっぽ抜け、また強く掴まれたままであったアスリの左胸からも、ユニスの手は離れていった。そのままユニスはアスリから翻って背を向けてしまうと、地面に膝をついて、まるで局部に矢でも刺さってしまったかのように両手で股間のあたりを押さえながら、首を垂らして荒々しい呼吸を繰り返し、その息の度に両肩を上下させていた。

盛り上がった中で逃げられてしまったアスリの右手の中に残るのは、ぬめるような感触である。頭が悪くなりそうなほどに熱を帯びているアスリは、空きがなく仕方なく使っていた利き手でない不器用な左手の方は一角に置きやり、存在そのものが性となってしまったユニスを視界の隅に置きつつ、まず右手のひらの中の、ユニスの抽出物へと目を向けていった。

それは、やや黄味を帯びた、白っぽく濁った何かであった。出てきた位置や状況を踏まえれば、やはりこれはアスリの股間から流れ出てしまうものと、非常に近い何かである。ただ、ユニスのものはアスリのものほど水っぽさはなく、性質は粘り気の方へと傾いている。また、その出方もアスリとは全く異なっていて、アスリの方は際限なく次から次へと供給されるのに対して、ユニスのこれは数発の連射のように大量に溢れた後は、今のところは続けて出てきていないようである。とろけそうになっている脳みそで検分するアスリは、何となく粘るその汁を陽の光に直接当てて分析しようと、右手を顔の近くまで持ち上げていった。

その時、そよ風がふわりと、ぬらぬらと輝くアスリの右手を撫ぜた。すぐさまアスリの鼻孔には、強烈なユニスが届けられた。

アスリは発狂しそうになった。今のひと風は、頭がおかしくなる

匂いをしていた。それは尿のようで、またそれとは異なった、たしかにあまり清潔とは言い難い、匂いというより臭いである。しかし、絶対におかしくなる何かが入っている。しかも、一発でこれがユニスが作ったものだと分かるほどに、ユニスの首筋が何百、何千倍にも濃縮された香りを発している。そしてこれは、嗅いでいるだけでアスリの下腹の奥深くや、足の付け根の真ん中を、凄惨とも言えるぐらいにきつく締め上げにかかってくるのである。

アスリは今、ユニスが崩れ落ちてしまうほどに一生懸命になって精製したこの液体を、一滴も無駄にしたくなかったし、すでに地面の上にぼとぼとと落としてしまったところの、周りの土まで食してしまいたいとさえ思っていた。だが、実際に嗅ぎ続けることは叶わない。もしもアスリがこれを気の向くままに嗅いでいけば、多分今日はここから動けないし、動くのは股間をまさぐる指だけである。そうして、もう今日はここに泊まることにして、ずっと地面の上で右手を、あるいはユニスが汚してしまった腰布や、それ以上に大胆に直接その中を嗅ぎながら、ひたすら自分で自分をいじめぬくしかなくなってしまう。

これが、アスリの理性が、アスリに求める自制である。ところが、狂ってしまう匂いを嗅いでしまったせいで、残念なことにアスリの理性はより本能に寄り添う方へと、アスリの心の議論を誘導していった。

つまり、その何が問題になるかをアスリに対して問い、無駄に抗うことなどせずに、本能に対して降伏すべきであると、意見をしていったのである。それに留まらず、暴走してしまってもはや理性と呼ぶに値しない理性は、すこぶる平然と嗅ぐだけでなく、もっと合理的な用途の提案まで行っていった。

思考がそこまでたどり着いた時、アスリは自分で考えておきながら、全身に不思議な鳥肌を立たせてしまった。ただ、ここまでどう

にかして、アスリなりの解釈をまとめてきた以上、その過程を全て無視することなど、性の欲求に厳格なアスリ自身が許すはずはない。

相変わらずユニスはまだ余韻の最中にあるのか、背を向けて股間を抑えて肩を上下に揺らしたままである。その背中にアスリは触れたくて仕方なかったが、もう一歩も歩くこともできないほどに、アスリのあたり一面は、本能による欲求でしかなくなっていた。

アスリは、どうしようもない悪い女である。もっと正確に言えば、ロマドウの中では、アスリはまだ女でもないし、女になることのできる半女でもないから、すらりと伸びた背丈と、いくらか成長した上半身や下半身の一部で証明しようとしても、所詮、扱いはただの子どもであって、悪ガキである。したがって、母が以前言っていた通り、やってはいけないと固く躾けられたことを、自らの判断で行って良いはずもない。

では、アスリは今、何をしようというのか。アスリがどれほど言い訳を押し並べて、違うと言い張っても、それは自慰である。それも、とても大好きなユニスを目の前に置いて、ユニスの素晴らしさを用いて、自分だけが勝手に耽って良くなろうとしている。その上、ユニスにはティサという将来結ばれるべき相手もいるというのに、これからアスリはユニスが悶えながら出し切った成果をかすめ取るのである。何なら次にするこれは、大きく分けて、今日だけで2回目にあたる。

故に、どうあがいてもアスリは悪い子どもであって、誰からも許してもらえる理由はなく、本来ならしっかりと罰せられるべき立場にあることに違いはない。だからアスリが今、自己への強い罪悪感に苛まれ、それなのに本能にしか従えない自分の弱さで泣き落ちてしまいそうなほどになっていようとも、全くもって同情すべき余地はないのである。

性にばかり走る非常に悪いアスリは、頭からつま先に至るまで、釜に入れた水をかけられた後のように汗をかきながら、濡れた布を絞るがごとく、喉の奥を固く掴まれているかのように感じていた。

そうは思えども、もうここまで悪くなってしまってはすでに手遅れであることは、アスリ自身が最も理解し、とうに諦めていた。

（ママ、ごめんなさい…。）

最後まで清らかであろうとするアスリの良心は、届くことのない母への謝罪を無言でつぶやくと、そこからはこれ以上の抵抗をせず、肉体を行使する権利を明け渡すほかなかった。

早くしろと叫びながら包囲するもう１人の本当の自分に向けて、肉体を行使する権利を明け渡すほかなかった。それに見かねるということもなかったが、委ねられた側のアスリも急な動きはさせず、肩幅ほどに足を広げ腰布をもう少しずらさせながら、処刑の位置に囚人を導くように、静かに両膝をつけさせていった。

正のアスリの明確な投降を確認した本能は、手始めにもう一度、アスリに右の手のひらの前で深呼吸をさせて、胸の中をユニスで満たさせながら、上手にできたアスリを幸福で中毒させた。そして左手の人差し指と中指で両足の真ん中の左右の花弁を、上の方に引き上げるように押さえさせて、ユニスとともにあって震える右手を、中央で剥き出しになっている熱いところへ、ゆっくりと向かわせていった。

もう、アスリに心の猶予は残されていなかった。アスリは大好きなたった１人の背中をしっかりと見定めると、ついにその愛の付着した右手を、包皮から引きずり出した中身に、直に対面させた。

「っ…！！！」

触れた感覚自体は、別に自身に由来するものを用いている時と、ことさら代り映えはしない。ただ、アスリが触れているのは狂気を放つユニスの快楽の結晶であって、それをアスリの最も弱いところに当てているという事実が、アスリにとって重要なのである。

目の前の状況を考えただけのこの時点で、アスリは相当苦しくなっている。今、ここでこの右手を動かさないでいることは、易いように見えて困難を極める。仮にも今、アスリの右手が矢で突然射貫かれてしまっても、最後までやり切るだろうし、万が一にも槍で右手を落とされてしまったとしても、おそらく執念で何とか右手だけが自立するか、そうできないなら、血を流しながらでも、その右手の上に自分の股間を下ろして絶対に満足する自信が、アスリにはあるのである。

なすべきことは、なさねばならない。実直なアスリは、ふしだらで悪いアスリに制裁を科すべく、心を鬼にして、当てがった手のひらのぬめるところを、一気に回すように動かしていった。

「んんーーーーっ！！！！！あっ！！！！！」

アスリが波にさらわれたのは、早かった。その次も早く、またその次も早かった。それでもアスリは手を止めたくなかった。いつもであれば3回も終えたところで、触れないほど十分になる。だが、今日は自分の手の中だけであるとは言え、ユニスと一緒である。残る1滴1滴、全てをアスリに塗りこみ、アスリの体が覚えきるまで、この手を決して止めるわけにはいかない。

「っっ……！！！ぃっ………！！んっ………！！」

はっきり言って、これはアスリにとって、耐えがたいほどにもたらされる快感を一身で、それもその中の一点で受けきらなければならない、自己に対する刑に等しい。普段のアスリの手口なら、絶妙な強さの指使いを丁寧に繰り返すことで、少しずつ高い所へと自分を持ちあがていくのであるが、今日のこれは、反対に高いところから自分を転げ落とす方に近い。

また、アスリの落下速度は重力によってもたらされるものと同じ関係の上にあって、落ちれば落ちるほどに、加速度的に速さを増している。それが意味するところは、すなわち次の波がアスリに対して訪れる間隔が短くなりつつあるということである。もう何回達したのか、アスリは馬鹿になっていて全くわからなかったが、少なくともだいたい１０回前の到達では人差し指と中指を中心にして、１回転は要していたはずであった。ところが、ここまで来てしまうとそんな流暢な動きもできずに、ただ手のひらで雑に押さえて上から下に擦っただけで、次の１回に向かってしまっている。そして、その次はもっと力が入らなくなって、もっと優しいタッチしかできていないというのに、前の１回より小さな動きで、さらに素早く良くなっている。

何度も何度も何度も、ひたすら波をかぶり続けるアスリには、体がどこかに持っていかれてしまうごとに、なぜだか急速に哀愁ばかりが残るようになっていった。アスリは、これほどまでに究極的に熱くほとばしって肉体が満たされているというのに、どうしようもないほどに、切なくて切なくて、苦しかった。本当は目の前にいるユニスと、さっきの背中の上の時のように、できればもっともっと近くになって、全身でユニスを感じたかった。しかし、ユニスとの距離は、近いのにどうしても遠い。

自分の上げる甲高いようでくぐもった声すら耳に届かないアスリは、あっという間に沖の方まで流されていき、そのまま遠く、遠く小さくなっていった。それとともにユニスの背も、不思議と溢れ出してくる涙の海の彼方へと霞んでいった。

大海原を漂流したアスリが流れ着いた先は、サバンナの赤い土の上だった。気がつけば、いつの間にかアスリは地面に左腕の肘から手のひらまでをつけ、その上に額を載せており、中央に這わせていた右腕の方も、だらりと投げ出し置きやっていた。その、高く突き上げるようにしたままの尻は、未だにビクビクとおかしな痙攣とも取れるような動きを繰り返していて、中央部は直接目にせずともわかるほどに濡れきって、股の間に熟れた果実のゆでものをはさんでいるかのように、熱く煮えたぎっており、今にもそこからアスリの全身がとろけだしそうであった。

先ほどまでを万とするなら、今は千程度まで落ち着いてきたとは言えども、アスリにとって千は千であり、普段なら百で到達できるのである。今のアスリは、まだ十分すぎるほどに高い地点にあり、余韻という一言では片づけられないほどに、浸る快楽はアスリの体中でどよめいていた。もう、これ以上はどうやっても、アスリは自分の意志でユニスへの愛と一体化することはできないばかりか、特にへそからつま先までは、麻痺してしまったかのように一切力を入れることすらままならなかった。

それでもアスリはどうにか頭を持ち上げて、この状況の上に、変に力を入れたせいで痛む右腕を引っ張りあげ顔の前で広げてみると、見た限り水っぽい手のひらにユニスの証拠は残されておらず、ほんのわずかにあの残り香はあったものの、9割8分の水分はアスリに由来するものであるようであった。この残り2分で、アスリはまたおかしくなりかけたが、ここまでしっかりとできていれば、ユニスを無駄にすることなく、しっかりとアスリと一緒にさせることができたと断言して良いはずである。

難しい道筋を乗り越えて達成しきったアスリが満足して、汗なのか鼻水なのか涙なのかよだれなのかで、ずぶ濡れとなってしまった顔をさらに持ち上げれば、目の前で背を向けてどこか遠くに行ってしまったはずのユニスが、アスリの方を向いて崩した正座をしていて、なぜか必死になって地面の砂を集めて、自分の太ももの上の腰布へとまぶしているところであった。ここでユニスの方もアスリの動きに気づいて、紅潮した汗だくの顔で一度目を合わせ、すぐに目をそらしてしまってから、あの恥ずかしがるような伏し目をした。

一体ユニスは、アスリからどれだけ搾り取れば気が済むというのであろうか。アスリが成し遂げたばかりの行為をまたもや再開したくなって、右手を動かしかけた時、ユニスは自分の太ももに砂をかけながら、ぼそりとつぶやいた。

「………終わった？」

ここでアスリは、やっと我に返った。これだけ派手にいろいろとしたのであるから、もうユニスに何の言い訳をすることもできない。直後にアスリを見舞ったのは、しっかりと受け取る準備を整えておいた分に見合う、おびただしいほどの羞恥と、その付け合わせとしてなぜか添えられて突き出されてきた、激しい悔しさであった。

まず羞恥について、これは正しい。アスリも歯が浮き上がって全て抜けてしまいそうな、この苦しいほどに恥ずかしくなるのがたまらないのであって、今の分でまだまだ眈りたいし、餌もなければ水もなく牛たちは嫌がるであろうが、やはり今日はここにユニスと一緒に泊まった方が、身のためかもしれない。

では、もう一方、何が悔しいかと言えば、とんでもなくふしだらで最低な自分に対して、ユニスから徹底的に叱ってもらいたかったし、しっかりと罰して欲しかったにも関わらず、ユニスの方が恥ず

かしくなってしまっている様子を見せているという、現実に対してである。別に今であれば、アスリはユニスにニヤニヤ笑われながら罵られるのにしても、重要部分を蹴り上げられて、悪く腫れあがってしまっている大きなところは強くつまみあげてもらって、多少痛くされるにしても全く問題なく、正直に言ってそれが欲しかったし、究極を言えば目の前でこれだけ悪いことをしたのであるから、一度はラダンのように極限の制裁を、ユニスの手によって下してもらいたかった。

だが、今のこのユニスの体たらくでは、そんなアスリの希望に叶う叱責などしてくるはずもない。落ち着かない息を続けつつ、罪悪感すら自身の性的快楽へと転換するアスリは、少しでも自分のことを追い込みたい一心で、この状況下に残されたせめてもの自戒を、ユニスへの問いかけの中から見出そうとしていた。

「……はぁっ……はぁっ、……………見た？」
「へっ……………？」

アスリの声に間抜けな返事をしながら、ユニスは伏せていた目をアスリへ合わせてしまった。ユニスの瞳を通してアスリが見たのは、そこに映る無様な自分の姿である。このどうしようもない自分に見合うよう、アスリは荒い呼吸の中、上体を持ち上げると、自身を追い立てるようにユニスを誘導していった。

「……ぐっ、だから！見た？って聞いてんだけど！」
「えっ………、んなもん、だって目の前で今、……その、いろいろしてたじゃんか！」
「違っ！！！そうじゃない！！！」

アスリは一気にユニスに這い寄って、ユニスの真っ赤になった顔

へと直面した。

「だから、そうじゃなくて！　私のお股、ちゃんと見た？って聞いてんの！」

　アスリの脳みそは、もうとろけて水分として体外に排出されてしまった後のようである。今、この言葉を発したのはアスリの理性であって、すなわちアスリの全力が、今のこの言葉にあたる。
　しかし、とけた脳の代役を務める本能の方は鋭かった。アスリが耽りきって、ある一定時間身の回りが一切見られなくなって、ユニスがこちらを向いていることすら気がつかなかった以上、アスリに匹敵するか、それを上回る変態であるユニスなら、まずきっと先ほどアスリの後方に回って、無防備にさらけ出してまさぐっていたところを目撃した事実があり、この問いに高い可能性でしどろもどろになって、ついに見たと供述せざるを得なくなるはずであるということを、すでにアスリの本能は予見しきっていた。そうなれば叱ってもらえなくても、まずは激烈な羞恥で心の不足分は補えるし、もっと悪くなるために、続きを見せてしまうという組み立ても、非常に興味深い選択肢として取りうるはずである。

　ところが、事はそううまくは運ばなかった。ユニスは目を大きく見開くと、あろうことか自己の弁明の方へと向けて走り出してしまった。

「いやっ…、その、そこまで見える前だったし…。」
「は…？でも私、だって…、後ろからなら、見えたでしょ？」
「んなっ…！！見るわけないに決まってんじゃん！！！」

　この言葉に、アスリは怒りを覚えた。別に今は、ユニスに対して怒っているのではなく、自分が得られると思って実際は得られなか

った、自分のわがままが怒りの根源である。ただ、アスリにその分別がついたところで何か結果が良くなるわけでもなく、アスリは一層真剣な表情となって、ユニスが一方的に悪者であるかのように詰問していった。

「はぁあああ！？嘘ついてんでしょ！？なんで見てないの！？」
「なんだよ！！！だってこの前見たって言ったら怒ってたし！」
「うっさい！！私が見せてあげるって言ってんだから、見てよ！！！ってかさっき見たい？って聞いたらうんって、首振ってたし！！」
「だってそんなん…………！！！無茶苦茶すぎ！！！」
「あーーー！！！もう！！サイテー！！！どうせおちんちん固くしてんでしょ？何？砂なんかまぶして！」
「固くしてねぇーし！！砂は……、しょうがないじゃん！さっき汚れたんだから……。」

怒りがある手前、方向性としてはアスリの企図するものとかなり異なるが、なんとなくこのやり取りでアスリは、違った満足を得るための、きっかけをつかみ始めていた。この場でアスリはユニスに対しての優位を取りつつあるが、ここはその小さな立ち位置を確定的にすべき局面である。

アスリがやや下に目を向けて、砂をかけられてサバンナとなってしまったユニスの腰布を見やれば、アスリの前言どおり、どこに何があるのかわかりやすいほどに、直線がくっきりと浮かび上がっており、その隠された棒のまわりにはいくつかの沼地が点在していて、まだまだ十分に湿っているようであった。砂にまみれた狂気に疼くアスリは、もう何のためらいもなく、まっすぐユニスの槍へと手を伸ばしていった。

「やめっ！！！」

止めに入るユニスの一声の裏腹に、案の定、ユニスは腫れてしまっていた。その湿る1本を諫めるように強く握りしめながら、何とも言えなくなるほどにアスリの下腹に訴えかけてくる顔のユニスに対して、アスリの方はあえて余裕があるかのような表情を浮かべながら、再びしっかりとユニスを見つめ直していった。

「ほら、やっぱり固いじゃん！また私のおててのの中におもらししちゃうの？」
「バカ！！漏らしてねぇし！！！…アスリだってびじょびじょびになってたくせに！自分で汗っつってたじゃん！！」
「ふぅーん…。なんでもいいけど。」

手の中に伝わってくるユニスの熱で、本当のところ、アスリはよだれでもたらしそうであったが、改めてユニスをひと睨みすると、ユニスが自分でできなかったことをやり遂げさせるために、もう一度チャンスを与える覚悟を整えていった。アスリは生唾をごくりと飲み込むと、続けた。

「………で、何？見んの？」
「えっ……？」
「マジでバカ！もう見せないよ？いいの？」

究極を迫るとハッキリしなくなるユニスを前にして、またもやアスリは我慢がならなくなってきていた。本来であれば、多少は砂まで吸い込むことになってしまうとは言えど、ユニスの腰布に残っている狂気を思いっきり吸い込みたいところではある。そうは思えど、さすがにそこまで不気味な行動を起こしては、いくらユニスであっても、アスリに対しての認識を相当程度改めてしまう可能性は高い。こみあげる欲求を代替物で置き換えなければならないアスリは、両太ももを固く引き締めるように合わせて、中央部を挟み込んで遠回

りな刺激を加えてから、煙でも立ち上りそうなユニスの首筋の方まで顔を寄せて、一度大きく息を吸い込んで胸の中を満たすと、そのまま耳に唇が触れそうなほどのところにまで近づいて、さらに自分の求める方向へとユニスを誘うべく、小さく呟いた。

「意気地なし。」

アスリの手中の槍は、アスリが直前に握りしめた時よりももっと大きく膨らんで、今や熱した石でできているかのようである。アスリはすでに強く掴んで触れているだけで火傷しそうな腰布越しの1本に、ユニスが痛みを覚えそうなほどに力を加えると、地面につけた両膝を肩幅までに広げて、先ほどはユニスの不覚で中断されて披露しきれなかった腰布の中身を開示すべく、左手を腰布の裾の方へ流していった。

もうどうやっても、この繰り返しだ。ユニスはまもなくまた波にさらわれるだろうし、ユニスが沖に行けば、今度はアスリが波にさらわれる。アスリが漂流し、戻ってくればユニスが浜に転がっていて、また最初からやり直しになるはずで、アスリもそうするしかないのである。アスリは途中で切なすぎて泣こうが、それはそれで幸せなのであって、違う手も取りようがない。どうやったって、少なくとも明日の朝までは、ユニスとここでこうするしかないし、これが最善でかつ、最優先なのである。

無限に続くループの入口まで差し掛かって、ユニスの香りを堪能するアスリが、いよいよ次こそはっきりとユニスの目に入るところまで腰布を引き上げようとし、アスリの手中の１本も破裂しそうなほどに鼓動しかけた時であった。

突然、ここまで少し離れた傍らで、舌を出し伏せって小さく呼吸を続けていただけだった犬が、甲高く、どこか物悲しい鼻声に近い鳴き声を上げた。その響きは狩りの最中のような猛々しいものとはかけ離れており、全く別のよその犬が鳴いているかのようであった。直後にアスリがユニスの耳元から離れてそちらに目をやると、犬は鳴き声を上げ続けるまま起き上がり、肩を落とすかのように頭を低くして、同じ場所でウロウロと周回し始めてしまった。

アスリは腹が立った。この犬はたしかに優秀であり、アスリも当初に比べて随分と高く評価しているし、実際に最近は牛たちを愛でる時と同じように、暇があれば甘えてくる犬の頭や腹を撫でてやってはいる。だが、今からユニスとともに一生懸命、修行に取り組ま

なければならないこのタイミングで、急に気が散るようなことをされたくはないのである。
ここで、いら立つアスリが思わずユニスを握る力を緩めると、続けてその右手首は、突如として砂っぽい手で掴み返された。

「アスリ。」

名前を呼ばれて犬から視線を戻したアスリの眼前にはすでに、ほんの少し前までの、意気地もなければ不甲斐もない、見ているだけでこちらが恥ずかしくなるような顔はなかった。代わりにそこにあったのは、別人かと見違えるほどに凛々しく、視線そのものが切れ味の良い刃のような表情の、ユニスである。

これは、アスリには厳しかった。別に、ユニスに対して執り行おうとしていたことが、この時点で終わらざるをえないから、アスリはそのように感じたのではない。馬鹿になってユニスだけが全世界の中心である今のアスリには、そんなことなどどうでも良いのであって、弱くアスリの手中で転がされてしまっている時と、全く正反対に、あの木陰で賊から身を挺してアスリを防衛した時との、それぞれ異なった、いずれにしても大好きで愛おしい2人のユニスを、いきなり連続して目の前で見せつけられてしまったことが厳しいのである。

これがあるから、本当にティサには申し訳ないことであるが、ユニスに対してときめかないことなどできないのであるし、どうしたところで将来アスリの伴侶にならないと頭で分かっていても、頭以外の全身、いや頭そのものもユニスを求めてしまっているという事実がある。だからせめて、もうアスリは誰とも結ばれなくても良いから、ティサとユニスにはこのままロマドウに大人になっても残り続けてもらって、アスリは時折で良いから今のように様々なユニスを眺めて、それを糧にさえできれば、切なく寂しくもあるであろう

が、それすら何となく悪くはなく、いつか死を迎えようとも、おおよそ幸せな一生であったと締めくくれるはずである。

「ごめん、離すよ？」

当然であるが、ユニスは冷静であった。今の状況などそっちのけで、その場にへたり込んで物思いに耽るだけの使い物にならないアスリに一声をかけ、このごくわずかな間に、急激に柔らかく小さくなって、かわいらしい感触となってしまったところからアスリの手を避けると、ユニスはすぐさま片膝を立てながら、まず犬の方へと体を向けていった。

「あっ…！くっそ！アイツら、弓持ってってたんだった！」

一瞬ユニスがうなだれるようにして地面に向かって発したこの言葉に、ぼんやりしたままでアスリの脳に真っ白く広がっていたもやは、一斉にかき消されていった。同時に、なぜか生暖かく吹きつけた風は、汗をはじめにして多様な液体にまみれるアスリの体表の熱を奪い去り、日照りの中に生じた冷たさとのアンバランスは、また別のアスリの本能に対して警戒を訴えかけていた。ハッとしたアスリは、即座に掴んだままだった腰布の裾を一番下の元の位置までおろしながら立ち上がって、くるりと牛たちの方へと向き直っていった。

何かおかしい光景があった。アスリたちから少し墓地の方へと進んだところで放置され、赤い土の上に点在する少ない草を順々に口にするだけであった牛たち全てが、隊列を組んだかのように、黙々とアスリの方へと真っすぐ進んできていた。草を全て食べてしまって、もう残っているものがないから、アスリの方に戻ってきているのであろうか。しかしそうであれば、普段あれだけ牛たちは犬のこ

とが苦手なのだから、いくらアスリがいようが、犬が間近にいることら側の方には進んでこないはずである。
その違和感の正体を突き止めるべく、アスリがまだ少し距離のあるところから近づいてくる牛たちをよくよく観察してみると、どうにも今の牛たちには表情がない。この表情の差異は、たとえばユニスであれば違いを見いだせないであろうし、アスリの母でも難しいかもしれない。だが、何年も毎日牛の世話をして、方々をともに歩き回ってきたアスリは、その時々で、たとえば腹が減っているだとか、乳が張ってしまって苦しいから搾ってくれであるとか、ここでしばらく休憩したいだとか、わずかな表情の違いや呼吸の仕方で、ある程度は感覚的に、牛の意思が最低限分かるつもりではある。
ところが、今こちらに向かってくる牛たちには、アスリが何を考えて行動しているのか、全く読み取ることができないほどに、いつものような豊かな表情もなければ、何の鳴き声もなく、その息遣いすらも乏しかった。視界のずっと奥で幾多の槍が天に向かって伸びている墓地を背にして、一様に押し黙って牛たちが近寄ってくる様は、真っ黒な牛の毛皮と、祭の牛の面を被せられた何か違うものが、アスリとユニスもその仲間に加えようとして距離を詰めてくるのかのようであり、手塩にかけて育てた牛とは言えど、アスリが最も強く感じたのは不気味さであった。

「ファラール？どしたん？」

この間も犬は吠えるのでなく、怯えるような高い鳴き声をあげながらそわそわしており、それにユニスも見かねたのか、犬の隣に行ってしゃがみこむと、犬を抱え込むようにしながらその場に座らせて、落ち着かない犬をなだめようと、首周りをしきりに撫でていった。犬も主人に触れられて多少は冷静になったのか、ここで鳴くのをやめにして、あたりを伺うように左右に目を振り、それに合わせて真っすぐに立てた耳も、動かしては静止し、また動かしては静止

させていた。
　そうして、もう一度ぬるい風がサバンナに吹くと、犬は牛の方を見たまま、ぴたりと動きを止めた。ユニスが顔を上げて視線を犬が見る先に合わせたのを見ると、アスリもそれに呼応するように、再び迫る牛たちの方へと目を向けた。

　牛のはるか後ろ、墓地の方からまずティサが、それにすぐ続いてラリーヤが、勢いよく駆けてくるのが見えた。アスリは嫌な予感がした。現況をもってすれば、あの2人がこちらに走ってくるというのは、何かから逃れるためであると考えるのが、最も理にかなっている。では、何から逃げてきているのかと言えば、第一の可能性として獰猛な獣の線がある。しかし、以前ユニスに牛を救ってもらった時の状況を照らすに、あの時は牛たちの方も今のあちらの2人のように全力で現場から離れようとしていたのであって、今の薄気味悪い牛歩では説明がつかない。
　そうなると第二の可能性である、アスリも川辺で目撃したあの賊の一味が現れたということしか、考えられるところとしてはないことになる。ただ、仮にもそうであったとして、こんな北の墓地にまで、果たして賊は何をしにきたのであろうか。

「変だ………。」

　アスリと同じく、ユニスもやはり何らかの違和感をこの景色に対して覚えたのか、息を吐くかのように小さくつぶやいた。牛たちと、さらに奥の2人から視線を逸らさないまま、アスリもユニスに問いかけた。

「この前みたいに、誰か来てる？」
「いや、いない。人もいないし、動物もいない。」
「えっ、じゃあティサとラリーヤが走ってるだけってこと？」

「いや………、なんていうか…。」

ユニスが続けて何か言いかけたまま一度区切ったところで、凝らす目で捉えた走ってくる2人の顔つきを、アスリは認識した。

まずい表情であった。特にラリーヤがまずい。先日、カインタから命からがらで逃げてきて、必死に川を渡ろうとしているあの時、ラリーヤは絶望の相を浮かべていたが、今のこの顔はその時とは全く異なり、恐怖に歪んでいるといったものに近い。無論、その横のティサもラリーヤほどではないにしろ相似の形であり、走り方まで加えて見るに、こちらは慌てふためいているような焦りも多分にあるようである。

状況が全く飲み込めないアスリに、ユニスは直前に残していた、もっと理解できない言葉を繋げていった。

「何もいないんだけど……、なんか気配あるわ。」

「はっ？どういうこと？意味わかんないんだけど？」
「俺もよくわからん…。なんか気持ち悪いわ。おかしい。」
自分で言った通り、アスリはユニスの話す内容の意味が全くわからなかったし、考えられる範囲はただただ限られていた。
「えっ…！？じゃあさ、どっかに誰か隠れてるとか？」
はっきり言って、アスリのこの推測はありえない内容だ。どう見渡してもアスリとユニスの周りには身を隠しきれるほどの大きさの岩もなければ、木もない。今更ながら、アスリもよくこんなどこからも丸見えの場所で耽ってしまったものであるし、それはユニスも砂をかけていたのだから、同罪ではある。ただ、この指摘は現時点でアスリの防衛を統括するユニスにとって、何かしらのインスピレーションとして突き刺さるところがあったようであり、それはすぐさまアスリに向けた指示となって、雄々しく発出されていった。
「………マジか、たしかに。アスリ、すぐ動けるようにしといて。」
「えっ、そういうことなん？」
「いや、ありえる。わからんけど。とりあえず俺の横来て。今はしゃがんだまま、すぐ立てるように。」
ユニスの要請に従って、アスリは大分近づいてきた牛たちと奥のティサとラリーヤを視界の中からは外さないようにしながら、身をかがめてユニスの方へと素早く移動すると、ユニスが犬を抱えていない方の位置を取って、片膝を立てたまま、いつでも走りだせる姿

勢を取っていった。

「もっとこっち寄っといて。」

ここで、居所の微調整をかけるユニスが一声かけながら、その左腕をアスリの背中から腰の方へ、ぐるりと回した。同時に、ユニスはアスリを手繰り寄せるようにしつつ、自分もわずかに左方へとずれて、これでアスリとユニスは隣同士で密着する形となった。

やはりユニスは頼もしい。こんな時とは言え、いや、こんな時であるからこそ、すぐに今の仕草が自然に出てくるのがユニスの辛抱ならないところであって、どんなにティサとの将来を考えて冷静になろうにも、アスリの惚れ心が収まらない一因にあたる。また、ここに先ほどまでの信じられないようなギャップがあるから、アスリは必然的におかしくなってしまうのである。目視できる対象がない中、ユニスの腕を通して背中へと伝わってくる、じっとりとした体温は、ユニスが実のところ緊張と不安の中にあり、それでもなお必死に見えない敵からアスリを守ろうとする意思とともにあることをアスリに訴えかけていて、その主張を心で耳にするアスリは、ユニスに対しての好感を高めていくばかりであった。

「クッソ！マジでアイツら、なんで弓持ってってったんだよ！早くこっち来い！」

静かに怒りを漏らすユニスの一方で、アスリの鼓動はまたしても違った意味で速くなりつつある。ユニスが隣にいる限り、アスリは全く怖くないし、恐れもない。万が一にも敵から不意の攻撃を受けて、あっけなく死を迎えることになろうとも、こうしてユニスに背を抱えられているなら、安らかに天に向けて旅立つことができるはずだ。事態そのものはアスリの理解が及ばないところにあり、ユニ

スは目にすることのできない気配に対峙しているが、寄り添うユニスの大きな存在感は、背中に限らず全身までも包み込んでいるかのような、安心感をアスリに与えていた。

　間もなく、まず牛の集団がアスリたちの手前までやってきた。それに続いて駆けてくる後の2人のうち、やや離れたところからティサが、アスリとユニスの方へ大きく声をかけてきた。

「ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい！！！」

「えっ！？おい！何なん？」

　明らかに焦っている2人に、ユニスが声をかけた直後であった。ユニスの小脇に抱きかかえられていた犬は突然前方に向かって飛び出すと、アスリとユニスから2、3歩離れたところで、迫る牛たちとティサとラリーヤに対して、低い唸り声を上げ始めた。

　この時の犬の立ち居振る舞いは勇ましかったが、見ればその後ろ足は、ガクガクと震えてしまっていた。この犬もなかなか見どころのある犬である。犬は犬で怯えながら、どうにかユニスのためになろうと必死になって、こうやってなんとかできることを成しているに違いない。

　しかし、なぜこれほど賢い犬が、よく見知ったティサとラリーヤ、牛たちに対して威嚇をかけなければならないのだろうか。加えて、普段なら絶対に犬が苦手で近寄ろうともしない牛たちが、今は歯を剥き出しにして唸っているその相手に一切臆することもせず、そこに存在すら認知していないかのように進んで来ていることも、あまりに不自然である。

「ファラール、牛脅しても意味ないぞ。」

　もうアスリは今の目の前の出来事が追い切れず、圧倒的なユニス

への信頼を前に、ユニスに事態の解明までも委ねている節もあり、正直なところ心境としては傍観者のものに近いところがあった。それは横のユニスにしてみても、やはり目視できるものがない以上は危険に晒されている可能性は低いと認識を改めつつあるのか、それともアスリがユニスの横にいることで、ユニスにしても何か落ち着いてしまっているのか、いずれにしてもアスリと同じく直前までに比べて精神は安定の方へと向かっているようであり、現にそれは奇行を開始した犬に対してユニスが投げかけた、今の一言のトーンにも如実に表れていた。

他方、余裕が一切ないのは、逃亡の当事者であるティサとラリーヤである。血相を変えた2人はついに牛たちを追い越して、ユニスが犬に向けて注意をかけるとすぐに、しゃがんで身を寄せ合っているアスリとユニスの前に滑り込むようにして到着した。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、ヤバい！！」

ティサは相当動転しているようで、これしか言わない。随行したラリーヤはと言えば、荒っぽく呼吸をするだけで、青い顔をしたままそもそも喋らない。また喋れなくなってしまったのであろうか。それなら薬だ、祈祷だと、帰ってからまた面倒なことになる。

「えっ？何なん？とりあえず弓返してよ。何もできん。」
「はぁっ、はぁっ、早く！出たから！すぐ行こう！」

ティサはまず先にアスリの方に手にしていた槍を、犬の後ろ足のように震える手で乱暴に引き渡すと、肩に回していた弓と矢筒をかける紐が胸につかえて、なかなか取れずにもたもたしているラリーヤを、急かすように手伝い始めた。だがティサも震えていればラリーヤも震えていて、どうにか弓の弦と矢筒に通されていた紐がラリーヤの頭から抜けたところで、矢筒の中身は物騒にも勢いよく飛び

出して、先ほどユニスがぼたぼたとこぼしてしまった汁のあたりの方まで散らばってしまった。

相変わらず犬は唸り続けているが、埒のあかない2人を前にして、これには飼い主の方も異なった意味合いの唸りを上げそうである。
ユニスは目の前に転がってきた弓と矢をひとまず手に取りながら、ティサの方へと問いかけた。

「マジかよ。何なん、出たって？」
「矢ももういいから！！！早く行こ！！！」
「いやだから、何なん！？わかんねぇから！！」

声を荒げるほどではないにせよ、言葉の中に苛立ちが見え始めたユニスの声に、覚束ない手で矢を拾い続けるラリーヤも、ティサでは話が進まないことをようやく認識したのか、ここでやっと青い顔で小さくつぶやいたのであった。

「………アスリの言った通りだった。」

「えっ…？何？じゃぁ骸骨でも出たってこと？」
「アホか？そんなん。」

しゃがんだまま自分のすぐ周りの矢を拾いまとめていたアスリも、思わずラリーヤの方に顔を向けつつ、神妙とも茶化すともつかないような、何とも言えない声色の言葉をかけると、横からユニスの真っ当な指摘が入った。

「いや、そうじゃなくて…、お墓に着いて、ティサと見て回ってたら…。」
「ラリーヤやめて！！！もうやめて！！！」
「ティサ！だから何だよ！わかんねぇから！」

気配を感じ始めた当初よりはやや落ち着いたとは言えど、４人の中で最も高い警戒を保ち続けているはずのユニスは、さすがに怒りそうである。ユニスは３人から受け取った矢をまとめて揃えると、矢筒に少し乱暴に放り込んでいった。

「こら、怒んないで…。ってかさ、それならとりあえず、危ない人らがいるわけじゃないってことだよね？」

愛しい相手の感情の揺れを機敏に感じ取ったアスリは、その矢筒のかけ紐をユニスの体に通してやりながら、牛を撫でて落ち着かせてやる時のように、優しくユニスに一声かけると、今度はティサとラリーヤの方にも顔を向けた。

「危なかったよ！！！」
「いや、ティサ…。アスリが言ってんのは、そうじゃなくて、アレ、この前カインタに来た方の…。」
「そう、毒の矢の人らみたいの。」
「それは大丈夫。でも、なんていうか…。」
「だから！！！ラリーヤ！！！ねぇ、やめてってば！！！」

ティサは顔を大きく歪ませると、ラリーヤの肩に両目のあたりを押し付けて、とうとう泣きだしてしまった。ラリーヤもそれに応じてティサの頭を抱えはしたが、このタイミングでもその手の震えは収まっていなかった。この光景を見せつけられてはアスリも2人をケアするほかなく、ティサとラリーヤの背中でもさすってやろうかと、アスリがユニスの隣から立ち上がった時であった。

アスリの視界の隅に、牛の背中が入った。はっとしたアスリがそちらに目をやると、牛たちは信じられないほど静かに、アスリたちの真後ろをすでに横切って通過し終えた後で、そのまま集団を保って東の方に向かって進み続けているところであった。
翻って犬の唸り声は、まだ同じ方向から聞こえ続けている。アスリが今度はそちらへと振り返れば、ユニスが犬の方に体をやろうとする中、犬は牛たちがいた、何もない虚空に向かって唸っていた。そのずっと奥にあるのは、ティサもラリーヤも牛の姿も見えなくなって、槍だけが無数に伸びる墓地である。

サバンナにまたぬるい風が吹いた。

「あああああ！！！！来んなあああああ！！！！！来んなっつってんだろ！！！！！」

突然、涙していたティサはラリーヤから身を離して、犬が吠える

先の何もない方へ振り返ると、絶叫した。その動きにあわせて、ティサの腰元の透き通った宝石が、陽の光を鋭い眼光のように反射させた。

ティサは来るな、と口にした。直前までのやりとりに基づけば、この言葉はあまりに突拍子もないものであり、まずもってその意思が向けられた先は、ユニスでも、ラリーヤでも、アスリでもないことは明白である。したがってティサは、この3人以外に対して、来るなと言ったに違いない。当然その対象は、犬でも、牛でもない。

つまり、目にすることのできない何かが、ティサのところに来ている。ティサのところに来ているということは、4人とも同じ場所にいるのであるから、彼、または彼女、もしくは性別すらない何かが、もうここにいるということに繋がる。

ここまででアスリは、今ここで何が起きているのか、理解した。それは全てではなく、途中までである。もっと先まで考えればより深く理解はできるというのに、なぜ途中までにしたかと言えば、暑い中に感じる不気味な寒気が、アスリに進むことを止めたからに他ならない。

たしかに今のアスリは、近くにユニスがいるし、その心強さを実感した時間も過ごせた分、早朝、北に向かって歩き始めた時の何百倍も冷静ではある。しかしいくらそうは言っても、探求の先にあるものは十分予想できる恐怖であるし、恐ろしさの規模からして、おそらくその正体をしっかりイメージするには、性的な追加の魂胆を抜きにしても、最低限ユニスと正面から抱き合っていなければ、アスリも正気を保っていられないかもしれない程度であると予想できる。そうであれば、この場所はユニスが地面にこぼした成果を除けば、別にいつまでも留まる理由もなく、可及的速やかに撤収することが最も賢明な判断となる。

「だからなんだよ！！！ティッ……！！！」

常識的に考えて、ありえるはずのないアスリの理解など、頭の片隅にあるはずもないユニスは、犬のそばからついに怒鳴りつけようとして、ティサの名前を途中まで呼びかけたところで、急停止をした。それは、ティサがユニスが厳しい声を上げたのとともに、さらに一段トーンダウンした泣き声を上げてしまったためだけによるものではない。

「……サ？」

残ったティサの名前の切れ端をユニスが口にする中、勢いよく水があふれ出す音を、アスリの耳は捉えた。音の中心にいるのは、ティサである。同時にティサの足元には小さな水たまりができ、それは瞬く間に大きくなって、赤い地面をより濃い色で濡らしていき、隣にいたラリーヤは2歩後ずさりをしたのであった。そして一時的に今、生ぬるいとは言っても、サバンナはサバンナであって、出現したばかりの水たまりは地面に触れたところから蒸発し、新しい尿の臭いがあたりに立ち込めていった。

ティサは失禁してしまった。両手で顔面を覆って号泣するティサにあるのは、精神の安定を保つことができずに動転してしまうほどの、恐怖である。ティサは来るな、と何かを制した。ティサは何が来ているのか、すでに存在そのものを認識しているというのであろうか。

とにかく、もうこれ以上はティサに酷であるし、しっかりしたティサがこうなってしまう以上、次にティサのようになるのはラリーヤかもしれないし、ユニスかもしれないし、アスリかもしれない。こういう場面でもなければ、大人に向かう最中での粗相をからかって、ティサを最大に恥ずかしくしてやるのもおもしろいだろうし、

仮にユニスが恐怖して同じく失禁すれば、アスリはやはりからかいながら率先して世話をするのに脱がせて拭いてやるし、自分がその立場になるのも興味深くはある。
しかし現時点で、いくら朝から脳みそを溶かしてしまったとは言え、その妄想を膨らませるほどアスリは馬鹿ではないし、人の心がある。それはユニスも同じであるようで、排尿する幼馴染の姿を目にしても、あのいやらしい、なんとも言えなくなるような表情が一切顔になく、険しい中に驚き、目を見開いたまま、ただティサの足元に広がっていく水源を見つめているのであった。無論、それをラリーヤもアスリも、本人のティサも止めることはできず、側で唸る犬の声とティサの上下からの嗚咽の音だけが４人の間に響いており、立ち尽くして放尿を続けるティサの腰元の宝石に絶妙な角度で当たる日光は、どこかに向けて睨みつけるようにして反射し続けていた。

「ユニス………。」

随分我慢していたことが伝わってくる時間の後、ティサの下方の水音が落ち着いたところで、アスリは犬の側に移っていたユニスにそっと近づくと、その肩に静かに手を置きやった。

「……行こ。」
「うん………。まだファラールが…、どうしよ。」
「抱っこしてってあげよ。大丈夫？」
「分かった。」

ティサを前にして固まってしまっていたユニスもアスリに応じて、まず犬の頭を数度撫でてから、弓本体と矢筒の紐を肩にかけて、両腕で犬を抱え込み持ち上げていった。犬も主人の懐の中に入ってやっと正気を取り戻し警戒を解いたのか、ここからはもう唸り声も上げず、代わりにティサが盛大に広げてしまった臭いを、ユニスの顔

の前でしきりに鼻をひくつかせて嗅ぎとっていた。
思ったよりも犬が重かったのか、やや眉をしかめるユニスに、アスリはさらに次の依頼をかけていった。

「とりあえず、牛さんたちあっち行っちゃったから、ついてってもらえる？」
「えっ、アスリたちは？危なくね？」
「私とラリーヤは…。」

アスリはここで、ラリーヤの方に目配せをした。ラリーヤも失禁はしていないものの、大分血の気のない上に瞳孔が散大しそうになっており、はっきり言って余裕はないようであったが、アスリの意図をすぐさま汲み取って、先に答えていった。

「そうだね、女の子だけでなんとかするから、ユニスは行ってて。アスリどうする？」
「急いでパッと綺麗にする？これだとちょっと歩くの…、きつくない？」
「………ぐっ、うっ！！いいから！！！大丈夫だから！！！」

涙の中にあるティサも、この会話の流れからアスリとラリーヤが何をしようというのか分かったのか、ひどい状態の顔をあげて両手を胸の前で拳にしながら、くぐもる声をどうにか強くして割って入った。

「えっ……？大丈夫？歩きにくくない？」
「私適当に布持ってきてるし、アスリ言う通り、綺麗にしてあげるよ？それとも私がおんぶしてく？」
「いいから！！！大丈夫！歩けるから！もうここいたくない！！！早く行こっ！ねぇ、お願い！もう無理！！私ホント無理！！！」

こう言われては、もうティサの意思を優先するほかない。アスリはティサのまわりで土の色が濃くなっていないところで、最もティサまで近づける位置まで近寄ると、ティサの肩を導くようにして水辺から押し出して、あとはラリーヤとアスリの2人がかりで、またも顔を両手で覆って震えだしたティサの肩甲骨をそれぞれさすりながら、できる限りの早足で先を行ってしまった牛たちに続いていった。3人が動き出すと、アスリの真横には打って変わって笑みを浮かべるかのように舌を出す、運搬される立場になってしまった犬が連れてこられたが、アスリが直前にユニスに要請した指示通りに槍で牛たちの方を指し示すと、ユニスも黙って歩くペースを上げて、一足先により牛たちを追尾していった。

ユニスがこぼし、ティサも溢れた場所から大分離れたところで、普段通りの熱く乾いた風がサバンナを抜けていった。アスリは一度来た方向を振り返ったが、先ほどまで4人でいた、ただ何もない場所はやはり何もなく、目印となっていたティサの池も、もう干上がってしまっていたようであった。奥に見えていた墓地の槍は、すでにアスリの視界には入らなかった。

前衛は牛歩、後衛は尿歩と言うべきか、大して速くない歩みでしばらく進んで、ティサの震えと嗚咽はどうにか小康を得つつあったが、アスリが優しく触れるその肩は、触れている側が生気を吸い取られてしまいそうなほどに覇気がなかった。おそらくそろそろ、ここに追い打ちをかけるかのように、恐怖よりも股下以下にもたらされる不快感と、失禁したという事実に対しての羞恥の方が上回ってくるはずであろうティサにとって、今日は最悪の日であるに違いない。加えて、アスリは口が裂けてもティサに言うことなどできないが、一連の出来事の裏側でアスリは、大よそはユニスが悪いという方向で結論づけることもできなくはなくとも、ティサの将来の相手の性で、頭がおかしくなりそうなほどに楽しんでまでいる。

だが、改めて冷静になった上で、そもそも事の元を辿れば、北に行くのを口を酸っぱくして止めたというのに無視しただけでなく、アスリを怖がらせようとして、ラリーヤと共謀しユニスと2人っきりでアスリをサバンナの真ん中に置き去りにしたのが、全ての発端である。したがって、ティサはこういった形にはなってしまったが、責め苦を受けなければならいこと自体は適切であるし、その意味でアスリがユニスに興奮してしまったということも、情状を酌量するに足るだけの正当性は担保されていると考えられる。付け加えるなら、まだ青い顔のラリーヤにおいては、失禁まではしていない分、しっかりとロマドウにとって北がどういう場所かも学習できたという果実も含めて、ある程度真っ当な仕打ちを受けていると捉えても問題ないはずではある。

ただ、いくらそうであったとしても、ティサに関しては先日実の母を亡くしたばかりであって、しかもそれが自分の目の前で突然現

れた賊に殺害されるというあまりに凄惨な形であった上に、生活を奪われ見知らぬ土地に追いやられてしまった中、どうにか毎日のユニスの狩りで安寧を取り戻しつつあるところにもたらされた、目にすることのできない未知の何かによる失禁してしまうほどの恐怖は、アスリの忠告の無視に、ふざけてからかったということを合わせても、あまりに釣り合いがとれないとしか言いようがない。この、ひどく打ちひしがれたティサの姿を前にして、アスリがその背を撫で続ける手の中に、だから言わぬことはないと見返す気持ちは、全くなかったと言えば嘘にはなるが、ティサを憐れに思う感情自体はアスリの胸中で確かであった。

またのところ正直に言って、こうしてアスリがティサに対し集中して思考のリソースを割き続けるバックグラウンドには、アスリの脳内の片隅で油断すればちらちらと姿を現す、曰く通りであった恐怖を排除するという目的があることも事実である。別に、今日のアスリはもうユニスと触れ合ったから、強く、そして冷静である。もっと正確に表現するのであれば、アスリはそう信じた上で、自分に対してそれを言い聞かせているから、朝のように足取りが重くなってしまうこともなく、これほどまでに弱くなってしまったティサの介抱ができ、ラリーヤのように青い顔にならずに済んでいる。

では、アスリはティサとラリーヤに体験をもたらした主体についてまで検討できるかと言えば、答えは否であり、今はそんなことを考えるべきでないし、ダカクに何かの意を飲ませたい時の手段として用いる場面まで、頭の中に一切を思い浮かべるべきでもない。もう一度言うが、アスリは恐怖を感じていないし、それをアスリが自分に対して明言することが、パニックを引き起こさないために重要な心の持ち方となるのである。

そうは言っても、目の前のティサから想起されるものは、アスリの精神的な遮断だけでは余りあるところがある。少しでも気を抜く

と横からすり抜けて心に突き刺さろうとしてくる恐怖を打ち消すために、拠り所となるユニスをアスリが強引に想像すれば、そこに思い浮かぶユニスは、先ほどアスリが大まかに分けた2回目、ユニスの成果と一体となるために厳しい自己罰を与えて、漂流を終えサバンナに打ち上げられた後、アスリが終わったかを問う姿であった。

ここまで頭を回して、アスリは髪が全て抜け落ちてしまうかというほどに、激しく後悔した。一体、自分はどれほど馬鹿なことをしてしまったというのであろうか。あの時、ユニスはアスリに対して、たしかに終わったかと聞いて、その後に続く問答でユニスは大変不甲斐ないことにも、アスリが触れるそのものは見ていないと供述していた。その段でアスリは、見てもらえなかったことへの苛立ちばかりに注目していたが、よくよく振り返ってみれば、ユニスが終わったかを聞いてくる時点で、ユニスとしてはアスリの1つの連続する行為に区切りがあったと判断できていたということに繋がる。そしてもう少し遡れば、ユニスはあの川辺でも、今日ユニスの背中の上でも、アスリが行っていたことを把握していたし、実際にそれら2件についての指摘もアスリは頂戴している。

すなわち、ユニスはアスリを見ていなかったようで、当然だが全てを見てきたのである。本当に馬鹿なことをしてしまったものだ。もう、覆水は盆に返ることはない。

覆ることのない事実による悔しいほどの羞恥は、なぜかアスリに勝負に敗北した後の屈辱に近い感情までもたらしていたが、これはこれで眼前の別次元の恐怖に対抗するには丁度良いばかりか余りすらあり、あまりに高めすぎたせいでティサとラリーヤにまでは痴態を見せないようにするためにも、熱いお湯を冷たい水で割るように、アスリはまたティサに思考を振り向けて、欲求を中和しなければならなかった。ユニスはあの体たらくであるから、これまでの出来事は恥ずかしがって誰かに言うということもない可能性が高い。しか

し、アスリの自尊心と本能を守るためにも、近日もう一度ユニスを2人きりになるように呼びつけて、今度こそ勝利を得るために、いや、再び敗北するのも良く、とにかく改めて釘を刺して、せっかくだからユニスに宿る悪い狂気も外気にさらして成敗してやろうと、アスリは強く心に誓ったのであった。

「…ねぇ、どこまで行く？もう大丈夫じゃない？」

可哀そうなティサを慮るようにしながら、内心では複雑でおかしなせめぎあいを取りなしているアスリが、尿の流路に沿って撒きあがった砂の付着するティサのふくらはぎに目を落として思慮を深める最中、ラリーヤが会議を遮る一言を放った。はっと我に返ったアスリがラリーヤの方に顔を向ければ、わずかに硬い表情であるとは言えど、ラリーヤの血色は普段通りに戻っており、真ん中のティサは相変わらず使い古された布のようであったものの、先ほどまで顔を覆っていた両手はだらしなくぶらさげられていて、涙もすっかり乾ききっていた。続けて先を行くユニスを見れば、ユニスもすでに犬を地面に下ろして並んで歩いており、さらにその先には、だいたいいつもと同程度の距離を犬から取った牛の一団がゆっくりと進んでいた。

「そうね、もう結構歩いたね。ティサ、もう良い？」

牛たちの方からティサの方に目を向けながら発した一声に、ティサが黙って頷くのを見届けると、再びアスリは愛しい背中の方へと向き直って、大きく通るように声をかけた。

「ユニスー！！！ちょっと待ってー！！！」

ユニスもアスリの呼びかけに応じて、すぐさま振り返って手を軽

く一度挙げると、その場にしゃがんで犬を座らせて、その背を撫でていった。ここで牛たちがまだ黙って進んでしまうようであれば、いよいよ知恵を絞らなければならなくはなるが、アスリが抱いた小さな懸念をよそに、犬が進んで来なくなったのを即座に牛たちも察知して、その場で正常に立ち止まった。そのうち2頭は何もない場所であるというのに、直後から足をたたんで地面に腹をつけて休み始め、牛たちは牛たちで何らかの気を張り続けていたようであることがうかがえた。

まもなく、アスリ含む3人もやや疲れた顔のユニスの元へ辿りつくと、最初にラリーヤが眉を寄せながら口を開いた。

「どうする？もう今日は帰る？」

「良いよ、それでも俺は。適当に何か捕まえられるだろうし。」

「………んー。」

これは、アスリにとって参った話である。ラリーヤの提案はこの状況に即しているし、ユニスも自分で言う通り、何か土産を見繕うのは造作もないことではある。

では、アスリが何に参っているかと言えば、アスリは喉が渇いているのである。これ自体はそこまでの問題ではなく、これまでもこのように清潔な水場もない場所を歩き続けて、水分の不足を感じれば、牛の乳を必要な分だけ搾って飲んできたのであって、そのものは容易に打開することはできるにはできる。

それ以上に今、問題であるのは、アスリの喉が渇けば、牛たちも喉が渇いているということに他ならない。無論、これだけ毎日毎日暑く乾燥しているサバンナで暮らす牛たちなのであるから、今日1日のこの程度で、水分不足で急死してしまうようなことはないに等しい。さりとて、アスリたちがここで牛乳をたまわった上に水も飲ませなければ、明日以降の乳量がどうなるかは定かではない。事実、

あんなに静かだった牛たちは完全に通常営業を再開していて、そこから挙がってくる雑談めいた鳴き声からアスリが理解する彼女らの意図は、今のアスリと同じく水をくれというものなのである。

悩めるアスリが、奥で腹ばいになっている1頭の牛に、どうしたものかと目をやった時であった。

黒地にいくつもの黄色い斑点と、２つの赤い模様の入った１羽の蝶が、南から吹くそよ風に揺られて舞うように、ひらりひらりと飛んでいた。アスリもこれまで何度か蝶は見たことがあったが、まずもって滅多に見かけるものではない。しかも、この蝶は少し離れたところからもはっきりと視認できるほどに随分と大きく、アスリの手のひらを広げた程度のサイズはありそうである。もちろん珍しい蝶に気づいたのはアスリだけではなく、４人とも、また犬も、何となくその蝶の様子を注視していた。

穏やかな風に乗りながら北へと向かう蝶の行く先、地平線の手前より近い辺りには、小高く緑色に連なった丘があった。その丘の麓と思われる付近で、強弱をつけながら輝く何かの光を、アスリは捉えた。

たくさんいる

「あっ…！」
「蝶？」
思わずアスリの上げた一声に、ユニスが続いた。
「いやっ、そうだけど、その奥。今ちょっと光ってた。あっ！ほらっ！」
「えっ…、あっ！ホントだ！ママのこの石みたいのがあるのかな？」
この光は、ずっと曇り切ってしまっていたティサの心中にも、ごくわずかに差し込んだようである。しかし、ティサの言うように仮に宝石があるとすれば、常に一定量降り注ぎ続けている太陽光に対して、前後に差異なく反射をするはずであって、今の点滅するようにチラチラとしている光を説明することはできない。
ここに新たな仮説を投じたのは、ラリーヤであった。
「あれ、あそこから水が出てるんじゃない？…滝とか？」
「滝…？」
滝とは、また突拍子もない話だ。アスリも滝が何たるかについて知識はあったが、それらは全て方々を回っている隊商から誰かが聞いたものが、さらに伝聞されて回ってきたものであって、これまで乾燥したサバンナで暮らしてきたアスリにとって、滝など存在すら怪しい代物に当たる。
「えっ、待って。カインタとか、ユニスとティサいたとこって、滝

とか普通なん？」
「いや、俺…、ってかなんつった？よくわからん。」
「私も知らない…、どんなの？」
「あの、高いとこから水がさ、たくさん出てくんだよ！あれ、ほらっ、なんか水が出てるみたいじゃん？ほらっ、今ちょうど！いや、でもカインタも周りもなかったし、全然違うかもなんだけどさ。」

このやり取りを踏まえるに、ラリーヤはアスリと滝に関して知っている程度は同じレベルであり、ユニスとティサに至っては、概念そのものも把握していないようである。つまり、ラリーヤの言うようにあの光が滝によるものか否かを、今の位置から正しく判断できる者は、少なくともこの中には存在しない。その一方で、改めて滝は水が流れ出るものであるのだから、落ちた水はその直下に溜まるに違いはない。そうであるなら、これは喉を潤す絶好の機会であり、その水の状態があまり良くはないものであったとしても、まず牛が飲めないはずはなく、人間側は濾過された乳を飲めば良いことになる。

本来、このように新境地を開拓する試みは、どんなリスクがそこに控えているのか見通せない以上、牛たちを連れていない時に行うことが望ましいのは確かではある。しかし、今はとんでもない変態ではあれど、その腕前はアスリの父をも凌駕する猟師と、対をなす猟犬が控えているのであって、ここに不安は一切介在しない。

水が飲みたいと切に訴えかけてくる牛の鼻声が徐々に大きくなりつつある中、アスリはこの機会を活かすチャレンジに挑む覚悟を固めていった。

「…ちょっとさ、行ってみる？牛さんたち、そろそろお水飲ませてあげないとだし。」
「えっ！？帰らんの？」

アスリの想定では、消極的な反応を示してくるのはティサであったが、それよりも先に反応したのはラリーヤであった。何らかによる追い打ちと失禁はなかったものの、墓地から逃げてくる時の表情はラリーヤの方が凄まじかったのであるから、こうして喋っていられるのも奇跡であり、帰路を催促するのは当然と言えば当然である。
だが、それを打ち消すように動いたのは、最も甚大な被害を受けたティサであった。

「えっ、あの…。水たくさん出てるん？…なら、ちょっと寄りたい、かも。」

ここから分かるのは、先ほどはあらゆる一切を断ってはいたものの、ティサとしても、腰布の下のコンディションは相当厳しいようであるということである。実際、ユニスで遊びすぎたアスリとっても股間にやや不快感を覚えており、せっかくユニスを塗りこんだのにもったいなくはあるが、できれば清潔に洗い流して、帰宅するまでを快適に過ごしたいという点で、腰布の真下はティサと似たような状況に置かれていている。この点においても、ティサの意向にアスリも全面的に同意できるのであった。

「せっかくだし俺も滝ぃ？見てみたい！」
「…じゃあいいけどさ、何かあったらすぐ帰ろうね？」

ユニスの一言はティサに対しての配慮のかけらもない、ダカクの持つようなただの少年としての本心を基にした適当な希望であったが、彼にティサやアスリの下半身を考えさせれば、どうしようもない変態の顔になって一部を腫らして砂をかけるほかなくなってしまうのであるから、これはこれとして致し方はない。一方で素晴らしいのはラリーヤで、あの恐怖に歪んだ顔をして引き上げて来た後だというのに、朝のアスリのように行きたくない、行かせまいという

態度は一切見せず、瞬時にティサの女子としての尊厳を重視して、自分の方を折る理性を行動で示したのであった。アスリは何から何まで全て大人びているラリーヤに改めて関心するのと同時に、対極のどうしようもない男子は、ティサが将来を共にするのにあたって不足するであろうから、いずれティサに愛想を尽かされたところで、自分が引き取りを申し出なければならないように感じていた。

ともあれ、これで4人のこれから数時間の方向性は決した。ユニスはまず犬に指示を出すと、犬は言われた通りに一度大きく円を描くように走りこんで、牛たちを南側から追い立てるように駆けていった。犬がぐるりと牛たちの後ろに回り込めば、牛たちも慌てて休憩を取りやめ、人間側も犬に続いて合流し、滝であると思しき場所を目指して一行は進みだしていった。牛と人間と犬側の間には、どこかに行ってしまったかに思われた先ほどの蝶が、いつのまにか舞い戻っており、これもまた優しい南からの追い風に乗って、アスリたちの歩調に合わせて先導し誘うかのように、やや先をはらはらと飛んでいた。

蝶に連れられるこの道中では、狩猟だけでなく牧畜まで卒なくこなす優秀な犬の吐息と、水を求める牛たちが時々上げる鳴き声以外、特段の会話らしい会話はなかった。まずラリーヤは帰りたいところをこらえて付いてきているのであるから黙るのも頷けるし、ティサも失禁した手前、大分気まずい思いをしているのであって、お喋りの気分にはならないはずだ。アスリも今のこの2人にはかける言葉も見つからないし、もう1人は声をかけておきたいが、かけたい言葉はむかつくほどにほとんどが性なのであって、実質的に何も喋りうる内容はない。

その上で本来であれば、この残るもう1人が最も気を遣って、当たり障りない会話を展開すべきであるところではある。それにも関わらず、アスリが横目に伺ったユニスの表情は、なんとあろうか、

にやつくように口角を上げたものとなっていたのであった。

本当にどうしようもない変態である。一体、この変態は何を考えているのであろう。たしかにアスリもユニスを見ていれば、先ほどあれほど仕上がってしまったのだから、下腹から股間までが疼いて切なくはなる。ただ、そうは言えども、ひと騒動を挟んでティサとラリーヤが疲れ切っている最中、どう考えてもこの顔になることはできないのである。

アスリもティサとラリーヤに根掘り葉掘り聞かれないようにしなければならない手前、あまり直接的にユニスを問い質すことはできないが、ここは簡単であっても、ユニスを適切に指導しなければならない。懲罰に燃えるアスリは、すぐさま手にする槍を持ち直すと、歩くユニスの左ふくらはぎにある、治りかけのかさぶたの辺りを目がけて、柄の部分で足払いをかけていった。

「痛たたーっ！！！」
「こらっ！！！」
「なんだよ！！何すんだよ急に！！！」

ユニスは声を上げつつ、アスリに攻撃された足を持ち上げて手で押さえながら、片足だけで飛び跳ねてアスリの方へと振り返って、翻るように憮然とした表情を浮かべていった。ユニスは自分のにやけた顔をアスリに見られたことに気づいていないのか、アスリの攻撃の意図を理解していないようである。

「何ニヤニヤしてんの！？」
「へっ…？いやっ、別にしてねーし！！」
「嘘つき！ニヤニヤしてた！」
「違っ！あの…。」

展開としては、やや危ない流れだ。今日、意気地がなかったところを踏まえれば、ユニスはかなり追い詰めなければ余計なことを白状するところまで到達しないと思われるが、ここはアスリも万が一を考慮して、これでもかというほどに視線に意味を込めて、ユニスを睨みつけるように見つめるだけで、深追いせずにユニスの答えを待つことにした。今、アスリとして及第点をユニスに与えることができる回答は、曖昧な謝罪である。

ところが、ユニスの返却はアスリの想像よりもはるかに悪く、落第以下のものであった。

「いや…この辺、めっちゃたくさんいるんよね。」

「はっ！？！？」
「えっ！？今なんて？えっ！？」
たまらず反応したのは、何らかの体験をしてきたティサとラリーヤだ。ユニスは馬鹿だ。なぜやっと落ち着きつつあった2人を、またアスリまでをも恐怖させるようなことを言うのであろうか。
「何！？どゆこと！？ちょっと！！！」
「いや！！！違くて！！！あの！！！」
「ちょっと！！えっ！？えっ！？何？嘘でしょ！？まださっきのいんの！？！？」
「違う違う違う違う！！！！そうじゃないんって！！！」
火が付いたようになってお互いの両手を正面で取り合ってしまったティサとラリーヤを前に、再度アスリが槍の柄をユニスのふくらはぎのかさぶたへと向けると、ユニスは傷跡を隠すように押さえて、自分の身を守るようにその場にしゃがみこんだ。
「やめやめやめやめ！！！」
「なんなん？馬鹿なん！？」
「いや！！あの、めっちゃ獲物！動物いっぱいいる！！ここすんげーいる！！ってかもっと奥の方、多分もっとめっちゃいる！！それで、ちょっと嬉しくて…！」
ここまで聞くと、アスリはユニスが傷跡の上に置いた手の甲に槍の柄の先端を当てて、押し込むように軽く力を込めた。

「ヤメロ！！！」
「馬鹿でしょ？紛らわしいんだよ。」
「痛っ！！やめて！！！痛っ！！ごめん！ごめんって！！」

アスリに詰められるユニスをよそに、ここで犬は阿呆な主人の元を離れて、ティサとラリーヤの足元の方へとすり寄っていった。真にケアすべき相手を理解しているところを見るに、やはりこの犬はユニスよりも随分と賢いようである。

それにしてもこうしてユニスを責めてみると、そこにはアスリの良くない何かを呼び起こすような力が所在しているかのようでもあり、ユニスに嫌われないように注意を払いながら、たまにはこういう遊びをしてみるのも、アスリにとって良い刺激ではある。また、アスリの背後に立つティサとラリーヤもアスリをまだ止めない以上、無駄な恐怖を与えたユニスに怒っているのか、もしくはアスリと同じ何らかを得ているかをしているようで、アスリの責めを控えにかかってもこないのであった。

ユニスは阿呆だが、未知の何かがいないことが分かったことで、ひとまずラリーヤは安堵したようで、煙草の煙を吐き出すように大きくひとつため息を漏らし、強張らせていた肩の位置を意識して落とすようにすると、ユニスの発言を受けた言葉を繋げていった。

「はぁー、やめてよ。びっくりするから。ってか、別にユニスじゃないけどさ、この辺結構良いかも。ちょいちょい珍しいのあるから、帰り摘んできたい。あ…。」

喋りながら何かに気づいたのか、ラリーヤはここまでで喋るのを一旦止めた。わずかな間をとって、ここに続いた会話は、その辺のどうしようもない大人よりも十分に発達しているラリーヤの精神が、怪異のもう１人の体験者であるティサに向けて、気配りを行ったで

あろうことを示していた。

「……私は大丈夫だけど、ティサは、その…、ここは大丈夫？」
「全然平気。もう、さっき声かけてきたのもいないね。」
「え？声かけられたん？」
「馬鹿っ！！ユニス！！」
「痛たたっ！！！」

何の考えもなしに思ったことをべらべらと喋るユニスに、アスリはその手の甲に当てている槍の柄を直ちに押し込んでいった。ただ、行為の反面、ティサの言った声をかけられたという話そのものは、アスリとしても疑問の残る内容であった。

「いや…、ユニスもさっき聞いたでしょ？」
「いっ…？へっ？何の話？」
「は？」
「いや、ティサ待って。あれ聞こえたのって、ユニスとティサのとこ来る前、お墓でじゃん？」
「えっ？待って、それってラリーヤは？」
「だからお墓で。」
「嘘！？アスリ…？」

アスリにとって、意味不明のやりとりである。それはアスリ以外の3人も同様のようで、しゃがむ1人も立ったままの2人も、噛み合わない相互の認識を前にして、それぞれが顔にわからないと書いた布でもぶら下げているかのようであった。つい、力を込めたばかりの槍を握る手を緩めたアスリは、何となく嫌な恐怖を感じつつもあったが、状況の整理を試みていった。

「えっ…、ちょっと、どういうこと？聞いたってさ。ってか…、2

人とも、ごめん、けど、ちょっとさ、あの…、良い？」
「ん…？」
「良いよ…？」
「あの…、まずさ、お墓で何あったん？」

今度はティサも明らかに生じている齟齬を解消したかったのか、アスリのこの質問を受けても、先ほどのように騒ぎ出すことはなかった。それでも、言葉として紡ぎだすのにはやや難があったようで、先にこの問いに答えだしたのは、ラリーヤの方であった。

「…最初、お墓まで走ってって。槍がすんごい数立ってんのね、あそこ。古いのは斜めだったり、倒れてたり。だから足元だけ、めっちゃ良く見ながら、でもなんもないよねってティサとも話してて。」
「そう、何もないじゃんって言って、アスリがビビってた真似とかしてた。」
「サイテー。」
「ごめん、マジでうちらがアホだった。」
「ごめんって…、アスリにあんだけ朝言ってもらってたのに。…で、そんなんしてたら、急にこっちはダメだ！って男の人に、怒られたみたいな野太い声して、で、そっち見ても誰もいなくて。」
「えっ！？嘘っ！？」

状況説明が始まったばかりであるにも関わらず、早くもティサが口元を手で覆いながら、ラリーヤを遮った。

「…あーそーぼ？って、ちっちゃい子の声だったじゃん？」
「はっ…！？」
「で、振り返っとこに、おかしな子。」
「えっ！？何もなかったじゃん？えっ、…待って待って待って！！おかしな子って、何！？どういうこと！？」

この時点で、アスリは身震いしそうであった。今は落ち着いているし、このエピソードの裏側ではユニスと大変楽しく過ごしていたとは言え、どう考えても北なんかに来るべきではなかったのである。

「えっ、一緒に見たじゃん！すんごい黒い、女の子。私とラリーヤいたとこの、ちょっと先で、何本も槍倒れてたとこ、あったじゃん？あそこのちょっと奥で、じーっとこっち見てたよね？」
「えっ！？そんなんどこにもいなかった！！」
「待って、黒いって？もっと南の方の村の人らってこと？それとも服とか？」
「私、南の村の人とか知らないけど…、とにかく黒っぽい。肌ってか、全部黒いかんじ？服は普段アスリが着てるみたいな。」
「私、黒い服なんて着ないけど…。」
「いや、でも黒かったんよ。意味わかんないけど。で、なんかその子見た瞬間に、なんかわかんないけど、一気にぞわー！ってして！やばい子だって、すぐ思って。で、ラリーヤ見たら、やっぱりびっくりしてたから、そっからはもうずっとこっち来んなこっち来んな！って思いながら、２人でダッシュして。」

怪談の語り部たるティサは、ここで口元に当てていた両手で、そのまま一度口元を軽く拭うと、その手を尻の方にまわして、この話題の出発地点へと到着した。

「で、ユニスとアスリのとこ来て、矢とか拾ってたじゃん？そしてたら耳元で、お墓で聞いた子どもの声で、見ぃーつけた！って…。あとは、最悪…。」

そこまで言って、自分の腰布の方へと目をやったティサを前に、アスリもユニスも、墓地にまで出向いたラリーヤまでも、唖然とし

ていた。特にのん気の塊であったユニスには、現場で見せていた頼もしさまでもが消え去っており、アスリが槍の柄で腹でも突いてやれば、こちらまでも漏らしそうなほどに、明らかに怯えている気配があった。聞くばかりで黙り続けていたユニスは、ここでやっと重そうに口を開いた。

「そんな声、聞いてないんけど…。全然意味わからん。」

「私が嘘ついてるって思ってるってこと？」

「いや！そうじゃなくてさ、じゃあ何なんそれ？えっ…待って、待って、それって…。いや、いやいやいや！ないっしょ！？えっ！？んなことある？なくね？ありえんって！」

ユニスもいよいよあの場で対峙していた見えない相手の存在に、今更ながら理解が及んだのか、アスリが向ける槍の柄をさりげなく掴みながら浮かべる表情には、少し前の多くの獲物に囲まれる喜びが、もはや微塵も残っていなかった。すでに先方が人外であると察していたアスリにしても、ここまで聞かされて心の中心に据えられるのは恐怖でしかない。

しかし、ここでアスリまでもが恐れてしまえば、さらに際どい表情のラリーヤとティサも、先ほどのパニックまで一気に後戻りすることとなる可能性はある。現にここまでに一度、ユニスがあまりに稚拙な会話の切り出し方をしたせいで、蜂の巣をつつきかけてしまっているわけである。

何より、今の場の空気が続くようでは、いくらその前に大層楽しい時間を過ごしたアスリとは言えども、正気のままではいられない。とにかく自己の冷静を保つためにも、アスリはお世辞にも格好良いとは言えない姿となったユニスをやや囃し立てる方針を瞬時に立て、それをもってぬるくなりそうなサバンナの凪を、威勢の良い熱風へと戻していくこととした。そもそも、ユニスがニヤニヤして馬鹿な

ことを口走ってこうなっているのであるから、当て馬になるぐらいの仕事はしてもらっても当然である。

「えっ？むしろここまで何だと思ってたん？」

「いや、普通に誰か、敵ってか、人がどっかいたんだって…、いや、だってそうっしょ！？普通！嘘でしょ？………やば。マジありえん…。」

「いや、どう考えても人の訳ないっしょ。私、朝からずっと言ってたし、さっきもラリーヤが、私の言ってた通りだったって、言ってたじゃん？ってかユニスも結局怖いんじゃん。何？私のこと散々馬鹿にしてたくせに。」

「いっ、別に！！！怖くなんかねぇし！」

アスリの事前の見立て通り、ユニスは相当怖気づいているようである。実のところは自分にも余裕がない中、目の前の弱くなってしまったユニスを揶揄すべく、対比するのに適した相手としてアスリにすぐに思い描くのは、凛々しく、男子として大きく主張する、これもまたアスリの知る別のユニスしかいない。

それはすなわち、矢を一斉に放つ姿と、少し前の熱い1本であって、前者だけの存在でこの場の論としては成立する。ところが、考えながら喋るアスリは、完全に蛇足となる後者にまで、口を滑らすように言及していった。

「は？どう見てもビビってんじゃん。一気に矢3本も打てんのに、しかもおちんちんまでついてんのに、怖いんだよね？」

「違っ！！！」

即座にユニスが放つのは、否定の一言である。一瞬、アスリも余計なものにまで触れてしまったと後悔しかけたが、やはり効果が絶大であったのは確かであった。ユニスの弱いキーワードは、アスリの口から飛び出した、ユニスの弱いキーワードは、やはり効果が絶大であって、途端にユニスの顔面には、恐怖の中に別の何らかの感情が入り混じっていった。どうせユニスは馬鹿で変態なのだから、このままあと少し放っておけば、ティサが見聞きした恐怖など忘れて、アスリに触れられた感覚ばかり思い出し始めるに違いなく、場合によっては股間が腫れてしまうかもしれないが、これでまずどうしようもない1人は、ティサの見た何かから解放されたはずだ。

そして突拍子もないアスリの言葉は、アスリの思った以上に的確であったようであり、ティサとラリーヤの陰っていた表情のトーンも、瞬時に穏やかな方へと流れていった。もっと正確に言えば、神妙だったティサは眉をあげて瞳を大きく見開き、ラリーヤの方はユニスと同程度か、またはそれ以上にあの言葉に弱いのか、どうであれユニスよりもかなり多くの異なった感情を恐怖の中に投下したようで、早くも口角は上がっていた。真っ先に反応したのは、やはりにこやかになりつつあるラリーヤの方で、そのままアスリに乗るようにして、ユニスに茶々を入れていった。

「えっ？違うの？ユニス、男の子なのにちんちんないのー？」

「バカ！あるし！！！そうじゃなくて…！」

「えー？でもユニス髪の毛長いし、昔っから女の子みたいだよねぇ？ホントはついてないんでしょ？」

急に嬉しそうになったラリーヤが放った調子の良い問いの答えを、アスリは正確に把握している。当然、ユニスの両足の間に存在するかしないかを口走れば、非常に面倒なことになるであろうことは、アスリも十分に認識はできている訳である。元の話題から一気に離れるチャンスでありつつ、一歩も踏み外すことはできないアスリは、ごくわずかに話題の向き先を変えるようにしながら、この流れに続いていった。

「ってかさ、ユニスなんで髪の毛女の子みたいにしてんの？カインタとかだと、男の子はみんなこんなん？」
「いや、カインタはみんなロマドウの男の子よりもっと短いよ。ダサいのに、剃ってる子もいたし。ユニスのは、女の子のだね。」
「だから女じゃねーってば！」
「でも……、なんでユニス髪の毛長いか知りたい？」

なぜか不思議そうな顔つきのままであったティサも、会話がこの点に到達したところで、どうにか恐怖による支配から脱出しきったのか、酒でも出された時の父や族長のような悪い顔となって、ユニスをいじめる方へと回ることを選択したようであった。無論、そう言われてはアスリもラリーヤも聞かない訳にはいかない。

「えー！！！なになにー！？気になる気になる！！」
「なんでなんで？やっぱり女の子だからなの？それともやっぱり、ちんちんついてないから？」
「ラリーヤ、違っ！ってかティサ！！！」
「あのねぇ、ユニスって髪の毛切るの怖くて、なかなか切れないんだよ！」
「バカ！！！ティサッ！！！」
「えっ！？」
「えぇぇぇ！」

やや過剰に、明らかにユニスをからかうようにしてアスリとラリーヤが驚いた後、２人が発した言葉は、まさかの同じものであった。

「かわいいーーー！！」
「かわいいーーー！！」

思わずアスリがラリーヤの方を向いて顔を見合わせると、ラリーヤは口元を手で覆いつつ、幼い子どもを前にして微笑ましく見守るかのような表情を浮かべていた。おそらくラリーヤの方から見ても、アスリは同じような顔になっていることであろう。責めを受けるユニスはと言えば、しゃがみこんだまま徐々に居場所が狭くなりつつあるようである。返す言葉も見当たらずに困惑して燃えるユニスに、ティサはさらに薪をくべていった。

「だから、すっごくたまに私のママに、髪切ってもらってたんだよね？目、ぎゅってつぶってね？」
「うそー！マジ！？ユニスかわいいー！」
「それじゃ今度から私とアスリで押さえて、ティサが切ってあげなきゃかな？」
「うっさい！！！なんだよ！！！何でもいいじゃん別に！！！」
「次からそうしてあげるからね？ね？目ぎゅってするんだよ？」

先ほどとは角度は違えど、やはり恥ずかしがるユニスというのは、アスリにとって訴えかけてくるものが多い。つい、アスリがユニスに向き直って、その頭を撫でようと左手を伸ばしかければ、もう一方右手で掴んでいた槍を横から動かしてくる感触があった。視界の隅では、ラリーヤがアスリの槍に手を伸ばしてきたところであり、アスリも何の意図があるのかまでは考えずに、そちらへ槍を託していった。

「やっぱりさ、ユニスかわいいし、ちんちんついてないんでしょ？」
　ラリーヤはまたもユニスに疑念を向けつつ、あくまで自然な雰囲気で手にしたばかりの槍を小さく持ち上げると、あろうことか、その柄を今度はユニスの曲げた両膝そばの、砂まみれになっている腰布の裾から差し込もうとしていった。アスリはつい先日、ダカクに対して似た動きを取って事故を起こし、治療を施す羽目になったことがあるのであるから、この槍遣いは危険以外の何物でもない。仮にこのままユニスも中身が出てしまうようなことになれば、ラリーヤの提案する髪を切る時の姿勢のように、ユニスを2人で押さえつけて、治療の役目はティサに譲るべきではあろうが、その際アスリはユニスの顔面を股間で圧迫する担当は任せてもらっても良いはずではある。
　ただ幸いなことに、または残念ながら、直後にユニスの防御の対象は治りかけの足の怪我から、先ほどアスリの手中を濡らした元凶の、もう1本の槍へと切り替わっていった。同時にユニスは、間一髪でラリーヤに差し込まれた方の槍を食い止めたのであった。
「ヤメロ！！！」
「いやぁ、ついてんなら、あるかなぁって。」
「あるよ！ってか！！………ってか！ティサ！昔見たじゃん！俺の！」
「そうだね、ぷるんぷるんしてた。」
　咄嗟にユニスが何かを言いよどんでティサに求めた助けに、アスリは肝を冷やし、ティサはにやりと笑いながら余裕をもって肯定した。アスリはこれを聞いて安堵にとどまらない、またもの下腹の奥の疼きと、どうしても越えられないティサの優越に対しての羨望しか抱かなかったが、ティサ以上の笑みをこぼしたのは、ラリーヤの

方であった。

「えっ！？何？それじゃ2人で見せっこでもしてたってこと？」
「違う違う！そうじゃなくてさ、ユニスって、ユニスのおじいちゃんが死んじゃったあと、しばらくお漏らしするようになっちゃって…。」
「えぇっ！？」
「うそー！？」
「ヤメロ！！！ヤメロ！！！ヤメロ！！！やめやめやめやめやめ！！！」
「それでー、何回か私のママに、おちんちんふきふきしてもらってたんだよねー？」
「マジで！？」
「ウソでしょ！？恥ずかしいー！」

アスリにとって、ティサは羨ましいにも程がある。その時のユニスは、どれほど真っ赤になって恥ずかしがっていたのであろうか。それにしても、この今の、焦って汗を流すユニスにもまた、非常に深い趣がある。

「うっさい！うっさい！ってか！！！ってか！！！ティサ！！！ティサだってさっき漏らしてたんじゃん！！！俺ん時はもっと子どもだったんだから、今日漏らしたティサの方が恥ずかしいじゃん！！俺なんかあんあん時ぐらいだし！」
「………ユニスだけもっかいさっきのとこ行く？」

低いトーンで放たれたティサの一撃は、ユニスが展開しようとした弁明全てを、完全に封じ込めてしまった。手詰まりとなってスタックしてしまったユニスに、アスリにとって願ってもないような攻勢を、ラリーヤは畳みかけるように続けていった。

「もういいからさ、ちんちん見せてよ。」
「やだよ！ヤメロ！！」
「ティサ見た時はついてたけど、髪の毛女の子みたいにしてたから、なくなっちゃったんでしょ？」
「んなワケあるか！」
「なら見せてよ！ってか何これ？なんかすっごい砂ついてない？」
「違っ！！！」
「脱いじゃいなよ、そんなの。別にちんちん丸出しで良いでしょ？」
「本当だ、今朝こんなんになってなかったんに。脱いじゃったら？」
「なんでティサが漏らしたまま着てんのに、俺脱ぐんだよ！！！」

槍に力をこめるラリーヤに加えて、ティサまでもが興味に惹かれるようにユニスの隣にしゃがんで腰布の裾に手を伸ばし、ユニスの劣勢は決定的となった。つまり、アスリがあと一押しすれば、超一級の糧が手に入ることになる。動物的になりつつあるアスリも、今度は直にユニスを鷲掴みしてみたい一心で、ティサとは反対側の方へ腰をおろしかけながら、心の中で本能のつぶやく言葉を、そのまま口にしていった。

「さ、ユニスはどんなおちんちんついてんのかなー？」
「嘘ー！今本当に見るの！？ユニスのおちんちん、めっちゃ久しぶり！やばーい！」
「ほらほら、脱いじゃえ。ぷるんぷるんの、ティサとアスリにちゃーんと見てもらおうね？」

この様子では、ティサにしてもラリーヤにしても、女子としての心の根底の作りは、アスリと同じであるようである。ユニスはすぐに硬直する、本当にどうしようもないものをぶらさげているが、何であれこの1本のおかげで、雨が降り出しかけていたユニス以外の

３人の心中は高く晴れ渡って穏やかになり、あとは残るもう１人がアスリの手中にもたらしたように、もう一度狂気の雨を降らせでもすれば、女子一同は地上の３つの太陽にならんとして輝くはずだ。

いよいよアスリもティサも、ユニスの腰布の裾を両脇から掴んで、ユニスもラリーヤの差し込もうとする槍以外までケアしきれなくなりつつあった。最後の悪あがきとして、ユニスは腰から跳ねるようにおかしな動きを始めたが、どう暴れようとも、もうこうなってしまっては、ユニスは観念して全てを見せるしかない。

期待に溢れるアスリが、ユニスを挟んで反対側のティサに、目で合図を送ろうとした時であった。突如、ユニスは抵抗を止め全身の力を弛緩すると、牛たちのいる奥の方へ、がばりと振り返った。

「あっ…！」

ユニスの上げた一声に、反射的にアスリが腰布を一段と強く握りしめ、ユニスが振り返った先へ何事かと顔を向けた、次の瞬間、もうその視線の先にはユニスがいた。

さらに言えば、引き締まったユニスの尻が、アスリの目に飛び込んできた。

「うわっ！！！」

何歩か駆け出し、少しアスリたちから離れたところで、異変に気づいたユニスは驚きの声を上げて、背を向けたまま、股間を両手で押さえて再びしゃがみこんだ。ユニスは包囲からの脱出には成功したが、失敗してしまった。

「お尻丸出し！！！」

アスリが見たものをそのまま叫べば、女子一同、爆笑である。沸き立ってしまって収まらない３人を、尻を出しながら尻目にするユニスの目元は、直に尻を目にしてしまったせいで、笑いの中にも勃興しつつあるアスリの本能を、またもや狂気で満たそうとしているかのようであった。

「いいから！いいからさ！それ返せよ！！！こっち投げて！！！」
「んふふふっ…！やだし、あっ！こっち向いたらいいよ。」

その本能などおくびにも出さず、いたずらっぽく答えたアスリに、ユニスは非常に渋々と、ぴっちりと両足を閉じ切った状態で、もじもじとアスリたちの方へと振り返っていった。この、なんとも情けないユニスの動きに、女子たちが続けて寄越すのは、さらなる爆笑以外にない。

「おい！！！もう向いたから！！！ほら、返せよ！！！」
「マジやばーい！！！返してほしい？」

完全にふざけているアスリが、ユニスの置き土産を頭上でバサバサと振りかざすと、辺りは急に風が吹きつけたかのように砂が舞いだした。すぐさまアスリも腕を振るのをやめて、思わずもう一方の手で目頭を押さえて瞬きを繰り返すと、ティサもラリーヤも笑いながら煙でもかきわけるような反応で、そばにいた犬も腰布についていた砂のせいなのか、それとも主人を嘲笑っているのか、連続して鼻から息を吹き出し続けていた。

「うっわ！砂やば！！！やっぱこんなの着ないほうが良いっしょ？お尻もおちんちんも、砂だらけになっちゃうよ？あ、まだ隠してるし！」
「いいから！！！アスリ、いいから！！！早く投げて！！！」
「おちんちん見せてくれたらいいよ。」
「バカ！！！俺振り返ったじゃん！」
「んふふふふっ…！しょうがないなぁ…。」

まだ中腰のまま瞬きを繰り返しているというのに、大層嬉しそうなラリーヤは、アスリから預かったままの槍を左右に揺らしつつ、もったいぶったように割って入って続けた。

「アスリー、それじゃ渡してあげよっか？ってかなんかそれ臭いけど、どうしてもユニス欲しいみたいだし。」
「えー。こんな砂っぽいのにー？」

ラリーヤの発した言葉に一瞬、ひやりとして巧妙に話題をすり替えつつ、同じくもったいぶって返しながら、アスリはそれ以外にもラリーヤに何らかの企図があることを見抜いていた。何となく、その先に控える行動に備えたアスリは、ティサにも笑みとともに意味のある視線を送り、それを受け取った側のティサとともに、同じく

その場に立ち上がっていった。
「そう、ほら！渡してあげよ！行くよ！？」
事前の予測通りにラリーヤから発せられた号令めいた掛け声をきっかけに、３人はしゃがみこんだままのユニスの方へ、一斉にダッシュした。無論、走り回る動物を射貫けるだけの動体視力を誇るユニスが、迫りくる３人を目の前にして、ただ座り込んだままである訳もない。どういう風にすればこれほど良い反応ができるのかアスリも定かではなかったが、とにかくユニスはアスリたちの方から宝物が全く見えないようにしながら急反転すると、元来走り去ろうとしていた、滝があると思われる地点の方へと向けて、逃避行を開始した。
だが、どう頑張ったところで、結局ユニスは男子であって、何一つこぼさずに逃げ切ることはできない作りになっている。走るアスリが釘付けになっている、手足よりも色素の薄い、よく引き締まって光を弾くユニスの尻の直下、股下部分ではユニスが両太ももを互い違いに前後させるたびに、垂れ下がった何かがちらちらと垣間見えていた。
今、アスリが目にしているものは、ダカクの構造を軸として考えるに、おそらく袋の方である。本来はもっとはっきりと、特にすぐに悪くなってしまう槍の方まで、しっかりと手に取って眺めてみたいところではあるが、アスリにとってはこれだけでも大成果だ。満面の笑みを浮かべるアスリは、嬉々とした声で丸出しの尻に向かって、追い打ちをかけていった。
「ねぇ、ねぇ！！見て！！！見てっ！！！あれっ！！！たまたまっ！！！」
「わぁーーー！！！ティサ！前に見た時と一緒！？」

「ホントだ！！！マジでサイアクー！！ちょっと黒っぽくなってない！？きたなーぃ！」
「おいっ！！！見んな！！！マジ見んな！！！！！殺すぞ！！！！！」

ユニスは相当物騒なことを口にしているが、尻をさらけ出して、しかもアスリより大きいものをぶらさげて、それで走って逃げているのであるから、何を言えど脅し文句にすらならない。また、それは本人が最もよく理解しているのか、ユニスはここからさらに前のめりになるように上半身をやや低く倒すようにすると、ぐっともう一段走る速度を上げて、普段ユニスが矢を当てる的の獣のように、猛然と駆けていった。
足には自信のあるアスリも、次は肛門まで目に焼き付けて、もう1つ記憶の土産を付け加えるのと、ついでにそれも指摘して馬鹿にしてやろうと、ユニスに必死に食らいついていった。しかし、本気で走るユニスは、アスリも信じられないほどに速かった。思えば、ユニスの両脚はまだ怪我からの回復の途上にある訳であり、おそらくはこれでもまだ、ユニスの本当の本気よりは速くないはずである。今、ユニスはあまりに間抜けで、おかしくおもしろい恰好をしてはいるが、やはり足が速い男子というのはアスリに対して主張してくるものが多く、それが愛するユニスなのだから、このユニスもまた、1つ別な形の大好きなユニスになる。ここは何とかしてユニスに追いつき捕まえて、もう逃げられないように、今度は直接握ってしまうことだけをアスリは思い描き、ここぞとばかりの全速力で走りこんでいった。

ところが残念なことに、あまりに速いユニスにぴったりと追従できたのは、犬だけであった。まずアスリの真横にいた2人のうち、アスリの槍を手にしつつ胸を押さえながらちょこちょこと走っていたラリーヤが真っ先に脱落し、ティサもアスリからあっという間に

離されてしまった。ティサの方はさておき、ラリーヤについては川辺で初めて出会った時、たしかにもっと速く走っていて、しかもこんな走り方をしていなかったのだから、今日は実力を出し切っていないのである。

そして、一旦2人を残してユニスを取り押さえようにも、犬まで走ってしまったから、今度は少し先にいた牛たちまでもが走り出してしまった。この時の牛たちも、いつもよりかなり速かった。ただ、速いとは言っても結局は牛であって、獣と、下半身裸で、下半分を獣として扱っても差支えはない者との距離は、ぐんぐんと縮まっていった。

さすがに、ここまで速く追い立てては、牛たちにとって危険である。手塩にかけて育ててきた牛たちが、ここで転倒して骨でも折ることはもちろんのこと、明日の牛乳の量が減ってしまうことも含めて、途中から真面目で冷静な思考の方が優先し始めたアスリは、大変不本意ではあったが少し進んだところで立ち止まって息を整えると、こちらも息を切らしてしまっているティサと、まだ余裕のありそうなラリーヤを待ちながら、先を駆けるユニスに大きく声をかけた。

「ねぇー！！！ユニス！！！もう追っかけないから、止まって！！！」

「どうせすぐこっち来んじゃん！？」

アスリの呼びかけに応じ、ユニスは振り返りもせずに声を上げたが、直前に不意打ちをかけられたばかりのところに、要請通りに停止することはなかった。

「もういいから！！！牛さんたちが怖がってる！！！じゃあ止まんなくていいから、もっとゆっくりして！！！」

アスリの声に真剣なトーンが混じったところで、ようやくユニスは小走りとなり、牛たちも犬とユニスから距離を確保すると、落ち着いたペースを取り戻していった。息を切らすティサと、余裕を持って進んでくるラリーヤを待ってから、アスリがラリーヤから槍を受け取って3人が再び歩みだすまでの間、ユニスと犬と牛はもっと先へと進み、これでユニスの優位は決定的となって、直ちにアスリがユニスを握りしめる可能性は皆無となった。それでも早く進む先方の集団に引っ張られるように、ユニスを逃した3人も快調に歩みを続け、気づけば赤い土の地面には草色に変わり、道なき道も上り坂となって、少し前まで随分先にあったかのように見えた、緑に覆われた小高い丘には、いつの間にか差し掛かっているようであった。

道すがらアスリの耳に入るのは、徐々に近く、大きくなってくる水の落ちる音である。当初、確証を持てないままスタートを切ったものの、ラリーヤの読みとアスリの賭けは正しく、喉をカラカラにしながら進む牛たちの勝利も、まずもって固まりつつあった。

その坂の途中から、先を進む乾いた牛たちの背は足元の方から徐々に見えなくなり、続いて遠くて小さいユニスの尻も同じように隠れていった。もう、丘の最高地点は近い。水音と豊かになる緑に対する3人の興奮は、丘の標高と比例するように高まっていき、アスリとティサは滝への期待を、ラリーヤはそれに加えて珍しい植物が次々に見つかることを絶えることなく語って、長いように見える上り坂は、3人の歩いた距離以上に短くなっていった。

そうして、一段きつくなった傾斜を登り切った先、ついにアスリが目にしたのは、膝下よりもやや低い高さの草が広がる平地の中に、列を成すようにして一生懸命に澄んだ小川の水を飲む、牛たちの背中であった。さらにその奥、この草の台地を取り囲むように切り立つ岩々の間から、空気を含んで白くなった太い水が1本、絶え間な

く次々と落下し続けていた。

滝はあった。

南中の高度まで到達した太陽は、サバンナと同様に滝にも陽光を注ぎ、それを受ける滝の水しぶきと織りなして、苔むした岩の壁面上部から牛たちの控える小川にかけ、小さな虹を描いていた。七色の光の終点近くでは、はらはらと舞う先ほどの蝶の仲間だと思しき優雅な黒い羽が複数あり、その中に滝からひたすら落ちてくる水をただただ見上げるユニスと、主人の横に行儀良く座った犬の後ろ姿があった。

「えっ━!!!あった!!!すごい!!」
「これ滝っ!?すご!!すごい!!」
「えっ!待って!虹!虹出てる!!!すごい!!」

初めて目にする滝と、美しい虹の組み合わせを前に、アスリもティサもラリーヤも最初に発するのは、自然の生み出した絶景へのシンプルな賛美の言葉で、3人ともお互いの顔と景色とに輝く目を行き来させながら、興奮の共有と歓喜を繰り返していった。それが一旦済むと、3人はしばらくの間ただ感嘆の声を漏らしながら、ひたすらに水の落ち続ける滝と、滝の真上までの架け橋のようにも思える虹を、前方のユニスと犬と同じように釘付けになって眺めていた。

改めて、アスリたちがたどり着いたこの場所は美しく、随分と不思議議で、珍しい場所である。まず、過去にアスリが放牧するのに歩き回ってきたところは、多少の勾配はあれど、どこも基本的には平らであって、手にする槍を元にすればだいたい5本分ほどの高さの岩崖が切り立ち、しかも西から北、東にかけて3方向を取り囲まれるようになっているところは、どこにもない。また、こうして岩々が水場を囲んでいるせいか、この場所全体が涼しさと潤いで満たされていて、空気自体がサバンナのものとは異なっている。

その最奥、こちらも槍を基準とすると、横に倒した1本分ほどの幅の滝の直下には、ティサの作ったすぐ干上がってしまうようなものでない、紛れもなく正真正銘の池があり、その池からは西側の岩場沿いに南西に向かって1本、アスリたちの正面の方に1本の、2本の小川が流れ出していた。そのうちの牛たちが水を飲んでいる側の南へと向かう方は、少し進んですぐに西の方へと折れ曲がり、も

う1本の小川と再び合流して、小さく平たい中州が形成されていた。岩場に沿う奥の小川はやや色が濃く、深みがあるようである一方で、手前の方の色はクリアであり、中州に渡ることは容易そうである。

合流後の小川は南西の方に向かっていくゆるやかな下り坂に沿っており、この先の向かう方角はロマドウとなる。今、滝から流れ落ちるこの水は、もしかするとどこかで地面にしみこんでロマドウの井戸水となっているのかもしれないし、ユニスとティサ、ラリーヤと出会ったあの川の水に繋がっているのかもしれない。何にせよ、先ほどアスリたちは南の真正面から坂を上ってきたものの、帰りは小川に沿っていった方が、もっと楽に移動ができるであろうことは、明らかであった。

さて、小川の周りは土ばかりのサバンナでは珍しく、岩と砂利が地面の中心となっているが、そうかと思えば少し離れた先は丘の途中と同じように、いやそれ以上に最も濃い草木が茂っていて、ここにユニスの周りを飛び交う蝶たちの住処があるようである。丸出しのユニスの尻など一目もせず、あたり一面を嬉々として見渡すアスリが、その草木の先の崖沿いに目をやれば、滝から少し逸れた東の位置に、一段地面よりも高くなった、草の生えていない狭い台地が1か所あった。そしてその壁面には、人が横に並んで立って3人分ほどの大きさの、大きく裂けた岩と岩に挟まれた暗がりが広がっていた。

「あっ！ねぇ、あそこ！穴空いてる！」

「えっ！どこどこ？」

「あっ、ホントだ！洞窟！コウモリ取れそう！ユニスに取ってもらおうよ！めっちゃおいしいんだよ！」

最初に指をさしたアスリよりも早く、アスリの発見に先に駆け出し始めたのは、ティサである。アスリもコウモリの味は知っている。

ただ、アスリの家庭でごく稀に出てくるコウモリと言えば、誰かがよその人物とやりとりした干からびたものを、さらに母がどこからかもらい受けてきたものであって、しかもそれが丸焼きにされたただけのものに当たる。骨っぽく大して食べる肉もなければ、蛇とはまた異なった独特の臭みのあるコウモリのどこが美味であるのか、アスリは全く見当もつかなかったが、ティサの足取りは軽やかで、墓地でそのまま受け取るしかなかった恐怖も、まだ続くはずの尿歩の後遺症も、コウモリへの期待で上書きされているようであった。

しかし、そうは思えど、洞窟である。アスリにすれば、洞窟も滝と同じく聞いたことがあっただけで、現物を直接見るのは初めての機会になる。加えて、洞窟は穴であるのだから、あの岩の裂け目の中に入ってみることも、可能であるかもしれない。

コウモリはともかく、洞窟への興味に純朴に従ってアスリがティサを追いかけ小走りを始めれば、ラリーヤも2人に付き従う以外にないのであって、ティサを先頭にした3人は列をなして、突然動物が飛び出してこないか気をつけながら、膝丈ほどの草をかき分け進んでいった。ティサは洞窟手前の小さな台地の前までたどり着くと、ユニスのいる方へと振り返って、甲高い口笛を吹いた。

確実にユニスに向けられた通信を耳にした瞬間、アスリは自分の目先の興味だけに着目し、この裏側にあったはずのもう1つのチャンスを見過ごしてしまったことを痛感した。直前、滝を見上げて恍惚としているユニスは無防備であったのだから、逃げない洞窟は後回しにして、ユニスを捕獲してしまう方が、優先の度合いは高かったのだ。無論、今はティサにラリーヤもいるわけであって、朝のようにあまり大胆なことはできないにせよ、手早く中身の構成を確認して、できればそれを少しでも長く握りしめておけば、明日以降、ないし今日帰って以降の糧としうるはずであった。

気づきを得るのと同時にアスリもユニスの方へと振り返ると、位

置が変わったせいか、やや薄くなった虹の麓には、ユニスも犬もいなかった。だが、砂とユニスの努力の結晶まみれの布がアスリの手中にある以上、ユニスの無防備は保証されている。ユニスはこのまま、誰にも何も見せずに村まで戻れるとでも思っているのであろうか。ひとまずこの点は、挽回の余地は大いに残されている。

「これ、登れる？」

ここで、すでに洞窟の方に目をやっていたティサと、手中の布を握り直しながら洞窟に向き戻ったアスリに、背後からラリーヤが一声をかけた。ラリーヤの指摘する先は、目先の小さな台地についてである。先ほど離れた位置から見た際は、洞窟そのものへの注目と、足元の草の高さも手伝って、やや高い位置に洞窟がある印象をアスリは抱いていたが、こうして目の前にすると、洞窟の地面の高さと今アスリの立つ位置の間には、アスリの背丈よりもやや大きい高さが控えている。上背もあり筋肉質なアスリであれば、どうにか無理をすれば登れないこともないが、アスリよりも一回り低いティサは肩も治りかけであり、ラリーヤは背は同程度でも、悔しいことに胸が邪魔になるはずだ。その意味では、ティサもどうにか上りかけたところで、ラリーヤほどでないにしろ、同じところでつかえてしまうに違いない。

自らの女子としての在り様にわずかないらだちを覚えながら、何かこの上に行く術はないかと、アスリが右手の方に数歩踏み出した時、正面から見えなかった小さな台地の壁面に、東から西に上るような向きで、段のようになった岩がアスリの目に入った。

「えっ…、こっち登れそうかも。」

「ホントだ。ウソ！？自然にこんな形になるんだ…！」

「いや、これは…。」

言うより先に、アスリが草を分けてその段に向かいながら、続くティサが驚きをこめた口調でアスリの言葉に繋げたが、ラリーヤは否定的な反応を示した。一段一段が土に覆われて、草すら生えている階段に足をかけたアスリは、足を滑らせないよう、右手で無骨な壁面に直に触れたところで、ティサとラリーヤのどちらが正解であるのか、理解した。

「待って、これさ。誰かが彫ったのかも！ほら！崖は綺麗、でもこっちは壁がごつごつしてる！」

「ウソ！？こんな場所に！？」
「私も思った。えっ、待って！じゃあここ誰か住んでんの！？」
「いや、今は人はおらん！気配ないし。見えんのは知らん。」
「うわっ！！！！！」

回転の速いラリーヤの推測に、いきなり割って入ってきたのはユニスである。いくら想い人とは言えど、気配はないことを宣言する本人が、最も気配を消した状態で現れたことに腰を抜かしかけたアスリが、ほとんど上った階段で姿勢を崩しかけると、とっさに真後ろのティサがアスリの腰を押さえるように支えた。

「あっ！アスリ！大丈夫？」
「大丈夫…！」

すぐさまアスリが階段下へと視線を落とせば、まだ階段に差し掛かっていないラリーヤも目を見張っており、さらにその後ろに、両手を腰に当てたユニスが仁王立ちしていた。ユニスはどこで見つけてきたのか弁当をくるむのに使う葉を前に垂らし、草で腰に結び留めており、腰布もないのにも関わらず、随分堂々とした態度であった。犬は近くのどこかで休んでいるのであろうか。

「なんだよ！うわっって！」
「急に来るからビックリしたじゃん！危なっ！ティサいなかったら、落ちてたかもだし！」
「だってティサがこっちに獲物いるって口笛吹くから、急いで来たんじゃん。そしたら何もいねぇし。」

「えっ！私、そこにコウモリいるって思って。」
「ティサ、前一緒に行った洞窟、俺らどしてた？」

途中からユニスとやりとりしつつ、アスリに続いて洞窟の前まで登り切ったティサは、はっとしたように口元を両手で押さえた。真横のアスリは、ティサの仕草に何の見当もつかず、それはおそらく階段半ばのラリーヤも同じようであった。

「だから、いないからいいんけどさ。いるのにこんなに騒いだら、もうだいたい外に出てきちゃってるし。」

このユニスの話を聞くに、どうやら洞窟前では静かにするのが狩りのセオリーであるようである。しかし、そうであるからと言って、別にここでユニスに勝ち誇ったようにされる筋合いはアスリになく、あれほど見せまいとしていた箇所をたった1枚の葉で隠しているのであるから、ユニスの方が弱いことは決まっている。直前に驚かされて貸しができたばかりのアスリは、最後に洞窟の前に上がったラリーヤも含めて、女子3人から見下ろされる立ち位置にあることをユニスに知らしめるために、ユニスを責め立てる方向に流していった。

「…なんでもいいけど、その葉っぱ何？」
「これは、アスリ返してくれないし、しょうがないじゃん。返せよ、俺の！」
「いいじゃん、別に葉っぱあんなら。そのまま村まで帰ろうよ！」
「はっ！？ふざけんなし！」
「ってかその葉っぱ、ごはんくるむ葉っぱだよね？ユニスのおちんちん、ごはんなのー？」

これは効いた。ユニスは一瞬伏し目になり、女子たちは笑顔であ

る。さらにラリーヤが嬉しそうに続けた。

「えー？それじゃみんなでユニスのちんちん、食べちゃおっか！」
「そうだね！そろそろお昼ごはんだし、食べちゃおうよ！」
「えー、でもさっき見た時のたまたま、昔より黒っぽかったよー？おいしくなさそう！」
「うっさい！黙れ！なんだよマジで！！！」

ラリーヤの発想は素晴らしかった。ユニスは3人を見上げながらも、3人に対抗しうる言葉が見つからないようである。ただ、これに続くラリーヤの攻勢は、上部の3人、もっと言えば本人を除くアスリとティサに対しても揺らぎを与えるものであった。

「ってかユニス…、今そっから私たちこと、下から覗いてない？」
「はぁっ！？違っ！！！！！」
「ウソっ！？！？私、今日は！！」
「えっ！！！ちょっと！！！！」

思わずアスリが槍やら布袋やらユニスの布やらをその場に落として、ティサと両手を取り合って、内股になるようにしながら体を寄せ合うと、ここでなぜかユニスの方がその場で地面へとしゃがみこんでしまった。

「なんでユニスがしゃがむん！？それじゃマジで見えちゃうじゃん！！！」
「えっ！？えっ！？えっ！？」

ユニスはバカである。あれだけ運動神経も反射神経も抜群なのに、どうしてここでしゃがんでしまうのか。ユニスの動きはラリーヤも想定外であったようで、ユニスを叱りつけながら腰布の裾を掴んで

腰を落とし、それを見たアスリとティサもやっと取るべき正しい行動を把握して、取り合ったばかりの手を離し、ラリーヤと同じようにして膝を地面につけていった。
　対するユニスは葉ごしに股間を押さえながら、うろたえるように立ち上がって、3人たちに背を向けていった。アスリは、このユニスの所在ない振る舞いを見逃さなかった。角度としては見えないものとは思われるが、まさかユニスがしゃがんだところで3人分見えていて、そのせいで腫れてしまって、押さえなければいけなくなってしまったのであろうか。そうであるなら、あれほど薄い葉などユニスの硬さをもってすればすぐに持ち上がってしまうであろうし、せっかくならアスリの方から立ち上がって、もっとユニスに見せつけて、ついにこの目で葉の下から現れる現物を確認するのも、アスリにとって良い試みである。
　とは言え、今は当然、朝のようにユニスと2人きりではない。これよりユニスを茶化すと、アスリもおかしくなってしまう恐れが高まる以上、非常に悔しいが、本来この小さな台地に上った目的を果たすべく、アスリは理性で押し切りをかけていった。

「もうヘンタイのこと置いといて、洞窟入ってみようよ。」
「なんだよ！ヘンタイって！」
「うっさい！いいから私たち中入るまで、こっち見ないで！見たら殺すから！」

　アスリとしても半日の間に、同一人物に同一個所を見ろと指示した後に、見るなと指示することは初めてのことである。ともあれ、アスリが流れを決めて、ばらばらと落としてしまった手にしていた槍やらを寄せ集めて、立ち上がらずに這うようにして洞窟へと進むと、残る2人も同じようにユニスの方に尻が向けて、その尻を片手で押さえながらアスリの後に続いていった。

そうして、洞窟の真正面まで来たところで3人は立ち上がり、いざ中に入ろうというところで、先頭のアスリはわずかにためらいを覚えた。馬鹿な上に変態のどうしようもない輩ではあるが、獲物に対してのユニスの感覚は正確である。したがって、ユニスがこの洞窟には何もいないと言ったことを踏まえれば、この洞窟には何者もいない。その上、わずかに差し込む陽光が照らす先、洞窟の壁は岩の模様があるだけで、アスリの実感としても、獣のほかに、階段を組んで暮らす人の気配もない。

だが、それでもアスリはこれほど真っ暗な空間に、昼間から侵入した経験はない。

「大丈夫?私、先行こうか?」

洞窟の入り口で立ち止まってしまったアスリの心の内が伝わったのか、アスリのすぐ後ろから、ユニスとどこかの洞窟に入ったことがあるようであるティィサが、優しく声をかけた。アスリもティィサの申し出に無言で一礼するように頷くと、洞窟の入り口をティィサへと譲り、ティィサも目でアスリに返事をして、ゆっくりとその内部へと進んでいった。

このまま、アスリはラリーヤにも先を促す目配せをしたが、ラリーヤは頷いただけで中に入らず、洞窟の中に向けて小さく声をかけた。

「どう…?」

「ひんやりしてる…!真っ暗だね、全然見えないから、あんまり進めない。………ん?えっ!?これって…!」

「何!?なんかあった!?」

「なんかあった!?」

「………これ、わかる?」

洞窟の中へと差し込む外からの弱い光が差し込む先に、ティサの人差し指が照らし出された。ここまでアスリは暗がりの中ばかりに目をこらしていたが、ティサの指さす先は、岩の模様となっているところである。ティサにここまで言われては、残る2人も中に入らないわけにはいかない。アスリもラリーヤもお互いに一度目を合わせると、アスリの方から先に、その光を追うようにして、静かに中へと進んでいった。

洞窟に入って、アスリがまず感じたのは、ティサが述べた通り、すでに涼しい台地よりも感じる、さらなる冷涼さである。現状は真っ暗で得体が知れない場ではあるが、暑いのが常であるサバンナの外れにあって、この空間は爽快と言っても過言ではない。

ティサに近づきながら、アスリが続けて抱いたのは、ほんのわずかな、まさかここにこれがあるはずがないという疑念であった。ところが、徐々に指さされた先のものが何であるかが明らかになるのにしたがって、疑念は確信へと変わり、アスリが抱き始めた驚きは、一歩、また一歩と進むごとに、急激に膨張していった。

壁面にあったのは岩の模様ではなく、細かくびっしりと書き記された、文字であった。

アスリは絶句した。
今、アスリが目にすることができるのは、外から入ってくる弱い光が照らし出す、ほんの一部分である。その、ごくごくわずかに、アスリが短時間に触れ合う総量としては、過去最大に多くの文字が詰め込まれている。仮にも今、ここで明かりを灯すことが叶うのであれば、ここに書かれているどれほどの何を目にすることができるのだろうか。そこにあるであろう、まだ見えない暴力的な文量に圧倒され無言のアスリは、ティサの手元にたどり着くと、目にすることができる足元近くの壁面から全く目を逸らさないまま、即座にその前にしゃがみこみ、最優先となった興味に任せて、薄く細かな文字を舐めるように読み取り始めた。

直後にアスリが得たのは、違和感であった。これはたしかに、おおよそはロマドウでも目にすることのある文字と文体であって、アスリも声に出して読み上げようと思えば、ところどころではあっても、できるにはできる。
では、なぜところどころになってしまうのかと言えば、まず先ほどの階段の上に土が被さり、草が生えてしまうほどに経過した時間、こうやって弱いとは言え毎日陽に壁を照らされたせいで、文字そのものが色あせて、かすれてしまっている上に、書かれている文の合間合間に、知らない文字が複数挟み込まれて、その一方で必要となってくるはずの文字も、いくつか欠落しているために他ならない。
またそれだけでなく、アスリがどうにか読めても、意味を持つものに繋がらないものも多数書かれている。

「………女の、うーん、こっちは火に、骨?」

「えっ！アスリ読めんの！？」

点在して読み取れるところから声に出したアスリに、真後ろの暗闇から、ラリーヤが驚いたように声をかけた。

「いや、全然意味わかんない。なんか変じゃない？昔の言葉？ほら、これ、見たことなくない？」

「……いや、あの、私、字は全然無理。えっ、待って！ティサも読める？」

「無理無理、全然わからん。ってかアスリ、読めてんじゃん！」

「いやいや、普通に書いてあんのしか読めないって！」

「やばっ！！！字なんてママも、パパもそうだったけど、読めなかったよ！えっ、でもカインタだと…？」

「カインタも読める人なんて…、いや、アスリこの歳ですごすぎでしょ！」

薄暗い洞窟の中、降ってわいたように賞賛されたアスリは、急激に誇らしい気持ちで満たされていった。別にカインタに限らず、ロマドウも読み書きの覚束ない者は多く、たしかにアスリの父もある程度は読めても、自分の名前と数ぐらいしか書けないであろうし、ダカクは無力である。半男、半女になるとあれこれ勉強することになり、大多数の若者が最初から最後まで文字で苦戦することは、たまに帰ってくるラダンからアスリも聞かされてはいたが、いつからこの教育制度が始まったか定かではないとは言え、ダカクはさておき、父はもう少し頼もしくあってほしいところではある。

一方、今まさに壁の字を読むアスリと、他人事のように字を苦しむ者たちを見てきた話をしていたラダンが識字可能であるのは、幼いころの過ごし方と、母のサポートによるところが大きい。つい先日まで、1人のアスリは牛を放している間に悪いことばかりしようとしてはいたが、その生活の以前、ラダンや、もっと小さい頃の他

の姉たちとの日々では、そんなことなどするわけもなく、一緒に歌を歌ったり、落ちていたものでおかしなものを作ったりするほかにも、知識や計算を問うクイズも頻繁に行っており、お題となった文字を地面に書く遊びもその1つであったのであった。その上、ラダンもアスリも負けず嫌いであって、わからないものがあれば家に帰ってから母に書いてもらった文字を覚えていって、最初は上の姉たちに、次はラダンに、ないしアスリに勝つために、それぞれ若き脳にリーディングとライティングの技能を流し込んでいった経緯がある。なお、これは文字だけに留まらず、知識や計算の面についてもである。

普段、煙草をくゆらせながら他家の女と同じように働く母に、どうしてアスリたちの知識欲に応えうるだけの学があったのか、壁に書かれたこの文字のように不明点は多い。娘や息子を思って、隠れてどこかで必死に学んでいたのかもしれないし、ただアスリと似たような道を、幼い頃に歩んだだけかもしれないが、何にしても今のアスリは教育の恩恵に授かっている。とにかく、ラダンが半女になる頃には、ある程度は母とそん色ない程度に知識の継承は行われており、あわせてアスリなりの国語は完成していた。

「なんかあったんー？」

暗く顔は見えないが、お世辞抜きの賛美であることがわかるティサとラリーヤの反応を前に、わずかな間、ラダンと地面に字を書いていた日々を思い出し、懐かしさとともに初めて人生で知識が役立つ喜びをアスリが実感していると、洞窟の入り口から中をうかがうように声がかかった。逆光の中のシルエットと化したユニスの方にアスリが振り返れば、文字の受ける光量とは対照的に、ユニスの立つ側面から、あまりに眩しい緑色の台地の光景が目に入った。

「こら、ヘンタイ！覗きに来たん！？」

「違っ！なんかうっさいから見に来たんだし！」
「ホントに？だってさっき…。」
「ユニス！やばいよ！アスリやばい！字読めるって！！」
「やばくない！？」

調子づいたアスリが思わず階段の前の談義でなく、それより前の余計な話を基にした責めにまで口を滑らせそうになり、急停止したところで、ティサとラリーヤがただの牛飼いの少女であったはずのアスリに秘められていた能力を、ユニスにも展開していった。それを受けたユニスの逆光の影も、一瞬たじろぐようにした後、すぐさま洞窟の中へと進み始めた。

「えっ！？ってか、えっ！？待って、そこに字あんの！？いや、えっ！？アスリ！！！」

ここから、差し込む弱い光を使ったアスリの解読はしばらく続いた。最初はアスリが１つ読み上げる度に３人はアスリを褒め、次はこれ、その次はこれとアスリに指定をし、アスリも嬉々としてこれは何だ、これはわからないと回答していったが、何しろほぼ闇に近い中での意味不明な文章の読解は困難を極め、それでもどうにかその意味を理解しようとするアスリが徐々に集中の度合いを高めていくのとともに、その回答も歯切れが悪くなっていった。

アスリが段々静かになるにつれて、字が読めない３人にとっては、ただ横に寄り添っている意義が失われてくることになる。まず、この滝に来る最も強い目的を抱いていたティサが、大勢で盛り上がる食事の席で用を足しに行く時のように、極めて自然にアスリの元から外れようとすれば、それに続くようにして、ラリーヤも洞窟の外に抜けていった。想い人とまた２人だけになったのであるから、アスリも朝のように本能を焚きつけて良かったはずではあったが、文字にばかり気を取られているアスリに、そこまでの思考は一切生ま

れず、意気地のないユニスからアスリにちょっかいをかけることもなく、ほどなくユニスもアスリの側からは離れてしまった。

結局、アスリは目元に重さを感じるまで、ほとんど成果のない読み込みを続け、最終的に灯りがなければ埒が明かないという結論に到達した。現状でのこれ以上を断念したところで、途端に疲労を感じたアスリは、刺すような外光を受けつつ、曲がったままになりそうであった背筋を伸ばしながら洞窟の外へと出ていった。

洞窟を出た先、小さな台地からは、滝を中心とした岩崖と豊かな緑に囲まれるこの場所全体と、さらに奥のアスリたちが突っ切ってきた、いつもの赤色のサバンナの大地を一望することができた。今日の段階では壁に記されている文章の全容を掴むことは叶わなかったが、近くから遠くまで、これほどまでによく見渡せる上に、美しい滝が傍に控えているこれほどのロケーションであれば、過去何者かがここで何かをしていたとしても、全く不思議ではない。むしろ、これまでにロマドウがこの場所を発見できなかったことは、あまりに意外でもあるし、北に曰くがあり、ティサやラリーヤが実際に何か体験してしまった以上、致し方ないとも言えるところはある。

何であれ、今日アスリはこの場を先人に続いて発見し、今立つ真後ろには、もう今日は一文字も読みたくないが、心が躍るほどの興味と謎が直に置かれている。池のそばで一心不乱になって、嬉しそうに青々とした草を食み続ける牛たちを見下ろしながら、墓地にはは絶対近づかないとして、明日以降もしばらくはこの場を定点として堪能する期待を、アスリはじっくりと膨らませていった。

外の強烈な日差しに目が慣れたところで、見当たらなくなった3人と犬を探しつつ、池から南に向かって流れる浅い川までアスリが下りていくと、ちょうど南西の下流の方からティサが、アスリのいる方へと戻ってくるところであった。その腰布は、先日襲撃された時に渡河をしたラリーヤのようにずぶ濡れであり、アスリは一目でティサが一旦は乾いていた午前中の惨事の痕跡を、より丁寧に消そうとしてきたことを理解した。アスリもティサと入れ替わって、ユニスの狂気を軽く流してきても良かったが、文字に熱中する間にユニスとすっかり一体化してしまったのか、そこにはティサを気遣いながら進んできた時よりも不快感がなく、代わって感じるのは空腹だった。

「ティサ！ごはんにしようよ！」

浅い方の川の側にあった適当な岩に腰を下ろしつつ、ティサに向かってアスリが一声かければ、片手を上げたティサだけでなく、この場に来た時に登ってきた方にあった奥の藪から、急にがさがさと茂みをかきわけてラリーヤも現れて、満面の笑みで応じたのであった。その小脇には、布に目いっぱいくるまれた何かが抱えられており、アスリが解読に取り組んでいる間に、相当量の土産を採集してきたことが見て取れた。

間もなく、ティサとラリーヤもアスリの元までやって来て、その両脇を固めると、腰布もつけずにどこかをウロウロしていると思われる、あと1人は残したまま、それぞれ弁当を広げて、随分と遅い昼食の時間が始まった。昨日、ユニスが東の草原で捕まえた数羽の鳥のうち3人が持ち帰った分も、香草こそ違えどアスリ宅と同じく、

シンプルに焼いて調理されたようであり、胸肉を中心とした数切れ入ったアスリの分に対して、ティサとラリーヤは傍目に部位まではわからないが、そこに炊いた穀物が添えられていた。常温の鳥肉弁当を手早く食べ進め、腹もそれなりに膨らんできたところで、アスリは洞窟前から今いる場を見下ろしながら先ほど考えた胸の内を、ティサとラリーヤにも伝えていった。

「ねぇ、ティサもラリーヤも今日怖かっただろうし、嫌かもなんだけどさ…、ここ滝もあって、牛さんたちの草もたくさんあるし、明日もここ来ない？」

「私は全然良い！…けど、ティサは大丈夫？」

ラリーヤがティサに気を配った通り、はっきり言って今のアスリの提案は、ティサが飲むか飲まないかにかかっている。たしかにラリーヤも相当恐怖したはずではあるが、食前に藪から出てきた時の嬉しそうな表情と、ラリーヤの足元に転がされている布の中身の量を見るに、壁に書かれた文字に興味津々のアスリと同様に、本心としてはたった一度きりで良い訳がないのである。

「えっ？全然大丈夫！あっ、ただ…。」

アスリと、ラリーヤも抱いているであろう懸念をよそに、ティサが当初2人に向けた視線には恐怖はなかったが、その先で一瞬ためらうような素振りをして続けた。

「…今日みたく、お墓は寄らないよね？」

「あっ！全然全然！あっち回ったら遠回りだし、ってか、私も朝からあんだけ言ったんだし、お墓なんて用もないのに行かないから。」

あと男子1名の意見は一切聞いていないが、これで明日も決まり

だ。ラリーヤも明日が約束されて安堵し、自分が大層ひどい顔で墓地から逃げてきたことなど早くも忘れてしまったのか、途端にまたからかうようなニュアンスを込めた言葉をアスリに向けていった。

「お墓は北だけど、そっからすっごく東に来たから、ここは東。」
「えっ！ロマドウからめっちゃ北の方じゃん！」
「何言ってんの？ここは北じゃなくて東っしょ？」
「ってかアスリ、ここも北だけど平気なん？」

強引なアスリの解釈を、言い出した本人も含めた3人で笑いあい、ここからは日が傾かなければ無限に続いてしまいそうな、いつもの他愛無いお喋りが滑り出していった。この場で会話の中心となったのは、ラリーヤである。食事が済むとラリーヤは早速くるんであった布を広げて、採ってきたばかりの草を解説しつつ、今日だけでは採りきれないほど珍しい草がこの近辺にはまだまだあり、染料に限らず、薬草に香草、野菜となるものや、果物までも多数見かけたことを報告していった。やはり、温暖かつ滝から落ちる水がしぶきとなってあたりにまき散らされるこの場所は、植物の生育に理想的な環境であるようである。染物以外であれば、森の中では採集をしていたティサもプロフェッショナルであり、この話にはやや前のめりな姿勢で、空の色が少し夕方のものへと変わってきた今日はさておき、明日はラリーヤとぜひ散策したいと申し出たのであった。

話がここまで及んだところで、帰りの支度にアスリの思考が振り向けられた時、ふと、池の方からバシャバシャと、滝のものとも、牛が水を飲むものともつかない水の音が、アスリの耳に入ってきた。何か動物が出たかと槍に手をかけかけたアスリが音のする方に目をやれば、お喋りに夢中であった3人の死角となっていた位置に、伏せった犬と、その横でしゃがんで尻を丸出しにしているその主人が、何かを洗っているところであった。

脊髄反射的な本能で、股間に生える槍を洗浄していると直感し、

今であれば直接掴みきれると判断したアスリは、猛然とユニスに向かって駆け出して行った。ところが、直後にユニスは立ち上がって、背を向けたまま何かを絞る動作をすると、アスリがたどりつく前に、端正で引き締まった尻は濡れた布の向こう側へと隠されてしまった。

ここでアスリはようやく、ユニスにしてやられたことを認識した。洞窟の中で文字に熱中している間だろうか、それとも今、食事をしながらくつろいでいる時だろうか、いつ、どうやったのかは想像もつかないが、ユニスの弓に限らない狩り全般の腕前を前にすれば、気配を殺すにしろ、簡素な仕掛けを作るにしろ、アスリの監視下から外れている腰布をさらってしまうことなど、造作もないことなのである。

しくじったと舌打ちをしかけるアスリがそのままユニスに近づけば、視界に入ってきたユニスの近くの砂利の上には、首を射抜かれた小さなガゼルが１匹、すでに横たえられていた。弁当の葉で隠しただけの原始的な格好で、ユニスは今日の仕事をもうこなしてきたようである。勢いよく接近してくるアスリに気づいたであろうユニスは、濡れた腰布を固く巻きつけながら、余裕を持ってアスリの方へと振り返ると、顎でその収穫を指し、にやりと微笑みつつアスリへと声をかけた。

「それ、ヤバくね？」
「えっ？なんて？」
「いや、それ。獲ってきたやつ。」

ユニスに言われて、アスリは再度地面に転がっているガゼルをまじまじと見つめたが、これはどう見ても子どものガゼルである。いまいちユニスの意図がくみ取れないまま、アスリが再びユニスの方へ顔を上げたところで、走りこむアスリにラリーヤとともに続いて

きたティサが、ユニスに応じていった。

「うわっ！すごい、めっちゃ立派じゃん！」

「そう！ヤバいっしょ？こんなんなかなか獲れんよ？」

「えっ…？これってガゼルでしょ？なんか違うの…？」

アスリが思ったことをそのまま口に出すと、ユニスは得意げな表情になって、そのガゼルの横にしゃがんでガゼルの腹を軽く叩きつつ、続けた。

「今夜食えばアスリもわかる。こんなん1年に1回とれるかどうかよ。しかも！やべぇよここ！やっぱさっきすっげーって思ったけど、めっちゃいるし、これよりもっと良いのもいた！めっちゃいた！でさ！ってか、明日もここで良くね？明日から、まずこういうやつら食うやつ、そういうのしばらく捕まえて、そしたらこういうの増えてくるから、増えてきたら今度はこういうのを獲ってく！」

落ち着いていたように見えるユニスが、だんだん早口になる様子を踏まえるに、ラリーヤと同じく、今日だけでこの場所を相当気に入ったようである。アスリとラリーヤがティサに行ったような配慮に欠けるユニスの希望を聞く前から、明日の予定は決まっていたが、今の内容を元にすれば、ユニスは明後日以降のしばらくまでも、ここに来る気でいるようであった。

とにかく、これでラリーヤだけでなくユニスも持ち帰る品が整ったし、４人の明日以降の総意も揃った。ユニスも昼食をとり終えれば、あとは明るいうちに村に戻って、ティサにこのガゼルを手早く肉にしてもらうのが直近の優先である。食べても食べても全く減る気配のない草を腹いっぱい食し、もうこれ以上は入らないのか、腹ばいになって足をたたんでくつろいでいる牛たちを、アスリとユニ

スの指示に従う犬がどうにか立ち上がらせると、一行はここまで上ってきた方の南の急傾斜でなく、南西に流れる川に沿った緩い坂を下っていった。

川は少し行った先で、より西の方へと向かっており、途中からアスリたちは、また特筆するところもないサバンナを進むことにはなったものの、墓地を経由せずにロマドウに向かうこのルートは、滝とロマドウをほぼ直線で結んだ形であるようで、実際に村の外れにある家が見えてきたのは、アスリの想定よりもかなり早かった。やっと村まで戻ってきて、まずアスリが安堵の中に感じるのは、疲労である。今日は途中、恐怖の横やりはあったものの、総じれば充実と楽しさ、明日への期待が先行するが、たった1日の間に、あまりにいろいろと出来事が起こりすぎた。

いや、素晴らしい場所を見つけたところまではアスリとしては良く、最後の解読で残っていた体力を絞り切ってしまった。無論、ティサとラリーヤもおかしなものと接触したせいで、同じく相当参っているはずで、昼食の際にはまだあったお喋りも、今はない。残る変態は快楽を得て、あとは丸出しになってその辺をブラブラしていたのであるから、元気が有り余っていてもおかしくないはずではあるが、その横顔にもはやにやつきはなく、代わりにあったのはこめかみを流れる汗であった。ユニスの背負うガゼルは良品である以上、先日捕獲したものよりは重量もあるようである。

若い体にそれぞれ何らかの重さを携えた4人は、疲れた中にまだ残る仕事を片づけるべく、村に着いたところで二言三言交わして、ラリーヤ、ティサとユニスと犬、牛たちとアスリの3手に解散した。牛を位置に戻して帰宅したアスリは、井戸で汲んだ水でこそこそと水浴びし着替え、ついでに着ていた服まで手早く洗って、ユニスと遊んだ痕跡を水に流し切って干し、あとは母を探して仕事を手伝うこともせず、誰もいない家の中に入って寝床に転がり、あっという間に眠りへと落ちていった。

楽し気な声とともに父から肩をゆすられて、次にアスリが意識を戻した時には、すでに部屋の燭台には明かりが灯っていた。薄目で起き上がるアスリの背を抱きかかえながら、父が指さす開け放たれた戸口の先には、またしてもガゼルが1頭、暗がりに転がっていた。起き抜けの頭で、アスリはどうしてユニスが捕まえたガゼルが、そのままの形でここにあるのか理解が追い付かなかったが、父の話を聞くに、なんと今日は父もガゼルを仕留めてきたそうである。父はアスリがガゼルを見たことを確認すると、わざわざアスリを起こしたばかりであるというのに、すぐさま戸口に戻ってガゼルを背負い、調理場の方ではしゃいで母に何やら語りかけているダカクを呼びつけ、たいまつを持たせ、2人で喜びながら解体をしに出かけて行ってしまった。どうやら父は自らの久々の大成果を、ただアスリに自慢するためだけに、アスリを起こしたようである。

この時点で、すでに家の中は肉の焼ける良い匂いが立ち込めている。まだ眠気が抜けきっていないとは言え、この匂いを嗅いではアスリも調理場に出向かざるを得ない。アスリが調理場を覗けば、肉を焼き、芋を蒸かす横で、母が煙草を吸いながら休んでいるところであった。今、焼いている肉は、アスリが寝ている間にティサが捌いて持ってきてくれた、今日のユニスの方の成果であるそうである。アスリは気の赴くままに昼寝をしたが、恐ろしいものを見て、帰ってきた後まで作業するティサにとっては、かなりの労力を要したに違いない。

まもなく、手早く仕事を済ませた父とダカクも、骨のついたままの肉の塊を持って戻ってきた。もう今日は食べるだけの肉を焼いた以上、母としては後から来た肉は全て明日牛乳と一緒に配る分にしたいようであったが、父とダカクは、特に父はこの大物をどうしても母とアスリに食べさせたいようで、渋る母に肉を切り分けさせ、追加の夕食に火を入れさせていった。

案の定、この晩の食事は、誰かが家にやってきて宴会でもする日のように、翌日の昼食として包む分を除いても、４人前は優に超え、明らかに倍以上の量となった。昼食が遅く、大して腹を減らしていないアスリは、料理が出そろった時点で胃もたれしそうであったが、猟師としての誇りが回復し、数杯の祝杯で早くも完成している父は、アスリの醸し出す雰囲気など構いもせずに、３人に焼きあがったばかりの方の肉を勧め、アスリも固くしまった肉にかぶりつくほかなかった。

ただ、食べ始めてしまえば、うまいものはうまい。ガゼルの肉なのだから、潰した芋も一緒に口に含めば、慣れ親しんだ最高の味わいである。自然と笑みがこぼれるアスリと、ガツガツと勢いよく肉を食べるダカクを眺めながら、上機嫌で次の1杯を注いだ父がもう1品、付け合わせとしてこのガゼルがいかに元気がよく、捕まるのに難儀したのかを語り始めて少し経った時であった。

「えっ？」

突然、母が驚いたような声を上げて、手にする肉を大きく目を開いて見つめていた。

「ママ、どうしたの？」
「アスリ！何このお肉？」
「…ガゼルだけど？ティサもガゼルって言って置いてかんかった？」
「なんだ？そっちユニスが取った方のか？なんか変ならやめとけ、やめとけ。俺とダカクのがいっぱいあんだからさ。」

父の言う通り、何か違和感があるのであれば、食べるのはやめにするべきである。しかし、母はもう一言口に出した後も、次から次へ、止めどなく肉を頬張り続けていった。そして、口に含んだ肉を飲み込むと、父が目の前に置いていた杯に手を伸ばして、杯に残っ

ていた酒を飲み干し、晴れ渡った空に臨むかのように顔を輝かせた。

「このお肉、すっごくおいしい！！！」

この言葉を聞いて、アスリもダカクも、一旦手にしていた肉を器に戻すと、直ちにユニスが捕まえた方へと持ち替えた。手にする肉は、まだぬくもりがあるにはあるが、もう大分冷めてしまっている。冷めた分、父とダカクの方よりも硬度が増していることを見越したアスリは、やや強く歯を立たせていった。

柔らかかった。続いてアスリの口中に広がるのは、うまみである。たしかに父の捕ってきたガゼルの肉は、最高だ。だが、こちらの肉を噛むたびに広がってくるのは、幸せだ。

「えっ、やばっ……！！！」
「やばい！！！うま！！！めっちゃうま！！！父ちゃん！ユニスの肉食ってみ！！！」

アスリとダカクまでもが絶賛しては、父も食べない理由はない。父は何か怪しいものでも口にしなければならないかのように、つまみ上げた肉を検分すると、いぶかしがるように口元へと運んでいった。

「………うまい。」

ぼそりとそれだけ言って、父はユニスの捕ってきた肉を年甲斐もなくダカクのような食べ方で、勢いよく貪るようにかじりつき始めた。またしても父は、ユニスに敗北してしまった。この食べ方には、明らかにやけ食いの要素も含まれている。ただ、八つ当たりする先の肉があまりにうまい以上、父は食べれば食べるほどに悔しさも噛

みしめることになる。

「パパ、つかえちゃうよ。そんなに早く食べたら。でもユニスって、あの子ホントすごいねぇ。こんなおいしいお肉、私食べたことない！」

「アスリ！こんなうまいのどこにいたん？父ちゃん、俺らも明日そこ行こうよ！」

さすがに母は父を軽く諌めたが、それでも今の胸中の主役は明らかに目の前の非常に良質な肉とユニスである。それはもちろんダカクも同じで、父のプライドなど考慮もせず、声を弾ませながら早くも明日の自分の手柄を得る方へと向けて、アスリに声をかけた。

「ん？これねぇ、北で捕ってきたんよ。」

「ヒッ！！！」

「んっ！！うぇっほっ！！！」

アスリが北と発した直後、ダカクは嬉々として手にしていた肉を、怯えるように目の前の器へと放り投げ、父は途端にむせ返り始めてしまった。朝、北に行くことをあっさり認めた母は、この様子を見て父の心配もせずに爆笑し、その笑いにアスリもつられて腹を抱え母と顔を見合わせながら、高笑いを響かせていった。急に青い顔になったダカクは、なぜか芋ばかりをバクバクと食べだし、父もむせ終わったところで、こちらは酒ばかりである。

ここからは自然と、話題の中心はアスリが今日体験してきた出来事へと移っていった。話の前半、ユニスとの遊びを除いた墓地近くでの怪異の段では、父やダカクよりも北に対する観念が希薄な母でさえ、肉を食べるのを中止して不思議そうな顔つきで煙草をくゆらせ始め、ダカクは泉でも作りそうな表情で、目を離せばどこかに逃

げ出してしまいそうであった。心を砕かれたばかりの父はと言えば、終始うつむき加減で酒をあおってはいるが、徐々に杯を空ける間隔が短く、その手も震えていくのを見るに、どうにも本心はダカクと同じく、相当恐怖しているようである。
ただ、ティサの尊厳を保つべく大いなる尿歩も除外した後の、滝を見つけて以降の下りへと話が進めば、まだ頭の中の処理が終わらないダカクと、威厳のかけらすらなくなってしまった父以外、つまり母のみは、大層興味を持った様子でアスリに質問をつないでいった。知識欲のある母娘の話の行き着く先は、文字である。アスリも読み取れた文字やら、読み切れなかったものを手のひらになぞったりしながら、母もあの不思議な場所に思いをはせているようであった。
この、一連のアスリの報告を通じて、父と母から得られた場所そのものに対しての見解は皆無であった。ないところに加えて、父からだけは気持ち悪い場所なのであるから、もう行くなという物言いもついた。
しかし、父のこの言い分には、アスリですらわかるほどに背景の感情が透き通って見えている。また、今アスリと母の前に控えている肉は、あまりにうますぎるのであるし、恐怖さえ流れてしまえば、ダカクにしても最高の肉となることは確定している。アスリとしても、この肉が口にできるのであれば、ティサの見たような黒っぽい子どもが視界の隅に入っても致し方なく、いや、見たくはないのであるが、それ以前に、墓地など行かずに滝に行くことになるのであるから、不必要に恐れを抱く必要もない。
そしてもう1点、母だけはより合理的な視点を持ち合わせていて、霊的なふれあいがあったとしても、安全かつ、とてつもない肉を持ち帰ってきた今日と、この前命からがらアスリが帰ってきた日とで、どちらが好ましい状況となりうるか、主に父に向けて、わかりやすく簡単に説いていった。

いつもの倍以上は飲んでいるというのに、父は居心地が悪かったに違いない。父の言説はあっけなく、自身に流し込む酒と同じように母とダカクに流され言いくるめられて、明日以降の滝への訪問の懸念は、広げられていたユニスの捕ってきた肉のように、次第に消えていった。

明日からのアスリの小旅行に、打ちひしがれている最中の父と、その子分のダカクが同行すれば、捕れる肉の量は倍となる。それは2人も頭では分かってはいれども、父は絶対に自力でもっと美味な、至高のガゼルを追求するのに決まっているし、ダカクはここまでの話を聞いて、おそらく村の中でも北向きに進むことが恐ろしいはずである。アスリにしてみれば、ダカクの耳元で今日の話を囁きながら、さらに中身を丸出しにすると脅せば、おおよそ何であっても従わせられるのであるから、当面はからかうにしろ、場合によってはこの前のように風を当ててもらうにしろ、面白い使い方ができる。

ともあれ、明日も父とダカクは2人でユニスに挑もうと、どこかをさまようのであって、アスリは今日の面々と、またあの滝の下に行くのだ。食事を終え、静かな父とダカクをよそにしばらく母とおしゃべりをしたアスリは、母が片付けか何かをしに外の暗がりへと出て行ったところで、明日は洞窟の中を照らすためにも、煙草の火種を忘れず携帯することだけを自身に言い聞かせて、膨らみすぎた腹を仰向けにして、寝床に横になったのであった。

翌朝も、いつもと同じくアスリは牛の乳を搾って父とダカクを見送り、ティサとラリーヤとユニスを待って一緒に牛乳を飲んでから、北東に向けて牛たちを引き連れて出発した。昨日の帰りのルートを辿っていけば、朝の太陽の優しい光によるせいか、今朝は虹こそ出ていなかったものの、切り立った岩に囲まれて、前日と同じく大量の水を落とす滝と、その脇にある洞窟も健在であった。

　滝への到着後、早速牛たちは南に流れる浅い川に向かって行ってっていった。ユニスは何を考えているのかわからないが、浅い川を突っ切って中州に渡り、奥の深そうな方の川のへりで、何やら石を積み出している。その行動の意図をアスリは特に問うこともせず、牛たちが襲われないように見ておいてほしいということだけを伝えると、近くで火のつけやすそうな草や枯れ枝をいくらか拾って、気になって気になって仕方のない洞窟の中へと入っていった。

　朝の洞窟は陽の光がほとんど差し込んでおらず、昨日以上の闇に包まれている。普段は使うこともない煙草用の種火の入った、火が消えもしなければ燃え広がりもしないようになっている革袋を、アスリが洞窟の中で開けば、真っ暗な中に小さい点のような赤い星が、アスリの手の中で瞬いているかのようであった。その小さな光を、アスリは足元にまとめた草の上に丁寧に落として、少しずつ上がり始める見えない煙を吸い込まないようにしながら、火が大きくなるように息を吹きかけていった。

　まもなく、乾いた草の上で広がりだした火は、パチパチという音を立てて、徐々に枯れ木の方へと燃え移っていった。そして、小さかった火がたき火へと成り代わっていくのにしたがって、洞窟の中

の全貌が、アスリの前に明らかになっていった。

アスリは言葉が出なかった。洞窟に入って右手側、昨日文字の見えていたところは、明らかに人の手によってなめされた、または何かによって塗り固められた、白っぽく平らな壁である。そこに、奥から手前に、上から下まで、規則正しい間隔でびっしりと、文字が書き込まれている。

アスリの想像以上である。たしかに昨日、アスリはここにはどれほど文字が書かれているのか期待し、胸を馳せていた。ただ、まさか壁一面に、ここまでとは考えもつかなかった。そもそも上から下まで、奥から手前までである。これほど書くとなれば相当の大事業であり、まずもって何日かで仕上がるものではないし、読み上げるにしてもすぐに目を通し切れるものでない。

目の前の光景に圧倒されるアスリが一度、改めてこの場所の全体を見渡せば、洞窟そのものの広さは、アスリの自宅よりもやや狭い程度であり、洞窟の突き当りや、頭上や足元、反対側の壁は自然由来な状態で、文字が書かれているのはこの一面だけであった。それ以外は、奥の方に人の手によって運ばれてきたと思われる形の近い小さな岩が４つ置かれているだけで、ほかに人為的な創造はなかった。

実質的に空の部屋はあるが、アスリにとってこれほど濃い空間はない。一旦外に出たアスリは、やや長めの枝を1本拾ってきて、洞窟の中でその先端に火を移すと、洞窟の一番奥から文字の解読へと取り掛かっていった。

この日、アスリは昼食を摂ることすら忘れて解読に没頭した。洞窟に入ったっきり出てこないアスリを心配したティサとラリーヤとユニスが中に入ってきて、たき火を起こした直後のアスリのように驚いた後、アスリが洞窟の外に出た頃にはすでに陽は傾いており、

結局アスリの昼食はユニスの犬の胃袋へとおさまった。帰宅後も空腹など忘れたまま、アスリはかつてのように調理場で母に見てきた知らない文字を空に書いて、いくつもいくつも質問をしていったが、それらの大半は母も知らないものであった。

夜はまた、まだ保存用に燻される途上にある、ユニスが昨日捕まえてきたガゼルの肉に、別途、今日ユニスが川で捕まえた魚を食べ、母とアスリとダカクはにこやかに舌鼓を打ち、父はまたやけ食いをして酒を流し込んでいた。父も毎日ガゼルが捕れればこうはならないのかもしれないが、ユニスが異常なほどに腕が立つだけであって、毎日獲物を捕まえてこれる猟師など、ロマドウにはそもそもいない以上、プライドなど捨てやって、気を揉まなければ良いのではある。

そこからしばらく、アスリは連日昼食抜きで洞窟にこもり、犬は幾分肥え、牛も満足し、ティサもラリーヤもあれやこれやと持ち帰って、ユニスは初日に言った通り、獰猛な獣を中心に成果を挙げていった。これだけティサとラリーヤとユニスが滝の周りからいろいろともたらすのであるから、ロマドウ全体にも、採取してきたものが出回ることになる。当初こそ、北の方で獲れたものと言うだけで、誰もが気味を悪がって、アスリの家で捕れたことが明白な牛乳しか母も交換してこられなかったが、族長宅から出回るラリーヤの作った北の方角由来の染物や化粧に、まず女たちが飛びついて、次は獣の皮、その次は果物、野生野菜、肉に魚と順番にその品質の高さは村内に伝播していった。そうなるとアスリの家からももたらされる、ティサがさばいた後に半分置いていく肉のうち、さらに余ったところも人気になるし、牛乳も前よりうまくなったと評判になって、アスリの家にもあれこれと対価の物資が集まることとなった。

これがたとえば先日以来、危険の代名詞となっている南の方やカインタの近くであったなら、豊かな場所があることが分かっているのだから、猟師にしろ牧畜をする者にしろ、他家も滝の側で仕事をしたくなるはずではある。だが、残念ながらロマドウには同時にテ

ィサとラリーヤの恐怖体験も、おそらくダカクが近所の少年たちにでも漏らしたのか、いつの間にか出回っており、それがロマドウ中を2周か3周まわって、洞窟と家を行き来しているだけのアスリの耳に入る頃には、随分と尾ひれがつき、とんでもない話となっていた。故に、極めて良質なものが入手できるとしても、それは族長宅かアスリ宅を経由すれば結局もたらされるのであるから、そこから誰かが譲り受けたものを、また譲り受ければ良いのであって、誰も自ら北東を含む北には行こうとしなかった。加えて、今の点も踏まえて、どうにもアスリも含めた4人は、良く言えば勇敢、悪く言えば変わり者だと思われている節が、多少なりともあるにはあるようであった。

それでも、豊かになりながら他家に妬まれもせず、アスリたちももっと踏み込んで狂人扱いされなかったのは、落ち込む夜の続いていた父による施策があったからに他ならない。食べきれない、使い切れないほどの、普段より多くの物資が集まるようになって、父はそれで何をしたかと言えば、積極的にそれらをさらに酒へと替えていった。その上で引き換えた大量の酒で、猟師の仲間やら牛を飼う者、近所の者、仲の良い男たち、何の接点があるのかわからない者まで集めて、毎晩のように自宅の前で火を起こしては宴会をしてもてなしたのであった。

これは結局、父が自分自身を酒で慰めるだけでは、もう猟師として誇りを維持できなくなってしまったことがきっかけかもしれないが、何にしても父は何も捕まえられずに帰宅した日でも、それほど暗い顔をすることもなくなったし、気前の良い父を前にして、アスリたち一家を悪く言う者も出なかった。加えて、背後ではほぼ1日おき程度に宴会に参加する族長の根回しもあるようであり、ロマドウにやってきて日の浅いティサとラリーヤとユニスも、悪目立ちすることはなかったのであった。

さて、ひと月ほどが過ぎた。洞窟入り口から見て一番奥の、壁左上最上部からスタートを切ったアスリの壁読書も、読み取れなかった多くの文字はスキップしながら、ついに入口手前、右下最下部へと到達した。そうして、いよいよ最後の一文を、たいまつを片手に指でなぞり終えると、しびれる足でアスリは立ち上がって、ゆっくりと洞窟の外へと進んでいった。

この場所に初めて来た日以来、しばらくぶりのまだ陽が高い時間の、あまりに眩しい景色だ。とっさに目を細めたアスリの視線の先、滝には今日も小さな虹がかかっていた。

今、アスリが小さな台地の上から目にする虹は、初日のそれと同じように煌びやかで、またその近くを飛んでいる1羽だけの黒い蝶も美しい。しかし、たったひと月、アスリが洞窟にこもりきっている間に、この場所は随分とティサとラリーヤとユニスの手が入り、様変わりした。

まず滝の前の平地一面で伸び放題であった草は、池の近くを中心として、牛たちが毎日食べた分と、ティサとラリーヤがスペースを確保するのに刈り取った分で、大分落ち着いた状態となっている。さりとて、これだけ牛たちが毎日食べても、一向にサバンナ化する気配がないのであるから、おそらく今の頭数より牛が相当多くならない限り、自然の回復速度の方が優勢は保たれるだろうし、当面は草が尽きてしまうという杞憂も不要である。

その、連日のように草を食べてはくつろぎ、乳を生産している牛たちは、今は浅い川に沿って作られた簡単な柵で囲われている。別にこのようなものはあえて作らなくとも、賢い牛たちが勝手に遠くに行ってしまうことなどはない。これは毎日毎日、朝からアスリに牛の安全を任され続けていたユニスが、牛をできる限り危険に晒さないようにしながら、自らは滝の近くからどうにか外れるために考え出した工夫にあたる。

はっきり言ってこんな柵で牛たちが守り切れるとは、アスリからすれば考えられなかった。しかし、超一流の猟師をもってすれば、この柵で少しでも足止めができさえすれば十分であるのかもしれないし、アスリはあまり柵に直接触れないようにしているが、何か仕掛けが施してあるのかもしれない。一方で、枯れ木や大き目の植物が材料である柵そのものにも、短期間で作られたものとは思えない

ほどにしっかりとした、牛たちと人が出入りするための簡単な扉が取り付けられている。この仕事ぶりを見るに、万が一にもこの先、ユニスが猟師として仕事ができなくなったとしても、優秀な大工として生活することは容易であるだろう。

また、大工のユニスはこれだけでなく、中州の深い川に面した方には初日から取り組んでいた魚を取る仕掛けを、より強固に組み上げていたし、同じく中州の真ん中には、アスリが明かりをいつでも取れるように、かつまわりの緑に燃え移らないように、常に小さく火を焚く場所を用意した上に、滝のしぶきから火を守るための斜めの拭き屋根まで作っていた。このようなユニスの器用な一面もまた、アスリにとってはどうにも頼もしく、アスリを想って火を取る場を用意してくれたという行為自体も、照れくさい中に嬉しいばかりであり、読書を終えてやっと思考があちこちへと向くようになった今、改めて思うに、あの変態のことがアスリは好きである。

話を戻して、まだアスリは実際に目にしていないが、川を下っていったところにはティサが布を染めて干すための場所も整えたとのことで、そこから少し逸れたところに、ティサもユニスの捕まえてきた獲物を解体する場所も設けたそうだ。たしかに、この数日のラリーヤは、朝からロマドウで預かった布を持参して大荷物であり、反対に帰り道のユニスは、動物を丸々と一体ではなく、肉と毛皮だけを土産としていて、最初の頃よりも手軽そうにしている。最近、収集した植物や野菜、果物で帰りの荷物が多いティサと、それを手伝って同じく手が埋まっているアスリは、物資の輸送に余裕のある変態に、もっと帰りの荷物を持たせても良いかもしれない。

こうして、この場所は、ラリーヤとティサとユニスにとっての仕事場、拠点へと徐々に変わりつつある。その証の一端として、行き帰りの道中、３人とも今日はこれを、明日はこれをと次に作るもの、用意するものの話をしている。

翻って、アスリにとって、この場所とは何か。知識を追求する、研究の場だ。では、アスリはこの場に対して、また3人に対して、何の貢献をしてきたのか。

今日、アスリは全てを読み終えた。それで、何がわかったというのか。

正直に言ってアスリはあの文字の壁に、ほとんど歯が立たなかった。いや、おおまかに一部については、その文字が書かれていた目的だけは分かった。あの壁に書かれていたもののうち、だいたい3分の1程度の内容は、誰かがかつて行った占術と、その結果だ。

問題なのは、それが一体何について、どうやって占われ、どのような結果が出て、そのあと何が起きたのかまでは、アスリが一生懸命読み解き、考えても把握できなかったし、持ち帰って母に聞いても大して判明しなかったということである。当然、断片的な単語しか読み取れなかった意味不明の残る3分の2は、洞窟の中で明かりをつけてはいれども、真っ暗闇の中から一切引き上げられていない。

この経過を、アスリは3人にも日々共有していたし、半分読んだあたりから雲行きが怪しくなってきていたことも、アスリは何となく認識していた。それでも、一番最後まで目を通してみれば、もしかすると何かわかることもあるかもしれないという、たった一筋の希望をもって、3人が今日は何をやると言えば、アスリもどこまで読むと言ったし、明日はどうするかと聞かれれば、あの辺まで読みたいと言って、火を消せば単なる暗がりの壁に、明るく向かい続けてきたのであった。

ただ、それももう今日で終わりだ。わからないまま終わったのだ。これでは3人が力を尽くしている間、アスリは何もしないで過ごしたのと同じだ。

「疲れた…。」

すっかり薄暗い場所に慣れきってしまったアスリに、滝があげる水しぶきが煌めいている外の景色は眩しすぎた。アスリは再び少し戻って洞窟の入り口で腰を下ろすと、髪が地面に触れることもいとわず、その場で大の字になって転がり、上半身は洞窟の中に入れつつ、下半身は両膝を立てながら洞窟の外へと出して陽に当てて、目に入る天然の天井を見上げながら、ただただ徒労を感じるほかなかった。

あまりに無力であった。興味の対象に熱中して、行きつく先、所詮はこの程度の結果しか得られなかったのだ。背中を通して伝わってくる、いくつかの小石の刺さるような小さな痛みは、不甲斐ない自分に対して送られる、適切な罰のようである。

思えば、アスリは幼い頃から聞き分けもよく、今も優秀な牛飼いの少女であると自負しているし、罰を与えられるような筋合いはない。だから牛たちの意思もある程度わかるし、今日まで取り組んだように、文字とも向き合うことができる。唯一、ラダンと同じく、禁じられた遊びだけはどうしても完全に絶てていないが、それは昔、腰布を汚して母に指摘されて以降、誰にも見つかっていないし、ユニスと墓地の近くで行ったことや、ダカクに対しての治療もそれとは違うと、自分に言い聞かせて解決しきることができる。現に、アスリは滝に到着した初日以来、壁の文字の解読を最優先として、日々の簡単な水浴びでも本当にただ洗って終えただけで、直近に限れば罰を受けなければならない理由は、どこにも存在しない。

したがって、今、そのアスリに対して与えられている罰は、アスリが得る挫折に、直に由来している。洞窟の中の壁には、乗り越える先はないのである。でこぼことした天井をぼんやりと眺めながら、

アスリは自信までもが地面に漏出しているように感じていた。

今の疲れ切ったアスリにとって、天井を見つめているのにもかかわらず、視界の外れにどうしても入ってくる真横の文字の壁は、まるで眼前に立ちはだかっている、すでにラダンが乗り越えた壁のようでもある。なぜ、アスリはこれほど背も伸び、精一杯毎日生きているのにも関わらず、未だに半女のままなのか。その先、さらに上の姉たちのように、アスリも大人の女になれるのだろうか。いずれの壁も、アスリの理解は及ばない。

そして、将来どうにか大人の女になりえたところで、ティサとともにあらねばならないユニスは、どんなにアスリが大好きであっても、生涯を共にする相手とすることは叶わないことは、悔しさなどを抜いて、分かるには分かる。しかし、ユニスは諦めきれないし、どうやっても叶わない。やはりこれもまた、理解できない壁である。

並び立った壁の狭間、暗がりに寝転がるアスリは、漫然と罰たる弱い痛みに身をさらすほかなかった。奥で小さく強弱をつけながら燃えるたき火は、文字の側でない壁の岩肌にできた影を、わずかに揺らし続けていた。

３本の矢

「アスリ！！！大丈夫！？」

しばらくして、洞窟の外からラリーヤの驚いたような声が響いた。あちらから見ればアスリの足だけが見えているはずであるのだから、アスリが倒れていると考えたのかもしれない。不用意に心配をかけるまいと、すぐさま起き上がって外へと顔を出したアスリは、浅い川のそばで丸めた布を抱えてアスリのいる方を見つめるラリーヤに、少し大きく通るように声をかけた。

「あっ！ごめん！大丈夫！」
「ホント？無理しないでね？」
「いや、もう大丈夫、全部読んだし。」
「マジ！！！どうだった？」
「ダメ、ほとんどわかんなかった…。」
「まぁ…、ってかさ！アスリ今日は、みんなで一緒にお昼ごはん食べようよ！朝からユニスが焼いてる魚もあるから！」

だいたいひと月とは言えど、昼食を食べる習慣をないがしろにしてきた上に、自らの無力を感じる今のアスリは全く空腹でない。しかし、ラリーヤの誘いを断る理由もなく、アスリにはややもったいぶって立ち上がって、勢いなく台地のそばの階段を下りる以外、選択肢がなかった。

この直前の間に、ラリーヤの一声は、どこにいたのかわからないが、ティサとユニスにも届いたようである。ラリーヤとアスリが中州の拭き屋根で燻していた魚を火から下していると、あちらの２人は真ん中が大きく窪んでいて、それぞれ向かい合って腰掛けるのに

ちょうど良い岩の周りで、何やら持ってきたものを右に左にと動かしていて、明らかに魚の到着を待っている様子であった。

ほどなくして、やや久しぶりの４人での昼食と、ティサとラリーヤ、時折ユニスによる元気なおしゃべりが始まった。別にアスリは、ずっと読書をしていた間に３人と距離ができてしまっていたとは感じてはいなかったが、特にアスリの方から喋るほどのことはなく、にこやかに相槌を打ちながら、ここでは聞き役に回っていた。

それにしても、持参した肉と穀類を中心とした弁当に加えて、それなりの大きさの焼きたての魚が１人につき１匹ずつつけられたのだから、随分とボリュームのあるランチである。これらをアスリ以外の３人は何も躊躇せず、喋りながらテンポよく食べており、おそらく３人はアスリが欠席している間も連日弁当だけでなく、ユニスが捕まえたばかりの肉や魚も食べていたのかもしれない。

「…あっ、ファラール！」

焼きたてのうまい魚を１匹食べ、弁当の肉を少し食べた時点で、もう腹が苦しくなってきたアスリは、場の会話が途切れたところで、池のそばで静かに昼寝していた犬に向けて声をかけた。犬は、今日はアスリが弁当を広げているのを見て、帰り際に何ももらえないことを察していたのか、昼寝というよりもふて寝を決め込んでいたようでもあったが、アスリの声が届いた直後にガバリと起き上がると、尻尾を振りながら小走りでアスリの元へとすり寄ってきた。

アスリの声色とそのタイミングだけで、今呼び出された意図を理解するとは、やはり賢い犬だ。アスリは足元にやってきた犬の頭をひと撫でてすると、弁当の肉を犬の口の前へ持っていってやった。

「えっ！？アスリもう食わんの！？」

「あっ、もしかしてラリーヤ、食べたかった？」

「いや、私ももういっぱい…、じゃなくてさ！アスリ、ほとんど食べてないでしょ？」
「そんな、魚、私も1匹食べたじゃん。めっちゃおいしかった。」
「ってかアスリ、今日静かじゃない？もしかして調子悪い？」

できるだけ自然に小さく微笑んだアスリを前に、何らかの異変を感じ取ったようであるラリーヤは、アスリの方へと手を伸ばして、その額へと手を当てた。

「どう？熱ある？ラリーヤ、この前教えてくれたあの葉っぱ、私探してこよっか？」
「いや、熱ないね、けどアスリ、やせたっていうか…、ちょっとやつれた？」
「いやいや！全然ぜんぜん！ホント大丈夫だから！だって最近お昼食べてなかったし…、あんまりいっぱい食べらんなかっただけだよ。」
「ホント？なんか疲れてんじゃない？辛かったら、帰り、またユニスにおんぶしてもらったら？」
「んえっ！？」

ティサとラリーヤの母性ある対応の中、1人だけかやの外で、魚の頭の中身までどうにか食べようとしていたユニスは、ティサから突然向けられたやり水に、驚くような声を上げた。この変態は何を思い浮かべたのか。

「何？嫌なの？アスリ、キレていいんだよ？」
「いや！ホント！マジ大丈夫だから！ホント元気だからさ！」
「アレじゃん、毎日真っ暗なとこなんか、いるからよ。」
「バカ、ユニス！私ら全然読めんのに、アスリの方がすごいんだよ！」

「でも今日で読み終わったんよね？」
「ウソ！？マジで！？壁のあれ全部！？」
「えっ！？マジか！！」
「…うん。」

アスリが読了したという事実を耳にして、ティサとユニスは明らかに前のめりとなった。この先、続く問いは先ほどのラリーヤと同じく、1つしかなく、ユニスがそれを言葉にしていった。

「…なんかわかった？」
「全然ダメ。ほとんどわかんなかった。」
「えっ！占いかなんかのって…？」
「それはね、でもそんだけ。巫女様たちが占う時に使う道具の字、ママが教えてくれたから、それだけはね。ほかは最後まで読んだけど、結局何の話なんか、全然わかんなくて…。なんかごめん、みんな一生懸命働いてる間、私、牛さんたちまで任せっきりにして…、それなんに…、サイアク。」
「そんなことないし！アスリ、あそこに占いの何かが書いてあるってわかるだけで、めっちゃすごいよ！ってか、あれ普通に相当歳取ってるおじさんやおばさんでも、そこまでわかんないって！」

滝のそばの澄み渡った空気が濁りかけるのを機敏に捉えたのは、またしてもラリーヤであり、墜落しかけているアスリを必死になって引き上げようとした。だが、引力に捕らわれているアスリは、謙遜ですらなく自らを卑下し、反対に3人を持ち上げる方へと進んでいった。

「そんな…。だって、私なんかより、ラリーヤもティサもたくさんいろいろ知ってるし…。私、ラリーヤみたく綺麗な布もお化粧も作れないし、ティサみたいにお肉捌くの、なんか怖いっていうか、で

きないし。」
「…俺は？」
「ユニス！アホか！！！」

即座にティサが、真隣に座っている空気の読めないユニスの右のふとももを、思いっきりひっぱたいた。もう十分日は経っているが、こちらは襲撃のあった日にケガを負った方であり、ユニスはややオーバーに叩かれた太ももを守るよう押さえた。それでも、流れに乗るアスリの口上が次に触れるのは、ティサが阿呆だと烙印を押した、愛するユニスについてになる。

「ユニスだって…、ヘンタイだけど、すごいよね。」
「そうそう、すごいヘンタイ！」
「おいっ！」
「はっ？だってこの前そこでさ、私らの、その…、下から覗こうとしてたじゃん！」

さすがにユニスと過ごしてきた時間が長い分、直前にひっぱたいておいて、その上で責めにかかるティサの掛け合いは洗練されている。目の前でこうまでされては、自分を落としてばかりであったアスリも、ついに笑うしかなく、アスリが笑えば、バツの悪そうなユニス以外、ラリーヤもティサも同じように続いていった。

ただ、この中にあっても、ラリーヤとティサに言ったのと同様に、ユニスに対しても自らが抱く正当な評価を伝えたいという思いが、アスリの中では先行し続けていた。目の前に、早くも夫婦のようなやり取りをするティサがいるにしても、アスリにとってユニスは、初めて異性として強く惹かれた、大好きでかけがえのない、たった1人なのである。

「でもユニスもさ…、信じらんないよ。あんなに何でも捕まえちゃ

うし、パパよりすごい猟師、私見たことなかったから。矢だって、一気に3本できんじゃん、しかも全部当てちゃうしさ。」

ティサの前である以上、いや、ティサがいなかったとしても、これはアスリの本心である。したがって、ユニスに向けたごく普通の、当たり障りのない今の言葉は、飾りも少ないが偽りもなく、至極適当であるはずであった。

ところが、アスリがユニスに関する言葉を発した直後、突如としてティサの顔から笑みが消え去った。そのまま、なぜか神妙な面持ちへと切り替わったティサは、何かを思い返すようにしながら、アスリの方へと向き直っていった。

「アスリ…、それさ、この前、アレ、あの怖いの出た日、ここ来た時の。あの時も、今みたいなん、言ってたよね？」

「…へっ？」

あまりに意図の見えないティサの問いかけに、思わずアスリは上ずった声を上げてしまった。アスリが少し目線を左右させ、ユニスとラリーヤも見るに、2人もティサには乗ってこれないようである。たしかにティサの言う話を、アスリは言ったような記憶があるにはあるが、ティサがそこを経由した上で、アスリに何と言いたいのかはわからない。

一呼吸を置いて、ティサはアスリをじっと見つめると、本当に聞きたかったであろう、次の問いをつむぎだしていった。

「あのさ…、アスリ、この前もだけど、ユニスって矢が3本、一気に打てるって言ってんじゃん。あと、今日はそれ、全部当てちゃうって。」

極めて、悪い予感がする。アスリの口内は、急激にサバンナのように乾き始める。またティサが、一拍置いた。

「私それ、1回も見たことないんだけど…。いつの話?」

滝の水が落ちる音を越え、何かの鳥があげた甲高いひと鳴きが、辺りに大きく響き渡った。

「えっ…？ほら、あの…。」

アスリは詰まった。今、ゆっくりと間を取りながら、必死になってユニスとの思い出を遡っている。抽出すべき記憶は、ユニスが３本一気に矢を放った日のものだ。

ここのところ洞窟にこもりっきりだったアスリが、最近ユニスが複数矢を放つ姿を目にしたのは、たしか父とやダカクも一緒の、初めてユニスたち３人も連れて、東の草原に行った日のはずである。あの日は子どものガゼルを犬に追いかけさせながら、２本であった。それより前、ユニスをロマドウに連れてきてからは、ユニスが怪我をしていて狩りはできなかった。さらにその前は、毒で弱ったティサの面前、例の川辺の木陰で、凛々しいユニスが身を挺してアスリを守り、対峙していた相手２人を迎え撃った時で、あの時も同時に２本であった。

それ以外は、同じく川辺の木陰でユニスに初めて会って、アスリの方も見られてしまった、一番最初のあの日だ。あの日は逃げる牛を追いかける獣に、３本だった。

言えない。あとはどう思い出しても、ユニスが披露した狩りのレパートリーでしかなく、複数同時に、かつ３本の矢を放った時は、全裸のアスリが川辺で１人、母に謝罪していたあの時以外にない。

前言を訂正するか、またはごまかすか。だが、今のティサの注目は、ユニスが３本一気に矢を打てるということを２回聞いた上で、今日、そこに追加された、全て当ててしまうという情報までもとにして生じているのである。つまり、ティサは一旦はスルーして、改

めて確実にアスリが言ったところで、ついに聞いてきているのであって、言い逃れをしたところで、単に袋小路の奥へと進むことしかできないかもしれない。

「いや…、ティサ、俺が３本やるとこ、見とらんかったっけ？今やろっか？あっ、あの木！あれいく！？」

アスリが不自然に黙ってしまったのを見て、普段は気の利かないユニスもさすがに何か感づくところがあったようである。ユニスは珍しくフォローするような言葉をティサにかけると、半分に割った魚の頭を犬の鼻先に放り投げ、指をひとなめしてから、弓を手に取りかけた。

「いや、いいから。ユニスなら多分、５本でも１０本でも、やれって言われたらできるでしょ？だから今は良くて。」
「１０本は無理だろ…。」
「いや、だから、そうじゃなくて。」

ユニスは３本同時に矢は当てられるのに、直前が例外であっただけで、やはりこういう場面では、的外れなことしか言うことができない。ティサは真面目なトーンで否定すると、そのまま続けた。

「私気になったんは、いつの話ってこと。森でも私、ユニスが２本まで打つのは、何回も見てた。で、ロマドウ来てさ、そっからも私、２本の時しか見てない。でもアスリ、ユニスが３本打って、それ全部当ててんの、見たんでしょ？そんな時あった…？最初ユニス怪我してろくに動けなかったし、前の原っぱの時はだいたい私、アスリと一緒だったし。それに最近はアスリ、ずっと洞窟だったしさ。」

真っ当な論理だ。アスリの記憶とも符合する。今、アスリは何も

言っていないが、それでも勝手に退路は絶たれていく。ここではなんと答えるべきか。見れば、ラリーヤも考え込むような表情である。そのラリーヤよりも早く頭を回転させているはずであるアスリ本人は、これよりもっと渋い自分の顔を３人の面前にさらしているに違いない。

「…あっ、なんかごめん。変なかんじにして。あの、別にアスリのこと、責めてるんじゃなくて。だから今の、気にしないで！」

沈黙は、時として武器となる。アスリは意図して黙っていたわけではなかったが、今は本来、自分を卑下してバイタリティーのないアスリを立て直すための時間であったことに気づいたのか、ティサは自分でひっかきまわしてしまった空気によって、自壊してしまった。そして、急に取り繕うような笑みを浮かべると、ティサは両手で自分の顔を扇ぐような仕草を見せた。

これでひとまず、アスリは安堵して良いはずであった。

「…あのさ、今のって、アレでしょ、ティサ。」

ラリーヤだ。わずか数秒前と異なり、この顔はまずい。考え込んだ後の口元の笑み、意味するところはおそらく、思考の帰着である。

「ティサ気になってんのって、アスリとユニス、前から知り合いだったんじゃないのってことでしょ？ロマドウ来る前から。」

「…よくわかったね。」

アスリは心の中で頭を抱えた。本当は身を小さく丸めて、両手で耳をふさいでしまいたいところだ。なぜラリーヤは流れかけた話を、元に戻してしまうのか。考えられるのは、ティサが気にかけているアスリへの問いに、ラリーヤも惹かれてしまったということでしか

ない。
　とにかく、もうこれ以上無言を貫いたところで、アスリの形成が不利に傾くことは目に見えている。つまるところ、アスリが全部見せてしまったという、あの日の事実そのものを、なかったことにするしかないのである。

「いやいや、全然だし！あの時が初めてだった！矢打たれて死にそうだった時！ユニスさぁ…、だったよね？」
「…ホントに？私、ずっと不思議だったんだけどさ、私が肩に最初一発当たったじゃん。ユニス、あのあと、わりとまっすぐ、アスリ来た場所まで行ったよね？あんなとこ、今まで私行ったことなかったし、しかもぴったりアスリも来たし。あれって、なんでなん？」

　苦しい。アスリに全て向いていた焦点が、ユニスの方へも当てられた。ユニスには絶対に見たことを言わないように、アスリも釘を刺している。ユニスは、それを守り切れるのだろうか。

「そんなん…、だって！ラリーヤだって直接あそこまで来たじゃん！」
「私は森ん中逃げてたら、ファラール見っけて、それで追っかけてきたら、みんなのいたとこに出ただけだよ。」

　ユニスにしては良いすり替えだったが、ラリーヤの返しはあまりにもっともであった。アスリは食べたばかりの魚が生の魚となって、勢いよく口から飛び出してきてしまいそうであった。なぜかいつも以上に余裕のありそうなラリーヤを捉えるアスリの視界の隅では、何もいないのに小虫がぱらぱらと飛んでいるように見える。
　そのラリーヤが、口元を手で覆いながら笑みを浮かべた。何か来る。

「ってか、えっ？えっ、えー、どうしよ？」
「なになに？ラリーヤ？」
ティサも乗った。しかし、こちらは目に笑みがない。
「いやっ、アスリもユニスも違うって言うからさ…、やっぱ言わない方が良いかな？」
「…言おっか。いいから。」
「えー。良い？アスリもユニスも？」
厳しい。アスリは何も下手に言えない。ユニスも当然、同様だ。
ラリーヤの隠し玉は何なのか。
少しの間、４人の間の音が滝の水の上げるものだけになった後、ラリーヤの笑みは、悪となった。
「…じゃあ、２人ともだんまりだから、言うけどさ。あの時、私がティサおんぶしてて、アスリがユニスおんぶしてた時、私、２人の話、聞こえちゃってたんだよね。」
事実そのものは、アスリにとって目から鱗である。一方で、その流れであるのなら助かる。あの時、ユニスは固く腫れてしまったのだ。その話であれば、この場で責められ、からかわれるのはユニスだけになるし、話の進め方も変わってくるのであるから、今後はティサとラリーヤの前で失言しないように気をつけて生活すれば良いだけになる。
ところが、悪く笑うラリーヤがつなげた先は、そこではなかった。
「あの時、アスリ、ユニスにこの前のことは話すなとか、どこまで見たとか、なんか聞いてたよね？あれ、どういうことなん？」

「あああー…。」

今度は本当に、アスリは頭を抱えた。愚かであった。あの時、ユニスに小声で敷いたかん口令は、あろうことかラリーヤにも届いていたのだ。思えば、ラリーヤはあの時声が出なかっただけで、耳は正常であった。また、アスリは諸々の出来事で手一杯になっていたのだから、自分が思ったよりも小声でなかったのかもしれない。

「あとさ、ティサに言ってないかとか、言ったら殺すとか。」

詰問される側であるとは言え、アスリはラリーヤに腹が立った。聞こえていたのであれば、なぜそれをアスリに事前に教えてくれなかったのか。そして、なぜ今になって言うのか。誰に対しても配慮できるはずのラリーヤのこの開示は、果たしてティサに対しても配慮されたものであると、言えるのだろうか。それともティサを配慮するのであれば、事実を伝えることが正しいのか。何にしても今のラリーヤは、いつもの大人らしいラリーヤでなく、子どもっぽくふざけてからかってかかってくる調子の時のラリーヤである。

ただ、それより今、あれこれ余計な怒りをラリーヤに向ける以前にアスリがすべきことは、ティサへの弁解だ。何でも良いから、これも事実無根としなければならない。焦るアスリがそのことに気づいて顔を上げたのと同時に、その両肩は今のたった一瞬の間に目の前に移動して、アスリのことを見下ろしているティサによって掴まれていた。

「ねぇ、アスリ。今、ラリーヤが言ったのって本当？どういうこと

？」

美しく、恐ろしい、非常に真剣なまなざしだ。ラリーヤは、ティサに言うなと、アスリがユニスに言ったと言ったのだ。そう言ったのだからこうなるし、アスリに対して怒りを抱いて当然だ。アスリはティサの両目から目を逸らせないが、その隅の方に見えるラリーヤは、アスリにすごむティサを目にして、自分で焚きつけておきながら、もう笑みが消えかけている。もう1人の当事者であるユニスは、膝の上に両肘をついて両手を頬に当てており、腹でも下しているような表情で、アスリよりもっと奥の方を見つめている。

確実にこれから、アスリはティサに叱られる。だがしかし、アスリの予測をよそに、ティサの続ける声は怒りに満ちたものではなく、むしろ諭すような口調であった。

「ねぇ、アスリ。私、怒んないから。ホントはさ、前からユニスと、会ってたんよね…？それはもう、そうならそうなんだから、良いんだよ。私はね、あの時、襲われた時…！ユニスが死んじゃうかもって思って、ホントどうしようってところで、アスリが来てくれて、それで助けてもらった。しかも、私の命まで…。それでユニスも私も今生きてられる。アスリには、生きてる間、何十回でも、何百回でもありがとうって言わなきゃいけないし、言いたい。だから、だから…、ねぇ、お願いだから、2人とも私に隠し事なんて、しないでよ…。」

ティサの目尻から、涙が溢れた。アスリはこの涙の意味を、嫌というほど分かっている。これは、ティサにとってユニスが支柱であり、ユニスには絶対に手が届かないことを悟った、その時にアスリが流した涙だ。

今まさにティサは、ユニスが以前からアスリと結びつきがあった

ことを知った。その実際は、襲撃の日以前の1回だけ、言葉も交わさず、しかも大変情けない恰好での、触れ合いでもやり取りでもないものである。しかし、未だ隠されたままの事実は置いておいて、ここまで耳にした状況を前にすれば、ティサは反対に自分がアスリにとってのティサであると考えるはずだ。加えて、火に油を注いだ主犯は確実にラリーヤであるが、この話のそもそもの起点はティサであり、もしかするとティサは3本の矢の話以外にも、アスリとユニスの関係に、何か疑念を抱きながら暮らしていたのかもしれないし、その上でのアスリへの嫉妬もあったかもしれない。

だが、そうであった可能性があるにも関わらず、今、ティサはアスリに対して怒りや妬みよりも、感謝を優先して示して、自らは涙を流している。そして、真実だけを求めている。

「ねぇ…、だから本当のこと、教えて。ダメかな…？」

ティサの駄目を押す言葉を耳にして、アスリも落涙した。もう、これ以上、ティサの気持ちを蔑ろにすることはできない。アスリは岩に座ったまま、目の前のティサに低い位置から抱きつくと、ティサの方もアスリの頭から背中へ両手を回していった。

しばしの後、アスリがティサのふくよかな胸に預けていた額を離し、またティサを見上げれば、ティサもひどい泣き顔だ。ユニスとラリーヤは涙こそしていないものの、ユニスは眉のあたりを押さえてうつむいていて、ラリーヤは事を大きくしすぎたことを反省しているのか、明らかに自責の念がそのまま人相となっていた。

アスリは語るほかない。さすがに自慰をしていたことにまで言及したくはないが、ある程度恥ずかしい話を自らの口から伝えなければ、この場をおさめることはできない。その最中、場合によっては針の責めを受けるような行為をしていた事実を、ありのままに伝えなければならないかもしれない。

惨めだ。アスリは覚悟を固めた。

「ティサ、ごめん…私、嘘ついた。あのさ、ホントは…、あの前に、ユニスと、本当に1回だけ、1回だけ、会ってる。」

「やっぱり…。でもなんで、…アスリも泣いて。それなら、普通に言ってくれたら良かったたんに。」

「ごめん、あのさ。………恥ずかしくて。」

「アスリ！」

すぐ脇から、ユニスが向き直って驚いた声を上げた。アスリはユニスの方を一度見て、続けた。

「…いいよ、ユニス。もう超恥ずかしくて最悪だけど、言うよ。でも、ティサもラリーヤも、村のみんなには絶対言わないで。ホント恥ずかしいから。だから、あの日はユニスに、ティサには言ってないよねって言って、ほかにも言うなって言っただけ。」

ここで、アスリは一息吐いた。辺りはうるさいわけでもないのに、アスリの耳に高くキーンとした耳鳴りが響く。

「えっ…？もしかしてアスリ、それじゃユニスと…。」

「ラリーヤ、良いから。大丈夫、アスリがユニスと何あっても、私大丈夫だから…。」

ラリーヤもユニスと同じように驚いた顔でつぶやいたが、ティサはそれを自分に言い聞かせるように打ち消し、アスリに促した。アスリは地面に目を落とすと、まるで身に着けている服でも脱ぐかのように、その続きを語っていった。

「あのね…、あの毒の矢で襲われた場所、あそこって私、前からよく牛さん連れてってたんだよね。それで、いつもみたいに牛さんたちに草食べてもらって。だけど、襲われる前に1回、私が目離してた時、牛さんがなんかの動物に食べられそうになっちゃって…。私、なんもできなくて、牛さん1頭諦めなきゃダメかなって時に、川の向こうからさ、急にユニス出てきて、そこで矢、一気に3本打って…、すごくかっこよかった！！！全部当てて、助けてくれたんだよ！」

くつろいでいる牛が、鼻を鳴らす音がした。すでにあれこれ食べ終えてくつろいでいた犬は、何か虫でもついてしまったのか、後ろ足で首元をしきりにかきむしっている。

「…それ、恥ずかしいの？」

ラリーヤが、ぽつりとつぶやいた。アスリは気が乗らないが、もう少し情報を足さなければならない。

「…まぁ、そうなるよね。でも、その時…、私、ちょうど川で水浴びしてて。」
「えっ!?待って！待って！じゃあ、恥ずかしいってさ！」
「あぁー…。」
「そう…、裸だったから…。」

「うわぁ、そういうこと…。うわぁ…。ごめん、なんか私、結構勘違いしてたかも。」

ティサは右手で口元を隠すと、驚いた様子で謝罪を加えた。目撃者たるユニスは、無言の口元の前で両手を合掌し、目を閉じて眉間にしわを寄せている。思い出せばどこか固くなってしまうのだから、何か別なことでも必死に思い浮かべているのだろうか。

一方、ラリーヤは納得しきっていないのか、まだ眉の向きが中途半端に斜めである。状況を扇動しすぎたせいで、ティサとアスリを不用意に泣かせてしまってはいるが、それでも残る疑問を解消しきりたかったのか、ラリーヤは落とし穴を避けるように、ゆっくりと次の言葉を選んでいった。

「あぁー、そういうことかー…。じゃあさ、余計なお世話かもだけど…、あの、ユニス運んでる時、そのあと、どこまで見たみたいな話して、最初からとか、あとユニスに変態って言ってたのって…。」

「…そう、そうなるね。」

「えっ、でもそしたらさ、」

「ん？えっ！？ちょっ、待って待って待って！！！！」

まだラリーヤが質問を続けようとしている最中、突然ティサは割って入った上で、ユニスの方へ勢いよく顔を向けた。

「ユニス！！！今の何！？アスリのこと助ける時、偶然見ちゃったんじゃなくて、アスリが水浴びしてるとこ、ずっと覗いてたってこと！？」

「いや！！！違くて！！！」

次の瞬間、ティサは右手を大きく振り上げ、遠くに何か投げるようにその腕をスイングさせた。咄嗟に両手を自分の目の前、斜め下方に広げ切ったユニスの左頬から、一度だけ拍手したかのような乾いた音が鳴り響いた。

「いっ！！いったっ！！！！！」
「バカ！！！！！サイテー！！！！！」

ぶたれた頬を押さえるユニスに、ティサの怒号がかかる。急転直下、この場の風向きが大きく変わった。これからしばらく、強風を真正面から受けなければならないのは、ユニスの役目だ。

「そうじゃなくて！！！！！違うんだって！！！！！」
「そうじゃなくて違うんなら、じゃあ何！？アスリは最初からって、ラリーヤ言ってたんでしょ！？っていうか、アスリ！！！そうだったんだよね！？」
「ぉ…、うっ、うん。」

まだその風に乗り切れず、唖然としたままのアスリは最低限の答えしか返せなかった。それだけでなく、最終的に玉砕を迎えるにしろ、アスリの頭の中は自らの防戦に向けた対応を中心に、何を話すべきかを考えていたところであるのだ。必然的に、アスリの初動は遅れることになる。

ただ、アスリにとっても、責めを受けるユニスにとっても幸いなことに、今にも風から大嵐へとさらに勢いが増しそうなこのタイミングで、ラリーヤは静かに立ち上がると、ティサの背後から優しく両肩に手をのせていった。

「ねぇ、ティサ。ちょっと落ち着こ？」

アスリはラリーヤのその横顔にあった、疑問の斜め向きだった眉の向きが戻り、口元に何かをたくらむような笑みが浮かんだのを見逃さなかった。おそらくまだ、ラリーヤがアスリとユニスの間に抱く疑問そのものは、解決に至ってはいないはずである。しかし今、確実に別の何かが閃いて、そちらが頭の中で優先したのだ。案の定、ラリーヤが続けたのは、直前に思い描いたであろう、どこかに向けての道筋に沿っている節があるようであった。

「…ねぇ、ユニス。あとあの日のこと、もう1個、まだあるよね。」
「…………。」

来た。広げる一手だ。ユニスは何も答えられない。

「なにぃ？ユニス！？まだなんかあんの？コラッ、おいっ！！」

ティサはボルテージをもう1段上げながら、今度は岩の上に座っているユニスの左の二の腕を蹴り上げた。随分と綺麗に蹴れるものだ。

「んぐっ…。」
「ほらほら、ティサ。ユニスだけじゃなくて、ティサも怪我しちゃうから。」
「ユニス何してたの！？！？ねぇ！！！！」
「ッ！…。」
「コラッ！！！！黙んな！！！！」
「ちょっとティサ！！！…ん。あ、じゃあアスリ言ってあげなよ？」
「えっ…！！！」

急に、アスリのところに球が転がってきた。アスリとしては拾っても良いが、捌きにくい位置にある。だが、振り向きながら、アスリとユニスの間のあたりにティサの体も回したラリーヤは、わずかにためらったアスリの反応を目にして、すぐさまその球を自身で拾いにいった。

ラリーヤの表情は笑みである。ユニスに向けて、拾い上げたばかりの球を投げつけるのだろう。

「ごめんごめん！ちょっと言いにくいよね。もう私言っちゃうけど、…ね？ユニス。ユニスあの時、アスリの背中で、ちんちん固くなっちゃったんだよねー？」

「はぁあああああああああああ！？！？！？！？！？！？」

ティサがまたユニスを蹴り上げた。今度は二の腕でなく、頭に当たった。

「ティサ、危ないから！」

「いいから！あと何！？」

「…えっと、そのさ。アスリにくっついてたら、アスリのすっぽんぽん、思い出しちゃったんだよね？あっ！！！そう！あとさ！！！アスリが良い匂いだったからだ！！！ねっ！だよね？アスリー！！！」

「うっ、…うん。」

決まった。もうアスリは今日このあと、ティサに重苦しくいろいろ語る必要はないだろう。なぜなら、このあとユニスは帰るまで、場合によっては明日以降の当面まで、圧倒的な弱者であり続けるしかないからである。

そのことを示すかのように、真っ赤な顔で鼻息すら聞こえてきそうなティサが、再度大きくユニスを平手打ちし、とうとうユニスは

岩から叩き落されて、すぐ脇の地面に転がってしまった。これだけ主人がやられても、犬は腹ばいになって、素知らぬ顔で飛び交っている黒い蝶を横目で追っているのだから、犬もユニスが余程悪い何かをしでかして怒られていることを、十分に把握しているようである。

それにしてもラリーヤは、一体どれほど地獄耳であるのだろうか。その上、アスリとユニスが話していたことを、よくもこれほど子細に覚えていたものである。はっきり言って、アスリがあの日、ユニスを背負った時のことで最も頭に残っているのは、やっと今たどりついた話題である、固く腫れた槍であって、ラリーヤが声を取り戻した後の、母も交えた牛乳の会を執り行った時はまだしも、日が経った今日、ここまで当時話した内容を並べることはできない。

「このバカッ！！！バカッ！！！バカッ！！！変態！！！！！サイテー！！！！！なんなん！？！？！？マジで！！！あの時、アスリがどんだけ大変だったと思ってんの！？それなんに、ユニス！！！助けてくれた人、命の恩人！！！覗いてた時のこと思い出して、しかも…！！！何！？固くって！？！？！？マジで最低すぎる、ヘンタイ！！！」

激高するティサは、岩の真横で追い詰められてダンゴムシのように丸まっているユニスの尻の真ん中を、何度も蹴りまくっている。ここからも、本当にティサがアスリに感謝していることは伝わってくるが、そろそろ止めなければ、いくらティサの一発一発が女子らしいものであるとは言えど、ユニスは痔になってしばらく苦しまなければならないかもしれない。

ここまで厳しく折檻するのなら、ティサにはユニスに愛想を尽かしてもらって、あとはアスリがこのどうしようもない変態を将来的にを引き受け、調理しても良いのである。だが、アスリにリスペクトが向いているのと同じく、ティサもユニスが好きであるから、他

の相手にはできないであろう指導をしているはずであって、ユニスの罪状とティサにとっての愛情は、また別物なのだろう。

「ティサ、ティサ。この辺にしとこ、さすがにユニスが…。」

「…ハァッ、ハァッ、ごめん。ちょっとやりすぎた。ユニス、ユニスにごめんって言ってんじゃないかんね？アスリ、本当にごめん。このバカが、変態すぎて…。マジで最悪だったよね…。本当に、本当に、ごめん。」

急に小さな声色となったラリーヤに止められたところで、息を切らしながら首筋まで真っ赤なティサはアスリに向き直って頭を下げた。それを見て、アスリも慌てて立ち上がると、ティサの肩を前から支えて、下げた頭を上げさせようとしながら、目先で用意できうる限り、最も鎮静作用があるであろうフォローをティサへと投与していった。

「ティッ、ティサ！大丈夫、大丈夫だから。ってかティサ！ティサは全然謝る必要ないかんね？謝んないで！さっき嘘ついちゃったのは私なんだし！それに、私も、その、ラリーヤ聞いてたと思うけど、あの時もう、ユニスには怒ったから！」

「でも…、ってかユニス！ユニスも黙ってないで、謝れ、コラァッ！」

「うぐっ！！！…ごめん。」

「ちゃんとアスリの方見て言え！！！！！」

今日、文字の壁から得られた知識はない。しかし、ティサという人は、怒らせてはいけない人であるということが分かったのは、アスリにとって大きな収穫である。

すごむティサの背後で、1度目は2人を泣かせてしまい、仕切り直してユニスに何かを試みようとして、またやらかしてしまったラ

リーヤの顔は、かなり引きつっている。それでも、ティサがあまりに怒ってしまったという想定外はあったにせよ、まだ当初たくらんだ計画の範疇に現位置は留まっているのか、先ほどよりも強めにティサの肩を押さえるラリーヤは、ギリギリの笑みを保っていた。ティサの動きが肩でつく息だけとなったところで、ラリーヤは自分なりの流れへの引き戻しを図っていった。

「あの…、まぁ…、とりあえずさ。あんまユニスのこと、ボコボコにしちゃうと、あとで私らも怒られちゃうから…。ユニスにはたくさん、動物捕ってもらわないとだし、また怪我したら、しばらく狩りできなくなっちゃうし。」

「そうだけど…、このヘンタイ…!!!」

「待って待ってティサ!…でね、ちょっと私考えたんだけどさ。ユニスって、だからその、アスリに悪いけど、アスリの裸見たってことじゃん。しかも、ちょっと見ちゃったとかじゃなくて、アスリが水浴びしてるとこ、ずーっと見てたんだよね?」

「そう!アスリ!やっぱりこの変態、殺してもいいからね?」

「いやいや…!」

「ヤメロ!!!」

「ユニスはアスリに謝れッ!!!」

「いいから!!!いいから!!!で!で!ちょっと!いいからさ、でね、ちょっと私の話聞いて。ね?」

もう一度ティサを落ち着かせつつ、ティサに割り込まれたくないラリーヤは、すぐに次に向かった。

「あんね、私言いたいのは、これって不公平じゃないの、ってこと。」

これでアスリは、ラリーヤの意図を理解した。ハッとしたアスリは、思わずラリーヤに向けて、つい意味のある視線を送ってしまった。

「…どういうこと？」
「へっ…？」

頭に血が上りきっているティサは、まだそこまで思考が至っていないようである。対して、女子3人から見下ろされる姿勢のユニスもまた、猟師の何らかの勘が働いたのか、頭を押さえたまま不思議そうな声を上げて、地面に向けていた顔を急に3人の方へと持ち上げたのであった。

「だからさ、アスリは裸見られちゃってるのに、ユニスはアスリに見せてないんしょ？それなのに、この前、本当はアスリに全部見てもらわなきゃいけなかったのに、ずっと隠してて、しかも逃げちゃって。それで、ユニスはアスリにお尻と、あとたまたまちょっとだけしか見せてないんだよ？これってずるくない？」

なんと素晴らしい組み立て方であろう。理想的な提案だ。ラリーヤは今日、少女らしい一面を強く出しすぎたせいで、短い間に2度しくじった。無論、年相応であって、むしろこれまでのアスリの方こそ、気づかずにいろいろな場面で迷惑をかけてきたはずではある。しかしラリーヤは、それでそのまま1日を終えてしまうような女ではないのだ。

「えっ…？それってさ…。いやいやいやいや！！！やだよ！！！なんでそうなるん！？えぇー、いやないっしょ？えぇー！ないって！！！っていうか、やでしょ？俺脱いだら！」

飛び起きてへたりこみ、あれこれのたまう往生際の悪いユニスは、あまりに情けない。だが、この嫌がる反応は、にわかに湧きおこってきた、アスリの喉から胸の奥の方を絞り出すような、なんとも言い難いところを絶妙に刺激してくる感覚を、突き刺すように増長させてくる。

大変良い。アスリは完全に頭を切り替え終えた。今日のアスリは被害者だ。被告は目の前の変態だ。今から直ちに宴を、いや、裁判を始めて、ユニスが今のように上げてくる弁明を全て却下し、裁きにもとづいた即時の執行結果まで、全てをつぶさに見届けなければならない。早くもアスリは、本能的な期待で思わず顔をほころばせてしまいそうであったが、まずここは体の両脇で手のひらを握りこぶしに変えるに留めた。

その一方、女子３人並び立つ中、最も正義に燃えるティサは、ちょうど真ん中で正対する幼馴染の見せた振る舞いが許せなかったのか、わずかに続いた静寂の後、ゆっくりと地面に膝をつけて、ユニスとの短い距離をより狭めていった。それに呼応するように、ティサの動きから一切目を離せないユニスも、追い詰められた中でどうにか空間を確保しようとして、ティサと同速度で体を起こして、真後ろの小岩へと身を預けようとした。

直後に、ティサの小さなビンタがユニスの左頬へと入った。揃えた指で叩かれた頬を押さえたユニスは、アスリと反対側のラリーヤの足元へと顔を振り向けていった。

「バカ、ユニス。脱いで嫌か決めんの、ユニスじゃないからね？」

ティサはここまで言って、溜めた。その斜め右後ろに立ち、どのような眼でユニスを見つめているのか捉えられないアスリが、直接ユニスにもティサにも触れないようにしながら静かに腰を下ろすと、アスリの動きに合わせて、ラリーヤも同じく続いていった。

「ユニス、覚えてんの？私、あの時もう厳しくてダメで、なんも言えんかったし、ラリーヤみたいにハッキリ覚えてんじゃないけど…。あのね、私も、ラリーヤ来る前、ユニスがアスリに言ったの、これだけ、これだけ、マジでハッキリ覚えてんだかんね？」

打って変わって静かで落ち着いた口調のティサに、ユニスは落としていた目線を合わせた。アスリの位置から見えるティサの片側の瞳は、ユニスに直に意識を注ぎ込むように動かない。

「ユニスさ、私のこと助けてくれたら、何でも言うこと聞くって、アスリに約束してたよね？…私だって、ユニスの声聞こえんの、あん時もう最後だと思って、覚えてたんだからね？」

牛や犬の上げる微音すら打ち消す、滝の音だけが空間を満たした。沈黙を、勢いへと変換するティサは、最高の猟師に狙いを定め切った。

「ねぇユニス、私、アスリに助けてもらったんだよ…？アスリがお願いしたんならさ、ユニスは言うこと聞かなきゃなんだよね？」

そうである。あの日、ユニスは自らの犠牲を前提に、そんな内容を口走っていた。激怒の後、意図ある穏やかさとともにティサにこのカードを切られては、どうやったってユニスは逃げられない。無論、砂まみれの腰布を取り上げられた先日のように、また何かで気

を引いて、取り囲まれたこの状況から物理的に脱出することは、ユニスであれば容易であろう。

しかし、そうやって一時的に逃げたところで、あれほど真剣に怒っていたティサなら何度でもユニスを追及するだろうし、アスリもラリーヤもニヤニヤ笑いながら、女子だから見せられないとでも言って、ずっとユニスはからかわれることになる。かつて、母がラダンに針を刺して終わりにするか、毎日剃毛するかを迫ったのと同じく、ユニスも強い自主の心で、今アスリの要請を受けるか、以後弱き者として過ごすか、それだけなのである。

確定的なごく近い未来が、アスリには見えた。待ち望んだ何かだ。もっともダカクのそれに近いはずのそれが、実際にどうなっているかまでは、まだ見えない。それでも、もう間もなく、ユニスのまとう腰布はベールとなり、はがされることになる。

強烈だ。ひと月、アスリは性から距離を取っていた。それが急に今、全部アスリにぶつかったのだ。その全部は、全部よりも過大に多い。数少ない過去のこういう時、アスリに先にもたらされたのは、どうしようもないほどの肉体的な高まりだった。今日のこれは、またそれとは違う。怒っているのではなくても、頭にきている。これからかわいそうなことに、ユニスはアスリが望みを口にするだけで、どうとでもなってしまうのである。

背骨に沿って、心地よい鳥肌が立ち始めるのが、アスリは自分で分かる。ユニスは完全に、アスリの支配下にある。

「アスリ…、どうする？」

危機に瀕した愛する人を眺めるだけで、自己での循環を始めてしまったアスリの方に、ティサが顔を向けた。ぼんやりと、まっすぐとアスリが見つめる先で、紅潮するティサが一瞬鼻を膨らませてから口を結び直すように、ほんの少しだけ表情を変化させた。

アスリは直感した。ティサは、待っている。もっと言うのであれば、ティサも期待している。
この状況下、ティサは言わばユニスの母のように振舞って、悪事を働いたユニスを叱り、その尻拭いとして、アスリに謝罪まで行っている。それはきっと、そうしなければアスリへのユニスの無礼によって、ユニスがやっと得たロマドウでの新しい暮らしから除外されることを恐れているのかもしれないし、歪んだ大人になって欲しくないと願う、幼馴染かつ、将来の相手に対しての、親心に由来しているのかもしれない。

だが、今の笑みをかみ殺すような表情の中には、1人の少女としてのティサがいた。ティサも愛するユニスの全てを、きっと見届けたいのだ。腰布を没収され、滝まで逃げるユニスを追いかけた時、ティサは早々に息を上げて追跡から脱落したが、あの時も本当はアスリと同じく、本気でユニスの全部を見てしまいたかったのだろう。
アスリとティサは、生まれも育ちも全く違う。それでも、それぞれお互いを立て合いながら、たった1人のユニスという相手に恋し、その全てを目にすることを望んでいる。

これは、アスリの願いであり、ティサの願いでもある。アスリは改めて、明らかに怯えや後悔が心の中心にあるユニスに向き直ると、両手を地面へとつけて、ユニスから見て左手側の方から汗の流れた跡のある首筋へ、ぐっと顔を寄せていった。

ユニスの匂いがする。もう、これだけでアスリは幸せだ。顎を上げたアスリは、ユニスの左耳の真下近くに口元を近づけて、優しくつぶやきかけた。

「ねぇ、ユニス、全部見せてくれるよね?私、ユニスのかっこいい

とこ、見たい…。」

静かに鼻から大きくユニスの空気を吸い込んだアスリは、ゆっくりユニスから離れて、四つん這いから膝立ちとなって、弱るユニス全体を見下ろした。良い眺めだ。あと一押しである。

「…できそ？」

問いながらアスリがほんの少し首をかしげると、アスリの後ろで1つに束ねられた髪も揺れた。アスリを見上げていたユニスは一気に赤面し、また目をラリーヤの足元の方へ向けて、あの伏し目となった。

滝の水は、とどまることなく音を立て、流れ落ち続けている。黒い蝶が1羽、ユニスの背にする岩に斜めに立てかけていた、アスリの槍の柄に止まった。

ユニスは小さく一度、うなずいた。

連行

「アスリ、やるじゃん…。」
「…そうかな？」
　間のティサを越えて、ラリーヤの声がアスリにかかった。アスリがラリーヤに一目やれば、綺麗に口角の上がった笑みは、もはや悪いというような代物ではなく、完全にいやらしさのにじみ出るものとなっている。
　小さくアスリを賞賛したラリーヤの言葉の意味するところは何か、アスリはあまり捉えきれなかったが、直前のアスリは自身によるものと、推測されるティサによるものの２つの希望だけで突き進んでしまったとは言え、ラリーヤもここまで流れを持ってくるために努力をしていたのだから、ユニスの全部が見たかったに違いない。すでにアスリはユニスを墓地の近くで掴み、そこには1本しか備わっていないことを把握している。ただ、１本だけしかなくとも、別に食べ物を皿に載せるように取り分ける必要はないのだから、３人で揃って中身を開いてみることに問題はないはずである。
「さ！それじゃさ、ユニス！早速ぬぎぬぎしよっか？」
「ちょっ、えっ！」
　今の表情をそのまま目の前の行動でも表現するラリーヤが、言葉通りにユニスの腰布の裾に手をかけようとすると、ユニスは地面から真上に発射されたようにすぐさま立ち上がって、真後ろの岩の上へと移動し、むき出しの警戒心とともにしゃがみこんでいった。意気地のない男だ。

「何？アスリのお願いなのに、聞けないん？サイテー。ってか今、アスリにうなずいたよね？」
「ティサ！そうじゃなくて！待ってよ！待ってって！」
「やっぱ無理か…、かっこいいとこ、見せてくれないんだ。」
「いや、アスリ！そうじゃなくって！ってかなんだよ！別に裸になったたって、かっこよくなんかねぇから！」
「ダメだな、これ。ねぇ、ティサ、アスリ。私思うんだけど、多分ユニス見せてくんないよ？」
「でも、アスリが見せてって言ってんだから、見せてあげなきゃじゃん？」

現実的に、ラリーヤの言うことは正しいし、ティサもまた正しい。たしかに、このままあやふやにして流してやるのは、ここまで嫌がっているユニスにとっては救いになるかもしれない。しかし、それではティサは一生許さないだろうし、それは将来的にティサとユニスの間でしこりとなって残り続けるだろう。その結果として、いくらアスリの元にユニスが転がり込んでくる可能性が高まるのであっても、ティサにとっては全く有益にならない。

つまりこれは、最終的にティサとユニスの豊かな未来につながることであって、どうしても致し方ないことであるのだから、ユニスが自力でできないのなら、強制的に代執行するしかないのである。そのためには、ユニスに猿のごとく自由にうろちょろされないよう、ある程度の行動的な自由を制限してしまわなければならない。そして拘束そのものが難しいのであれば、第一歩としては、ユニスがどう悪あがきしても逃げ切れないところに誘導していく必要がある。幸い、こののどかな滝の近くには、１カ所、大変適した空間が用意されている。

「…ファラール！」

見せる、見せないのどうどうめぐりが今にも始まりそうな中、一手先にユニスの裸に向けて策を練り切ったアスリが、まず声をかけた先はユニス本人ではなく、仰向けで前足は両方折り曲げ、後ろ足はだらしなく広げ切り、目を閉じて気持ちよさそうに腹部を日光浴させていた、従者の方に対してであった。さすがに賢い犬も急にアスリが振り向いて声をかけた後、そのまま立ち上がって自分の方に近づいてくるとは思わなかったのか、呼び出しのかかった直後、見ている側が体を捻ってしまわないか心配になるように回転して一気に伏せり、何事かとアスリへと顔を向けた。

「ファラール、大丈夫…？あのさ、牛さんたち、何もないようにほといてくれん？なんかあったらすぐ呼んでね。」

犬は吠えもしなかったが、返事なのか鼻から勢いよく短い息を吐いて、目の前に伸ばした右前足の上へ、つまらなそうに顎を乗せた。そして牛たちのいる柵の方へ一度上目をやると、再びその両目は閉じられていった。しかし、それでも両耳は辺りをうかがうように、あちらこちらへと動き続けているのだから、どこまで何を理解しているのかわからないものの、この寝たふりのような態度は犬なりの主人たちへの配慮であり、アスリの依頼も十分に承っているのだろう。

「ファラールはおりこうさんだねー。よしよし。」

やはり立派な犬だ。思わずアスリが、牛に接する時のように犬の頭をなでてやれば、眉間にしわを寄せるようであったその瞼は、引き続き閉じられたまま、ややまどろみを伴うように柔らかくなった。

「そうだねー、こっちのおっきなワンちゃんは、アスリの言うこと聞けないのに、ファラールは偉いよねー。」

「なんだよ！」
「どうしたの？ユニスもアスリに、よしよししてもらいたくなっちゃった？それなら、かっこよくできなきゃ？」
「おいっ…！」

隙あらば、すぐさまユニスにかかっていくティサもまた、見事だ。ユニスはやや強く出ようとしたが、今は犬より立場は脆弱なのであって、何を言ってももう無駄だ。

「じゃあ良い子にできたら、あとでユニスもよしよししてあげるからね？」
「私とラリーヤもやる？」
「うっさい！！！」
「ふふふ…、ユニス、恥ずかしいね？良い子になれんのかな？…で、アスリ、どうするん？」

ラリーヤは、かなり楽し気な様子だ。気がつけば、ティサの顔にももはや怒りはないばかりか、微笑んでさえいる。

「じゃあ、ユニス。行こっか？」
「…へっ？どこに？」
「あの中。」

岩に斜めに立てかけておいた槍をアスリが手に取ると、槍の上で休んでいた黒い蝶も飛び立った。その蝶が慌てたように向かう先は、アスリが槍の穂で指し示す先と同じ、洞窟である。
アスリも先ほどティサに少量涙したが、今は楽しい。おかしな顔で汗をだらだらと流しているのは、ユニスだけだ。

「なっ、なんで…！？俺、字読めんぞ？ってか、ティサも！ラリー

ヤも読めんじゃん！」
「そうじゃなくて、ユニス、私がお願いしても逃げちゃうじゃん。でも、あの中なら、入口狭いし、行き止まりだしさ。」
「はっ！？おい！いや、マジで！？」
「じゃあ、アスリ言う通りに、ユニス行こっか？無理？お手てつなぐ？」

完全にアスリの方に気を取られてフリーになっていたユニスの右手を、すかさずティサが掴んだ。優しい声のかけ方ではあるが、ユニスに罪を償わせようというティサの意思は、一切ゆるいでいないようだ。

「なっ…！？」
「アスリ、そっちも握ってあげなよ。ユニス、やーやーしちゃうからさ。」
「しょうがないなー。はい、こっちもお手てつなぐよー？」

自分の方がユニスに近いところにいるのに、ラリーヤはアスリにユニスのもう半分を譲った。そこに大きな意図も感じなかったアスリは、ラリーヤの勧めに従って、ユニスの左手を握りしめた。

ユニスのぬくもりが、アスリの手の中に広がってくる。これまでアスリはユニスを背中越しにも触れたし、反対にユニスの背にも自らを預けた上に、例の墓地の近くでは、もっと大胆に腰布越しに掴んでしまった上に、狂気まで頂戴したのだから、ユニスと物理的な接触を行う機会は、それなりにあったはずだ。

ただ、そうであっても、手と手で直接触れ合うと、ユニスは右側でティサともつながっているのに、なぜだかユニスと1つになったかのようである。どうして愛する人の手は、これほどまでにアスリを気恥ずかしくさせてくるのであろうか。

それに加えて、あの洞窟の中でこれから、ユニスを丸裸にしてしまうのだ。一体、直接目にすることになるユニスのあの部分は、どのようになっているのであろうか。ユニスもアスリと同い年ではあるのだから、すでに発毛しているのかもしれない。だが、もしまだ成長が見られないようであれば、それを徹底的に指摘するのは、非常に興味深い試みである。また、何か生えていれば、それはそれでアスリとしてもじっくり観察して、ダカクのものとは全く異なる、ユニスの大人らしさも実感してみたいところではある。

まだ手を握りしめただけだというのにも関わらず、早くもアスリは理性が飛びそうになっている。このままでは、顔まで火照ってしまうのも時間の問題であることを認識したアスリは、あえて余裕を見せるようにしながら、先導を開始した。

「それじゃ行こうね？」

手を引くアスリに、ユニスはほんの一瞬だけ、岩のままに居続けようと足に力をこめた。ただそれも、アスリがもう一度手を引けば続かず、足元に気をつけるためだけでなく、うなだれるように頭を下に向けて、ゆっくりと岩から降りて立ち上がった。

もう、ユニスからは焦ったような弁解が聞こえてこない。いよいよユニスも観念したようだ。ユニスと手をつないでいない方に持つ槍を杖のようにしながら、アスリが移動を始めると、これから刑を受ける定めのユニスと、アスリとともに罰を与える係に就いたティサとラリーヤも続いていった。

アスリは今、自分の体中の血管が、過度に膨らんでいるように感じている。ただ、そう感じるだけであって、実際のところ本当に膨張しているのかはわからない。しかし、確かに言えることは、アスリの下腹の奥に、何らかの熱が集積しているということである。まさに目の前の状況として表現されている、弱く愛すべき現在のユニスと、ほどなくしてさらに弱体化することが決まっている至近距離の未来のユニスは、アスリの肉体と本能を、洞窟よりももっとずっと遠くの、どこかの知らない浜辺まで流していってしまおうとしている。

アスリにとって、この前墓地の近くで遊んで以来、約ひと月ぶりの性だ。もしも仮に今、ティサとラリーヤがいなければ、ユニスを握る手は絶対に離さないにしても、アスリはもう一方で手にしている槍は放りやって、すぐにでもあの中央部を刺激し、良くない方へと向きつつある心身をケアすることができる。だが、どうしても、歯を食いしばってでも、こらえなければならないこの我慢も、ラダンが体を張ってアスリに見せた教えに、忠実に従おうとする自分が清らかであるようであって、良い。

自身に対してかけている抑圧という重石は、アスリには重すぎる。こらえるアスリから滲み出るのは、奥の泉からふつふつと湧き上がってくる、温かな欲望の湯水である。短い移動であるとは言え、股下で擦れ合う2枚の大きな肉と、それらに守られる1つの粒に、普段の何倍も気を取られているアスリは、引き続いてティサとラリーヤから散々茶々を入れられているユニスと同じく、ただ黙って洞窟前の階段を上るよりほかなかった。

「じゃあ、ユニスが1番奥。私、横見てるから、アスリ真ん中おい

でよ。」
「…えっ？」

洞窟の最奥までユニスを連れてきたところで、アスリの物理的な立ち位置まで指示を出したのは、手をつなぐ隊列の後ろに続いてきたラリーヤだった。苦しさの中に快楽を見出そうと集中していたアスリは、今ここに立つまで全く気づかなかったが、アスリが読書を進めているひと月ほどの間に、3人の誰かが長い時間燃えるよう加工し、山積みにして保管していたたいまつの置き場から、ラリーヤはいつの間にか数本を取ってきていたようである。洞窟の真ん中で小さく燃える焚き火の横に、まだ火のついていないたいまつをラリーヤは転がすと、そこから2本拾って、かがんで1本ずつ先端に火を灯しながら、要領を得ずにユニスと手をつないだままのアスリに続けた。

「アスリ、いろいろ見られちゃったんだから、ユニスの全部見るなら、真ん中が良いでしょ？」
「いや、待って！」

素早く見通しを立てようとしたアスリよりも、さらに先にラリーヤを止めにかかったのは、滝の横に切り立つ崖ほどに険しい表情のユニスだ。

「いや、もうさ、いいよ。アスリには見せるよ。わかったから。アスリ…ごめん。」

ユニスの顔が、深く歪んでいく。同時に、握られたままのアスリの右手に、うつむいて曇り空となったユニスの力がこめられる。反対側のティサにも、おそらく同じだけの力が加わっているのだろう。
ちょうど、ラリーヤの手にするたいまつの1本に火がつき、洞窟

の中がやや明るくなった。謝罪のうつむき加減から角度を上げていくユニスの頬も、弱い光にあわせて、照らし出されていった。
「ただ…、ただ限、アスリはもういいけど、ティサとラリーヤまで、なんで俺が脱ぐとこ見るん？」
「なにー？それじゃ私とティサの裸んぼも見たいってことー？」
「バカッ！本当ヘンタイ！！私ら脱ぐわけないっしょ？」
ラリーヤが2本目のたいまつに火を灯して、にやりと笑みを浮かべた。ティサはやはり罵声から入ったが、こちらもアスリが当事者であった時よりかは、声のトーンに重さはない。それでも最後は否定であるのだから、当然ティサもユニスに全て見せるつもりは毛頭ないのだろう。
「違っ！！！そうじゃなくて！ティサとラリーヤは見なきゃいいじゃん！」
唯一、ユニスから視察の許可の下りたアスリからしても、あまり良いとは思えない提案だ。何が良くないかと言えば、ラリーヤのことはまず置いておいたとして、これではティサがユニスの成長過程を確認できないのである。アスリがユニスのことが大好きで、何でもかんでも全て見て、ずっと手を握り締めていたいのと同じように、反対側でユニスと将来を同伴することになるティサも同じことを考えているはずであって、ここでアスリだけが全てを見届けたとしても、それでは片手落ちでしかない。
それにティサはつい先ほど、アスリのためを思って真剣にユニスを叱ってくれた、恋敵というベクトルで捉えることなどもってのほかの、敬愛すべき友人にあたる。そのティサが望むものを、アスリだけがのうのうと眺めて喜ぶことなど、アスリの心が許すわけもない。

「ねぇ、ユニス…、私が見たいのはユニスのかっこいいとこ、全部なんだよ？そんなこと言わないでさ、かっこいいんでしょ？ティサとラリーヤにも見てもらおうよ？」
「なっ…！」

まだユニスと手をつないだままのアスリが、ラリーヤから要請のあった通りにユニスの正面の方へと回りつつ、優しい諫めの言葉を返すと、ユニスは詰まってしまった。アスリの言うところに、他意はない。しかし、徐々にアスリのもとで従順になっていくユニスを見るのも、アスリにとってなんとも言語化しにくい嬉しさがある。

「ほら、ユニス、これもアスリのお願いじゃん？ちゃんと聞いてあげなきゃだよね？」
「いや！今から1個聞くんだから、それ以外ナシ！」
「バカ、何言ってんの？アスリが良いって言うまで、ユニス何回だってアスリの言うこと聞かなきゃいけないんだかんね？ってか勝手に覗いてんのに、アスリ優しいからそれで許してもらってんだよ？」
「ぐっ…！」

アスリの真後ろで、火のついたたいまつを左右の壁に沿って1か所ずつ、地面に置きたいまつとなるように設置しているラリーヤから1本入ると、さらにティサもユニスからぐうの音が出ないように追撃をかけた。アスリがラリーヤの方に一目やると、先にたいまつを置いた自然の壁の方に続いて、文字の方の壁前でも作業を終えるところである。

洞窟の中にはこれで3か所の火が灯り、アスリが普段読書していた時よりも随分と明るくなった。これまでアスリは生きたまま燻製にならないために、真ん中の1か所のたき火のほかは、小さなたいまつ1本しか明かりをつけなかったが、ラリーヤがそこまで考慮せ

ずにつけたのであろうたいまつから上がる煙が、洞窟の奥に向けて進んでいくのを見るに、今更ながら行き止まりのように見えたこの洞窟の奥の壁には、どこかに通じている小さな風穴があることを知ったのであった。

何にしても、ユニスにとっては行き止まりであることに変わりはない。それでもユニスがどうしても突き進むのであれば、その先で待っているのは、たしかちょうど今ラリーヤがいるあたりの壁にあったはずの、裸の男を意味する単語の姿である。無論、ユニスが先に進まなくとも、壁の文字の方はユニスへと迫りつつある。かつてこの壁に文字を記した人物も、まさかこの場に文字通りに男子の裸が現れようとしていることまで、想像したのであろうか。それとも総じて意味不明の占いの一部は、これから迎えるユニスの裸体を予期していたからこそ、裸の男を壁に示したのだろうか。

アスリの頭の中で踊る裸の男の文字をよそに、作業を終えたラリーヤが立ち上がって、元々アスリのいた、ユニスから見て左側の位置へと移動してきた。それを見てアスリとティサも、ユニスとつないでいた手を、自然と放していった。

準備は整った。6つの瞳が、たった1人の男子に視線を注ぐ。

「ユニス…。」

覚悟を求めるように、ティサがユニスの名前を呼んだ。それに応じず、ただアスリよりも後ろの真ん中のたき火と目を合わせているようであるユニスは、大きく深呼吸をした。

そして、一度ゆっくり瞬きをすると、ユニスは右手で、まず左肩の上着の結び目をほどいた。最初は珍しく思えた独特の染模様とデザインの、ラリーヤの仕立てた服は、アスリもすっかり見慣れてしまったが、こうして改めて見るに、しっかりと縫い上げられた素晴

らしい品である。続いて、今度は左手で右肩の結び目をほどいてユニスが腕を下すと、その足元に向けて、ばさりと上着が落下した。

ふわりとしたユニスらしい匂いが、地面に落ちた衣服の勢いで舞い上がった。細く、非常に引き締まった、筋肉質な上半身もあらわとなった。

アスリは目を見張った。ユニスの上半身には、一切の無駄がなかった。別に、アスリはロマドウの中で上着を脱いで、汗だくで仕事をしている男たちを、父も含め過去に何度も目にしてきたのであって、胸毛やら腹毛のあるものも合わせて、男性の上半身を目にしただけでは、どうということはない。

だが、このユニスの体はどうだろうか。ダカクと同じく、首から腰布の真上までどこにも毛は生えていないものの、そこにはかぶりついたらおいしそうな、柔らかい余計な肉がどこにもなく、まるで筋肉の直上に、手足や顔よりも薄い色の皮膚と、小さく少しだけ色素の濃い2つの乳首を貼り付けただけのようである。

さすが、超一流の猟師だ。アスリが知らなかっただけで、ユニスは実のところ、どこかで毎日必死に鍛錬を積んでいるのだろうか。とにかく、この体であれば、おそらく自分の目で見ていなかったら信じることはできないであろう、例の3本同時の矢も納得ができる。

もうこの時点で、女子のようにかわいらしい顔とはあまりにもギャップのある、男らしいユニスの肩や胸、腹の筋肉に、アスリは触れてみたくて仕方がなかった。この次は、いよいよ腰布だ。先日、腰布を奪取され逃走するユニスの尻と太ももも、同様に引き締まっていた記憶がアスリにはある。とは言え、あの時は動きながらだったり、奥に初めて見る美しい滝があったりで、今、仕切り直してたき火に照らしてじっくりと、それも上から下に流れるように続けて眺めれば、確実に今日の方が美しいユニスが出てくるに違いない。

それだけでなく、これから静的に視認するのは、後ろ側からごくわずかにしか見えなかった、あの袋と、墓地の近くでアスリの手中に狂気が漏出した、中央の1本槍である。あの時握りしめた槍は固く、肉感の強い棒であった。

今、アスリはユニスに、ユニスの良さを全て見せてほしいと願い、この場がある。腰布までもほどいて、一糸まとわなくなった全ユニスには、どれほどまでに良いのであろうか。

上半身から腰布へと見つめる先を落としていたアスリが、再びユニスの顔まで視線を戻すと、真顔のユニスと両目がばっちりと合った。急に腹の中を鷲掴みにされたような苦しさを感じたアスリが、反射的に足をきつく閉じると、自らの真ん中には一番欲しい刺激が、ごく弱く伝わった。そこから立つ小さな波紋は、アスリの泉の方へも広がって、ユニスよりはずっと柔らかいであろう、自らの内太ももの高い位置は、滝の水を受けたかのように湿潤していった。

アスリはユニスを見つめ、ユニスはアスリを見つめている。この間、たき火から上がる音以外、世界中の全てが固まってしまったかのように、４人に動きはない。もしかすると、アスリがユニスから逸らせない視線の外側では、ティサとラリーヤが目だけで会話をしているのかもしれない。

「…ユニス、次。」

どうであれ、数秒を経たところで、ティサから進めの号令がかかった。ところが、それでもユニスはアスリを見つめ続けたまま、動かない。

「ユニス、ほら。」

もう一度、数秒を挟んで、急かすティサが続いた。ここでようやく、ユニスはアスリの瞳から外れてティサを一瞥すると大きくため息を吐き、うなだれながら頭を垂れ、足元なのか、それとも腰布なのか、下方を見つめたのであった。

期待のかかる次を前に、ユニスは超短期的にしか有効でない、時間遅延の策に気がついたようである。一挙手一投足が遅いユニスは、のろのろと右足を上げてゆっくりと履き物の結び目をほどいて脱ぎ、その次は左足も同じように脱いで、自分の近くに履き物を揃えていった。

牛歩に賭けたユニスの儚い挑戦は、終わった。残りはどうやっても、あと１枚しかない。ユニスはまた動きを止めた。ギャラリーの

方も、まずはユニスの自主による判断を待機することとなる。当然のように、そこに明確にいつまでという基準はなくとも、待ちうる時間は永遠ではない。故に、ユニスは自分の持ち時間を削りながら、さらに苦しい方に流されていくこととなる。

「どしたんユニス、ほら。あと1枚。」

ティサの声が、少し低くなった。アスリの方からは、急かして良いかはわからない。無言のラリーヤも、おそらくアスリと近い判断を下しているのであろう。

「…何?できんの!?」

しびれを切らしたティサの右手が、ユニスの腰布に目がけてするすると伸びていく。

「ヤメロ!!!!!」

うつむいたままのユニスは、ティサの腕を勢いよく払った。洞窟中に、ユニスの一喝が響き渡る。

「何!?ユニスがひとりで脱げないからじゃん!」
「うっさい!!!待てよ!!!」

大きな声が連続した。直後に、ユニスの両肩が小刻みに震え始めた。

「待てよ…。待って、待って…。」

鼻をすすり上げるユニスの足元の地面に、水滴は落ちなかった。

ユニスは自分と闘って、こらえている。こうまでされては、ユニスを促すアスリたちの方が悪者のようであって、ティサも勢いに任せて強引なことはできない。このままでは、せっかくユニスの全部まであと1枚であるというのにも関わらず、事態はユニスの有利で固着し、これ以上の広がりを見せられない線もありうる。

「ユニス、大丈夫だからね？」

ここで洞窟の中の誤った進行を察知し、あえてユニスに一艘の船を向けたのは、この成り行きの元来の企図者たるラリーヤであった。穏やかで落ち着いた口調でユニスに一声かけたラリーヤは、直前のティサの動きとは対照的に、ゆっくりと静かに一歩近寄ると、先ほどまでアスリが握っていたユニスの左手を取った。

「ね？大丈夫だから。」

触れられた左手を視線で経由して、斜め前のラリーヤの顔へと向けて上げられたユニスの目元は、案の定ぎりぎりの水位である。いつも以上にしおらしい動きを見せるラリーヤは、そのままユニスの左手のひらと、自らの右の手のひらを合わせて、指と指を段違いにからめあわせるように、手をつないでいった。

「ティサ、ティサもユニスのお手て、つないであげよ？」

アスリは突然、我に返った。今、ラリーヤがティサに向けて行った要請で、ラリーヤがこれからこの場をどう切り盛りしていくのか、1本の線となって予想がつながった。ラリーヤとティサがユニスの両手を塞いだら、真正面にいるアスリは何をするのか。行きつくところは1つしかない。

大役だ。この任は、責が重い。この光栄な役回りは、ティサでなくアスリが引き受けて良いものなのか。はっきり言ってアスリに自信はない。ただ、建前としてアスリが最大の被害者であり、その救済措置としてということであるのならば、後から何か問われた際にも道理は立つ。

すでにティサもアスリの予想にたどり着いているのかは、まだ不明である。それでもアスリが外にまで音が聞こえてきそうなほどに頭を急激に回転させる間に、ティサはラリーヤの勧め通りに、ユニスの右手を取っていく。

「ティサ、お手てはこういう風にしてあげよっか？反対の手だね、この方がユニス、落ち着くから。」

洞窟の中までユニスを引っ張って来た時と同じように、ティサが単純にユニスの右手を同じく右手で掴むのをラリーヤは目にすると、自分がユニスとつなぐ手を肩の位置まで引き上げた。それを見たティサも、すぐにユニスの手を右手から左手へ持ち替えて、ラリーヤがするようにつなぎ直した上で、同じように肘を曲げて、つないだ手をアスリに見せるように持ち上げていった。

これからアスリは大仕事をしなければならない以上、今はそれどころではないが、たき火に照らされる互い違いに結びついたユニスとラリーヤ、ユニスとティサの手の組み合わせは、見ているだけでユニスとの一体感が、アスリの方にまで伝わってくるようである。いつでも良いから、このつなぎ方は必ず近いうちに、ユニスと試す必要がある。

「えっ…？待ってよ？」

これからどうなるか、ユニスも理解したのだろう。今にも涙をこ

ぼしそうなユニスの不安にまみれた一声は、ラリーヤによるケアの度合いを、もう1歩先へと進ませた。

「大丈夫、ね？ユニス良い子だからね。お姉さんたちに任せようね？」

母性の塊となったラリーヤは、よりユニスの方に体の向きを変えて、空いている左手を、剥き出しとなっているユニスの胸筋へと置きやった。もう、ユニスの左肩の下あたりと、ラリーヤのふくよかな胸部は、完全に密着している。それでもラリーヤは自分でここまで持ってきたこともあってか、普段通りとは言えないにしろ、ユニスを先導する心の奥行きは、まだまだ十分に残されている様子である。

「ユニス、頑張れるでしょ？ちゃんと最後までできたら、私もよしよししてあげるから…。」

アスリは今の言葉で、完全にティサもこの先を見切っていることを察知した。ユニスを励ますメッセージを添えるティサも、もう一方のラリーヤに続く。こちらは右手をユニスから見て右側の腹筋に当てているものの、ラリーヤのものほどではないとは言え、やはりアスリよりも大きな胸を、しっかりとユニスの右の二の腕の、ラリーヤよりも低い高さのところで寄り添わせている。

ティサの表情はすでに、目元のあたりから、とろけそうになっている。この時、少し斜め向きになっているティサの鼻孔が、2度3度、わずかに開きかけたのをアスリは捉えた。

ティサは今、ユニスがすぐ真隣にいて、くっついていて幸せなのだ。それだけでなく、鼻が動いた。つまりユニスの匂いを、堪能しているのである。

なんと羨ましいことであろうか。もし、アスリが同じようにして良いのであれば、ユニスが好きである以上、おそらくティサと同じことにはなる。その点を踏まえて考えるに、ティサにも悪い習慣があるのか定かではないが、もしかするとティサの腰布の下も、アスリと同様にかなり湿って苦しくなっているのかもしれない。

「アスリ…？」

目を細めてにこやかになったティサが、ユニスの方へと頭を傾けながら、アスリに向けて満足そうに、続きを促した。

ティサは、ユニスにふさわしい。辛くなるほどに伝わってくる事実に、アスリの喉の奥からは、途端に涙が束となって目に向かいそうである。それでも、たった今、アスリのなすべきことは１つしかなく、それはアスリでしか成しえないことだ。特等席の前に立つアスリは、静かに両膝を揃えて腰を降ろし、自らの両手をユニスの腰元へと置きやって、腰布１枚を隔てた槍と相対すると、やや前に飛び出ている１点に鼻を寄せて、ティサの得る満足を少しでも得たい一心で、小さく息を吸っていった。

わずかに狂気がある。頭が下に向いたままのユニスを、アスリが下から覗き込む。

意気地のないユニスの顔があった。ユニスは先ほど外でアスリが決心を求めても、結局うなずいただけで、そのあと同意を翻すように言い訳を重ねた。それだけでなく、ひと月前の墓地の近くの時も、ユニスは漏らし、アスリが良いと許可しているのに、一切直に見られなかったのだ。

情けない。なぜ、アスリはこんなどうしようもない男子が好きな

のであろうか。
愛しているからだ。では、愛とは何か。この、目の前の、女子にしか見えないでありながら、脱げば筋骨隆々で、どんな獲物も捕らえ、矢も3本同時に放ち、ひょうひょうとしているようで頭が抜けていて、変態で、変態で、変態で、変態で、変態で、アスリまで変態にしようとする、この男子を、そして、アスリを守るために自らの肉体まで盾にする判断を瞬時に下した、この男を、アスリが愛するのはなぜか。

答えは決まった。愛しているからだ。アスリの涙は、目から落ちなかった。疼く主訴を上げる出元は、本能である。
ユニスの腰布の結び目は、いとも簡単にほどけた。アスリはまだ、その結び目だったところを手にしている。
もう一度大きく息を吸ったアスリは、口を真一文字に結んだユニスの顔を見上げた。ユニスの顎からアスリの眉間に、一滴の汗が流れ落ちた。

「…ユニスの男の子、見るね？」

ユニスが両目を、しかめるように強くつぶった。これがティサの言っていた、髪を切る時のユニスなのだろうか。
思った通り、かわいらしい。アスリは腰布を握る手を放すと同時に、目線を落とす。無情にも、腰布は洞窟の地面へ、重力に従う。

「わぁーーー！！！」

ユニスの本気

アスリは歓声を上げげた。頭上からは、アスリのものと完全に同じ、ティィサの喜びも降り注ぐ。

あった。あった。ついに、アスリはそれを目にした。見せろと言っても逃げ、迫っても渋り、どうやっても捉えられなかったユニスが、拘束の上の実力行使という北風と、ティィサとラリーヤの両胸による抱擁という太陽を前に、ようやく全てを明らかにした。

前方斜め下、アスリの胸元に先端の向くそれは、アスリがこっそりと散々思い描いてきた通り、ダカクと同じ、中央に1本と袋に包まれた2玉によって構成されている。しかし、ユニスとダカクの顔が全く違うように、目に焼き付ける真っ最中のユニスのこれらは、かなり雰囲気が異なっている。

まずこちらは、1本の付け根の部分に発毛している。短く柔らかそうな黒い直毛はまばらで、薄いアスリよりもさらに薄く、もしかするとアスリと出会った直後のあたりでは、ダカクと同じレベルであったのかもしれないし、形状を戻す治療から日も経った今であれば、ダカクが追いついてきているかもしれない。

次に目が行くのは、槍の先端で縮んでまとまっている皮膚の塊である。これは、ダカクと比較しても随分と長く、くるまれた丸い形の先に、およそアスリの人差し指の第一関節分程度の長さが余っている。この部分だけで見れば、アスリも過去数回だけ目撃した、サバンナに迷い込んできた像の鼻のようである。

この垂れ下がりは、アスリも似たようなものを有しているのであって、正直に言えばアスリは親近感を覚えている。ただ、その色味は残念ながらダカクとアスリの姉弟よりも圧倒的に薄く、伸びきっ

ている先端だけ、わずかに色素の濃さがあるものの、特に槍の中ほどは、かつて見たラダンの背中のような繊細さがあって、うっすらと細く青い血管が浮かび上がっている。また、走って逃げるユニスを真後ろから追いかける時に、すでに捉えていた袋についても、こうして改めて見れば、当たっている光がたき火と置きたいまつから届くものであるにも関わらず、ティサが黒っぽいと述べていたほど黒くはなく、むしろやや赤みを帯びていて、先端の皮と同じように、だらりと脱力している。

そして大きさや太さに関しては、槍部は真上を向いていないこの状態で、硬くなったダカクよりはややずっしりとしており、袋の中身も柔らかそうにぷっくりと膨れていて、肉々しい成長の経過があったか、ないしまだその最中にあることが見て取れる。それでも、アスリが腰布越しに触った感覚では、おおよそ1回り程度ダカクよりも大きさがあったように思えたが、それは過大評価であって、実のところは半回り弱程度というのが正しい。加えて、長さは皮膚によってかさを増している分も考慮すると、正味は子どもの作りに近いのかもしれない。

ダカクに続いて2人目の、これほどじっくりと観察する男子の生態をもとにした、2名の比較をアスリが総じると、ユニスのそれは決してつぼみとは呼べないにしても、見た目通りダカクに少し毛の生えた程度というのが、言いえる状態だというのが結論だ。明らかに大人だと断言できるほどでもないのに、つぼみのようには見えないのは、もっと幼い頃のダカクの、硬くなっていない時のものとは異なって、槍の先端から少し上のあたりに、ゆるやかに、そうでありながらはっきりと、皮越しの段差が位置していることによるだろう。これは確実に、過剰なほどにしっかりとユニスを守っている外側の皮膚のより一歩奥に、ダカクが剥き出しにしてしまいアスリが治療した、またアスリも女子であるのに同じように備えるあの1粒を、ユニスも持ち合わせていることを意味している。

「んっふっ…！」
食い入るようにユニスの宝物を見つめるアスリの真上から、ラリーヤの吹き出しかけて止めたような、中途半端な笑いがこぼれた。アスリは急に我に帰ろうとしたが、自らに意識を向ければ、頭の中は信じられないほどに沸騰している。バクバクと鳴り響く心臓の鼓動を首元で実感するアスリが、何とかラリーヤを見ようと顔を上げれば、真ん中で挟まれているユニスは、半開きの目にしかめっ面の、素晴らしい表情を浮かべている。
この顔を見ているだけで、アスリは激しく欲情してしまうというのに、下にはとんでもないものがぶら下がっているのが、現状だ。変態も極めると、人に顔を向けるだけで、周りの人々をおかしくさせる力を持ちうる。この愛する人の力強い顔は、今後の生涯に渡ってアスリは絶対に忘れないだろうし、年老いて仮にも忘れることがあるのであれば、今のうちに文字の壁の余白に、この顔を記しておきたいところではある。
さて、その両脇を固めるティサとラリーヤは、直前までユニスの肉体に置きやっていたはずの、手を握り締めていない方の手を、2人とも口元へと回して軽く押さえている。しかし、左右で反対になっているだけの、手で口を隠そうとしている2人の顔は、どちらも満面の笑みがこぼれてしまっているというのに、ユニスとダカクほどに、あまりに違っている。ティサに関して、こちらはおそらくアスリの鏡で、顔中すべてがユニスに向ける自身の性であり、歓喜の中にはいやらしさが多分に含まれていて、ティサがおそらく感じているであろう疼きは、そのままアスリの腹の奥にも連動して伝わってくる気配すらある。
その一方で、おかしな笑いをしたラリーヤには、ティサとアスリが一面のユニスに狂わされているような様子はなく、笑った意味そ

のものには、どういう訳か、嘲りすらあるようにも見える。頭から湯気でも上がりそうなアスリが、ラリーヤの意図を読みとるよりも早く、ラリーヤは目の前の光景へ、感想を続けていった。

「ちっさ！」

アスリは頭蓋骨が外れて、真後ろに脳を落としそうになった。なんということであろうか。

とっさにアスリは、少しだけ毛の生えたユニスの槍に再び目を向けた。今、アスリの目の前にあるこれは、ダカクよりは少し大きい。しかし、それはたかだかダカクと比べて、ということである。ダカクなどアスリと2歳しか違わないのに、まだまだ背も低く、近所の子どもたちを引き連れて、未だによくわからない遊びを全力で楽しんでいる男児なのであって、抜けている変態であるとは言え、それより圧倒的に落ち着いているユニスが、本来同列に並んで比べられるべきでないことなど、明らかであったのだ。

加えて、ユニスの全身は引き締まっていて、アスリに対して男性性を強く訴求してくるのに、この部分のサイズ感は全体として見た時に、あまりに迫力がないとしか言いようがない。アスリは顔の前に全てこれが広がっているから、この木しか見えなかったが、上から見下ろすラリーヤの目線からは、わずかな草しか生えていない森を、広く見通せていたことになる。無論、ティサも本来はラリーヤと同じく空を飛ぶ鳥のように、ちっぽけなユニスを俯瞰できるはずであるが、あれほど嬉しそうな顔なら、小さいかどうかよりも、アスリのように1本の木を見ることに集中してしまったに違いない。

客観的な視点をラリーヤから与えられたアスリは、笑うしかなかった。アスリが笑えば、ラリーヤも大きく笑い声をあげ、ティサもアスリの境地に達したのか笑って、洞窟の中には女子3人の笑い声

が協奏していった。

当然、ユニスはじっとしていられないことになる。少しでもしゃがみこもうとユニスは両足に力を込め、左右から掴まれたままの両手もほどこうと、頭を振って暴れるも、ユニスの背後はどんなに下がっても洞窟の壁であって、これ以上は腰を引くことはできない。そうなると次は足がじたばた動き出すが、こちらは真正面のアスリがユニスの両太ももを壁に押さえつけてしまうことになる。最終的にユニスが大きく跳ね回らせることができるのは、アスリの顔の前で上下左右に大きく揺れる1点だけになって、さらに女子たちの爆笑は増幅されていった。

「やっばぁい！！！すっごいぷるんぷるんしてる！ちょっ！顔に当たる！！！」

「やばぁ！！！ほら、アスリ！もっと見ちゃえ！あっ！！！ティサに！！！」

「やだぁ！こっちも当たりそう！ヘンターイ！！！」

「うっさい！ってか！！！もうみんな見たんだから、もう終わり！ヤメロ！！！」

「ユニス、ちゃんとお毛けも生えたんだね！昔みたいに、まだつるつるかと思った！でも先っちょのとこ…ん、あれ！？待って！待って！えっ！？待って！！」

突如、ティサが全体に静止をかける声を上げた。この瞬間、アスリも何かに気づき、目を見張った。

「上向きになってきてる！！！」

歓声にも似た、ティサの驚きの声が上がった。こうして揺らしている間に、ユニスは腫れてしまっていたのだ。指摘を受けたユニス

の腰は、途端に激しい動きを一切止めた。ユニスが深く吐き出した息が、頭上からアスリの首筋へと降りかかる。

「わぁー！！！」

開帳時と同じく、嬉しい悲鳴が洞窟に広がった。今度はアスリとティサだけでなく、ラリーヤも重ねた。

笑い声は注目へと変化して、地面と平行の高さまで持ち上がっていく1本に集まっていく。またしても、ユニスの深呼吸がアスリにかかる。こわばるユニスの両太ももを押さえるアスリの両手の中には、脱出のためのものとは異なる力が強く伝わってくる。

今、ユニスは腫れを抑えるために、何か全く別のことを意識しているのかもしれない。だが、アスリの目の前では、ユニスの鼓動が目視できていて、その1回ごとに合わせて、角度は洞窟の天井の方へと向かいつつある。

「えっ？えっ！？どゆことなん？ねぇ、ユニス！」
「うっさい！！！いいから！ちょっと黙って！！！」

膨らんでいくユニスを前にして、ティサの声には興味が乗り切っている。ユニスの小槍は、さらに上を目指して、持ち上がっていく。

「えっ、ティサ、ユニスがこうなっちゃったとこ、見たことなかったの？」
「ないに決まってんじゃん！嘘！？ラリーヤはユニスの…！？」
「私だってユニスのなんか！」
「えっ！？待って！待って！さっき言ってた、アスリの背中で固くって…！」

何かに気づいたのであろうティサが、言葉を区切った。それに合

わせるかのように、ユニスの皮先も、へその真下のすぐ前の、到達可能な最も高い地点へと到達した。

「こういう風になっちゃったってこと…？」

ティサが耽美につぶやいた。アスリは初めて、本気になったユニスを目撃した。

あと1枚

これが、アスリの背中に当たり、墓地の近くで暴発した、あの1本槍だ。なんとまっすぐで、素直なのであろうか。
この1本の頂上で余っている皮膚のだぶつきは、直前よりも幾分減っているかのようにも思えるが、形状自体は治療後のダカクのそれと同じであり、弛緩してアスリの胸元の方を向いていた時と比べても、大きさや太さの面で、膨らんだ量はそれほど多くはなく、やはり厚めの腰布1枚で全体をくるんで、それでちょうど先日アスリが握りしめた時の大きさと均等になる。しかし、全身に向けて血液を送り出すかのように、1拍1拍を刻みながら小さく揺れるその様子から、アスリが掴んだ時と同じく、その強固となった硬度と、やけどしそうなほどの熱さは、ユニスの太ももに触れる両手の中にまで伝わってきそうであった。

またしてもアスリは、森全体が見渡せなくなってしまった。今度の観察の対象は、木の反対側だ。文字の解読の時の、何倍も真剣なまなざしとなったアスリは、腫れ物の裏に引かれた、袋の真ん中から先端の皮膚までに向けて、縫った跡のように途中少し蛇行しながら続く、わずかに色濃い線を一生懸命見つめていった。
「んふふ…、おっきくなったけど、かわいいまんまだね。すっごい皮。ってか、脱いだ時から、ちょっと膨らんでた？」
「うっさい！！！だからもう見んな！」
からかう調子のラリーヤと、恥ずかしさのにじみ出るユニスの声が下りてくる。良い。そろそろアスリも、何か茶々を入れてやりたいところだ。

「え、待って…。それじゃ、何？ユニス今、アスリのその、裸、思い出してるってこと？」
「違っ！！」

対して、ティサからかかる声から、目の前に珍しいものがある分、もはや脅しにかかるような方向性をアスリは感じないが、この状況に陥ったそもそもの源流の議論に立ち返ることにつながる以上、やや低い。ただ、今はおそらく、ユニスはアスリの裸を思い出しているのではないだろうことは、アスリには分かる。
もちろん、ユニスは呆れるほどの変態であるのだから、多少はアスリの裸を思い出していても、何らおかしくはないのであって、それはそれでアスリの方も、耐え難い羞恥を煮立っている頭の中に加えて、さらに味わい深くすることができる。だが、ここでユニスが腫れあがらせてしまった原因は、十中八九、両脇から４つの乳房がユニスを圧迫しているせいだと考えるのが賢明だろう。あの墓地に向かう最中、地面に軽く砂を集めた程度のアスリの２つの膨らみが背中に触れただけで、ユニスの腰布の中身は、目の前で真上を向くこれと同様になってしまったのだ。立派なティサと、それよりもっと立派に発達しているラリーヤに挟まれては、どうなろうにも、こういう風になってしまうのが既定路線なのである。

「それさ、多分…。」

相変わらずビクビクしているユニスの１本から目を離さないまま、ぼんやりとその理由に触れかけたところで、この話の先に続くものが何であるかに気づいたアスリは、しゃべりかけたところで唾とともに、出かけた言葉を飲み込んだ。まだ墓地で何があったかまでは、ティサとラリーヤには伝えていないのだ。
面倒は避けておくに越したことはない。取り繕うようなこともせ

ず、平然と別な何かに気を取られたかのように装うアスリは、見ている方まで恥ずかしくなってくる顔のユニスでなく、両サイドのティサとラリーヤに主に注目するようにしながら、続けていった。
「あ！ってかさ！ユニス全部できたし、2人ともユニスのこと、よしよししてあげたら？」
「アスリ、良いの？この変態、今もまだアスリのこと思い出してるかもなんだよ？」
「だから！違うって！」
「じゃあこのピンピンなの、何なの？」

やりとりの1つ1つが、アスリにとって重量感がある。今は全てが性だ。ティサも声を低くするほどの怒りは顔面にはなく、たき火や置きたいまつの光を受け、背後の壁に映る頭の影のように、ちらちらとアスリに近い欲望が揺れ動いているようである。
ところがもう一方では、ラリーヤの両方の口角が、急に持ち上がっていった。また、ラリーヤが閃いた。
「まぁちょっと…、まだよしよしは早いかな？あと1枚、最後に脱がなきゃ、ね？」
「はっ…！？」

来た。しかし、おかしな返事をしたユニスと同様に、アスリはまだラリーヤが何を言いたいのか、把握できない。
「だから、もう1枚、まだ脱げるよね？」
「いや、俺もう裸なんだから…。」
「アスリ見たいん、ユニスの全部でしょ？まだユニス、全部見せてないじゃん。」

激しい動悸がする。ここまできても、ラリーヤははっきりとしたことを述べていないが、アスリは何かを察しつつある。

「えっ？ユニスの髪の毛、ほどういちゃうってこと？多分、禿げてないよ。」

「多分じゃなくて、禿げてねぇから！」

「そうじゃなくて、こっ…！」

ティサの顔に集まっている場の視線を、ラリーヤがまた中央の塔へと戻そうと、ユニスと手をつないでいない左手の人差し指で1点を指し示そうとしたところで、ラリーヤが停止した。とっさにアスリも、ラリーヤが指示しようとした箇所に目を向けていく。

「うわぁ！！！」

シンプルに驚くアスリの前では、真上に伸びるユニスの固そうな槍の最先端の、しわになっている皮膚の塊から、透明で粘度を帯びた唾液が流れ出ていた。そしてそれは、地面に落ち切りもせず、枯れ木からぶら下がるツタのように、ユニスの硬い部分と同じほどの長さで留まって、主の鼓動に従って、小さく振動していた。

前にアスリが握りしめた時も、手中にした段階でユニスはかなり湿っていた。今日は、湿る前に何がどのようになるのか、アスリはまた1つ、男子の生態に関して学習を進めることができた。

「えっ…？ちょっ、これ…。えっ？待って？おしっこ…？」

アスリに続いて、ティサも一歩引くような不思議がる声を上げた。この様子を見るに、ティサはこの正体にはあまり見当がついていないのかもしれない。そうは言えども、アスリも自分の泉を起点に物事を考えているのであって、それがいつ湧き上がってくるかは知っ

てはいようと、そもそも地下水が何であるのかまでは理解は及ばない。

「ユニス、お漏らししちゃったねぇ、恥ずかしいねぇ？」
「違っ！漏らしてねぇし！」
「だって、ちんちんがえーんって泣いちゃってるよ？」
「うっさい！！！見んな！！！」

アスリまで下から泣き出してしまいそうになる、ラリーヤの暴力的な続け方を前に、ユニスもまともに返答することはできない。また力をこめてユニスが足を閉じるようにしながら踏ん張らせると、とろりと糸を引くようにしながら、ユニスに由来する水は地面に向けて滴っていった。それでもその1回で全量をふるいきることはできず、水の出る音でもしてきそうな皮の真ん中からは続く残りは、ユニスの付け根のあたりへと着陸したのであった。

「それじゃアスリ、最後脱がせてあげようね？アスリに会いたくて、泣いちゃってるみたいだし。」
「はっ！？」

ユニスの抜けるような声など構うことなく、改めてラリーヤは、今度こそしっかりと左手の人差し指を伸ばしきっていく。その向く先はやはり、相当水っぽくなってしまっている、ユニスの一番先に他ならない。

つまり、ラリーヤが意味するところは、たった1つである。それは、今からユニスの中に入っている大粒を、女子たち3人の目の前で、剥き出しにしてしまおうということだ。

大変なことになった。これからアスリは、以前ダカクの身に起こしてしまった事故を、ユニスのもっとも敏感な部分に対して、意図的に発生させなければならない。あの日、ダカクの中身が出てしまった時の槍の柄の動かし方と、その後アスリの中心部の一等地に息をかけてもらいながら、必死に戻した時のやり方を踏まえるに、うっすらと毛の生えている付け根の方に向けて、皮膚を下ろすようにしてやれば、ほぼ確定的にダカクの核と同じものは出てくるだろう。
あの時のダカクの痛がりようは、相当であった。愛する人が痛がる姿は目にしたくないが、そうなってしまったものを元に戻した実績は、アスリにはある。そうであるなら、アスリが目撃することとなるのは、全裸にされて羞恥にまみれる上に、1番素晴らしい箇所に痛みを加えられる男子の姿なのであって、アスリが約2年以上も糧にしてきた、ラダンの記憶と重なることになる。しかも、今日はその相手が大好きで大好きな大好きなユニスであって、それも押さえる方の係でなく、刑を執行する方に回ることができるのである。
果たしてユニスは、どれほど痛がるのだろうか。ダカクのように白く汚いものが付着していて、臭うのだろうか。それとも、墓地の近くでアスリが直接受け止めた狂気の源泉である以上、香しく芳醇であるのだろうか。

アスリは猛烈に、自慰がしたくなってきた。はっきり言って今から行おうとすることは、全部を丸出しにされるユニスの方よりも、剥き上げるアスリの方が、我慢の面で苦しい。

「えっ!?どゆことなん!?おちんちん脱がせるって…、取れちゃうの?」

頭上から聞こえてくるティサの声は戸惑っているが、針を刺されかねない行為を必死にこらえるアスリは、泣いている槍から目が離せない。きっとティサは、男子の構造を知らないか、もっと踏み込めばティサにもあるはずのあの一点を、ユニスのものと同列として取り扱えていないのであろう。

「ティサ、おちんちんって、先っちょが出せるんだよ。」

まだ何もしていないというのに、うっすらと良感の広がっているアスリは、ラリーヤに向けての問いであるにも関わらず、ついティサに答えてしまった。

「えっ!?どゆこと!?えっ、待って、アスリも知ってるん?」
「私は、ダカクが、前にその…、おちんちんの中身、出ちゃったことあったから…。」
「うそっ!?中身!?」
「そう、すっごい痛そうにしてて。」
「えっ、マジ…!?なんでそんな!?」
「ダカク寝てる時に、起こさなきゃなんなくて。槍の持つとこでお腹突っついたら当たっちゃって、真っ赤にしてるの出ちゃったんだよ。」
「真っ赤!?嘘!?うわぁ…!えっ!?ユニスのおちんちん、そんなんになっちゃうん!?」

これから痛くされるかもしれないというのに、アスリの面前でだらしなくよだれを垂らしている1本の左隣で、腰布の中で両足をすくめるように、ティサが小さく動いた。あの時、ダカクは死を意識していたが、ティサも重大な方向に想像を膨らませているのかもしれない。

「いや、ティサ、そういうんじゃなくて…、アスリ、ダカクは剥いたの初めてだったんしょ？」
「そうだと思う。死ぬ？とか聞いてきてたし。」
「初めて剥く子は痛がるよね。あ…、で、ユニスさ、これは？」
「えっ！？」
「こんなに皮あったら、剥けないか…。まぁ、痛い痛いだけど、男の子ならやんなきゃね。」
「んな！できるし！」
「ホントに？アスリにかっこいいとこ見たいって言われて、無理してない？」
「バカ！剥けるよ！」
「えっ！？ユニス！剥けるって、真っ赤になんの！？」

１つずつは短いものであるのにも関わらず、今、この洞窟の中に沸き立つ言葉は、滝から落ちてくる水ほどに速い。ラリーヤとユニスのやりとりに、反転して驚きを抱くティサと、そこから言葉を受けるユニスの顔をアスリは見たいが、どうしてもこの生贄からは目が離せない。

「じゃあもうアスリ、ユニス剥けるって言ってるから、剥いちゃおっか！」
「いや！待って！」

ユニスがラリーヤを声だけで止めにかかる。だが、任されているのはアスリだ。

「やっぱ無理？」
「違っ！じゃなくて…、やめろよ…！」

優しそうなトーンのティサに、ユニスが弱く返した。声に反して、アスリの前の1本は、よりユニスのへその方へと近づいて、2玉を抱える袋は幾分せりがってきているように見える。

アスリは自慰がしたい。これを見ながら、自慰がしたい。

悔しいアスリが、地面に膝をつけている両足を一層強く閉じれば、何かが下りて、にじみ出してくるような感覚がふとももの奥へと広がっていった。全ては、ユニスがあまりにもいやらしいことが原因だ。もう何でも良い。今からユニスが激痛によって号泣してしまったら、アスリは馬乗りになって戻せば良いのだ。それでダカクの時のように荒い呼吸でも良いし、涙でも良いから、アスリは1点で受け止めたい。

ここでユニスの槍が、一度大きく上に跳ねた。それに合わせてまた、先端から唾液が長く垂れていく。

機は熟した。言葉を発することすらできなくなった、本能の化身たるアスリは、両手10本の指の腹で左右からユニスを捉えて、天井を向いていた先頭を、アスリの真正面の方へと振り向けていった。

熱い。腰布越しに握った時よりも、ずっと熱い。当然、固い。熱した石でできた、血の通る武器が、まさに鎮座している。

またユニスは跳ねようとした。しかし、今度はアスリが押さえているから跳ねられない。その代わりに垂れかけていた唾液の粒が落ち、続けざまにアスリが向きを変えたことによって最先端に集まるようになっただぶつきの、完熟した果物にできた窪みのようなところからは、次の供給が小さく湧き出てくる。

アスリは一度顎を引くと、耐え難い自慰への欲望をこらえきって、使命に直面した。そして最後に目だけを上にやって、愛する人に覚悟を求めた。

「ユニス…、1番かっこいいところ、見せて。」

自分で言葉にしながら、アスリは何を言っているのか、わからなかった。だが、とにかくこの言葉はユニスによく届き、ユニスはティサの左耳の奥の方に顔をそむけるようにして、アスリの方から見える頬に、目尻から一筋の涙を流した。すすりあげる鼻の音に、ティサはさらにユニスに体を向け、抱きかかえるように空いている右手をユニスの頭にやれば、ラリーヤも体を深くユニスに密着させて、左手を美しい腹筋へと移していった。不甲斐なく弱くなってしまったユニスに、母性を注ぎ込むティサとラリーヤは、無言でアスリに次を促していて、2人とも表情はずぶ濡れの性器である。

これだけで、アスリに波が迫っている。苦しいアスリが目線を落とせば、手中では強くあるべきであるはずの武器まで、ひどく号泣していて、またしても地面に雫を落とそうとする寸前だ。

「…いくよ？」

自らの心音が、アスリの頭の中で高鳴る。両脇に大量の汗を滲ませるアスリは、心臓が口から飛び出さないよう真一文字に口を結ぶと、ユニスの根本に向けて、ゆっくりと両手をスライドさせていく。

あれほど余っていた象の鼻も、アスリが少し動かせば、すぐに前から後ろへと流れていくことになる。それでも一度の動きだけでは、ユニスの全てはあらわにならず、小指が汗ばんだ付け根の毛に触れたところで、少し手を離せば元に戻ろうとする間の皮を、アスリは手早くつまみ直した。

「大丈夫?痛くない？」

「ユニス、がんばろ？」

上からも下からを涙を流し、全身がこわばってはいるが、特に何の反応も示さないユニスに声をかけつつ、上目で状況をアスリが伺えば、ティサが少し体を揺らして、ほとんどユニスを抱きこむような姿勢を取った。相変わらずティサもラリーヤも、ユニスのせいで非常にいやらしい顔つきをしているが、ラリーヤはアスリに代わって今にも股間をまさぐりだしそうな雰囲気すらあるのに対し、ティサは真っ赤としか聞かされていない分、自分のものまで剥きあげられてしまうかのように、興味ある恐怖が控えているようである。

今のティサの小さな動きで、ティサへと全身を委ねるようにしてしまって、もう頬も見えなくなってしまったユニスは、アスリとティサの気遣いには無言だ。ティサとラリーヤに胸の前でつながれたその両手は、握っているところが白くなるほどに、ユニスによって強く押さえられている。

ユニスは必死で、耐え難い羞恥をこらえている。その羞恥を、アスリは今、共有することはできない。これを自らに与えれば、アスリは発狂する。

辛くなったアスリは目線を戻して、先端から陰毛に向けての縦滑りを再開した。だらりと、一滴がまた落ちた。

「すごい、トロトロ…。」

ラリーヤが呆けたように、小さくつぶやく。すぐに、桃色の肉で形作られた、小さな上下の割れ目が、アスリの目に入る。

「先っちょ、出てきた…。」

「えっ…！？」

横目に入るティサの腰布越しの足が、さらにユニスの方に角度した。真剣なまなざしのアスリは、ユニスのやや狭くなっているようである皮の守りに、一層の力を込めていく。一方でユニスの側も、性器全体で最後まで諦めずに抗おうとしているようであり、攻めを受ける槍だけでなく、すでに縮みあがっていた2玉の袋も、大き目の果物の種のように深いしわを刻んで色素を集めて茶色くなっていて、体の中に食い込んでしまいそうなほどに持ち上がって収縮している。

直後に、メリメリと音を立てるようにしながら、ユニスを覆い隠していた包皮が一斉に翻転した。同時に、秘められていたユニスの究極が、ついにその姿を現した。

「わぁ！！！！！」

アスリは歓喜した。すぐさまアスリは、洞窟中の空気が一変したことを察知した。

狂気だ。それも濃い。あまりに濃い。まずいことになった。ダカクが漂わせていた臭気とは、明らかに違う。これは墓地の横ですでに凝縮していた狂気に、ユニスの汗なのか尿なのか、それとも泉からの湧水なのか、とにかく分泌される全てをさらに凝縮してしまった、狂気の塊の香りだ。

「出た！出た！うわっ！くっさ！」
「うわぁ！くっさぁ！すんごいやらしい…！」

あっという間に見えない湯気は、高い位置を取るティサとラリーヤの鼻腔にも、届いてしまったようである。しかもラリーヤは、そのいやらしさまで嗅ぎ取っている。

ユニスの皮膚のところを両手で保持するままのアスリは、言葉が続かない。アスリはただ、ひたすらに自慰がしたい。気を抜けば落涙してしまいそうなほどに、自慰がしたい。今、ユニスを手放したくはないが、なんでも良いから、真ん中を刺激したい。

「えっ、えっ…！？これどうなってんの…？」

初めて男子の核を捉えたのであろう興味津々のティサは、匂いやいやらしさよりも、まず作りの方に目を向けている。アスリの目と

鼻の先、ユニスの中身は、白い小さな汚れの粒が何点か所在するものの、先端にある小指の爪幅ほどの割れ目から、とめどなく流れ続ける涙を全体にまとって、たき火と置きたいまつから直に明かりが当たっていないのにも関わらず、自ら光を発して輝いているようである。これも構造はダカクと同じであるが、やはり要所は全く異なっており、色合いはダカクほど赤くなく、アスリの中央よりはやや深みのある桃色で、粒自体もダカクよりも半まわりから1まわりは大きく、何より剥けきった最下段で一周する溝に深さがある。

そろそろアスリは危ない。今の時点でアスリの水面は大きく揺らいでいて、あまりじっくり見つめすぎていると、大波にさらわれてしまいそうである。どうにかギリギリで保っているアスリの理性の裏側では、ずっと見つめて嗅いでいたい本能が大声で騒ぎまわっている。もういっそのこと何でも良いから、果ててしまっても良いのかもしれない。

「あっ！あっ！あっ！やばい！！！んうっ…！！！」

ところがここで突然、おかしくなる寸前のアスリに対して、あえて強く自分に目を向けるよう要求するかのごとく、何か異変を訴え始めたのは、ユニスの方であった。これ以上後ろに下がれないはずのユニスは、それでも何とか腰を引こうとして、両太ももを内股の形に変えようとしながら、強くしゃがみこもうとする動きを見せる。

「なになになに！？！？！？」

「えっ！？」

「あっ！アスリ！！！」

ティサとアスリが声を上げたのに続いて、ラリーヤがアスリを呼んだ。次の瞬間、アスリの顔の真ん中に向けて、勢いよく何かが飛びかかってきた。

「うわっ！！！」

アスリは真正面から、眉間に矢を受けてしまった。これにはアスリも両手をユニスから離して、水しぶきを受けた時のように顔を横に向けるしかない。

「えっ！？ちょっ！？」
「わぁー！！！」

ティサの仰天とラリーヤの感嘆に合わせて、すぐに2本目の矢が顔の前で広げたアスリの両手の平のうち、右手の方に命中した。2本目は随分と熱く、量も多いようである。

「あっ…！あっ…！」

ユニスは声でも、アスリをどこかに流してしまおうと攻撃をかけてくる。動転するアスリが状況を見届けたい一心のもと、執念で開いた薄目をやっと射出口へと向ければ、先端のあの割れ目から、ちょうど3本目の矢が飛び出し、手の防御の真上を飛び越えて、今度はアスリの左側の前髪へと着地していくところであった。

3本目を出し切ったユニスの槍は、上方へ跳ねる。この時、ユニスが引こうとする腰回りの筋肉に押し戻されるように、包皮がぬるりと守りの姿勢まで戻ったのを、アスリは見逃さなかった。元の形に戻るだけであるというのに、剥けていたものがくるまれてしまう今の動きは、アスリの肉体に引っ掛けられた3回分と同程度か、それ以上に、本能に対しても強烈に突き刺さった。

苦しい。このままでは大した刺激がなくとも、ラダンを目撃した時のように、波が来てしまう。あの時のように気絶できればまだし

も、今のアスリは多分気絶だけでは我慢できない。
急激に支配を強める本能に抗うアスリなどお構いなしに、勝手なユニスがまた一度下に下がって、また持ち上がった。４本目が出た。しかし、皮越しとなったことで、この矢はようやくアスリまで届かず、ぼとりとユニスの目の前に落下していく。
アスリは確信した。腰布も皮の鎧も着ていなければ、まさに矢のように、信じられないほど勢いよく遠くまで飛んでいくが、今のユニスの落とし方は、墓地の近くで腰布を貫通して漏出した、あの時と同じだ。つまり今、ユニスの方は大波を受けて、最高に浸っているのだ。

実に悔しい。なぜアスリはそれを共にできないのか。いや、この手で受けてしまったものを使って、またユニスと一緒になることは、できないことではない。

「えっ！えっ！？また出た！」
「わぁ！まだ出るー！」

だが残念なことに、やはりできないものはできない。ユニスはもうアスリの生態の一部を知っているし、何らかの手段で脅して口止めもできるが、少しずつ信頼と友情を築いてきたティサとラリーヤが、アスリの本能を知ってしまった時、アスリはユニスのように変態として扱われて、場合によっては避けられてしまうかもしれない。
何より、あまりに恥ずかしい。ティサとラリーヤに軽蔑されながら行う自慰は、どれほど自らをクズに追いやることができるのだろうか。もしかするとその行為を咎められて、アスリも罰されて、今のユニスのように、今度はアスリが真ん中で拘束されるのだろうか。
ほんのわずかな時間であるにも関わらず、アスリは沸騰し、その

間もユニスの5本目、6本目、7本目、8本目が、無制御にぼとりぼとりと続いていく。そうして、その上下が9回目に達して、ようやくユニスの先端の皮膚のだぶつきの狂気は、落下しない雫として付着し、どうにかして沈黙した。

「えっ…？ちょっと！ユニス！！！」

我慢を強いられるアスリの面前で、脱力して肩で大きく呼吸しているユニスに、ティサの声が飛んだ。かろうじて立ったままであるユニスの、たった1本の武器は、未だに激しく鼓動して、ビクビクと上下している。

「終わったん…？」
「全部出せた？アスリにむきむきしてもらっただけなのに、気持ちよくなっちゃったね？良かったねー？よしよし。」

ティサの首筋の方へと顔を隠したままのユニスの頭へ手を伸ばしたラリーヤが、ユニスの胸筋の中間あたりに空いている左手を置いて、ゆっくりと上下させると、ユニスは鳥肌を立てるように、体全体を2度震わせた。

「まだ気持ちいいねー？ほら、ユニス上手にぴゅっぴゅできたから、ティサもよしよしいいこいいこって、やってあげよ？」
「えっ…、これって…。」

激しく波立つ海上の一隻で、甲板の上から必死に波を押さえつけようとしているアスリは、何か振られてもまともに反応できないが、顔に手、髪までどろどろにされて固まったままである中、ティサもアスリには気を向けずに、またユニスを叱ることもせず、ただただユニスのもたらした結果だけを追い続けている。ティサも苦しいの

だろうか。そうであるなら、かけられたものをティサにも分け与えて、共にユニスの狂気で発狂し、少数派をラリーヤだけにしてしまうのも、本能的で良い。
一方で、ここまで凄まじい性の暴風雨が洞窟の中に吹き荒れているというのに、ラリーヤは終始余裕で、今のユニスに向ける態度は、まるでよく働いた犬を褒める時のようである。仮にラリーヤも仲間になりたければ、これだけたくさん受け止めているのであるから、アスリは気前よくラリーヤに分け与えて、一緒に何度も漂流に付き合うのであるが、これほど理性を先立たせていられるようであるのでは、ともすると最後まで少数派を貫いて、村に帰ってからアスリとティサとユニスの３人を、針で刺す側に回ろうとしているのかもしれない。

「わからない…？」

そのラリーヤが、詰まってしまったティサに同じペースで答えながら、ユニスの胸元に這わせた左手を、やや角度が落ち着いてきたユニスの槍の方に流していくと、ユニスはまたも全身を大きく震わせた。そしてわずかに下方に目を向けながら、薬指と小指を立て、３本の指でユニスの一番先の皮を軽くつまみ上げて、残る雫を搾り取るように先に向けて滑らせ、手放していった。

「あっ…！！」

突然のラリーヤの行動に、ユニスが一度うめいた。同性のアスリから見ても、異様に艶めかしいラリーヤは、つまんだままの形の３本指を、目線とともにティサの顔の近くまで運んでいく。

「ほら、これ…？」

ラリーヤがつぶやくように問い、閉じた指を上下に開くと、細くぬめった白っぽい糸が、指と指の間にできた空間に引かれていった。
その糸を、アスリの方にも向けて、一度ちらりと目を合わせると、ラリーヤは再度ティィサに視線と糸を送り直した。
「これ、ユニスの赤ちゃんの種だよ？」

アスリはラリーヤの発言に、耳を疑った。ユニスがアスリに向けて射出し、アスリのことまで変態に染め上げようとしているこの粘液は快楽の結晶であり、ユニスが山の登頂に成功した証だ。今、ラリーヤの述べた言葉とユニスの狂気の間には、あまりにも大きすぎる飛躍がある。はっきり言って、アスリは両者の間に関連性を見出すことができない。

「嘘…、これってじゃあ…。」

だが、ティサの方は何か思い当たる節があるようである。自分では一切触れていないのにも関わらず、贈り物を受け取った少女のような表情を浮かべていたティサは、踵を返したかのように真顔となって、ユニスの頭に置きやっていた右手を離し、つないだまま胸元に持ち上げていた左手もだらりと下して、ユニスに密着させていた身もアスリの方へと向けていった。

ティサが動けば、隠れていたままだったユニスの横顔も、飛ばしてしまった先へ正対するように振り向けられていくこととなる。わずかに有した陰毛と長い皮膚に、硬くなって漏出するところまで女子3人に観察された羞恥による涙に鼻水と、抜けきらない狂おしいほどの余韻にまみれたユニスの顔は実に見事で、これだけでアスリは少なくとも1か月程度、飲まず食わずでこの洞窟に1人でこもって耽っていられそうであったが、真横で次第に引きつっていくティサの両頬は、それとはあまりに対照的であった。

そのままティサはユニスとつながっていた手も静かにほどくと、アスリの前にしゃがみこんで、地面に両手をつけていった。アスリ

の背後から届く、たき火と置きたいまつによる明かりをティサは前方から受けていながら、血の気は急激に引いていっているように見える。

「アスリ、どうしよう…。」
「何…？」
「あの…、アスリもう、ユニスの赤ちゃん、できちゃってるかも。」
「えっ…？」

意味不明であり、乗りに乗った興を覚ます言葉だ。卒倒してしまいかねないほどに興奮しているアスリにとってみれば、助かるタイミングではある。ところが、アスリに精神を統一するほどの間を与えないうちに、ティサの言動はより理解不能な次元に突き進んでいった。

「ねぇ…、私も一緒に、ユニスの赤ちゃん作りたい。」

小さく、はっきりと、ティサがつぶやいた。直後にティサはがばりと斜め後ろに向き直って、地面と平行の角度まで落ち着いてきていたユニスの1本を、両手で掴み取った。

「ちょっ！？」

目を大きく見開いたユニスは、直前までティサとつないでいた右手を、今度は真下に位置しているティサの両手の上に重ねた。羞恥と快楽がすでに形作られているところに、さらに驚きまで加えると、人間の顔に最も強く出てくるのは、焦りになるようである。

「これ、剥いちゃえばさ！今みたくユニスのお乳、出るんよね？」
「えっ！ティサ！ちょっ！やめっ！！」

「ユニス！お願い！ねぇ、私にもかけて！剥いてあげるから！お願い！私、ユニスの赤ちゃん欲しい！」

結局アスリは、高ぶっている気持ちを静めることに失敗した。わざわざ自分から狂気を請願するティサにどのような論理が基礎としてあるのか、アスリには皆目見当がつかない。しかし、その上に立脚するティサの意図は、大変シンプルで、丸出しとなってしまっている本能に寄り添っている。つまるところ、ティサも男子への興味を先行させ冷静を保っているように見せつつ、ユニスと同じく包まれている皮を剥きあげてしまえば、その中にあるのはアスリのものを複製した、性と、ユニスへの愛でしかないのであって、その上でユニスの子が欲しいと願っているのである。

ここで注意しなければならないのは、ティサが言ったのはアスリが赤子を授かったということだ。ティサの純情な性は一旦横に避けておくとして、ラリーヤの言うように種なのか、それともティサの言うように乳なのか、何であれ、ティサの説に従えば、ユニスの狂気をかけられた女子は、懐妊するようである。それ以前に、アスリはもう今日よりずっと前にユニスと体液を通じて一体化しているのだから、あわせて双子となるかもしれない。

この事実に気づいたアスリが何よりも先に得たのは、なぜか圧倒的な多幸感であった。近いうちにアスリの腹部は、ユニスと成した2人の子によって膨らんでくることとなる。なんと嬉しく、喜ばしく、幸せなのだろうか。だからこそ今、ティサもそれに気づいて、アスリに続いて母になろうとしているのかもしれない。

「おちんちん、あったかい…！」
「あっ！待って！やばい…！あっ！」
「んんっふふ…！！！」

絶頂とは風味の異なる恍惚の中にあるアスリの前で始まった、一生懸命なティサと、次はまた悦びが顔に現れてきたユニスのやりとりに、突然ラリーヤが噴き出して、こちらもユニスとつないでいた手をほどいていった。そうして、搾り取ったままであったユニスの種のついた左手の指をティサの方へとラリーヤは伸ばしていくと、その指でラリーヤの方を見上げたティサの頬を、すっと片側ずつ、化粧でも施すかのように撫でたのであった。

「なっ…！？」

「じゃあ、これでティサもユニスの赤ちゃん、できちゃったね？」

覚悟に満ちたティサの顔が、瞬時にはにかんだ。洞窟の外でユニスに激怒したティサを見たばかりだというのに、ラリーヤはここから種のついていない方の手で腹を抱えて、爆笑を始めてしまった。

「何！？赤ちゃんできたら、なんか変！？」

「ひっ、ひっ…、んっふふ！ティサ、それ、かかったら赤ちゃんできるって、誰に聞いたん？」

「んなの、ママが！その私が…、初めてアレきた時に！」

「嘘でしょ！？ティサのママなら、ティサ産んだんだから、わかるでしょー。」

「ホントに！ママ言ってたんだって！もう始まったから、これから男の子からお乳もらったら、赤ちゃんできちゃうって…。」

初めは強さのあったティサの口調は、ラリーヤの笑い声を受ける度に、次第に尻すぼみとなりつつある。ラリーヤも普段は気配りの女なのだから、ここまで笑うのでは何らかの確証があるに違いなく、それがまたティサの自信を削る方向に働いているようである。

説得力のあるラリーヤに従えば、アスリの妊娠はありえない線がほぼ定まり、アスリにとって悔やまれることに、ユニスの子はアス

リの腹の中に存在しないということも決定的となる。今のアスリには、ティサがユニスに子をねだった気が、おおよそ分からないでもない。

「ってかそうならさ、さっき外で、アスリとユニスが前から会ってってていう話してた時、それじゃお乳のかけあいでもしてたって思ってたってこと？」
「そんなん！考えるわけないじゃん！」
「めっちゃ焦ってなかった？」
「なんていうか、2人とももしかしたらって…、なんでも良いじゃん！とにかく男の子のお乳は別！」
「いや、男の子のお乳って…！」

実際のところ、ティサがアスリとユニスの関係に対して、何を思いめぐらせていたのかは定かではない。ただ、男子の乳というキーワードは、ラリーヤに良くフィットして、ついに笑いによる涙まで浮かべそうである。まだアスリは話の落とし所を見いだせていないが、たしかに言葉そのものには、性的な威力がある。

「んっひっ…、じゃあ、じゃあさ、これ村に持って帰って、女の子にぺたぺた貼ってったらさ…！ってか、私ももう触っちゃってんだけど？」
「あっ…！」

笑いすぎて呼吸もままならないラリーヤのアシストが入ったところで、ようやくティサも自説の盲点を認識したようで、何かが抜けて行ってしまったかのように、洞窟の天井へと顎を向けていった。だが、握りっぱなしにされている方のユニスは、せっかくの幼馴染の理解などお構いなしに、反対の方向に走っていってしまったのであった。

「えっ…、待ってよ！俺に、３人の…、子ども！？嘘っしょ？」
「そうだよー。頑張ろうね！ユニスパパ！」

この流れで、そちらに話が向くことは、どう考えてもありえない。アスリにあれほどかけてしまったのだから、おそらく種なのか乳なのかに脳もとろけさせて、混ぜこんでしまったのだろう。ふざけるラリーヤの返事に、今度はユニスが洞窟の天井を見上げたが、２人の首は何かの仕掛けで繋がっているのか、反対にティサの方は頭をラリーヤに向けて、解を求めていった。

「いや、ってかラリーヤさ！それじゃママが間違ってたってこと！？」
「合ってるっちゃ合ってるけど、ティサ、ちゃんとママに聞かんかったの？」
「だから、その…アレくるようになったら、男の子のお乳がかかっちゃうと…。」
「その前にさ、なんていうか、もっとなんかなかったん？」
「聞いたよ！全然意味わからんかったから！でも、もっとおっきくなったら教えるって。で、そのまま、ママ…。」

この言葉には、笑ってばかりのラリーヤも、さすがに何も返せなかった。それにしても、今の２人のやりとりも、アスリにしてみれば、もやでもかかっているかのようである。他方で、広がった一時の無言の間にラリーヤの気まずさをティサは機敏に感じ取ったようで、ユニスの引っかけてきた乳で、自分まで呆けてしまっていないか不安なアスリなど置き去りして、ティサはそのもやを、より濃く深めていった。

「…だからあれ、初めての時だから、５年くらい前？パパも喜んで

…、うわ最悪、恥ずかしい…。」
「えっ！？早くない？」
「えっ、そうなの？」
「だって私、まだ2年くらいだと思うし。」
「嘘！？え、待って！アスリはいつ！？」

ただでさえ、見通しがつかない中、アスリの1番何も見えないところにティサから質問が飛んだ。話の腰を折らずに、質問を質問で返すには良い頃合いである。

「えっ…？ってか、なんの話なん？」
「えっ！アレだよ！毎月…。」

祈るような形の両手でユニスを手中に収めたまま、額に汗が浮かびつつあるティサが、アスリの瞳を捉えて、止まった。種のかかった顔を、おかしく見られているように考えたアスリは、一度ティサから目線を外して、先ほどの暴発で何も付着しなかった左手で、鼻の頭まで垂れてきたユニスの乳をぬぐいながら続けた。

「えっ、ホントに何なん？」
「嘘…、じゃあアスリ、まだ…？ってか、ママから何も教わってないん？アスリ、お姉ちゃんも何人かいたよね？」
「いや、だから何の話？」
「マジか…。」
「ティサ。」

絶句するティサに、打って変わって配慮のトーンとなったラリーヤの声が、上からかかった。呼びかけたティサの名に続いて、穏やかにしゃがみこむラリーヤの仕草には、形容しがたい大人らしさがある。

「ティサだって、最初知らんかったんだし、今もちゃんとわかってないじゃん？　これ、ついたらさ、赤ちゃんできちゃうとかさ。」
「あっ！　その、そうじゃなくて！　ごめん！　アスリ！」
　全く追従できないところに謝罪をかけられたアスリは、発するべき言葉が見つからなかった。そうこうしている間に、落ち着いていくるように見えたラリーヤの表情に、再び性がこめられていく。
「ねぇ、ホントはいろいろめっちゃ言いたいんけどさ…。まずティサもアスリも、ユニスも…、お勉強しよっか？」

「えっ！？待って！待って！いや、いいけど！アスリは絶対知らなきゃだから良いんだけど、ユニスにもアレのこと、教えるってこと！？」

何かをユニスから隠そうとするティサの顔には、ラリーヤの方から送られてくる性だけでなく、羞恥の色まで加わり、その手に力まで加わってしまったのか、握られている側のユニスのふとももも、突如前後に揺れ動いた。半開きだった口を急に閉じて、何かをかみ殺すようにしたユニスは、両手で自分の前髪をかき分けるように持ち上げたまま、大きく見開いた目で、ティサでなくラリーヤの方を見つめていった。

「うっ…！おっ、俺に…、なんだよ？」
「…ユニス、またちょっと気持ちよくなっちゃった？もっかいぴゅっぴゅする？」
「はっ！？」
「えっ！？」

ニヤニヤしているラリーヤは、まず一撃をユニスに加えると、その余波に驚きながらも握り続けて手放さないティサの方へと目をやった。

「あんさ、ユニスだって女の子のことは知っとかなきゃ？だって、もしさ、もしだけど、ティサがユニスの赤ちゃん産んで、女の子だったとすんじゃん？…で、あんま考えたくないけど、ティサ先に死んじゃったら、ユニスが育てんだよ？何も知らんかったら、ユニス

子どもだし、さっきアスリにかけちゃったみたいに、またお漏らしして、えーんって泣いちゃうだけにならん？」
「泣いてねーし！！！」
他にも触れるべき箇所はあるはずであるが、ユニスが指摘したのは涙についてだけであって、しかも事実とも異なっている。ただ、将来に目を向けさせたことが功を奏して、ティサの顔に広がっていったのは、満足である。
「…そっか。たしかに。教えてあげんとダメか。でも、なんか恥ずかしい、私は無理…。」
「大丈夫、ティサのママがティサに教えられんかったのも、今から私が教えてあげるから。」
これからラリーヤがアスリたちに授けようとするのは、未知だ。しかしその中身が何に関連するかは、何も知らないアスリでもおおよその察しがつく。
やはりアスリは、自慰がしたくて仕方なかった。確実にこれからラリーヤが展開してくるのは、猛烈な暴風なのだ。
「じゃあ、まずアスリ、こっち向いて？」
始まった。落ち着いた様子のラリーヤは、ユニスの足元に落ちたまま、皮ごしの抽出を数度受けてしまった腰布を拾い上げて、種のついていないところが上になるように折りたたむと、そこに先ほど搾って指についていたものを拭き取っていった。そうして、もう一度内側に折りたたんで、アスリの髪に顔をぬぐいながら、真相を語りだしていった。
「いい、アスリ？あとユニスも聞いて。女の子はね、おっきくなっ

てくると、体が変わってくるんだよ。もちろん男の子もだけど。まずは女の子ね。」
「…わかる、おっぱいでしょ？ラリーヤもティサも、私よりおっきいし。」

あまり頭が働いていないアスリは、すぐ目の前にあるラリーヤの立派な膨らみを声に出した。微笑むラリーヤは、ユニスでベタベタのアスリの右手を、腰布越しの両手でとって拭きあげつつ、続けた。
「ふふ、お胸もね。アスリもちょっとずつ、おっきくなってきてるでしょ？でも、それだけじゃなくてさ…。」

ラリーヤは丁寧にアスリの右手を下ろすと、ユニスがたっぷり付着した腰布を真横に置きやってから、アスリの方へと目線を戻しつつ、今度は膝をつけているアスリの両ふとももの上に両手を乗せた。今、できることならアスリは誰かに体を触れてほしくはない。なんのことはないこれだけの、しかもラリーヤによる動きで、破裂しそうになっている心臓は、本当にはじけ飛んでしまいそうである。
この直後にラリーヤの右手が触れた場所は、最悪なことにアスリのへその下の、股際に迫る位置であった。

「っ…！」
「あっ！ごめん！びっくりした？」
「だっ、大丈夫…。」

突然のラリーヤの行動に、思わずアスリは全身を大きく揺らしてしまった。危ないところであった。今のワンタッチだけで、アスリの中から何かが外に少しこぼれた。
ただ、アスリが大丈夫だと伝えた以上、ラリーヤも容赦なく同じところに手を伸ばしてくる。もう一度、アスリの際どいところにラ

リーヤは手を置くと、改めてアスリに目を合わせたのであった。
「あとね、ここも変わるんだよ？」
「…何？毛のこと？」
「まぁ、お毛けもね。あと、もっと大事なの…。」
たき火が差し込むラリーヤの瞳は、祭事を行う巫女のもののように清涼で、針を刺されかねないほどに悪いアスリの過去を全て見透かしているかのようであり、それに見つめられるアスリは冷や汗までかきそうである。その上、仮に今、このままラリーヤに強く手を押し込まれでもすれば、アスリは正体を明らかにしてしまうこととなるだろう。
ところが、この次の開示は、湿りきってしまっているアスリにとって、あまりに意外であった。
「あのね、ここから毎月、血が出るようになるから。そしたら、アスリももう赤ちゃん作れる証拠。」
「はっ！？」
「血っ！？」
驚くアスリのすぐあとに、ユニスも声を上げた。本能に取りつかれているアスリも、にわかに冷静さを取り戻していく。
「えっ？どゆこと？毛のとこから血出んの？しかも毎月？」
「えっ、それってじゃあさ、ティサも毎月、痔になってんてん痛たたたたたた！！！！」
「バカ！お尻から出るわけないでしょ！お股に決まってんでしょ！」
ユニスがティサに、何かやられている。今更ながら、これは随分とおもしろいシステムである。ユニスと会話する時は常に握っておお

けば、馬鹿なことを口走ったところで、すぐにしつけることができるのだ。一方でアスリもまた、ラリーヤに押さえられているのであるから、ユニスのようにされてしまうことはないであろうにしても、あまり不用意なことは述べられない。

しかし何であれ、ティサは今、股だと言った。実績のある様子の本人の一言なのだから、その信憑性は極めて高い。しかも、出血するというのを聞かされた以上、アスリの性への欲求は急速にしぼんでいき、それに代わって支配を強めようとするのは不安であった。

「え…？お股からって…。っていうか、血が出て大丈夫なん？ドバーッて出ちゃうん？いや、待って！待って！血ってことはさ、どっか切れちゃう？めっちゃ痛くなんの！？えっ、しかも毎月！？えっ！？」

「そうだよね。大丈夫。アスリはまだないから怖いかもだけど、私も最初聞いたとき、おんなじこと思った。」

矢継ぎ早に質問を始めたアスリの下腹を、ラリーヤが軽く押さえながら、優しく声をかけた。タイミングとは重要なものだ。これがほんの少し前であれば、アスリは快楽の中で悶絶していた。

「痛い子は痛いって言うけど、私はそんなに。ちょっとだるくなるくらい。」

「私は結構痛いってか…、わりとしんどい時あるかも。」

「ウソ！？ティサ、言ってくれたら、私効くの知ってんだから、もっと早く教えたのに！」

「マジ！？え…、今日とかさ、何かあったりする？」

「あ、きてるんね。今飲みたい？外に置いてる袋に入ってるよ？」

「まだ大丈夫、それじゃあとでお願い！え、めっちゃ助かる！」

何も迎えていないアスリは、話についていけない。支線に入って

しまったラリーヤもすぐさまそれに気がついたようで、本題へと翻って戻ってきた。

「あ、で…、ケガしたみたいにドバーッとは出なくて、ドロッとくる時もあるけど、だいたいちょっとずつ、1回きたら5、6日ぐらい、最初の2日ぐらいまで多いね。」
「えっ、お股のところが切れちゃうってこと…？」
「いや、外っかわは切れないよ。でも実際、お腹の中はどうなんかはわかんない。見えないし。でも切れてたら死んじゃうだろうし、切れてないんじゃない？」
「えっ、お腹ん中！？…無理無理無理無理無理！」

随分、恐ろしい話になってきた。切れてはいないというラリーヤの仮説は、その通りであり、これもおそらく正しいだろう。だが、切れていないとしても、腹の中では出血するのだ。しかもそれが、いずれアスリの身にも起きると言うのである。

「そんな心配せんでも大丈夫だから。始まったら別に普通だし。私だって、ティサだって、ずっと普通だったっしょ？」
「…えっ、ってか、ティサって今日、それなんよね？…マジ！？大丈夫なん！？えっ？ってか全然血まみれじゃないじゃん。どゆこと？」
「せっかくだしティサ、見せてあげたら？」
「はっ！？ちょっ、それは、さすがに…。でも一応なんていうか、ちゃんと血が出ても大丈夫なようにさ…、いやこれ、ユニスの前でそこまで言わなくて良くない？。こら！おちんちん！」
「痛っ！！！」

またユニスが、ティサの手の中で何か動かしたようだ。ティサも裸にならなくて済むように、うまく流したものだ。

とにかくここまでで、出てきてしまった血液をどうにかする術があることまでは、アスリも理解した。それより次々と浮かび上がってきた一連の疑問の中で、まだ最も重要なことが、アスリには残されている。

「えっ、あとその血ってさ、…どっから出るん？」
「だから、お股だよ。」
「それは分かって…。」

アスリが知りたいのは、そのうちのどこからかということである。万が一にも、ユニスのように前方中央の粒から、汗が皮膚からにじむように出てくるとすれば、あれほど敏感なところである以上、アスリは大人になれば毎月おかしくなってしまうこととなる。またそれが激痛であれば、考えたくもないが、なぜかすでに腹の奥がゾクゾクとしているのだから、これもやはり毎月おかしくなる。

「ティサもアスリも、お股はお股だけど、ちゃんとあそこの名前、知ってる？」
「…何？どういうこと？」

やりとりを聞いていたラリーヤが、ティサに向けてより一層不敵な笑みを送った。悪い顔だ。

「お股っていうのは、ちっちゃい子まで。」

アスリに触れるラリーヤの右手が、さらに下方へと滑り込もうとする。とっさにアスリが、ふとももをさらに強く閉じて、両手でもラリーヤの手首を掴んで制止すれば、ラリーヤはまたアスリへと向き直った。

「良い？女の子のここは、おまんこ。」

初めて耳にする、不思議な言葉だ。女性器そのものを示す新しい単語が、アスリの辞書に加わった。それはおそらく、ティサもそうであって、ユニスも同様であるはずだ。
ふいに、ラリーヤの右手の中指に、力がこもった。薄い毛に覆われた個所のすぐ下、アスリのだぶついた包皮の最上部も、それにあわせて圧迫される。

「んっ…！」

危険だ。あと少しラリーヤの指が伸びれば、中身まで触れられてしまう。それでも、ラリーヤは教育を優先する。

「ほら、アスリ。自分のおまんこ、見たことある？アスリはこの下、お豆あるのかな？そのもっと下、おしっこのちっちゃい穴の下に、もう１つあるでしょ？」
「あっ…！」
「あれが、おまんこの穴。血が出るのは、そこ。」

泉だ。地下から湧き上がってくる欲望が、勝手にアスリを水没させようとしている、あの泉のことだ。そう遠くない将来、アスリの泉も、血の泉となるのだ。

「アスリ、分かったね？ティサは分かってるよね？」

新しい言葉、新しい知識、ラリーヤにもティサにもそれがすでにあって、特にティサにも備わる泉からは、まさに赤き血潮がたぎっ

ているという事実、点在していたそれぞれが、１本の線となってアスリの前に引かれた今、アスリは無意識のうちにラリーヤの手首を押さえる力を弱め、同時にこわばった太ももも緩めていった。アスリが自身を解放すれば、ラリーヤも進む。

「んっ…。」
「ちょっ！ラリーヤ！そんなにそこ触ったら、アスリが…！」

ところが、ここで待ったをかけたのはティサだった。無論、ティサは善意によって動いたに違いない。これはアスリの本能からすれば邪魔でしかなかったが、何にせよラリーヤの前進は終わったばかりでなく、アスリの下腹部からもその右手は離れて、ティサの方へと向き直ったのであった。

「んふふ…、何？触ったらどうなっちゃうん？」
「そんなん…！」
「ティサも、普段おまんこいじってんでしょ？」
「いじってないし！」
「じゃあ、なんでどうなっちゃうか知ってんの？」
「痛たたた！！！ヤメロ！！！ちぎれる！！！」

聞くことしかできないユニスがうるさくなった一方で、ティサは黙ってしまった。物理的な接触が終わった直後に降ってわいた、ラリーヤの圧倒的な場捌きを前に、思わずアスリもティサの方に目をやれば、怒りが３割、残りは全て羞恥であった。
今の話を踏まえるに、どうやらティサは、すでに天に旅立ってしまった母に謝罪すべき行為を、ひっそりと行ってきたようである。加えて話の最中、ラリーヤは明らかにティサも、と言った。別に今の話で、アスリは自分で触っているという責めは、一切受けていない。つまりこの、ティサも、という言葉でティサとともに誰が指さ

れるかと言えば、これはラリーヤ自身のことで、万が一にもラダンのように盛大に逮捕されてしまった場合は、結局3人揃って剃毛されて、針を刺されて、痛みが回復すれば、それを思い出して糧にするしかないのだ。
気がつけば、本能がアスリにもたらしている、出血への不安をかき消す効力には、目を見張るものがある。やはりここで一度休憩することにして、一旦解散し、アスリは自慰がしたい。

「…まぁ、いいや。それはまたあと。それより次は男の子。ほら、ちんちんの話だから、ティサそろそろ手、離してあげよ？」

洞窟の中の空気が、濃い。もう、アスリは十分のぼせそうであるのに、参ったことにこれから男子の話だとラリーヤは言っている。ただ幸いなことに、こちらはもうユニスの全部を目にしているのだから、アスリに予測できない何かが、突拍子もなく襲いかかってくる可能性は低いはずである。だが、ティサがラリーヤに何かを目で一言語ってから、その両手の中から解き放たれた1本が、ユニスの下腹に音を立てて勢いよく衝突するのを目にして、アスリは自らが設定した前提自体に、疑念を呈するほかなかった。

「うわっ…！」
「今、ベチンってなった！」
「マジ？出したばっかなのに！」
「うっさい！しょうがないじゃん！」

やっと自由が利くようになったユニスは、当然上向きで、皮にくるまれたところをさらに両手で包んで、ティサ以上の羞恥を広げながら、ただちにしゃがみこんだ。どうしようもない変態だ。

「何？痛くしても固くなっちゃうの？」

「剥かなくても、おちんちん痛くすればお乳出るってこと？」
「いや…、これはユニスだけかも。痛かったらならんでしょ。しかもね、普通はさっきみたく出ちゃうと、男の子ってしばらくしなしなになっちゃうのに、超カチカチだったし…。あ、でも痛いと嬉しくなっちゃうおじさん、カインタにもいて、みんなに変態って言われてたから、多分ユニスも…。」
「違っ！」

ラリーヤの見解も、アスリと一致した。やはりユニスは変態なのだ。ここは念のため、本当にユニスが将来の相手で良いのか、アスリはティサに確認しておくべきだろう。そのうちの大半の意味は、ティサへのからかいになる。

「ティサ、こんな変態と赤ちゃん作って大丈夫？」
「しょうがないよ、変態でも。だって他に男の子ってか、女の子だっていなかったし、ユニスしかいないんだよ？パパにもママにも私の赤ちゃん、見せてあげたかったけど…。」
「あれ？さっきティサ、すっごい大胆だったから、私めっちゃビックリしたんに…、ホントはユニスとだと嫌なん？今ロマドウだし、こっちだといっぱいかっこいい人いるじゃん。」

想定外の反応が返ってきたことに、アスリは面食らったが、そこにすかさずラリーヤもたたみかけていった。ユニスの頭も、ティサの顔へと一気に向けられる。

「いや、他の人の赤ちゃんは…。」
「やっぱりユニスじゃなきゃやだ？」
「そんなんっ…！」

ラリーヤの誘導にティサが見せたのは、直前の想定外をひっくり

返す、想定通りである。急停止したティサの言葉の先に何があるのかは、真横で見るアスリからも十分予測できるほどに、決まっている。残念ながら全裸で股間を押さえる当人は、真面目なのかそうでないのかわからない表情であり、目の前でほぼほぼさらけ出されている好意を理解し受け止めているのか、定かではない。

「じゃあ、アスリは？ ユニスの赤ちゃんほしい？」

「えっ！？」

「あっ！！」

突如、アスリに向かってラリーヤが仕掛けてきた。しかし、これに先に反応したのは、森で育ったペアの方だった。

アスリにしてみても、先ほどティサからユニスの子を妊娠したとの誤情報を掴んで、真っ先に得たのは幸せであった。だから、できることなら、ユニスの子が欲しい。また、アスリがユニスの子を孕んだと誤解して、ティサは直ちに自分にもユニスの子を宿そうとしたのであるから、別に2人でユニスの子を成すのも、それはそれで美しい未来なのかもしれない。

ただ、アスリがどう思うかを正直に述べたところで、帰宅後にユニスの乳を目にした興奮から覚めたティサは、複雑な思いを抱くかもしれないし、何よりそれを口にするのは、要はアスリはユニスをそのまま求めているということであって、あまりに恥ずかしい。思えばティサは、ラリーヤの言うとおりに、相当大胆なことを一切臆せず口にしたのだ。アスリには到底、そこまで言い切れないのである。

あまり言い淀んでいられる時間はない。適切な言葉が思い浮かばなかったアスリは、煙幕を張って注目の先を変えるしかなかった。

「…いやさ、そんなんなんでも良いじゃん？ってか、さっきティサはさ、はっきりユニスの赤ちゃん欲しいって言ってたんだから…、

ラリーヤ、男の子の話？あと、お乳と赤ちゃんの話、ちゃんと最後まで話してよ？」
「なんかなぁ。でも、せっかくちんちんあるんだから…。」
　不服そうにつぶやいたラリーヤは、ユニスの両手で覆われている先に目をやると、一度自身の額を押さえた。それに釣られて、見られる側のユニスも、両肩を小さくすくめるように動いていった。今、視線はユニスの隠された上向きの皮に向いているが、今日のラリーヤにはティサにも、アスリに対しても、いくらでも切り出してくる手札がある。いや、手札がありすぎて余っている。
「で、私らちんちんないし、本物のちんちん見ながらの方が、ティサとアスリに、わかりやすいんだけど。」
「嫌だよ！！！」
「こら！ユニス！ほらアスリ、お願いしちゃいなよ？」
「えっ、じゃあ…。」
「まぁ、一旦さ。さっきみんなでかわいいの見たし、まず説明。ユニスのちんちん、ピンピンになっちゃってるから、見せてたらまたぴゅっぴゅしちゃうだろうし？」
「出ないし！」
「出ないならいいじゃん？私にも剥かせてよ！」
　状況に合わせてはいるが、ティサも確実に本能最優先で、早くもティサの手はしゃがんだユニスの膝に置かれている。こう言われては、ユニスも何も続けられない。
「んふふ…、やっぱりティサ、結構大胆だよね？」
「ウソ！？変？」
「良いと思うよ？…とにかくもうさ、2人ともちんちん見たでしょ？ユニスのはほとんど生えてないけど、男の子もあんな風にお毛け

が生えてくるのね。それで、えっちな気持ちになると、ああやってピーンって固くなって、あとは簡単で、ちんちんのこと、よしよししてあげると、男の子はすっごく気持ちよくなっちゃって、最後はティサが言ってたお乳が出るんだよ。普通はもっとたくさん、一生懸命よしよししないとお乳出てこないんだけど…、ユニス、アスリが剥いただけで出ちゃったから、今すごいえっちな気分なんか…、すぐ気持ちよくなっちゃうんか。」

「えっちな気持ちって…。」

ラリーヤの手短でシンプルなまとめのうち、最初に気にかかったところを口に出したアスリは、質問を続けるのを取りやめた。今、声に出しただけで、アスリはおかしくなりかけた。これを1つ聞いたところで、まだ丁寧な解析を要するところは多く残されている。そしてそれらを全部耳にして、おそらくアスリが欲しくなるのは、性器への刺激でしかないはずである。

それよりも今聞くべきは、妊娠についてだ。こちらであれば、いっぱいいっぱいのアスリはやや性の本題から逸れて、純粋な知識としての興味を受けて、本能から上がる声を紛らわせることができる。

「それで、ユニスのお乳が赤ちゃんと、どう関係あんの？ティサ言ったみたく、女の子にかけるだけじゃダメなんでしょ？」

「で、やっと、さっきの話に戻ってくんだけどね…。」

すでに相当にやついているラリーヤが、かなり怪しい笑みを浮かべた。一呼吸を挟んで、今度はラリーヤの右腕が、場の中心に向けて半分とユニスに向けての半分で体が真正面に開ききっている、ティサの下腹へと進んでいく。

「ちょっ！」

このラリーヤの動きに、無防備だったティサもユニスへの注意を全て中断し、自らもユニスのように、両手で股間を押さえていった。ラリーヤはティサの大きな瞳を一度見つめると、アスリとユニスにも、それぞれ意味のある視線を送ってから、改めてティサに向き直って指導を再開した。

「あんね、おまんこの穴に、固くなってるちんちん入れて、おまんこでちんちんよしよしして、中に入ったまま…、かけてもらうんだよ？血が出るようになった子は、それで赤ちゃんできる。お乳でも良いけど、だから赤ちゃんの種。」

アスリの脳は、粉々に砕け散った。

ティサも、ユニスも、多分受け止められなかったのだろう。ラリーヤに問わなければならないことは多々あるというのに、3人とも脳を失って、何も言えない。
洞窟を照らす3か所の火には、脳は確実にない。しかし、こちらはパチリ、パチリと小声の合議を進めている。その奥、入口の方から聞こえてくる滝の水が落ちる音も、3人に代わって静かになった場を取り持っている。

ラリーヤの声は、優しい語り口調であったにも関わらず、自信がみなぎっていた。したがって、ラリーヤの述べた内容に誤りがある可能性は低い。その上で、アスリがぐるぐると重い頭を回す先、たどり着くところは生命の成り立ちであって、それはそのまま自身の生い立ちにもつながっていくこととなる。気分が悪くなりそうなほどに濃かった洞窟の中の空気が、もう一段濃くなってしまった中、アスリはやっとの思いで、新たに生まれた疑問の中心たる自己の起源について、ラリーヤに問うていった。

「…あのさ、それって。みんなさ、私のパパとママに、会ってんじゃん。」
「アスリ!!!」

ティサがアスリを大きく呼んだ。そうである。ティサにしても、思い出深い母と父が、何を成したかまで、到達したに違いない。
鈍いユニスも、これは理解できたのだろう。相変わらずユニスは股間を押さえているが、目元にあった変態が、アスリの途中までの指摘以降、急激に減退していっているようである。

アスリにとって、厳しい現実だ。たしかに、アスリはユニスの子が欲しい。だが、母にとってのユニスが父であったとして、アスリがユニスに興奮するように、母も父に興奮し、父がユニスのように変態であると考えるのは、あまりに苦しい。
その上、父は母に対して、ユニスがかけたようなものを、かけているということになるのである。しかもそれをかける先は、墓地の近くのように手中でもなければ、今日のここでのように髪と顔面でもなく、母は直接体内で受け取ったということになる。
アスリは思考の順序を取り違えたことに気づき、後悔した。まず一番最初に、ユニスを泉の中で受け止めることに目を向ければ良かったのだ。それを先に、性でなく自分の生来に目を向けてしまったのだから、行きつく先は父と母の過去の営みであって、結果として非常に優れない気分に至ることとなってしまっている。

「サイアク…。」

一言だけつぶやいたアスリは、いかんとも言い難い吐き気をこらえながら、両手で鼻から口にかけてを覆うしかなかった。父と母が具体的にどうしたのか、一切想像したくないが、ラリーヤが言うそれだけは、確実に行われたはずである。
「何言ってんの？アスリだって、ってかティサも、ユニスも、もうおっきくなったんだから、できるようになんないとなんだよ？」
「そんなっ！ってか、ママがパパのおちんちん、よしよしするなんて…、そんなんやるわけないよ！」
ティサが声を上げた。こちらは現実逃避をしたいのか、白目の範囲がいつもよりも大きく広がってしまっているように見える。

「でも、ティサのママは、男の子のお乳、アレきたあとに女の子にかけたら、赤ちゃんできるって言ってたんでしょ？」
「…そうだけど、でも、わざわざそんなとこにかけないでしょ！」
「だって、赤ちゃん出てくるとこなんだから、そこに入れてかけなきゃ…？」
「はっ！？赤ちゃん出てくるとこ！？」

今度はアスリが声をあげた。この瞬間、アスリは完全に全て、理解した。すなわち、牛のお産だ。生まれてしばらくもすると、他家に惜しみなく分け与えられ、普段はのんびり荷を運んでいることの多い牡牛たちに、なぜ時々アスリの家に残して飼う牝牛を引き合わせるのか。アスリがたまに目にする、牡牛が牝牛に何かを伸ばして重なる、あの光景は何だったのか。子牛が生まれてくる時、やっとの思いでどこから出てくるのか。過去、深く気にすることもなかった事実に基づいた素朴な疑問は、ラリーヤが因果を提示した今、終始が一貫した。

「マジか…。牛さんと一緒ってことね…。人間の赤ちゃん、産まれるとこは見たことないけど。」
「えっ！？待ってよ！待って！生まれたばっかの赤ちゃんって、どんぐらいおっきいん？あんなちっちゃいとこから！？」
「ティサ、ちゃんと見たことなかったのに作りたかったの？」
「いいじゃん！女の子なんだから、欲しいのは…んっ！ちょっとラリーヤ！！！」

知識の差で優位に立つラリーヤは、慌てふためくアスリとティサが面白くて仕方ないのだろう。この状況でラリーヤは、ティサが侵攻を阻止している下腹部に当てたままだった右手を、何やらおかしく動かしたようである。

「大丈夫、ここって、ちゃんと広がるから。」
「ちょっ…！ラリーヤやめて！ねぇってば！ってか！じゃあユニスのおちんちん、私の、その…、おっ、おまん…、お股に入れないとって…、いやいやいやいや！えぇ…！？ってか出てくる前に、入んないよ！」

凄まじい。父と母が何をしたか、これを考えるとなぜかどうしても気分が悪くなるが、ユニスがティサの中に入るなら、作りとしてはアスリにもユニスが入ることになる。ユニスが渋りに渋って、やっと見せたというのに、また隠している羞恥を、ティサと、アスリの最大の羞恥でもって、つなげてしまうのだ。想像する前から、すでに砕けている脳が、ぐずぐずに煮立ちそうである。
ただ、そうは言っても、ティサの言い分にはアスリも同意できる。あの泉は、これまでアスリが遊んだり苦しくなったりすると湯を沸かせていたが、そもそも出口の大きさは、入り口と呼べるほどの広さもなかったはずであって、ユニスを受け入れるのは相当苦労するに違いない。こんな話になるのがわかっていたのなら、アスリは大粒の方ばかりで戯れるのではなく、1度や2度は、しっかりとそちらの広さや深さも調査しておくべきだったと、今更ながら後悔したのであった。

「だからティサ、おまんこね。入るよ？ってかユニスのなんて、ふにゃふにゃの時よりおっきくなったんだろうけど、全然おっきくないし？それに…。」

ユニスの両眉が、わずかに中央に寄った。勢いに乗っているラリーヤはユニスには全く気を向けず、一呼吸してから、さらにティサに続けていった。

「ティサ、ティサがつけてる、ティサのママのその石。それさ、何なんか知ってってなんかと思ったけど…。うーん、いやでも…、ティサのママのだし、言わんとくか。」
「はっ！？なんの話！？何かあんなら言ってよ！」
「やっぱ知らんのね…。一応なんけどさ、ティサのママって、元々カインタの人？」
「パパもママも、カインタで育ったって言ってた。それがなんか関係…、ねぇ！ラリーヤ！そこ触んないで！」
「やっぱりね。まぁ、知らんのもアレだし…じゃあ、それって、カインタでつけてるとどんな意味になるか、わかる？」
「わからん。知ってたらこんな話、なんないじゃん…？なんなんっ？ラリーヤ？怒るよ？」

怒ると言いながら声に迫力のないティサの一方で、ラリーヤの笑みが強くなる。今のラリーヤは、理詰めであるようでいて、性を説く脅威である。

「へへへ、怒んないで。そのさ、カインタだと、ティサのみたいに立派な宝石の、そこまでのは滅多に見たことないんだけど、やっぱりそうやって綺麗な石とか、好きな男の子に会う時、こっそり腰布の下につけとくんだよ。…で、なかよししたくなった時に、好きな人にだけ見せてあげて、そすうると今日なかよしよししよーよ？って意味になって。」
「なかよし…？」
「おまんこに、ちんちん入れてよしよしすること。なかよし。」

牛と人間の同一性を見出したアスリに続いて、ティサの中で何かがつながっていくのが、その表情を目にするアスリにも、手に取るように分かった。きっと何らかの、これまで気にすることすらなかった小さなかけらが、意味を持って1つとなったのだ。半信半疑だ

ったティサも、やっと父と母の過去に直面し、アスリのように言い難い気分の悪さを噛み殺し始めているようである。
　呆然とするティサは、何も喋れない。この状況に陥っても、性の鬼になってしまったラリーヤは、ティサを仕留めにかかっていく。
「だからティサ、それつけてるってことは、なかよししよーよ？ってユニスに言ってるってことだし、ユニスのこと好きって言ってるってことなんだよ？まぁ…、赤ちゃん欲しいって言ってんだから、ユニスに好きって言ってんのと、もうおんなじだけどさ。」

洞窟の中が、凍ってしまった。アスリは雪も氷も、実際に見たことはない。しかし以前、ロマドウに来る隊商から、吹雪の話を聞いたことはある。極寒の中、風雪に晒された者は、その場で生きていた時の姿勢で固まったまま、息を引き取るのだそうだ。

もちろん、この場にいる全員に息がある。だが、ぬくぬくと生きているのはラリーヤだけで、他の３人は死んでいる。

「おっ…！」

ユニスがどうにか、息を吹き返した。ところが、すぐに死んでしまった。また時間が止まり、たいまつとたき火だけが会話を始めた。

「あ…、なんかごめん。」

バツが悪くなったラリーヤが、ティサに向けたと思われる謝罪を投げた。ティサの氷が溶ける。

「いやいやいやいや！！！」
「えっ！？ユニスのこと、好きじゃないってこと！？」
「いや！もういいから！ラリーヤいいから！」
「なんだよ！？ティサ！俺のこと！？」
「ユニスもいいから！」

ユニスも溶けた。アスリはまだ、凍ったままだ。思った以上に早く、来るべき未来が、来てしまった。このまま行けば、ティサはユニスに添い遂げるための第一歩目が見えてくる。

「何！？それともユニスは、あれ？アスリの方が好き！？」
「えっ！？」
アスリも溶けた。ラリーヤからは、すぐに次が飛び出してくる。
「それとも、私が好き？」
「えっ！？おい！」
「はっ！？ユニス！？待ってよ！アスリなの！？ラリーヤなの！？」
「だからティサ、それユニスのこと好きって言ってんのと、一緒だかんね？」
「うっさい！うっさい！ってか！んっ！んっ……！ちょっと！ラリーヤ！んっ！マジでお股いじんないで！！！ズレちゃうから！！！」
もはや洞窟の事態の収拾はつかなくなりつつある。赤面しているティサは、傍目に見ても明らかだった愛が露呈して恥ずかしいのか、それともユニスの向き先がアスリやラリーヤであるかもしれないという憶測に焦っているのか、はたまたどさくさに紛れてラリーヤが意味不明の戯れを行っていることによるのか、滅茶苦茶である。
完全にラリーヤの独壇場だ。ティサの言葉の後半の声には、快楽が控えていた。おそらく今、ラリーヤはティサの中央部の良い部分を擦っているのだろう。今日のラリーヤの攻勢は、とどまることを知らない。
「じゃあもう、ティサも気持ちよくなってきちゃったみたいだし、そろそろぬぎぬぎして、ユニスにちんちん入れてもらおっか？」
「はっ！？」
「んぇ！？」
また、おかしな方にラリーヤが突き進んでいく。いや、これはお

かしぃのではなく、正しい道であるかもしれない。おかしくなりそうなのは、アスリの方だ。
突拍子もない提案だ。ただ、全体の流れとしては、ラリーヤが口だけで説明して、その次に実習がなければ教育は完成しないのであるから、理には適っている。

「いやいやいやいや！？えっ！？ちょっと！？ウソ！？」
「何？ユニスのこと嫌いなの？」
「違っ…いや、違くなくて、でもない！何でもない！いいから！そうじゃなくて、えぇっ…！？」
「へへへ…、好きって言うの、恥ずかしいよね。でもさ、そんな綺麗な石つけてるなら、最低でも、なかよしはできないとじゃん？」
「バカッ！！ってか、それにだってほら、今日アレだよ？なかよしって…、入れるんでしょ？血出てるのに、無理でしょ！？」
「別に私、全然あの日でもやってるけど。」

ごく自然にラリーヤは話したが、またとんでもないものがぶち上った。思わずアスリも、自分のへその下あたりを押さえながら遮った。

「えっ！？ちょっと、それってさ、ラリーヤって、その…、なかよししたことあるってこと？」
「そうだけど…？」
「えぇぇえええ！？！？！？」
「はぁぁあああ！？！？！？」
「おっ！おっ…！」

アスリの勘は、正しかった。今日、アスリは無事に村まで帰れるのだろうか。ここまで聞いては、目の前の全てが信じられない。
ユニスに至っては、驚きの声が獣のものになってしまっている。

そろそろまた、漏らしてしまうのかもしれない。アスリも腰布まで、確実にダラダラと相当染みてしまっていて、興奮で全身の骨が爆発しそうである。ティサに至ってはラリーヤにじわじわと擦られながら、この話を聞かされているのだから、外に溢れているらしい血液が、たき火から上がる火の粉に引火してしまっても、おかしくはない。

「え、そんなアレの時にするのって変かな？」
「そうじゃなくて！そうじゃなくて…、じゃなくて！いや、そうなんだけど！そうなんだけど！えっ！？誰と！？ユニスじゃないよね！？」
「いや、だからユニスのちんちん見んのは、ホント今日初めてだって。こんな皮びろびろのちんちん。」
「おっ…！」

ティサは忙しくなってしまったし、やはりユニスは、獣になってしまった。アスリはまた凍りついている。

「えっ！？じゃあ、何！？ロマドウ来る前、カインタ！？ってことは、好きな人！？」
「へへへ、そりゃあ好きな人もだし…そうじゃなくてもさ。」
「えぇえぇえ！？！？！？」
「ウソでしょ！？！？！？」

またアスリは解凍された。一体、ラリーヤはどうなっているのか。こんなに言葉で殴られるのは、アスリも経験がない。

「何！？じゃあ1人じゃなくて、もっとってこと！？」

ティサの質問は終わる気配がないし、ティサが終わったところで、

次はアスリが続ける役目になる。ラリーヤがティサに伸ばしている右手は、何かおかしく動いているようでもあるが、ティサの中ではそれによる感覚よりも、興味と驚きが完全に勝っている。

「もっと、ってかさ…。まぁ、いっか。」
「何！？いっかって！？」

来る。これは絶対に、ラリーヤから強烈な何かが来る。

「いや、もう言っちゃうとさ。私、カインタの男の子、全員食べちゃったんだよね。」

もう、３人とも凍らなかった。代わりに大きな石が３つ、洞窟の中に出来上がった。

どういうことだろうか。ラリーヤは、カインタの男子全員を、食したと言った。ここまでの話を踏まえれば、今の言葉の意味合いは当然、捕らえた狩りの獲物のように物理的に捌いて、その肉を口にしたということではない。それは獣の形の石となったユニスであっても分かるはずであるし、その程度の状況を読む力をユニスには持ち合わせていてほしいと、アスリも願っている。

また、今のラリーヤの話は、あくまで能動的な表現が中心だ。仮にも誰かに誘導されていたであるとか、そそのかされたであるとか、想像するとおぞましく、対してアスリの体の内側で何かが不思議と煮えたぎってくる感覚のある、強いられたということであるとかであれば、おそらく食したなどとは言わずに、逆に食べられてしまったというような言い方となるだろう。

つまるところ、食したとは、ラリーヤが自らの意思でもって、次々に槍をあの泉の中に放り込んだということになる。しかも、カインタの男子、全員分だ。総じて何本になるのか、アスリは皆目見当

がつかないが、たしかにそれだけの数をくわえこんだのであれば、ユニスの持ち物に対しての評価は客観的であって、小さく、皮だけは見たこともないほどに発達しているということなのだろう。

「…いや、あの、みんな黙んないでよ？」
「ちょっ！！！んっ！そこさわさわしないでって…！」

先ほどティサはユニスを握って良いように操作していたが、今度はティサがラリーヤの手のひらで転がされる側に回っている。ティサも徐々に抵抗が弱くなってきているのを見るに、着実に良くなってきてしまっているようである。黙っているままでは辱めを受けることとなるティサは、3人の中で最も先に聴取を再開していった。

「…ってか、あのさ。それってもしかしてなんだけど、ラリーヤって、子どももいるの？え…、ごめん。カインタに残してきちゃったとか…。」
「いや、大丈夫。子どもいないよ。」
「あ、あのさ、でもその、なかよし…すると、赤ちゃんできちゃうんでしょ？ラリーヤ、カインタの男の子と、全員となかよししたってこと、なんだよね？そしたらさ…。」
「まさか！男の子がぴゅっぴゅしそうになったら、おまんこでよしよしするのやめて、お手てやお口とか、お胸でよしよしするんだよ。まぁ大丈夫な日もあるから、そういう日は思いっきり全部でも良いんだけどね。」

手と口と胸だそうである。アスリは卒倒しかけている。手もおもしろいだろうし、本当に食べてしまうのも良いし、乳首と核を合流させるのはもっと良い。その真横ではティサの顔に1割だけ、神妙さが戻っていった。

「…それって、赤ちゃん作らんってことでしょ？　それなのにさ、なんでなかよしすんの？　赤ちゃん作んのにすんじゃないの？　練習ってこと？」
「んふふ…、そう、練習かもね。でもさ、それだけじゃなくてさ…。」

いやらしい手つきのラリーヤの右手が、ティサの中心から外れてゆっくりと胸元の方へとせりあがっていくと、股下を防御しようとして、ラリーヤの手首を掴むティサの両手も、力が緩んでいったようだ。そうして、ティサの両胸の中央に、ラリーヤの右手が当てられれば、隣にいるアスリの小さな胸の真ん中にも、同じようにラリーヤの左手が置かれていった。
「なかよしするとね…、女の子も、すっごく気持ちいいんだよ？」
とろりと、瞳そのものがこぼれてしまいそうな表情となったラリーヤからのささやきが、耳からだけでなく、胸中にも直接ぬくもりとなって、アスリの体内に響き渡った。アスリはラリーヤに、完敗した。

もうダメだ。無理である。燃え上がりそうに体中が火照っているところに、快楽を約束されては、アスリも素直にラリーヤに従って、洞窟のたき火が燃え尽きるまで、母に謝罪をしたい。

「さ、ティサとアスリもぬぎぬぎしよーよ？着たままでも良いけど、すっぽんぽんの方が気持ちいいよ？」
「だから！私今日！」
「だから大丈夫だよ？終わりかけだけど、私もだし。血ついたら、外の池で流してけばいいじゃん。ほら、ユニスもちんちん出して？」
「おっ、俺…。」
「何？ちんちん苦しい？先にもっかい、ぴゅっぴゅしとく？ぺろぺろしてあげよっか？それともお胸が良い？」

アスリとティサの胸から手を離し、ユニスに色でもついていそうな視線を送り始めたラリーヤを目にして、アスリは確信した。初めて会って以来、今日まで一切気づくことができなかったが、ラリーヤはとんでもない変態だ。膨大な経験値がある分、はっきり言って、どうしようもない変態であるユニスを、はるかに上回って変態である。

思えば、ラリーヤはあの絶望の淵にあっても、まっすぐに成すべきことを成し遂げた、強く美しい女だ。その強靭な精神と豊満な容姿が一度でも性に振り向けられてしまえば、カインタの少年たちの全ての槍が駆逐されてしまったことにも、説明がつく。

「ラリーヤ、ヘンタイ…。」
「んふ…、やっぱり私、変態かな？前もみんなに言われてたし。で

も、アスリもおまんこ、苦しくなってんじゃない？アスリにもぺろぺろしてあげる？」
「えっ、私っ…！？ってか、カインタの女の子って、みんなそんななん？」
「うーん、私みたいに何でも言っちゃう子、ほとんどいなくて、誰と誰がみたいなのしか聞いたことなかったけどさ。ホントに嫌がった子以外、女の子ともたくさんなかよししたんだけど、みんな気持ちよくなるの大好きだったし、まぁまぁなんじゃない？あ、でも多分私が1番だと思う。だっておじさん以外、結婚してない男の子は、変なヤツまでぜーんぶ1回は食べたし！」

絶句だ。実績の数はひとまず考慮から外すとして、先ほどラリーヤは、男子を受け入れて、内部で優しくする趣旨のことを語っていた。では、槍を持たざる女子同士で、果たして何をどのようにするというのだろうか。やはり中央部をせめぎあうのか、または突合か、仮に突き合わせるのであれば、アスリも唯一大きさの面でなら変態の化身たるラリーヤに勝るかもしれない。

「いや、全部ってのもアレだけど、女の子って…。」

やはり、過去のラダンの性器で自分を励ましていたアスリの行いは、悪であった。ラリーヤのテンションがぐんぐん向上していく一方、今の話を聞いて何かを言いかけたティサの方は、直前よりも神妙さの割合が高まってしまっている。対して、アスリは姉の女性器で興奮して最後までやり抜いてしまえるのであるから、ラリーヤが口走るように、中央を口に含んでもらうことを心に思い浮かべるだけで危ないし、ラリーヤを広げて全て眺めてしまうことも趣深い。
この際、ラリーヤも今日は出血していると言うのであるから、比較のためにティサの方もどの程度の状況なのか、広げて確認してみるのも素晴らしいはずである。この体たらくではラリーヤはあまり

恥ずかしがらないだろうから、ラリーヤには自分を辱めてもらうとして、アスリはティサを徹底的に羞恥させるのも良い。その横では、ユニスが何度も漏らしてしまうだろうし、溢れた乳は香り高きエッセンスとなる。

「…えっ？ちょっと、引かないでよ？ってか、ティサもアスリも、せっかくちんちんあんのに！なんで何もしないん！？私、こんなになかよししてない日続くの、多分やり始めてから1番長いんだよ？もうおまんこぬるぬるになっちゃってるし、我慢無理…。とりあえず2人は見ててよ？」

おそらくこれが、ラリーヤがここまで場をとりなしてきた狙いなのだろう。都度都度、悪い笑みを浮かべていたラリーヤが、どの時点でその帰着先を自らとユニスの性器としたのかは定かではないが、余裕たっぷりと、もったいぶっているようにしながら、結局ラリーヤの腰布の下も洪水しているのだ。

人生とは冒険であり、探求である。アスリがこの洞窟の中で、文字を必死に読んだのも、全てを読んだ先に何が待ち構えているか、期待し胸を躍らせたことによる。今からラリーヤがユニスを使って披露してくれるのであれば、それを見て学習し、ラリーヤに続いてティサと順々にユニスを受け入れてみることは、是非挑戦すべき旅だ。見学にあたってアスリに不足するのは、中央部への刺激であるが、ユニスと接続するために、これから全身が張り裂けてしまいそうなほどに恥ずかしい個所を、3人の前にさらけ出さなければならないのであれば、高ぶりすぎて気絶しないようにすることだけは気をつけて、いつもの手口を洞窟の中の明かりで照らし出してしまった方が良いだろう。

お預けを受けている犬のように、よだれでも垂らしそうなアスリの面前では、これまでに見たことのないほどに目を輝かせている満

面の笑みのラリーヤが、頭を左右に振って髪を後ろに流し、手首に結んでいた紐で髪を後頭部で取りまとめていった。そうしてラリーヤが、アスリにとっては強く、ラリーヤにとっては弱い変態を見定め、自らの腰布の結び目に手をかけた時であった。

「ちょっ！！！ラリーヤ！ホントにやんの！？」

ティサがラリーヤを呼んだ。まもなく確実に幸せになれるはずであるのに、それを遅延させる動きを見せるこのティサの肩を、アスリは持つことができなかった。

「うん。おまんこがつらい。ティサ先でも良いよ？まず自分でしとくから。」

思った通りラリーヤは、ラダン以外のアスリの仲間であった。無論、通報する気はさらさらなく、そうであればアスリもラリーヤの横に並んで、ひとまず手早く済ませたい。

「先でってか、自分でってさ…、いやいやいや、ってか！ってか！だいたい無理でしょ！ユニスのちっちゃいのか知らんけど、絶対あんなとこに入んないって？だってそうじゃん、アスリもそう思わん？あんなちっちゃい穴なんだよ？そこにさっきのじゃん？無理じゃない？」

「まっ、まぁ…。」

「えっ、アスリもその、なかよし！？したことあるってこと！？」

「ないないないない！！！！」

「いや、だからね、入るとこ今から見せるからさ。それとも、先にアスリに入れてもらう？ほら、アスリならユニスに、おまんこにちんちん入れてってお願いできるし、そしたらユニスも頑張らなきゃじゃん？」

「無理でしょ！絶対入んないよ！そんなんしたら…、アスリがかわいそうじゃん！」

アスリも表立っては言わないが、究極の変態のラリーヤの方がここは正しく、ティサは無駄な抵抗をせずに早く覚悟を決めて、ユニスとつながるべきだ。先ほどのユニスにしろ、今のティサにしろ、森で育つとこれほど意気地なしになってしまうのであろうか。

ただ、そう考えるのは本能であって、理性の側に立てば、ティサの言い分も十分に理解できる。たしかにどう考えてもあの泉は狭く、せいぜい指が1本入るかどうかであって、そこに入れてしまうというのであるから、ティサは恐怖しているのかもしれないし、アスリも怖い。その、どのようにされてしまうのか不明瞭な得体の知れなさが、アスリにとってはなお良い。

いずれにしても、辛いとまで述べているラリーヤにとっては、意義のない議論だ。変態の煌めきが実態であるラリーヤは、理知にあふれて落ち着いた大人の女の口調で、駄々をこねるティサに対して、絶対的に自身の勝利が約束されている取引を持ち掛けていった。

「…じゃあさ、入ってるとこ見せたら、ティサも入れるってのでどう？私だってティサがヤバい時、声出なかったけど背負ってきたんだし、１回だけ、お願い聞いてもらえん？」

「はっ！？それは…。ってか、それは別に1回だけじゃなくて、その…、別だから…いつでもなんでも言ってくれていいし、ラリーヤにもいっぱいありがとうしなきゃだし…。」
「じゃあ、決まりだね。怖がんないで大丈夫、ちゃんと教えてあげるから。私のよく見てて。」

予想通り、このやりとりでティサに勝ち目はなかった。そもそも、ラリーヤの過去の実績を仮にも疑うのであれば、カインタで対峙した総量に関する点だけであって、受け入れられるか不可能かという点では仕掛けるべきでないのだ。それにしても、この契約はティサとラリーヤの間だけで成立しているが、アスリは横で眺めながら自慰をする役目を拝命することとなるようだ。ラリーヤとティサが達成したら、アスリも近いうちにあの絡ませるような手のつなぎ方とあわせて、ユニスを試すしかない。
降伏目前のティサは、最後の抗弁を続ける。

「それって…、私たちに、ってかユニスにも、おまん…、おまん、こ、見せるってことでしょ？ラリーヤは、恥ずかしくないの？」
「ティサ、おまんこって言うだけで恥ずかしくなっちゃうもんね？でもさ、私も何百回やっても、すっごく恥ずかしいよ？」
「じゃあ…！」
「でも、恥ずかしくなった方が、気持ちいいんだよ？全部見られちゃってる時に、やだ！見ないで！って思うと、すっごく…。しかもさ、ティサ、んふふ…、ユニス好きなんじゃん？」
「だから！！！ねぇ！」
「ティサ！！！」

「好きな人とする時、お胸も、おまんこも、ぜーんぶ見られてるって思うと、すっごく恥ずかしくて、すっごく気持ちいいんだよ？」

アスリは恐ろしい変態であるラリーヤと、残念ながらシンパシーが合うようだ。大変わかりやすい。まもなく、アスリは横で見るだけになるとしても、1人だけ服を着たままでいるわけにもいかないだろうし、脱ぐべきだろう。最悪としか言いようがないほどに苦しい羞恥だが、この小さな2つの胸と、腰布の下の大きな秘密は、ぜひ続けざまにじっくりと観察されて、馬鹿にされてしまうのもかなり堪えるかもしれない。

なぜユニスはあの水辺でアスリのことを、勝手に先走って全部見てしまったのだろうか。初めて見せると考えれば、どうなるのかわからないほどに、芯まで震え上がるであろう何かがあったはずだ。反面、見せているからあの伏し目があることを、アスリは知っているし、これだけで芯まで震えてしまう。真っ赤になった頬と、逸らせているのか見つめているのかわからない細目を、アスリはまた目にしたい。

「それじゃユニス、お姉さんがよしよししてあげるからね？」
「ラリーヤ、マジ…？」
「マジでしょ？ほら？」

何かを示す言葉を発したラリーヤは、おもむろにユニスの真正面に体を位置させ、膝立ちの姿勢を取ると、情けないユニスの頬を両手で取った。そして、ユニスの頭をゆっくり自分の方へと傾けていき、ふくよかな胸の中間へと着陸させていった。

ラリーヤに埋まってしまったユニスは、肩を揺らしつつ、自らの股間を押さえる力を強めているようである。アスリももっと胸が欲しい。ラリーヤほどでなくとも、ティサやラダングらいの大きさがあれば、今のラリーヤのようにユニスを包み込んで、追い詰められ

るのだ。まさに包容力のあるラリーヤは、優しく胸の中の弱者に向けて、続けていく。

「ねぇ、ユニス。一応だけど、ユニスってぴゅっぴゅできるし、もしかして誰かともう、なかよししたことある？」
「ウソ！？ユニス！？」
「んぅっ！…ぷはっ！ないに決まってんじゃん！」

あれほどの胸で囲まれると、かなり息苦しくなるようだ。それでも顔を離さなかったのだから、ユニスもアスリの見込んだ変態だ。それよりもさらに変態のラリーヤは、ユニスが顔を上げて一言述べると、またユニスの頭を抱え込んで、自らの胸へと押しつけていった。

「じゃあ、ユニスは初めてだね。いきなり私で、ユニスのちんちん、もぎれちゃったりしないかなー？」
「んんっ！！！んっ！！」
「んふふ、お胸、嬉しいの？いいんだよ？触っても？ほら、ちんちんのお手て、こっちに持っておいで？」

アスリはユニスが好きだし、究極の性の対象だ。ただ、今のユニスは、あまりにも羨ましい。どういうことかと言えば、アスリもラリーヤに、このようにしてもらいたい。たとえ同性でも、ラリーヤの優しさを受けながら、あの大きな胸がどれほど柔らかいのか、確かめてみたい。
意気地なしのユニスは、ここまでされてもなお自分の性器を触っている方が好きなようだが、エスカレートしつつあるラリーヤの行動は、ユニスの1本に向かって真っすぐに突き進んでいる。ユニスを胸に置いたままのラリーヤが、右手で片方ずつ肩で留めた上着の結び目を素早くほどくと、ユニスの頭のある胸側よりも先に、まず

ラリーヤの背の上部がはだけていった。
　次は、アスリから見えない側に、ラリーヤの右手が下りていく。怪しげな右手は、おそらく腰布の結び目を探しており、まもなくラリーヤの尻の割れ目も出てくることとなるのだろう。もうここまでくればラリーヤの尻を見ながらで良いから、アスリは自慰がしたくて仕方ない。

「じゃあ、ユニスの1番最初、もらっちゃうね？」

　最初という、あまりに尖った響きだ。ラリーヤの胸中のユニスは、もうすぐその所有者と、１本でつながる。

「待って…！！！」

　ところが直後、待ったの声がかかった。ここまで事態が動いて、止めにかかるのは1人しかいない。脱ぎかけのラリーヤも、ラリーヤの女性らしさを堪能している変態も、傍観するだけのアスリも、丸出しになったラリーヤの左肩に手を置き膝立ちとなった、真剣な表情のティサに視線を注ぐ。

「…あの、ラリーヤ苦しいんだよね？だから、ユニスなんて…、ユニスなんて、好きにしてよ。でも私、ユニスの、1番最初だけ、それだけ欲しい…、かも。」

　ついにティサが、正直になった。たった今、ユニスが向かい合うべき順番が、前後した。ラリーヤは最初などと、余計なことをいわなければ1番手だったのだ。

「ダメ？」

潤んだ瞳のティサが、小さく首を傾げた。力のこもったダメ押しだ。

アスリは、もうおかしくなってきている。ラリーヤにふしだらな思いを抱いただけでなく、観念したかのように恥ずかしそうに語ったティサの表情にも、アスリは欲情してしまっている。

別にアスリは、ティサもラリーヤも、それぞれかけがえのない友人だとは思えど、ユニスに向けるように恋心を抱いてはいない。しかし、ラリーヤの言った女子同士の性であったり、その延長線上に思い浮かべてしまうラダンの性器であったりは、2人に対しても本能のままの有り様を示すことを認めている。ただ、それは単なるアスリの心中でのゆらぎであって、自身が対面する現実と一致する訳もない。

「やっぱりね。それじゃさ、ティサもおいで？ユニス、先にティサとなかよししよーね？」

「いや…、でもその…、今日は無理だよ。何回も言うけど、アレだし…。」

「じゃあ終わったらできんの？あさってぐらい？そんなら私も我慢するけど？」

ティサが間を取った。明らかに躊躇しているが、時間切れだ。

「……無理でしょ、やっぱり。あんなとこ、入んないよ？」

「だから、私がユニスのちんちんおまんこに入れてるとこ、見せてあげるって！」

「ダメ！！！ユニスの初めて、お願い！私、欲しい！お願いだから！もう、そのあとはワガママ言わないから！そのあとなら…、ラリーヤいくらでもユニスのこと、なんでもしていいから…。」

「じゃあやっぱまず、ティサが入れなきゃじゃん？」

「でも…、無理だよ…。」

ティサの言説に、論理性はない。しかし説得力と、抑止力がある。最後の悪あがきなのかもしれないが、非常に強固な戦術だ。もう先ほど以来、ラリーヤは調子づきながらティサのユニスへの好意を適度に暴露し、ティサははっきりしない態度を取りながら、事実上、無言の肯定をしているのに等しい。その状況下で、ユニスの初回を譲れと請われれば、ラリーヤも応じないわけにはいかないし、万が一にもラリーヤが理性で制御できずに暴走してしまった時は、アスリがその顔面に股間を押し当てて、ラリーヤに息をかけてもらいながら、食い止めるだろう。

ここにさらに、自分のものには入らないと述べれば、この場にユニス以外に男子はいないのだから、ラリーヤはそもそも入るかどうかを証明をすることすらままならない。すなわち、ユニスの貞操喪失権は、依然としてティサが保有しながら、男女間の実際に関して立証がないのであるから、ティサが受け入れられないと言えば、それが正になるのである。

言い崩すことのできないティサの無茶を前に、ラリーヤは胸と尻が外に出そうである一方で、手も足も出せない。当然、ティサの見せる防御に狡猾な計算が垣間見えれば、ラリーヤも無視して良いだろうし、アスリもラリーヤの顔の代わりに、ティサの顔へと押し付けて、その次は血まみれだという性器に、粘液にまみれた自らの性器を重ねてやるだけになる。だが、ティサは確実に極めて本心を述べていて、愛するユニスの最初という、ふと気を抜けばアスリまで頂きたくなってしまう不思議な概念と、自身の肉体の物理性というアンバランスによって、矛盾するループを成り立たせているのであるから、ティサの意向は尊重されるべきだ。

アスリの隣で、絶望の中でも諦めなかった女の、深く大きなため息が、洞窟の中に吹き込まれた。もうこれ以上、ティサを追い立て

ることはできない。あっけない幕引きをアスリが予感し、解散後の1人で行う母への謝罪をどこで行うべきかまで、アスリが考えをよぎらせかけた時であった。

「…わかったよ、ティサ。見せてあげるから。そしたら、ホントに、ホント、絶対ね？　ユニスのちんちん、ティサのおまんこに入れんだよ？」

「だから！ごめん…、ユニスの最初だけは、お願いだから…。」

まさかラリーヤは変態をこじらせて、強引に突破するのだろうか。そうであるなら、早速アスリもラリーヤを押さえつけて、腰布をほどいて女同士というものを教えてもらうしかない。

「だからさ、わかったって。そうじゃなくて、ユニスのは…、今日は一旦いいよ。」

蜂起の取りやめを宣言したラリーヤは、胸元の両肩に手を置いて静かにユニスを離していくと、ラリーヤに染め上げられた布のようになってしまった、場違いな弱い変態の顔も持ち上がった。それに合わせて、ラリーヤの上衣の前面も、はらりと倒れるようにして開いて、上半分の胸元の肌もあらわになった。大きな乳房があれば、ずり落ちそうな服すら留め置けるのだ。

「今日はってことは…。」

「別に明日でもあさってでも、ティサがそこまで言うんだから、ユニスの１番最初は、ティサだよ。」

すぐさまティサの顔に、安堵が広がっていく。同時に、ラリーヤの肩に置かれた右手も、だらりと脱力して、ティサの膝立ちは、つま先を立てた正座へと形を変えていった。

「ありがとう、ラリーヤ。つらいのに、ごめんね…。えっ、でも見せるって、あと、みんなおちんちんないじゃん！えっ、アスリ、も

しかして…？」

「いや、私も女の子なんだから！ないから！」

「それじゃ、えっ！どうすんの…？」

もうティサは、大分疲れているのだろう。次から次へと手を変え品を変え、洞窟の中を揺さぶり続けているラリーヤを前に、湧き上がってくる疑問をどうにか口には出してはいるが、声には少しずつ影が出始めている。

対してラリーヤは、今にも乳輪やら乳首やらが見えてしまいそうだというのに、はみ出んばかりの乳房と同様、性が全身から溢れ出して、活気に満ちている。ユニスの貞操を守るのに手いっぱいで、一転して打つ手のなくなったティサに、ラリーヤが寄越したのは不敵な笑みであった。

「あんさ、私、ホントにカインタの男の子、みんな食べたんだよ？最初はマジでそんな気分になんなかったし、あと来たばっかだから良い子にしなきゃって我慢してたけど…、ちんちんからぴゅっぴゅすんの見てたら、もう今日で完全に無理になった。皮びろびろの、変なちんちんだったけど。だからさ…、ね？」

アスリは、嫌な予感がした。この言葉の先にあるのは、ロマドウでも食事をする旨であるに違いない。

「いや、ちょっとさ！まさか、ダカクとかやめてよ？ユニスみたいに剥いたらお漏らしじゃなくて、真っ赤になって、ピーピー泣いちゃうんだよ？」

「良いね、ダカク。ダカクって、初めから思ってたけど、アスリとお目めそっくりで、かわいいよね。」

いやらしい目で相手の目を見つめながら、目の話をするなど、何

を食らえばできるようになるのか。カインタの男子を、全部食せば成せるのだ。
　はだけていない下半分の乳房の頂点が、どこに位置するのかは、ラリーヤの体を横から見るアスリにも、おおよそは想定できる。瞬時、その部分をつまみ上げてしまうことがアスリの脳裏をよぎったが、ひとまず通常の形の注意が、アスリからラリーヤに向けられていった。

「いや…、ホントにやめといてよ。ママとかに余計なこと言われたら、私も困るし。」
「まぁ、ダカクはそのうちとして。それとは別に、ロマドウで食べてみたい人、いるんよね。」

　不敵だったラリーヤの笑みが、さらに不敵になる。案の定、ラリーヤはサバンナを闊歩する獣のように、ロマドウでも捕食者になろうとしている。アスリは別にロマドウの将来を統べる予定も野望もないが、予測不能のラリーヤが食べてみたいと言っている以上、村の近未来には不安しか抱けない。もしラリーヤがどうしても村に性を向けたいのであれば、今の段階では苦しいアスリに全てをぶつけて、その間にユニスはティサにぶつけて、その後にユニスのおこぼれもぶつけてもらう方が、アスリも余計な気苦労をせずに済むはずである。
　それはそうとして、ダカクもラリーヤに食される運命のようだ。あの乳房なら、ダカクは剥き出しになっても泣かずに我慢できるだろうか。とにかく無駄な考え事よりも、ラリーヤは誰をまず狙うのか、それが重要だ。

「…ラリーヤ、なかよしってさ、その…、する時さ、大事なところ見せっこになるんよね？それって、相当、なかよしの意味じゃなくて、ホントの仲良しな人じゃないと…。」

本能などおくびにも出さずに途中まで喋ったアスリに、また嫌な予感が走った。ラリーヤはロマドウに来て声が回復してから、ほぼアスリたちと毎日一緒に過ごしている。この日々の中で、長時間やりとりしたことのある男性はユニスとダカクのほかには、あと2人しかアスリには想像できない。

「はっ!?うちのパパ!?それとも、族長さん!?」

「いやいや!さすがにね、結婚してる人だと、バレた時大変だから…。もうアレはマジでこりごり…。」

得意げなラリーヤの顔から、不敵さが消えた。人のものまで食べれば、懲り懲りする目にあうのは当然だ。何がバレたのかはだいたい予想がつくが、バレた後に、一体ラリーヤは、どのように懲らしめられたのだろうか。やはり剃毛と針だろうか。

それでも結局ラリーヤは、ラダンのあの姿さえ糧にしてしまったアスリと同じく、性そのものには懲りなかったようである。置きたいまつの先の何かを見ていたラリーヤの瞳は、一呼吸の間の後、すぐにまた元の不敵さを取り戻して、洞窟の中へと舞い戻ってきた。

「まっ、誰でもいいじゃん?」

「マジで誰なん?」

「…いや、私もホントの名前知らんし。」

「ウソ!?名前も知らんのに、よくそんな…。」

「名前なんかより、ちんちんどうなってるかの方が大事!まぁ、とにかくさ、今日は見せられんから。ここにいないし。できるだけ早く、明日か明後日にはなんとかするよ。今日はこれで帰ろ?私、考えとくから。」

今日の課業の終了を勝手に宣言したラリーヤは、両肩の紐を結び

始め、大きな両胸も衣服の下へと収まっていった。そして何事もなかったかのように立ち上がり、地面につけていた膝のあたりを手の甲で払うと、洞窟の外に向かって1歩踏み出しかけた。

「つらっ…。」

突然、ラリーヤは両手でへその下あたりを押さえて、小さくつぶやいた。不穏なその背中に、ティサが真っ先に声をかけていく。

「えっ、どしたん？大丈夫？あっ…、ラリーヤも今日、アレなんよね？」

「そうだけど、そうじゃなくて…。あぁあああああああああ！！！」

「えっ！何！？何！？」

「ラリーヤ！！！」

「マジですっっっごい、えっちな気分でつらい！！！」

アスリの心配には及ばないようだ。ティサも声掛けして損をしただろう。ただ、ティサはユニスの貞操を管理しているのだから、それぐらいは仕打ちを受けても仕方がない。

もうあれこれ開示しきってしまったラリーヤは、これから毎日、ずっとこうなのだろうか。ユニスが静の変態なら、ラリーヤは動の変態だ。こんなのが2人も近くにいては、アスリも手が焼けるし、手以外も焼ける。

「ダメだ、おまんこぬるぬるしすぎてるから、帰る前に私、流してくる…。みんな一緒に流す？ユニスとか、さっきのお乳も服で拭いちゃったし、それも洗わなきゃでしょ？」

「いや、みんなでとか…。ってかもう俺の見んなよ？」

「大丈夫？ちゃんと1人でできる？ユニスのちんちん、皮びろびろなんだから、ちゃんとむきむきして中身も洗わないと？さっきすっ

ごいいやらしい臭いしたし、洗ってないんでしょ？私、洗ってあげよっか？」
「バカ！自分で洗えるし！」
「ラリーヤ！そんなん言って、こっそりユニスとなかよししようとしてない？」
「いや、そんな！お口でぺろぺろして、綺麗にしてあげようかなって思っただけだし！」
「はっ！？そんなんダメっしょ！それも私が先にやりたい！」
「んふふ、ティサっていろいろ言ってる割に、積極的だよね。お口なら血出てないんだから、今日でもできるんじゃない？」
「それは…、それもまずラリーヤが見せてくんないと！」

カオスだ。この洞窟の中で、全員おかしくなってしまった。いくらたき火や置きたいまつの煙はどこかに抜けていくからとは言え、空気は濃くなるばかりだったのだ。
アスリは３人にかける言葉もないし、頭が痛い。もっと正確に言えば、頭は痛くなく、ラリーヤと同じで気分的に辛い。
この隙をついたのは、奥で最も弱くなっていた、４人中2位の変態である。ラリーヤとティサが真剣なのか、馬鹿なのかわからないやり取りをして、アスリもそちらに気を取られている間、ユニスは一瞬で服と履物を取りまとめると、上向きにさせた槍をチラリと見せて、一目散に洞窟の出口へと走り抜けていった。

「あっ！！！」
「逃げた！！！」
「えっ！？でも今もおっきくなってた！！！」
「ウソ！？ずっとおっきくなりっぱだったん！？」
これにはすぐに、ラリーヤも続く。ティサも地面から直ちに立ち上がり、スプリントしていく。２人にユニスは捕まえられないだろ

うが、捕まえたところで何をしようというのだろう。やはり口で清掃するのだろうか。そうであるなら、２人だけでは手に負えないだろうし、アスリも手伝う用意がある。ただ、もう今のように猿になったユニスは、絶対に捕まえられないだろうし、追いかけるのも無駄であろう。

ひとまずこれで、アスリはただ1人、洞窟の中に残された。1人になってしまうと、この場は普段通り文字とともにある、知性の空間だ。ぼんやりとするアスリが、もやのかかった頭では絶対に読みこなせない壁に目を向ければ、ちょうど目に入ってきたものは、例の裸の男の言葉である。

この壁に記された内容は、ほとんど理解できなかった。しかし、今日はユニスが全て見られた。その上、ラリーヤから知識も授かった。今日はもう、十分だ。

地面に座る姿勢をろくに気にする間もなく、おかしな位置を取っていた足を伸ばしたアスリを見舞ったのは、体から外れてしまいそうなほどの痺れだった。だが、そのもっと上の足の付け根、そこに位置する感覚は、恐ろしいほどに研ぎ澄まされている。

今しかない。空気が濃い今、アスリはこの空気で正しく発狂するのだ。

慰めのもとへ

アスリはゆっくり転ばないように注意しながら立ち上がると、痺れの引かない足で洞窟の出口へと向かい、目を細めながら、午後の強烈な日差しを一度浴びた。牛たちがくつろぎ、犬もその横でひっくり返っている先では、思った通り、ユニスはもうアスリの位置からは見えないところに行ってしまったようで、かろうじて捉えた走るティサの後には、見ている側まで息が上がりそうなラリーヤの肩が続いている。

おそらく3人は、すぐにはここまで戻ってこない。その認識と同時に、アスリの右手は腰布の結び目をほどいていた。黒い蝶とともに舞う滝へと向かう風は、アスリのところまで流れてぶつかり、それによってアスリがどうにか腰布の下で隠しきった水分は気化して、滝から上がる水しぶきと同化していく。

我慢がならない。アスリはまた洞窟の中に戻ると、まず1つ目の置きたいまつの前で腰布を広げ、何度か大きく風を送って火を消し、それが済むとたき火も消し、さらにもう1つの置きたいまつの火も消して回っていった。

洞窟は、初めてこの場を見つけた日のように、外から差し込む薄明かりだけの、真っ暗な空間に戻った。その弱い光からすら身を避けたアスリは、闇の中、一番奥の壁に背を当てて座り、腰布を両ひざの上へと掛けていった。

かつて、家中でラダンが耽っていた時と同じ姿勢だ。アスリは右手を中央に置き、左手は上衣の中、右の小さな乳房へと這わせていく。

始まった。滝よりも水っぽい音がアスリの耳に届くよりも早く、慣れ親しんだ快感が、全身に広がる。約ひと月ぶりの大波が、アスリに向けて迫る。限界が目前に控える中、どうしても言いつけを守れずに禁忌を犯すアスリに残された、最後まで清らかであろうとする良心は、謝罪の言葉をつむごうとする。

「っ…！っ…、マッ…！んっ！ママ…、くっ…！ごっ、ごめん…っ！なさい…！」

直後、アスリの源泉から脳に向けて、波が滝登りするように激しく遡上していった。まだだ。これではユニスがいない。

耐え難い羞恥によって男の涙まで流した愛しき表情、引き締まった筋骨隆々の肉体、そこに不釣り合いな長い皮にくるまれた槍、不条理にも剥き出しにされてしまった赤みを帯びた核、そこから立ち上る香り高い狂気、そして勢いよくアスリに目がけて飛び出してきた、将来を作らんとする乳、これら全て、アスリは死ぬまで絶対に忘れてはならないし、死してなお、魂に刻み込まなければならない。情けなくて、意気地なしで、どうしようもない変態であるユニスの、どの一面を、どの瞬間を振り返っても、アスリにとって全てが全て、愛おしい。

「あっ！ユニスユニスユニスユニスユニスユニスユニス！んっ！ユニス！！！」

アスリは火の消えた洞窟の中で、大きく煌めいた。今日はどれだけ待っても、引き波が来ない。地面に直接下ろしている尻はガクガクと激しく痙攣し、痛みが走る。それでも、それすら快楽となって、アスリの体中を駆け抜けていく。

もう、アスリは手を動かさなかった。ほんの少し前までこの場にいた、ユニスの姿を思い浮かべ、そこにラリーヤから教わったばか

りの男女の仕組みを1滴垂らしてやるだけで、何も動かしていない中央部がまた光り、波が引いていないのに、次々と新しい波がやってきては、アスリを沖へ沖へと流していった。

「っ…！ユニス…！………んっ！ユニス…………！好き。」

終わりの見えない最高地点の海原の中、たった1人のアスリが愛を絞り出すと、優しい闇がアスリを包み込み始めた。無限に広がり続けていく知の洞窟の夜にあって、月となって燦然と輝くアスリは、切なくなるばかりの自らを、ユニスから授かり宿す未来に導くことも叶わず、ただただ慰めるようにその肉体を照らし出すほかなかった。

アスリから時間の概念が失われて久しいが、無情にも時間は経過する。おそらくアスリは今日、これまでで最も長く最高地点に居座っている。もう全部何もわからないし、どこから何が染み出し、どれほどひどい状態になっているかも、どうでも良い。全身は不随意に動き、こわばり、刺激を与えていないというのに、次から次へと来る頂点が、何回あったかも定かではない。

薄っすらと開いた目に入りこんでくる、洞窟の入り口から差し込む真っ白な光は、アスリの長いまつ毛に遮られて、幻影となってアスリに届いている。甘美な時間であるが、やはり次にアスリが欲しくなるのは、本物のユニスだ。ちらちらと揺れるその影が、仮にもユニスとなるのであれば、ティサには本当に申し訳ないが、その初めてを少しだけ良いから、アスリは分けてもらいたい。

「アスリ………。」

小さく、自分の名を呼ぶユニスの声が、アスリは聞こえた気がし

た。幻聴ではないあの声を、もっと近くで聞きたい。
「アスリ…？」
アスリの願いは、すぐに叶った。アスリが念じただけで、ユニスの声がもう一度聞こえてきた。
ゆっくりとアスリが目を見開いていけば、そこにはアスリに向かって進んでくる、ユニスの背丈をした逆光の影があった。どうやら今日、アスリは強くイメージするだけで、好きな時に好きな相手の幻覚を、目の前に表すことができる能力を得たようである。しかし、馬鹿になった上に、馬鹿を重ねてしまうほどの快楽を受けて、その余韻どころか最中に近いほど高まっている時の考え事ほど、いい加減で不正確なものはない。
「うわっ！熱っ！！！！」
直後にこの影は、突然何かを熱がって後方に後ずさりすると、足を押さえるようにして、しゃがみこんでしまった。今日、特別にラリーヤが追加の置きたいまつを灯して配置していたのは、たしか、影のいるあたりの位置だ。もしかするとアスリが真っ暗にした後も、まだわずかに生き残っていた火が、輝くアスリを見て、負けずと再び燃え盛ろうとしていたのかもしれない。
無論、アスリはユニスが燃え残りを踏み抜くところなど、一切胸中に思い描いていない。すぐさまアスリの心中では理性による発言が許され、彼女らは幻聴と幻視に関わる説を、ことごとく否定していった。
まもなく、物理を伴うユニスは立ち上がって、右足を持ち上げ履物の裏を払うようにすると、より慎重な足取りで再びアスリに向かって進みだした。途中からは逆光すら受けず、ユニスは闇と一体と

なり、近づいてくるのは息遣いだけだ。

何から何まで、あの時のラダンと同じだ。ここは一切言い逃れができない、最中の現場だ。これからアスリは、ユニスに逮捕される。アスリはユニスに、捕まえてもらえる。

ただ、所詮ユニスはユニスだ。もうユニスには墓地の横でも、それ以前に川辺でも、アスリが股間をまさぐる姿は見られているし、すぐに恥ずかしがるユニスでは、おそらく捕らえた相手を満足に罰することができないであろうことは、すっかり体中が煮え切ってしまっているアスリでも簡単に分かる。本来、ティサの承認があるのが望ましいとは言えども、アスリはユニスにもっと強くなってもらわなければ困るし、自分が悪事を働いた時には、相応の辱めをしっかりと与えてもらわなければならない。

当然、それがたった今は叶わないことが明白である以上は、次点でユニスにも付き合ってもらうことが最優先だ。早くもアスリの本能が自らの休憩させていた指に、快楽に沿うための行動を再開するよう要請すれば、指はそれよりもさらに一歩先回りして、アスリの脈に刺激を乗せて運ばせていった。

「んっ！んっ！あっ！ねぇ！ユニス！！！一緒！ねぇ！？」
「やっぱりまた…、もう終わったかと思ったたんに…。」

ユニスは今、やっぱりと言った上に、何かが終わったことを予測していた趣旨まで加えた。悔しいことにアスリが何を行うつもりであったのか、間抜けで変態なはずのユニスにすら見破られてしまっていたのだ。きっと、アスリがユニスを変態として取り扱っているのと同じように、ユニスもまたアスリのことを、どうしようもない変態であると考えているのだろう。

「くっ…！！！」

恥ずかしい。アスリは激しく指で一点を回して、自らを厳しく導いた。できることなら、もっとユニスに恥ずかしい姿を晒して、アスリがどれほど変態なのか、深く知ってもらいたい局面だ。今こそ、墓地の横で叶わなかった、ユニスによる詳細な観察を受けるべき時に違いない。

しかし、この場の闇は、あまりに深すぎる。これからユニスに全てを見せたところで、これほど暗くては見せていないも同然である。そうであるなら、アスリはどうすべきか。次の瞬間、アスリは自らの発想に感服した。

「はぁっ…、はぁっ…、ねぇ、ユニス？私のさ…。」

泉から新たにあふれてきた、とろりとした一滴の湧き水が、洞窟の地面へとこぼれていく。まだアスリは、究極を言葉にしていない。だが、続く波はまもなく到達する間近だ。ラリーヤに教えてもらったばかりの呼称も、ここで使用すべきだろう。

「私の…、おっ…、おまんこ、触ってみる？」
「えっ…？」
「だから！私さっき、ユニスの触ったんだから！私の、その、おまん、こも…触ってよ？今なら下、脱いでるし…。」

真っ暗な中でユニスがどんな表情を浮かべているのか、アスリは全く視界を通して確認できない。一方で、何も喋らないユニスがたった今この場で、どんな顔をしているのかはアスリもすぐに想像がつく。絶対と言って良いほど、性に染まった真っ赤な頬に、やり場に困惑した伏し目の、アスリにとって愛おしくて遠い、あの面様であるはずだ。

「ねぇ？」

もう少しだ。もう少したたみかければ、ユニスは黙って闇の中でこくりと頷いて、あとはユニスの手を取って、そのままアスリの内側の大粒に当ててしまうだけだ。それだけでは片方向が空虚なままになってしまうのだから、アスリもまたユニスを握って剥き出しにして、狂気とともに漏出してしまうであろう乳を、また全身でもって受け止めるしかない。

「ねぇ？触ってよ？私もまたユニスのおちんちん、触ってあげるから、お願い。触りっこしよ？一緒によしよしして、気持ちいいの、しようよ？もっかいユニスの、剥いたり被せたりしてみたい…。ダメ？」

またアスリよりも、本能よりも先に、アスリの手が先行した。中央に置く右手は、アスリが言い切った側から、今度は回転ではなく強く押し込む方針を取り、胸部の左手はしばしの我慢を乳首に求めながら、闇の中のユニスに伸びていった。アスリが当てずっぽうに洞窟の中で左手を振れば、いつの間にかしゃがみこんでいたユニスの肩は目の前で、その触れ合ったところからユニスの右手の先に向けて、アスリは撫でるように左手のひらを下ろしていった。

アスリの左手が、ユニスの右手を取った。アスリの手中に、ユニスのたくましさとぬくもりが広がっていく。この大好きな人の手が、これからアスリが自分以外の誰にも触れられたことのない場所に、初めて接触する。

この初めては、この真っ暗な洞窟の中にあって、どうやってもティサには譲ることのできない、アスリにしかもらえない初めてだ。アスリにしかできないのだから、正しくアスリが受け取るしかない。

「待って、アスリ。」

今日もここまで取りなしているというのに、相変わらずユニスは意気地がない。だからアスリは、ユニスが好きだ。ユニスに抱く感情を振り返れば、再びアスリの泉が湧く。

ところが、この後にユニスが続けたのは、とろけだしそうなアスリにとって、苦難としか言いえない内容であった。

「来る。そろそろ。2人とも階段の下まで来た。」

厳しい現実である。せめて1回、ユニスの手で到達したいアスリは、歎願の声を上げる。

「んっ！ん、えっ！？ちょっ…！！！じゃあ、ちょっとだけで良いから！！！」

「しっ！聞こえっぞ！」

ユニスの声には、冷静さが満ちている。残念ながら、アスリによるユニスの表情予測は、一切当たっていなかったのだろう。おそらく今は、サバンナで獲物に近寄るときの真剣な、または襲撃を受けたあの日に敵を射抜いた時と同じような、凛々しい眼差しを浮かべているはずだ。

つまり、ユニスがこの場に戻ってきたのは、自らが先ほど受けた羞恥から、アスリのことを守るためかもしれない。もっと踏み込めば、ユニスはアスリを思ってくれたということだ。

ティサとラリーヤに痴態を晒すわけにもいかないが、それ以前に、愛する人による配慮を、無下にすることは許されない。ただ、ユニスに向けて深まる愛を、このままにすることもできない。

アスリは、自分の体に賭けるしかなかった。

「…っ！ねぇ！ユニス、じゃあさ。ティサが終わったら、初めての2番目、私にちょうだいよ？」
「へっ！？」
「なっ、なかよし！私も頑張るから！ねぇ…、お願い！ダメ？」
「わかったから、もう上がってくるから！いいから早く着て！」

無理を、アスリは通してしまった。あの小さな泉に、ユニスの槍が入る自信など、アスリにはない。それでも自ら願った上で、ユニスも受諾した。

決まりだ。2番目はアスリだ。急かすユニスを前に、アスリは立ち上がって、腫れあがって苦しい中央部を膝にかけていた腰布で覆い隠すと、たぎる体中の血液を強引に力へと変換して、空を背にした白っぽい光の元へと走りこんでいった。

帰り道は、静寂だ。変態としての真の姿を現したラリーヤが、撤収を促したのは早かったが、その後アスリも遊んだし、ほかの３人もどこかで何かをして、結局滝を発ったのは普段よりもやや遅く、今やサバンナの太陽もすっかり勢いを失って、まもなく夕陽になり代わろうとしている。しかし、アスリの胸中は、祭の日の酔っぱらった大人たちの群れのように、ぎらぎらとしていて騒がしい。

　ユニスと初めて出会い、アスリの全てを見られてしまった日から、まだふた月と少しだろうか。この間、目まぐるしくあれやこれやと、さまざまな出来事が生じすぎている。しかもそれは、満遍なく均して日々日々いつもより少しの多くが積み重なった結果ではなく、森とカインタが襲われた日にしろ、墓地の近くで耽る班と怪異と遭遇する班が合流し、あの滝や洞窟、文字の壁を発見した日にしろ、ある特異点の１日に、普通に暮らしていれば一生分が集中してしまっている。

　今日もティサが出血し、ラリーヤは爆発して、ユニスは丸出しになってから剥き出しになって、アスリは乳をかけられた上に１人で絶頂して、ユニスに絶対的な願いまで伝えている。処理しきれずに積みあがってしまった過剰な情報を追いかけて分析している頭脳に加えて、向こう見ずに全力で痙攣した足腰と、まだいつもより高い地点にあって腫れあがったようにうずく中央部を抱えるアスリに、今もたらされるものは困憊である。

　それはアスリだけに限らないようで、ティサは頬を真っ赤にしてずっと地面ばかりを見つめているし、ユニスは腰布の前を膨らませてはいないものの、神妙と変態の中間の、どうしてこんな人物に愛を抱いているのか、アスリが不思議になるような表情だ。ユニスも

今日は帰りがけに川の魚で大きなものを適当に数匹手早く捕まえて、狩りの成果としたのだから、乳が漏れてしまった分、このおかしな見た目以上にもっと疲れているのかもしれない。唯一、ラリーヤは背筋をまっすぐ伸ばして、今朝と同じ足取りであり、ユニスとは別格の変態としての気風すら漂わせている。

だが、何の因果か、森とカインタから来た３人と関わって何らかの出来事があった場合、濃かった日はさらに濃くなる傾向があるのも、また事実ではある。まだアスリは、油断をすることができない。

「どしたん、みんな? なんも言わんで。」

先ほど辛いと言っていたのに、今は上機嫌なラリーヤが、黙々と歩く３人に向けて声をかけた。こういうパスが面倒な方に走ると、疲れている中で帰りが余計に遅くなる。

「いや…、疲れたよ。ユニスに変なのかけられたし。」
「変じゃねーし。」
「ウソ? アスリ、ユニスからお乳かけてもらってる時、めっちゃ嬉しそうな顔してたじゃん?」
「いやさ、あんなん疲れるよ。ってか、ラリーヤつらいって言ってたの、もう大丈夫なん?」

質問をしてはいるが、ラリーヤに問題がないことは、アスリも問う前から理解している。すなわち、アスリの言葉の意図は、変態すぎることによる辛さを除いて、より合理性のある辛さが他にもあったのかの確認になる。しかし、ユニスを上回る変態に聞いたところで、答えは変態でしかない。

「へへへ、私はさっき、いっぱいくちゅくちゅしてきたから、へーきだよー!」

「はっ…！？」
「何、くちゅくちゅって…、うわ、待って。さっき言ってた、１人でってこと！？」
「何？ティサだって、どうせ普段おまんこいじいじしてんでしょ？」
「は！？そんなん……、するわけないっしょ！」
「嘘ついてない？だって、なんかさっきティサ、ずっと１人で川で何かしてなかった？」
「バカ！今日アレなんだから、洗って挟み直してただけ！」
　ティサの表情が、わずかに曇った。おそらくティサの過去もアスリと同じく、無罪潔白ではないのであろう。しかし、それはまた後日、アスリがティサにじっくりと向き合って、お互いに真実を語り合い、そのあと２手に別れて個別に盛り上がれば良いのであって、今はアスリも鋭い変態に勘づかれないように、晴れやかにやり過ごすべきだ。
「ふーん、そう。じゃあアスリは？アスリも１人で残ってたよね？しかもうちら行ったら、もう真っ暗だったし。何してたん？」
「私は疲れてたから、火消して寝てたよ。」
　案の定、ラリーヤの関心は、次にアスリの方に向けられた。すんなりと答えつつ、アスリがユニスに一目を送れば、幸いにしてユニスの目は泳いでおらず、股間も固く腫れあがらせていないようである。
「えっ！？じゃあ２人ともホントに、おまんこよしよししてこなかったん！？えっちなん見て、なんもしなくてつらくない？ぬるぬるでしょ？まだ暗くなるまでちょっとは大丈夫だし、待ってるからくちゅくちゅしたら？それとも私が気持ちよくしてあげよっか？ユニスのお勉強にもなるし。」

「ダメだ、変態すぎる…。ラリーヤ、こんな人だったんか。」
「さっき言わんかったけど、前から私さ、変態って言われると、なんか興奮してくるんだよね。」
「やばっ…！」

アスリは呆れを通り越して、あくまで皮肉として、ラリーヤのことを尊敬しそうであった。これほど変態を明らかにするようでは村に連れて帰らず、その辺に放してしまった方が、まだ野性的で本人のためになるかもしれない。

「…ラリーヤ、村戻っても変なこと言わないで、今朝まで普通だったんだから、今までみたいにしててよ？今日のユニスのこともそうだし、変なこと言っちゃダメだかんね？じゃないと私ら、みんな変態の仲間だと思われちゃう。」
「そんなん当たり前じゃん。でも、ずっと猫被ってたら、私も疲れるし。今日、みんなの前でちょっとだけホントの私になれたから、大分スッキリ！それに変な皮ちんちんだったけど、ぴゅっぴゅも見られて、おまんこもよしよしってこれたし！」

問題の多い言葉ではあるが、たしかにラリーヤの言い分には、一理ある。そうは言えども、目指すべき女の象徴であった、美しく完璧で大人びたラリーヤが、ユニスの余った皮ではないにせよ、一皮剥けば幻滅しかねないほどの変態であったことには、アスリも今どうにか疲れた口を開いて喋りつつ、閉口している。
それにしても、ユニスは幼い頃のこととは言え、以前からラリーヤと面識はあったはずだ。そうであるなら、簡単でも良いからラリーヤの本性について、アスリとティサに注意を喚起することもできただろう。

「っていうか、ユニスさ。ラリーヤと昔、カインタで会ってたんし

ょ？ラリーヤがこんな人だって知ってんなら、ちょっとぐらい教えてよ。」
「ホントそれ。私もラリーヤがこんな変態だと思わんかった。」
「さすがにそんなかんじで言われたら…、響くわ。」
「いや、そんなんさ、俺も知らんし。」
「でもさ、もし知ってても無理じゃん？だってユニス、この前久々に会った時、私のこと、誰だか最初わかんなかったでしょ？」

残念なことにその通りで、ユニスはあの時、ラリーヤをラリーヤとして認識するまでに時間を要したし、ラリーヤだと分かってからも、自身とラリーヤがどういった関係であるのかを正しく説明しきるのに、かなり手間取っていた。ユニスは常にいい加減だ。アスリはこの弱い変態のことが好きで悔しいし、ティサもユニスの子を成したいと思っているのだから、アスリもティサも不憫である。
それでもユニスはまだ弁明の余地があることを見抜いたのか、やや焦るように続けていった。

「いやいやいやいや、あれはさ、あん時はあん時で。ラリーヤ、昔と全然違うじゃん？昔、こんなにでっかくなかったし。」
「まぁね、ユニスがカインタ来てた頃はお胸ぺったんこだったけど、アレ始まってから、一気にこんなにおっきくなっちゃったんよね。今ならお胸だけで、ユニスのちんちん全部挟めるよ？たまたままでいけるかな？」
「バカ！ユニス、アスリだけじゃなくて、最初からラリーヤのことまでそうやって見てたん！？あとラリーヤもバカ！」
「違っ！！！俺言ってんのは、背だよ！背！高くなったじゃん！」
「まぁユニスはもっと背もちんちんも、おっきくなんなきゃねー。」
私は、アスリとおんなじくらい？」
「いや、アスリの次がラリーヤだね。」
「俺だってそのうちもっと…！」

「でも普段ユニス、私とじゃなくて、ずっとお胸とばっかりとお話してるよ？」
「はっ！？」
「だって目合わせても、すぐお胸見てんじゃん？やっぱり挟んであげよっか？」

ユニスの弁明は、明白な失敗として終わった。またしてもユニスの置かれた形勢は、不利へと傾いていく。

「違っ！！！」
「ちょっ！ユニスそれって…！ってか、私もおっぱいばっか、ユニスに見られてたかも！このバカッ！！！」
「うぎゃっっ！！！！！」

ユニスの真隣に並んで歩くティサは、すぐさま手にしていた土産の荷物を小脇に抱えなおすと、ユニスの皮で守られた弱点を、腰布の上から鷲掴みにするように、きつく握りしめた。この触れ方では、おそらく槍だけでなく袋もティサの手中におさまっているはずだ。先ほど洞窟でユニスそのものに直に触れてしまったティサには、もうユニスのこの部位に手をやることへ、ためらいはないのだろう。

ところがこの時、アスリが真横からティサの顔を見て抱いたのは、違和感であった。ティサは怒っているような旨を口にはしているが、なぜか朗らかだ。その心中で最も大きな感情は、胸を見られていたことを認識した喜びか、それともユニスを手にしていることの嬉しさか、またはそれら両方か。何にしてもラリーヤが狂ってしまったせいで、ティサまでおかしくなりつつあるようであって、アスリは大きな胸が欲しいし、この胸のままで良いから、せめてユニスに注目してもらいたい。

もはや平常運転を続けるのは牛たちと犬だけで、人間たちは色に

染まる一方である。もうあと少しで村の外れの空き家が見えてくるというのにも関わらず、声だけは怒っているティサはユニスを掴んだまま、ここで一度立ち止まって一行の歩みを止めると、ユニスの責めを始めていった。

「っていうかユニス！あんなお乳出せんのとか、あと剥いて中身出せんのとか、そもそもおっきくなんのとか、できんだったらそういうのもさ、早く私に言ってよ！」
「痛い痛い痛い！！！マジ！！！玉が！潰れる！！！」
「え！？また固くなってきてない？何？ふざけてんの？」
「うわぁ…、やっぱりユニス痛くてもちんちん固くなっちゃうんだ、やばあ。」

アスリの見立て通り、ティサは球も合わせて、性器全体を捉えているようである。それにしても究極の変態に哀れに思われるようでは、ユニスの変態もなかなかのものだ。痛くされて喜べるのなら、アスリも一度ぐらいはユニスの剥き上げた先に、ラダンには執行されなかった針の刑を試してみるのも価値があるだろう。

「痛い！マジ！ヤメロ！」

濃かった空の青色は、弱るユニスに合わせるように色を薄め、低くなって西へと向かう太陽も、４人の男女と少し先の犬と、さらに先の牛たちの影を、サバンナの地面に少しずつ長く伸ばしていく。歪んで斜めになったユニスの眉が、やや弛緩した。ティサは力を緩めたようだ。

１日があとしばらくで終わることを告げる赤い陽光が、悦に浸るティサの右頬を照らし出す。今日最後の、ユニスに対しての攻勢だ。何かを察したであろうラリーヤは、両手で抱えていた荷物を地面に軽く放り投げると、ユニスの真横の位置を取っていった。

日が暮れる間近に、ティサが何をしようというのかはアスリも全く想像ができない。しかし、こうして性器を没収されているユニスがもう少し弱る姿は、アスリとしても目にしたい。ティサに場を委ねる判断を下したアスリも、手にしていたものをラリーヤの荷物の横に配置し、続いてさりげなくティサの採集品やユニスの紐でつないだ魚も受け取ると、同じように置きやって、ラリーヤの反対側から、ユニスの左肩に優しく触れていった。

再び、ユニスは女子３人に包囲された。正対するのは、ティサだ。

珍しく犬が、長く遠吠えをした。緊急性のないその声に、アスリが念のため視線を送れば、行儀よく後ろ足をたたみ前足を地面につけた忠犬が、夕陽を真正面から浴びつつ、鼻先を空へと向けてすました様子で、その奥では牛たちも立ち止まり適当に尾を振っている。あちらは何もないところで待たされて、暇なのだろう。

対して、人間と変態の集団は、ティサが情けない方の変態と最前線で対峙している。ティサがしくじれば、いや、大成功すれば、ユニスはまた漏らし、ティサもアスリもラリーヤも大喜びで、いつもよりも帰宅は遅れることになる。おそらく母は良い顔をしないであろうが、ラリーヤには変態を隠し通してもらって、後日また別な模様に染めた布を1枚、母の元へ持ってきてもらえたら、どうということはないだろう。つまり、全てはティサの手腕にかかっている。

「ってかさ…。」

ユニスとの距離を半歩詰めて、ティサが1手目をしかけ始めた。両サイドのアスリとラリーヤは、ユニスが逃げないことだけを注意すべき時間だ。

「ユニス、いつから?」
「へっ…?んっ、うっ!」

おかしなユニスの声とともに、ティサが掴む右手の形が、槍を取る形に変わった。これでひとまず、ユニスの袋の中身が潰されてしまう恐れはなくなった。仮にも潰れた時には、ただのぶら下がりになってしまうのであるから、アスリも仲間が増える以上は、その線

でも良いのかもしれない。
ティサの右手は、腰布越しのユニスの先端で停止する。
「まず、おちんちんの皮。ラリーヤがさっき話した時、自分でできるって言ってたじゃん？剥いたことあったんしょ？私、そんなん知らんかったよ？」
「そんなん、俺だってティサが毎月、血出てるなんて…。いや、たまに血ついてたけどさ。」
「えっ！？嘘！？いつ？」
「いつってか、たまに腰とか足のあたりに。俺獲ったのかと思っ…、痛たたっ！！！」
やはり、男子は弱い。こうやって握りながら問えば、すぐに罰が与えられる。最初に人間を作った者は誰かはわからないが、アスリは男子をこの形に決めた者に、とにかく感謝せねばならない。
「で、いつ剥いたん？もしかして、ちっちゃい頃から、あんな風に中身出せたん？」
「いや、大変だったんよ。俺もそんなん、最初は知らんかったし。」
「どゆこと？知らんかったって言ってて、できるってさっき言ってたし、それでさっき普通にできてたじゃん？」
「いや、だからさ、ティサのおばさんに、うわぁあああ！！！痛い痛い痛い痛い！！！」
「んぐっふ…！」
不意にラリーヤが噴き出してしまったが、アスリも喉の奥で息をかみ殺している。ユニスには悪いとは思えども、都度都度、性器を痛めつけられるこの姿はあまりにも無様であり、恋愛や性を差し置いて、アスリの感情の最前面に立つのは、体を張るユニスのおかしさである。

しかし、ここでアスリとラリーヤが大声でユニスを笑うこともできないのは、ユニスを握る張本人が、自身の母に話が振り向けられ、急激に真顔になっていくティサであることに他ならない。今日の昼過ぎ、滝の横で今よりも一層暴力的な責めを行った時と同じく、ティサは低いトーンの声色で続けていった。

「はっ？何？どゆこと？ユニス、もしかして、ママとなんかしてたってこと！？」
「痛い痛い！マジで！千切れるから！ホントに！」
「ウソ！？もしかしてさ！ママとなかよししてないよね！？初めて、私のママ！？」
「違っ！！！そうじゃなくて！！！誰ともしてないって！！！」
「んじゃ何！？ちゃんと言わんと、マジで千切るよ？」
「ヤメロ！！！」

　ユニスの先端あたりを摘まんでいるティサの人差し指と親指が、手前に大きく引かれていった。おそらく腰布の下では、あの皮膚が引き伸ばされているはずだ。アスリはぜひ、伸びた姿も目にしたいところではあるが、今それが出てくれれば、真っ先に笑い転げてしまうかもしれない。

「だから！アレだよ！ほら、俺、あの……、あったじゃん。アレ。」
「千切るね？」
「痛い痛い痛い！！！」
「ハッキリしろ！！！」
「だからさ！アレ！おじさん死んで、ちょっとした頃！痛い！！マジで血出る！！」
「はっ！？ちょっと！パパ死んでから、ホントにママとなかよし？私も血出て痛いんだから、我慢しろ！」

ティサの言う通り、ユニスは我慢するべきだ。もちろん、情けないユニスは我慢できずに抗弁する。
「だから違って！！！ほら！！！腫れちゃった時あったじゃん！」
「腫れた？何？どゆこと？お乳出した時みたく、おっきくなったん？」
「じゃなくて！あれ、おしっこできなくなって、俺何もできんくなった時！あったじゃん？」
「あぁ……、あったかも。ユニスしばらく寝込んで、ママに看病してもらってた。」
ようやくティサの指先に、わずかな優しさが戻った。だが、誰の目にもまだ尋問は途中だ。
「で？そん時？」
「だから、俺が何かしたんじゃなくて、おばさんにやられたんよ…。痛たた！！！だから、待って！あん時だよ、初めて剥かれたの。最悪だった……。体押さえつけられて、細い棒かなんか？先っちょから何本か突っ込まれて、グリグリやられて、めっちゃ痛くて。で、思いっきり広げたと思ったら、一気にひん剥かれてさ、今度はごしごし擦られて、やっと終わって戻してもらったと思ったら、最後にすっげー染みる草詰められて。しかもおしっこしたら、それがまた……。」
ふいに、アスリの腹の奥が熱を帯びた。今、ユニスが語ったことは、アスリがダカクに行った以上の確かな治療だ。要するに、過去にティサの母は、痛がり嫌がるユニスを押さえつけて、強制的に剥きあげたのである。
加えて、何本か棒まで差し込んだというのだ。乳をかけられる直前のアスリが、ユニスの先端に確認した小指の爪ほどの縦筋の大き

さに従えば、どれほど細い棒でも、さすがに何本も入らないはずであろうから、おそらく差し込まれた先は、剥き出しにする前の、皮余りとつやつやとした粒の間だろう。振り返ればダカクのそれも、アスリが布越しにいくら戻そうとしてもなかなか戻らなかった。どうやら、男子の先端はなかなか狭く作られていて、当初は激痛に耐えなければ、中身が出せるほどに広がらないのかもしれない。

その後に続いた、やっと出てきたところを擦られたという下りは、ダカクへの治療と概ね同様であって、ここまではどうにかアスリも平穏を保っていられる。問題になるのはさらに続く、染みる草を詰められたという部分だ。剥き出しにされたところに草を巻きつけられた後に、皮を元に戻したのか、または皮を戻したところに草を詰め込まれたのか、何にせよ合理的に避けられない名目の下に性器が痛めつけられているユニスの姿は、アスリにとってなぜかあまりに官能的だ。

普段は適当なユニスも、激痛の記憶があいまいになってしまうほど、いい加減な男ではないはずである以上、今ユニスが述べたことはほぼ間違いなく事実だろう。時間を巻き戻すことが叶うならば、アスリもその場に立ち会って、ユニスの痛がる局部と涙にまみれる表情を眺めてみたい。ただ、不可能を願っても無意味であるのだから、たまにはユニスもあの長い皮を真の意味で腫らして、この3人で寄ってたかって草を詰め込む方が現実的だ。その意味でティサは今、千切れる直前、血が出てしまうぐらいまで、もっと強くユニスを引っ張ってしまっても良いだろう。

当然、アスリはユニスがたとえばこの前のように、両足に矢を受けて苦しむ姿など、目にしたくはない。アスリがあくまで見たいのは、ラダンやダカクがされたように、性器に罰なり治療なり羞恥なり、その類がユニスに加虐されるところである。では、思い浮かべるだけでゾクゾクと沸き起こるその不思議な感覚がどうして生じるのかは、アスリも全く自分で自分を説明できない。

アスリの性器が上げる理解不能のうずきは、少しずつアスリの体内でその響きを大きくしている。一方で、ティサはアスリの泉の沸騰など気づくわけもなく、次の言葉をつないでいく。

「うわっ、あん時ってそんなんだったんか……。え、待って？あん時って、なんか相当ユニスやばくなかった？ユニスの方の家から泣き声してたし、ちょっと見に行こうと思っても、ママがユニスがおしっこ出なくて大変だからダメって言ってて。」
「そう、あれ3日ぐらい？マジで最悪だった…。」
「たしかに超染みるけど、多分あの草ってか、葉っぱよね。アレ、よく効くよね。でもキツかった…。」
「えっ!？ラリーヤも!？ラリーヤ、おちんちん剥かれたの!？」
「ちんちんないよ？おまんこ見る？」
「いいから!!!めくんなくていいから!!!」

隙あらばすぐ脱ごうとする変態を凌駕する存在となってしまったラリーヤの腕を、ティサが慌ててユニスをつまみ上げていない方の手で押さえた。さりげなく流れてしまったが、ラリーヤの発言を踏まえるに、ラリーヤも草なのか葉なのかに心当たりがあるだけでなく、その刺激がどれほどかまで知り上げているようで、同じものを使用した経験自体はあるようである。当然、今の話だけでは、ラリーヤの体のどこを治療したのかは定かではないが、話の流れに従えば、性器と考えるのも自然だ。

やはりラリーヤもその時は、腫れた患部を大きく開かされた上に、アスリよりはずっと小さいはずの真ん中の柔らかな肉を剥き出しにされて、草を詰められてしまったのだろうか。それとも2人とも草を詰められたせいで、これほどどうしようもない変態に育ってしまったのだろうか。

根拠のない妄想をアスリが思いめぐらす横で、ティサが深く大きなため息を吐き出した。この息には、明らかに疲労が加算されてい

る。この様子をアスリは目にして、今日1日の諸々の後に痛い話を聞かされて、普通抱くのはティサのような疲れであって、興奮を抱いている自身の方が異端であることを察知した。それでもティサは、残る疑問を今日のうちに解消しようとしたのか、まだ帰ろうとする素振りを見せずに、次のユニスへの質問を繰り出していった。

「ってか、あともう1つ。お乳はいつから？」

「へっ…？」

「だからお乳。お乳も、出すの今日初めてじゃないっしょ？いつから出てたん？」

「…………。」

ユニスが不穏な間を取った。夕焼けの中、やや強い風が吹き抜けていく。同時にアスリの脳裏にも、良くない可能性がよぎる。
まさか、墓地の横のアスリの手中で漏らしたあの時が、ユニスにとっての初めての射出であったのだろうか。そうであれば、押し黙ったユニスが勝ち抜くことは不可能であることは確実であって、暗くなるタイムリミットまで、アスリも一部始終を陳述しなければならなくなる。

「ん？ってかさ、待って！お乳って、おちんちん剥けば出るん？」
「出ないよ！」
「でも、アスリがさっき剥いたら出ちゃったじゃん？」
「そんなん知らん！」
「アスリに触ってもらって、すっごくえっちな気分だったんでしょ？ま、普通はちゃんとよしよししないと出ないけどね。」

ラリーヤが補足なのか、それともティサへのアシストなのか、一言付け加えた。ただ残念なことに、この言葉を受けてティサが思考を振り向けた先は、アスリにとっては面倒としか言いようがないところにあった。

「何？それじゃさっきのは置いといても、ユニス、誰かによしよしされてたってこと!？」
「違っ！」
「じゃあ、さっき初めて？」

「……んっ。」
「初めてじゃないね？だって剥くだけじゃ出ないいって、自分で言ったよね？出してなきゃ、そう言えないよね？」
鼻から抜けるような、息とも返事ともつかない声で形作られたユニスの小さな守り柵は、連続してたたみかけるティサによって、いとも簡単に突破された。アスリの事前予測通り、ユニスは真実に迫られれば脆弱だ。アスリにとってさらにまずいのは、ユニスの真隣にいるのが、ひた隠しにしてきた変態を今日で全て解き放ってしまった、予測不能の変態を上回る変態であるということである。
「ティサ、ユニスもさ、ひとりでくちゅくちゅしたんでしょ？男の子はくちゅくちゅなんて鳴らな…、いやでもユニス皮すごいから、くちゅくちゅ鳴るか。」
「えっ！？何？それじゃユニス、ひとりでおちんちんよしよししてたん！？」
「違っ！！！」
「じゃあ何？誰かによしよししてもらってたってことになるけど？」
「それも違って！」
「じゃあもうひとりじゃん！自分でいじりはじめたってこと？」
流動的な場の中にあって、アスリに夕暮れ時の光が、わずかに差し込んだ。ティサの興味は、ユニスの自己との向き合い方に進み始めている。アスリも確証は持てないが、変態のユニスならアスリの手の中に全て漏らしてしまう以前に、きっとどこかで自分の皮膚と、その中身を鍛えぬいていた確率は高い。
ところが、この直後、馬鹿なユニスはとうとう余計な言葉を口走ってしまった。
「じゃなくて！！アスリの……！！」

近くを飛ぶ胸の白いカラスの群れが、甲高く数度鳴いた。時は止まり、３人の６本の視線が、アスリへと集中した。
その中にあって、最も鋭いティサの瞳は、すぐにユニスへと戻っていく。

「…………アスリの？」

低い声だ。かつて母に２枚の腰布を並べ置かれた直後のように、アスリの気分は急速に悪化している。これからの流れ次第では昼に食した魚が、今度は本当にアスリの口から飛び出してくるかもしれない。

「…………。」

また、ユニスが押し黙った。これ以上、ユニスに任せておいても、議論の終点はアスリにとって極めて不利にしかなりえない。重大な賭けにはなるが、しくじったユニスに罰を与える意味もこめて、アスリは先手を打ち、ユニスの秘密を開示することを選択するしかなかった。

「……あんさ、さっきは特に言えんかったけど、ユニスこの前その……、お乳、漏らしちゃったんよね。」
「はっ！？何それ？ってか、なんでそんなん、アスリが知ってるん？」

再び、全ての注目がアスリに集まり、当然のようにティサの真剣な声がアスリにかかった。ここからの弁明が、アスリだけでなく、ティサの思いの明暗を分けることになる。サバンナの地面のように乾きつつある口内に残った、ごくわずかな唾をアスリは一度飲み込

むと、慎重な言葉による処置を開始した。
「あの……、ごめん、ティサに隠してたみたいになっちゃうけど、お昼の話って、ちょっと続きあって。最初にティサと会った日、襲われた日、ユニスのこと、私おんぶしてたら、ユニス、私の髪の毛の匂い嗅いで、あと私の……、裸、思い出して、おちんちん固くなっちゃったじゃん？」
「そうだね、このヘンタイ。バカ。」
「痛だいっ！！！ヤメロ！」
「まぁ、ちょっと待って。で、まぁ、それは最初の日の話でさ。あれから、お墓の横で怖いの、ティサが見ちゃった日、あったでしょ？あれん時も、最初、逆に私がユニスにおんぶされてたけど、そしたら、今度は私の……おっぱい、私の、ちっちゃいのに。でもユニスに当たったら、またおちんちん固くしちゃって。」
「うぎゃあああ！！！！」
ユニスが絶叫した。ここまで叫んでも犬は助けに来ないのだから、ユニスが何らかを責められ叱られていることは、あちらにも確実に伝わっているようである。
「ユニスうっさい！！！アスリ、それで？」
「だから私も、今のティサみたく布の上から掴んで、こら！ってしたら、その……、ユニス、びくびくしちゃって、どんどん濡れてっちゃって。」
アスリが自身に対して何をしたのかについての内容は欠落しているが、ユニスに関しては事実である。もう、今日は昼食後の時点で、アスリは一度嘘をつき、真実を求めたティサに涙させてまでいる。絶対的なアスリの秘密と、ティサに伝えなければならないユニスとの過去の、中間地点はここしかない。

「あぁ、だからあのあとユニスの巻いてたやつ、変な匂いしたんか。絶対あの匂いじゃんって思ったから、怪しいなって思ったんよね。」

ラリーヤがまた一段といやらしい笑みを浮かべたのに対して、ティサの表情は岩のように固い。危険な立ち位置のアスリは、おそらくティサに近い顔のはずである。真面目で律儀なティサは、アスリの股間まで鷲掴みにして、ユニスと同じように引っ張ったり潰そうとしたりするようなことはないだろう。ただ、一生の恩義をもとに隠し事をしないでほしいと述べた昼時のティサと、たった今、アスリが向かい合うティサとでは、同じ１人の人物が近い状況に置かれているものとは思えないほどに、後者の方が殺気立っている。

ティサをこうしてしまったことには、昼に途中まで話したところで、脱衣することになったユニスにうつつを抜かしてしまった、アスリも責はある。それ故か、昼にはあったユニスに代わってのアスリへの謝罪は今はなく、かろうじてユニスにのみ怒りの矛先は向けられている。

ただし、全部を開示する訳にもいかないアスリのみを追及するのも酷であることは、過剰に自己を正当化するつもりもないアスリ自身も、危うい立場ながらに理解している。むしろ悪いのは、午後の洞窟の時間を、いやらしい香りと物量で圧倒する知識で濃密にしてしまった、ユニスとラリーヤだろう。それらがあったせいで、ティサは大胆にもユニスの初回を所望してしまったし、アスリへのリスペクトはまだ保っているとしても、ユニスの一連の初めてが欲しくなってしまったはずだ。

それにも関わらず、実はアスリが少なくとも乳搾りの点で先回りしていたということを知ったティサが、まさに感じているのは、ほぼ間違いなくアスリに対しての嫉妬だろう。洞窟の空気があれほどまでに狂気で満たされなければ、もしかするとティサは昼過ぎと同

じく、アスリには柔和な雰囲気を醸し出せていたかもしれないが、ティサはユニスの全てという新しい概念を得て、欲望の制御に手間取っているのかもしれない。

口には出せないアスリの自己弁護をよそに、ティサは冷静さを保ったまま、アスリが放った情報を的確に整理し、それでもアスリは責めず、なおかつユニスへの追及の手を緩めることもしなかった。低く、ティサが続ける。

「ユニス、あの日もぴゅっぴゅしてたんは分かった。じゃあ、自分ではよしよししてないってことだね？」
「…………痛だだだたたた！！！！潰れる！！！」
「なんか言え！！このヘンタイ！！」

性器に対して自分自身で快楽を与えることは、ティサがその果実を自らにも与えているかはまず考慮しないものとして、アスリの母と同じく、ティサにとっても悪であるようだ。そして黙秘を貫こうとしたところを見るに、ユニスは有罪のようである。未だにアスリの目前の状況は予断を許さないが、この光景もまた1つの、アスリにとって大切に保管しておくべき糧になる。

何であれ、ユニスがどういう転び方を選ぶかに、アスリの命運もかかっている。ユニスが強く両目をつぶって、斜め先の足元に顔を向けた。何かが来る。

「ぐっ！！！なんだよ！いいじゃん！別に俺の体なんだから、どうしたって！」
「うわ！！！やっぱそうなんじゃん！！！」

ユニスは自慰を自供した。まだティサの嫉妬にどのように対処するかという問題は残されているが、アスリはわずかに安堵した。こ

れでアスリは、自らの悪い習慣を夕陽の下に晒さずに済むはずであった。

「そんなんどこで覚えたん？」
「うっさい！！！手離せ！！！痛だたた！！！」
「こら！！！何？私の手じゃ出せないん？ぴゅっぴゅするか、どこで覚えたか言え！！」
「ヤメロ！！！」
「じゃあ潰す！！！」
「ぎゃあああああ！！！だから！！だから……！だから……！」
「だから何？」
「だからアス……。」

一足先に、アスリは夜を迎えた。終わりだ。もうアスリには、繰り出せる手は残っていないし、何もしゃべることができない。ティサに握られているユニスが、アスリの全てを握ってしまっている。

「何？またアスリ？」
「……。」

今度はティサも、アスリに目をやることもせずに、ひたすらユニスをにらみつけている。嫉妬は、怒りへと変わりつつあるようである。今日のアスリは、すでにティサから涙とともに情けまでかけてもらっていたというのに、この有様なのだ。ティサから見て、昼に弁明したアスリは説明責任を果たしていないことになるし、その先に今の状況がある。アスリにとって極めて苦しい、ごく近い未来が迫っている。

「アスリに教えてもらったん？」
「違っ！！」

「じゃあ何？」

「……だから。」

「聞こえん。はっきり言え。」

「だから！！！！！」

ユニスが破裂する。何が飛び散るのか。強い吐き気をともなって、一筋の汗の雫が、アスリの背骨に沿うようにして流れていく。

「やっぱり言わん……！」
「そう……。」

ティサの声が、冷たくなった。ユニスは痛がりもしない。ティサの、ユニスとアスリに対する失望が、手に取るようにアスリに伝わってくる。きっと、いくら勘の鈍いユニスも、ある程度はアスリとは同じように受け止めているはずだ。
この瞬間、アスリから見るユニスは、危険な木陰でアスリに刺さろうと飛んでくる矢に向けて、自らの太ももを躊躇なく投げ出したユニスと重なった。ユニスは、アスリを守ろうとしている。たしかに馬鹿なユニスが、どう考えても蛇足となるところでアスリの名前を、それもごく短い時間に2度も出してしまったせいで、このどうにもならない局面がある。
獲物に向かう時のように、ユニスが本能的にアスリの名前を口にしてしまった理由は、おおよそアスリも察しがついている。アスリは直接教えてはいないが、月夜に照らされたラダンをアスリがこっそりと真似たように、ユニスはアスリの一部始終を見ながら学んで、試してしまったからだろう。
だが、子を成したいとせがまれ、事実上の愛を開示した幼馴染から向けられる失望を前にして、アスリに言うなと言われて、言わないと誓ったことを、ユニスはどうにか死守している。今、女子に局部を握られて、大粒の汗を額に浮かべているユニスは、言いようのないほどに、どう見ても情けない姿である。しかし、この背後には、アスリを守る強い意志が控えていているのであって、本来、将来が約束された相手からの負の感情もどうにか受け止め、自分が悪者になってでも、どうにか場を取りもとうとしているのだ。

アスリは身を恥じた。ユニスという男は、弱くなってしまう時はあれど、常に勇敢で一貫している。そもそも、愛する人に罪を全て背負わせようという魂胆そのものが、間違っているのだ。今のこれと、ユニスを責めて性を感じるのとは話が別で、愛する人が将来の相手から失意を受けるようなことも、自身への意図を無下にすることも、あってはならない。

太陽は夕焼けになろうと、刻一刻と、赤く、今日最後の暗い輝きを増していく。もう、このまま隠し事は続けられないだろう。昼間の裸の告白だけでは、アスリのコミュニケーションは絶対的に不足していた。全てはアスリの見通しの甘さが原因だ。アスリはティサには誠実であらねばならないし、大好きで大好きで大好きなユニスに、守られてばかりではいけない。

「いいよ、ユニス。絶対に言わないでってお願いしたこと、言いなよ。私が、どうしても……、やめられないこと。私が……、アレ、やってるとこ見て、やってみたくなっちゃたんでしょ？」

「はっ!？」

「えっ？何？そういうこと？」

「嘘!？え？ホントにアスリ、ユニスとなかよししてないよね!？」

「ティサ、大丈夫。本当に、本当に、本当に、私はユニスとなかよししてない。でもごめん、私……、サイテーなんだ。ごめんなさい。」

針を刺される覚悟は、すでにできている。アスリは悪いのだ。５回でも１０回でも刺されて、涙の中、耐えるしかない。

「いや、アスリ!!!」

「ユニス!」

「だって！」
「いいから！！！」

ユニスがアスリと、目を合わせた。アスリは、ユニスに目から思いを送る。一拍の間を置いた後、ユニスは両目でのやり取りを終えて、伏し目になった。

「ぐっ……！！！そっ、その……、アスリが、アスリが……。」

弱く、風が吹いた。

「ぎっ、きもち……！よさっ、そう、だった…から。」

尻すぼみに小さくなる声とともに、ユニスの顔は地面に向けられていった。とうとう、ユニスはアスリの快楽を明らかにした。

予想通り、アスリにもたらされたのは、猛烈な羞恥だった。また、アスリの腹の奥は疼き、火の海と化している。これからユニスはおそらく、アスリが先ほど洞窟の中でしたことや、ユニスの背の上で行ったこと、ユニスの精製した結晶と一体になったこと、全てを洗いざらい話すのだろう。もう今日は村まで帰れずに、ティサに一晩中はみ出た部分を引っ張られ、飛び出た中央部が潰れてしまいそうなほどにつままれて、その嫉妬全てを身をもって受け止めなければならないかもしれない。

「えっ……、それってアスリも、裸になってる時、その……。」
「うわああああああ！！！！」

何も掴まれていないというのに、大きく声を上げたアスリは、両手で顔を隠すと、その場に一気にしゃがみこんだ。もう何も見るこ

とができないし、顔を向けることもできない。
最悪で、最高だ。アスリはクズな自分に、陶酔した。もうみんな知ってしまった。そうであれば、今からティサとラリーヤにも、自分がどんなことをしているのか、見てもらうべきだ。
ただ、幸いなことに、または残念なことに、嫉妬に傾きかけていたティサの目にも、アスリはあまりに痛ましく映ったのか、アスリの頭上で続いたのは、ユニスへの激しい叱咤であった。
「そんなん……！このバカユニス！！！アスリの何見てんじゃ！！！」
「ヤメロ！痛い！痛い！痛い！」
「そんなに見たいんなら、私が見せるから私に言え！」
「はっ！？」
「しかも、おちんちんいじって、自分でお乳出してたん！？バカ！潰す！コロス！ヘンタイ！」
「うわぁあああ！！！痛い！ヤメロ！」
「ちょっと、ティサッ！潰したら、ユニスがホントに死んじゃう！」
すでに夕焼けに照らされるこの場の状況は、潰した芋と肉を混ぜた、口に含む直前の食事のように収拾がつかない。ただ、ユニスのぶらさげる球と棒だけは潰さずに保全しようと、変態でなかった頃の大人びたラリーヤが、顔を伏せるアスリの真上で、何らかの物理的介入を行ったようであった。
「……ほら、ティサ。これ潰しちゃったら、ユニスのお乳出なくなって、赤ちゃん作れなくなっちゃうよ？」
「くっ……！サイテー。ユニスのバカ。今度、私が見てる前でやりな。」

何も反論はなかったが、足音とともにユニスが少しだけ遠くなる気配があった。ティサがユニスを解放したのだろう。
アスリはもう、これから自分がどうすべきかわからない。ユニスも自慰の事実を明かしたが、ユニスもアスリの事実を明かした以上、もうティサにもラリーヤにも、気軽に顔向けすることはできない。
元来、ユニスは全てを知っていたし、それでもアスリがユニスに強く出られたのは、ユニスがあまりに情けなく、不甲斐なかったからだ。自慰に限らず性がもろ出しのラリーヤはさておき、おそらくティサはきっとこれから、アスリが何を言っても、結局この人物は自慰すら我慢もできないと、まともに取り合ってくれなくなるだろう。やはり、母が強く禁じるほどのことなのだから、その習慣を断てなかったアスリの自業自得だ。アスリは罵られながら、自慰がしたい。
その悔しさの中に火照るアスリの背に、優しく手が置かれた。ぬくもりを通してアスリに広がってくるのは、無言の共感である。今のアスリの感情に寄り添えるのは、自分の身をいじりまわしていることを平気で公言している、ラリーヤ以外にはいないだろう。
「……ねぇ、アスリ。恥ずかしいよね？ごめん、私、何も考えないで、余計なことしちゃったかも。ユニスにまで見られて、もう最悪なんは十分なはずなんに。」
ティサだった。もう声は、低くない。このタイミングでもたらされる今日２度目の慈悲は、アスリにはこたえる。
やや、間が空いた。深く吐き出すティサの息遣いが、アスリの背にも広がる。静寂の一時に、ティサが進む。
「ねぇ、大丈夫。私もその……、あの、アレ……、たまにするから。」

「…………えっ？」

耳を疑ったアスリが、とっさに頭を持ち上げた。ティサのずっと先では、洞窟の中で剥き出しになったユニスの先端のように真っ赤な夕陽が、まもなく地平線に接しようとしている。

「なんていうか、その、寝る前……とか？だから、別に、変じゃないから。」

長いまばたきをしたティサが、明らかに恥ずかしがりながら、アスリの肩の後ろの方へと目を逸らした。夕焼けを背から受け、影となっているティサの顔も、アスリの目には奥の太陽ほどに赤らんで映る。

「ティサ……、ありがとう。」

自然と、アスリの口からこぼれたのは、ティサへの感謝だった。やはりティサという人は、アスリにとって尊敬すべき友人だ。この告白によって、どれほど自身が辱めを受けるのか、アスリは自ら実感したばかりである。それをティサは、アスリの心情を慮って、あれほどラリーヤに対して軽蔑するように話していた行為の経験を、率先して暴露した。

寄り添う優しさを差し伸べられるティサは、どうしてもユニスにふさわしい。ユニスはティサと生涯を添い遂げれば、必ず幸せな生涯を送ることができる。その将来に、アスリは嫉妬すべきでないし、日々微笑ましくユニスとティサがロマドウで暮らす姿が見られるの

なら、アスリとして不服はない。アスリはティサに敵わない。

ただ、それはあくまでアスリにとってである。ラリーヤは軽く口をとがらせると、冗談めいた口調で自らにかけられた不当を指摘していった。

「なんだ。じゃあさ、ユニスも、アスリも、ティサも、みーんな結局、くちゅくちゅしてるってことじゃん。私だけ変態とか言われて、損したわー。ってか、ティサやってないって言ってて、やってたって、嘘ついてたんじゃん！さっきだって、ホントはやってきたんでしょ？」

「うっさい！ラリーヤのバカ！さっきやるわけないでしょ？私とアスリ、今どんだけ恥ずかしいと思ってんの！？」

「…ごめんってば。でも、みんなえっちなの好きなんだってわかって、私、嬉しいよ？」

「バカ！ラリーヤとユニスは別、私とアスリは普通。あと、もっかい言うけど、さっきはホントにやってないかんね？私、アレ来てる時はラリーヤと違って、やんないようにしてんだから？もういいからさ、早く帰ろうよ？」

あまりの急転直下の流れに取り残されるアスリの前に、羞恥を噛み殺しているのであろうティサは、地面に置きっぱなしだった荷物を一気に抱え込んでいく。いやらしさにまみれるラリーヤも、恥ずかしいばかりのティサを見ては、洞窟の中のように独壇場を作り上げることもできず、ややゆっくりとティサに続いて、身支度を整えるしかない。アスリがあと1人の変態の方にも目をやれば、こちらはティサの隠し事を知って何かを我慢しているのか、それとももっと馬鹿になってしまったのか、完全に呆気にとられた表情で、美しい夕焼けを瞳に反射させているだけであった。

ふとここで、アスリは我に返った。まもなく出立するこの面々に、

アスリは最後にもう一言、どうしても伝えておかなければならないことがある。

「あっ！あのさ、1個だけ。もうみんなわかってると思うけど、絶対帰ってから、その……、そういう話しちゃダメだかんね？マジで。」

「別に言うつもりなんてないけどさ、さっき私と同じ変態だと思われたくないって言ってたんに、アスリもティサも一緒なら、気にしないでよくない？えっちなこと、みんなしてたし。」

「だからラリーヤと一緒にしないで。私とアスリは、そんなんじゃないし。」

「ラリーヤ、ダメだから。まぁ、なんでもいいから、ホントに言わんでね？」

「ってかさ、みんな普通にするもんなんだから、そんな話しても大丈夫じゃないん？カインタだと、男の子も女の子も、恥ずかしがりの子以外、みんな昨日何回とか、全然言ってたよ。」

カインタは滅んでしまったが、かつては性の村だったのだろうか。アスリの想像も及ばないが、とにかくこれから帰る先は、いつも通りのロマドウである。母に2枚の腰布を並べられてしまったエピソードは抜きにしても、アスリはラダンの身に起こった出来事も共有して、釘を刺しておくべきだろう。

「ダメなもんはダメ。これさ……、いや、マジで誰にも言わんでほしいんけど、ラダン、って、私の1番歳近いお姉ちゃんね。それ……してるの、昔ママにバレてさ。すっごい、すっごい怒られて、素っ裸にされて、あそこの毛、全部剃られちゃって。」

「うわっ！サイアクすぎる！」

ティサが笑いもせずに、口を真横に開いて、噛み締めた奥歯を見

せる表情を取った。今夜ティサも寝る前に、血まみれにならないようにしながら慰めるのであれば、アスリとしてはこの糧の旨味も伝えておきたいが、それではあまりに本論から逸れすぎる。この次に言う部分が、ラリーヤとティサとユニスへの釘であり、針だ。

「で、なんていうか、その……、お股の、おまん…、まぁいいや。丸出しで広げられちゃって、真ん中の中身のとこ、さっきのユニスみたく剥き出しにされて……、針刺されそうになっちゃって。」

「ひぃいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

悲鳴を上げたティサが、立ったまま腰を引いて内股を押さえる姿勢をとった。この姿もどういう訳か、アスリに対して欲求をもたらしてくるところがある。一方でラリーヤは、この話を聞いても無言で、遠くを見つめながら、何か物思いに耽っているような様子だ。

さすがは変態だ。きっとこちらは今のたったこれだけの短い話で、アスリのようにうまく咀嚼して、こっそり自らに与えているのだろう。

ところが、残る呆けた顔をした1人は、頭も呆けていた。ユニスはまたしても、非常に余計なことを口走る。

「……あの、袋みたいなんに？」

「はっ！？どゆこと？」

こちらも変態なのだから、呆けていても見たものは一切忘れられないようだ。すぐにティサが、ユニスをけん制する態勢を取っていく。

「いや、いっつも離れてたから、よくわからんかったけど、なんかアスリの見た時……。ってか昼言ってた、穴とかホントにあるん？アスリ、なくなかった？」

「いや！あるから！私、女の子なんだから！」

否定の言葉を発しつつ、今のユニスの述べたことの中には、見逃してはならない点があった。何事もなく流れてしまいかけているが、ここは絶対に押さえておかなければならない。

「ん…、ってか！待って！待って！ちょっと、今さ、ユニスいっつもって、それどゆこと？私の全部、こっそり見たんって、1回こっきりでしょ？」

「あの……、いや、なんてか、アスリ、結構前から牛連れてきてたから。」

「はっ！？！？！？」

「嘘！？」

「えっ、えっ、えっ！？何？じゃ、もっと前から、アスリが裸になってるとこ見てたん！？」

「いや、ごめんって！」

たった1人の禁忌の記憶が、アスリの頭の中をかき回すように巻き戻っていく。アスリがユニスに見つかったあの日の前から、ユニスはアスリを見ていたのだ。アスリは過去、あの川辺の木陰で何回、いや、何十回、何百回行って、どれほど良くなっただろう。ともすれば、薄い茂みすら生えていなかった頃さえ、ユニスは見ていたかもしれない。アスリの股と腹の奥は、熱い。

思考が立ち止まりかけたアスリに代わって、ラリーヤとティサがユニスに続く。もちろん、一方に据えられるのは性で、もう一方は怒りだ。

「じゃあアスリ、いっぱいくちゅくちゅして、ユニスもたくさん見ていじいじしてたってこと？」

「このバカ！！！！ラリーヤもバカ！やっぱりユニスのは潰す！

もっかいおちちん出しな！！！赤ちゃん作ってから、女の子にする！」
「うわ！ヤメロ！」
「ティサ！今からなかよしするん！？」
「バカ！ラリーヤ！しない！おい！コラァ！！！逃げんなユニス！！！」
「ちょっと！ねぇ、待ってよ！」

ティサがユニスを追いかけ始めれば、ユニスも逃げることになる。今日の最後の最後に、ユニスに何度も自らの全てを覗かれていたことを知ったアスリの内側は真っ白で、一切の整理がつかずにひどく荒れ果ててしまっている。
それでも森からやってきた2人の鬼ごっこの先では、逃亡する主人に合わせて犬も駆け出し、さらにその先では暇を持て余していたであろう牛たちも、移動を再開している。このままここで、もたもたする訳にもいかなくなったアスリは、ラリーヤと手分けして残る荷物を素早くまとめると、伸びきったいくつもの影に追従しながら、家路を急ぐしかなかった。

ラリーヤの下ごしらえ

翌朝、いつも通りアスリの家の前にやって来たのは、なぜか動物の皮を丸めたものと、小さ目の釜を1つずつ持参する、ティサとラリーヤの2人だけだった。持ち物の説明よりも先に、来なかった1人についてティサが語ったところによると、ユニスは高熱を出し、とても長く歩けるような状態ではなく、起きてすぐに寝床に引き戻されてしまって、ユニスが来なければ、犬もついてこなかったとのことである。昨日、終盤はアスリの名前を出す失態をして、結局馬鹿のままではあったが、洞窟の中で相当量の知識を得た分、ユニスも風邪ぐらいは引くようになったのだろうか。または、あまりに中身が空っぽのところに一気にいろいろと流し込んだせいで、知恵熱が出てしまったのだろうか。

何にせよ、今日牛たちに同行できるのは、女子が3人だけとなる。もう父とダカクは出発し、最強の弓矢であり盾であるユニスと、その忠実な従者たる犬がいない以上、何らかの急な危険によるリスクを最低限に抑えるためにも、今日の行先とすべき場所は東の草原であり、3人分の牛乳を器に注ぐアスリには、まもなく母からその旨の一言が伝えられることとなるはずであった。

ところが、牛乳を受け取って一口飲んだラリーヤが切り出したのは、今日は肌のつやがよくなる薬液を作るという計画である。朝の忙しい時間だというのに、長年の苦労が顔に刻まれつつある母は、ラリーヤの話を小耳にはさむと、直ちに目先の仕事を取りやめて傍らでキセルをふかし始め、ラリーヤがそのために今日はわざわざティサと1人1つずつ、釜を持ってきたと続ければ、勝手に裏手に回って、アスリの座る横にも古い大きな釜を無言で置きやったのであった。当然ラリーヤは、うまく完成すれば毎朝の牛乳のお返しに、

母にもたっぷり持ってくると先回りして伝えて、あとは母からの無理をするなと言いつつ出てくる礼とともに、３人と牛たちは快く送り出されていった。

もちろん、肌のつやが良くなるのなら、今日はあの煌めく遺品の腰飾りを身に着けていないが、意思は確かであろうティサに続くユニスの2回目に備えて、アスリも一刻も早くその薬液を作って全身に塗りこみたいし、先に初めてをいただくティサも同じように考えているはずである。そうなると、朝の道中の話題は美容に関するものになるし、それに回答ができるラリーヤに全体の主導権も次第に移行して、誰も何も言わずとも、牛たちと釜を持つ３人の行き先は、いつもの場所に定まっていった。

アスリは正直に言って、昨日あれほどいろいろとあった後、帰宅直後から性に対する欲求以上に、４人との関係がおかしなものとならないか、不安で仕方なかった。無論、性的欲求も厳しかった。

しかし、そもそもいやらしい皮の槍をぶらさげる本人は今日はいないし、ラリーヤもこうして普段通りの様相を見せている。やはりあえて今日、ラリーヤが釜を手に美容の話を持ち出してきたのは、昨日自らをさらけ出しすぎたことへの反省だけでなく、ティサとアスリと、本来同行するはずだったユニスに対しての配慮もあるのだろう。ラリーヤはとんでもない変態であることに変わりはないのかもしれないが、誰に言われずとも率先して気を配ろうとするラリーヤの姿勢には、アスリは感服するばかりだ。

さて、滝の横に到着して、アスリが今日優先すべきは、字よりも薬液である。狩りの後処理がないティサとともに、アスリがラリーヤに何か手伝えることはないか尋ねれば、ラリーヤからは牛が口にするものよりももっと柔らかい枯れ草をできるだけ多く、あの洞窟に集めてほしいという依頼がかけられたのであった。早速アスリは、あまり牛たちから遠く離れないようにしながら滝の周辺を、ティサ

は池から流れる川に沿って、もっと先の方を、それぞれ手分けをして、ラリーヤの指示通りに枯れ草を拾っては、置きたいまつに引火しないよう注意しながら、洞窟の字の壁と反対の壁側の一角に集めていった。

昼食を挟んで日も傾く頃には、洞窟の中の一面が、アスリの腰の高さほどの量の、ふかふかの枯草で埋まった。３つのうち、小さい方の２つの釜にたっぷりと水を張って、川の中州で火にかけたきり、枯れ草の代わりに別の何かを集めに行ったようであったラリーヤが洞窟に戻ってくれば、その手にあったのは、長いツタに手のひらほどの大きさの葉のついた植物と、濃い黄色の果物がいくつかであった。植物の方はアスリも見識がなかったが、果物については元々ロマドウでは出回っていなかった種類のもので、アスリも初めて口にしたのは、この洞窟に来る日々が始まって、ラリーヤとティサが滝の近くの豊かな緑の中で採集してくるようになってからである。

この、意味ありげな果物をラリーヤはどう使うのか、アスリはしばし注目していたが、果物はただ帰りの荷物の方に果物をまとめられただけであった。一方、積みあがった草は薬液に関係があったようで、ラリーヤはどこかで拾ってきた木の棒で軽く枯草をたたいて、膝丈ほどの高さまで全体を潰し、あとは香りの良い別な草をその上に散りばめ、上から持参した動物の毛皮を広げて、覆いかぶせていった。これからどうやって薬液ができるのか、アスリは一切想像できなかったが、せかせかと動き回るラリーヤにのんびり質問するわけにもいかず、ここはラリーヤについて回って、手伝えるところに手を貸すしかない。

ここまでが済むと、ラリーヤは洞窟から出て、ティサとアスリを従えて中州に向かって行って釜の火を消し、最後に煮え立ったお湯の中に、先ほど果物と一緒に採集してきたと植物をちぎって放り込んでいった。ラリーヤ曰く、これで今日の薬液作りの作業は完了だそうで、このあと夕方にかけては、村に帰って別件をこなすため、

今日はもう引き上げたいとのことであった。そう言われては、アスリもこの場に残る理由もなく、早上がりに不機嫌な鼻息を鳴らす牛たちをなだめた後、昨日の帰りのように自分に矛先が向かないように注意しつつ、腰飾りをつけてこなかったティサを、ラリーヤとともに丁寧にからかいながら村へと戻って、3人は解散した。

牛たちを所定の位置に戻した後、昨日の出来事を思い返したアスリが企てるのは、悪事以外にありえない。夕方のひと時の過ごし方を難なく定めたアスリが、母も出かけて誰もいなくなった自宅に一旦帰り、水浴びの支度を整えて、再び家を出て少し進んだ時だった。アスリの家の裏手から、誰かが駆けてくる足音が近づいてきた。

「わっ！！」
「ごめん！アスリ！」
「びっくりした！どしたんラリーヤ？用事あったんしょ？」
「そう！ちょっとその前に、さっき1個聞き忘れて。このあたり、あんま人来なくて、水浴びできるとこってない？」
「えっ……？」

応じるアスリが、今のラリーヤの意図を見破るまでに時間はかからなかった。もうラリーヤがいかに変態であるのか、アスリは十分知り尽くしている。今日はユニスもおらず、女子だけの時間に登場する性の話題の威力は極めて小さかったが、結局ラリーヤは昨日1人で慰めただけでは足りず、きっと今、急を要していて、これからアスリが成したいことと同じことを成そうとしているのだろう。それでいて、ティサと別れた後にあえてこうやって聞いてくるのだから、堂々としているように見えるラリーヤにも、隠せるだけのところは隠したいという思いが意外とあるのだろうし、どうしてもロマドウの地の利がないから、こうして恥を忍んでアスリにどこか良い場所はないか、聞きに来たに違いない。

つまり、ラリーヤが今日早く帰ってまでしてやらねばならなかった用件とは、自慰だ。そうであるなら、さすがに今日のアスリは全てをさらけ出して見てもらうおうと思うほど気分は高まっていないが、水辺に布の三角柱を立てて、ラリーヤが真横で自慰をする様子に聞き耳を立ててみるのは、おもしろい試みだ。または、羞恥に負けてすっきりできずに水浴びだけして、もじもじしながら帰るラリーヤを眺めるにしても、意地悪であることは分かりつつも、後々アスリの小さな糧として、火を入れていく時の導入ぐらいには使えそうである。

「……あぁ、今日早く戻って来ちゃったから、あっちで水浴びできなかったもんね。前は、いっつもどしてたん？」

「この前まで井戸の水だよ。あと、うちからちょっと行ったとこの、水出てくるとこ。あそこも教えてもらったけど、全部脱ごうとしてたら、近くにいたおばちゃんに滅茶苦茶怒られてさ。その割、朝とか夕方、布張って誰か水浴びしてるし、意味わからん。」

「いや、適当に裸になったら超怒られるって。あとあそこは1番近いから、おじいちゃんおばあちゃんたちがよく使うんよ。私もちょうど今から行くけど、一緒に行く？」

２つ返事で同行したラリーヤに、道すがらアスリが聞けば、カインタではロマドウにように水浴びの時に布を張る風習はないそうで、男女を問わず、大人も子どもも森の中を流れる川で、気ままに素っ裸になって水浴びをしていたそうである。ただ、カインタの奥を流れる川は木々がかなり茂って、藪のようであったそうで、誰かから覗かれる心配をする以前に、木の枝やトゲで体を引っかかないようにする方が、気を遣うのだそうだ。

加えて、未だにラリーヤは誰からもロマドウでの一般的な入浴方法を教えてもらっておらず、むやみに全裸になろうとした経緯も手

伝って、勝手に布を張るのも控えて、村内で体を洗う時は人目を見計らい、井戸の水で少しずつしか流せなかったそうである。アスリからすれば、それぐらいはいつでも聞いてもらえれば答えたのだが、最近はもっと自由の効いて水も豊富な滝に通うのだから、ラリーヤとしても我慢の限界には到達しなかったのだろう。

ただし、ラリーヤの村での水浴びの不便は、アスリの配慮不足によるところもある。この機会にラリーヤに伝えることを、後日改めてティサとユニスにも教えることを心に留めながら、アスリはラリーヤを連れて、村から少し出てすぐの、数本の枯れ木と大き目の岩がいくつかある、枯れ川に沸いた水場まで案内すると、そのまま槍と枯れ木と布を使った三角柱の立て方を伝授していった。

「……で、こんなかんじ。あとはこの中で体洗ってくんよ。」

「なるほどねぇ。あんま近くでじろじろ見れんかったから、どうしてんかなって思ってたけど、まぁ結局、普通に3枚布張ってるだけってことか。アスリ、ありがと！この布とか紐とか、族長さんとこにもある？」

「どこの家にもあるよ。とりあえず、せっかくできたしラリーヤ、先に入ってったら？」

アスリはつい、笑みを浮かべてしまった。これからラリーヤが本当に体を洗うだけなのか、しっかりと耳を澄ませておかなければならない。

ところが、ラリーヤはアスリの術中にはまらなかった。

「大丈夫、ありがとう！やばい、早くしないと暗くなっちゃう！私急がなきゃだから、アスリはゆっくりしてってよ。じゃ、また明日！」

あまりの急な反応に呆気にとられるアスリを尻目に、ラリーヤは

アスリの悪だくみを見抜いた素振りすら一切見せず、爽やかに一度手をあげて、踵を返して村の方へと走り去っていってしまった。アスリが自らの行動を振り返る限り、自身に不自然な変態性が出ていた個所は、先ほどラリーヤが声をかけてきて以来、皆無であったはずである。

ラリーヤの意図が見いだせず、思わず両手を腰に当てたアスリは、揺れる胸を押さえるためであろう、両脇を締めながら駆け、徐々に小さくなっていくラリーヤを、ただ無言で見送るしかなかった。そして、その背が見えなくなったところで、アスリは自ら作ったばかりの三角柱の中へと入って脱衣し、おかしな後味を水で洗い流してから、心を上書きするように昨日の出来事を思い出して、母への謝罪を始めていった。

水場の計画

あくる朝は、優秀な犬と意気地なしの変態も顔を見せ、１日ぶりにいつもの面々が全て揃った。昨日のうちに女子３人は、インパクトの後に生じた気まずさを、薬液作りを通してほとんど消化しきっているが、ユニスに関しては、今朝がアスリにとっての昨日の朝と同じ状況にあたることとなる。普段と同じ、アスリの家の軒先であるのにも関わらず、居心地悪そうに座るユニスは、アスリから実に素晴らしい伏し目で牛乳の入った器を受け取って、手にしたそばからその場で立ち上がり、一気に飲み干してしまった。そして、口元をひと拭いしてから、犬とともに離れた場所まで走って行って、弓をあちらこちらに向けながら、何やら練習するような素振りを見せていた。

一方、アスリだけでなく、ティサもラリーヤもすっかり平常運転に戻っており、こちらはのんびりとおしゃべりである。朝食を摂り終えて、ようやくアスリが牛たちの準備にかかろうとすれば、ペースの合わないユニスは早くも犬を従えて、いつもの方向を目指そうとしていた。一気飲みしたばかりの牛乳を、漏らしそうなのだろうか。

だが、その逃げるような背は、ラリーヤによって大きく呼び止められた。

「ユニス！！今日違うよ！？」

「はっ？」

「今日、いつものとこじゃなくて、この前まで行ってたとこ！」

このラリーヤの声かけは、アスリにとっても予想外であった。直前まで薬液についても話題に上ったのだから、昨日に続いて今日も

当然、草を集めるなり、湯に漬け込んだツタの様子を見るなり、滝の横で何らかの作業をするものとばかりアスリは考えていた。それが今日は、この前の場所、すなわち東の草原に行くのだそうだ。これはティサも頭になかったようで、アスリよりも先に、抱いた感情を声に出していった。

「えっ？今日、滝じゃないん？」

「今日はね、午後からまた別だから。あ、みんな一緒だけどね。場所が別。」

ふいにアスリの中で、何らかの勘が走っていく。ここまで薬液が煙幕としてアスリたちの前に張られていたが、一昨日、ラリーヤはロマドウの中に食したい人物がいると言った上で、その目途を明日、ないし明後日でつけると述べていた。明日とは穏やかに流れた昨日で、明後日が今日だ。加えて、安定していたかのように思える昨日でさえ、アスリがのん気に耽る直前、ラリーヤの行動は極めて不自然であった。

現時点で、点在する各要素をラリーヤがどのようにつなげようとしているのか、まだアスリは見通すことができない。しかし、ラリーヤほどの強い行動力を持つ女が、明後日までと指定した今日、何かを引き起こそうとしている可能性は高い。

「えっ、ラリーヤ、今日ってさ……？」

思わず傍らのラリーヤに一声かけたアスリが目にしたのは、ラリーヤの悪い笑顔だった。確信犯だ。

「いいじゃん？あとでね？あっ…！アスリママ！今日はね、東の方だから、お昼にはみんな1回戻ってくると思うから。」

「そう、お昼から何かするの？」

「ちょっといろいろしなきゃでさ。お肌のお薬、上手にできてれば明日の夕方には持ってこれるかな？」
「ホント！？アスリ、牛さん終わったら、ラリーヤのことしっかり手伝ってあげて！」

恐ろしい女だ。ラリーヤは完全にアスリの母の信頼を勝ち得ているし、母との会話も、すり替えていないように見えて、核心からは逸らしている。

まもなく、牛たちも加わった一行は、大いなる導き手の意思に従うがまま、東の草原に向けて出発した。ユニスと犬だけが勝手に先へと進む道中、ラリーヤは昨日の朝と同じ調子で、まだラリーヤの何らかの思惑に気づいていないであろう純粋なティサと、ただただ楽しそうにいつものような会話を繰り広げるばかりである。それに合わせてはいるアスリに、この場で何らかの問いを挟み込むスキルはない。

東の草原に着くと、相変わらず女子たちを避けるようにしているユニスは、またすぐさまどこか遠くに行こうとしたが、ここでもラリーヤがどうにか再びユニスを呼び止めていった。ラリーヤはユニスのもとに駆けていくと、落ちていた木の棒で地面に何かの図を書きながら、いつになく真面目な表情で何かを語り始めている。久々の場所に、牛たちもそこまで不満なく広がるところを見届けたアスリも、ティサとともにユニスとラリーヤの輪に加わるべき時である。
ただ、ここでタイミング悪く、どこに潜んでいたのか、ダカクが猛然とアスリに向かって走り寄ってきて、後には息の上がった父も続いてきたのであった。最近も東の草原が、2人の主要な狩場なのだろう。父もダカクも、アスリたちが今日この場に来るとは思っていなかったようで、そこからどうしてそういう話にしたいのかは不明であるが、とにかく特訓して改善した腕前を見せると言い始め、

優しいティィサがそれに応じてしまえば、結局ユニスとラリーヤの会話は謎に包まれたまま、先に2人の話し合いの方が終わってしまった。あとはユニスとラリーヤの方がアスリとティィサへと加わって、そのまま4人で父とダカクの狩りの見学会と相なった。

父とダカクは傍から見ても大層難儀しているようであったが、昼時を迎える前になって、どうにかウサギを1匹捕らえることに成功した。残念なことに、父とダカクが意気揚々としていられたのは、6人で広げた弁当を食べ終えるまでであった。

このあと病み上がりのユニスは、どこからか迷い込んできた、真っすぐ生えた立派な角のガゼルのような動物を、華麗に射貫いた。ユニスの鮮やかな一射は相変わらず見事であり、これだけでアスリの中でくすぶっていたラリーヤの悪い笑顔と、ユニスと話し合われていた何らかなど、何事もなかったかのように吹き飛んでしまって、どなくして、父から一方的に元気を吸い上げてハイテンションになってしまったダカクと、一気に干からびてしまった父に後の処理を任せると、4人と犬と牛たちは、予定通り昼過ぎの草原から引き上げていった。

復路、女子3人から続く惜しみない賞賛を受けるユニスは、今日の狩りの手ごたえによって一昨日のことなど忘れてしまったのか、朝のように犬と先行することもなく、村に到着する頃には、4人の間の空気も、いつものものへと戻っていた。愛するユニスの超一級のエンターテイメントを目にして、アスリの意識の中心は、完全にユニスと過ごす楽しいひと時に向けられていた。

それでも、アスリがユニスに気を取られているかどうかに関わらず、ラリーヤの策は先へ先へと進んでいく。

「じゃあユニス、さっき説明した通りで？さっきもすごかったし、

熱は大丈夫そだね。私は1回、戻って荷物取ってくるから。」
「分かった。じゃあアスリ、案内して？」
「え？」

牛を戻し終えてから、ラリーヤとユニスが簡単に会話を交わした後だった。突然ユニスから、アスリに依頼がかかった。
「あ、えっとさアスリ、昨日の夕方のあそこまで、ユニスとティサ連れてってもらえん？今朝、暗いうちに準備しといたからさ。私もすぐ行くから、待っといてね。」
「何？どゆこと？」
「急がないとだから、いろいろあとで！じゃ！」
そこまで言うと、ラリーヤは村の中央の方に向けて、走り去っていってしまった。全くもって要領を得ない話である。
「え？ユニス、さっきラリーヤから何か聞いたんよね？」
すかさず、怪訝な顔のティサからユニスに声がかかった。だが、あれほど弓の腕は立つというのに、ユニスは背中をかきながら、暇そうな山羊のような表情を浮かべている。
「そうだけど、見ないとわからんて。とりあえずアスリ、そこ連れてってよ。ラリーヤが言ってた通りか、まず見ないと。」
こういう時に無理にユニスに話を聞いても、ユニスを背負って運んだ時と同じく、どうせうまい説明が返ってこないことは、アスリも容易に想像がついている。ひとまずここは、ラリーヤとユニスの言う通りあの水場に行って、ラリーヤが今朝暗いうちに準備したというものと合わせて、現場の状況から午後の意図を汲み取る方が、

アスリも遠回りをせずに済むだろう。ティサと犬にも目で合図を送ったアスリは、早速2人と1匹を連れ立って、昨日ラリーヤに紹介したばかりの水場へと向かっていった。

水場の近くまでやってきて、真っ先にアスリが目にしたものは、昨日アスリが組み上げたものよりも少し大き目の三角柱である。アスリが近くに寄ってみれば、いくら後で片づけるものとは言え、枯れ木に結ばれた布の紐にしても、地面に突き立てられた槍側の留め具にしても、随分といい加減な組み方で、もう少し強く風が吹けば、三角柱はいとも簡単に崩壊してしまいそうであった。また、槍のそばには、ラリーヤが染め物の実験に使ったと思われる、土気色のたまれた布と、ユニスが先日捕まえてティサが捌いたものを干したのであろう、頭のところまでが残る肉食獣の毛皮1枚が、それぞれ丸められた上に、石を載せられて置かれていた。

「はー。これなら大丈夫だわ。ファラール、この槍で。」

　アスリからすれば、何がこれで大丈夫であるのか一切理解が及ばなかったが、先ほど東の草原でユニスと一緒にラリーヤの説明を聞いていた犬は、これで十分なのだろう。犬はユニスの指した槍の柄の匂いを少し嗅いでから、水場でガブガブと喉を潤し、その間にユニスは犬の体に置かれていた毛皮を被せて、落ちていた枯草で、犬に毛皮を巻きつけていった。それが終われば、着ぐるみとなった犬は、ユニスが次に指した離れた場所の岩の方へと駆けて行って、その岩陰と一体となったのであった。当然、これではアスリとティサは置いてけぼりである。

「で…？私とアスリ、全然何もわかってないんだけど？」

「俺らはー、そこでいっか？ちょうど木の影で、くぼんでるし。」

「は？どうすんの？」

「ティサ、ラリーヤすぐ来るかもしれんからさ。それまでにこっちは準備しとかんと。アスリも来てよ。あそこにうつ伏せで、そっちの見えるようにさ。」
「えっ？うつ伏せ？」
「仰向けでも横でも見えんしょ？ラリーヤがそこに立ってるやつ、見えるようにって言ってたんだから。」

そろそろしっかりとした説明がなければ、アスリの心中はいら立ちで溢れ返すこととなる。だが、ラリーヤも先ほど自ら語ったように、もうすぐこの場に見えるようであって、それまでにどういう訳か、うつ伏せになって待機しなければならないようだ。ユニスに急かされ、言われるがまま、アスリとティサは指示された木陰まで行って、頭を三角柱に向けるようにして地面にうつ伏せになると、ユニスはラリーヤが置いていった地味な布を広げて、2人の上に覆いかけていった。

「えっ！？それ、うちらに掛けんの！？」
「そうそう。俺も今から入るから、アスリ、もっとティサの方に詰めて。やっぱアスリ、背高いわ、足はみ出そう。俺、端っこね？ファラールが見えんし。」
「えっ、ちょっと、うわっ！次は何？これ、上から砂かけてるよね？」
「あっ！ティサ、動かんでよ。だから俺も入るから、大丈夫だって。埋めないから。」

そうして、ユニスは近くに落ちていた枯れ草の塊を拾ってほぐし、アスリとティサの背中に載せられた布越しの砂の上に、さらにわずかな重さを加わえたところで、申告通りに布と地面の間に身を潜り込ませたのであった。これでアスリを中心にした、左手にはティサ、右手にはユニスの、カモフラージュされた大地が仕上がった。

「よし、できたわ。暑っ…。これ、ファラールもしんどいな。早くラリーヤ来いよ。」

一息ついているのであろうユニスは、仕事を片付けて煙草をふかす時の大人のような口ぶりだ。そうであるなら、たまりにたまった説明不足は、今のうちにはっきりさせておかなければならない。同じ思いであるはずのティサから先に、真ん中のアスリを飛び越えて、ユニスに厳しい口調の問いが飛んでいく。

「これで準備できたん？で？ってか何なんこれ？全然意味わからん。」

ところがこれに続くユニスは、やはりただのユニスであった。悪気もなければ、さも当然とでも言うように、ユニスは続けた。

「いや、俺もラリーヤからは、こうしとけって言われただけだし。意味は知らん。」
「はっ！？意味わからんのに、こんなんやってるってこと？」
「えっ！？ちょっとさ、なんでやるかぐらいは聞いとこうよ？私もティサも、こんなとこで布被って、砂かけられてんだよ？ってか、何したいか聞いとかなきゃ、なんかあった時、私らも何もできんじゃん？」
「そうだよ、ホント信じられん。ユニス、アホでしょ。さすがにないわ。」
「うっさい！だったら2人とも、ラリーヤに自分で聞けば良かったじゃん。」
「そんな雰囲気じゃなかったってか、ダカクとパパ来ちゃって、聞く時なかったし。ってかラリーヤから地面に何か描いて説明してもらってたんだから、普通、あとでユニスから聞こって思うじゃん。」

「いや、でも、絵に描いてもらった通りにはできてるからさ。」
「どうするアスリ？帰る？あっ！ユニスのこと、このまま埋めちゃう？」
「は！？やめろよ！」

たしかに今はうつ伏せの姿勢だが、ユニスを仰向けにして一部を除いて砂の中に埋めてしまって、ティサと2人で地面に生えているところをいじめて、一昨日のように種なのか乳なのかを、ユニスに排出させれば、ユニスも少しは賢くなるかもしれない。アスリがふと、呆れるユニスに一筋の希望を見出した時であった。

「あっ、来たわ…。」

小さく、ユニスがつぶやいた。アスリが見渡す限り、まだサバンナに目立った気配はない。

「えっ？何？何もいないじゃん。」
「嘘つきか。やっぱ帰る前に埋めてこ。」
「いや、本当だって！ほら！俺らが来た方！あと声、もう静かにして。ラリーヤにこうした後は黙っとけって言われてるから。」
「またラリーヤに言われたから？アスリはいつでもお願いできるからいいけど、私の言うことも聞いてくれんだよね？」
「いいからティサ、黙って！」

ユニスがティサに沈黙を要請した直後、赤い砂の土の広がりの奥、ロマドウの方角からごく小さな点が水場に向かって近づいてくるのが、アスリの目にも入った。

来る。来るという事前情報が入っている以上、この点は確定的と言えるほどに、ラリーヤである可能性が高い。

しかし、あちらは思った以上に速い。時折吹く弱い風に揺れる木の葉が擦り合う音以外、静寂に包まれていたサバンナに、少しずつ大きくなる蹄の音が鳴り響いていく。

馬だ。馬に乗って、来る。押し黙って1点を見つめるアスリの隣で、ユニスが唾を飲み込む音がした。少し遅れて目を凝らすアスリも、彼方から来る馬上の者たちが誰であるか、認識した。

イケメンだ。ラリーヤと、イケメンだ。茶色に白まだらの模様の馬を駆り、背後からラリーヤに両手を回されている相手は、ロマドウで唯一、イケメンだけで名の通る、あの若者だ。

馬上の人（後書き）

※　補足

文中終盤の「イケメン」とは、３１エピソード「すぐに帰ろう」に登場した、イケメンと呼ばれていた彼に当たります。

アスリが全てを察するまでに、時間はかからなかった。まもなく、あの心もとない三角柱を中心にして、とんでもないことが始まろうとしている。ここに至って、アスリはあまりにも鈍かった自らを悔やんだ。いくらユニスに最高のショーを見せてもらえたからと言って、ラリーヤが今朝浮かべた悪い笑みは、決して意識の中から外すべきではなかったし、この場にやってきて、実質的に身を隠した状況になったところで、ラリーヤが何をやろうとしているのか、把握すべきであったのだ。

もっとも、それを事前にアスリが掴んだところで、ラリーヤの行動を止めることもできないし、止めるべきでもない。これはティサと、その相手を務めなければならないユニスのために、ラリーヤがわざわざ設けてくれた貴重な学習の機会であり、アスリもここに呼ばれている以上は、ラリーヤとしてもアスリに等しく、座学ならぬ伏せ学による授業を受ける権利を与えているのである。ラリーヤはユニスを超越する変態であるが、優しく知を授けようとする立派な女なのであって、アスリはありがたく配慮を拝受すべきだ。

それにしても今から事をなそうとするその相手が、まさかイケメンであったとは、アスリは夢にも思っていなかった。彼がラリーヤの言っていた、ロマドウで食したい相手に当たるのであろうし、もうすぐラリーヤによって、イケメンは仲良く調理されてしまうのだろう。

思えばたしかに、あの2人にはアスリの知る限りにおいても、それなりの面識があった。あれは負傷したユニスとティサを、ラリーヤと2人で手分けして背負って運び、馬に乗って母や族長たちがアスリを迎えに来た日のことだ。あの時、暴走する馬の背で気分が悪

くなってしまったアスリの一方で、ラリーヤは助けにやってきたイケメンの方の馬に乗ってロマドウまで一度向かい、聞いたところによれば、その後、またイケメンとともに牛たちを連れる母のところまで戻ったはずである。

当初、この話を聞いた時点でアスリは、わざわざ声も出ないラリーヤを連れ戻したイケメンに対して、無配慮の烙印を押していたが、今、この光景を前にすれば、そこにはラリーヤの意思も控えていたことであろうことも想像できる。あの日はアスリも、さんざんな目にあったところで、ユニスに命を救われて、凛々しい瞳に恋に落ちてしまったのだ。ラリーヤがどの程度、イケメンに好感を抱いているのかは不明であるとは言え、滅亡の最中のカインタより、命からがら脱出し、弱った怪我人を運ばされて、やっと身を預けることができた馬上の背中を、頼もしく感じないはずがない。

今日もまたラリーヤはあの日と同じく、イケメンの駆る馬に揺られている。徐々に近づき確かとなる、イケメンの首筋に頬を寄せるラリーヤの顔に浮かんでいるのは、満足である。きっと、食したいと述べたラリーヤの気持ちに偽りはなく、いずれこうしたいという願いの先に待つ時間が、これから始まるのだろう。

対して、イケメンは遠目に見ても強張った表情をしていて、彫りの深い顔立ちは、いつもの滝を囲む崖ほどに切り立っているようにアスリの目には映る。すでにイケメンもラリーヤから、これからの時間の使い方について聞かされているのだろうか。

「嘘、これってもしかしてさ…。」

ティサが小声でつぶやいた。ティサも理解が及んだようだ。

「やばいよね？　なかよしするとこ、うちらに見せようとしてんでしょ。」

「はっ！？」

　アスリの声を潜めた回答に、ユニスが強く息を吐きだした。こちらは本当にラリーヤに言われるがまま、何も考えていなかったのだろう。ユニスには後日、魚の頭でもたくさん食べさせて、もう少し頭の中身を増やしてもらうしかない。

「しっ！バカ、自分で声おっきくなってんじゃん。静かにしてよ。ってか…、嘘でしょ！？あの人？いたね、あの人、村に…。誰なん？」
「イケメンさんだよ。」
「えっ？アスリもあゆうのが好きなん？」
「違っ。」
「マジか！」
「バカ、ユニス。だから声おっきいって。」
「違って。あんなん、顔が濃いだけ。だからあの人、みんなにイケメンって呼ばれてるんよ。」
「ホントの名前は？」
「なんだっけかな…、みんなイケメンってしか呼ばないから、私も忘れた。」

　ユニスによるものを除いた、主に吐息での会話を3人の間で続けているうちに、イケメンとラリーヤは例の三角柱の側へと到着し、まず肩に何かの入った袋を引っかけてきたラリーヤに、続いてイケメンも馬を降りて、イケメンはそのまま馬の手綱を近くの枯れ木へと結びつけていった。この馬はおそらく、族長宅から拝借してきたものだろう。馬は水場の縁まで首を伸ばして、うまそうに水を飲み始めたが、今のうちに首を伸ばしておく判断は賢明で、そうしておかなければイケメンは考えなしに遊びを持たせないで手綱を縛ってしまうだろうし、待機の間、馬は喉を潤せないこととなる。

ここでラリーヤはアスリたちの方にくるりと振り返ると、朝と同じ悪い笑顔をニヤリと一度浮かべて、1本立てた右の人差し指を、自らの口元に当てる仕草を見せた。ラリーヤは、アスリたちをしっかり視認したようだ。

これから執り行う内容が内容であって、イケメンもある程度は服を脱ぐことになるはずであるし、そのためにラリーヤは水場に彼を連れてきたのだと思われるが、仮にも3人が隠れていることがイケメンにバレてしまえば、さすがにそこまでで今日の計画は中止になることは、アスリも状況から予測できる。ただ、こうなるとまでは頭を回さずに、ユニスに任せて布と砂と草を少々かけただけの擬装とは言えど、ラリーヤが今見せた様子を見るに、あちらからは思ったよりも不自然に見えないようである。

何にせよ、このラリーヤの身振りを見ては、アスリもユニスもティサも不用意なおしゃべりはできない。この先、ユニスが配慮のない声を出せば、アスリも横から手を潜り込ませて、長い皮をさらに長く伸ばしてやるしかないだろう。

まもなく、手綱を結び終えたイケメンがラリーヤの方を振り返るのと同時に、ラリーヤもイケメンへと向き直ると、まずイケメンは三角柱に向けて両手を斜め下に広げて、ぎこちない笑みとともに何かを語り始めた。対してラリーヤは、アスリたちに見せた口元の人差し指で空を指して揺らし、時々首を傾けながら、イケメンに応じている。耳をすましても、アスリたちのところまで届くのはイケメンとラリーヤの声にならない音だけで、会話の内容そのものをアスリは聞き取ることができない。この様子を見る限り、イケメンはラリーヤから究極の詳細は聞かされていないのかもしれない。

案の定、2人の会話が進むにつれて、イケメンのよくわからない笑顔は、徐々に困惑へと変化していった。仮にもラリーヤの目的がこの時点までに明らかになったのであれば、イケメンはもっと驚い

て良いはずだ。おそらくラリーヤはまだ、はぐらかしたようなことしか述べていないのだろう。アスリには、ラリーヤの形勢は不利にしか見えない。一体、これからラリーヤはどうやって事を運んでいくつもりなのだろうか。

当のラリーヤは、一昨日、洞窟の中でアスリたちに仕組みを全て語って、自らの本性もさらけ出した時と同じく、余裕に溢れている。柔らかい動きを見せるラリーヤは、まず肩からかけていた袋から、美しい模様の入った薄手の布を1枚取り出して広げると、ずさんに築かれた三角柱の前の地面に段差ができているところへと広げ、その上に袋を置きやってから、決まりの悪そうなイケメンにも座るように、右手を広げて促した。どうして馬まで借りてきたのかはアスリも見通しがつかないが、とにかく馬まで借りてここまで来たイケメンも、ラリーヤを拒否することはなく、静かに布の上に腰を下ろしてあぐらをかけば、同じくラリーヤもその隣に、閉じた足を斜めに折りたたんで、イケメンに身を寄せるようにして座っていった。

いつにも増して大人びて見えるラリーヤは、静かに何かを語っている。その美しい顔を真隣で見つめるイケメンの頬は、やや赤らんできているようである。ラリーヤが何とイケメンに声をかけているのかは、ここでもアスリは掴めない。しかし、困惑から照れる表情へと変わりつつあることを踏まえれば、ラリーヤはイケメンを褒めているのかもしれないし、場合によってはイケメンは、ふくよかなラリーヤの胸を盗み見して、一人で勝手に喜んでいるだけかもしれない。

ここでふと、ラリーヤがまた、傍らに置きやっていた袋へと手を伸ばした。袋から飛び出してきたものに、アスリは目を見張った。

手持ち刃だ。ラリーヤが、刃を持ち出した。

まさかラリーヤの述べた食べたいという言葉とは、本当に食事の意味であったということか。しかし、目の前の刃とは裏腹に、イケメンの目尻は垂れ下がるばかりである。

当然、アスリの瞬時の懸念は杞憂でしかなく、ラリーヤがさらに続けて取り出したものは、濃い黄色い皮の果物であった。あれは一昨日、アスリとティサが洞窟の中に柔らかい草を拾って集めている間に、ラリーヤが採ってきて、結局使いもしなければ食べもせずに持ち帰ってきたものだ。

この名前すら知らない果物を目にして、アスリは今日のラリーヤの策の完成度の高さに、心底脱帽した。まだまだ村の中では珍しいあの果物が出てくれば、今イケメンが醸し出してしまっている取っつきにくい空気は、たしかにかなり軽減できるに違いない。

ここまででイケメンも、サバンナの地面と化しているアスリも、おそらく両隣のティサとユニスも、全員の注目は果物に集中している。ただ、今日の主役は果物ではない。

主役はラリーヤだ。ラリーヤにとって、果物は道具なのだ。

ここからラリーヤの攻勢が、一気に始まった。知恵者たるラリーヤは、まず手にした果物のまわりにぐるりと一周切れ目を入れて、やや分厚い皮に親指を差し込んで果物を開くと、中央の種をきれいに取り除いて半身を裏返すようにしてから、果肉のところを一口分切り出して、刃の先にその大き目のひとかけを刺し、イケメンの前へと掲げた。

ラリーヤの左手が、イケメンの右頬へとゆっくり当てがわれる。同時に、アスリたちから見えるラリーヤの横顔の口は縦に開かれ、ラリーヤの口に倣うようにして、イケメンの口も同じ形に開かれていく。

待っていたようにイケメンの口内に送り込まれるのは、できたば

かりの一口分だ。イケメンが開いた唇でラリーヤから受け取るのに合わせて、幼子を見つめる時のような母性の笑顔が、ラリーヤに広がっていく。

やはりイケメンは、彫りの深い顔立ちをしているだけだ。ラリーヤも随分とまた呆けたような顔をしているが、イケメンの方はなんと情けない表情だろう。みずみずしいとは言え酸味がやや強いあの果物を、よくもあれほど甘そうに食べられたものだ。アスリは明日にでもこっそり、ユニスに向けて同じことを試すしかない。

直前の困惑が完全に抜けきったイケメンが、与えられた一口目を噛み終えたところをラリーヤは見届けると、また次の一口を、今度は少し小さく切り出した。次に切られた分は、ラリーヤの口元へと運ばれていき、そのままラリーヤに収まった。ラリーヤも酸味を感じているはずだ。ところが、ラリーヤはその次は切り出さずに、切りかけの果物と刃を脇に置くと、今度はイケメンの両側の頬を手に取って、敷いた布の上で、膝立ちの姿勢を取っていった。

ラリーヤが斜め上から、手にするイケメンの顔を見下ろすように、覗き込んでいく。甘いばかりのイケメンに、またわずかな困惑が浮かぶ。

ラリーヤが口に含んだ果物を、一口、二口と、噛んだ。

次の瞬間、ラリーヤの唇は、イケメンの唇と重なった。

「はっ…！」

ティサが息を飲む音がした。アスリも声を上げかけた。ユニスもよく止まった。

イケメンの瞳が、驚きで満ちていく。しかし、穏やかに目を閉じるラリーヤが、口づけを交わしたままイケメンの頬から頭に向けて、上下に撫でるような指使いを見せれば、イケメンも瞼を落とし一段と甘美になって、布の上で溶けだしていった。そうして、イケメンの下顎はだらしなく落ちていき、ラリーヤがわずかに噛んだ果物はイケメンへと移されていった。

イケメンの口元から頬に向けて、ラリーヤと混ざった橙色の愛が一筋、あふれ出す。地に伏せるアスリの理性も、全身から絶え間なく噴出する汗と、泉から沸く湯となって、流れ出していく。

一体、アスリは何を見せられているというのか。果たしてこれは、何だと言うのか。
はっきり言って、ラリーヤのこの行為は不潔極まりないし、意味不明である。だが、それを補って余りあるほどに、アスリが目にしている光景は清らかで、何もない2人の地面のまわりには、まるであの果物と同じ、濃い黄色の花が咲き乱れているかのようだ。何より、ただ果物を切って食べるだけで、どうしてこれほどまでに官能的になるのであろうか。
やはりラリーヤは、凄まじい。少なくとも今は、ラリーヤを気安く変態とは呼べない。この女は、性と美の化身だ。

すでにイケメンの喉元が上下する動きは止まっているが、まだ2人の口づけは終わらない。それどころか、ラリーヤはイケメンと互い違いになっている頭をどんどん斜めにさせていて、上下の唇全体でイケメンの口元をくわえこんでいるかのようである。その狭間でほんの一瞬、唇と唇がごくわずかな距離を取って垣間見えた、ラリーヤの舌がイケメンの舌と触れ合っている事実を、アスリは見逃さなかった。

これは口づけではない。舌づけだ。ラリーヤは今イケメンと、舌と舌を通じて、激しく絡み合っているのだ。
アスリの頭が、視線を通して内側から殴打される。口だ。口だ。誰の顔にもついている、口だ。隠す場所でないところだ。なぜアスリは、人間の口を見ているだけで、自慰がしたくなるのか。まずい状況だ。
それでもどうにか、ラリーヤの口遣いは落ち着いていき、その激

しさがようやく鎮まると、ラリーヤの唇はイケメンの元から離れていった。瞼を開いていくイケメンも、アスリと同じく内側から殴られたのか、頭が抜けてしまったかのような顔で、ラリーヤもラリーヤでいつになく余裕のない、何かを噛みしめる表情を浮かべている。だが、性の至高たるラリーヤが、ここで立ち止まってしまうことなどもちろんなく、イケメンが受け止めきれずに頬に流してしまった、果物とラリーヤの混ぜ物を親指で拭うと、その指をペロリと舐めて、実に最高の笑顔をイケメンに送ったのだった。

なんとかわいらしい笑顔だろうか。今の笑顔には、悪さも屈託もなかった。ラリーヤは女だが、ユニスがいなければ、アスリは今の笑顔でラリーヤに恋しまったことだろう。それを至近距離で振りぬかれたイケメンは、あれほど村で人気の噂があっても、今の一撃で確実にラリーヤに陥落したはずだ。

追い打ちをかけるように、ラリーヤはイケメンの唇と額に、続けざまに1回ずつ口づけをすると、イケメンの手を取り、その耳元で何かをささやいた。またイケメンが、かっと目を見開いた。ラリーヤは座ったままのイケメンの手を握ったまま立ち上がって、その手を三角柱の方へといざなっていく。イケメンも、腰を引いて前かがみに立ち上がる。その腰布の前面は、1点がやや張り出して見える。

角度からして、膨らむ途上にある槍だ。ダカクも膨らみ、ユニスも膨らむ、槍だ。イケメンの槍は、切なくなりつつある。口づけを見ただけで自慰をしたくなったのは、アスリだけではなかった。思わずアスリが、ユニスの顔を横目に見ると、獲物を狙うような真剣な眼差しが、そこにはあった。変態も極めれば、アスリを恋に落とした凛々しさで満ちるのだ。

しかし、ユニスに見とれるのは後でもできることで、今は輝く2人の方に目を向けなければ、これだけの場を設けたラリーヤに失礼だ。その前に念のため、アスリが反対側のティサにも目をやると、こちらは剥き出しになったユニスのように真っ赤になって、しっか

りと閉じた口からこぼれてしまった荒い息を、鼻から短い間隔で吐き出している。一昨日の帰り道、あちらのラリーヤも含めた４人全員が、自慰の実績を自供した。ティサもティサで、下腹の奥がうずきだしていて、やはり切なくなりつつあるのだろう。

再びアスリがラリーヤとイケメンに視線を戻せば、洞窟の中でアスリが見せつけられた手のつなぎ方で結ばれる２人は、三角柱の前で立ち止まって何かを語り合っていて、時々ラリーヤから軽い口づけがイケメンに飛ばされていた。こうして見ると、アスリの思っていたよりもイケメンは上背がなく、ラリーヤとほぼ同じぐらいで、ラリーヤよりもアスリの方が高さがあるのだから、もしイケメンとアスリが並べば、アスリの方が高いのだろう。それでも今は、向かい合った口同志が触れ合うのに２人の高さは最適で、布の上に座っていた時はラリーヤが上から果物を流し込んでいたのに、今は口づけの度に、はにかむ笑みを交換しあっている。

微笑ましいやりとりはまもなく、さらに仲良く深まって進化するのだろう。手を取り合ったままのラリーヤは、三角柱の１面の布をめくって、イケメンをその中へとなまめかしく押し込むと、顔だけアスリたちの方に向き直り、一度にやりと意味のある笑みを送ってから、布で仕切られた空間へと進んでいった。

すぐに、その三角柱の上部から、まず履物が２つ、放物線を描きながら飛び出してきた。これはラリーヤのものだ。間髪を入れずに、イケメンの履物と、イケメンの上衣も空を舞う。

「脱いでる。」

ありのままの事実を、ティサが息でつぶやいた。アスリは真っ赤になっているティサの状況も把握したいが、これでは目が離せない。しかし、そうは言えども離せない目先では、三角柱を形作る布が

太陽に干されるようにして照らし出されていて、アスリは中に入る2人のシルエットすら捉えられない。おそらく2人の影は、アスリたちから見るのとは反対側の布に浮かび上がっているのだろう。この位置では、中で何が行われているのか、3人は目視できない。

そうこうしているうちに、今度はラリーヤの上衣が飛んで、次にラリーヤの腰布も飛んだ。もう、ラリーヤは全裸のはずだ。何も見えないのに、アスリの体は熱くなり、乾いたサバンナの空気に潤いを与えようと、少しずつ奥の泉が湯を沸かせていく。

イケメンは、残りあと1枚だ。もし今、イケメンでなくユニスがラリーヤに対峙しているのなら、あと2枚だ。いや、イケメンにしても、作りが同じならあと2枚だ。

なかなかそのうちの1枚が、上から飛ばない。あの彫りの深い顔立ちで、イケメンも脱がされる時のユニスと同じように、脱ぎたくないと駄々でもこねているのだろうか。それとも口づけか、舌づけの時間か、またはラリーヤによるそれ以外だろうか。

一拍の間を置いて、飛んだ。丸められたイケメンの腰布が、サバンナの空を飛んだ。

「わぁー!!」

三角柱の中からラリーヤの歓声が、小さくアスリの耳にも届く。イケメンも全て脱いだのだ。

アスリは別に、イケメン自体に興味はない。ただしその肉体と、特に性器については、ぜひ目にしておきたいし、ユニスやダカクとも比べたい。ラリーヤにしてみれば、カインタでさんざん眺めてきた上でのただ1本かもしれないが、アスリにとってあの中の1本は、幼少期の記憶を除けば3本目だ。

だが、まだ目にすることができない。今日のサバンナは穏やかで、三角柱を形作る布をめくりあげてしまうほどの強い風も吹いていない。

静寂が続く。歓声のあと、三角柱の外壁は、中のラリーヤなのかイケメンなのかによる動きで時々揺れるが、大きな変化はない。

「これさ……。」

またティサが、何か言おうと息でつぶやいた。しびれを切らしそうなのは、アスリだけではないのだ。

その時、三角柱の一面の袖から、人差し指を立てた左手が飛び出した。ラリーヤの手だ。

地面に平行に、横に向けられたその指の意味を、アスリが理解しきれないうちに、突如、アスリの右隣でユニスがごそりと動いた。アスリがユニスに目をやれば、ユニスは斜めに半身を起こして、背にかけた布の端から右手を2度、大きく左右に振って、すぐさま再び地面と同化したのであった。

「今の何？」
「呼んだ。」
「は？」

ティサと同じく、息で声をかけるアスリにユニスから返ってくるのは、いつもと同じ、どうしようもないユニスのわからない答えだ。あとで酸っぱい果物をティサと協同して口移しすれば、ユニスも改善するだろうか。

その、わずかに苛立つアスリの視界の片隅から、2人の隠れる三角柱に向けて、一匹の獣が猛然と走りこんでいく。急遽、ユニスに

弓による防衛を求めかける直前、アスリはその正体を見破った。
ユニスの犬だ。先ほど毛皮の着ぐるみを着せられた、ユニスの犬である。つまり、ユニスは犬に合図を送ったのだ。普通、犬が近くにいるとわかるような吐息の音や地面を蹴る音を一切立てずに、全く違う毛質の毛皮まで被せられているその姿は、以前、ユニスに救ってもらった時に牛に襲い掛かろうとした獣さながらだ。そうして、一直線に三角柱に突き進んでいった犬は、毛皮を被せられる直前にユニスに指示を受けた槍の柄にかぶりつくと、低いうなり声をあげながら、首を大きく振り始めた。

「え！おい！？」
「何？何何！？」

イケメンの動揺した声と、役者になったラリーヤの声が、三角柱から聞こえてくる。アスリももう分かった。やっと今日の全ての仕掛けが明らかになった。だからあの三角柱は、あまりにひどい安普請であったのだ。
イケメンに駆り出された馬も、前足や後ろ足を大きく上げながら鳴き声を上げて、大慌てである。その間も脆い三角柱は大きく揺れる。そして続けざまに、犬が後ずさりするように大きく踏ん張る動きを見せると、とうとう犬の相手となった槍は倒されてしまったのであった。
これでひとまず、無事に役目を終えた犬は、倒した戦利品である槍の束をくわえると、そのまま槍の穂を地面に引きずって、意気揚々とまたどこかに走り去っていった。自分の体よりも倍以上も長いものをくわえて、よくあれほど速く走れるものだ。さすがは優秀なユニスの従者だ。
一方、三角柱のあった現場には、枯れ木の間に1面だけ残された

布と、布が覆い被せられた、低い塊が1つ出来上がった。身を寄せ合ってしゃがんだ2人の被る布の中では、何か怯えるような動きがある。

ほどなくして、2人のうちのどちらかが、アスリたちが視線を送る方とは反対側の方から布を少しめくり上げて、辺りの様子を伺い始めた。まず馬の方を見ているようであるから、イケメンが布を持ち上げているのだろう。犬も優秀だったが、この馬もなかなか見どころがあり、今の騒動からまだほとんど時間が経っていない中、手綱の結ばれていた枯れ木が折れそうなほどに大きく鳴いていたにも関わらず、手綱が緩んだことをいいことに、早くも水場に首を伸ばして、がぶがぶと水を飲んでいる。その水場に、倒されてしまった幕に使われていた、2人が被らなかった方の布は落ちてしまっていて、ずぶ濡れになって置きやられている。

水場に平穏が戻った。平穏に、辺りを見渡すための窓は不要だ。2人はまた布の中の住人に戻り、より小さく、密着しつつあるようである。ラリーヤとイケメンだけの世界が、少しずつ、少しずつ、元の息遣いを取り戻していく。

今度はアスリもわかる。まだ布で見えないが、今、2人はまた、口づけでなく、舌づけをしている。

ゆっくりと、2人が作る塊が、高さを伴っていく。それに合わせて、2人をサバンナから隠し続ける最後の布も、水場の湿った地面へ、するすると滑り落ちていく。

目を閉じて、熱く口元をつなぐラリーヤとイケメンの横顔が、まず明らかになった。布は、まだ落ちる。アスリはついに、全てを解き放った男女の肉体を目撃した。

2人が、一斉に全部出てきてしまった。どこから目をつけて良いかわからないアスリは、重力に従った布と同じく、2人がつながる口元から、ゆっくりと視線を下ろしていくしかない。

まず絡み合う舌の直下、胸部には、服を着た上でもわかりきっていた、ラリーヤの極めて豊かな乳房が、イケメンの手によって包まれ、揉みしだかれている。なんと柔らかそうなのだろう。脱衣して自由となったラリーヤの豊穣は、そこにどうにか制約を加えようとするイケメンの手中に、まったくと言っていいほど収まっていない。今、アスリの位置からは、ラリーヤは右向き、イケメンは左向きに向かい合っていて、ラリーヤの右半分しか目にすることができないが、イケメンは反対側も同じようにしているようだ。

あわせて、ラリーヤの腕や足より色素の薄い大きな乳も、イケメンが一生懸命こねているせいで、まだアスリからは先端が捉えられない。両胸に1つずつの小粒も、同じように淡い色合いをしているのだろうか。この流れならまもなくそこまで目にできるだろうが、早くラリーヤの胸部の瞳とも、アスリは目を合わせてみたい。

その下部、腹から腰にかけては、ラリーヤがイケメンの尻の方にかけて両腕を回しながら、恥骨のあたりを近づけて、前後、上下にゆっくり、くねくねと不思議な動きを見せている。こちらもアスリよりも随分と色が白く、ずっしりとした肉感の大きな尻は、同性のアスリでも、見ているだけで頭がおかしくなりそうである。そこから伸びるふくよかな太ももに阻まれ、ラリーヤが成長した成果である体毛と、さらに下にあるはずの女性性の形状は、乳首と同じくアスリは確認できない。この部位に関しても、アスリの重大な興味の対象だ。

そしてラリーヤの腰まわりで一周、カインタから逃げてくる時に着けたままであったのだろう、ロマドウに由来するものではないことが確かな、石か動物の骨かで作られた、鮮やかで細かな色合いのビーズを通す革ひものシンプルな腰飾りは、一糸まとわぬラリーヤの女性らしさを、一層引き立てている。この腰飾りの斜め後ろ側には、小さな紫色の花が3輪結び付けられており、宝石ではないにしても、きっとこれがティサに対してもラリーヤが述べていた、誘いの印であるに違いない。今日のラリーヤは、本気、かつ真剣なのだ。

対するイケメンは、普通だ。いや、イケメンより背も低く線も細いとは言え、あの皮以外に無駄の一切なかった筋骨隆々のユニスや、まさに今イケメンの真横に並んでいる、アスリが気を抜けば、よだれでも垂らしてしまいそうなほどに暴力的なラリーヤの肉体を前にすれば、相対的にイケメンの肉体が普通に見えてしまうだけなのであって、乳首の色がやや濃いことを除くと、特に太りすぎることもなければ痩せすぎているわけでもなく、イケメンはイケメンで年相応の男性として、がっしりとした悪くない体つきをしている。

ただ、今日、それよりも注目すべきなのは、これからラリーヤが仲良くしなければならないイケメンの1本だ。果物を送り込まれた直後の時点で、イケメンは腰布の前面を腫らしかけていたが、今はラリーヤに強く大きく訴えようとまっすぐ上向きなのか、その1本はラリーヤがちょうどイケメンの尻に向けて腕を回しているところの背後に隠れてしまっていて、ここもまたアスリは見分ができない。つまり、ラリーヤもイケメンも服を全て脱いだというのに、見事に全てが隠れてしまっている。

当然、今日のこの場はラリーヤが設けた見せ場なのであって、ラリーヤに見せないつもりなどあるはずもない。今、一時的に見えない性に直結する各所は、もうまもなく、サバンナの地面と同化するアスリとティサとユニスに向けて、惜しげもなく開帳されるのだ。

アスリの予想通り、続く動きはすぐだった。ラリーヤは向こう側の左手でイケメンの頭を優しく撫でると、舐め合うばかりだった口づけを丁寧に終えて、あの悪い笑みを、イケメンを直視しながら炸裂させたのだった。うっすらと目を開いたところに、真正面からラリーヤを受けたイケメンも、だらしない笑顔を浮かべる。もはやイケメンには、イケメンとしての矜持がない。

ラリーヤがイケメンに何かをささやいた。直後に、ラリーヤは腰を下ろして、膝立ちの姿勢を取っていく。

イケメンの手がラリーヤの乳房から離れ、ラリーヤの腕もイケメンの腰から離れた。

「おっきい……！」

見えた。アスリは思わず、小声でつぶやいてしまった。言葉はそのまま、アスリの見た光景だ。

大きかった。イケメンの槍も大きかったし、ラリーヤの乳房も、乳輪も、全部が全部、大きかった。

やはりアスリも女であって、真っ先に無意識の視線を集中させたのは、剥き出しになっているイケメンの最先端だ。この部分の構造の基礎は、一昨日、アスリがめくりあげたユニスの中身や、残念なことになってしまった日のダカクと同じだ。しかし、イケメンの核はユニスやダカクほど赤くなく、桃色に灰色を混ぜたような、ここだけを見ると体調が優れないようにも思える色をしている。ただ、発色は悪くとも、全体はダカクやユニスのものや、当然アスリの１粒とは並べられないほどに発達していて、今にもはち切れんばかりに腫れあがっている。何より、ダカクのように苦しそうで狭いところもなければ、ユニスのように剥きあげても勝手に覆いかぶさって

きて、なおまだ先に余裕を持たせるというようなところもなく、すっきりと立ち上がって、軽く潰した形の楕円球の元には、しっかりとした段差が設けられている。
　加えて、その付け根には、アスリやユニスのような薄く申し訳程度のものでない、正真正銘の縮れた真っ黒な草が、相当量生い茂っている。このボリュームは、かつてのラダンよりも十分に多く、また長く、もっと下の方の覆い隠そうとしていて、袋のあたりには黒っぽい何かがありそうであるということしか、アスリは認識できていない。
　それにしても再び色に関して、イケメンの槍は、中身を出してみた時のユニスのような、肌色から桃色のグラデーションが柄になく、体調不良の部分から黒っぽいこげ茶の部分へと、溝より少し下のあたりで一気に色が変わっていて、ユニスやダカクもぶら下げるものとは同種と思えないほどグロテスクである。先端以外、これほど黒っぽいということは、しぼんでいる時は比較的黒くはない部分を皮で包んでおいて、腕や足と同じように日光にでも晒しているのだろうか。そうであるなら、イケメンも相当な性癖を有していることとなる。
　もう1つ、ないし、アスリから見えていない向こう側も含めた両胸分の、もう2つにあたるラリーヤの持ち物は、イケメンのようにグロテスクということはなく、究極の美である。あまりにも素晴らしいシルエットだ。これほどの大きさがあるにも関わらず、ラリーヤの乳房は重量に任せるまま垂れ下がらずに、柔らかさとともに見るだけでわかる弾力を伴わせている。
　その前面に広がる輪は、アスリのものより3周りか4周りほど広く、親指と人差し指で作った輪よりも面積は広いだろう。しかしこちらはイケメンのように黒っぽいようなこともなく、昼間に見える月と空程度しか、周囲との色合いに差異がない。また、同系色の最先端の尖りも、おそらく普段より固くなってしまってはいるようで

あるものの、アスリよりも発達していて、ユニスが飛ばすものとは異なった、牛に近い乳が搾れそうである。仮にこの乳輪と乳首が、アスリのように低い小山に乗せられていたら大層不格好であろうが、付け合わせ先が立派な山々であると、わずかなアンバランスによって生じる淫らさが、ラリーヤの美しさと女性らしさに、さらに深みを与えている。

時間が止まったかのように、アスリの脳裏に焼き付いていくラリーヤとイケメンの一瞬は、もちろん次のひと時へと進んでいく。膝立ちになったラリーヤが、奥の水たまりに両手を伸ばし腰を浮かせると、ちらりとラリーヤの尻の割れ目も、アスリの目に入った。丸く、大きく、いやらしい。

水をすくったラリーヤは、その水をまず、イケメンのくすんだ先へとかけやっていく。水をかけられた槍が、ビクリと大きく震えた。イケメンが腰を引き、イケメンの尻が後方に突き出される。

弱いのだろう。ラリーヤがもっと悪い顔になって、イケメンに上目遣いした。

しかしイケメンはユニスほど弱くはなく、水のお返しとして、ラリーヤに乳がかけられることはなかった。ラリーヤは濡れた両手をイケメンの両方の鼠径部に置いて、下方に流れた水まで使って、イケメンの内太ももを撫でるように上下させると、再びイケメンは強くなって、先端を前に突き出した。離れたところから見ていても、一昨日のユニスがそうだったように、イケメンの1本も鼓動しているのがアスリも分かる。

ラリーヤがまた、水をすくった。再び尻の割れ目がアスリの目に入る。いやらしい。

戻ったラリーヤが次に手中の水をかけた先は、自らの胸元であった。水をはじくラリーヤの艶やかな肌は、水場からもたらされた潤

いを、大きな乳房の下方へと押し流す。犬も馬も飲むような、ただの水場の水は、ラリーヤを伝って地面へと落ちていくのにしたがって、ラリーヤの色に染まっていく。

胸元で少しずつ水を流したラリーヤは、イケメンの内太ももを撫でたのと同じ手つきで、濡れた乳房の外側から下側、下側から内側、反対に内側から下側、下側から外側へと、それぞれ半周させた。そして、頭を一度軽く振ってから、前に突き出すイケメンと同じように、その胸を大きく前に向かって張って、両腕を後ろに回し、手首に留めていた紐で髪を束ねていった。

改めて、凄まじい存在感だ。あれほどの胸が手に入るのであれば、アスリも一度くらいはロマドウの全男子を食べても良いかもしれない。その前にまずユニスを食べなければならないし、ユニスはティサに食べてもらわなければならない。もっと言えば、アスリはユニスだけを食べていたいし、その時だけで良いから、胸はラリーヤから借りていたい。

髪を結んだラリーヤが、もう一度水をすくう。尻の割れ目が見える。いやらしい。

次のかけ先は、またしてもイケメンの先だ。2回目のイケメンは弱さを見せることはなく、もう腰を引かずに堂々としている。きっとユニスなら、このタイミングで引っかけてくるだろう。

ここまでを終えると、ラリーヤは水をかけた両手をイケメンの尻へと回して、今度は太ももの後ろ側を大きく上下させた。アスリも忘れかけていたが、ラリーヤとイケメンが執り行っている行為は、確実に水浴びだ。だから、こうして少しずつ、ラリーヤはイケメンの体を流しているのだ。

そうであるはずであった。ラリーヤの両手がイケメンの尻まで戻った次の瞬間、ラリーヤは少し腰を落として、イケメンの尻をやや

強く自分側に押し込むと、顔の前で対峙するイケメンの1番先に、軽く口づけをした。
　イケメンの顔中に驚きが広がり、溶けた。脱力したイケメンを見上げたラリーヤが、満面の笑みを浮かべる。
　薄雲に遮られていた太陽が、雲の切れ目から空に姿を現し、強い日光がサバンナに降り注いだ。ラリーヤの口づけを受けたイケメンの膨れ上がった穂は、授かった日差しを跳ね返し、鈍く輝いた。

アスリはたった今見た現実が、信じられなかった。口というものは、食べ物を食べ、飲み物を飲み、言葉を喋るために使う器官だ。ここまでラリーヤが何事もなく取りなしている、唇と唇、ないし舌と舌を重ね合わせることは、それらの用途には当たらないが、いずれも向かい合う先が同等である以上、まだ理解の及ぶ範疇にはある。
　しかし、今の行為はどうだろう。口に対して、性器だ。思えば、洞窟の中でラリーヤは一昨日、男子から乳を体内で受け取る前に引き抜いて、口や手、胸で導く旨のことを述べていた。今のラリーヤはまだ体内にイケメンを取り込んでいないが、このラリーヤの行動を見るに、どうにも順番は前後しても構わないようだ。
　とにかく目にしたものは、アスリには衝撃が強い。見てしまったものが強すぎるせいで、アスリは自らの欲求すら忘れそうなほどに、沸騰する脳を瞬間、瞬間で回転させ続けている。

　ただ、残念なことに、アスリが驚きを覚えたタイミングは、あまりに早すぎた。嬉しそうなラリーヤが、まぶたを閉じて縦に大きく口を広げる。

　直後に、太陽をまとったイケメンの先端を、ラリーヤがぱっくりとくわえこんだ。ラリーヤは、本当にイケメンを食べてしまった。太陽を、食べたのだ。

「っん！？」

　アスリの隣で、ティサが何かをかみ殺すのに失敗して、喉を鳴らした。アスリはこらえた。ユニスもこらえているはずだ。

大変なことになった。アスリの全てが頭の中で混ざり合い、止めどなく膨張していく。このままでは、まもなく脳が焼け切って、はじけ飛んでしまうだろう。

こうまでされては、イケメンもまた弱くなって腰を後ろへと引くしかない。だが、捕食者のラリーヤは、そんなことにも、地面に伏せるギャラリーたちにも構わず、イケメンの尻に置いた手を抱きこむようにして、頭をゆっくりと前後させていった。

情けない顔になったイケメンが、すかさず揺れ動くラリーヤの頭部を両手で押さえる。ラリーヤも固く頭を掴まれては、前後の動きを止めるしかない。ただ、これでもラリーヤは止まらない。

すぐに、ラリーヤの頬がこけた。吸い込もうとしているのだ。それだけではない。ラリーヤの凹んだ頬に時折、何らかの突起が浮かび、もごもごとうごめいている。アスリはラリーヤの口内が今どのようになっているか、直視することはできないが、舌で何をしているのかは、想像に容易い。確実に、ラリーヤはイケメンの弱点を、一生懸命に吸いながらしゃぶっている。

こんなことをアスリも自らの粒にされたら、一体どのようになってしまうのだろう。もしアスリが同じようにユニスを舐めまわせば、ユニスはいかほどに弱くなるのだろう。イケメンはそれを、まさに性の権化によって施され、苦しんでいる。

素晴らしい。口は、性器なのだ。

心の中でアスリが感嘆の声を上げる一方、見ている側が発狂しそうになるラリーヤの食事は、長くは続かなかった。我慢がならなかったのであろうイケメンは、腰を強引にガクリと大きく引くと、イ

ケメンの槍はあっけなくラリーヤの顔の性器から離れていってしまったのであった。
先ほどよりも充血して濃い赤みを帯びてきたイケメンの先端が、また太陽に照らされる。遠目に見ても、ラリーヤが食べてしまう前より、幾分か増長しているようだ。まるで小さな子どもと遊ぶ時のように楽し気な雰囲気のラリーヤは、ぬらぬらと光るその1本の毛深い根元を左手で握りしめ、人差し指を立てた右手を先端の先端へと当てがって、指を丁寧に上下させながら、イケメンでなく槍に向かって、何かを語りかけている。

2人に動きがなくなった。小さく風が吹く。アスリもティサもユニスも、何も言わずに行方を見守る。

ほどなくして、ラリーヤは槍いじりを一旦取りやめると、自身の頭部に置かれていたイケメンの手を取って、その手をイケメンの背中側へと回させていった。両手を背後に組まされて、丸出しの箇所を天に向けて伸ばす中途半端な中腰のイケメンは、何ともおかしな格好だが、その面前に究極のラリーヤがいるせいで、この不格好さえもアスリにとって性の暴風だ。
自由になったラリーヤは、またイケメンを大きくくわえて、ひとなめした。すぐさまイケメンは弱そうに腰を引くが、ここではなぜか、ラリーヤはせっかく再開できた食事を続けなかった。

ラリーヤが、真剣な表情になって、槍を取った。何かが来る。ラリーヤはその1本を、自らの胸元に運んでいく。
挟んだ。ラリーヤが、豊かな双丘で、イケメンを挟み込んだ。もっと正しく言えば、挟んだのでなく、包み込んでいる。
またしてもラリーヤの満面の笑みが、イケメンに凄まじい勢いで衝突する。イケメンはもう、イケメンと呼ばれるべきではないだろ

う。だらしないイケメンは、今や完全にラリーヤの支配下に置かれている。つまり、イケメンは今、ラリーヤをうまく操作しているようで、実態はラリーヤの玩具であり、奴隷だ。

ラリーヤの奴隷に対する奉仕は続く。胸の間で包まれる槍を、ラリーヤはさらに両方の乳房越しにやや強く押さえるようにすると、直前に頭を前後させたように、今度は掴んだ両胸をリズミカルに前後させ始めた。

ラリーヤの大きな乳房の上面が、風を受けた水場の水面のように、穏やかに波打っていく。イケメンが、天を仰いだ。大きく深呼吸したのであろうイケメンの腹は一度膨らんで、また元に戻った。その間もラリーヤの乳は、優しくイケメンを揺らしている。これがラリーヤの言った口と手、胸の３つの手法のうちの、胸だ。

アスリは悔しかった。おそらくティサも、やろうと思えば、ここまでではないにしても、これは簡単にできる。しかし、アスリはどう頑張っても、挟んで包むほどの量がない以上、できない。もしユニスに同じことをしようとしても、アスリがどうにか成長しない限りできないのだ。

イケメンの槍は、ラリーヤの胸の間を１０往復はしただろうか。突然、イケメンが後ろで組んでいた腕を前に回して、ラリーヤの手を固く掴んだ。おそらく、イケメンはもう限界が近い。アスリにできない技術を駆使して、ラリーヤがイケメンに送った波が、もうすぐイケメンを押し流そうとしている。

ところが、ここでラリーヤは、挟み込んだ胸を左右に開いてイケメンの槍を開放し、口の段に続いて胸の段までとりやめると、今度はまっすぐ立ち上がって、イケメンの頭を両手で押さえながら、またもやイケメンとの熱い舌づけを再開したのであった。ラリーヤもイケメンが近いことは理解しているのだろう。波を受けられずに野放しになったイケメンの槍が、ラリーヤが丸々口にしてしまった後

よりも、さらに角度を上げていることを良いことに、ラリーヤは自らの肉体が直接槍に触れてしまわないよう、うまく両手と唇と舌だけでイケメンと接しあっている。

時間が止まる。アスリの本能も走り出す。アスリは自慰がしたい。自慰ができないのなら、見たばかりの一連を、胸の下りを除いて隣のユニスで試したい。先にティサが試すのなら、アスリはその間、やはり自慰がしたい。

永遠に続きそうだった、いやらしい口づけが終わった。ラリーヤとイケメンの唇の間に、つながったままの糸が伸びる。口づけは終わっても、いやらしさは終わらない。

イケメンは、もうダメだろう。顔中が、地面に落として割れてしまった卵のようだ。こんな顔のイケメンを、アスリは村で一度も見たことはない。

ラリーヤも、ダメだ。今の舌づけは捨て身だったようで、いよいよラリーヤにも、余裕がなくなりつつある。アスリは何をもってラリーヤが完成したかを判断できないが、あの顔を見れば、仕上げが近いのはわかる。

何より、2人とも顔が赤らんでいるし、呼吸が荒い。2人が息を吸って肩の位置が上がれば、ラリーヤの胸も上がり、イケメンの槍も鼓動する。これが、男女だ。男女の性を、アスリは今、目にしている。

もう一度、イケメンが口づけを求めると、ラリーヤは軽く唇だけで応じた。ラリーヤが微笑んで、左手で槍を逆手に取る。口、胸が取りなされ、残る手の段に、アスリが備える。

ラリーヤが優しくイケメンの槍を引きながら、体を右回りさせていく。その間の一瞬、息を潜めるアスリたちに向かって、ラリーヤの真正面が、全て開かれた。

「んぐっ！！」
「ウソ！？」
ユニスが、小さく息を漏らした。ティサも、息だけで本音を語った。耐えがたい見る暴力が、アスリの脳にも届いた。
信じられなかった。左右に揃った大きな乳輪の載る乳房と、よどみなく柔らかに流れる腹部に、かわいらしいへそ、やや幅広い腰骨を一周する鮮やかな腰飾り、その下に、美しく大人びたラリーヤに、絶対にあるべきはずのものが、なかった。そこに代わりにあったのは、わずかな黒ずみのある丸い盛り上がりと、中央下側に向かって走る、一筋の女児たる証明だった。
罰を受ける直前の、ラダンだ。ラリーヤは、これから罰を受けるのだ。
アスリの心臓が、激しく高鳴る。喉の奥から脊髄に沿って、強烈な閃光が駆け抜けていく。歯茎にすら、出所不明の羞恥を感じる。涙が出そうなほどに、アスリの体の奥が、一気に煮え立って蒸気を込める。行き場を失った蒸気は、アスリの泉の湧水を沸かして、ラリーヤには皆無で、アスリは有する茂みの奥を浸水させていく。
アスリの視界が、ぼやけかける。アスリは絶対に今、気を失いたくない。あの日の羞恥にまみれたラダンが、ラリーヤとなって、再びアスリの前に姿を現したのだ。必ず、最後まで全てを見届けなければならない。
自慰がしたい。あとでティサとユニスにさんざん馬鹿にされても良いから、アスリは自慰がしたい。それでも、今はできない。今、アスリがあの点に触れれば、おそらくイケメンに見つかってしまうほどにアスリは叫んでしまうだろうし、耽るばかりで目も閉じてし

まうだろう。
もう、ラリーヤの割れ目は見えないし、ラリーヤは今度はアスリから見て左向きで、にこやかにイケメンの槍を引っ張って散歩させながら、水場の脇の枯れ木に向かっている。その間も、アスリに頭に焼き付いてしまった一筋が、アスリの理性に著しい暴力をふるい続ける。

ラリーヤが右手を枯れ木に伸ばした。左手はイケメンの槍を手にしたまま、右手を枯れ木に置いてイケメンを振り返るラリーヤが、何かをつぶやく。その表情にはもはや、悪さがない。肉体は大人として完成しつつある中、唯一、線だけが走るあの部分と同じ、少女の笑顔をラリーヤがイケメンに送った。
イケメンの顔にも、イケメンが戻る。今、イケメンはラリーヤに顔を向けられているのと同時に、尻も向けられている。イケメンが、息を飲む。

ラリーヤは手中の槍を、ゆっくりと自分の尻の前に運ぶと、イケメンは自分の槍を付け根の方から受け取った。そこまで済んだラリーヤは、左手も枯れ木へと置き、顔だけは後ろ側を気にするようにしながら、前傾して尻を突き出す姿勢を取っていった。
牛だ。牛のように張った乳房が、前に体を倒したラリーヤの前に、いやらしくぶらさがった。

ラリーヤはイケメンを従えて、進路を自らに向ける。にぶく輝くイケメンの先端が、尻までつながっているはずのラリーヤの割れ目の位置に、接触した。ついに、2人の本当の性器が触れ合った。
ラリーヤが斜め後ろに視線を送りながら、イケメンに小さく声をかけている。それに合わせてイケメンは、つまんだ槍の付け根を上下させていく。

ふと、ラリーヤが、アスリたちの方を見つめた。ラリーヤが一度、ぺろりと舌を出して、笑った。

サバンナの全てが、一斉に息を止めた。穏やかなそよ風さえ、止んだ。

ラリーヤが体を深く倒し、それに従って突き出された尻の上に、イケメンの両手が乗せられる。同時に、2人の間に控えていた、太く大きな槍が、ラリーヤの体の中へと吸い込まれていく。

「入っちゃった……！？」

ティサが、息で喋った。ラリーヤが、イケメンの1本を、全て受け止めた。

「あぁぁあん！！！」

ラリーヤの甘い声が、辺り一面に広がった。この声は、アスリも上げられる。アスリがユニスを思って遊べば、不思議と体の奥からあふれてしまう、あの声だ。この声を上げる時、その時は決まって、アスリは快楽とともにある。深く考えるまでもなく、ラリーヤは今の一手で、何らかの良さを得ている。

大きく叫んで、枯れ木にしがみつくように固く目を閉じるラリーヤは、動かない。イケメンも、ラリーヤと1つになって、動かない。

とうとうこの時が、来てしまった。絶望の淵でも自分を失わず、常に美しく、大人びているラリーヤが、本気と本性をもってして、事を成すと宣言したのは、一昨日のことだ。有言実行のラリーヤは、先送りなどせず、このサバンナを一直線に突き進んできて、まさに今、イケメンを真の意味で捕食した。

しかし、イケメンを受け入れた先は、アスリよりも幼い。あの大きな乳房を有し、アスリに次いで高い上背があることを踏まえれば、アスリでも生えているものが生えてきていないことがあるはずもなく、おそらくあのやや黒ずんで見えた一筋のまわりには、事前に剃刀が当てられたのだろう。

ただ、そうであったとして、なぜそうなったかについては、アスリの中では罰、または刑とでしか合理的に説明することができない。今、ラダンはあの日、禁忌を破って剃毛され、針を向けられた。今、ラリーヤが暮らす族長宅で、アスリの母の役割を務めるのは、族長の妻であり、巫女たちを従える立場の聖女だ。では、ラリーヤの今日の企てがすでに聖女の知るところとなって、その上でアスリの母と

同じ罰を、仮にも聖女がラリーヤに与えたとして、つつがなく今日の場を開くことはできないと考えるのが、まさに筋だろう。

つまり、誰がラリーヤを剃り上げてしまったかと言えば、ラリーヤが自分の手で行ったと考えるのが、最も自然だ。そしてそれは、アスリがラダンを通じて得た過去の経験を元にすると、性に奔放なラリーヤによる自己罰ということになる。もっと踏み込んで言えば、ラリーヤは今、針の代わりに、イケメンの性器によって突き刺されることによって、ふしだらでどうしようもない自分の身を戒めているのかもしれない。

結論に到達したアスリが得たのは、身震いであった。布の上に砂やら草やらがかかって、蒸し暑い地面とともにあるアスリに、おかしな鳥肌が広がっていく。

やはり、苦しい。いつまでこの時間が続くのだろうか。アスリも早く、ラリーヤのように大きな声をあげて、罰を与えられるラリーヤの姿を、心と体に全て広げながら、精一杯耽りたい。

幸い、あまりにゆるやかな時間の流れには、イケメンが突き刺さっているラリーヤも、何らかの我慢がならなかったようである。眉を歪ませ、口も半開きのラリーヤが、イケメンの方に振り返って何か声をかけると、太ももに刺さった矢を抜いた後のような顔つきのイケメンは、そこに確実に痛みなどないのに、非常に辛そうに、ゆっくりと腰を後ろに引いていった。

黒い槍の柄が、ぬらぬらと怪しく光を反射しながら、ラリーヤに由来する湧き水をまとって、再び姿を現した。ラリーヤの顔面と乳房が、地面へと向けられる。

また、イケメンの槍が、一気にラリーヤの中に全て埋もれる。今度はイケメンが自分で動いた。

「あぁぁあん！！！」

ラリーヤが上体を背中側にのけぞらせて、顎を持ち上げる。それに合わせて、ラリーヤの豊かな乳房同士がぶつかりあって、弾ける。なんと魅力的な罰なのだろう。これをユニスが、ティサに続いて、アスリにも行うのだ。本物が刺さった時、実際にどのような感覚がもたらされるのか、アスリは一切想像できないが、少なくともアスリはもう、心の中でユニスの皮槍に、真後ろから突かれている。厳しいことである。

ここで突如、ラリーヤは枯れ木に強く掴まって強く上体を起こしながら、なぜかイケメンからするりと離れた。それによって、イケメンはすっぽ抜けて勢いよく跳ね上がり、黒っぽい柄だけでなく、先ほどよりも随分赤みを帯びた先端までの全てが、ラリーヤの外側へと追い出されてしまった。

それでもラリーヤの尻を掴んだままのイケメンの両腕の筋肉が、硬直する。

「出た！」

アスリは、見たものをそのまま、小さくつぶやいてしまった。出た。ラリーヤの束ねた髪まで、まず1射目が飛んだ。弱くなったイケメンが腰を引くが、2射目がまたラリーヤの髪まで届く。

あの顔だ。イケメンが、気持ち悪いほどに波を受けて、沖に流されている。

3射目はラリーヤの背中だ。4射目も背中だ。少ない5射目は地面だ。

これで終わった。ここはユニスの勝利だ。遠目に見ても、量は一

昨日のユニスの方が各射多かったし、ユニスは途中から皮で遮られてしまったとは言え、飛び出してくる回数も、もっとあった。

ビクビクしながらラリーヤの尻をつかんだままのイケメンは、また固まってしまっていて、ほとんど動いていないというのに、全力で走り切った後のように、肩を大きく上下させている。その一息、一息に合わせて、あれほどはちきれそうだったイケメンの槍は、急速に角度を下げており、明らかに硬度も失われていっているようである。

対して、受け止めた側のラリーヤは、枯れ木から手を離し、自らの背中で乳のかかったあたりに手をまわして、人差し指を這わしてから、その指を堪能するようになめ上げると、イケメンの方へとゆっくり向き直っていった。体を回すラリーヤからアスリたちに向けて、無毛の一筋とともに、悪い笑みが送られる。何らかの意味がこめられているのはアスリもわかるが、その意味をアスリは理解できないし、無駄のない1本線がまぶしい。

手の置き先がなくなったイケメンはと言えば、荒い息のままラリーヤを呆然と見つめて、立ち尽くしている。そこに向かい合ったラリーヤが、少女のものでない、アスリたちに向けたものと同じ、悪い笑顔を発信した。

直後に、ラリーヤはイケメンの真正面でしゃがみこむと、だらりとたれさがっても剥き出しのままになっているイケメンの先端を、勢いよく掴んで口に含み、飼い主にじゃれあって喜ぶ犬のように、ベロベロとなめ上げ始めたのであった。ラリーヤは、まだこれだけで終わらせようとしていないのだ。

ところが、急なラリーヤの攻勢をかけられたイケメンは、今日、最も情けなかった。何を思ったのかイケメンは、ラリーヤの頭を強く掴んでその動き止めさせると、先ほど放りやった服の元へと走っ

ていき、大慌てでまずは腰布を巻き、上衣も羽織って、履物までつっかけてしまったのである。
そのイケメンに、素っ裸で腰に手を当てて仁王立ちをするラリーヤは、やや曇った笑顔で何かいろいろ語りかけていたが、イケメンはしきりに顔の前で手を振るばかりで、反対にラリーヤの着物までまとめて、ラリーヤの方へと持ち寄っていった。当然、諦めの悪いラリーヤは、近づいてきたイケメンの腰布の上から、槍のあたりに触れようとするも、ここはイケメンも何かを予期したのか、ラリーヤの策にははまらなかった。
するりと身をかわしたイケメンは、ラリーヤの傍に服を置きやって、馬を指さして何かを喋り、次はラリーヤの方が顔の前で手を振るのを見届けると、あっという間に馬に跨ってしまった。そうして、何やらラリーヤに向けて手を2度3度軽く上げてから、ロマドウの方へと向けて、一目散に馬を走らせていったのであった。

ラリーヤが2度目を試そうとしたあと、イケメンとラリーヤの間でどんなやり取りが交わされたのかは、今の時点ではアスリにはわからない。また、男女の間で仲を良くしてから、何を行うべきであるのかなど、アスリは知る由もない。しかし、少なくとも、遠ざかっていくイケメンをただ1人、裸で見送るラリーヤの後姿をアスリが見るに、今のイケメンの一連は、何がどう悪いと指摘はしにくいが、一言で言って、最低だとしか言いようがなかった。

再び雲が優勢となりつつある空の下、徐々に小さくなる馬の蹄の音が響くサバンナの赤い地面には、寂しげなそよ風に揺れる束ねた髪と、女性らしさに溢れる背中が、柔らかな午後の影となって刻まれていた。その影を目がけて、ラリーヤの腰飾りに彩られていた、本気を示す紫色の花は、はらりと落ちて、儚く散っていった。

まもなく、去りゆく中にも、わずかに彼方で尾を引いていたイケメンの気配が、サバンナから完全に消失した。先ほどから両手を腰にやったまま、一切姿勢を崩さなかったラリーヤも、突然の逃亡劇から心身を切り替えようとしているのか、敷き布の上に置いたままだった食べかけの果物と手持ち刃を拾うと、アスリたちの方へと振り返って、手にした果物に刃を突き立てた。

「何なん！アイツ！自分だけ気持ちよくなったら、さっさと帰ってーマジむかつくわ！」

アスリたちのいるところまで、はっきりと届くほどに大きく声を荒げたラリーヤは、吐いた言葉ほどのいら立ちとは裏腹に、疲労とも徒労ともつかない表情を浮かべている。ここまでするために整えた諸々の準備が、中途半端にしか活きず、ラリーヤは大層無念なのだろう。

しかし、そのままアスリたちの方へと近づいてくる女体は、やりきれない思いをまとっていてもなお、性の塊だ。少し押せば乳でもあふれそうなほどに張った豊かな2つの乳房に載る、色素の薄い大きな乳輪と、腰飾りが引き立てる腹回り、何もかもが大人でありながら、唯一女児のままである中央の1本の線は、アスリにとって夜明けの日差しのようにまぶしい。この何もはみ出ていない縦筋は、イケメンの黒々とした太い1本の先から根本までを、確かに全て、受け止めていた。傍から見て、ラリーヤが不完全燃焼であることは明らかではあるが、アスリとしても水場での一連の出来事を、ほとんど消化しきれていないし、自分でわかるほどに頭がおかしくなっている。

「……いいよー？　みんな、もう出てきて。」

狂ったアスリは、ラリーヤにかけるべき言葉が見当たらない。それは当然、不憫なラリーヤへの同情によるのではなく、頭の中で言葉を紡ぎだすところまでもが、性と本能で埋まってしまっているからに他ならない。今のアスリは、言葉も喋れない動物だ。また、それはアスリだけでなく、アスリの両脇の2人も声を出さずに動かないのだから、ティサもユニスも動物になってしまっているのだろう。

一方、滅入った顔をしていたラリーヤは、呼びかけにもピクリとも動かない3人組を目にして、気を紛らわせるための、良い代替手段を見つけてしまったようである。途端に、ラリーヤは口角をまた悪く持ち上げると、先ほどイケメンに口移しをする前のように、手中の果物を一口分切り出して、刃に突き刺した一口分を、自らの目の前に掲げていった。そして、ラリーヤは顎を軽く突き出し、舌を伸ばしてから、果物をぺろりと口に含んで、強烈な笑顔を炸裂させたのであった。

ただ果物を噛んでいるだけであるというのに、後光が差しているかとアスリが感じるほどに、ラリーヤはいらやしい。また、それを飲み込む姿もいやらしい。

「どしたん？　みんな、興奮しちゃった？」

這いつくばったままの3人が潜む木陰まで進んできた全裸のラリーヤが、答えのわかりきった問いを3人に向けて投げる。地面にうつ伏せのアスリが、2歩ほど先にいるラリーヤを下から見上げても、例の線からはみ出ているものは何もなく、美しい。

もう一口分、ラリーヤが果物を切り出した。続いて、刃に刺した一口分を、ラリーヤは自らの喉元に当ててから、下に向けて流していった。

はちきれそうな乳房と乳房の間を抜けて、かわいらしいへその上も腰飾りの革ひもの上も通り、美しい線の割れ目まで、一口分が運ばれていく。女児の隙間まで通過した果物に乗って、ラリーヤも足を閉じたまま、アスリたちの前にしゃがんで、両膝を地面につけた。一口分は、アスリから見て左から、ティサの前を通り、アスリの前を通り、ユニスの前で止まった。

「はい、あーん？」

動けなかったティサも、アスリも、首だけは動くようになった。注目が、ユニスに集まる。滝のすぐ横で水しぶきを浴び続けた後のように、顔中に玉のような汗を浮かべているユニスは、目尻が割けてしまいそうなほどに大きく目を開けているのに対して、果物を送られた側の口は半開きで、唇はわずかに震えている。

食べた。ラリーヤの胸も性器も撫でた果物が、ユニスの口内に入った。真面目な表情だ。硬い肉でも噛むかのように、ユニスは必死にたった一口の果物を噛んでいる。

餌付けに成功したラリーヤは、盛り上がる中でイケメンに去られたことなど、もうどうでもよくなったのか、随分と満足そうだ。しかし、この姿勢だとアスリから線は見えないだけで、ラリーヤは素っ裸だ。

「おいち？おいちーねー？ふふふ、もぐもぐ。」

赤子と触れ合うように楽し気なラリーヤが、次の一口分を切り出して、手持ち刃に刺した。3回目はどこにも這わせずに、顔の横まで持って行って、満面の笑みとともにフラッシュさせた。お昼に洞窟から出た直後のように、アスリの目の前は真っ白になりそうだ。今度はユニスの前から、アスリの前を通り、ティサの前に果物が運

ばれる。

「はい、ティサもあーん？」

　ユニスが食べた時と同じく、一口分が着いた先に注目が集まる。だが、こっそり酒でも飲んできたかのように、真っ赤な頬に汗を浮かべるティサは、ギリギリ理性を守り抜いたようである。獣やら赤子やらに近づいていた3人の中で、ティサは最初に言葉を取り戻した。

「……ねぇ、ラリーヤ。それってさ。」
「どしたん？あ、ユニスのみたいに、お胸とおまんこ、スッてした方が良い？」
「バカ！！ってか！あ！！！ユニスにそんなん食わせんでよ！」

　むくりと起き上がったティサは、背にかかる布を勢いよく後方に向けて剥がすと、目の前のラリーヤのように両膝をつけて、しゃがみこんでいった。昼下がりのサバンナの空気だというのに、アスリの背中に当たるそよ風は、冷たく心地が良い。起き上がったティサの服にも、ところどころに汗が滲み切っている。
　これを機に体を起こし、ティサとラリーヤと同じ姿勢を取ったアスリも、両脇が熱源であった分、ティサ以上にずぶ濡れだ。腰布の中には、もっとひどい感触がある。急に忙しそうになったティサは、1人うつぶせのままのユニスをよそに、ラリーヤに向けて続けていく。

「いや！あとそうじゃなくて、それもだけど、それってか、ラリーヤの手！」
「ん？私の手？」
「その果物、さっき拾った時に触った手！その前に、あの人がラリ

ーヤの背中に出しちゃったお乳、触ってたじゃん！」
　突然、ユニスが大切に噛みしめていた果物を、一気に噴き出した。ラリーヤの股間は良くても、イケメンの乳は、ユニスにとって耐え難いようだ。
　危ないところであった。果物の先がティサでなくアスリであれば、アスリもユニスにならって赤子になり、イケメンを口内に取り込んでいただろう。

「ティサ！早く言ってよ！」
「自分から食ってんじゃん！バカ！」
「おいちおいちーだったんに…、じゃアスリ、食べる？」
「いやいやいや！いらないから！イケメンさんの、くっついてんでしょ？」
「私さっき、全部ぺろぺろしたよ？」
「ホント、信じらんない……。」

　両方の手のひらを開いて、パタパタと火照った顔を扇ぐティサの言葉の掛かる先は、イケメンの乳と同化している可能性のある果物を、ラリーヤとユニスが食したことだけではなく、ラリーヤが口でイケメンの槍を磨いたことだろう。ティサにもアスリにも拒絶され、行き場を失ってしまった果物を、ラリーヤは臆することなく自ら口にすると、噛みながらの口元を手で覆いながら、ティサの提起よりも深い位置の根本へと歩んでいった。

「……で、みんなちゃんと見たよね？」

　沈黙が広がった。いやらしい目つきのラリーヤはまた果物を切って、口に運ぶ。目つきもいやらしいが、相変わらず丸出しの乳房も、距離が近づいた分、爆発的にいやらしい。

「何？だんまりしちゃって？すぐ終わっちゃったし、逃げちゃって最悪だったけど。もうアイツとは絶対ヤらん。でも、ちゃんと私のおまんこ、入ってたでしょ？」

そうである。乳が飛び出してしまうまでの短い時間ではあったが、ラリーヤにはイケメンが突き刺さっていた。それはアスリも見たし、ティサもユニスも見ていないと抜かすのであれば、アスリも証人になる用意はある。

果物を飲み込んだラリーヤが、手持ち刃の背に人差し指を伸ばして天を指しつつ、白い歯を見せながら、ティサの方に向けて顔を傾けた。何かを察したティサも、顔を扇ぐ手の仕草を取りやめる。

「ねぇ？ティサ？入ってるとこ見たら、どうしなきゃなんだっけ？」

「見たけど……。さっきの、ホントに入ってたんだよね？お尻とかじゃなくて。」

「信じてくんないなら、ティサ、ユニスのちんちん、お尻に入れなきゃになるけど、大丈夫そ？」

ティサが、両太ももの上に握りこぶしを2つ作った。あわせて下がったティサの視線の先は、乳房よりも腹よりも下の、今は線が隠れている、柔らかそうな無毛のラリーヤの三角地帯である。

完璧な論理だ。ラリーヤにここまで見せられたティサは、どうやっても一昨日洞窟の中で取り交わした約束に従うしかない。それにしても、完膚なきまでに敗北して、覚悟を求められているこのティサの姿もまた、アスリにとって趣深い。

一度、目を閉じたティサが、大きく息を吸って、吐き出した。ゆっくりとまぶたを開いたティサは、ラリーヤの乳輪のあたりと、じっくりと目を合わせる。

「…………明日ね。」

「んふふ、やっぱりね。そんなこと言うだろうな、って。思った通り。」

場を設けるということは、先を見越すということに他ならない。たった1日半とは言えど、この場に向けて準備を行ったラリーヤは、イケメンと遊び、デザートを頬張って、ティサの言動まで正確に予測できている。一方、ティサは勝ち目のない戦いに挑戦し、意気地のなさを砕かれた。

とにかく、全てが決まった。明日、ティサとユニスが、1つにつながる。

「……サイアク。」

「何？ティサ、ユニスのこと好きなら、全然最悪じゃないじゃん？やっぱりユニスは嫌い？」

「おっ！！」

ティサの声は極めて小さかったが、あの襲撃の日、アスリとその背に乗るユニスの間で交わされた会話を聞き取った、地獄耳を持つラリーヤが、この状況下で今の言葉を聞き漏らす訳もなく、即座に応じていった。驚きとも何ともつかない声を上げるユニスは、やはり赤子でなく獣なのだろうか。

「うっさい！！！そうじゃなくて、じゃなくて！」

「だからさ、それ、ユニスのこと好きなんじゃん。良かったねー、ユニス。ティサが好きだって。」

「このバカ！！！！！うっさい！うっさい！うっさい！いいから！そうじゃなくて、入るか心配だから、最悪って言ってんの！」

すでに汗ばんでいたティサの上衣には、さらに両脇のあたりの染みが濃くなり、広がっていく。こうしてラリーヤから、本当の思いを難なくユニスに伝えてもらえているのだから、アスリとしてはティサがやや羨ましい。

「そんなん、入るに決まってんじゃん。だってさっき、私のおまんこに入ったの、みんなここからだったけど、ユニスのより全然おっきかったたん、わかったっしょ？私なら、ユニスにちんちん２本生えてても、一緒に入ると思うよ？」

ユニスが同時に矢を複数放つのと同じように、２本、３本と生やせるのかは別にしても、大きさに関しては事実である以上、ユニスも反論できない。誰もラリーヤに返さないことを良いことに、ラリーヤは無様に去っていった槍の補足を加えていく。

「まぁ、アレぐらいで普通だけどね。もっとおっきいかと思ってたんに。」

「……嘘でしょ？もっとおっきい人いるってこと？」

「あんなん、うちのお兄ちゃんのに比べたら、まだまだ全然。」

シンプルな驚きが、思いを口に出したティサに広がった。アスリもユニスの皮と、それよりも小さかったダカクのほかに比べる先がなく、今は素直にラリーヤの経験を信じるしかない。

それにしても、ラリーヤの比べた先は、兄だ。アスリがダカクを治療する以前より、起き抜けで膨らんでいるところを度々目にしてきたのと同じく、ラリーヤも兄と１つ屋根の下で暮らす中で、腫れあがった腰布を目撃する機会があったのだろう。かつて同居していた、アスリの双子の兄たちがどうであったかまでは、アスリも記憶が定かではないが、カインタが壊滅したあの日まで、ラリーヤは兄と一緒であったのだから、毎朝の膨らみの大きさには、それなりの親近感があるのかもしれない。

ところが、ここでラリーヤは一昨日の洞窟の中に続いて、またもやぶち上げてしまった。

「お兄ちゃんのさ、もっと長くて！もっともっと、ふっとくて！入るとみちみちみちーって！お腹ん中がたっぷり幸せになるかんじして、もうホント！めっちゃくちゃ、すっごいんよ！やばっ！思い出すだけで濡れてきちゃった。」

また、ラリーヤが何かをのたまっている。ティサが慌てて、ラリーヤの言葉を掴んだ。

「はっ！？！？………えっ！？！えっ！？えっ！？ちょっとさ！いやいやいやいや？それどゆこと！？」

「いや、だからさ。」

兄2人に弟を持つアスリの深慮は、全て無駄であったようだ。どうしようもないラリーヤは、ほとんど食べきった果物の残りを目の前に置くと、すぐさま少し足を開いて、左手をあの割れ目に送っていった。

「はっ！？ちょっとラリーヤ！！」

「ほら！！見て！！」

声で制止するアスリの前に、ラリーヤの左手が、透明な何かをまとって帰ってきた。ラリーヤが一昨日ユニスの種を説明した時のように、接しあっている中指と親指を離せば、無毛の泉で採れた糸が、木陰の下に引かれていく。

「こんな風に、ぬるぬるのがさ、」

「バカ！！！きったな！そうじゃなくて、アスリ聞きたいんはさ、いや私も聞きたいよ？お兄ちゃんと、どゆことなん？ってかお兄ちゃんって、誰？」

「汚くないし！お兄ちゃんなんて、私のお兄ちゃんしかいないっしょ！」

「は！？待って！待って！待って！」

ティサも焦っているが、アスリも焦る。ラリーヤが述べたことから導き出される過去は、たった1点に収束することとなる。務めて

冷静に、アスリは早口にならないよう注意しながら、問うべきことをラリーヤへと投げかけた。

「ラリーヤってさ、自分のお兄ちゃんと、そのさ……、なかよししてたってこと？」

「だから私言ったじゃん。カインタの男の子、全部食べちゃったって。」

「じゃあ、お兄ちゃんまで食べちゃったん……？いや、待って、ラリーヤのお兄ちゃんって、パパとママも、ラリーヤと一緒の人なんよね？」

「そうだけど？いいじゃん別に！私、お兄ちゃんが1番最高で大好き！だから、お兄ちゃん戻ってきたら、私、お兄ちゃんと結婚して、お兄ちゃんの赤ちゃん産む！」

アスリは素っ裸のままのラリーヤから目を離すことはできないが、頭を抱えたくなった。目の奥が痛い。ユニスも変態であったというのに、この変態は本当にどうしようもない。先ほど見たばかりのあの行為を、ラリーヤは血のつながった実の兄と成して、最高だと言うのだ。あの変わり者の兄たちが、代わる代わるアスリに侵入してくるところを思い浮かべれば、アスリにもたらされるのは寒気だけだ。

正直に言って、考えたくないことではあるが、まだ無邪気なダカクなら、アスリも何とかできないことはないかもしれない。しかし、兄たちの相手は不可能だ。どういう訳かわからないが本能的に不快であるし、またこれも考えたくはないが、父の相手をするのに近い。そもそも父は、そのような対象ではない。弓と矢筒をかけた、たくましい背中、打って変わって母と笑いあう明るい表情、アスリにとってはそれが父だ。

では、自慰の糧としてきたラダンであれば良いかと言えば、これもまた違う。ラダンに感じる性は、変態の中身を抜いた、女性らし

いラリーヤに感じる性に近い。つまり、同性であれど、触れて撫でてみたいほどにいやらしい体つきと、性器を中心にした、背徳と羞恥、罰と加虐で織りなした複雑な構成なのであって、そこにユニスに向けるような恋愛感情は介在しない。

加えて、ラリーヤはもっと踏み込んで、兄と結婚して子を成したいとまで言っている。アスリには全く理解が及ばないし、ラリーヤは頭がおかしい。

アスリの覚えている限り、ラリーヤから兄の話を聞かされるのは、声を取り戻したラリーヤが布を持参して、牛乳でもてなした時以来だ。あの時、ラリーヤは夢に兄が出てきて、いつものように何かをしてくれた上で、兄を呼んだら声が出るようになった趣旨を語っていた。思えば、その時点ですでに、行為そのものの内容については、ぼかしが入れられていた。

結局のところ、ラリーヤが声を出せるようになったきっかけは、兄との近親相姦の想起だ。それも、いつものようにということなのだから、一度や二度でなく、常習的に兄と交渉していたのだろう。

もしかすれば、ラリーヤは声を取り戻した夢の中で兄を呼んだのではなく、先ほどイケメンに内側から2度突かれた時のような、甘い声を出しただけかもしれない。その話を牛乳を飲みながら母とともに聞かされて、深く同情し落とした涙を、アスリは返してほしい。呆気に取られるアスリに代わり、ティサが1人っ子なりに得た、アスリに近いであろう思いを続ける。

「……あのさ、私兄弟いないし、わからんけど、アスリもお兄ちゃん、いんじゃん？実際、そんなもんなん？」

「いや、ないっしょ……。気持ち悪……。」

つい、素直な感想がアスリの口からこぼれてしまった。しかし、それ以上はなく、それ以下しかないのであるから、致し方ない。

「うわ、傷つくわー。アスリまで、私が一番最初にお兄ちゃんとなかよしする前みたいなこと、言わんでよ。アスリも自分のお兄ちゃんかさ、ぁ！ダカクとしてみなよ！絶対わかるって！」
「ない！！頭おかしいでしょ？ラリーヤ、変態すぎ。サイテー。」

もはやアスリに言い過ぎということはなく、謝罪の言葉はない。今の話を元にすれば、ラリーヤの兄も一度は拒否したはずだ。それを強引にラリーヤが押し切ったに違いないのだから、この際、ダカクを治療しながら、アスリが良くなってしまったことは無関係だ。アスリはあの時、正当な理由をもってダカクの性器を診察して、素手で触れないよう布まで間にはさんだのだから、息を吹きかけてアスリを至らせてしまった、ダカクの方が悪い。仮にもアスリはそのうち、ダカクを再び剥き上げる遊びぐらいは試みるとしても、ダカクと結婚しようなどとは、微塵も考えていないのだ。
アスリが結婚するならユニスしかいないし、ユニスはティサと結婚するべきである。ラリーヤは、常軌を逸している。

「やっぱ私、変かな？」

ふと、顔中が変態だったラリーヤが、真顔に戻って弱気になった。正しい考えだ。だが、その先に待っていたのは、ラリーヤの瞳の中に宿る、行方も安否もわからない、兄だった。

「お兄ちゃん、元気かな……。」

難しい話だ。たしかにラリーヤは変態であるし、兄と行ってきたことも変態だし、兄を自ら誘ったことも変態で、兄で性を満足させてきたことも変態だ。しかし、ラリーヤは兄の生存を強く信じているからこそ、今こうして強くあれるのだろうし、万が一にも兄

の死が事実になろうものなら、それはティサからユニスを奪うことに等しい。ラリーヤにとって、ラリーヤの兄は性的に最高のパートナーというだけでなく、兄として、そして何より愛する人として、ラリーヤが絶望の淵にあっても、前に進むだけの力を得るために必要な、絶対的な支柱なのだ。

「ごめん、ラリーヤ。ちょっと私、言い過ぎた。お兄ちゃん、きっと大丈夫だよ。」

「ありがとう。私さ、やっぱり……。」

トーンを落としたアスリの謝罪に、ラリーヤもアスリの顔をまっすぐ見つめて応じながら、続く言葉を探している。アスリが両目を合わせる、望みを捨てない２つの瞳は、玉のように美しく輝いている。どうであろうと、アスリにとってラリーヤは、女としての憧れだ。

「お兄ちゃんのおちんぽ、またいっぱい欲しい！！！」

嘘だ。ラリーヤはただの変態だ。変態以下だ。いや、変態を超えた、別物の何かだ。ラリーヤは片手で手持ち刃を握りしめ、もう一方はこぶしを作り、両手を胸の前に持ってきて、乳房を大きく揺らして語り出す。

「あああああ！！！マジさっきのなんなん！！！入って２回しか動いてないよ！？２回だよ？２回！ありえん！！！ああぁ！！！マジで！！お兄ちゃんに奥、ごりごりしてもらいたいよぉ！！！！！」

「ダメだわ、これ。ティサ、帰ろっか。」

「そうだね、引くわー。ほら、ユニス、起きてよ。こんなすっぽんぽんの変態、置いて帰ろ？」

「ティサ！適当言ってるけど、明日はさっき私がやったみたく、ユ

ニスのちんちん、絶対入れんだかんね？ティサもユニスも裸になんのか知らんけど、ちんちんとおまんこはちゃんと出してもらうよ？約束したんだから！」
「うっさい！バカ！そん時はそん時！いいからラリーヤはいい加減、服着てあっちの布とか片づけてきてよ！」
「んふふ、明日はティサ、恥ずかしいねー？」
「だからうっさい！」

　性的欲求がそのまま人の形をしている者からの追撃をかわしつつ、煙に巻くようにティサが立ち上がれば、アスリもこれを機に、帰り支度を整えるしかない。ラリーヤのせいで水浸しになってしまった股間からおかしな音が出ないよう、アスリが注意して立ち上がると、目の前のどうしようもない人物も立ち上がり、再びあの1本線が、アスリたちの前に現れた。何から何まで、いやらしい。

「ねぇ、ユニス！いつまでそうしてんの！？ファラール、毛皮被って暑いまんまだよ？」

　幼い子どもをしつけるような声で、ティサがユニスを急かした。ところが、ユニスは前に出して組んでいる両腕の上に顎を載せたままで、動く気配がない。そもそも、これほど情報量の多かった会話の中に、ユニスの気配だけが、著しく乏しい。

「ねぇ？早くしてよ？」

　もう一度、ティサの声が飛んだ。意思表示を迫られるユニスが、弱く3人に指示する。

「……俺、後から行くから。みんな先行ってて。」

「何？どしたん？調子悪くなった？」

やや心配そうにティサが、うつぶせになったままのユニスに問いかけたところで、アスリはユニスの現況を察知した。すぐさまアスリは、ユニスが何かを答えるよりも、自らもユニスにその点を指摘するよりも先に、ユニスの背の上を大きく1歩飛び越えてしゃがみこみ、ユニスの肩と二の腕を確保していった。いくらすばしこいユニスでも、驚いた顔をアスリのいる斜め後ろ側に振り向けるのだけで精一杯で、突然のアスリの行動には一切対応できない。

「アスリ、さすが！ティサも反対側！」
「えっ、あっ！うわぁ……！マジか、ユニス！」

女の方の変態もさすがだし、ティサもさすがだ。今のひと動きだけでラリーヤはアスリの意図を把握し、続いたラリーヤの言葉で、ティサもユニスの身に何が起こっていて、その上で何をすべきか理解したようである。ユニスは体調不良になど陥っていないのだ。ティサがアスリの向かい側で、同じようにしゃがんで肩と二の腕を掴めば、ラリーヤもユニスの頭の前で、ぴったりと閉じた両膝を地面につけていく。

「おい！何だよ！いいから、先行けってば！」
「ユニス、起きらんなくなっちゃったんでしょ？アスリとティサに起こしてもらいなよ？」
「だから！俺はいいから！大丈夫だから！」

ユニスの体にこめられる強い力が、アスリの手にまで伝わってくる。アスリのとっさの判断は、正解だった。一歩出遅れていれば、今頃ユニスはサバンナの果てまで逃亡していたことだろう。

「大丈夫なんに、なんでこんなにこわばってんの？大丈夫なら力抜きなよ？」
「いや！！マジで今は無理！！マジ勘弁して！！」
「何？無理って？じゃ、アスリ、せーので立つよ！？」
「わかった！じゃあ、私からで良い？せーの！！！」
「ヤメロ！！！」

　アスリの掛け声に合わせて、ティサも一気に立ち上がる。この時、暴れながら引き起こされたユニスが、左足を真上に大きく振り抜いた。直後に、裸で腰を落としているラリーヤも、ユニスの飛び上がった足に蹴り上げられないよう、ラリーヤから見て右側に両腕を送りながら、乳房を隠すように身をかがめた。だが、その手にはまだ、果物を切るのに使った刃物が握られている。

「うわ！！」
「ちょっと！！」
「危なっ！！！！」

　間一髪、ユニスの足は持ち上がる時も振り下ろされる時も、ラリーヤと刃を避けて、どうにか無事に地面に着地した。それでもなお、ユニスの両足はじたばたと脱出を試みる。

「バカ！！ラリーヤが切れんの持ってんだから！！」

　ティサの喝に、ユニスはひるんだ。この一瞬の隙に、ラリーヤは刃を横の地面に置きやって、静かになったユニスの両膝に抱きつい

た。
　完全に拘束されたユニスの一点に、女子たちの視線が集中する。
「嘘でしょ！？」
　思わずアスリは、驚きの声をあげてしまった。たしかにそこには、アスリの想定通り、腫れあがった腰布の小山が、あるにはあった。ところが、山の斜面には汗では説明がつかないほどの、とろみを帯びた水気が滲みだしていて、地面の砂までこびりついていたのであった。
「うわぁ、また出したんか……。」
「んふふ。我慢できんかったね？」
　先ほどラリーヤに呆れた時のような声で、ティサが目にしたものを述べた一方、全裸でユニスの膝に絡みつき、ぬめった腰布の盛り上がりに顔を寄せるラリーヤは、かなり嬉し気だ。日陰にいながら目を輝かせるラリーヤは、ユニスの膝から少しだけ離れ、山の頂上に1本立てた人差し指の先を置いて、軽く押し込むと、漏出したぬめりをうまく使いながら、指の腹をゆっくりと回転させていった。
「んっ……、ちょっ、あっ！！」
「何が良かったん？私のおっぱい？おまんこ？それとも、なかよし？」
　こうまでなってしまったラリーヤが、ユニスの弱り目を見逃す訳がない。ユニスが腰を引いて、ラリーヤの人差し指から逃げたところで、ラリーヤは空いたその手でユニスの腰布の結び目を見事にほどくと、そのまま腰布を両手で強く掴んで引き下ろしてしまった。

「ヤメロ！！！」
「わぁああ！！」
「おちんちんだー！！」
「見て見てー！！またカチカチ！！」
「おい！！ラリーヤ！！触んな！あっ……！ヤメロ！！！もう終わり！！！」

現れた。今日もアスリは、天を目指すユニスの固い意志を見ることができた。一昨日と同じく、素晴らしい日だ。ティサもラリーヤも、嬉しそうだ。現にラリーヤはもう、丸出しになったユニスの両膝の裏に再び左腕を回し、乳房を肌に直に押し付けながら、指でも直に触れて遊び始めている。ユニスも辞めろだの終わりだの言いつつ、固く主張しているのだから、嬉しくて仕方ないのだろう。
丸一日を挟んだが、ユニスの男子は、一昨日と色も形も変わらなければ、少なかった毛の量も、玉の入った袋も、余った皮の長さも変わらない。やや違うのは、その中ほどから先端にかけてまで、あふれ出てしまった乳の残りが薄く広がって、木漏れ日を弾いてぬらぬらと光っているところだろうか。
それよりもっと大きく違うのは、先ほどのイケメンの持ち物だ。ユニスのこれと、イケメンのあれとでは、どちらも天には向かえども、天と地ほどに別物である。

「やっぱさっき見たんと、全然違うね。」
「でしょ？あっちのは最初脱いだ時も、終わってだらんってしちゃってからも、ちゃんとずっと、おちんぽだったしね。」

つい、アスリが素直にこぼしてしまった感想に、ラリーヤがユニスの先端を軽く引き伸ばしながら応じる中、また不思議な響きがあった。そう言えば、こうしてユニスを捉える少し前に、ラリーヤが兄を求めて叫んだ中にも、今のフレーズがよぎって、流れてしまっ

ている。
「おちん……ぽ？」
男性器を指すに違いない新しい単語を、アスリが疑問形で口に出した。ラリーヤは引き延ばした皮膚を上下左右に回しながら、口元に笑みをたくわえて、続けた。
「そう、おっきくなる前も、ずっとあんな風に皮が全部剥けてるのは、大人のだからおちんぽ。ユニスみたいに、こういう皮被ってるのは、子どもちんちん。」
「は？俺も剥けるとこ、見せたじゃん！」
「だからさ、ずっとこうなってるのが大人のおちんぽだって。」
突然、ラリーヤが話に合わせるように2度に分けて、ユニスの包皮を下ろしにかかった。真っ赤な中身とともに、乳と狂気が混ざった匂いが、むわりと木陰に立ち込める。ひどい立ち眩みと、高いところから飛び降りた感覚の、両方を急激に受けたアスリは、思わず見下ろす先によだれをこぼしそうになったが、どうにかこらえて、ラリーヤに聞き入った。
「うっわ、くっさぁ。でも、これがおとなー！」
臭いとは言っていても、ラリーヤはにこやかだ。ラリーヤは槍の中ほどで押さえている指を、また先の方へと一気に流し戻す。
「はい、これがこどもー！」
「ラリーヤ、それ、私もやってみたい。」
ここでまさか、ティサが割って入ってきた。この4人の中で、最

も性から遠いはずのティサであっても、この匂いを嗅ぎ、目の前でユニスが剥かれたり被せられたりしていては、興味の方を優先させるほかなかったのだろう。素直な思いとともに、すでに子どもに戻されたユニスの先端へと置かれたティサの左手の指を、ラリーヤは茶化すこともせず、つまんでいた皮膚から指を離すと、そのまま袋の方へと優しく手を移していった。

「いいよいいよー！ティサまだ、全然むきむきしてなかったもんね。やんなよ！」
「バカ！ティサも触んなってば！」
「うわぁ！今日もピンピンしてる！じゃ、ユニス、いくよ？」
「いいから！やめろって！」
「んっふふふ！！おとなー！うわぁ！やばーい！にゅるって出てきた！！」

アスリの触れるユニスの肩が、少し震えた。恥ずかしいのだろう。ユニスを大人にして声を弾ませるティサは、いたずらに興じる子どものように振舞いながら、指先では大人と子どもの中間の、思春期の動きを繰り返していく。

「こどもー！おとなー！こどもー！おとなー！こどもー！おとなー！」

そろそろアスリも、このおもちゃで遊びたい。ティサはただただ皮を動かすことだけに夢中だが、アスリはもっと強く伸ばしてユニスを赤ん坊にもしてみたいし、もっと付け根まで目いっぱい剥きあげて、ユニスを究極の大人にもしてみたい。

「こどもー！」

またティサが、ユニスを子どもに戻した。ユニスが肩をすくめ、背まで子どもに戻ろうとする。

「やめっ！！！　あっ……！！！」

「あ！ティサ！離してあげて！」
ラリーヤがティサに注意したのと同時に、ユニスの袋から手を離し、ティサの手も払った。ユニスが強く腰を引く。子どもに戻った槍が、大きく上下する。

「くっ……！！」

止まった。ユニスの堤は、どうにか波を押し返したようだ。おそらくティサがあとひと剥きしていれば、もしくは先ほどユニスがこっそりと地面に乳を漏らしていなければ、ラリーヤはイケメンを背で受け止めたのに続いて、一昨日のアスリのように顔から浴びなければならなかっただろう。
つい、下ばかり注目してしまう真隣のアスリが、ちらりとうかがったユニスの表情は、我慢に成功したにも関わらず、なぜか腹でも下す直前かと思えるほどに苦しそうで、涙すら流しそうである。いくら筋骨隆々で相手が女でも、３人で寄ってたかって取り押さえられている上に、器にすりきりいっぱい入った乳をこぼさないようにしなければならないユニスに、なせる身動きはない。大きな深呼吸を挟んだユニスは、今、唯一可能な言葉による反撃に打って出ていった。

「もう……、やめろよ！何が大人なんか知らんけど、さっきのアイツみたいに剥き出しの方が変なんだよ！」
「えっ？カインタだったら、もうユニスぐらいの年の男の子は、みんなおちんぽになってるけど？」

「へっ……！？」
弱く、短い反撃だった。ラリーヤから異端だと聞かされたユニスの顔中に、不安が広がっていく。ダカクもそろそろ、ユニスを追い越して、剥き出しになるのだろうか。
追い打ちをかけるかのように、透明な細い糸を垂らす槍の先端を、ラリーヤは臆せず左手でつまみ上げた。不敵さと悪さが煮詰まった笑みを、ラリーヤがだらしない涙を流す男子の証明に送る。何を言おうというのか。

「……だって、カインタだと、こうやってお毛けが生えてきた男の子は、ちんちんの先っちょの余ってる皮、みーんなちょん切っちゃうからね？じゃないと、大人の男の人になれないんだよ？」
「は！？」
「え！？」
「ちょっと、どゆこと！？」

当事者だけでなく、ティサとアスリも、ラリーヤに思考を奪われた。怪しいラリーヤは、つまんだままのぬめる皮が滑ってしまわないよう、指先が白くなるほど強くはさんで、手前側に思い切り引っ張りながら、ティサのシンプルな問いに答えを示していく。

「痛たたたた！！！引っ張んな！！！」
「んふふ、ユニス、おっきくなってんのに、すっごい伸びるね！で、こうやって、びよーんって目いっぱい、伸びるとこまで引っ張って……。」
ラリーヤがおもむろに、傍に置いていた果物を切った刃を手にした。木の枝葉を通り抜けた日光を受けて、刃が光る。伸びきったユニスの皮膚に、刃が接近していく。

「ちょっ！！」
「おい！！」
「この辺かな？この辺？じゃ……、ユニス、大人おちんぽになろうね？」
　そっと、刃がユニスの皮膚に触れる。ユニスが腰を引き、皮膚が極限まで伸びる。
「いやあああああああああ！！！！！！」
「ヤメロォオオオオオオオ！！！！！！」
「よいしょ！よいしょおお！」
　ラリーヤが刃を左右に動かした。ユニスが絶叫し、ティサも悲鳴を上げた。
　さすがにラリーヤは、切らなかった。より正確には、ユニスが腰を引いたことで、刃と皮膚の間にわずかな空間ができ、ラリーヤはそこを割いたのだった。
　アスリは、声を上げなかった。もっと言えば、声を上げられなかった。今のラリーヤの話を聞いて、何かが、アスリの中で大きく歪んでしまった。
　この場の木漏れ日を、アスリは覚えている。ラダンを背後から抱きかかえた、あの日に近い。だが、あの時は剃毛による羞恥を踏まえた、針という究極の痛みであり、禁忌を犯したことへの途方もない罰であった。
　それが、今の話はどうだろう。ラリーヤ曰く、カインタの男子は罰としてではなく、大人になるために、ラリーヤの見せたことを行

うのだそうである。しかも、ラダンの時や、まさに今のユニスのように未遂で終えるのでなく、しっかりと刃を皮目に入れる上に、刺すのに留まらず、断ち切ってしまうというのだ。

背筋が煮立って、ゾクゾクする。なんということをするのだろう。もしもユニスがこの伸びたところを切られてしまったとして、たとえば髪や爪のように、また生えてくるものなのだろうか。それとも歯のように、一度生え変わればそれっきりなのだろうか。ただ、何にせよしばらくは、たとえユニスのものであっても、イケメンのものに近しい形状を取って剥き出しのままになってしまうであろうことは、ひしゃげて壊滅してしまったアスリの頭でも分かる。

糧としての濃さが、圧倒的だ。味が、強すぎる。なぜ、いわば暴力が、アスリにこれほどをもたらそうとしてくるのか。目先の答えは、簡単だ。それは、アスリがおよそ2年にもわたって、さらけ出され、没収され、広げられ、辱められる姉の性器を思いながら快楽を得てきたのとともに、あの姿に自分を重ねて、母に謝罪をしながら快楽を享受してきたからにほかならない。

それ故に、異性の全く違う形状であっても、ラダンが大人の証を否定されたように、自らの極限の一部を生贄を捧げなければ、大人になれないとしたカインタの掟は、朦朧としてしまいそうなほどにアスリにフィットしている。しかも、一連を説明するためにラリーヤが踏み台としたのが、目の前にいる愛する人の恥ずかしい皮膚であったのだから、アスリの体中の水分が、枯渇して干上がってしまいそうである。

やはり母は、常に正しかった。ラダンがあんな目にあってしまったところで、アスリは懲りて害にしかならない習慣を断たねばならなかったのだ。

つまり、アスリの性は壊れてしまっているし、手遅れだ。一昨日

の洞窟の中で聞いた仕組みも、今日ラリーヤがイケメンと見せた男女間のやりとりも、今のユニスの皮が切られて、猛烈な痛みとともに剥き出しになってしまう妄想も、果てはかつてのラダンの惨めな姿も、全てを全て、ないまぜにして、アスリはじっくりと自慰に耽りたい。

「バカか！？！？！？マジでちょん切られるかと思ったわ！！！！」

「恥ずかしいねー。ホントに切る時、今みたくおっきい声上げたり、暴れたりする子は、みんなに押さえられて、さんざん馬鹿にされんだよ？ほーら、子どももちんちん切っちゃうぞー、泣け泣けーって。」

刃を手にしたままのラリーヤが、つまんだ皮を振り回しながら語った。これもまた、アスリにとって興味深い風習だ。ユニスの皮膚以外、３人が何も被せてこないことを良いことに、ラリーヤは続ける。

「ってかさ、さっきのあの人も、全然皮なかったじゃん？男の子って、みんな最初、ユニスほどじゃなくても皮あるけどさ、ロマドウでも、おんなじ風にしてんじゃないん？」

現世を離れ、１人だけ遠くの奇怪な楽園の中にいるアスリには、ラリーヤが転換した話がなかなか身に入ってこなかった。一拍の間を置いて、ようやくアスリは、いつになく難解なラリーヤの質問の先が、自身に向けられていたことを理解した。

「…………あ、いや、そんなん聞いたことない。ダカクだって、ユニスのと全然違うけど、皮被ってて、逆に剥けちゃったら泣いてたし。」

「ダカクはまだお毛けも生えてないんでしょ？アスリのパパとかさ、

お兄ちゃんのとか、どうなん？」
「パパのなんか見たことないし、お兄ちゃんのもずっと見とらんし、知らん！考えたくもない！」
　せっかくのアスリの楽園に、父や兄の存在は不要だ。ダカクについては、また剥きあげて泣き出すのなら、楽園に入る権利ぐらいはあるかもしれない。
　この間も、ユニスは先端を伸ばされたままで、依然、滅んだカインタを受け継ぐ大人の男に成長するのかは、ラリーヤの一存にかかっている。ユニスとしても、アスリのように股に何かぶら下げておく生活に慣れきっているのか、長い皮膚の守りに入っていった。
「ってか、ラリーヤ！もう痛いから、引っ張んのやめろよ！あと危ないから、それもうしまえって！」
「えー？せっかく大人になれるんにー。ちょんって切っちゃうだけだよ？」
「やだよ！！」
「ずっと子どもちんちんのまんまの方が良い？」
「バカ！！俺だってほら！こうやって毛生えてんだから、もう大人だし！ラリーヤの方が生えてないんだから、子どもじゃん！」
　まともな答えが返ってくることの少ないユニスにしては、この状況下で、なかなか良い話題展開だ。ユニスに向けたラリーヤの責めは、アスリの内面を突いてくる良さがあったが、このユニスの指摘も、鋭いところを突いている。なぜラリーヤが、これだけ成長した肉体に、あえて罰を受けたラダンのようなことをしているのかは、アスリだけでなくユニスにしても疑問だろうし、明日ユニスとつながることを宣言したことなど忘れてしまったかのように、顔を引きつらせたままのティサにしてもそうだろう。

「んふふ、私、もう大人の女なんだよ？」
「は……？」
「あと、それとさ。ユニス。」

ラリーヤが、またしても悪くなった。そのまま、手にしていた刃を近くに軽く放り投げ、引っ張り続けていたユニスの先端からもラリーヤが指を離すと、すぐさまユニスの皮膚は縮み上がって、付け根の方にできる限り巻き戻っていった。ユニスの槍は、先ほどよりも幾分、皮の量が増えているようであるし、大人と子どもの間にいた時よりも角度も低く下がってしまっていて、槍と呼べるほどの強さをアスリは見て取れない。
一方、ユニスを解放したラリーヤは、両手を一度自らの両膝につけて、その手を鼠径部にかけて滑らせながら立ち上がると、無毛の縦筋を囲うように、広げた両手の人差し指と親指で、大きく逆三角形を作り上げていった。近いこの位置では、ラリーヤのわずかな剃り残しが、アスリも識別できる。

「どう思う？私のおまんこ？」

1本の線が、強調される。問われた相手はユニスだ。ユニスが答えなければ、誰も喋らない。アスリの鼓動に合わせるかのように、弱っていたユニスの槍が、角度を取り戻していく。

「んふふ。子どもちんちんでお返事してる。わかった？つるつるのおまんこ、えっちでしょ？」

ラリーヤに伸ばし切られたせいか、剥き出しになってもいないのに、ユニスの槍は皮膚の先端が赤らんでしまっている。触れたい1本が真横にあるにも関わらず、アスリの視線は自己罰が与えられた女児としての1本に、どうしても向かってしまう。罰の理由まで、いやらしい。

ところが、ここに続くティサの声は小さく、覇気がなかった。

「嘘、それじゃさ、ラリーヤ……。あの、私、明日、ユニスと、アレ……、やらなきゃなんだよね？」

「やんなくても良いけど、そん時は私がユニスの初めて、さっきみたく食べちゃうね。」

「やだ！！！絶対明日、やるから！でもさ、でも……、それじゃさ。」

ティサの歯切れが悪い。この時点で、アスリは先が読めた。ラリーヤにこう言われては、今からティサは剃毛を必要とするのだろう。幸いアスリには、剃られるラダンが動かないよう、しっかりと押さえた実績があるし、すぐに用意もできる。すでにアスリの足の付け根は大きく浸水し、その奥は熱で焼野原だが、ラダンの時のように意識を失わず、どうにか最後まで見届けられるかだけが、アスリが懸念すべきところだろう。

「私も、その、おまん……、の毛、剃った方が良いん？私、結構…

…。」
「ティサも、私みたくつるつるにする？果物切れたし、それで剃れるかな？」
「……ごめん、無理。怖い。さっき、ユニスのおちんちんの皮、切っちゃいそうになったの、すっごく怖かったし、私のあんなとこに切れるの当てるなんて、うわ……。」

案の定、ティサの思うところはアスリの予測通りであった。ただ、ティサが剃毛自体に恐怖を抱いていたのは、アスリにとって盲点だ。ラリーヤは性と美のために自ら剃り落とせるし、アスリも過去の剃り上げられたラダンを思い返しては糧としてきて、いずれも剃毛は日常の延長に過ぎない行為になり下がっている。それでも、いざ、アスリも剃られる側に回らなければならないとすれば、たしかにティサの恐怖は真っ当である。問題は、アスリはその恐怖すら自分に投与して最高になれるし、できることならスリルを実感したいと、アスリの本能が語っていることだ。
当然、ティサもラリーヤもユニスも、アスリが腹の奥で何をじっくりと煮込んでいるかなど、知る由もない。いやらしいばかりだったラリーヤはラリーヤで、真顔になってこちらも何かを煮込んでいるようであるが、口調そのものは冷静に続けていった。

「そしたらさ、別に剃らんで良いじゃん？」
「でも、私、多分濃いよ。ってか、正直言うけど……、ユニスのそれより、もっといっぱい生えてる。さっきのあの人ほどじゃないけど。」
「おっ……！」
時々、ユニスが上げる獣の声には、何の意味が込められているのだろうか。ここでラリーヤはやや固い顔面に、ティサへの配慮とも追いがけの性ともつかない、何らかを勝手に加えると、目尻を垂ら

しながら、怪しげな空気を醸し出していった。
「でも、つるつるのおまんこだけじゃさ、ユニスのお勉強になんないじゃん？お毛けの生えてるおまんこも、ユニスに見せてあげようよ？ユニスもどっちも見たいでしょ？」
強力だ。ユニスの1本が、さらに角度を上げ、あれほど痛めつけられたというのに、たゆんだ包皮の出口に、涙をいっぱいに貯めて、喋れない口に代わって意思を表示する。
ティサの頬は真っ赤だ。きっと、ユニスの流しそうな涙は、ティサの腰布の下でも、濃いそうである茂みにからみついて、湿度を上昇させているのだろう。薄いアスリの配下はとうに漏出し、両太ももが不快だ。
「……サイアク。恥ずかしい。」
掴んだままのユニスの肩に、眉のあたりを押し付けながら、ティサがつぶやいた。味わい深い羞恥だ。アスリが鍋にかける火が、もう一段勢いを上げる。
「それとも、つるつるの方が恥ずかしくない？なら、やっぱ剃ってあげるって。」
「バカ！！！どっちしたって恥ずかしい！！！ユニス、明日絶対私の見ないでよ！？」
顔を上げてラリーヤに食ってかかった直後、ティサが矛先を向けたのはユニスの槍の先端だった。勢いよくティサによってつまみ上げられてしまった槍の穂先からは、留まっていた涙がとろみを帯びた雫となって落下していく。

「っ！！！なんだよ！！！俺の見て、触ってるくせに！」
「バカ！！！ヘンタイ！！！私のおまん……、ぐっ！！見たいん！？ヘンタイ！！」
「でもユニスはさ、今日、私のおまんこと、なかよしするとこも見たし、アスリのおまんこも、くちゅくちゅしてるのも見てんのに、ティサのだけ見せないで良いん？」
「ちょっ！！ラリーヤ！！」
「バカ！！ラリーヤのバカ！！アスリが……！！だからぁ！！ユニス！！」
「なんだよ！！いいから指、離せ！！」
「だからぁ！！」

せめぎあう３つの本能が、ラリーヤによって弄ばれている。こう言われては、アスリも当事者だ。
赤く燃えるティサが、おもむろにユニスの包皮をめくりあげた。もっと赤いユニスの核が、剥き出しになって腫れあがる。薄い茂みのユニスの付け根に向けて、力を込めてめくり上げられるだけの余る皮膚を押しやりながら、ティサが大きく声を上げた。

「やっぱりアスリと！ラリーヤだけじゃなくて！私のも見てよ！！！！！」

ティサの嫉妬が、大きく響いた。サバンナに広がっていくティサの思いもまた、覚えたてのユニスを子どもに戻し、大人に成長させる行為の連続として、ユニスの上で表現されていく。

「あっ！！うっ！！ティッ！！サ！！」
「結局ユニスに見てもらいたんじゃゃん。ティサ、ユニスのこと好きだもんねー。」
「ラリーヤうっさい！！コラァ！！ユニス！！」

今のティサにとって、思いをぶつける先は、この皮膚だけなのだろう。強い念は速さとなって、それに合わせてユニスも、大人と子どもの間を素早く行き来する。

「ティサ！！おい！！あっ！！あっ！！うっ！！」

「待って待って待って待って！！！！ティサ！！ダメダメダメ！！」

突然、慌て始めたラリーヤが、ティサを止めにかかった。ラリーヤはユニスに吐き出させたいのか、そうでないのか。無論、言行不一致をティサが許すわけもなく、依然としてアスリの目の前では、ユニスの赤身が出たり被ったりを繰り返している。

「だから！ラリーヤうっさい！！！」

「あー！！あー！！あー！！」

完全に、ユニスの声が快楽で染まった。良い。アスリは耳元でこの声を、一生聞いていたい。しかし、ティサの狂った右手は、とうとうラリーヤによって捕獲されてしまった。生け捕りにされたのは、ユニスも同じだ。欲しかったのであろうユニスは、獣のうめきを上げる。

「んあああぁあああぁ！！！！」

「苦しいねぇ、ユニス。我慢しよーね？はい、我慢だよー？」

「何してんのラリーヤ！！なんで！？！？」
「いや、なんで聞きたいんは、私。なんでティサ、ちんちんごしごししてんの？これじゃまたユニス、ぴゅっぴゅしちゃうでしょ？」
「だって……。いいじゃん！そんなん！ぴゅっぴゅさせちゃおうよ。ムカツクし。」
「あ……、ちょっ！」
「ヤバい！！！離して離して！！！」

ラリーヤはさすがだ。ユニスの波を正しく検知したラリーヤが、ティサにトーンを変えて強く指示すれば、ティサも焦ったのか、ラリーヤの顔から槍へと注視の先を切り替えたのに合わせて、つまんでいた皮から指を離し、自らの胸の横でその手のひらを大きく開いていった。

かわいそうなユニスが、波と闘う。子どもに戻ったユニスは、びくりびくりと涙をこらえる。まだユニスの奥歯は、噛み殺されていない。
この遊びも、なんと素晴らしいのだろう。ユニスに我慢をさせるという行いが、性に関わる1つの要素として、アスリの中に構築されていく。もう、アスリがユニスに試してみたいことは、いくつまで増えたのだろうか。そろそろ初めの方に思い浮かべたものは、ラリーヤによって破壊されてしまった頭脳では、忘れてしまいそうな頃合いだ。次に洞窟に行った時には、あの言葉の壁の隅に、やらねばならないことをアスリは記録しておくべきだ。
ユニスが、深く大きく息を吐きだす。苦悶の表情だ。

ここでも、ユニスはどうにか耐えきった。辛そうなユニスが、ティサとアスリに押さえられる肩から力を抜いたのをラリーヤは見届けると、全裸でありながらも指導者らしく、右手の人差し指を槍に向けて、主に持ち主でないティサに対して諌めていった。

「あっぶな！明日、ティサなかよしすんだよ？もうユニス、今日は地面の中に赤ちゃん作ろうとしたんだから、こっから出したらダメでしょ？」

「どゆこと？」

ティサの声が尖る。未だに平静を保っているように見せてはいるが、明らかにティサは、アスリと同じ疼きを抱えているようである。

「あんね、男の子はお乳いっぱい出しちゃうと、しなしなになって、こんな風にカチカチになんなくなっちゃうかもだから。だから、今日はもうおしまいね？」

ほんの一瞬、顔を持ち上げたユニスの目元に切なさが浮かんだのを、アスリは見逃さなかった。我慢遊びは、今後必ず行わなければならない。

一方、無情なラリーヤは宣言を変えることもなく、ユニスの槍の真正面で腰を下ろしながら、自分の髪を結び留めていた細い革ひもをほどくと、一度その革ひもに軽く口づけをしていった。続いて、ラリーヤを受けた革ひもは、高く空を目指して揺れるユニスの槍の付け根へと、丁寧にかけられていく。

「はっ……？」

「はい、これ、おしまいの印。」

厳しいようで楽しそうなラリーヤは、ユニスの声による弱い制止

を振り切って、袋の後ろ側まで革ひもを通し、槍と袋の根本の位置をきつめに一周させると、今にも乳の飛び出しかねない槍そのものには触れないようにしながら、薄い毛の真上で結び目を作った。頭の後ろで長い髪を束ねているユニスは、前方も束ねられてしまった。

「ユニス、明日これほどくまで、ぴゅっぴゅ禁止ね？ちんちんカチカチだけど、今日はもう、１人でもぴゅっぴゅしちゃダメだよ？」

難しい顔でありながら、どこか悲しげなユニスは、うんともすんとも喋らない。しかし今や、ユニスも長い髪に使うものが、通常は結びつくことのない、ユニスの性器の付け根を結び留めている。いやらしい。

「なんか、やらしい。」

思わず心中を口にしてしまったアスリは、とっさに空いている片手で口元を押さえた。正直なアスリにも、ラリーヤの怪しい視線が送り込まれる。

「んふふ、やらしいね。でも、アスリもティサも、ユニスとおんなじで、今日はくちゅくちゅしちゃダメだよ？」

「ウソ？」

また、アスリが本音を漏らしてしまった。わずかに意地悪なラリーヤの目元に、アスリの背筋を震わせるような、一段と深い情感が込められていく。

「なに？アスリ、くちゅくちゅしたかったたん？」

「違っ！！」

「そんなん、私もさっき中途半端で我慢してんだし、ユニスも我慢

すんだから、ダメに決まってんじゃん？」
「私はやんないし！！」
「でも、この前ユニスが見たって。」
「うっさい！！」
「そうだよ！もうアスリだって恥ずかしくて嫌だったんだから、ラリーヤやめてよ！」
「ティサも、ユニスと見せっこしたいもんねー？」
「バカ！！私、こんなおちんちんちんじゃないんだから！」

汗をかきながら、ティサが意味不明の防衛線を張った時であった。髪紐で縛られた1点を見つめながら、明日まで長い我慢を強いられるユニスが、ふいに頭を持ち上げて、どこか奥の方へと目をやった。不自然な目の動きには、ティサもラリーヤも、アスリも続く。

正真正銘の槍をくわえて、毛皮を被ったままの犬が、高く小さな物悲しい鼻声を鳴らしながら、ゆっくりとアスリたちの方へと接近してきていた。その足取りは、先ほどラリーヤとイケメンの入った三角柱を急襲した時と異なり、明らかに疲労にまみれている。直後、3人の包囲を、いとも簡単にすり抜けたユニスは、丸出しの尻を震わせながら、一気に犬に向かって走りこんでいった。

犬の元にたどり着いたユニスは、そのままその場で暑苦しそうな毛皮をほどいてから、今度は犬を抱きかかえて、水場まで運んでいく。犬を連れる間、アスリが目にする横向きになったユニスの、髪紐で根元を縛られた皮槍は、さすがに角度が落ちて、小走りに合わせて上下に揺れている。

皮槍はさておき、あれほど賢い犬が、主の指示に耐えきれずに戻ってきたのだ。暑い中、着ぐるみとなって長い時間待たされ、犬も限界だったのだろう。犬は狂ったように水場で喉を潤すと、岩陰で伏せって舌を大きく出して、浅い呼吸を連続させながら、やっとの

休憩を始めたのであった。その間にユニスは、ラリーヤが身に着けてきた腰布を拾い上げ、自らの縮みつつある皮部に勝手に巻きつけていった。

こうして、ラリーヤによる水場での一連の計画は、幕を下ろした。厳密に言えば、水場で倒れたままだった布の幕は下りたのではなく、手抜かりなく替えの腰布まで持参し着衣に戻ったラリーヤによって、まもなくたたまれて、犬は活力を取り戻した後もユニスに抱きかかえられ、ティサは赤面のままうつむき、アスリは見えない髪紐で、ラリーヤにまで禁止された腰布の中を縛られていた。

赤い砂の地面に、やや濁った水を湧かせるだけの、静寂を取り戻した水場が見送るのは、一定の間隔を取りながら、ロマドウの方角に進む3人と、その3人の間を時々行ったり来たりする、髪をほどいた性の化身だ。北東の空は、今日1日、黒い蝶のほかに誰も目にすることのなかった虹の様子を、滝の美しさを知る者たちに向けて、遠くから伝えるかのように、穏やかな灰色を曇り空へと広げていた。その雲の裂け目からのぞいて、少しでも強くあろうとする西陽は、約束された明日の到来を早くも待ち望み、４人の頬に徐々に茜色を加えようとしていた。

この夜も、アスリの自宅の軒先には、ロマドウの若手から中年までの男性が10名弱集まり、一家を囲んでの酒盛りが催された。ユニスたちが持ち帰る分以外の、滝での恵み半分に、アスリが手塩にかける牛たちの牛乳と、相対的にちっぽけになってしまう父とダカクが上げる成果の、各余剰が日々日々酒に置き換えられるようになって、まだひと月と少しだが、集まる酒を村の者たちに振舞う習慣は、早くも定着しつつある。
　このところ村の大人たちの間では、カインタの惨事をロマドウでも引き起こさないようにすべく、村の広場の中央に、新たに見張り台を建てる計画が進められている。こうして毎夜、アスリの家の前で帰りがけに酒を補給していくのは、決まってその日に力仕事を担当した、それぞれ別の家業を持つ、即席大工たちだ。アスリが以前、ティサに遺品を手渡しに行く際、わざわざ炎天下で族長が数名を従えて、何らかをしていたことがあったが、あの時すでに見張り台の建築計画は始まっていて、おそらく族長はそのための図面を引いていたようである。

　今宵の輪の中で、いつも以上に威勢が良いのはダカクで、昼前のユニスの鮮やかな一射をこんこんと説く一方、父は左右の男たちともう1つ小さな輪を作って、ちびちびと酒をあおっている。父にしてみれば、昼前の不甲斐なさから目を逸らせるだけでなく、毎晩方々に酒を振舞っているせいか、見張り台を建てる件も、ここまで父には全く作業の分担の話が回ってこないのだから、この生活は当面続けるに越したことはないに違いない。または、こうして日替わり人足をねぎらうことが、族長から父に割り当てられた、見張り台を建てる作業なのかもしれない。

父を除き、一日をやり切って楽し気な面々に対して、アスリはと言えば、昼にラリーヤやユニスから強烈なものを見せられたせいか、どうにも腹の奥が落ち着かない。このまま過ごせば、後々やり場のない欲求によって苦しめられるであろうことは、アスリの体も読み切っている。

どうにか体の中心の抜けきらない芯を無視し、なお賢明であろうとするアスリは、昼食抜きで洞窟の解読を行った間に、細くなってしまった食勢を戻すが如く、食べられるだけ夕食を摂って、早々に宴会の駄話を切り上げると、満腹と昼間の頭脳疲労から来る猛烈な眠気を利用して、勢いそのまま床に就くしかなかった。だが、こういう日に限って月の出は遅く、また上ってきた三日月も細い割に明るく、かつてのアスリが屋外からラダンを覗き込んだ高窓からは、燦燦と月光が降り注ぎ、せっかく早く寝入ったアスリの眠りを、夜更けから徐々に浅くしていった。

まもなく、真横から転がってきたダカクの衝突によって、アスリの企てた夢の世界は、いとも簡単に崩れ去った。続けざまにアスリの耳に入ってくるのは、やけに騒がしい父のいびきである。

普段であれば、アスリが窓側の壁に沿って眠り、父もまた向かい側の壁に沿って眠るはずだが、今夜はアスリが早く寝入ったことを良いことに、ダカクは勝手に窓側のアスリの寝場所を陣取ったようだ。また、父も鬱憤を晴らしすぎたせいで早めに寝床にかつぎこまれてしまったのか、母が反対の壁側で眠り、アスリは父とダカクに挟まれる状態で位置していた。浅い眠りが続くところに、アスリの目元は月光で照らされただけでなく、ダカクも衝突し、いつもなら気にならない父のいびきまで手伝って、アスリは意識下に引きずり戻されてしまったようである。いら立つアスリが窓から見上げる空の色は、暗く、されど明けるのも近く、もうひと眠りするにしても中途半端な、夜とも朝ともつかない、寝る前の宴会の頃とは打って変わって、静かな闇だ。

いら立ちは、アスリの心以外、肉体からも、ふつふつと湧き上がる。自慰がしたい。自慰をすべき時間だ。しかし、母からの抑制のみならず、今夜はラリーヤからも、アスリは駄目をいただいている。無論、アスリは常習的に母に心の中で謝罪しながら至っているのであるから、別にラリーヤのことなど無視して、少し外に抜け出して、悪い自分を責めつつ耽ってくることも、できなくはない。ただ日中、生殺しのまま髪紐で結び留められたユニスを思えば、あの我慢を自らに投じるのもまた良く、朝が来るまで股間に触れずにずぶ濡れにして、今日、1つになるであろうユニスとティサを傍らから眺めることも、趣深い試みだろう。

疼きだす腹の奥と、両太ももで強く挟み込むだけで肉感の伝わる、中央の大きな粒を抱えるアスリは、起き抜けの本能に近い頭脳で、快楽の悶々を少しずつ広げていった。相変わらず月光を注ぎ込む高窓からは、明け方前のひと時にも関わらず、ごく小さな遠くの馬の蹄音も、アスリの耳に進んでくる。

突然、父のいびきが止まった。直後に、父はむくりと起き上がると、枕元に立てかけていた弓と矢筒を手に取って、音を立てずに戸口へと向かい、頭だけを家の外に出していった。

父が、警戒している。馬が地面を蹴る音も、徐々に大きくなり、アスリの自宅の方へと近づいてくる。アスリが耳を澄ます限り、馬は一頭で、進む速度ものんびりとしているようである。ただ、アスリの頭をよぎるのは、あの襲撃の日にカインタの方角から立ち上っていた、数本の煙だ。

ここまででアスリの頭中から性は完全に退避し、眠気も一切が消え去った。不安ばかりが先行するアスリは、父と同じく音を立てないように気をつけながら、履物をつっかけて父の真後ろへと回り込み、か細く父に声をかけていった。

「……パパ？」
「起こしちったか、アスリ。」
父も小さく答える。昼の狩りでも、夜の宴会でも見どころがなかったが、やはり父はアスリにとって頼もしい。
「馬？誰か来るん？」
「馬に乗って、火も持って。うちに来んのかはわかんねぇけど、こっちに来てんな。」
馬に乗った誰かが、たいまつを持って移動しているようである。父の隣で身をかがめたアスリは、その姿を一目見ようと、首だけを外に出したままの父の脇腹の横にできた隙間から、外の様子をうかがおうとした。
「アスリ、やめとけ。誰かわからんから……、ん？あれ、族長じゃねぇか？」
「えっ？族長さん？なんでこんな時間に？」
「だからやめとけって。こんな時間なんだから、こっそり来てんろ。今夜は飲みに来んかったから、何かあるんかもな。うちじゃなくて、どっか行くんかもしれんし。もういいから、アスリは戻って、もう少し寝とけ。」
父の言う通りだが、アスリとしても寝床に戻って、もじもじする訳にもいかない。指示に従う意思だけは見せようと、アスリは少し下がってしゃがみこむと、あとは父の後姿を見守るしかなかった。
ほどなくして、蹄の音だけでなく、馬の息遣いまでもが、父の塞ぐ戸口の脇からアスリの耳にも届いた。ほぼ確実に、族長はアスリの家を訪れようとしている。一体、何の要件か。

「…………うちか。」

慎重に、族長の意思を無言でうかがっていた父も、ついに確信したようだ。一言つぶやいて、肩から弓と矢筒を下ろし、戸口の横へと置きやった父は、このタイミングで外へと進んでいった。父が警戒を解けば、今度はアスリが戸口を塞ぐ番だ。

父が外に出てすぐ、外の状況を目にしたアスリは、その光景を疑った。たいまつを掲げ馬に跨る族長の後ろに、イケメンがラリーヤを連れてきた時のように、もう1人が乗っていた。族長の持つたいまつの灯りが照らし出すその面前は、美しい刺繍の縁取りと、ラリーヤが染めたものとはまた異なる模様が入った、上品な白地を基調とする、ベール状の前布で覆われている。

しかし、顔が見えずとも、この人物が誰であるかは、アスリも分かる。族長の妻であり、ロマドウの巫女たちを統べる、聖女だ。

アスリがその姿を見るのは、昨年のロマドウの祭以来になる。その前は、一昨年の祭であり、さらにその前は、3年前の祭だ。つまり年に1回の祭でしか、アスリは聖女の姿を目にすることはないし、聖女を唯一目にする祭のひと時すらも、酔った大人たちとはしゃぐ子どもたちの喧噪の中から、顔は同じように隠しながら、今以上に立派に着飾った美しさを、遠目にわずかに眺めて、ため息をもらすだけなのだ。

その聖女が巫女たちとともに、日頃何をしているかと言えば、主に医療と祭事である。ロマドウでは、病にしても、怪我にしても、お産にしても、死の看取りにしても、まず巫女たちの下に連れていくのがセオリーだ。加えて、聖女と巫女たちは、治療や薬の作成だけに限らず、怪しげな祈祷や占い、さらにはロマドウの伝統に則っ

た儀式まで、幅広く司っているらしいと、アスリは聞いている。
聞いているというのは、アスリが聖女の仕事ぶりを実際に見たことがないということに等しい。現に、巫女たちの診察時、アスリが現場で触れ合うのは、ラダンよりいくつか年上くらいの、若く未婚の巫女ばかりであって、聖女が直接的に治療を施すことはないのだ。とにかく、あちらこちらを神出鬼没でウロウロし、常に村中の様子を見て回っている族長とは異なって、滅多なことでは聖女にはお目にかかれない。

それが今朝はどういうことか、馬に乗ってアスリの家の前まで来ている。わざわざ何を目的に、ここまで来たと言うのだろう。まさかとは思いたいが、ここまで急となれば、イケメンとラリーヤの件だろうか。そうであるとすれば、非常に由々しき事態だ。族長だけでなく、聖女まで来るということは、ラダンのような直接的な針の罰どころではないだろうし、何がどうなるのかも想像がつかない。

厳しい吐き気が、アスリを襲った。この吐き気は、性に結びつかない。ただただ、本当に悪事を働いて、それが明らかになって、猛烈な嵐のように母に怒られる直前と、同じものだ。昨晩、アスリはあれほど夕食を摂るべきでなかった。

「おっ……!?」
「よ。すまん。起こしちったか。ま、どっちしても、起きてもらわんといけんかったんけど。」

族長は昼間に会う時と同様に軽快だが、父は明らかに面食らっている。突然、聖女が自宅にやって来たら、ロマドウの誰もがこの反応をする。

「どしたんよ? 夜中に、嫁さんまで連れてきて。しばらくね。」

「……しばらく。」

聖女の声は、アスリの覚えている限り、過去の記憶にない。その、アスリにとっての第一声となる、父の挨拶に応じた聖女によるたった一言は、夜分の訪問を気遣ってか、暗闇に消え入ってしまいそうなほどに静かで、正直に言って覇気がなかった。もっと踏み込んで言えば、老人の声のようにしゃがれていて、生気がなかった。

「ん？声、随分ひどいな。大丈夫か？風邪か？それとも煙草か？飲みすぎか？」
「ちっとさ。」
「そうか、まぁ……、まずアレだな。まず馬降りてよ、酒はー…、もうちっとで朝だけど、すこーしだけやってくか？仕事すんまでには、抜けんろ。」

父が聖女に対して連続して投げた問いに、代わって答えたのは族長だった。アスリも違和感を抱いているが、聖女の以前の声を知るであろう父は、より強くその念を抱いているはずだ。
それでも、この場がアスリの自宅の前である以上、今のホストは父であり、暗いうちは夜で、有効なもてなしは酒だ。しかし、酒は強いのにも関わらず、酒の誘惑には弱い族長は、悪い表情すら浮かべず真面目な顔つきのまま、いとも簡単に酒に勝利した。

「いやいや、今日はホント、いいんだ。すぐ帰らんといかん。」
「そうか。じゃあー、そうだアスリ。今、飲む分だけで良いから、牛乳、搾ってきてくれんか。」
「わかった。」
「いやアスリ、大丈夫だ。わりぃな、ありがとう。うちには昼にまた、お母ちゃんに持たしてきてくれよ。」
「なんだ。じゃあまぁ、いいから降りて、一服だな。」

「それが、だ……。」

何かがおかしい。族長は父の申し出を、全て断っている。そして、ただ煙草をふかすのに馬から降りることすら、ためらおうとしている。族長が、一呼吸の間を取った。

「…………こいつよ、今、馬乗んのも降りんのも、ひと苦労なんよ。

」

「……おい。それよ。もしかして昔の、」

　真後ろの聖女を顎で示して語った族長に、何かを察した父が、低く鋭い声で次を急ごうとした。一方、族長は慌てるようなこともせず、父よりもさらに先回りして、誤解の芽を摘みにかかっていった。

「違う。大丈夫だ。もうひと月よりも、もう少し前か？その頃からだ。だから昔んなら、もう死んでるんよ。……んだからその、ひと月前のー、わかんねぇ時は、こいつだけ別、別。あんなん、また流行ろうもんなら。んで、死なんかったから、アレと違うんわかって、そんでもってようやく。」

　父が何を危惧し、当初は族長も同じく考え、別、すなわち聖女の隔離を行ったのか、深い言及は一切ないが、２人が焦点を当てる先が何であるかは、ここまでの会話の流れで、アスリもだいたい想像がついている。父が今、聖女に罹患の有無を確認しようとした病は、おそらくあの北の墓地が拡大するきっかけとなった、アスリが生まれる少し前にロマドウで大流行したらしい、何らかの伝染病のことであろう。

　これまでアスリも、墓地についてはさんざん良からぬことを聞かされてきたし、現に先日、ティサとラリーヤまで強烈な体験をして、最近、村の中で流れている墓地に関する噂は、尾ひれがつくどころか、手足まで生やして好き勝手に走り回っている。しかし、そもそも多くの人を埋葬しなければならなくなった、伝染病そのものについては、父や母も含めて当時を知る者の誰もが、あったらしい事実を一言で述べるだけで、実際を口に出すことはないし、アスリが聞

いてもまともな答えが返ってきた試しはない。
だが、この父の疑いを向けるような問い方を見るに、たとえば森やカインタの惨状の詳細を、父と母がティサに直接伝えようとしないのと同じく、アスリには想起させたくないような相当過酷な日々が当時は続いたのだろう。一息を、煙草を吸った後のように吐き出した父は、つい口走ってしまった族長と聖女への非礼を詫びるように、うなじのあたりに手を置きやって、謝罪からつなげていった。

「…………すまん。悪かった、余計なこと言って。いやでも、ひと月よりかかってんか。大変よね。そんなに長くかかるん、何なん？」
「それが、わからなくて。食べても入らないし、息も苦しいし、体に力も入らなくなってきてて。」

今度は聖女が答えた。相変わらずひどい声だ。
聖女は言わば、アスリだけでなくロマドウ全体にとってしても、生命に関する叡智の結晶だ。その、医師かつ神職たる聖女がわからないと言うことは、すなわち手の施しようがないという意味に他ならない。

「マジか。参ったな。まぁ……、なんせ俺や族長より、随分若いんだ。ひと月の上もやってんなら、そろそろ治んだろ。良くなったら、うちに酒でも飲み来いよ。族長なんか、うちに来んの今、1日おきか？だいたい。」
「この人、いっつもごちそうになって。ありがとう。」
弱々しい聖女の礼に続いて、族長も真後ろの聖女から父へと視線を移し、何かを喋りかける。だが、先に続いたのは、聖女の一言だった。

「でもね……。」

不穏だ。なぜここで、聖女は逆説に向かったのか。馬上の聖女の顔を覆っている前布を、アスリが凝視する。
「私、こういう仕事だし、自分の体だからわかるんだけど……、もう、あんまり長くないと思うから。」
「おっ！？」
「えっ！？」
父にも、アスリにも、驚きが満ちる。はっきり言って、聖女に長くないなどと診断された人間は、いつ死んでもおかしくないというのに、聖女は自身に対して、その旨を述べている。暗い見通しを強く打ち消すかのように、父が声を大きくして、否定から入っていく。
「いやいや、そんなんならんって！元気だしてくれよ！」
「えっ！？どうしたの！？」
アスリの真後ろから、別な驚きの声がかかった。騒ぎに気づいて、母も起きてきたのだ。母の声に後ろから押されては、アスリは戸口から先へと進んで、父の近くまで出ていくしかない。
「あら、久しぶり。」
「えっ！？その声！」
「そう、今、話してたんだけど、私、病気で…。もう、あんまり長くないから、最後に、ね。」
「はっ！？」
一声発して、母も口元を押さえた。起床後、いきなり族長と聖女が家の前にいて、しかも聖女は病とともにあり、最後だと言われるところから始まる、まだ薄暗い今日という１日だ。母にしてみれば、

いまだ寝床で悪い夢でも見ているようにしか思えないだろう。
「でだ、今日は最後の挨拶じゃねんだよ。おい、アレ、頼むんろ？」
自らの容態にさじを投げる聖女の話に、険しい表情の族長が背後の聖女に目をやって、次を促した。すると聖女も、体の前で結んでいた紐をほどいて、本来の目的を目指し始めた。
もう、アスリに吐き気はない。これは、どう考えてもラリーヤとイケメンの話ではない。細く、骨と皮だけの聖女の指が紐をほどくと、馬上の聖女の背から、丸められたなめし革が1本、するりと地面に落ちて、アスリの足元に向けて転がっていった。
「あっ…。」
「わりぃ。それ、広げてみてくれんか？」
「おいアスリ、俺が広げるか？」
「いや、アスリで大丈夫だ。」
族長の要請に、父が一度噛んだが、族長はそのままアスリに託した。革の筒を拾い上げたアスリが、指示通りに革を広げるのと同時に、父と母もアスリの左右に立って、中身をのぞきこんでいく。
「字か……。」
「見えるか？」
父の頼もしさが、たった一言で消えた。馬上の族長が、アスリたちの頭の上から、たいまつを突き出して、革の中身を照らし出す。壁読書が最近までの習慣であったアスリの視線は、無意識にそこに記された文字を追い始める。

「え？　いきなりこれ……、ママ？」
「これは聖女さんの印。」
「これで聖女さんなんだ！　それで、手、捕まえる？　昨日、言葉、引っ張る、明日、あとロマドウの印。え、待って。これ下も、その下も、もっと下も、おんなじのが書いてある。」

初手から母のアシストも借りつつ、アスリは声に出してはみたが、そこに記されている文字の羅列に、アスリは意味を見いだせない。しかも、それが革の中で、しきりに連呼ならぬ、連書されているのである。

「うわ、ちょっとさ、これ……、下まで？　やばくない？」
「でしょ。これ、私がおかしくなってから、ずっと。」
「これは……、気持ち悪いね。」

真横で母が、顎に手を当てながら小さくつぶやき、聖女がさらに情報を加えた。異変の正体はまだ、アスリにも、アスリの父にも姿を見せない。

「何がやばいん？　全然意味わからん。」
「アスリ、これ、ロマドウの占いの結果。聖女さんたちは、毎日巫女の人たちと一緒にロマドウが大丈夫か占って、出たのをこうやって革に書くんだよ。ってかこんな大事なん、外にふらっと持ってきて、いいの？」
「特別。でも、わかりやすいでしょ？」
「俺が認める。」
「あの……、それはわかったけど、どこがやば…、えっ！？　ちょっと待って？」

母からの説明をもとにすると、聖女と巫女たちは、毎日ロマドウ

を占って、結果を革に記すのだそうだ。アスリの勘が、適切に仕事を始めた。

「これさ、もしかしてだけど、その毎日の占いって、この1行分？」
「そう。わかった？やばいでしょ？」
「うっわ、きっつ…………。」
「……アスリ、どゆことなん？」

母と同じ境地に到達したアスリに、薄気味悪さが広がっていく。この話は毎晩酒を飲みすぎている猟師には難しかったのか、父はアスリに小さく耳打ちし、助けを求めた。

「いや、パパさ。これ毎日占って、占いなのに毎日ずっと、おんなじのが出てるってことでしょ？」
「はっ!?」
「その、ロマドウ占うのって、毎日おんなじやり方？」
「やり方は一緒。でもやる子は毎日違うし、普段は出るのも、もちろんバラバラ。でも、変だから、私もまだちょっと調子良かった時は、代わりにやってたんだけど……、その上の方のは、私やった日。」
「うわっ!おい、なんて縁起でもねぇもん持ってきてんだ!」
「だから、俺が認める、ってのは冗談で、すまん。あんまり気味の良いもんじゃねぇよな。」
「勘弁してくれよ……。」

父と族長は、最近は2晩に1回は膝を突き合わせて酒を酌み交わしているせいか、同じように動く仕組みが出来上がってしまっているようである。高さだけは馬上と地面で違えども、2人はそれぞれ腰元に差していたキセルを取り出し、順々に族長の持つたいまつを発火点にすると、一斉に煙を補給した。

洞窟でラリーヤに教わった考えたくない仕組みをもとにすれば、父と母もつながったことで、アスリは世に生を受けている。闇に立ち上る煙草の香りに、父とつながる母もやはり連動していて、こちらもキセルを取り出し、族長から火を分けてもらい一服すると、アスリにも引き継いだ好奇心を、不穏な革の書へと向けていった。

「……で、それ、書いてある字は読めても、意味は難しいね。どういうお告げだと思う？」

「それが、今日、私が来た意味。」

そもそも喫煙の習慣があるのか定かではないが、今、大人たちの中で唯一、キセルをくわえない聖女は、煙を吐き出す代わりに、小さくつぶやいた。前布で覆われた聖女の顔の口元から、弱った声がつむがれていく。

「同じのが出るたび、毎回毎回私もいっぱい考えてね。まず、先に後ろから。昨日、言葉、引っ張る、明日とロマドウ。昨日と明日、1回だけなら昨日と明日かもしれない。でも、昨日までずっと出てて、多分このままだと、今日も明日も同じのが出る。だから、これは、昨日が過去で、明日は未来。合わせると、過去の言葉と、未来のロマドウ。間にあるのは、引っ張る。整えて言うなら……。」

聖女が息を大きく2度、3度と吸い込んで吐き出す。少し長く喋るだけで息が上がってしまう聖女の容態は、本人の見立て通り芳しくないようだ。絞り出すように、聖女が整理した言葉を口にする。

「過去の言葉が、ロマドウの未来を導く。」

ゾクリと、アスリの背に寒気が走る。当然、聖女が語るのは怪異には当たらないし、アスリも今の話で何かを察した訳でもない。しかし、何日も怪しげに続くロマドウに関わる占術の結果だけに留まらず、それを明け方前の暗闇の中、たいまつ1本の灯りの元で、顔を隠した聖女による死期の迫った声で聞かされることには、なんとも言い難い不気味さがあるとしか言えない。

体力的な面で厳しい聖女は、しばらく間を取った。本来ならアスリか、父か母か、いずれか1人が水でも1杯くんできて、聖女に手渡すべきだろうが、父も母も、また聖女の夫でありながら族長までも、アスリと同じように不穏さを噛みしめているのか、静かに煙草をふかしているだけである。

静寂を終えて、聖女が口を開く。

「……それで、前に戻って、聖女、私。で、手と捕まえる。そのままなら、私が手で捕まえる。または、捕まえなさい、とかね？　だから、この占いは、私に向けて、自分の手で捕まえなさいって言おうとしてるってこと。それで、捕まえなさいは、本当に手づかみにすることも考えられるけど、ここは単純に何かするとか、しなさいとか、そういう意味でいいかもしれない。」

ここまでを耳にして、アスリも理解が及んだ。前半と後半を総合すれば、行き着く先はほぼ一点だ。だが、アスリよりも母の方が、一歩早かった。

「なるほど。じゃあ、全部合わせると、過去の言葉を使って、自分の手でロマドウを導きなさいってこと？　そしたら、古い書き物とか、

調べなきゃいけないんじゃない？」
「そう、思うでしょ？」
聖女が軽く、おかしな咳払いを2回した。それら、たった2回には、たしかに重大な病の影が控えている。
「でもさ、できないんだよ。今の私。なーんにも。生きてるだけで精一杯。せいぜいこうやって占い終わったの読んで、あとは横になって、ぼんやり考えるだけ。もう全部、巫女の子たちに任せっきり。仕事覚えてもらうのには、ちょうど良いけど……。それにそもそも、過去の言葉、ロマドウの記録だろうね、久しぶりにそういうのなんて、どうにか少し調子良い時に、読んでもみてるけど、前に読んだ時から、増えてるわけでもないし、こじつけみたいなのを考えるのも良くないし。」
布が遮っている以上、アスリは聖女の顔を直視できないが、過去聖女に抱いてきた厳かなイメージと異なって、砕けて語る聖女の言葉は重く、その下の表情がどうなっているかもある程度、想像ができる。語るだけでほぼ体力を消費しきってしまったのであろう聖女は、肩をすくませ、族長の背によりもたれかかるようにしながら、この場の核心に触れていく。
「それで、私今、こんなだから、昨日初めて、この人から聞いたんだけど……、それを聞いて、全部つながった。最近見つかった、まだ私の知らない、過去の言葉。」
アスリの頭中に、壁が広がっていった。美しい虹の出る滝の横、洞窟の中にびっしりと文字の記された、あの壁だ。過去の言葉とは、あの壁しかない。

「アスリ、もう分かったんじゃない？」
「それじゃ今日、これから、聖女さんも一緒に行って読むん！？」
「無理はさせられんのよ。」

聖女の問いかけに応じたアスリを、キセルをくわえながら族長は制すると、空いた片手を後ろの聖女の太ももを優しく触れた。具体的に聖女のどこがどう不調かまでは見通せないが、族長も言う通り、見るからに辛そうな聖女を、乳や湯が溢れてしまうほど元気はつらつな男女とともに同行させるのは、不可能だろう。

「それで、アスリ、壁のところに毎日、ユニスたちと行ってるんでしょ？だから、アスリ、書いて、写してきてほしい。そしたら、書いてきてもらったの読んで、何の意味になるか、私、頑張って考えるから。」
「アスリ。」

アスリの名を呼んだのは、父だけだった。しかし、父も母も、族長もアスリを見つめているし、聖女の顔にかかる布も、しっかりとアスリを捉えている。

「わかった。もちろん大丈夫。写してくる。」
「ありがとう。今日、私が来たのは、少しでも私の手でって、思って。本当は私も行って、読んでみたい。」
「ありがとう。わがまま聞いてもらった。今回、こいつも本気なんだ。俺がアスリか、アスリの父ちゃんに言ってくるだけだって言ったんに、自分の手だっつって、聞かねんだよ。」
「だって、そうでしょう？毎日巫女の子たち、占ったらそれなんだよ？自分の手って出てるんだから、自分でできるところまでは、なんとかって思って。」

聖女は1人、小さく笑ったようである。重苦しいこの場の空気の中であっても、聖女にしてみれば懸念していた願いが1つ、無事に受諾され、安堵しているのだろう。
それにしても、あの壁の文量は相当だ。依頼を引き受けた今、アスリが次に目を向けなければならないのは、実務の面だ。

「それでさ、あの壁。すっごいたくさん字書いてあるから……、どうしよう。読むだけで、ひと月はかかったと思うし。」
「そうみたいだよね。……ああ、それじゃあさ、まず、今日は1か所、アスリが気になるところで、まとまりの良いとこ、そういうところあれば、そこだけ写してきてほしい。それ見て、まず、どんなものか掴みたいから。」
「明日も？」
「明日も、そう。そういうところがあれば。でも、もうそういうところないなら、ちょっとずつ、ちょっとずつで良いから、端っこから書いてきてほしいな。」
「わかった。めっちゃ多いから、……あと、知らないのも多いし、火で照らしながらになると思うし、毎日ちょっとになるかもだけど。」
「大丈夫、牛のついでで良いから。ごめんね、余計なお願いで。」
「牛さんは、ユニスと、あとファラールも見張っててくれてるから、大丈夫だよ。」
「あ……、そうだ。そのユニスでよ。」

煙を吐きながら、族長が軽くを手をあげ、口も挟んだ。今度は、ユニスだ。愛する人の名に、アスリが身構える。

「これはアスリだけじゃなく、お父ちゃんとお母ちゃんにもお願いだ。」
「私らも…？」

「なんだ？」
「ユニスってか、ティサとラリーヤも、そんだけじゃなくて、村ん中全部、他の誰にも。こいつが弱ってってこと、絶対に誰にも言わんでくれんか？もちろん、巫女らにもダメだ。」
「なんだ？巫女にも言ってねぇんか？」

父が、ややいぶかしむように族長に返した。聖女と巫女が、いつもはどれほど触れ合いながら働いているのか、アスリは全く把握していないが、病の事実を伝えていない以上、聖女は巫女たちの前に姿も見せていないということになる。ここでも族長は、また先回りをして、説明不足を補っていった。

「言ってねぇどころか、この前、かかり出してから、会わせてねぇよ。最初はうつんねんようにだったけど、うつんねぇのわかったら、今度はこんなに弱っちって。だからその革も、俺が巫女から受け取って、こいつに持ってってやんだし、巫女らの仕事も、聞かれたらわかるとこは俺、わかんなければ聞きいって、俺が答えてんだ。息子らにも、ユニスにも、もうずっと会わせてねんだよ。」
「なんでまた？」

胸の下で左腕だけを組む母が、キセルの吸い口をこめかみにあてて、合いの手を入れた。ユニスだけでなく、血のつながる息子たちにまで族長は伝えていないとは、随分と徹底している。族長は、煙を含まずに続ける。

「んなん、こんなんわかったら、みんな見舞い来て、仕事どころじゃなくなんろ？今は、見張り台作って、次は柵だの壁だのもやってかんといけんのに。で、そんなんが村の外にでも漏れてみろ。カインタあんなんした連中に、弱み見せるわけにはいかんねんよ。」
「それはたしかに、まぁそうだわな。でも、大丈夫か？まだ先でも、

祭りで出んと、バレんろ？」

父の言う通りである。今年の祭りはしばらく先だが、その場で姿を見せなければ、さすがにロマドウの誰もが、聖女の身に生じている異変に、わずかでも感づき、それだけで噂も立ってしまうはずだ。

「だから、今年はしばらく延期だな。良くならんと、表に出せん。」

「まぁ、良くなるのは、そんなに期待しないで。」

「そんな弱気だからよ。どっちしても、今死んでもらうわけにはいけん。死んでも、村で今やってんのが一通り終わるまで、内緒だ。」

一貫して、聖女は悲観的だ。族長も強気に声をかけているようで、聖女への言葉の扱いがぞんざいなのだから、自宅でさんざん弱音を聞かされ、滅入っているのかもしれない。

族長は煙草をふかして、気分を切り替えるように話を流していく。

「ま、そんなわけで、そのうちみんな集めて話すつもりだけども、今年は祭りが大分先だ。こいつのせいだけじゃなく、まずはホントに、守りを固めて。そうじゃねぇと、村中全部で酔っ払えん。どこの家でも、頭では分かってくれるはずだ。そうは言っても、祭りはどうだの、グチグチ言うやつも出てくんろ。わりぃけど、これまでみたく、みんなに酒飲ましてやってくれよ。俺んちは今、こんなだから、ホントわりぃ。俺も酒持って、できるだけ来る。」

「ああ、それぐらいしかできんけど、任せろよ。威勢悪いの、どんどん連れてこいよ。」

父が、張りのある声で答えた。適材適所だ。馬上の族長も、朗らかに続ける。

「ありがとな。最近、アスリだけじゃなく、お宅にはお世話になっ

てばっかだわ。前言った馬、そろそろ乳離れできっから、仔馬で良ければ、今度一頭やるよ。」
「族長！！！あれマジだったんか！！！」
「ホントに！？アスリ、めいっぱい書いてきなさい！パパもお酒、たくさんみんなに飲ませてあげて！」
「しかもメスだぞ？増やせんぞ？」

一足先に朝日が昇ってしまった父と母を前に、今度は族長も高笑いし、それにつられて父と母も笑えば、弱る聖女も族長に預ける肩を、静かに揺らしていた。父と母のわかりやすい現金さに、アスリはやや閉口したが、とにかくこれで聖女の気が晴れ、族長は恩を返し、父と母は馬に喜び、おそらくアスリの日々の一行にも、後日その馬が加わるのであろうから、アスリは頼まれたとおり、壁の字を写してくる以外にない。
ひとしきり、場の面々が笑いきったところで、族長は馬の手綱を軽く引くと、馬の向きを変え始めた。それを見て母は、アスリの手から例の革の書を優しく取り上げて、元の筒状になるように丁寧に丸め、族長へと手渡した。

「じゃあそろそろ、息子らが起きてくる前に、俺らは戻らんと。アスリ、俺らが来たことも、くれぐれも言わんでな？このあとユニスには、革と炭、持たせる。書き終わったんは、帰りにユニスに持たせてやってくれ。俺がユニスから預かって、あとでこいつに渡す。」
「わかった。」
「馬はいつでも良い。嫁さんが一番だ。嫁さんも、あんま弱気になんなよ。」
「元気になったら、すっごく久しぶりだけど、また女の会、呼ぶから。前来た時、まだ聖女じゃなかった頃じゃない？」
「うん……、ありがとね。」
「じゃ！俺はまた今夜にでも！」

去り際の挨拶代わりに、手にしたままのたいまつを族長は少し高く掲げると、その背に寄り掛かる聖女を伴って、馬をゆっくりと進めていった。たいまつの灯りが遠く、小さくなっていく間、アスリも、両脇にたたずむ父と母も、ただただ静かに、闇の中に1つ浮かぶ光を見送っていた。アスリを挟んで、2人がぷかりぷかりとくゆらせるキセルの煙の上る先、南中の高さで輝く三日月は、まもなく白むだろう東の空の際を見つめて、続いてやってくる新しい朝陽に、サバンナを照らし出す役目を引き継ごうとしていた。

１日が一足早く動き出したこの日の朝は、全てが一足早い。族長と聖母の訪問後、父も母もアスリの３人とも、中途半端な明け方に床に戻るようなことはせず、一足早くダカクは不機嫌とともに父によってたたき起こされ、母は一足早く洗濯を始め、アスリも一足早く牛の乳を搾り、父とダカクも一足早く牛乳を飲み干し、夜明け前のサバンナに向かって出発していった。

ただ当然ながら、いつもの３人と犬が一足早くアスリの家にやってくることはなく、諸々の作業と準備を終えて、軒先の台に腰かけて待つだけになったアスリにもたらされるのは、しばしのまどろみだ。それでも、朝の時間はいつ時代の誰にとっても短く、ほどなくして強張った表情のティサと、肩にかけた弓と矢筒のほかに、族長の予告通りたくさんの丸めた革を手にした変態が１匹、まだ染めていないたたまれた布を数枚持参する美しい女の変態も１匹に、優秀な犬が１頭現れて、一足早く進んでいたアスリの周囲の時間は、ようやく元のペースを取り戻していった。

この日、どうでも良い話を次から次へと放り込むのは、女の方の変態だけで、他の３人は凪いでいる。まずティサについては、洞窟でラリーヤから教育を受けて以降、３日ぶりに例の宝石のついた腰飾りを身に着けている。この石が、ユニスに対しての誘いの印であるにも関わらず、無自覚だったと釈明することは、今朝のティサにはできない。つまり、ティサは明日と言った昨日の約束を、遂行する覚悟を決めてきたのだ。そのせいもあってか、牛乳を飲むティサはどこか上の空で、ラリーヤの会話に素っ気なく返すことしかできていない。

その相手となるユニスも、神妙な顔つきだ。随分と真面目な表情

だが、こちらも所詮は変態だ。いつもいい加減なユニスが、今日はもっといい加減などころか、時折無視までしているのだから、せめてアスリの家から出発するまでの間、腰布の中を膨らませないよう、精一杯集中しているのだろう。

アスリにしても、早くも黙々と盛り上がってしまっている2人の様子を目にして、昨日の食べ過ぎ以外の何かが、腹の奥で疼きかけてはいる。だが、こちらはこちらで、先ほど聖女と族長からあれこれ聞かされ、願いも託された上で、秘密の保持まで保証しなければならない状況だ。圧倒的熱量のユニスとティサを冷ますのに、聖女と族長のペアはちょうど適しているとは言え、今、ここでむやみなお喋りをして、失言をする訳にもいかない。

加えて、近くで家事をこなす母も時折、何とも言えない視線をアスリに向けて送ってきている。アスリと同じく、特に聖女に関して、母すら何も余計なことを言うことができないのだから、母としてもアスリの難しい立ち位置に気をもんでいるのだろう。

「アスリ、頑張ってね。」

朝食を終えて、出がけに母からアスリだけに聞こえるように送られたシンプルな一言には、その母の配慮が、ずっしりと込められている。もっとも、母の言う頑張りの対象に、ユニスとティサが深める仲をアスリが見学する部分は、含まれていない。聖女から引き受けた時点で、アスリはここまで想定していなかったが、今日のアスリは牛飼いとしての仕事のほかに、字写しに見届けと、大きく2つこなさなければならないのだ。元々アスリに今日やりきるつもりもないが、ユニスの2番目をいただくのは、また日を改めるべきだろう。

とにかく、アスリは母に目だけで強く答えてから、平静を装いつつ、牛たちを連れる支度を整えていくしかなかった。そして、今日はまた滝だと言うラリーヤの指示の下、一行は今日の旅路に進んで

いった。

さて、ロマドウから十分距離をとったところで、朝からうるさかったラリーヤは、早速顔全体が悪である。最初に悪意が向けられる先は、ティサの腰元で輝く宝石だ。

「で、ティサ。ちゃんと今日は、腰につけてきたねー？えらいねー？」

「バカ。ママのなんだから。茶化さんでよ。」

「でも昨日と一昨日、つけてなかったよ？」

「うっさい。」

「今日はちゃんとユニスに、なかよししよーよってことだよね？」

「だから、うっさいって！」

「ユニスは？もう嬉しくて、ちんちんピンピン？」

「おい、バカ！触んな！族長にこんなんいっぱい持たされてんだから。」

「んふふふ。もう脱いじゃえば？私のこの上、載せられるよ？」

「やだよ！朝からラリーヤうっさいわ。」

「ホント、マジサイテーすぎる。」

面倒くさい女だ。ティサもユニスも、相当な厄介を強いられている。アスリも無駄に介入すべきではない。これほど人をからかいながら、剃りあげたものが一晩で生えてくるはずはなく、股間は無毛なのだ。意味不明だ。ラリーヤはティサの真正面に出て振り向き、後ろ歩きでティサの顔を下から覗き込むように身をかがめながら、しつこく続けていった。

「まぁさ、最低でも何でも良いけど。ティサは今日、約束守んないとだもんねー？」

「はぁー、サイアク。」

「だからそんなに嫌なら、私がユニスの初めて、食べてあげるって！」

「バカ！！」

「それだと、やーやーなんだもんね？大好きなユニスの初めて、ほしーほしーだもんね？」

「……マジで殺すよ？」

今更ながら、愛する人の初めてをここまで煽られると、相手がいくらティサであっても、アスリの心中に嫉妬が沸き立ってくる。ティサに落ち度は一切ないとは言えど、アスリにとってティサはあまりにもうらやましい限りであって、ラリーヤの言ったようにユニスだけでなく、もうティサも今の時点で脱いでしまうくらいのことはしてしまっても良いだろう。

からっと爽やかな朝のサバンナの空気の中で、耳まで赤くして暑そうなティサは、物騒なことを口にしても、全く迫力がない。それでも殺害の予告までされては、ラリーヤも後ろ歩きをやめ、口を閉じるほかなく、道中にはしばし平穏が戻った。

「…………………ねぇ、ラリーヤ。」

その、やっと完成した平穏に、なぜか切り込んでいったのは、まさかのティサだった。しかも呼び出し先は、最もたちの悪い変態だ。首だけを振り返らせたラリーヤが、横顔の流し目で答える。

「何？」

「あんさ……、ラリーヤも初めての日、あったんしょ？」

この時点で、ティサが何を胸中に抱いているのか、アスリは察知した。初めては、ユニスだけではない。ティサにしても、これからが初めてだ。洞窟の中でラリーヤから話を聞き、昨日イケメンがた

った2回、ラリーヤに入ったところを見ただけでは、圧倒的に情報が不足している。ティサはこれからを前に不安なのだろうし、ラリーヤの経験値が欲しいに違いない。
今のティサの問いを受ければ、察しの良いラリーヤも先回りができるはずである。だが、ラリーヤは再び顔を前に向けて、何も答えなかった。今朝は束ねられていないラリーヤの後ろ髪が、サバンナを吹き抜ける弱い風に舞う。
4人とも、無言を貫いている。まさかラリーヤは、無言で語ろうというのか。圧力の強い無言に、先にティサが屈した。
「………………え、待って、ラリーヤ。もしかしてなんだけど、昨日の……、初めてだったってこと？」
「んなわけないじゃん。したら、カインタの男の子たちの話とか、お兄ちゃんの話とか、何なんってなんじゃん。」
「じゃあさ。」
「いいじゃん？そんなん。」
急激にしぼみつつあるラリーヤが突然振り返って、立ち止まった。ラリーヤが止まれば、ティサもユニスも、アスリも止まるしかない。
今のラリーヤは、笑みもなければ怒りもなく、悪さもなければ変態もなく、真顔でもない、アスリも表現できない表情を浮かべている。そのちぐはぐな顔で、ラリーヤははっきりと、短く語った。
「初めてなんて、ただの1回。」
ラリーヤがティサから視線を外し、後方のもっと遠くへと目をやった。そのまま続けて、ラリーヤは弱く、ぽつりとぽつりとつぶやく。

「でも、ティサは好きな人となんだから、良い思い出にしてよ。絶対。」

アスリは、何もラリーヤに問えなかった。ラリーヤは、どう見ても初回の出来事をはぐらかして、その上でティサにアドバイスを送っている。聞いた話をうのみにするだけなら、ラリーヤはティサからの質問に喋っているだけで、答えてはいないのだ。

しかし、変態である以前に、ラリーヤが配慮と気配りの女であることを踏まえた上で、ただの1回の発言の後に連続した言葉の意味をたどって、それを婉曲的な言い回しとするのであれば、すなわちラリーヤの初回には、愛がなかったということにつながっていく。たしかにラリーヤは洞窟の中で、好意の有無に関わらず、対象とした旨も述べてはいた。その初めてが、ラリーヤの愛が向いていなかったとして、おかしなところは何らない。

だが、今のラリーヤには、直前までと打って変わって変態が宿りきっていないばかりか、遠くを見つめる瞳がなぜか寂しい。きっとラリーヤにも、今のティサとアスリのように、普通の少女だった過去があったはずだ。そしてその初めては、残念ながらラリーヤにとって、あまり良い記憶ではないのかもしれない。

アスリはラリーヤの触れた全てを、見通したわけではないし、はっきり言って1割も把握できていない。それでも、これ以上深く掘り下げるべきでないことは、アスリも十分に理解できる。

ティサとユニスも、ラリーヤの言葉と態度から、何らかを汲み取っているのか、こちらも再び無言だ。現に、ティサは好きな相手に関する指摘をラリーヤから受けたにも関わらず、そこに対抗しないし、こういうタイミングで常々鈍いユニスも、少し先の地面を見つめて押し黙っている。

ひとしきりの間、ラリーヤは問われるのを待っていたのか、それ

とも眺める先に遠い記憶を見出していたのか、何かが1つ欠落してしまったかのような表情を浮かべて、その場に立ち尽くしていた。
ただ、ラリーヤの記憶を問うことができる、制限時間はいっぱいだ。
ふと、ラリーヤが前を向いて、滝の方向へと歩みだせば、機会をふいにした後ろの3人も、かつて少女だった背を黙って追っていくしかない。

「……………………ねぇ、ティサ。」

今度沈黙を破ったのは、ラリーヤだ。ラリーヤは歩みを止めることなく、ティサに横顔を振り向ける。

「……ん？」
「絶対、今日は絶対、良い思い出にすんだかんね？」
一点も曇りもない、快晴の笑みを炸裂させて、ラリーヤが戻ってきた。ラリーヤがまた、うるさくなった。

本調子を取り戻したラリーヤが、真っ先に話を振り向けていく先は、やはりティサとユニスがこれから取りなす行為についてだ。ただ、ラリーヤとしても、ティサに必ず良い思い出とするよう勧めた手前、ティサとユニスをからかいつつも続くラリーヤの話は、より建設的な、今日の午前の過ごし方へとつながっていった。

変態さと真面目さが絶妙に共生しているラリーヤがまず述べたのは、ティサとユニスのための時間を設けなければならない以上、いくらユニスの狩りとティサの獲物の処理が手早いとは言えども、早めに雑事は片づけておいた方が良いであろうという助言だ。これを受けて、ティサはうつむき無力であるのに対し、後で自分が何をするかよりも、目先の具体的な事柄には頭が回るユニスは、至極まっとうなラリーヤの意見に対して、朝のうちに獲物を捕らえてくること、ティサがそれを捌く間、持ち帰るまでに肉が傷まないよう、中州で普段魚などを火にかけている拭き屋根のそばに、新たに獲物一頭分の肉を燻せる場所を加えること、ラリーヤにも燻製づくりを手伝ってほしいことなどを、てきぱきと述べていった。もじもじとして情けない姿のユニスを、性にまみれながらいじめるのもアスリは好きだが、精悍に指示を出すユニスも良い。この男子と、これからティサはつながるのだから、ティサにとってはそれだけでも良い思い出になるはずだ。

ここでアスリには何の要請もかからなかったが、当然、アスリの仕事は、ユニスが手にしている族長から送られてきた革に、洞窟の中の文字を転写することになる。３人が族長からどのように聞かされているのか定かではないが、ユニスがアスリにその件を振って、ティサもラリーヤもそれは手伝えないと、ため息でもつきそうな口調で触れて終わったのを見るに、族長は聖女の病状や、連日続く薄

気味悪い占いの結果など一切知られぬよう違和感なく説明し、文字が読めない3人も、そこに特に興味は沸かなかったようである。
それにしても、ユニスは随分とたくさんの革を持たされてきたものだ。ティサとユニスが初めてをなすところに、アスリは立ち会うのか、そもそも立ち会って良いのかすら不明だ。しかし、仮に立ち会わないとしても、その間はやきもきして仕事にはならないであろうし、今日はせいぜい、あの革1枚を書ききるのが関の山だ。

まもなく、滝から吹く清々しい風が、一行を出迎えた。昨日は誰も来なかったが、今日も滝はいつもと同じように絶え間なく水を落としており、牛たちが毎日食べても食べても伸びてくる豊かな草は、中1日分が空いて、背丈もやや高くなったようである。最初にラリーヤが燻製づくりに向けた採集をしてくることと、後ほど一昨日作った薬液を確認することを告げて、近くの茂みに進んでいけば、ユニスが狩りを終えるまで手の空くティサも、ラリーヤに従っていった。
昨日見たラリーヤとイケメンに、今朝見た族長と聖女、これから見るユニスとティサと、3組の前に完全にアスリは忘れかけていたが、ここには薬液もあるのだ。どのような仕上がりなのか、アスリも早く肌に塗りこんでみたいし、もし今日の帰りにラリーヤが母に渡す分を忘れていれば、アスリも一声かけなければならない。
一方、ユニスも族長から持たされてきた革を置きやって、アスリに指で指し示すと、犬に向けて何かつぶやいてから、滝の前の池から南西に流れていく小川に沿って、勢いよく駆け出していった。犬は尾を振りながらユニスを見送ったところを見るに、この場で牛たちの護衛を任されたのだろう。
残った人間は、アスリだけだ。ふと、アスリが軽く息を吐きだして、大きく吸い込んだ空気は、滝から上がった水しぶきを含み、澄み渡っている。この空気を文字に乗せて、弱った聖女に届けること

は叶うのだろうか。
何にしても、あまり長くないと自己予見する聖女の望みは、壁の文字だ。アスリも、いつまでも牛たちや犬と一緒に、のんびりしている訳にはいかない。手始めに山積みにしてあるたいまつの置き場から数本を拾ってきて、そのうちの1本だけを手にしたアスリは、浅瀬を突っ切って中洲に渡ると、残しておいた種火から火を取り、あわせて燃え尽きた炭も拾い上げた。そして、ユニスの持参した皮でない革と、火のついていないたいまつも、持てる分だけ小脇に抱えて、今更降り注いできた早かった朝の代償をあくびで振り払いながら、先人たちの築いた洞窟前の階段を昇っていった。

今日のアスリの作業には、明るさが必要だ。洞窟に入り、革の筒を適当に置きやったアスリは、一昨日ラリーヤの指示のもとに集めた枯草に火の粉が飛ばないよう、洞窟の奥に向かってほぼまっすぐ3か所に、たいまつを置きやりながら火を灯していった。

壁が、照らし出されていく。いつ見ても、この壁は圧巻だ。できることなら、アスリは聖女をこの場に連れてきて、その目に直接この光景を広げたい。
今朝の聖女は、この中からまとまりの良い部分を、先行して書き写してくるようにとアスリに依頼していた。だが、この壁は、アスリが見る限り壁全体で1つの文書であり、かつアスリもほとんど読みこなせないのであるから、どこをどれだけ抜き出せば良いのか、今のアスリの知識では推し量ることができない。
たしかに聖女は、明日以降の分については、まとまりが見られなければ端から書き写すだけで良いとは口にしていた。ただ、それは明日以降の話であって、少なくとも初日の今日は、最低限どこかの一節を抽出できなければ、アスリはあまりに無能である。じっくりと壁を流し見しながら、上衣の裾を指に巻き付けつつ、早くも途方に暮れかけているアスリが、壁の中ほどに目を送っていった時だっ

た。

アスリの瞳が、立ち止まった。今朝、母から習ったばかりの、聖女の印だ。さらに薬を意味する言葉が、その直後に続いている。

この前後で、アスリに読み取れる箇所は他にないが、聖女と、薬だ。思えばユニスとティサが襲撃され、毒矢に弱っていたあの時も、いつのものかもわからない、持ち合わせていた薬を2人に飲ませ、後に族長から、薬によって麻痺が緩和して、2人の一命をとりとめる一助となったことをアスリは聞かされている。

今、ここにあるのは、薬ではなく文字だ。それでも、効果があるか不透明なものを、傷病者に投与する賭けに、アスリは一度、勝っている。

ひどく衰弱した聖女からの依頼に対しての返却として、ここ以外に書くべきところはない。早速、聖女と薬の前の地面に革を広げたアスリは、聖女の印を起点に転写を始めていった。

知らない言葉は、写すだけでも一苦労だ。革には壁の文字に加えて、失敗して黒く塗りつぶしとなってしまった箇所も複数できてしまっているが、反対に書き漏らして少なくなってしまっているところはない。これがアスリの精一杯だ。

壁読書をしていた時と同じく、集中して過ごす時間は早い。アスリが次に壁以外に意識を向けたのは、たいまつの上げる小さな弾ける音と、外から聞こえてくる滝の水が落ちる音の中に、洞窟の外から近づいてくる、ティサとラリーヤのおしゃべりの声が加わった時であった。

「アスリ！できた？」

「お肌に使うやつ、持ってきたよ！」

洞窟の入り口から、ラリーヤとティサがアスリにかけた声のうち、

特にティサのものの方に、アスリは思わず反応して、洞窟の入り口の方へ勢いよく振り返る。見れば、２人が一昨日薬液を作った釜を左右で手分けして持って、洞窟の中へと進んでくるところである。

「ウソ！？アレ、できた！？ティサ、もう塗ったん？」
「まだまだ。どこ置けばいい？」
「そこの草の横、奥んとこにしとこか。わ！アスリ、すっごい！めっちゃ書いてる！」
「ホントだ！すごい！壁のとおんなじじゃん！」

釜を運びながら、ラリーヤがアスリの仕事ぶりに触れると、ティサも広げたままの革へと目をやった。どこまでが聖女と薬の話なのか、アスリは掴めないが、ラリーヤの言った通り、それなりの量をアスリは書いた。ここまでですでに、ちょうど1枚分は革に文字を書き写している。今日の帰りにユニスに持たせる量としては、ひとまず十分であろうし、もしこの続きも必要であれば、族長と聖女がまた人目を忍んでアスリの家に来るのか、それとも3人にことづけがされるかして、アスリに追加の指示が届けられることだろう。

「まぁ、写しただけだからさ。ってか、お肌のお薬！」
「待って待って。じゃ、ティサこのへんで。……よいしょっと。」
「ほー、ちょい重かった。ユニスに運ばせれば良かったね。」
「お疲れ様！で、どうなん？ラリーヤ？」
「どうかなー？」

置きやった釜の前に、ラリーヤとティサがしゃがみこむと、すぐさまアスリも釜を囲む輪に加わった。アスリも腰を下ろしたところで、ラリーヤが一足先に釜の上にかけられていた布を払うと、洞窟の中の空気に、すっと抜けていくような、爽やかな香りが広がっていく。

「わぁ、いい香り！」

「すごい、もう匂いだけで綺麗になっちゃいそう。」

「んふふ。でしょ？お花や果物入れると、もっと良い香りなんだけど、あんま日持ちしなくなっちゃうからさ。でも、これだけなんに、香りはめっちゃ良いね。ちゃんとできてるかな？」

釜の水面には、低い位置のたいまつからの明かりはほぼ届かず、色合いは釜のものと同じか、それよりも暗いばかりで、香りのほかに水気があることしか、アスリは把握できない。その水面に向かって、ラリーヤはするすると右手の指先を伸ばすと、親指と人差し指と中指の３本で、薬液をすくいあげた。

洞窟と、釜の中の水面の間に、糸が引かれた。無色透明だ。別にアスリは変態ではないが、ここから想起するものは、ラリーヤが昨日自らの泉から採取した糸であり、アスリも産出できるものだ。アスリの心中には構わず、ラリーヤは糸を引く液体を左手のひらの上にのせると、両手を軽く揉んでから、自身の前腕に片方ずつ広げていった。

「……やばいね、これ。」

「え？失敗？」

ラリーヤに問うティサの声と顔に、雲が広がった。自然とアスリの眉間にも、力がこもる。２人の懸念とは裏腹に、続いてラリーヤの顔中には、太陽が上った。

「過去イチ！！！超良い草だ、やっぱ！！！すっごいしっとりしてるのに、さらっさら！！！」

洞窟に号令が響いた。晴れ渡ったアスリとティサも、ラリーヤと同じように釜から薬液をすくい、両腕に塗りたくっていく。
「うわぁ！！何これー！？ぬるぬるしてるー！！」
「ホントだ！ぬるぬる！あっ、ティサ、垂れてる！垂れてる！」
「やばいやばいやばい！アスリも肘！」
「ちょっ！えっ、ちょっとさ？これ、全然さらさらじゃないじゃん？」
ラリーヤが、弾けるように笑った。せっかく出来上がった薬液が、随分洞窟の地面に落ちてしまっているが、こう笑われてはアスリもティサも笑うほかなく、３人の笑い声は洞窟の中で大きく増幅していった。
「ひっ……ひっ！！いやさっ！そんな目いっぱいすくったら、そうなんに決まってんじゃん？」
「なにー！？ラリーヤ先言ってよ！ティサ、腕全部ぬるぬるになっちゃってんじゃん？」
「アスリも足にくっついてる！」
「そんな欲張んなくても、お肌に塗る時は、ちょっとでいいんだよ。ぬるぬるにしたい時は、今みたく、いっぱい使えばよくて。」
「そんな時、ないっしょ！？」
またティサが笑いながら、ラリーヤに指摘を入れた次の瞬間だった。突然、ラリーヤの表情に現れた性を、アスリは見逃さなかった。

笑うばかりのティサは、ラリーヤのわずかな異変に、まだ気づいていないに違いない。しかし、すでにアスリの心中では、何らかの予感ばかりが先走りしている。

ふいに、冷静になったアスリに思い浮かんだのは、予感から転換した1つの疑問だ。先ほどラリーヤとティサは、川の中州から洞窟の中まで、ティサがユニスを使役すれば良かったという感想を抱く程度には重い、この釜をわざわざ運んでいる。
別にその点に関しては、外で釜を火にかけ終えた後、しっかりと時間を空けた上で、完全に釜が冷め切った今、保管に適する洞窟に運んできた方が合理的であることは、アスリも分かる。だが、アスリが問いたいのは、そこではない。

「…………ねぇ、これさ。これって一昨日、あの長い草、入れたっきり？」
「そうそう！あれだけなんに、香りも良いし、すべすべだし。この辺で採れんの、ホントなんでもすごいよね！」
「え？待って、そしたらさ、もうこれで完成ってことだよね？」

ティサも何かに気づいたようだ。ただ、ティサの視点はアスリとも異なるようだ。

「一昨日、私とアスリがたくさん集めてきたそこの草、それ毛皮かけただけで、なんも使わんってこと？そしたらそれ、なんで集めたん？」
「たしかに。あと、私言いたいんは、お湯沸かして、お薬に使う草

漬けるだけならさ、２人とも重そうだったんから、草だけ持って帰って、うちの近くで作れば良かったじゃん？多分、牛さんの背中も、こんな釜だし、こぼれちゃうから載せられんし、中身ぬるぬるだし、手で運ぶしかないよ。」

「そうだわ！アスリ賢い！これアスリのママに、持ってくんよね？お肉とか、採ったのの他に、これもっしょ？全部は厳しくない？まぁ、ユニスならいけるか。」

「なんだよ？俺ならって。」

「うわっ！いつからいたん！？」

「釜持って入ってったとこから。」

洞窟の入り口から届いた男子の声が、アスリとティサによるラリーヤへの質問責めに割って入り、ティサが振り返って応じた。これほど気配を殺せるのだから、ユニスに狙われた獲物は、その時点で捕まったも同然なのだ。

この流れで、ラリーヤはなぜか小さく笑い声をあげる。徐々に悪さが高まりつつあるラリーヤが、一層怪しくなっていく。

「んっふふふ、そんなんさ、どっちもこのあと使うからに決まってんじゃん？」

ラリーヤがまた、右手の指先を釜に伸ばして、薬液を小さくひとすくいした。その手の中身をこぼさないよう、肩の位置まで持ち上げたラリーヤは、腰を少し持ち上げて横移動をすると、積みあがった草にかかった毛皮の上に、自らの腰を放り投げるようにして座っていった。

ラリーヤの大きな尻を受け止めた柔らかい草が、ラリーヤからの重力を跳ね返して、洞窟の中に、ふわりと風を巻き起こす。薬液の香りとはまた異なるものの、こちらも同じく良い香りだ。一昨日、ラリーヤは毛皮と草の間に、別の香草を散りばめていたが、丸１日

以上の時間を置いて、草にも毛皮にも、しっかりと香りが移ったのだろう。
うっとりしたように、目を細めたラリーヤは、薬液に触れていない左手で、草の上の毛皮を優しく2度たたく。

「………なかよしする時に。」

またしてもラリーヤの右手の指先に、糸が引かれた。同時にラリーヤの口角に、いやらしさが満ちた。
悪だ。ラリーヤが、悪になった。

当事者のティサとユニスは、黙ってしまった。ここは残るアスリが、つなげるしかない。

「………いや、どう使うん？」
「ここまで準備したんに、まぁ、わかんないか。あとでアスリにも一緒に教えてあげるよ。」
「待って。今朝さ、いつもよりラリーヤ、布いっぱい持ってきてたじゃん？あれは？あれも、染めるんじゃなくて、もしかして、あれも、その……、なかよし？」
「いいじゃん？あんま先に言うとさ、ティサがまた、やーやーしちゃうから。」
「うっさいわ！！サイテー。全部そういうことだったん？」

黙ってばかりいられなくなったティサが、右手で自らのこめかみを押さえながら、ラリーヤに対抗する。ただ、もはやこの洞窟は全てラリーヤの支配下にあるだけでなく、ティサはラリーヤに約束まで飲まされてしまっている。右手の指先につく薬液をくるくるとこねまわし、怪しい笑みを浮かべながら、ラリーヤは臆することなくティサを前へ前へと押し進めていく。

「ほらほら、だから最後まで内緒だよー。ま、いいからさ、とりあえずごはん食べようよ？　朝から作ってるお肉、ちょっと食べん？　さっき、すっごいいいにおいしてたし！」

やり場のなくなってしまったティサと、何も述べないユニスの一方で、アスリが洞窟にこもって転写の作業をする間も、滝への往路でユニスの語った肉を燻す計画は、順調に進行したのであろう。肉を話題にした瞬間、邪気が抜けていったかのように、一気に声のトーンを明るくしたラリーヤは、草の山から勢いよく腰を持ち上げると、両手の先を地面の方に斜めに向けるようにしながら、自分の声に続くような小走りで、軽やかに洞窟の外へと飛び出していった。

未だに釜を囲むアスリとティサと、洞窟の入り口に佇んだままのユニスは、沈黙だ。アスリの目の前のティサの顔も、振り返ってやや薄暗いユニスの顔も、水に浸してしまった薪のように、ふやけているようで固く、かと言って火がつきそうにもない、とにかく使い物にならない状態である。

２人の心情をあえて問うことは、野暮だろう。いたたまれなくなったアスリは、ゆっくりと立ち上がると、書きっぱなしの革を洞窟に広げたまま、ラリーヤに続いて、外の空気へと向かっていった。

「…………ねぇ、ユニス。」

強い日差しを浴びたアスリが、昼前の時間感覚を取り戻した時であった。洞窟の中のティサの弱々しいユニスへの呼びかけが、小さくアスリの耳に届いた。

「…………何。」

少し間を置き、ユニスが答える。ラリーヤとアスリが去ってから、

ティサが始めたこの会話はは、ユニスだけに向けられたものであって、アスリが聞いて良いはずなどない。しかし、意に反してアスリの足は、ぴたりと止まってしまった。
思わず身をかがめたアスリが、音を立てぬよう静かに見渡す辺りに、地獄耳のラリーヤの姿はない。いや、いた。3日前に4人で昼食を摂った場所の中央に置かれた、薄く平べったい板のようになった木の上に、ラリーヤは大きな葉を並べている。どうやら試食する肉を載せるつもりのようだ。あの位置にいれば、すぐ横で尾を振りながらラリーヤの作業を眺める犬でさえも、ユニスとティサの声は拾えないだろう。
つまり今、2人の会話を聞き取れるのは、洞窟の中の2人と、アスリだけだ。自宅の横の高窓から、ラダンの秘め事を発見した時のように、アスリの耳が洞窟の中の覗き見ならぬ覗き聞きを、良心に反して開始していく。

「………ごめん。」
「なんで？」
「今から、昨日の……あんなん、やんなきゃにさせて。」
「…………いいよ。」
「……ありがと。」

ティサが、謝って、感謝した。2人の間には、アスリとユニスの間にはない、時間がある。時間とは、過去だ。2人が積み重ねてきた過去が、アスリとラリーヤの前にいる時のように、ティサを強気にさせないし、ユニスを凛々しくする。
アスリも、凛々しいユニスのことを、ある程度は知っている。だが、ティサにとって、森の中にいたユニスは、アスリが把握している以上に、もっとずっと凛々しいはずだ。
やり取りが、羨ましい。ユニスは、アスリのものではない。これ

までもティサのものだし、これからもティサのものだ。アスリがユニスに触れる時は、ただティサから借りるだけだ。
ティサが、続く。

「……ねぇ、ホントにいいん？」
「……だから、いいから。」
「そうじゃなくて。」
「ん？」
「初めて……、私で。」

またわずかに、ティサが間を取った。滝の水が落ちる音と、鳥のさえずりが、アスリの耳を補完する。

「………私、ユニスの初めてって聞いたら、なんでかわからんけど、ラリーヤに取られたくなくなっちゃった。ホント、なんでかわからんけど。バカなんかも。………でも、ユニスも、ねぇ、ホントにさ、初めてなんしょ？」

盗み聞きをすることしかできないアスリの鼓動も、アスリの内側から耳をつなぐ。繰り返すが、これは聞いて良い会話ではない。それに聞いたところで、アスリは羨ましくなり、悔しくなり、喉の奥が釣りあげられるようになるだけなのであって、何の得にもならないのだ。そうであるにも関わらず、アスリの聴覚は、いつにも増して研ぎ澄まされていく。

「だから……、いいん？ユニスの初めて、このままだと、私になるよ？私も、初めて、ユニスになるけど……。」

洞窟の中、2人はどう位置しているのだろうか。もしアスリなら、それも3日前にラリーヤから教育を受けた直後のアスリなら、もう

ユニスに直に触れている。

「じゃあ、ティサは、いいん？」
「私は……、ユニスがいい。」

質問への質問返しに、ティサが、鋭く打った。アスリの目や鼻や喉の奥が、脳に向かって1本の糸でたぐいよせられるように、アスリの脊髄を締め上げる。

「ユニスじゃなきゃ、やだ。」

苦しい。これが、アスリが絶対に越えられないし、越えてはならない壁だ。見ないようにして、または見えなかった壁を、今、アスリは音として目にしている。
アスリは、生唾を飲み込むことしかできない。この瞬間に、鼻をならしたり、嗚咽をもらしたりすることは、許されない。
もう、ティサが初めてになることは、とうに決まっている。そして2番目の約束は、アスリだ。だが、ティサのものとなった初めての順番は、もう変わらない。

ここに、ラリーヤによるおせっかいは、一切介在しない。今、ティサは自身の願いを、ユニスだけに改めて表明して、ユニスに覚悟を求めている。

「わかった。」

ユニスが、理解した。ティサが、もう一度、ユニスに問う。

「じゃあ、ユニスは？」

無言だ。静かな時間だ。ここにあるのは、滝と、2番目のアスリだ。

「…………ありがと。」

ティサが、再び感謝した。合意だ。落ち行く水の音に身を隠し、風となったアスリは、滝から上がる水しぶきに目を霞ませ、奥歯をかみしめながら、心の奥深くからこみ上げる思いを平静に置き換えていくしかなかった。

知性は常に、他者に対して振り向ける優しさと親和性が高い。肩を落とし、静かに洞窟前の階段を下りたアスリに、真っ先に近寄ってきたのは、ラリーヤでも犬でもなく、牛たちの中で最も賢い一頭だった。牛からかけられた思いやりを汲み取ったアスリも、自らそちらに進み、先日ユニスが設けた囲いの柵越しに手を伸ばし、大きな黒い背中を撫でてやれば、牛の方も足元の草を食べずに、アスリに横目で何かを語りかけていた。

「アスリー、2人は？」

牛からの癒しを得始めてすぐ、やや離れたところから、アスリに向けてラリーヤの声がかかった。アスリが牛からそちらに目を移せば、ラリーヤは上衣の腹のあたりを前に軽くたくしあげた中に、何かをいくつか入れて運んでいるようである。その奥、すでに場の中央には、大きな葉にくるまれた燻し肉の塊が置かれており、あとは各自が本来の昼食の弁当を携えて、揃って座るのを待つばかりだ。

「まだー。あん中にいるー。」
「まだ来んの？もうなかよし始めちゃった？」

爽やかさを基調としたところに、わずかに変態を混ぜた笑みをラリーヤが浮かべた。今のアスリに、返す言葉は特に見当たらない。
無言で牛と対話を続けるアスリの様子を目にして、ラリーヤも服の中に何かを入れたまま、アスリの方へと進んでくる。ラリーヤは動物的な変態だが、こちらは知性だけでなく、変態を除いてアスリの理想像だ。牛がアスリを放っておかないのに、ラリーヤもアスリ

を放置するわけがない。

「ねぇ、アスリ？」

「何？」

何となく、言語化できない理由で気が乗らないアスリは、１歩先のところに来たラリーヤからの呼びかけに応じはすれど、目は合わせられなかった。代わりに、アスリが目をやったのは、上衣の裾からのぞくラリーヤのかわいらしいへそと、引き締まったくびれに乗る、カインタに由来するのであろう、鮮やかなビーズを通す腰飾りの革ひもだ。当然、今日その腰飾りに、昨日のような何らかの意味を持つ花の印は結び付けられていない。

「アスリ、ユニスのこと、好きなんでしょ？」

「えっ？」

突然、アスリは言葉で殴られた。しかし、その通りだ。さすがにアスリも、ラリーヤの顔を見ない訳にはいかない。

ラリーヤの表情に、変態がいなかった。からかいの道化も、いなかった。今、そこにいるのは、慈悲に満ちた、アスリを受け止め支えようとする、人としての愛だった。

「……でしょ？　わかるよ、見てたら。ティサほどじゃなくても。」

傍から見ていて、明らかであったと聞かされては、アスリも一層言葉に詰まる。いつの、どこの、どの場面で、ラリーヤはアスリの思いを判断したのか。たじろぐアスリが問うよりも早く、柔らかな笑みを伴って、足早にラリーヤがアスリに展開していく。

「やなん？ユニスが初めて、ティサとしちゃうの。」
「…………別に。」
かろうじて、アスリが一言だけ絞り出した。述べた事柄は、理性的には正しい。ただし、本能でどうかを判断するのなら、アスリはわからないし、なぜか鼻の奥が徐々に湿り気を帯びていく。
「素直になんなよ。」
「………………バカ。ティサがあんなにバレバレで、ユニスのこと好きなんに。ラリーヤがお兄ちゃんのこと好きなんと、一緒っしょ？取り上げるわけにいかん。」
もはやアスリに否定の余地もないが、好意を指摘され、そこを起点として話をされては、せっかくのラリーヤの気遣いに対するアスリの返答も、ティサがユニスへの思いに触れる時のように、ぶっきらぼうだ。ただ、ラリーヤには、それすら受け止める釜がある。
「優しいね、アスリ。でもそしたら、アスリは？」
「いいんだよ。私なんか。だってティサにはもう、ユニスしかいないんだよ？私がどう思うかより、ティサがユニスの初めてほしいって気持ちの方が大事。」
「アスリ……、じゃあさ。」
ここで、ラリーヤは抱えている服の裾の中から、１つを取ってアスリに向かって放り投げた。思わずアスリが掴んだそれは、昨日、ラリーヤがイケメンに口移ししたものと同じ、濃い黄色をした、あの果物であった。基調となる母性の上に、からりと晴れ渡る空のような笑顔を乗せて、ラリーヤがアスリに続ける。
「ティサのことは置いといて。アスリの初めては、ユニスにあげた

ら？」

ラリーヤが、正しいことを言った。アスリの視界が、一気に開けていく。

今、改めてアスリが振り返れば、ユニスの初回を請うティサに、アスリは引きずられすぎていた。そのために、アスリはユニスから初めてを得たティサが羨ましかったし、こっそりとユニスから２回目の初めてを取り付ける約束まで交わしてしまった。

しかし、そもそもそれ以前に、アスリは自分自身にとっても初めてであるという確定的予測を、考慮の範疇から外していたのだ。では、アスリの初めての相手は、誰になるべきであって、アスリは誰に初めてを与えたいのか。

ユニスだ。ユニス以外にいない。ユニスにこの身の全てを捧げて、さらけ出して、ユニスの思いのままに扱われ、受け取ってもらうのだ。

滝の水で冷やしていたのであろう、手中に広がりゆく、ひんやりとした果物に触れている感覚とは対照的に、アスリの腹の奥底と、心が、熱くたぎって上気する。ユニスの２番目であっても、アスリにとっては１番最初だ。

「じゃあ、決まりね。まぁ、ティサがダメって言ったら、そん時は――……、また考えよっか。」

果物を握ったまま、ぴくりとも動かずラリーヤを見つめたままのアスリを、ラリーヤが決めた。これでラリーヤが知るはずもない、アスリとユニスの２番目の約束と、ラリーヤからの支援という２本立てがアスリの陣営の構成となり、あとはラリーヤも述べた通り、ティサ次第だ。昨日のラリーヤとイケメンのように、ユニスと１つの肉体としてつながりたいアスリにとって、ラリーヤのアシストは

非常にありがたい。
「……なんか、ありがとう。」
「なんそれ？なんかって、なんなんー？」

ラリーヤが笑い、アスリも晴れた。ティサがユニスと終えた後に、アスリはどうにかして、ユニスを寸借し、ユニスに全てを貸し出すだけだ。
ただ、晴れ渡るアスリの思考には、１点、まだ雲が残っている。目の前に機会があるうちに、この余計な雲は解消しておくべきだろう。

「…………ってかラリーヤ、ティサにもそうだけど、なんでここまで、いろいろしてくれるん？」
「アスリだって、私にいろいろしてくれてるし、してくれたじゃん？」
「少しはそうかもだけど、その……、ラリーヤ、特になかよしはさ、気合い入ってるってか、ティサにも私にも、ユニスにも、すっごい勧めてくんじゃん。あっ、ヘンタイだからか。」
「変態って言われんのは良いけど。」
「良いんだ。」
「いや、この流れで変態はないっしょ？あと、私がえっちなこと、大好きなんはあるけど……。」
ラリーヤの表情に、アスリの雲が、ほんのわずかな間だけ移った。柔らかさに真面目さが加えられたラリーヤは、雲を助言へと換えて、アスリへと送り返していく。
「さっきティサにも言ったけど、絶対良い思い出にしてほしいから。じゃないと初めてなんて、あっという間に持ってかれる。」

経験だ。ただ、重量のある言葉に、ラリーヤの過去がずっしりと敷き詰められていることだけが、大きな音が体中に響くように、アスリにも伝わってくる。問いたい事柄がアスリの脳裏をいくつかよぎる一方で、アスリが続けるべき言葉はどこにもない。だが、ユニスとの初回は、ティサには申し訳ないとは言えども、アスリが精一杯楽しまなければ、ラリーヤに顔を向けられないことは十分に理解できる。

「だから、ユニスが好きなら、ユニスにあげなよ。」

素晴らしい笑顔だ。話しぶりからして、後悔の残る形となってしまったのであろう、ラリーヤのこの笑顔を初めて受け取った人物は、果たして誰なのか。受け取った言葉をアスリが咀嚼する中、ふいにラリーヤはアスリから視線を外した。

「あ！出てきた！」

笑顔のままに、ラリーヤが声をかけた先にアスリが振り向けば、洞窟からそのまま薄暗さを運んできたかのようなユニスとティサが、ようやく階段を下りようとするところである。この２人が後悔なく行えないのであれば、せめてユニスがこれから作る記憶だけでも守るべく、アスリは先に代執行せざるをえないかもしれない。

「どうだった！？」
「………………何が？」

快活なラリーヤの声が、２人に向けて明るく響いた。ユニスは口を挟むことすらできず、ラリーヤに返すのはティサだけだ。

「なかなか来ないから、もうなかよし始まったんかと思った！」
「バカ！！！するわけないっしょ！？」
「でも、これから。」
「うっさい！いいから！わかってるから！その前にごはん食べたいって言ったん、ラリーヤなんだし、食べんでしょ？」
「私は、ちんちん先でもいいよ？」
「ごはんが先！」

この日の昼食、４人が持ち寄った弁当は、燻された肉によって遠く霞んだ。最も心に余裕を残すラリーヤが、火を通した肉のブロックの入った、灰にまみれた大きな葉を紐解けば、肉そのものの持つ香りと、ともに包んだ香草が、口にする前から味わい深い風味となってアスリの鼻孔に広がったのであった。

その肉塊をさらにラリーヤが半分に割ると、中央のあたりは血も

滴っていて、まだ火が通り切っておらず、今も同じように燻し続けているものは、今日の帰りまでは火にかけなければならないようである。ただ、すでに白と桃色の中間の、絶妙な色合いとなった外周部分だけでも、４人が弁当に加えて食べるには多すぎるほどであって、少し離れたところから、犬が尾を振りながら存在感を大きくしていた。

ここからラリーヤがまず４切れを大きく切り出し、早速アスリがつまんだ一口目は、当然絶品だ。この調理法は、必ず母にも教えなければならない。改めて、アスリの弁当は霞む。

ところが、これほど最高の肉を頬張りながら、いつもと同じく愛嬌とともに会話の起点を振りまくのはラリーヤだけで、それをコミュニケーションとして成立させるために応じるのもアスリのみで、ティサもユニスも、無心で肉と弁当を食べ進めているばかりだ。ユニスは早くも弁当を平らげた上に、ラリーヤが客をもてなすように次々切り出す肉を、あっという間に５切れ食し、また次の１枚に手を伸ばしているし、ティサに至っては弁当をほとんど残したまま、肉ばかり４切れも食べている。

大仕事を前にする２人にとっては、これほどの肉をいくら食べても、味はわからないのだろう。なお、ラリーヤは２切れで止め、アスリは１切れ半で限界であった。

「いやー、めっちゃおいしかったね？」

食後、人間が食べるにはもう少し火を通さなければならなかった部分を切り出し、ティサの残した弁当と混ぜ、喜ぶ犬に少しずつ分け与えながら、ラリーヤが再び会話を送った。その顔は肉を切る手元でも、犬に対してでもなく、明らかにティサとユニスの方へと向けられている。今度はアスリでなく、２人が返事をするべきだ。

「………うん。」

大して片付けるものもないのに、そわそわと４人の前に並んでいた葉を１か所に重ねながら、ティサが小さく答えた。ユニスは近くに落ちていた石を拾い上げて、その表面を何やら指で擦って伸ばしている。

「随分元気ないじゃん？まぁ、２人ともあんなにいっぱいお肉食べたんだし、元気ないわけないよね？」

ユニスもティサも答えず、相変わらず落ち着きがないまま、挙動不審で膠着してしまっている。これではアスリも下手に身動きが取れないし、せっかく最高の肉を食べた直後だというのに、周囲の空気があまりにいたたまれない。ユニスと同じように石でも拾い上げたい衝動に駆られたアスリは、救いを求めるようにラリーヤに次を促していった。

「……で、どうするん？これから。」

「そうだね。もうみんなお仕事終わったし、お腹もいっぱいになったからー。あとやんなきゃなんは……、なんだと思う？」

仕事が終わったかの確認を挟まず、終わったと断定するラリーヤの判断は正しい。仮にその段が入れば、ティサは何かを見つけて午後の時間を先送りしようとするかもしれない。そして、続けて何をすべきかを、ラリーヤは問いかけの形式で進めるとして、問う相手をアスリにしたのも正しい。こちらもアスリ以外では、回答が成立しない。返しにくい問題に、アスリが慎重に解を求めていく。

「いや、そんなん、知らんけど。今からユニスとティサ、本当にアレすんなら……。」

「……本当にやんなきゃなんよね？」

思慮を巡らせながらつぶやいたアスリの言葉に、ティサが割って入って、ラリーヤに問いかけた。先ほど洞窟の中で、ティサはユニスとの間に合意まで形成した上で、やはりまだ最後の覚悟が固まらないのだろうか。すぐさまラリーヤが、逸れる恐れのある脇道をふさぎにかかる。

「そうだよ？ティサ、今日はなかよししよーよの印、ちゃんとつけてきたじゃん。」
「バカ！」
「だからさ。やなら、私が。」
「いいから！私がやるから！」
「じゃあティサ、最初に何やんなきゃかなー？」

回答権が、アスリからティサへと移った。安堵のアスリは、ひとまず傍観だ。

「はっ！？知らんし、そんなん！」
「そうなん？私がせっかく昨日、最初から最後まで全部、ぜーんぶ、見せてあげたんにー？」
「っ………。」

器代わりに使った葉の端を丸めながら、詰まってしまったティサを尻目に、犬に肉を与え終えたラリーヤは立ち上がって、ティサから目を離さないまま、滝から流れる小川へと向かっていく。すでにラリーヤの表情は完全に性に染まっていて、まだ服を1枚も脱いでいないというのに、いやらしさが体中から染み出してしまっている。

「ほらー、何かなー？もっかい教えてあげないと、わからんー？」

浅瀬の前でしゃがみ、犬に舐められた指を水で流しながら、ラリーヤがティサをからかうような口調で続けた。ここでティサも何かをひらめいたのか、上目遣いでラリーヤを捉えて、怒りを伴っていないにらみを利かせて、続けた。

「だから、今朝あんなに布持ってきたんか。じゃあ今から昨日みたく、アスリの槍借りて、そこに立てんだね？」

「あれはさ、ロマドウの人らって、あれ張ってから脱ぐんしょ？あーゆーのあった方が、ちょっとは自然かなって。今日はもう私らしかいないんだし、持ってきたんは、また別。」

ティサの丸める葉が、さらに折りたたまれた。おそらくティサは今、全体を遅延させるために布の三角柱を建てる作業を見出したはずだ。だが、ラリーヤはこれ以上の遠回りを許さない。それでもティサは、昨日のもうひと手間を手札にして、時間を使おうとする。

「じゃあ、あの黄色いの食べるん？」

「それでもいいけど、ちゃんと昨日の私みたく、ユニスとちゅっちゅしながら、大丈夫そ？ま、もうさっき採ってきといたから、今食べるなら、すぐ切ってあげるよ？このまま普通にちゅっちゅしたら、お肉の味になっちゃうし。」

デザートの果物の手も、ティサはふさがれた。むしろ、道としては開け放たれているが、ティサは進めない。

３日前から全て先回りをしているラリーヤは、今日も先見の明を保ち続けていて、先ほど話ついでにアスリに投げてよこした濃い黄色の果物も、実のところはティサに対しての布石でしかないのだ。果物を拒否し、その前の布を張ることも否定されれば、昨日との状況上の共通点として、残るものは何か。

手詰まりとなったティサに向けて、勝ち誇ったように顎を少し斜め上へと向けたラリーヤが、すらりと立ち上がっていく。ラリーヤが、来る。

直後に、ラリーヤが腰布の結び目を、一気にほどいていった。まっすぐに腰布が落下するのとともに、あの一直線が、アスリの視界に飛び込んできた。

「ちょっと！！！」

ティサが叫ぶ。まぶしい割れ目に、アスリは一瞬で目がくらまされてしまったにも関わらず、ラリーヤから一切目が離せない。昨日も見たばかりだというのに、どうしてこれほどまでにラリーヤの縦筋は美しく、いやらしいのか。

勢いに任せて、ラリーヤは上衣も脱いで、高く放り投げる。今度は、２つの大きな乳輪と、乳房だ。いやらしい。

唐突に現れたラリーヤの全裸は、ティサへの最後通牒に違いない。脱衣によって乱れた髪を流すように、ラリーヤが頭を後ろに倒して首を振りながら、勝利が確実の攻勢をティサにかける。

「……とりあえずさ、まずは体キレイにしようよ？」

「なんで！？」
「そんなん、おまんこやお尻に何かついてたら、嫌だからじゃん？　それとも、ティサもユニスも、ちょっと臭い方が好き？」
「はっ！？」
「バカ！！嫌だし！！そうじゃなくて、私が言いたいんは、なんでラリーヤが裸になってんってことだから！」
「いや、もうさ、ティサやらんしょ？私がユニス、食べちゃうって。」
「ぐっ………！！じゃあ、私にも今から脱げって言うん！？」

このまま一糸まとわないラリーヤも、アスリは眼中に置いておきたいが、ここは涙が混じるような声を出したティサも、視界から外す訳にいかない。引っかかったような音は上げたティサは、真っ赤な顔に目を潤ませている。アスリが合わせて見たユニスはと言えば、こちらはティサへの共感と相反する期待を混ぜ合わせているのか、凛々しさと性が絶妙に両立した表情である。
これら3人から今、アスリは唯一独立している。しかし、味方がいないにも関わらず圧倒的な強者となった早くも丸出しの変態も、着衣であるのに羞恥によって蹂躙されている弱い2人のいずれも、物理的でない性的な意味で、アスリに非常に近い。右も左も燃え盛る中、現に歪むアスリの腹部の内側の下側奥は、アスリがいつでもどちらかに加わって、ともに激しい炎をまとえるよう、次から次へと油を産出し続けている。
ところが、ここで究極の変態がティサに続けたのは、脱衣の強制ではなかった。豊満な乳房を揺らしながら、ラリーヤは近くに置き

やっていた荷物の元へと向かうと、ティサが天幕としての利用を予想した、今朝持参した布を拾い上げて、まず1枚をティサへと投げやったのであった。

「はい、ティサ。」
「……は？」

今にも泣きだしそうなティサが、受け取った布を手にしながら、怪訝な声でラリーヤに意思を問いかけた。爆発的な肉体からは想像できない、思いやりへと転調したラリーヤは、どうすることもできないティサに情けをかけていく。

「……体、流して来たら、それに着替えなよ。巻いてくれれば良いから。今着てんの、お肉の煙の臭い、結構ついちゃってるし。初めてなかよしすんだから、いいにおいの方がいいでしょ？」
「えっ……？」
「恥ずかしいんしょ？じゃないなら、別に私みたく、ここで裸になっても良いけど。」
「いやいや！！わかったから！！わかったから！！体洗って、これ着てくれれば良いんしょ！？」

改めてアスリは、ラリーヤのことが恐ろしくなった。窮地に追いやった相手をそのまま潰すのは容易だが、あえて逃げ道を1本残してやれば、すがる相手は絶対的にその1本へと走りこんでいくこととなる。ただし、逃げ道そのものは、今であればラリーヤが用意したものだ。これからラリーヤが、続く1本の逃げ道をどこにつなげようとしているのか、アスリはまだ一切予測できないが、その1本はラリーヤの有する、剃り上げられた縦筋であって、全てはラリーヤの手中ならぬ、股の間だ。
アスリが働かせた何らかの直感は、実際にラリーヤが持ち上げた

口角にも、例の悪さとなって現われている。裸で鋭利なラリーヤは、ユニスにも布を放り投げていく。
「ほら、ユニスも。あ、ユニスはここで綺麗にしようね？」
「えっ！」
「なんでだよ！？俺は！？」
「ラリーヤ、私のいない間に、ユニスのおちんちん昨日みたく大人と子どもにして、遊ぼうとしてんしょ！？」
　驚く反応はティィサの方が早かったし、そのあともティィサが早い。頭の切れる変態は、ティィサがかけてきた疑念を理で払拭する。
「それも良いね。でも、ユニスはここにいないと、ティサ夕方まで戻ってこなくなっちゃうかもじゃん？もたもたしてたら、ティサ言った通り、ユニスのちんちんで遊んでー、先に食べちゃおっかなー？アスリも食べちゃってるかもよー？」
「ちょっと！！」
「サイテー！もうわかったから！すぐ洗ってくるから！ラリーヤも、あとアスリも、私戻ってくるまで、絶対ユニスに触っちゃダメだかんね！」
「はいはーい、わかったから。」
「あと、おちんちん見んのも触んのも禁止だから！！」
　捨て台詞のように強く置き土産の言葉を残したティィサは、ここからは迅速だった。残された時間の少ないティィサは、そのままラリーヤから受け取った布だけを手にすると、南西に流れる川に沿って、身を清めに走っていった。
　やはり、ラリーヤの目的に向けた行動力と人を動かす力には、アスリも目を見張るものがある。一体ラリーヤは今日のこの場の構成を、何層まで想定していたのだろうか。それとも流れに全て身を任

せながら、常に優良手を選択し続けているだけなのだろうか。いずれにしても、アスリはここまでうまく場を切り盛りできないし、ティサは見るな、触るなとは要請していたが、天晴なラリーヤへの褒賞として、昨日も目にしたユニスの槍を眺めるくらいはしても、問題はないだろう。

「はい。あとこれ、アスリの分。」

感服に続けて良からぬ策まで練り始めたアスリの元に、その天才的変態から、ティサとユニスに向けられたのと同じように、丸められた布が飛ばされた。当然、渡された以上、アスリも受け取る。

「えっ……？」

突如、ラリーヤから渡された布を手にして、アスリに生じたのは、疑問だ。なぜアスリの分まで、着替えた後に身に着けるための布が用意されているのか。

「なんで？私も？」
「いや、私のもあるし、いいじゃん。今日はみんなで体キレイにして、おんなじの着ようよ？」

今、ラリーヤが述べたことには、先ほどティサに向けたような、論理が一切ない。そこに代わりにあるのは、アスリが見通しきれない、大いなる意図だ。

「……ね？」

その意図が、目に見える笑顔となってラリーヤから向けられた瞬間、アスリは察知した。アスリは今、傍観者から当事者へ、立場を

変えようとしている。降ってわいた驚愕に、アスリの脳が最大限の速度で目の前の状況を整理する。

そもそも、この布を身に着ける理由は、燻した肉の臭いを水に流した上で、煙にまみれた衣服をもう一度着ないようにするためだ。では、なぜ水浴びをした上に着替えるのかと言えば、それはユニスとティサが、初めてつながるためである。したがって、ユニスとティサの2人分の衣服に関しては、2人の初回がうまく取りなせるようにするための、ラリーヤがあらかじめ準備した計らいであり、気遣いだ。この気遣い自体は、初めての記憶を良いものにしてもらいたいと願う、詳細は明らかでないラリーヤの経験によるものであって、まずここまでは全て原因と行動の因果が一貫している。

その上で、アスリの分と、ラリーヤの分の布は、何を意味するか。たしかに、午前中洞窟の中で過ごしたアスリは、それほど肉や煙の臭いを漂わせてはいないにしても、肉体そのものの清潔さに関しては、アスリ自身、自信がない。また、すでにラリーヤは全裸であり、つくづくアスリが羨ましくなるほどに美しいが、その1本筋を広げた時、同じくどれほど完璧であるかは、仮にもラリーヤに問えば否定するであろうが、不透明だ。

故に、水浴びは理に適っている。しかし、このタイミングでユニスやティサと等しく動けば、その先に待つのは何になるか。

ラリーヤ本人だ。

答えは、明白だ。ラリーヤは今日これから、ティサが終えれば、アスリにも初めての交渉の場を設けようとしているのだ。それだけではない。おそらくそのあとに控えるのは、彼方に初回を終えた、ラリーヤ本人だ。

大変なことになった。3日前、アスリはユニスから2番目の初めてを頂戴する約束を、紛れもなく取り付けた。そして、つい先ほどの昼食前、ラリーヤはアスリがユニスに向ける好意を見破った上で、

アスリの初めてをユニスに与えるべきだと進言し、アスリもそれに同調した。ただ、アスリもまさかそれを、今日実行しようなどとは思ってもみなかったし、ユニスとティサが無事に執り行って、数日なのか、数週間なのか、日を置くものとばかり考えていた。

それをラリーヤは、今日で2人分の初めてを一気に経過させて、さらに自分までユニスを捕食しようとしている。先ほどラリーヤも考慮に加えていたように、ここにはまだティサの意思確認もなければ許可もなく、ユニスが初めてを終えてから、2回目をアスリに、場合によっては3回目をラリーヤに譲ってくれるのかは、定かではない。ただ、ラリーヤの渡したこの布は、流動的な状況の中で生じた千載一遇の機会に向けて、ラリーヤがアスリに求める覚悟に他ならない。

アスリの心臓が、沸騰する。ティサが終えれば、アスリのあの小さな泉に、愛するユニスが、固く、強くなって、進んでくる。今なら、ティサがなぜあれほど渋っていたのか、アスリは痛いほどに分かる。

緊張、羞恥、興奮、悦び、再び緊張、猛烈な羞恥、見てもらえる、つながれる、愛、愛、愛、愛、愛、まだほかにもある。それらが全て、喉の奥をつんざくような、涙をこらえるような感覚として、待ち望む泉からの湧出となって、熱い中央の肉粒の疼きとなって、卒倒しそうなほどに、アスリの性を真っ赤に溶けた鉄へと戻そうとする。

顔全体の7割程度が変態と悪さである一方、残りが優しさと慈悲に溢れ、瞳から直接アスリに訴えかけてくるようであるラリーヤは、ティサにしたように言葉で畳みかけることはせず、アスリが考えをまとめきるのを、黙って待っている。相手によって取り口を変えて、最も効果的なやり取りを選択するのであるから、まだ4人で日々過ごすようになって、ふた月と少しであるというのに、ラリーヤは本

当にティサのことをわかっているし、アスリのこともわかっている。

「…………ユニス？」

わずかな時間で、これから生じうる未来に着地したアスリは、ここであえてラリーヤを外し、ユニスへと顔を向け、声をかけた。手持無沙汰を補う適当な石に加えて、布も手にするユニスが、アスリの目を捉える。

直後に、ユニスは伏し目になった。あの、伏し目だ。

ユニスも、今のラリーヤの振る舞いを通して、理解したのだ。2番目の約束は、今もアスリとユニスの間に、強固に保持され続けている。これ以上、アスリは語らず、ユニスも応じずとも、アスリはユニスと意識をすり合わせられたのだから、十分だろう。

流れ落ちる滝の水の音は、また時間を意味する。アスリとユニスが会話のないやりとりを終えたのをラリーヤは認識すると、次を急かす。

「じゃあ、アスリもここで流す？」

「えっ……、ちょっと！それは無理！すぐ洗ってくるから！」

火照る肉体に1枚の布を携えたアスリは、約束の履行の可能性に向けて、ティサの走っていった方へと駆け出した。滝の上から、水しぶきを乗せるようにして強く吹いた風は、いつもと変わりないはずであるのに、なぜか騒がしいざわめきをアスリの耳元に届けていく。

まもなく、ティサが始まる。アスリも、次に備える。

滝から川に沿い下り始めてまもなく、大きく地面に段差ができた場所まで、アスリがやってきた時であった。近くに立つ木の枝に掛けられた、手にするものと同じ布が、小走りのアスリの視界に入ってきた。
アスリが耳をすますと、直接目にすることのできない位置から、不規則に水が跳ねる音が聞こえてくる。どうやらティサは、あの段差と周りに生い茂る藪によって死角となるところで、水浴びをしているようである。
もっと時間があれば、少しはアスリもティサの状況をうかがって良いかもしれないが、ユニスがアスリを盗み見した過去を告白して、ティサから激怒されていた以上、むやみにティサを覗くべきではないし、そもそも今はそれどころではない。ほぼ確実に全裸であろうティサを大きく迂回したアスリは、もっと先まで進んで、身を隠すものもなければアスリの視界を遮るものもない、流れを挟んで背の低い草がただひたすらに広がっている川辺で、まず履物を、次に上衣を、最後に腰布を脱いでいった。

川上から吹き抜け、優しくアスリの体を撫でる風が、自然の前にさらけ出されたアスリの性器に突き刺さる。今日は裸になるだけで、ただただアスリは苦しい。身にかけるひんやりとした川の水、一滴一滴が、アスリを誘惑するかのようにくすぐっていく。首筋に、小さな胸、脇、背、腹、手早く、かつ丁寧にアスリを清める自らの指先は、薄い毛の生えた、割れ目と呼べないはみ出しへと向かう。
生まれてからこれまで、ともに成長してきた、やや濃い色合いの大きな肉ひだは潤って、内側から外側にかけて、熱い疼きをアスリに伝える。そのまま自然と、アスリが両足を肩幅ほどに広げて、昨

日、ラリーヤが刃を手にしてユニスの皮膚を伸ばしたように、近い位置の肉を精一杯引き伸ばせば、ユニスの皮槍と同じく、蝶も羽を伸ばす。続いて、人差し指と中指で挟んで持ち上げ、いわば大人の形をとった大粒も、ユニスの中身よりは小さいとは言え、同様に輝いている。

アスリにとって、重大なコンプレックスだ。それを、かねてより遠目に眺めて、アスリがひたる快楽を真似てしまったと、３日前のラリーヤによる授業を終えた後の帰り道、ユニスは自供した。

つまり愛おしいユニスは、アスリの肉体に、ラリーヤよりもティサよりも、もっとずっと小さな胸に、そして１人の人間の同じ体に属するは思えない、グロテスクなこの性器に興奮し、許されない行為を自ら成したのだ。思えば、あのまだ穏やかだった頃の南の川辺で、ユニスが牛に襲い掛かろうとする獣をアスリの前で初めて射抜き、また初めて伏し目を見せた位置は、アスリからそれなりに離れていた。

次は、もっと近くで、見てもらうべきだ。アスリの初めての相手は、アスリに欲情した、ユニスにこそふさわしい。

剥き出しにしたままの一点が、寂しい。そこに、少しずつかけやる川の水が、嘆かわしい。

これ以上は限界だ。それに、今はのんびりしているわけにもいかない。未だに昨日のラリーヤによる我慢の制限が有効なアスリは、１点への徹底した洗浄を諦めると、悔しいほどに旺盛な性欲をこらえながら、川の中でしゃがんで下半身を全て水に浸し、左右の肉ひだを１枚ずつに、尻、足を全て洗い流して、水浴びを終えた。

ところが、この後の問題も大きかった。ラリーヤの持たせてくれ

た布を身に着ける前に、その布で濡れた苦しい体をついでに拭いてしまおうと、アスリが布を広げると、この布の面積は絶妙に中途半端なのである。
たしかに、この布は体を拭くのには十分だし、急ぐ今日は洗髪まで手が回らなかったものの、仮にアスリの長い髪を濡らしたとしても、全てしっかりと拭きあげられるだろう。だが、これをラリーヤが言った通りに体に巻きつけるとして、横にすればアスリの恥ずかしい股間は丸出しだし、股を隠せば胸が丸出しで、両方隠そうとすれば、乳首か、はみ出る肉が外に出てしまう。では、縦にすればどうかと言えば、一応両方は隠れるものの、今度は体を1周する長さがギリギリで、結び目を前にすれば股が見え、後ろにすれば尻が見えてしまう。
どうにかアスリは結び目を脇に作って、体の横にスリットを作る形を取ったが、そもそも、この布は縦横以前に正方形に近く、どうやっても上下隠せば、腰丈はかなりきわどい。現に、布以外の裸に、唯一身に着けるアスリの腰紐は、横に作った隙間からちらちらと見えているし、不用意にしゃがめば、ユニスに見てもらう以前に、誰の目にもアスリの事実が見えてしまいそうである。
今更ながらアスリは、布をラリーヤから受け取った時点で、一度広げなかったことを後悔した。それでも今は、あまり油を売ってはいられない。この布を着たままではロマドウに帰れないアスリは、また後ほど元々着ていた服に着替えることになることを予見しつつ、いつになく適当な仕事をしたラリーヤを小さく恨みながら、再び小走りで滝の元へと戻っていった。途中、例の段差の近く、木の枝に布はもはやなく、そこにティサの気配もなかった。
あまりに短い布丈のせいで、無防備な下半身のアスリが、滝の手前、まだ誰も見えないところで一度立ち止まり、泉から垂れてしまった湧水をすくいとって、ごまかしていると、滝の水が落ちる音に

加えて、何やらティサの騒ぐような声が耳に入ってきた。やはりティサは先に水浴びを終えて、もう到着しているようだ。
急ぎ滝まで駆けていったアスリが目にしたのは、広げた布を手にして必死に何かを訴える、着替えていないままのティサと、乳も股間も丸出しにしたまま、短い布を背に羽織り喉元で軽く結んで、両手を腰に当てるラリーヤである。どうやらラリーヤの意図した布の使い方は、ラリーヤの今の姿が正解なのだろうが、これではハッきり言って衣服として何も機能していないに等しい。ティサとしても、この布を身に着けることは適わなかったようだし、今のラリーヤの着方もアスリは真似できない。
なお、その奥で早くも危ない目つきをしているユニスは、布を三角形になるように折った上に、それを皮の集まる場所に固く縛り付けていて、卑怯なことにも全てが見えないようにしている。おしげもなく胸を放ち、1か所しか隠さないのであれば、あの手が使えるとは言えども、もうユニスはこの場の3人に何もかも見せているのだから、ラリーヤはユニスからは布を没収して、恥ずかしがりのティサに恵んでやるべきだっただろう。それともユニスは、裸に布1枚を加えたことで、なぜかいやらしさが余計に引き立っているラリーヤを前にして、腫れてしまった槍を布で押さえつけておく必要があるのだろうか。

「だから、こんなん、丸見えになってんじゃん！！無理っしょ！！」
「じゃあもう、ユニス食べちゃうよ？いいんだね？あ、アスリー！ティサが、着替えてくんなくて…、ってか、アスリも変な着方してるし。」
「いや、むしろラリーヤそれ、着てる意味ないっしょ。」
「あっ……！それか！！」

堂々巡りの中、ラリーヤが戻ってきたアスリに会話を振り向けたのと同時に、アスリを目にしたティサも、アスリの編み出した布の

身に着け方に、ひらめきを得たようだ。ただ、この着方はアスリの控えめな胸をもってして可能なのであって、ティサほどの大きさであれば、いくら体の横にスリットの位置がくるようにしても、結び目を作ることは難しいかもしれない。それでもラリーヤは、身動きの取れなかったティサを、この機に一気に動かしにかかる。

「まぁ、もうなんでもいいからさ。じゃあユニス、ちんちん出して、むきむきしよっか？」
「んっ！！」
「わかったから！！着てくればいいんしょ！！あとちょっとだけ、待ってよ！」
「あ！待ってティサ！そっち行かんで、もうこっからは、あん中！」

忙しいティサがまた川に沿って下ろうと、布を手にして駆け出そうとしたところで、ラリーヤが逃げかけの背に指示をかけやった。ラリーヤの指さす先は、あの洞窟だ。

「えっ、あっち？」
「いいから。で、脱いだら、脱いだ服、外に全部投げて。着てて良いんは、その布と、なかよししよーよの印だけだかんね？」
「……は？」
「今から３０ね？３０数え終わるまでに全部脱げんかったら、ユニスのちんちんは没収。」
「おっ！？」
「ちょっと！？！？何！？どゆこと！？」

ずっと赤らんだままのティサの顔が、やや青ざめたようにアスリの目に映る。没収と耳にして、ユニスも股間に手を置いた。いやらしい全身に冷静な声のラリーヤは、極めて強硬な策を実行に移していく。

「いくよ？　いーち！　にーい！　さーん！」
「はっ！？　ちょっと待って！　待ってってば！！」
もうティサは、体と頭のどちらも、ラリーヤに追いついていない。
一度よろめき、足をくじきそうになりながらも、どうにか体勢を保ったティサは、犬に追いかけられた時の牛のように、猛然と階段を駆け上って、洞窟の中へと進んでいった。１つずつ数を数え上げいくラリーヤは今の値を告げつつ、道すがら次々と何かを拾いながら、まさに犬の役割を果たして、ティサを追い立て、追尾する。
「……はーち！　きゅーう！　じゅーう！　ほら、ユニスもこっちにおいで！」
洞窟の前にたどり着いたラリーヤから、ユニスにも声がかかった。水浴びをしたばかりであるはずなのに、いつもより随分と汗ばんでいるユニスは、アスリに一言、何か目で語りかけ、近くで伏せっている本物の犬にも同じく視線を送ると、階段へと向かっていった。
今のユニスの無言の意味は、犬には見張りの継続であって、アスリには来いということだろう。もしそうでなかったとしても、事態が動き出した中、アスリもついていかない訳にはいかない。
「……じゅーはち！　じゅーきゅー！　にじゅー！」
ユニスもアスリも洞窟の前に集結する頃には、ラリーヤが残す数も１０を切っていた。ちょうど、履物が１つずつ続いて洞窟の外へと放り出され、ユニスが首尾よく受け止める。
「ちょっと！　みんな絶対こっち見ないで！！」
「にじゅーいーち！　にじゅーにーい！　にじゅーさーん！」

ティサの焦りが、大きく響く。ラリーヤは構わず数を増やすが、3人ともティサの意思は尊重し、洞窟から一歩下がって、入口だけを見つめる。

「にじゅーしーい！にじゅーごーお！」

丸められた上衣が出てくる。手を伸ばしてティサの上衣を掴んだユニスに向けて、ラリーヤが今の数を伝えながら、ユニスの足下に指をさした。その意味の理解が一瞬早かったアスリが、代わってユニスの履物の紐をほどくと、ユニスもラリーヤとアスリの意図を汲んで、急いで履物を脱ぎだした。

「にじゅーろーく！にじゅーなーな！」

ティサの腰布が、飛び出した。いよいよ、ティサはこの中で全裸だ。ラリーヤはユニスが受け取ったティサの衣服を、次々と回収していく。

「にじゅーはーち！」
「待って待って待って待って！！！」
「にじゅーきゅーう！！！」
「待って待って待ってってってー！！まだ！！！まだ！！！」

ティサが急ぐ。３０が、終わる。

「さんじゅっ！！終わり！よしっ！！ユニス！！行けー！！」
「うわっ！！ラリーヤ！！」
「ちょっぉおおお！！！ダメぇえええええええ！！！！」

介入

最後の数に到達し、ユニスの背はラリーヤによって、洞窟の中へと強く押し込まれた。ティサが叫び、終わった。

平穏が戻る。明るい外から、アスリの目にする洞窟の入り口は、中にたき火の明かりがあるとは言えど薄暗い。加えて、アスリが今いる位置の角度からは、２人がどう向き合っているのかもわからないし、そもそもティサが狭い布を身に着けるまで間に合ったのかも不明だ。

アスリが待つ。ラリーヤも、何も騒ぎ立てずに待つ。大きな黒い蝶が１羽、ユニスの脱ぎ残した履物の上へと舞い降りて、待つ。

「…………………ティサ。」

ユニスの声が、アスリに小さく届いた。２人に動きはあったのだろうか。ティサもユニスも、裸足になってしまったせいか、アスリの耳に入ってくるのは足音ではなく、滝の音だけだ。

また、平穏だ。ティサがあれほど遅らせようとしていた時間は、今になってやっと遅くなり、アスリはただじっと、ラリーヤと洞窟の入り口を見つめて、立ち尽くしている。

ユニスが洞窟に入り、どれほど経っただろう。６０かもしれないし、１２０かもしれないし、それよりもっとかもしれないが、ラリーヤが数え終えて以降、アスリは数えていなかったのだから、その時間は無限に値する。

思わずアスリが、ラリーヤの顔色をうかがうと、ラリーヤから返ってきたのは、明らかな意図のある笑みであった。先ほどのユニスの無言と同じく、今のラリーヤもまた、アスリに向けて言葉抜きに語っている。意を介したアスリは、静かにラリーヤに向けてうなずくと、ラリーヤに中身が見えてしまわないよう、短い布の裾を一度下方へと引きやってから、そっと洞窟の入り口に近づいてしゃがみこみ、少しずつ薄暗がりをのぞきこんでいった。

一昨日集めた草の山の、毛皮を載せたところの淵に、ティサとユニスが距離を取って腰かけていた。洞窟の入り口側から見て手前側のティサは、体の前面に布を広げるように抱きかかえ、ぴったりと両足を閉じて縮こまり、両手で顔全体を押さえていて、姿そのものが羞恥だ。結局、アスリのように布を胴全体に巻き付けるのは、間に合わなかったのだ。一方、その奥のユニスもまた、体を前に倒し両手を合わせ、読めもしない文字が控える壁側下方を、じっと見つめている。

2人の体央が向く先は、それぞれ斜めに洞窟の外と内で、ティサとユニスが共通して認識しているであろう気まずさは、外からのぞいているだけのアスリにまで、じっとりと広がってきている。先ほどアスリが体を流していた時には、たしかに手元に性が溢れていたはずだが、今、ここに性は乏しい。残念ながら昼食前にティサがユニスと形成した合意は、2人が噛みしめているであろう、あまりに強い羞恥によって履行が困難なようだ。

気になって見てみたのは良いものの、早々にいたたまれなくなったアスリの背後、上方には、ラリーヤの気配も加わる。わざわざ手をかけて、渋るティサと意気地なしのユニスをここまで取りなしたラリーヤは、この現況を目にし、何を思っているのだろうか。

また、滝の音が優勢になった。牛のあくびが、階段の下からアスリに届く。

その時ティサが、両手から顔を離して、洞窟の外へと視線を向けた。ティサの両目が、大きく見開かれる。

「ちょっと！！！2人！！！」

「……バレたか。」

弱る中にありながらも厳しいティサの一声に、ラリーヤは即座に観念し、洞窟の中へと投降した。ここはアスリも、ラリーヤに続くしかない。

「バカ！！！何見てるん！？！？ラリーヤはヘンタイでも、アスリまで！！」

「ごめん。なんていうか、ちょっと気になっちゃって。」

「ごめんて。いやでも、バカって言いたいんは私。なんでティサもユニスも、何もしないん？」

「はっ！？」

「俺……！」

「いや、そんなん……、見られてたらできんし！！」

アスリは理屈の通らない言い訳しか述べられなかったが、謝罪からの反転攻勢は、さすがラリーヤだ。それに対してティサもまた、条件を追加して回避を試みる。しかし、ラリーヤも手抜かりなく、主犯格のティサを責め立てにかかる。

「無理っしょ？見てなくても？だって今、2人ともじーっとしてて、なーんもできんかったじゃん？これじゃせっかく私昨日見せたんに、ティサ約束守れんね？」

「守れるし！！」

当てのないことしか口にしないティサを尻目に、ラリーヤはユニスの方へとまっすぐ向かっていく。大きくいやらしいラリーヤの尻は、どうしようもないティサを戒めるように引き締まっている。

「まぁティサ、いいからさ。とりあえず、ユニスは立って？」
「えっ？俺？」
「ちょっと！！ラリーヤ！！」
「いいから！ユニス立って。」

ティサも制されてしまうほどに、やや重みのあるラリーヤの声には、ユニスも応じざるを得ない。ユニスはゆっくり立ち上がって、ティサとアスリに体を向けると、ラリーヤはその真後ろで腰を落とし、閉じた両膝を地面へとつけていった。

直後に、ユニスが唯一身に着けていた布が、ラリーヤによって真下に引き下げられた。ユニスもすぐに反応して布を掴もうとするが、一流の猟師をもってしても、超一流の変態の手筋には間に合わない。

「うわっ！！！！」
「ちょっとラリーヤ！！！！」

驚いたユニスの声に、ティサも続く。それでもユニスは、アスリが皮を見届ける間もなく、両手で局部を覆い隠す。

だが、ラリーヤも手厳しい。さらにラリーヤは、ユニスの尻に向けて何らかの攻撃を実行したのだろう。

「バカ！！！ヤメロ！！！ケツ！！！！」

慌てたユニスが両手を真後ろに回し、隠していたところを前に突き出すと、待ち構えていたラリーヤは、ユニスの後ろ手を素手で捕

縛してしまった。これでもユニスはまだ諦めず、太ももを交互に持ち上げたり、腰を後ろに引いたりして、どうにか局部を隠そうとしているが、前に飛び出している以上、当然洞窟に現れるのは、アスリがどれだけ見ても飽き足らない、愛する人の男子だ。

「バカ！！！ラリーヤ！！！」
「おちんちん！！」

アスリが声を弾ませる。ところが、ユニスの動きに合わせて上下に揺れるユニスの1点は、昨日や3日前と作りは同じでありながら、明らかに異なっていた。

「……え？今日ちっちゃくない？」

衝動的にアスリは、目の前の事実を口に出してしまった。今日のユニスの槍は、小さい上に芯がなく、上向きの時には皮越しに見えるはずの段差も緩やかで、皮と中身が全て一体となって、色濃く固まり縮み上がっており、ユニスが動きを止めれば、自信なさげに下を向いてしまっている。また、背後に控える袋も、しわを作ってせり上がり、守りに入っているかのようである。
一方、昨日と変わらないのは、付け根の薄毛であり、その上にラリーヤがぐるりと一周させて作った髪紐の結び目も健在で、今日の小さな、まさに少年のようなユニスに実に似合っている。ユニスは体のこの位置に、皮で覆った1本と2玉をくるむ袋を持って生まれてきたのだから、ユニスは少年であって、いずれ男になるはずだ。
しかし、長い髪にかわいらしい顔つきは、女子さながらであって、当初はアスリもその声を耳にするまでユニスを女子だと考えていたし、数少ない男子の証拠すら、本来は長い女性の髪を留めるための紐で装われているのだから、今のユニスは2つの性を伴っているのに等しい。

なんとアンバランスで、かわいらしいのだろう。アスリはユニスをもっと女性らしくもしてみたいし、反対に昨日ラリーヤがそうしたように、あの先端に余る皮を思いきり引き伸ばして、刃を手に大人の男にすると脅してもみたい。

「ホントだ！緊張してるん？やっぱり子どもちんちんだね。」
「うっさい！！！おい！！！見んな！！ヤメロ！！！」
「こら！あんまり動くと、お尻ペンペンだよ？それとも今日はちんちんの先っちょ切って、大人のおちんぽにする？」
「ヤメロ！！！」

ユニスの腰側からのぞきこんだラリーヤも、見かけに関してはアスリと同じ判定を槍に対して下し、続けてアスリのポイントを勝手に押さえるかのようにユニスを諌めた。ここまで言われてはユニスもこれ以上動くことはできず、ユニスは頭も槍もうつむきにさせて、やっと沈静化した。その反面、ただ考えていただけのことを、目の前で口に出されたアスリの脳は、ユニスに代わって暴れて震え、本能によって辺り一面が侵食されていった。

この時点ですでに、アスリは自分を見失いかけている。下向きの柔らかそうな槍に触れてみたくて仕方ないアスリが、ついユニスの方へと足を進めかけた、その時だった。

「ほら！いいから、次ティサ！」
「…………え？」

ラリーヤから、黙って置き去りになったままのティサへと、矢が放たれた。ティサも呼応し、アスリの理性も、この洞窟の主題へと立ち返る。ずっとユニスの性器を見ていたいと訴える本能をなだめ、アスリがどうにかティサへと視線を移せば、ティサは下向きのユニスのように、体全体を前に倒して固く縮み上がらせたままである。

まさに矢継ぎ早に、ラリーヤが次の矢を放つ。

「ティサもぬぎぬぎするよ？」

「えっ！」
「え、じゃないっしょ。もう私もユニスも裸なんだから、ティサ脱げんなら、マジでユニスのちんちん食べちゃうよ？」
「ダメ！！！」

否定の一言を強く発しながら、ティサは両手で顔を覆ってしまった。今のラリーヤの発言は、直前にユニスにも皮を切ると言ったのと同じく、ティサに対しての揺さぶりだろう。究極の変態でありながら、アスリのように少しでも気を抜くと本能に支配されてしまうこともなく、一貫して理性によって欲求を統御するラリーヤであれば、いずれユニスを捕食する心づもりはあれども、自ら初めての交わりの重要性を説き、お節介とも思えるほどのアシストをしてきた以上、必ずティサの思いを尊重するに違いなく、言葉そのものの意味を字面通りに受け取るべきではない。

そうは言えども、その究極の変態が対峙するのもまた、煮詰めすぎてしまったスープの具のように凝固している、羞恥心の塊だ。ラリーヤによる実演を見た上で、今日である明日に先送りし、その今日ですら躊躇に躊躇を重ねるティサから、残る1枚の布を剥ぎ取るには、アスリの思いつく限り、ユニスにラリーヤが行ったような、実力行使以外に手段はない。では、嫌がるティサを裸にするとして、ラリーヤはすでにユニスを捕らえて手が埋まっているのであるから、ティサを脱がしにかかるのは、つまるところアスリ以外にいないことになる。

まもなくラリーヤからアスリには、ティサの取扱いに関して、依頼がかかるだろう。果たして、この貝のように身を閉ざしてしまっているティサをこじあけて、丸裸にすることなど、アスリに可能な

のだろうか。
ふと、アスリの脳裏をよぎったのは、たった3日前の夕焼けの尋問だ。3日前のあの時、ユニスに引きずられて矢面に立たされたのはアスリであり、針を刺されかねないほど悪い習慣を、最後まで暴露せざるをえなかった。実のところ、アスリはあの状況下、自慰の事実を罵倒されながら、なお自慰を重ねたいと内心願ってはいたとは言え、通常の思考に沿ってアスリの心中を思いやり、たまにと頻度の副詞による釈明をしつつ、自慰の自供という助け舟を送ったのは、今まさに弱り切っていしまっている、ティサだ。

そのティサはもう、時間切れだ。ラリーヤも努力し、約束もしたのだから、これ以上待つことは許されない。だが、優しかったティサに、アスリが配慮を向ければ、ティサがどうしてもなさねばならないことの手助けはできるはずだ。
授かった恩には、同じく恩で報いるべきである。ティサがアスリに、自供という形で羞恥を等しく引き受けようとしたのであるなら、ティサがここで受ける羞恥を同量か、恩の分を加えたそれ以上、アスリも分担するのが道理に適っているだろう。強制的な脱衣のほかに1つ、ティサを正しく導く道筋を見出したアスリは、自らもその覚悟を固めていく。

「ねぇ、ティサ。」
「………何。」
「私も、一緒に脱ぐよ。」
「……え？」

ティサが両手を顔から離し、アスリの方を見上げた。驚き以前に、アスリの述べた内容にまだ頭が追い付いていないのか、困惑がティサの顔中に広がっている。もう一歩、アスリが考えに至った経緯に

進む。

「この前、私が恥ずかしい時、ティサもたまにするって……、私のことかばってくれた。だから、今日は私も、一緒に恥ずかしくなるよ。」

「嘘……？でも、そしたらアスリ……？」

ようやく、ティサが驚きの感情にたどり着いた。両目を大きく見開いたティサは、口を半開きにしたまま、次の言葉を探しているようである。

「やっぱやるじゃん、アスリ。」

「え？」

アスリの申し出に、ラリーヤも横から入る。茶化すように含んだその声に、アスリがラリーヤに振り向けば、こちらは顔面が変態の悪で、明らかに何らかのシグナルをアスリに向けて発している。

すでにアスリはティサに、羞恥の一部負担を宣言してしまっているが、しぼんでいるユニスの影でにやつく変態の賞賛には、どうにも裏があるようである。もしかするとラリーヤは、アスリが自己の利益のためにティサに提案を投げかけたと捉えているのかもしれないし、自身も抱いているティサに続く次の目標の達成にも一歩近づいたと考えて、アスリを褒めるような言葉を送ったのかもしれない。

たとえば、万が一にもティサがアスリのアシストを受けずに独力で脱ぎ、ユニスと仲を深めたとして、この洞窟の状況下、着衣のまとなるのはアスリだけだ。今でこそ時間の早さは緩やかであるとは言え、そこまで進めばどうなるかはアスリにも予見はできないし、服を着たままであれば、ただ傍観して今日を終えて、後でアスリは濃い自慰で満足しようとするだろう。

対して今、ティサとともに脱いでしまえば、どうなるか。どれほ

ど早い流れが待っていたとしても、裸であれば突き進む3人に取り残されず、アスリも最後まで追尾ができる。

すなわちラリーヤにとって、アスリの脱衣はティサを動的にするための試みであるのと同時に、アスリにも向けた、機会の創出に当たる。その上で、ラリーヤはティサに一切妥協を見せないだけでなく、今日という1日の中で、ユニスの2番目とアスリの1番目も、外野から追い求めていていているはずだ。

そうであるなら、またそうでないとしても、あくまでティサへの他利で動いたアスリは、利己の精神に基づかない旨を弁明したい。しかし、これからアスリを待ち受ける明白なコンプレックスの開示と、それによる涙が出そうなほどの羞恥に、アスリがゾクゾクと理性の残る頭部以下が期待しているのも正しく、ラリーヤはラリーヤで、アスリが頭を回し終えるよりも先へ先へ、ティサをあるべき姿に導いていく。

「……まぁ、とにかく。アスリも一緒にぬぎぬぎしてくれるってよ？どうするん？ティサ。」

「ねぇ、ホントに？アスリ。恥ずかしくないん？」

自ら泥を被ってでもアスリに寄り添ったティサの理性は、アスリをなお気にかけている。一方でその瞳は、アスリが身を挺して示した道筋にすがり、救いを求めている。あと一声だろう。

「恥ずかしいよ、めちゃくちゃ。でも、私も頑張るから。ティサも頑張ろ？」

「…………わかった。アスリ、ありがとう。」

ティサが、立ち上がった。立ったまま、片方ずつ足を後ろに出して履物を脱いで、意識を高め切ったアスリも、ティサの正面に裸足

で進み、相対する。
　この状況を自ら呼び込んで作り出したのは、アスリに他ならないが、今更ながらアスリは、これから起こそうとしている自身の行動にためらい、必ず訪れるであろう羞恥に、早くも身を焼かれつつある。豊かな乳房を持つラリーヤとティサは、アスリの小さな胸を見て、いったい何を思うのだろうか。また、ラリーヤの線とも、かつてのラダンとも、それよりもっと昔に見た女児たちとも、おそらくティサが隠す布の下とも、いずれとも大きく違う、一目で異形と分かる性器を前に、ラリーヤもティサも、アスリを男だと指摘するのではなかろうか。何より、以前はアスリの肉体に欲情できたはずのユニスも、比較の対象が生じたことで、アスリの前だけでは、今のように小さく主張をやめてしまうようになってしまわないだろうか。

「私の体……………、ラリーヤと違って、多分ティサとも違って、ホントに変だから。びっくりしないでね？」
「私だって、変だよ。おっぱいとか……。」

　あらかじめアスリの張った予防線に、ティサも同じく線を重ねる。ほぼ確実に、ティサの懸念はアスリに比べればほんのわずかな杞憂にしか過ぎないだろう。ティサも触れた胸について、アスリはティサ以上に過少であるだけでなく、アスリは性器も問題なのだ。たとえティサも股からはみ出ていたとしても、アスリよりも大きいことなど、ないに違いない。

　恥ずかしい。あまりにも恥ずかしい。じっくりユニスに見てもらうことも恥ずかしいし、同性のラリーヤとティサに見せることも恥ずかしい。
　ここに恥ずかしい肉体のアスリがいるのだから、ティサは恥ずかしがらなくて良いはずだが、ティサもきっと、同じようにこれほど

恥ずかしいのだ。それでもアスリの体中をうずかせる、この涙が出そうなほどの羞恥は、アスリの腹の奥を沸かせ、頬の奥の筋肉をぞわぞわとむさぼりながら、背筋に沿って全身を本能に向かわせていく。

やはり、脱ぐべきだ。無言のまま、アスリは短い布の裾を、両手で強く握りしめる。素晴らしい。

泉に湯が沸く。意を決したアスリが、脇に作っていた布の結び目をほどく。

アスリの背中側全てが、たいまつの明かりを乗せた、柔らかな洞窟の空気に触れる。ティサと同じく、布で体の前面だけを隠すアスリの後方奥は、文字の壁だ。気づけば自然と内股になって、太ももを合わせるアスリの背後、壁のどこかにあった裸の男の文字は、アスリの尻を見ているだろうし、立位のこの姿勢でも、ぐずぐずに湿った熱い肉の一部まで確認されているかもしれない。

心臓が、確実に今、大きい。胸腔に腹部全体、さらには手足の筋肉まで、今は全て心臓だ。心臓と化して、血液を送り出し受け止めるようになったアスリの指が、鼓動とともに震える。

「じゃあ、せーのね?」

これは、自殺だ。自決する合図を、アスリは自ら決した。しかし、本能が脱いで辱めを受けたいと語るのなら、理性もまた、ティサのために一肌脱ぐべき時が来たことを語っている。満場一致したアスリの全てに、ティサも黙ったまま、今にも涙を流しそうなほどに目を潤ませて、静かにうなずく。

洞窟の中、ティサの息遣いだけでなく、向かい合うアスリとティ

サを真横から見つめるユニスとラリーヤの視線も、アスリに届く。
外から聞こえてくる滝の水の音、たいまつが燃えゆく音、アスリの胸から頭の中に、体中に、血液が一定間隔で送り込まれる音、それらの合間に1つ、乾いた木が小さく火に弾けた音が、響いた。今だ。

「いくよ？…………せーーーの！！」

アスリが、押さえる布を自由にする。直ちに布は、洞窟の地面に向かいだす。アスリの目の前で、ティサの布も連鎖する。
ティサがアスリの視線を外し、落ちる布に目をやった。同時にティサは、右腕で両方の乳房を押さえつつ乳首を隠し、左手は股間の真上に広げていった。
アスリもティサに、反射する。アスリが乳首と性器を両手で覆いきるまで、ほんの一瞬だったが、ティサにはアスリの持ち物が見えてしまっただろうか。とにかく今、改めてアスリが自らの肉体を見下ろす限り、いずれの乳首も隠れているし、ティサとは鏡写しで反対に右手を向けた股間からはみ出る毛もなければ肉もなく、事前の段取りは一切なかった中、正しく布は腕に置き換えられている。
自身の無事が確認できたアスリが、ゆっくりと視線を元の高さに戻していけば、胸と陰部を押さえ内股で腰を引き、立ったまま小さく縮もうとするティサが、ほぼ同じ体勢でも上背のまさるアスリの顔へ、視線を送っていた。その上目遣いに、アスリは釘付けになった。
ラダンだ。成長の証を没収される前の、哀れなラダンだ。そこに具現化した羞恥が、必死に頬に流れず瞳に留まろうとする涙を伴って、上目遣いとともに共存している。
「恥ずかしい……。」
ラダンとなったティサが一言、胸中を吐露した。まさに恥ずかしい声で、アスリから目をそらし、顔を洞窟入口の方の地面へと傾げ、

この４人の中で1番短い髪まで使って目元を隠したティサは、その薄い唇を笑みとも歪みともつかぬ形状に変化させる。
他に何も続けられないティサを前にして、静寂たる洞窟の中の自然音と、アスリの内的な心音に、もう1つの音が加わっていく。音源の位置は、心臓よりももっと内側、アスリのさらに深く、頭か、腹部か、泉の奥か、どこかにあるはずのアスリの庭だ。
壊れる音だ。庭の壁が、壊れている。その壁に、文字は書かれていない。代わりに以前から壁にあったのは、空きっぱなしの穴が1つである。この穴は、かつての月下の高窓であって、アスリがラダンを覗いては同情し、共感し、発情し、その後もつい先日まで、母への謝罪に取り次ぐために用いてきた。
ただ穴は空いてはいれども、壁は壁として、つい先ほどまでたしかにあった。では、今や瓦礫となってしまった、穴の空いた壁の先、ちらついていたラダンのうつむきのほかに、そこにあったのは何か。
女だ。この壁は、アスリの性の向き先を、男女で隔てていた壁だ。その壁にアスリはおよそ2年、ラダンの記憶を母に謝罪しながらけやって、意図せずとも壁をいじめてきてしまった。また直近でも、ラリーヤの乳房と無毛の一筋が、壁の穴を大きく広げさせていた。それをついに、全てを総じて羞恥となった裸のティサが、壁全体を破壊したのだ。
なぜ、ティサがアスリの庭で暴れたのか。そもそもアスリにとってティサは、もはやただ森からユニスとともに現れた少女ではなく、アスリがユニスと自らの命を、襲撃の窮地から救ったことを決して忘れず、アスリを常に思いやる、かけがえのない友人である。だからこそ、アスリもティサがユニスと過ごす将来の幸せを願い、ティサにユニスの初めてを存分に堪能してもらいたいがために行動し、こうして脱衣している。繰り返すが、ティサはアスリの、かけがえのない友人だ。

ところが、アスリは壁を脆くしすぎていたし、ティサも裸になって、強くなりすぎた。壁なき今、ティサは友人であるのと同時に、はっきり言って、アスリの性の対象だ。つまり、幼いころから少しずつ、少なくともラダンが罰せられるまで、アスリに社会性を備えさせるため、アスリの庭に人間の理として築かれてきた壁が著しく損なわれた今、庭の全てがアスリが目を向ける先なのだ。

当然、ユニスは元からアスリの壁の手前側にいて、ユニスに対してのアスリの愛は、１本のヒビすら入っていない。また、ティサに対して抱く友人としてのアスリの意識にも、変化はない。

　唯一異なるのは、全裸で最後の秘匿を試みながら、羞恥に身をさらすティサに今、アスリは性的に欲情しているという事実を自認し、その思いを打ち消すことすらできない状態に陥ってしまっているということである。もっと踏み込むのであれば、アスリはティサが隠す残りの部分を全て見たいし、ユニスの槍と正面対峙させて、これよりもさらに大きな羞恥にティサが苦しむ姿も見たい。それらに限らず、昨日のラリーヤとイケメンのように、ティサがユニスをくるみこんでしまうところも早く見たいし、翻ってユニスがティサに踏み込んでいくところも、崩れてしまったアスリは見てみたい。

　思えば３日前、ラリーヤがこの洞窟で性を説きながら、女子を相手にした経験についてもさりげなく触れた時も、アスリはそこに異議すら唱えず、かえって思いを馳せていた。愛なき上に、同性同士の性は、仲を深める以前の、ただの遊びであり探求だ。アスリは変態を目指していないが、その経験まで備わっているラリーヤは羨ましい。とにかく、アスリは自慰がしたい。

　友人にさえも着実に興奮するようになってしまったアスリに、残された壁の基礎が、アスリの良心を問う。クズなアスリは、ティサが右手で押さえる両胸の、その右側のずさんな守りに、地肌よりも少し色濃い箇所を見出していく。徐々に落としていく視線の先、細

身の腰にあるのは、たいまつの灯をまとう遺品の煌めきだ。その腰飾りの紐の直下、腰を引くティサが左手で固く覆っている、まもなく迎える初めての端からは、隠しきれなかった茶色いティサの髪と同色の数本が、ティサの肉体が大人に近づいていることを示していた。

我慢のならなくなりつつあるアスリが、昨日のラリーヤの言いつけを丁寧に忘れながら、こっそりと股を隠す右手の中指を曲げていけば、たったそれだけでアスリの水面が大きく揺らぎ、小さな波がじんわりと体中に広がっていく。わずかでも甘やかしたアスリの本能は、すぐに尊大となって、より強く、早い刺激をアスリに要求する。

「ティサもアスリも、よくできたねー？ほら、ユニスもちんちんが嬉しいって！」

「バカッ！ラリーヤ！」

幸い、アスリの微小な触れ合いは、ラリーヤには見破られなかったようである。裸になった2人を褒めたラリーヤが、ユニスの変化を伝えれば、ユニスも大きく騒いだ。同性も良いが、ユニスの異性も絶対的に良い。これではアスリも、快楽より先に、ユニスを見るしかないし、少なくとも異性としてのユニスに関しては、ティサも同じだ。ほとんど動けない2人が、顔だけをユニスへと振り向ければ、腰をおろしたままのラリーヤの、性に染まった笑顔の真横には、先細った皮の見張り台が、太い人差し指で真上を指し示すように建築されていた。

「すごいねー？良かったねー、ユニス。ティサとアスリの裸んぼ見て、おっきおっきしちゃったねー？」

「うっさい！！違うし！！」

「嘘！？もう私のおっぱいとお股見たん！？」

「まだ、こっちからだとお尻の割れ目も見えんよ。それとティサ、お股って言うのはちっちゃい子までって教えたじゃん？ティサも赤ちゃんなら、そこで隠してるお毛けいらんし、私みたく剃っちゃうよ？」
「は！？だったらラリーヤも剃ってんだし、赤ちゃんじゃん？」
「だから昨日もう言ったけど、私大人の女なんだって。」
「意味わからんし。」

昨日に続いて、剃毛をした上で大人の女であると主張するラリーヤは、ぶっきらぼうに指摘したティサの言葉通り、意味不明である。それでも、ティサにまで性の食指を伸ばしつつあるアスリが思うのは、そのもう一歩手前の、ティサを剃毛してしまうというラリーヤの脅迫だ。これはおもしろい案であるし、せっかくならユニスも剃り上げて、アスリはよだれでも垂らしながら2人をからかいたい。また、3人が無毛になるのであれば、アスリも子どもに戻りたい。
ここで、いらしくにやつているばかりのラリーヤは、ゆっくりと立ち上がって、まず渦中の剃毛された大人だそうである1本筋をあらわにすると、右手はユニスの後ろ手に残したまま、首元に作ってあった背に羽織る布の結び目を、左手でほどいていった。ラリーヤの片手にできた隙を見たユニスは、自由を取り戻した右手を前に回し槍を隠してしまったが、代わりに布を落としたラリーヤの豊かな乳房が現れる。大人であることを、ラリーヤは乳房でもって証明しようとしているのだろうか。
残る履物を、ラリーヤが片方ずつ足を体の前に膝を折り曲げながら上げ、脱いでいく最中、まっすぐな割れ目の中身が見えてしまってもおかしくはない姿勢をラリーヤが取っても、はみ出た何かをアスリの両目は捉えない。
よくできた性器だ。もしもアスリが同じ動きを今行えば、肉の葉だけでなく、だぶついた皮の隙間から、中央に控える大粒の中身まで見えてしまうことだろう。

やはりアスリは、ラリーヤにもティサと同じく性を向けられる。
均整なラリーヤのこの1本線にも、そのうちアスリは割り入って、おそらく小さいであろう肉ひだや粒子を暴くべきだ。再び右手の中指にわずかな力をこめて、体中に耐えうる小波をもたらしたアスリをよそに、完全に裸になったラリーヤが、それぞれ股間に手をやった、むやみに動けない3人を押し流していく。

「んふふ、これでみーんな、裸んぼだね？」

「サイアク。」
「ティサ、何回も言うけど、最悪ならさ。」
「わかってるから、もういいから。しつこい。」
「んふふふ、ま、いいや。ほら、ユーニース？ちんちんせっかくおっきくなったんだから、ティサのとこに持ってこうねー？」
「えっ！？」

性が中心のアスリも無言が基調だが、ユニスも最低限しか呼応しない。右手で伸びる槍だけを押さえ、袋は出たままの情けないユニスの左手を、乳房も無毛の線も隠さず堂々たるラリーヤが引いて、ティサとアスリの前へと進んでくる。アスリもティサも、予測できないラリーヤに体の側面を向けたままにすることもできず、もじもじと小さく、正面をラリーヤとユニスへと向けていく。

「じゃあ、ユニスはティサの前でー。」
「なんだよラリーヤ！」

ラリーヤがまたユニスの真後ろに回り、ユニスの両腕を掴みながら、ユニスをティサの真正面に位置させた。今、アスリから見て左隣がティサ、右隣がユニスだ。

「で、アスリはユニスのこっちのお手て持っててあげててね？」
「あっ！！ちょっとちょっと！！」
突然、右側から伸びてきたラリーヤの左腕が、アスリが股間を隠す右腕を強く掴んで引っ張った。急遽、究極の優先順位を定めなけ

ればならなくなったアスリが、右手に代わって左手を咄嗟に股間へと滑り込ませる。同時に左の乳首も、二の腕で守る。

右胸は、守れなかった。片手で全てが包めそうなほどの小さな膨らみと、薄い茶色の小さな輪と1つの胸粒が、柔らかなたいまつの逆光の中に立った。

「いやっ！！！！！」

人間は反射に限らず、刷り込みによって意図しない行動を取るものだ。それは、羞恥を糧として自慰に励んできたアスリですら同様であって、ただ片胸が暴かれただけであるにも関わらず、アスリはどうにも隠せなくなった上半身を、前に斜めに倒しつつ頭を下げ、地面を見つめる以外になかった。ところが、アスリの焦りをなだめるかのように、ラリーヤに制御を奪われてしまった右手のひらの中に広がっていくのは、安堵であった。

「ほら、ユニス。アスリのお手て、こうやって、こうやって、そうそう、この前みたく。」

ラリーヤの手が触れる感覚が、アスリの腕から消えた。代わりに優しさが、指と指の間に強くなる。

ラリーヤよりもティィサよりもずっと小さい、隠しきれなくなった胸を諦め、アスリが静かに体を起こしながら、新たな温もりの根源に目を向ければ、アスリの右手とユニスの左手は、指を互い違いに絡めあうようにつながれていた。

3日前、この場所で、アスリが大役を任された一方で、ユニスをつなぎとめるラリーヤとティィサが行っていた、あの手のつなぎ方だ。日々の狩猟で鍛え上げられたのであろう、固く、ところどころがさ

ついている手のひらから、強く送り込まれるユニスの凛々しさは、アスリの困惑をユニスに向けた思いへと、ゆるやかに置き換えていく。

アスリは、たったこれだけで幸せだ。やはり、目の前の3人がアスリの性の対象になりうるとしても、愛の対象はユニスだ。右からはユニスと、左からはティサの視線が、アスリの右胸に突き刺さる。だが、この幸せがあれば、アスリはなぜか、ラリーヤほどではないにせよ、少しは堂々としていられる。未だにアスリの左腕は守りに入ったままではあるとは言えども、ユニスの生命を感じるアスリの背筋は、自然と元の伸びを取り戻していった。

「アスリ、ティサみたくやーやーしないでえらーい！お胸も、めっちゃかわいいね！」

「マジ恥ずかしい……。私のちっちゃいんだから、見ないでよ。」

ラリーヤはアスリを褒めているのか、それとも馬鹿にしているのか、頭が煮えているアスリには不明だ。幸せはあっても、口にしたアスリの思いは概ね本心であり、一部は本心ではない。この羞恥が、またアスリを焼き上げている。口元をやや歪ませ、目元には力をこめてアスリの右胸を見つめているティサは、ただただ無言だ。

「はい、次ユニスねー。はい、そっちのお手てはこっち。」

「は！？」

「こら、子どもちんちんなんだから、恥ずかしがんない。」

ラリーヤがユニスの真後ろから、ユニスの右隣、アスリの真正面に移動しながら、ユニスが槍だけを握るように隠す右手を、制する言葉を交えながら強引に奪い取った。再びアスリの真横に飛び出した皮槍は、アスリが手をつなぎ気を大きくしているせいか、立ち上げ直後よりも、また昨日や3日前よりも、やや成長したかのように

アスリの目には映る。確かなことは、真っ赤であろう部分の全てを覆って、なお余裕を持って余っている先端の先端に、こぼしそうな涙の輝きが見て取れることである。
　左手で押さえる股間の中央が、熱くて仕方のないアスリが、またこっそりと一点に力を加えれば、じんわりとした快感とともに、泉の奥から何かが外に向かう感触が届いた。この湧き水まで3人に見せることは、右胸どころではないほどの羞恥を伴うが、ユニスが涙を流すなら、アスリも泣くしかないのかもしれない。
　気づけば4人の意識の先は、アスリの右胸でなく、ユニスの皮槍に集中している。さすがの存在感だ。頭がおかしくなるのを避けるために、アスリがラリーヤの方に目をそらしていくと、すでにラリーヤもアスリと同じ形でユニスと手をつないでいた。これより左に目をやると、今度は爆発的な乳房と1本線が目に入るから、アスリは斜め向かいでつながれた手を見ておくしかない。

　ラリーヤにも伝わっているのであろう、ユニスの温かさを右手から直に得る中、ここで不意にアスリの理性が、1つの疑問を提起した。そもそもなぜ今、アスリはユニスと手をつなぎ、ユニスはラリーヤとも手をつないでいるのか。それは、ラリーヤがそのように導いたことによる。
　それでは、ラリーヤはなぜ、3人の手をつながせたのか。そして、なぜティサを囲んでいるのか。
　簡単な話だ。羞恥にまみれるティサが、このままでは乳房と局部を隠したまま、石になって動かないであろうことが、目に見えているからだ。ラリーヤの行動の意図は、ティサに両手をつながせて、自らのように胸にしろ1本線にしろ、まずは全てを開示させることに他ならない。
　ラリーヤがティサの手を体から離させた後、次にどうやってティサとユニスの性と性をつなげていくのかまでは、アスリには予想できない。しかし、その前に、ティサが股間を押さえる左手をつなぐ

先はラリーヤの右手で、胸を押さえる右手は、今、同じように性器と左胸を隠している、アスリの左手になることは、ほぼ確実な情勢だ。

ここまで考えが至ったところで、ごく近くに見込まれる次なる羞恥が、アスリに勢いよく降りかかっていった。すなわち、ティサが手をつなぎ丸出しになるのにあわせて、アスリも全てが丸出しとなるのだ。

いよいよ、その時だ。ユニスはアスリの肉を、以前見ていた。だが、近いこの距離で、ユニスに見せるのだ。ティサとラリーヤに至っては、初めてだ。

ティサと共感すると決めた時点で覚悟はしていたものの、アスリにとって、かなり厳しい情勢だ。ユニスをつなぐ右手のひらの中にも、はみ出る肉を押さえる左手の中でも、アスリの手からはじんわりと汗がにじんでいく。左手の奥、泉からも何かがとろとろとあふれているようである。先ほど水浴びをした意味は、性器を中心にして、ほぼなくなっていると考えて良いだろう。吐き気はないが、アスリの胃や腸が裏返しになって、口から飛び出してきてしまいそうであるし、首筋から背筋まで、アスリはまとめて真後ろにぼとりと落としてしまいそうだ。

「…………何これ？」

ラリーヤがユニスを引いて近づいてきてから、静かなままだったティサもいよいよ勘づいた。羞恥と緊張と歪んだ悦びを、全て１つの釜の中で混ぜながら煮込んでいるアスリが、いやらしいだけの変態を飛び越えて、左にいるティサの、怯えるような表情を見つめる。

「わかった？ティサ。もうやーやーしちゃ、ダメだよ？アスリみた

いにできなきゃ？」
「え！？待って！！待って！！待って！！無理無理無理無理無理！！」
「何？ダメに決まってんじゃん。ほら、ティサ、もっと近くおいで。もうみーんな、お手てつないでんだから、あとティサだけだよ？」

ラリーヤが、アスリから見て左に一歩進み、ティサとの距離を詰めた。動きに合わせて、アスリも左に出れば、ユニスも槍と袋とともに前に出る。今の３人の一歩で、輪の大きさも小さくなり、アスリの右肩はユニスに、左肩はこちらも小さくなるティサに触れそうである。ティサの裸体もアスリは気にはなるが、至近距離にまもなく姿を見せるアスリの性器を、果たして３人はどう評価するのか。

「ティサ？頑張ろ？」

アスリは、ティサに声をかけながら、自分でどうしてこの言葉を選んだのか、わからなかった。今、本能が理性を利用した。
やはりこれは、自殺だ。アスリは死にたくないが、期待も大きい。内股に向けるアスリの両膝は、高い崖の上から真下を覗き込んでいる時のように震えそうだ。ここに、これから４人で手をつなぎ、身を投げる。

「じゃ、もっかい、せーのでいくね？」
「ちょっと！！！マジ！！ホントに待って！待って！」
今度はラリーヤが、音頭を取る役目を買って出た。ティサが一言ずつに頭を揺らし、目を大きく見開く。ラリーヤが、来る。
「いくよっ！？せーーーの！！！」

意を決したアスリが、左手を自由にして、無我夢中でティサの胸元の右腕に挑戦する。真ん中の1粒だけに限らず、その両側と外側の肉が真下に吸い込まれ落ちていくような体感が、アスリの骨盤から腰全体へと広がっていく。

しかし、先ほど右胸に受けた視線を、今のアスリは陰部に感じない。アスリもラリーヤもユニスも、3人ともティサを見て、ティサは顔を下に向けて体を丸めようとしている。

アスリの左手が、ティサの右腕を掴んだ。同時にティサの下方で、ラリーヤの右手が左腕を掴んでいる。

うつむくティサが腕に込めたのは、引力だ。アスリも力で応じるか、それとも言葉か。

言葉を選択したアスリが、さらにティサに掛けるべき言葉自体の選定に入った、次の瞬間だった。勝機のないことを悟ったのであろうティサの腕が、降伏を選んだ。諦めのティサに、すぐにアスリもラリーヤも容赦なく攻め入り、ティサの2つの乳房が、まさに飛び出して、もっと下側では茶色の逆三角形も、アスリの視界に飛び込んでくる。

まだ、これらに気を奪われるべきではない。アスリが優先すべきは、敗者の確保だ。じっくりと眺めたいティサの裸体も、見られるリスクとコンプレックスだらけの自らの肉体も、ひとまず置きやって、一生懸命ティサにだけ集中するアスリが、ユニスとつなぐ右手と同じく、左手の指とティサの右手の指を絡めてつなぎあわせていけば、右側から得るぬくもりをはるかに上回る熱さと湿っぽさが、アスリの左手の中に広がっていった。もちろん、アスリの左向かい

側では、ラリーヤもティサとつながる。

　こうして裸体となった４人の輪が、洞窟の中に完成した。引き続きアスリの意識は、地面なのか、体毛なのか、乳房なのか、下ばかり見るティサへと向けられる。

　張り出したティサの右の乳房全体が、アスリを見つめていた。もう1つ、同じ大きさのティサの左胸は、ラリーヤを見つめている。決して、鋭利な訳ではない。しかし、ティサの乳房は全体が尖って、斜め前上方に突き出しているかのようである。まず、ラリーヤよりは一回りほど小ぶりの、それでも十分すぎるほどにしっかりとした2つの土台は、それぞれ離れ離れとまでは言えないものの、体の中央からやや外に向かうように形作られている。斜めの要素を構成する基礎は、これら土台の形状だ。

　加えて、その上に配されている建屋は、アスリの目にしたことのない形状だ。無論、これよりもっとずっと下の中央部を剥き上げれば、中身に入るものは男女ともほぼ同じであることを見抜いているアスリにしてみれば、多少ティサの形状が違えども、ティサも、アスリも、ラリーヤも、男子であるユニスも、胸に各自2つずつ備えているものに変わりがないことなど、百も承知である。

　その上で、何が違うかと言えば、ぷつぷつと小さな粒が周囲に付随する、人差し指と親指で作った輪ほどの大きさの乳の円だ。これがティサの場合、そのものがぷっくりと、浮かび上がるように優しく突き出ている。しかも、それよりさらに突き出た乳首までも含めて、周囲の地肌とは全く異なって、薄い桃色によって着色されている。この乳輪と乳首が、上方に突き出るように見える要因だ。

　つまり、土台とその上の構造物が総合して、斜め前上方にティサの両胸を向かわせている。その結果として、今、アスリと目が合っているのである。

いやらしい。ティサはたまに自慰をすると自供したとは言えども、ラリーヤやユニスのように、変態性はないはずだ。だが、ティサの乳房を前にして、アスリはそれら全体をいやらしくしか捉えていないし、自分と同じ女子の胸に直に欲情している。

「わぁー！ティサのお胸、すごーい！」

「最悪！！ホント、ホント、本当に最悪！！馬鹿にしてんでしょ！！」

声を弾ませて、目にしたものの感想を素直に述べるラリーヤも、わずかな時間でティサをの胸を見切ったのだろう。対して、怒気を含んだティサの声は、涙の気配まで含んでおり、ティサの本心は、まさに一糸まとわずに、この場に立ち尽くしているようである。

「そんなことないし！すっごい綺麗じゃん！」

「どうせ嘘でしょ？ラリーヤとも、アスリとも全然違うし、私のおっぱい、ママとも全然違かった！私、変なんだよ！」

「いや、マジで全然変じゃないって！すっごいかわいいいいお胸だって！」

「バカ！！」

明るいラリーヤの口調には、ティサを蔑む意図がないことは明らかだ。ただ、両胸を無防備にしたティサには、ラリーヤの言葉が全く届かない。

この優しい色合いで浮かび上がるような乳輪と乳首は、ティサにとってはコンプレックスの象徴であるのだろうし、ティサを脱がせることを妨げてきた大きな要因であることは確実だ。自らの両胸を見下ろし、それ以上言葉を続けられなかったティサは、アスリの手を握る力を強めるだけであるが、アスリにしてみればラリーヤの乳房も、ティサの乳房も羨ましく、できることなら片方ずつ、２人の

持ち物の一方と交換したい。

当然、ラリーヤが直接言葉で評価した乳房に限らず、ティサの下半身にもアスリの性は向けられているし、仮にティサの胸がアスリのように貧相であったとしても、アスリはティサの腰まわりだけで耽られる。これより下、少し肉づいたティサの腹部と、小さな縦線のようなへその下には、直前、瞬間的に俯瞰した通り、茶色い成長の証がしっかりと逆三角形状に広がっていて、女子としての構造を秘匿している。そうは言えども、濃い密度でびっしりと茂らせていた、アスリの記憶中のラダンと比べてみれば、ティサの広がりは茶色であることも手伝って、量のわりに少女に近い。こちらも同じく、いやらしい。

３人の視線がティサのみに集まる中、ここまでを通して眺めて、アスリはティサにも抱いてしまった興奮で、吐息が燃えそうになっている。このもっと下は、ぴったりときつく閉じられている、思わず触れたくなってしまうほど艶やかな両太ももだ。ティサは服を着ていても十分にユニスに望ましい女子であるが、裸になってこれほど強力なら、将来は十分にユニスに任せられるだろう。アスリが今日ティサに本当に続くのかはまだ定かではないが、とにかくこれからティサのこの体がユニスとつながるところをじっくり見つめながら、どうにか誰にも気づかれないように、アスリは自慰をしなければならない。

「あっ……！！！」

ところが、アスリがティサを見定めた直後、なぜか突然ユニスが大きく声を上げ、アスリの右手にも、強く引く力が加わった。左から右に向き直るアスリの目に入ってきたのは、苦しく、切なく、悲しみすら訴えてくるかのようなユニスの歪んだ眉と、３人の女子の

裸体を映した美しい瞳だ。その半開きとなった口元は、すでに噛み殺されている。
皮槍全体が、ユニスのへそ近くまで角度を上げる。アスリがつながる右手に、ユニスの強い力がこめられた。直後に、腰を引いたユニスの、付け根を一周、髪紐で結ばれた真上を目指す皮の先端からは、白濁の涙が一滴、洞窟の地面へとこぼれ落ちていった。

「わっ！！！」
「出たっ！！！」

恥ずかしいばかりであるはずのティサから、一転して歓喜とも驚きともつかない声が上がった。アスリも事実を述べ、目にしたばかりの素晴らしい裸を一時忘れて、ユニスに全ての意識を割り当てる。皮の守りは、ユニスの大胆な飛翔を許さない。それでも続く一滴は、つながるべき運命に従うように、どうにかティサの足元まで飛び向かう。

「ウソでしょ！？ちょっと！？」
「あっ！！あっ、あっ、あっ、あっ、あっ…！！！あっ……！」

あのラリーヤまでもが、驚いている。その間も、沖へ沖へと流されていくユニスの前には、２滴目、３滴目、４滴目と、雫が次々に落ちて、男子の湖が形作られていく

「うわー！ユニスー！」
「まだ出てる！」
「あーっ…！あーっ……！」
「あーあ！ちょっと！全部出ちゃってんじゃーん！」

ティサはなぜかユニスの名を呼び、アスリも事実の実況を継続する中、ユニスは聞いているだけでアスリの頭がおかしくなりそうな、色に染まった嗚咽を漏らした。一方で、ラリーヤの声の根底にあるのは、小さな怒りと大きな呆れだ。昨日、わざわざ髪紐でユニスを縛り上げ、ティサとの初めてを迎えるまで控えさせようとしたラリーヤの試みは、残念ながら徒労に終わってしまった。

「んすぅー、はぁー……、はぁー……。」

深呼吸のあと、ユニスは軽い呼吸を繰り返しながら、数度の身震いをアスリにもつなぎあわせる手を経由して伝えたところで、ようやくユニスの皮の先端からの自由落下は止まった。実に、１０滴だろうか。徐々に角度を落としていく皮槍とともに、ユニスも静かに頭を前に倒し、粗相の広がる自らの足元に視線を落としていった。

「ホント信じられん！昨日、ティサとなかよしするまで、出しちゃダメって言ったじゃん？手つないで裸んぼ見ただけで出しちゃうんなんて、初めて見たわ。なんなん？このダメぴゅっぴゅちんちん。」

相変わらず続いているユニスの快楽の吐息に、ラリーヤの呆れた罵倒が重ねられる。勢いを失って、弱く、いじめられるユニスもアスリは好きだが、ベテランのラリーヤもまさか今日、洞窟で初めての経験を得たということは、今のユニスは常軌を逸しているということなのだろう。正常と異常の差異とは何か、今のラリーヤの言葉だけでは把握しきれないアスリが、素直に生じた疑問をラリーヤに問う。

「ラリーヤも初めてなんて、ユニスのおちんちん、そんなダメなん？」

「ダメだよ、ありえんしょ？だって今、全然ちんちん触ってなかっ

「…………………。」

不自然に、ラリーヤが止まった。思わずアスリが正面のラリーヤに目を移せば、明らかな驚きがラリーヤの顔中に広がっていた。そして、その視線は、確実にアスリの下腹のさらに下に向けられている。

「アスリ……？」
「……えっ！？」

アスリの名前を、ラリーヤが呼んだ。すぐさま、アスリの左側、ユニスの槍を凝視していたティサも、同じくアスリの一点に狙いを定めて、声に驚きを滲ませた。快楽とともにうろうろしている右側の視線も、一度ラリーヤとティサを見てから、視線が集まる先を見つめる。

ついに、見つかってしまった。とうとうアスリも、うつむくしかない。

ティサにもラリーヤにも及ばない胸と胸の間、うなだれるようにアスリが見下ろす先に待ち構えていたのは、ユニスよりほんのわずかに多いだけの薄毛と、この姿勢からでも目に入る、大きな肉粒を包む、なじみ深い皮膚だ。おそらく正面と左右の３人からは、そのさらに下で何らかが太ももに挟まれているところまで、見えてしまっているかもしれない。

どっと、泉から水が湧いた。湧いた水が沸き、熱水に変わる。両足で挟み込む中央の肉が、熱水に触れて上気し、蒸気となる。蒸気が、皮膚の奥の大きな粒を、切なく辱める。

恥ずかしい。本当に死を選びかねないほどに、恥ずかしい。これが、自決を選んだアスリの死だ。最高だ。今からアスリは３人に、異端を審問されるのだ。

「え……、それって……。」

案の定、ティサからかかった声には、すでに自身の胸に向けたコンプレックスもなければ、羞恥もない。今、ティサにあるのは、ただただアスリの秘部に対しての興味と好奇心だけだろう。

「見ないで！！！！」

見られたくない一心であるにも関わらず、見られて悦ぶアスリの一喝が、洞窟中に響き渡る。これ以上何も言えないアスリは、グロテスクな自身の持ち物に赤面し、腰を後ろに引くしかない。

かつて閃光に卒倒したアスリは、ここで気を失うわけにはいかな

い。必死にアスリは、この一瞬一瞬の羞恥を骨の髄にまで記憶する。

「すっご……、すっごい……！！こんなおっきいの、初めて見た！！」

ラリーヤが驚きに続き、また初めてだと口にした。女子との経験もあるラリーヤが、初めてだと述べたのだ。カインタの全男子を食べつくしたラリーヤが、果たして女子をどれほど捕食したのかは定かではないが、少なくともアスリよりも多くの女子の裸体を目にしてきたはずであって、その中にはラリーヤのように線にならないものもあったことであろう。事実、幼い頃にアスリが目にした同年代の少女たちにも、その形状を持つ者はいたにはいた。

だが、アスリほどの大きさに育ってしまった者は1人もいなかったし、経験豊富なラリーヤをもってしても、同様であるに違いない。アスリは、おかしいのだ。

「どうせ、私の、その……、おまん…………のとこ、いっぱいはみ出てて、おちんちんみたいって言いたいんしょ？……最悪すぎる。」

アスリが耳にした、やっと絞り出した自らの声は、胸を暴かれたティサと同じく、涙声であった。恥ずかしいし、惨めであるし、悔しいし、このまま死んでしまいたいし、嬉しいし、言葉に反してもっと見てもらいたいし、実際に目元の正規のルートから、涙が流れ落ちてしまいそうである。

今のアスリは、性器に触れずに大波に流されてしまったユニスの思いが、痛いほどに、もっと言えば早くも快楽を伴ってしまうほどに、理解できる。アスリにも大波が近い。

本来、アスリに配慮できるはずのラリーヤも、アスリのはみ出しを目にして、変態が優先だ。嬉々とした声と、高いテンションでラリーヤは取り繕うようなこともなく、無邪気に続けていく。

「いや、こんなん、多分誰もいないよ？しかも、すっごいえっちだし。」
「バカ！！本気で言ってんだし。私めっちゃ悩んでんのに……。しかもえっちって。」
「悩むことないじゃん。足閉じててこんなにおっきいんなら、絶対そんだけ気持ちいいっしょ？アスリ、もうちょっと足広げてみてよ？」
「やだし！！マジバカ！！もう見んな！！」
「いいなー。半分でいいから、私にも分けてほしい。羨ましい。」

羨ましいとまで言う以上は、ラリーヤもアスリに気を遣って言葉を選んでいるのではなく、アスリがラリーヤやティサの胸に対してもそうであるように、本当に分けてほしいと考えているのだろうか。そうまで言う以上は、アスリもラリーヤに願い出て、はみ出た部分と大きな胸を交換してもらいたい。ただし、ラリーヤも見越している快楽の根源の１粒だけは、どんなに見栄えが悪くとも、アスリは譲れない。

一方で、この高評価はどうしようもない変態によるものであるのだから、特に同性のティサにとっては羨ましいどころか、願い下げの好奇の対象でしかないだろう。現に驚いた後のティサはただ黙って、アスリを鑑賞するだけである。

また、ユニスにしても、至近距離で見たアスリに圧倒されているのか、それとも波にさらわれてしまったまま、沖から戻ってくることができないのか、こちらも無言だ。何にしても、ユニスに見られていることは変わりなく、やはりアスリは恥ずかしいし、生まれ持って育ってしまった一部を悔やむしかない。

ここで、肺にたまりきった空気すら漏らせないアスリに代わって、小さくため息をこぼしたのはラリーヤである。それとともに、アス

リの股間に集まる視線のうち、アスリから見て真正面からのものは右へと外れ、そのままラリーヤの声が続いた。

「………まぁ、私の裸だけじゃなくて、ティサのえっちなおっぱいと、アスリのおっきなおまんこ、こんなん近くで見たら、ユニスがぴゅっぴゅしちゃってもしょうがないか。ホント子どもちんちんは、どうしようもないわー。」
「うっさい。違うし。」
「何？私のおっぱいえっちって？」

アスリも一言、ラリーヤに言い返してやりたいが、大きさに関しては事実であって、覆すことはできない。こういう時に必ずアスリをフォローするティサも、自分のことにしか触れなかったのだから、実際に肥大したアスリを守る言葉も思い浮かばなかったのだろう。なお、ユニスは今も、カインタのしきたりに従えば子どもで、この点もラリーヤは正しく、ユニスは不正だ。とにかく、今の短いやりとりで3人の視線が全て、アスリの股間から外れ、アスリもわずかに頭を上げて、女子2人と、男子1人の裸体のあたりまで、視界に収められるようにはなった。

「いいじゃん？結局、ユニスもう出しちゃったんだから、もっかいちんちんおっきくすんのに、えっちじゃないと？」
「は？」
「なんだよ、ラリーヤ！」
「ほら、じゃあまずお手て、私とじゃなくて、ティサもユニスも一緒につなごうね？アスリ、そっち側もお願い。」

さすがは至高の変態だ。想定外であろうアスリの性器が飛び出してきても、ラリーヤは洞窟の目的を、一切見失っていない。ここで、左右で握りあっていたティサの左手とユニスの右手を、ラリーヤは

自らの胸の前へと運んで連結先を変えるように促すと、同じ動きをアスリにも要請し、沈黙のアスリも素直に従うほかなかった。
ラリーヤとアスリの操作によって、向かい合うユニスとティサが、両腕を折り曲げ胸の高さで、手のひらと手のひらを合わせ、両手の指と指を絡め合わせていく。なお、究極の開示に引きずられるアスリの視界は、今なお羞恥に焼かれ、目前の光景が殴打されるほどの鼓動に揺らいでいる。

「2人とも、もっと寄って！」

恥ずかしい股間のアスリをよそに、向かい合うユニスとティサが完全に手をつなぎ終えたところで、おもむろにラリーヤが、2人の腰にそれぞれ手をまわし、そのまま一気に2人を前に押し込んだ。ユニスとティサの鼻と鼻が、ぶつかりかねないほどに接近する。

「っ！」
「ゃん！！おっぱい当たった！！」

言葉に合わせて、ティサが上体をのけぞらせようとした。思わずアスリも2人が作る合掌の片側から手を放し、1歩後ずさりする。仮にアスリが今、ティサと同じ姿勢をユニスと取ったとしても、アスリの胸ではユニスに届かないだろう。アスリにしてみれば、どう考えても圧倒的にこちらの方が羨ましい。

「こら！だからティサ、やーやーしないでユニスの顔見る！ユニスもティサのお目め見て！アスリ、ティサとユニス、このまま動かんようにしといて！ちょっと待っててねー？」

ここで最後に語尾を上げたラリーヤは、アスリに2人を任せると、洞窟の入口へと走って向かっていった。最新のラリーヤの表情は、

真面目さが優勢であった。今、ラリーヤは何に向おうとしているのか不明だが、全裸であるのにラリーヤは頼もしく、何も考えられないアスリは、移動する牛のように無心でラリーヤに任せるがままだけだ。

とは言え、アスリも見つめあう2人の真横に立ったままでいるのは、気まずいとしか言いようがない。何より目と目を合わせたまま固まってしまっている当事者たちからも、困惑と、特にティサからは、アスリが自らユニスに向けて発しているであろうものと同じく、羞恥と愛が傍らにいるアスリにじっとりと伝わってきており、アスリはふくよかな股間を隠すのに腕を動かすことすらはばかられる状況にある。

無論、ラリーヤもこの時間を長く続けない。すぐに元の位置に戻ってきたラリーヤが手にしていたのは、あの濃い黄色の果物に手持ち刃と、器が1つだ。先ほど数を数えながらティサを追い詰める間、手抜かりないラリーヤは今の洞窟の進め方を組み立て、必要になるものを拾い、洞窟の入り口に退避させておいたのだろう。その器を、ラリーヤはユニスとティサが至近距離で掛ける腕の橋の真下をくぐらせて、アスリへと手渡したのであった。

「アスリ、これにそこのぬるぬる、すくってもらえん？」

昼食前、ラリーヤはティサとユニスが仲を深めるために、この場で薬液を用意したと、たしかに述べたことを、アスリははっきり記憶している。時が近い。アスリも黙ってラリーヤから器を受け取るが、ラリーヤに伸ばしたその腕は、一連の全てによって、ぎこちなくしか動かない。それでもアスリは、薬液の入る釜のもとに向かってひとすくいすると、器の淵についたぬめりを震える指でぬぐって、裸の集団へと戻っていった。

「……これは？」
「ありがと！２人の間んとこに置いといて！」
取りに行った果物を、早速半分に割ったラリーヤの指示通り、アスリがティサとユニスの前の地面に器を置けば、いつの間にか果物に向けられていたユニスとティサの視線が、薬液の入る器の方へと移った。直前、２人はお互いを見つめあうよう、ラリーヤに言われていたものの、そのまま続けることは難しかったのだろう。もし、何でも後回しにしようとする今のティサが、どうにかユニスの瞳を捉えたとしても、もう一方は必ず伏し目になってしまうはずだ。どうであれ、アスリは胸にも股間にも視線を集めずに済むのだから、この器は今やアスリにとっての衣服だ。
一方、自らがたいまつの光源となったかのように、全裸ではつらつとしているラリーヤは、手際よく果物を切り出している。まもなくラリーヤが、手持ち刃の先に刺した最初の一口分を、まずティサへと向けた。
「じゃ、まずティサ、あーーん？」

この果物は、性から遠いように振る舞うティサを、昨日のラリーヤへと変えてしまう、第一歩ならぬ第一口なのだろうか。ただ、ティサの一挙手一投足は、疑義を基礎としている。

「……これ、何もついてないよね？」
「あぁ、昨日みたく、おまんこスッてしてあげよっか？」
「バカ！！そういうんないかって聞いてんじゃん！！」
「はいはい、今切ったんだから、なーんもないから。」

今日は先にティサであったから警戒が間に入ったが、昨日と同じくユニスが先であれば、何も考えずに一生懸命食べたであろう。簡単なやり取りでラリーヤにかわされたティサは、もう食べる以外に選択肢はない。

「大丈夫だから、ちゃんともぐもぐしてね？うん、おいちおいちーだねー？」

ティサを見つめる、どう見てもいやらしいはずのラリーヤは、ここでは母性を伴った、柔和な実直さを表情の中心に据えている。対するティサは、アスリからは後頭部と側面の髪しか見えないが、顎は動いているようであって、授受は正しく成し遂げられた模様である。赤子に向き合うような笑みを挟んだラリーヤは、今度は自らユニスまで産み落としたがごとく、緩んだ頬とともに、次の一口をユニスへも送る。

「はい、次はユニスね？あーーん？もぐもぐだよー？」

「ん、っ…………………。」

ティサと同じく、ラリーヤの方に顔を向けるユニスが頭の後ろで束ねる髪も、咀嚼の度に上下左右する。その最中、下方でだぶつい ている皮槍をアスリが見やれば、こちらはやや角度を取り戻してお り、ティサの腰のあたりに触れそうな高さである。どうしようもな い女の変態がいるせいで、洞窟は全て支配されてしまっているが、 やはりこの意気地なしも変態だ。

「おいちねー？さっきまでお水で冷やしといたんだから、さっぱり っしょ？ほら、アスリも食べなよ！いくよ？」

「いや、ちょっと！！」

母性から、一気に世代を少女に巻き戻しつつ、ラリーヤは果物の供給を続ける。ユニスとティサの体の壁を飛び越して、切り出した果物をの真上に投げてよこそうとしたラリーヤをアスリは止め、右手をユニスの背後へと回せば、滝の水の冷涼さがアスリの指先に載った。

受け取るままに、口の中へと放り込んだラリーヤからの一口分は、たしかにアスリが過去に食したどの果物よりもよく冷えている。だが、目の前で手をつなぎあったまま、まだ口を動かしている2人は熱く、残念ながら味に関して、アスリに酸っぱいほかの感想はない。熱源の奥では、やっとラリーヤも同じく果物を口に入れたようだ。

直後にティサの喉元が、ごくりと一度動いた。同じくユニスの喉元も、より男子らしい明確さを伴って動作する。慌てたアスリも、冷たい塊を一気に飲み込む。

ティサも、ユニスも、アスリも、まだ噛んでいるままのラリーヤを見つめるしかない。ゆっくり、じっくりと果物を味わうように噛む動きをするラリーヤの口元以外、洞窟は、現状のまま止まった。

「………何？　みんな？」
「は？　いや、そんなん……。」
　刃を手にしたまま、口元を覆って問うラリーヤが、意地悪な笑みを追加した。声をかけたにも関わず、ティサは言葉に詰まって、ユニスの左手とつなげるその右手も、力をこめるように握りしめる。ラリーヤもやっと、果物を飲み込む。
「……で、ティサ、次できそ？」
「えっ、それって……？」
　ラリーヤが一足飛びに進んで、一度立ち止まった洞窟を、再び勢いよく加速させた。刃に刺された次の一口分が、ティサの口元へと進んでいく。
「ほら、昨日の私みたく。もぐもぐして、ユニスのお口に、あーんしてあげようよ？」
「え、ちょっ…んんっ！！」
　ティサが拒否するよりも早く、その口中には、新たに切り出された果物が押し込まれてしまった。果物を刺しているのが刃であることもあって、こうされてはティサも怪我をしないよう、出された果物を唇で受け取るしかない。
「んー！んっ！」
「大丈夫、大丈夫。お目めは閉じようね？」
　残る果物と刃を足元に置きやったラリーヤは、すぐさま立ち上がると、ティサに優しいトーンで声をかけながら背後に回って、その

目元を右手で撫でていった。そうしてラリーヤは、ティサのまぶたが確実に閉じたことを視認してから、ゆっくりとティサの頭を後ろ側から両手で支えるようにして、ユニスの方へとティサの顔全体を向けさせたのであった。

「はい、もぐ、もぐ。まだごっくんしちゃダメだよー？」

ラリーヤの言葉に合わせて、ティサの口元も2回動いた。同時にアスリに向けて、ラリーヤの目元から新たな要請がかかった。ユニスまでもラリーヤを見てから、アスリに目を向ける。果物を抜きにして、ユニスにもティサと同様のことをしろということだろう。念のため、アスリが一度ユニスの目元を指さし、ラリーヤに目で交信をかけると、アスリの認識通り、ラリーヤが連続して小さく頷いた。

それをアスリが、ユニスに瞳で送り返す。ユニスも目を閉じたティサの表情を、一度真正面で受けとってから、自ら視界を閉ざす。すぐさま、アスリもユニスの背後へと回って、ユニスの両肩に両手を載せていく。

「ティサ、ちょっとだけ背伸びできる？」

ラリーヤがティサの頭を傾けさせながら、２人の口元の高さを合わせた。ユニスとティサの身長差は、ユニスの方が少し高い程度であるが、ティサから口移しするのであれば、用いるのは重力だ。アスリも無言でユニスの肩を上から押さえ、上からくるティサを、ユニスが受け止められるよう頭部の位置と傾きを調整する。

「ユニス、頭、ちょっと横に傾けて？そうそう。」

固く目を閉じたユニスの顔を、斜め後ろから覗き込むアスリも、ユニスに誘導する声をかける。極めて慎重な作業だ。先ほど、アス

リは極大の羞恥の指摘を頂戴したが、今はそれより目の前のひと時に全てを捧げなければ、ティサは前に進めないし、ユニスも中に入れない。

ユニスを強く感じる空気の中に、ティサに由来する新しい汗の匂いが、ふわりと加わってアスリに届く。アスリの補助する、ユニスのこわばった首筋にも、小さな汗の粒が浮かんでいる。2人が、緊張に包まれている。準備は整った。

「じゃ、ゆっくりね？」

始まりを告げたラリーヤが、そっとティサの肩を押してから、アスリにもまた目で合図した。アスリもユニスの肩を、柔らかく押し出す。

両手をつなぎあう2人が、口元の距離も詰めていく。斜め上からアスリが目視する中、唇と唇が、近づいていく。

「…………っ！！」

次の瞬間、2つの唇同士が、接触した。口づけをしたまま、2人が動きを止めた。2人の表情は、いずれも眉間にしわを寄せていて、閉じたまぶたに強く力をこめている。ティサもユニスも、自身の唇の感覚にだけ、全身の意識を集合させているのだろう。

「よしよーし。そしたら、お手てはこっちにしよっかー？」

アスリもまだ気が抜けない。今のラリーヤの言葉は、次の指示だ。向かい側でラリーヤが、せっかくつながったはずの両手をほどいて、その手をそれぞれの背中にまわしかけてやれば、アスリも同じよう

にティサの手をユニスの背に、ユニスの手をティサの背に流していった。
先にラリーヤによって、ユニスの手がティサの背に触れた瞬間、ティサがびくりと背中を震わせる。目を閉じて、唇は愛する人とつながって、何がどう転がるかわからないこの状況下、ティサも1つ1つの触れ合いに過敏になっているのだろう。

抱きしめあおうとする2人の影が、洞窟の壁に広がっていく。文字通り、2人の体の間には、まだわずかな空間が残されており、抱きしめあってはいない。当然、性に真の意味で厳格なラリーヤは、中途半端を許さない。

「ほら!2人とも!ちゃんとくっついて!」

ラリーヤが2人の尻をはたいた音が、空間に小さく響いた。それによってわずかに後ろに引かれた2人の腰を、ラリーヤは両腕で強く中央に向けて挟み込むようにして、2人の全身を密着させた。
驚いたように大きく動いた2人が、とうとうお互いをきつく抱きしめあった。その衝撃によってか、ティサの唇の端からは、ティサと果物の混ぜ物が一筋あふれ出す。

しかし、この衝撃は、ラリーヤとアスリの成すがままであったユニスをも変化させた。刻々と変化する光景を見定めるアスリが、続くユニスの行動から見出した真意は、自主であった。
いよいよ何らかの発火があったのであろうユニスは、ラリーヤの指示もないうちに、ティサをこぼさぬよう、頬の形を変化させた。それを受けてティサも、ユニスに全てを委ねて、閉ざしていた口元を緩ませていく。

ユニスが、ティサを飲んでいる。2人の眉間にこめられていた力

も、弱くなって、とけていく。
今度はティサも自らの意思で、ユニスの背中に回す両腕に力をこめて、密着の中にさらにユニスに近づこうとすれば、ティサを飲み干したユニスも、背をのけぞらせた中腰をやめて、元の身長に戻りながら、ティサの唇を独占する。触れ合う唇の様子を追いかけようと、アスリがユニスの背後から、さらに2人の顔を覗き込めば、そこに広がっていたのは男女の煌めきだった。
美しかった。2人はやっと、羞恥の壁を乗り越えて、その奥に何らかを見出したのだろう。これが、森で長い時間をかけて育まれた、愛だ。
アスリは、羨ましくて仕方なかった。2人がともに育ちながら分かち合ってきた時間に、アスリが割り込む余地など、あるはずがない。美しい2人の時間に、アスリは嫉妬してはならないし、こうしてこれから、初めてと初めてが結ばれていくのだ。
ここまで逐一指導していたラリーヤも、抱きしめあう2人を優先する。唾液が、唾液と絡み合う小さな音が、洞窟中にこだまするかのように、アスリの鼓膜を強く殴打する。切ないアスリの瞳の奥が、より一層寂しくなる。
ふと、ティサの長いまつげが、ほんの少しだけ上方に持ち上がった。最も近くでユニスを見つめるティサは、今、ユニスに何を思うのだろうか。ほどなくして、ユニスの瞼もティサに続く。
薄く開かれた4つの目が、見つめあった。目があって、次に2人にもたらされたのは、おそらく少年と少女としての、普段通りの2人の関係性に違いない。吹き出すようにして、ようやく2人は唇と体の密着を外すと、ユニスはアスリから見て右に、ティサは文字の

壁の方へと顔を背けたのであった。

「……頭おかしくなりそう。」

ティサがはにかんで、小さくつぶやいた。未だ左手はユニスの背に回したまま、右手の甲を口元にやって、こぼれてしまった果物をぬぐいながら、赤らむティサの頬に広がっていたのは、言葉に反して、明らかな幸福だった。

相変わらず悔しいほどに羨ましいティサの、頭がおかしくなりそうなほどの幸せは、おそらく果物を通じてユニスにも伝わったに違いない。それでも口元をつなぎ終えた２人の根底は、未だに羞恥によって支配されているのか、または口内の残滓を味わうために、ひと時の休息を求めているのか、差し込まれた一拍の間は、洞窟全体を静寂に向かわせようとしていた。

「ティサ、まだ全然最初だけど？大丈夫そ？」
「………………バカ。」
「ユニスも、おいちおいちーだったね？」
「やめろよ……。」

　もちろん、ようやく２人に灯った種火を、変態の達人が無駄にするわけがない。からかいの思いとも、熟達したねぎらいともつかない、満面の笑みをティサの背後で浮かべるラリーヤは、当事者２名にそれぞれ声をかけ、最低限の返却を受け取ると、続くステップを踏み出していった。

「うわっ！！！」

　突如、アスリの視界から、ティサが崩れ落ちるようにして消えた。その動きに合わせて、軽く身を屈めたユニスの肩越しに、落下したティサをアスリの視線が追いかければ、地面に両膝をつけるティサは、振り返って斜め上のラリーヤに驚きと怒りの眼差しを飛ばしていて、両肩はラリーヤによって、これ以上転ばぬよう支えられている。どうやらラリーヤは真後ろからティサの膝の裏めがけて、自分

の膝でも当てにいったようである。

「ちょ、何！？いきなり！？」
「ほら、私じゃなくて、前見てよ。」
「うわっ！！」

いらだつティサに次にもたらされたのは、また驚きだ。振り返ったティサの目と鼻の先に陣取っているのは、ユニスの皮槍以外にない。

これほどの近さであれば、大人の形を取るまでもなく、ティサにもユニスの芳香が十分に届いてくるはずだ。真後ろから覗き込んでいるだけでは、いよいよ不満足が著しいアスリも、思わずティサの右隣に回ってしゃがみこみ、ティサと同じ高さからユニスを眺めようとすると、向かいではラリーヤもアスリと同じように身を低く構えていった。

だが、せっかく女子3人の目線がユニスの一点に集まったにも関わらず、途端にユニスは腰を後ろに引いて、ティサの背を離れて自由になっていた両手で、飛び出た道具を覆い隠そうと試みたのであった。無論、両隣に控えるラリーヤとアスリは、合議をせずとも判断が一致している。

「こらっ！ちんちん出しな！」

幼い子どもを叱りつけるかのようなラリーヤの喝に合わせて、ラリーヤとアスリがユニスの悪い腕を片方ずつこじあければ、髪紐で彩られた、まさに子どもの形の槍は、再び真上に向かう勢いを十分に取り戻していた。目にしているだけではたまらず、本能のアスリは鼻から静かに息を吸い込んだが、先ほど乳を放ってぬめったままの皮余りからは、思いのほかユニスに由来する強烈な狂気は得られない。

やはり子どものままでは、ユニスは全てを表現できないのだろう。アスリはこの皮膚をめくりあげて、その下の1粒がさらされた空気を直に呼吸したいし、その次は今のようにユニスを子どもにも戻したい。ティサは今日の主役なのだから、その程度は率先して実践すべきなのだ。

「ほら、ティサ。ユニスのちんちん、またおっきおっきしたんだから、ちんちんの紐、ほどいてあげよ？」

ここでも、アスリの思いはラリーヤと同調した。アスリの方は一足飛びでユニスを大人にすることを先行させようとしてしまったが、真正面の特等席に座りながら、皮を眺めて固まっているだけのティサに行動を促した、ラリーヤの意図の方向性はアスリと変わらないし、まず髪紐を外すことも等しく優先事項だ。

「えっ……。」
「つけたまんまの方が良い？女の子みたいで、かわいいちんちんにしとく？まぁ、ユニスの髪の毛も女の子みたいに縛ってるし、おんなじか。」
「おい！っざけんな！ティサ！外せ！」
「ユニス、そんなん言うのにへっぴり腰してたらダメっしょ？男の子なんだから、もっとちんちん前に出さんと？ちんちんちょん切って、女の子になる？」
「なんだよ！ラリーヤ！」

恐怖でなかなか切れない長髪に加えて、本来、最も男性的である箇所まで、ラリーヤに女子のようだと揶揄され、どうにかユニスは口調のみ男性らしくなったものの、こうまで言われてもなお、背から腰にかけては情けない姿勢を取り続けている。一方、ためらうような仕草を見せたティサも、ラリーヤの正当性についに気づきを得

たのか、両手をゆっくりと、ユニスの薄毛の付け根へと伸ばしていった。

「……ユニス、取ってあげるから。ちょっと前。」

苦しいユニスは、ティサの救援の申し出に屈するしかない。やや前進した屹立に対峙し、紐をつまむような形を取ったティサの指先は、重い荷物を持ち上げた直後のように、かすかに震えている。

「……っ！」

ティサが、紐に触れた。ユニスの槍も、震えた。途端にユニスの先端から一滴、糸を引きながら涙が溢れ出す。

「うわぁ……。」
「んふふ。こんなに元気なら、さっきいっぱい出ちゃったけど、大丈夫そうだね。」

ティサは身を引くような、ため息に近い呆れ声を上げたが、嬉しそうな口調で続いたラリーヤと同じく、その目尻は微笑みつつある。気づけばアスリも、自分の口が半開きだ。せめて馬鹿な顔に見えないよう、唾を飲んで口元を締めなおしたアスリがユニスを見上げれば、こちらはなぜか目からも涙が流れ出てきそうなほどに眉を歪ませて、唇を結んだままティサの指使いをじっくり監視している。ティサを飲んだ上に、裸の女子3人を前にして、何が不満だと言うのだろうか。

ほどなく、約1日の間、ユニスの性器を女子の髪として留めていた紐は、ティサの指先につままれて、ユニスの皮の真横にぶらさげられた。紐には、ユニスの付け根に残ることができなかった、大人

に向かう証が1本、巻き付くように付着していた。

「え、ねぇねぇ！見て見てー？毛がついてる。」

「ホントだー！やー、きたなーい。」

羞恥の上に、口づけで頭がおかしくなりかけていたティサは、弱るユニスに優位な手作業を取りなして、元の調子を幾分取り戻したのか、気づいたものをからかうように、にこやかに事実を語った。ここにアスリも口を挟んだのだから、アスリ自身も自ら思っている以上に、全裸なりに平静に向かいつつあるようである。今のティサは大きく膨らんだ2つの乳房も、それぞれの頂点に立つ飛び出す乳輪と乳首も隠そうともしていないし、アスリも貧相な胸をさらけ出したままだ。そこにふいに意識を向けてしまえば、この均衡は崩れるし、アスリも自慰がしたくて仕方ない一方になるのだから、余計なことはアスリも考えないようにしなければならない。

それよりやはり、この1本と袋に入った2玉は、女子の心を豊かにする力を持つようである。同性のティサやラリーヤも、アスリがあまりじっと見つめていられないほどに性的だが、面前の愛する異性も非常に騒々しい。

対する持ち主は、心持ちだけは男子である。槍の穂先から何かを垂らし、乏しい体毛の一部まで没収されてもなお、ユニスは声にかすかな怒気をにじませながら、続けていった。

「うっさい！ティサもアスリも生えてんじゃん！ってかティサなんて、めっちゃボーボーだし！」

「は……？サイテー。私とアスリにも、ラリーヤみたくつるつるにしろってこと？だったらユニスも生えてんだから、自分が先っしょ？」

「ユニスも、つるつるちんちんにしてあげよっか？子どもちんちんなのに、赤ちゃんになっちゃうねー？」
「やだよ！」
　ユニスの反撃は、常に短く失敗に終わる。加えて今日は、ラリーヤがユニスも剃毛するのだそうだ。
　素晴らしい試みだ。ユニスが赤子にまで戻ってしまえば、ティサは大人である優位を常にユニスに示せるに違いなく、陰毛がついたままの髪紐を指先で振り回して笑うティサも、もっと軽やかになれるはずであるし、アスリもそれで良い。事態がユニスの剃毛に向かいつつある中、それでも終始一貫して乱れかけた流れを本筋に戻すのは、すでに剃り上げた一筋を有するラリーヤの役割だ。
「ま、ユニスのお毛け剃るのはあとにしてさー。紐もほどいて、ユニスも頑張れるようになったんだし、とりあえずティサ、ちんちんにもちゅっちゅしてあげよっか？」
「は！？」
　ティサの指先から、髪紐がどこかに飛び出し、逃げていった。同時にアスリの真後ろの置きたいまつの方から、羽虫が火に入ったかのような、何かが燃え入る音が上がった。余裕が出てきていたはずのティサにも、一瞬で驚きの火が広がっていく。
「ちょっと！！嘘でしょ！？」
「さっきお口とお口で、上手にできてたじゃん。」
「いやいやいやいや！おちんちん……だよ？」

「私、昨日おちんぽペロペロしてたとこ、見たっしょ？あんな風にすればいいから。」

ぐうの音も出ないティサが、ラリーヤの急な旋回を前にこわばった。人を説得するのにあたって、過去の実績ほど役に立つものはない。昨日のラリーヤにできて、今日のティサにできないことなど、原則として存在しないのだ。

固いティサの口元と、真上の主人の顔を見上げるユニスの皮まみれの1本が、アスリの心臓を加速させる。昨日も目にした口と、性器の組み合わせだ。あの太陽をまとったイケメンのくすんだ輝きは、日食のようにラリーヤの口中に収まっていた。

一方、ユニスは常時、日食だ。これから食事の前にティサは、一度ユニスを太陽にして、薄暗い洞窟を照らし出すのだろうか。それともティサはこのまま、日食を喫食してしまうのだろうか。どちらをティサが選択するにしても、この時点でアスリの胸元は苦しいし、自慰がしたい。洞窟の地面にはもう、ほぼ確実にアスリの恥ずかしい池ができあがりつつある。

「ほら、どしたん？まず、ちんちん持って？昨日は普通に触ってたじゃん？」

その通りだ。昨日、ラリーヤから大人と子どもの違いについて説明を受けた後、ティサは自ら進んでユニスの槍に直に触れて、たゆんだ皮膚をめくりあげ、ユニスを大人にしたり、また被せて子どもに戻したりして遊んでいた。それが今日、衣服を身に着けなくなっただけで、触れられない訳がないのだ。

一呼吸を挟んでから、再度ユニスの付け根に向かうティサの両手の指先は、すぐ前に髪紐をほどいた時と同じ、紐をつまんだような形で、またしても震えている。先端は子どものまま、わずかに大人に進む柔らかそうな体毛の上に、ティサの両方の小指と薬指が置か

れると、まだ腰を引くようにしたままのユニスの腰が、びくりと震えた。今度は涙も落ちないが、ユニスの皮余りもここだけ水浴びしてきたかのように水気を帯びている。

日々ユニスの捕らえた獲物をさばき、自然の様々を採集して働く、少し色づいたティサの人差し指と中指と親指が、女性らしさを伴って、静かにユニスの槍の柄を包み込んだ。手にした上向きの柄を、ティサがそっと自らの顔の方へと向けていく。

ここから先は、難易度が一気に跳ね上がる。仮にアスリが口にする係を請け負ったとしても、昼食の肉を食べた時のように、または昨日のラリーヤのように、臆せず食することはできないだろう。

他人事とは思えぬほどに、アスリにも伝わってくるティサの躊躇の中、一滴、雨が降った。槍の穂先からの涙でなく、アスリの真上から降った雨だ。雨に向かって、ティサもラリーヤもアスリも、一斉に上目遣いをユニスに送る。

両目を大きく開き、ティサと同程度か、それ以上にこわばっているユニスのこめかみから顎にかけて、汗がにじんでいた。これが今、雨となって落ちたのだ。

愛するユニスも、一生懸命だ。そのユニスに、アスリが今なすべきことは何か。

手をつなぐことだろう。隠すことを妨げるためだけに右手で掴んでいたユニスの左手首を、アスリが手のひらにつなぎかえて、さらに指まで絡めさせてやれば、アスリの右手に、ユニスの応じる力が込められていく。アスリの思いやりも、熱っぽい湿気と一体となって、つなぎあわされた手中に宿る。

「……ティサ、汚いから。いいよ。」

立ち止まったティサに、ユニスが助け舟を送り出した。今のユニスの声は、いつも4人で過ごす時のユニスのものでなく、昼前にこの洞窟でティサとユニスが2人だけになって合意形成したことを、アスリが盗み聞きした時のように凛々しかった。

優しい男だ。だから、アスリはユニスが好きだし、ティサもユニスが好きなのだ。気配りと気遣いのラリーヤも、さすがにユニスの思いやりを茶化すことも、強引にティサを進めさせることもできないのか、ここは無言だ。

ティサが、時間を使う。次のティサの一手で、状況は前にも後ろにも、どうにでも転がりうる。今が洞窟の分岐点だろう。

固いティサの表情は、短い間に真面目から真剣を経て、最後はユニスと同じ、優しさへと着地した。決まった。

「…………ユニスんなら、汚くないよ。」

尻すぼみに、小さく述べたティサが、目を閉じた。長く美しいまつげが、ほんの少し上に向きを変えるのに合わせて、ティサの顎も等しく角度する。

軽く前に突き出した、ティサの薄い唇が、ユニスの性に近づいていく。ティサがユニスの直前の空気を吸い、静かな吐息を動かない槍がかき分ける。

「…………っ！！」

「んっ！！！」

とうとう、ユニスの特徴的な皮膚が、ティサの唇と接触した。首を一度前に送り出してユニスと触れたティサは、すぐに頭を引いて唇を離す。

「っ！！！」

ティサが、連続した。もう一度、同じようにユニスに短く口づけをしたティサが、後方に倒れるようにユニスの皮先から唇と距離を取っていけば、２人の接地点の間には、ティサの唾液かユニスの涙か、それとも両方が混ざったものか、透明な線状の紐飾りが引かれていった。そうして出来たばかりの新たな紐を、薄目になったティサは、左手だけをユニスの槍から離して、顔の前で手を振って断ち切ると、左の手のひらで眉間から鼻、ユニスの口と性器に触れた口までを覆って、落ち込む時とは異なる仕草で頭を落としていった。

「めっちゃ恥ずかしい………。」

また幸福だ。心中をそのまま表しながら伏せるティサの、少しでも手で隠そうとする顔の隅々からこぼれるのは、ユニスへの想いを伴った、明らかな笑みだ。羨望をはるかに越えて、真隣で羞恥と愛に共感するアスリの胸の内側では、ティサが得ているであろう幸せが、なぜか自分自身のもののように、じんわりと染み渡っていった。

「ティサ、すごい。」

自らの感情を説明できなければ、正しい表現も見当たらないアスリは、ティサを褒め称えたくとも、短く簡素な言葉しか発せられない。それでも、皮の前にティサが照れ、アスリが脳裏でうろたえている真横からは、間髪入れずにラリーヤの誘導がかかる。

「いいねー。いいねー。よしよし、ティサ、ちゅっちゅの次は、パクッてお口で全部食べちゃお？」
「えー？全部ー？」
「そうそう、パクッて！ほら？さっき、ユニス1回ぴゅっぴゅしちゃったじゃん？この前言ったみたく、あのお乳、ちんちんについたまんまだと、ティサのおまんこ入ったら、赤ちゃんできちゃうから。パクって食べて、ぜーんぶキレイにしないと？」
「ウソー？お口でお掃除するってことー？」

ためらいながらもユニスに口で攻めたティサに、アスリがこっそりと心を重ね合わせる間も、ラリーヤは怪しげな片手のジェスチャーに論理まで伴って、ティサをさらに前へ前へと推し進めていく。
一方、恥ずかしがりのティサは、再び羞恥が全身の中心に据えられてしまったようであるものの、ユニスに一口、二口と接触したことで、少しは何かが吹っ切れたのか、先ほどまでなら絶対に言い訳を続けるであろう、ラリーヤの次なる課題に対して、語った内容の割には、否定の程度を弱めつつある口ぶりである。
あれほど渋っていたティサも、性に対して柔軟さを見せようとしているのだから、ユニスの変態が、性器から口を通じて伝染してき

ているのだろう。ティサがこれほどということは、仮にも今、この口づけの役目をアスリが負っていれば、おそらくユニスのこの上向きの皮に唇で触れた段階で、勝手に本能で突き進み、ラリーヤと化してしまったに違いない。

「ユニス……？」

左手で口元を隠し、右手では1本を手にしたままのティサが、上目遣いの幸せな笑みの送りながら、ユニスに呼びかけた。その先に、凛々しい思いやりのユニスはもうおらず、皮膚への口づけで壊れかけた代役のユニスがただ立ち尽くしていて、なんとも言い難い目線でティサを中心に、アスリたちを無言で見下ろしている。伏し目を下から見上げると、このように見えるのだ。

ティサが左手もユニスの付け根に戻して、白い歯を見せた。つい先ほど、ユニスはティサとの口同士の口づけで発火し、自主的にティサを飲んだ。今度はティサが発火し、自立する。

「っ！！！！！！」

次の瞬間、ティサが一口で決めた。同時に、ユニスのだぶついた先端の皮膚が、洞窟から姿を消した。

「わぁー！！！！！」
「すごーい！！！！！」

ラリーヤが歓声を上げ、アスリがまた短い言葉で感嘆する。あのティサが、よくできたものだ。今やユニスはティサに捕食され、表に出ているのは、根元を両手で押さえられた茎だけになった。

「……っ、ん一っ！！んっふっふふっふ！！」

ティサは、くわえながら笑っている。食べられてしまう前の時点で、ユニスはすでに半壊していたが、ティサの方は全壊して、何より最前面に立つのは、楽しさになってしまったようだ。ティサが笑えばラリーヤも笑うし、アスリも笑う。

アスリが笑うのは、ティサをからかっているからではない。これは、やり遂げたティサへの称賛であって、おそらくラリーヤも同じだ。その思いがどこまでティサにも伝わっているのかは定かではないが、とにかくティサもユニスの皮先をまるごと口にふくんだまま、笑い続けている。

対するユニスは、微笑みの輪に加われない。今、女子3人は結束して強く、いくら上から見下す姿勢を取っていようとも、たった1人の男子は明確な弱者だ。まもなく、ユニスが得たのは、まさかの痛感であった。

「あ痛たたたたっ！！！！！」

突如として、悲鳴に似た声を上げたユニスが真後ろに腰を引いたことで、唾液でぬらめく子どもの槍がティサの口からすっぽ抜け、ティサの両手からも逃げ出した。続いて、洞窟に戻った槍は、勢いそのままに、ユニスの下腹部に衝突するのにあわせて、水っぽい音を弾かせる。

真上を目指すユニスの1本の、まるで別な生き物のような動きを目にして、強者の女子たちが投げかけるのは、微笑みをはるかに超えた爆笑だ。今もコンプレックスにまみれた胸をさらけ出している羞恥はどこへやら、意図せず両手が自由になってしまったティサは、手をはたきながら笑って、たった今目にしたことを口にする。

「んっふっひっひっ！何今の！？おなかでぺちーんって鳴った！！」

「バカ！！ティサ！！噛むなよ！！！」
「いや、んっひっ……！全然噛んでなんかなかったし！？」
「いや歯が！！」
「んっふっふっふ！ユニスがこどもちんちんだから、悪いんじゃん？ティサ、ユニスの皮かじって食べて、大人にしようとしたんしょ？」
「えー、ここかじっちゃうのー？ほら、もっかい！おちんちんぺちーん！」

ラリーヤの言葉に続いて、おもむろにユニスの皮槍に伸びたティサの指先が、柄の中ほどを押さえて放せば、また洞窟にしおらしい破裂音だ。対して、女子の爆笑は元気に連なる。
笑ってばかりで口も挟めないアスリは、ラリーヤの述べたことに触れられなかったが、今のラリーヤの指摘は正しい。次は、３日前に最初にユニスを丸裸にして剥き上げあげた時のように、ユニスが尻を引けないよう真後ろを壁にして、ティサにしっかり歯を立ててもらうべきだろう。

だが、何も抵抗することのできず、ひたすら性器を異性に笑いものにされるユニスにも、男子たる誇りが残されていたようである。３人がひとしきり笑い声を上げ、それぞれ目に涙まで浮かべて腹をよじらせているうちに、ユニスの槍の向上心は、洞窟の天井から、ティサの顔面程度の高さにまで、高度を落ち着かせていってしまったのであった。
この異常を真っ先に検知したのは、定めた目的を必ず遂行できるラリーヤだ。遠回りの小道に入ってしまったことを、すぐさま理解したラリーヤは、笑いながらも自然とユニスとティサを本道へと導いていく。

「んっふっふ……っ！ねぇ、ティサ！次はユニスのこと、大人にし

てから食べちゃおっか？中身んとこもまだ、さっきのお乳残ってるだろうし。」
「えっ！？ホントにかじって千切んないと！？」
「バカ！！！ヤメロ！！！」

ユニスのプライドは損なわれたが、ティサは確実に耐性をつけたようだ。現に、まだ顔中に笑みを残しているティサは、ラリーヤの発言を受けてすぐ答えながら、一切の物怖じもせずにユニスの先端を指先でつまんで手前に大きく引き伸ばしている。
「それでもいいけどティサ、ユニスがやーやーだってー。」
「えー、じゃあしょうがないなー。とりあえず、今日もむきむきするー？」
「っざけんな！！」
「なにー？ティサがおちんちん大人にしてくれんのに、ユニスは子どものまんまがいいんー？」

面前で伸びる皮膚を前に、アスリもユニスを揶揄する流れに加担する。黙して自己に意識を向けることも良いが、自ら性にあふれる言葉を直接口にすることも重要である。
「おいティサ！！もう痛いから！！引っ張んなってば！！」
「ユニスがお尻後ろに下げてるからじゃん？ほら、ティサの前に持ってく！」

この口調でユニスを思いのままに操れるのであるから、ラリーヤは将来、手際よく子どもをしつける良い母になるだろう。ここにティサも同調して、伸びきった皮膚をさらに手前に引いては、ユニスも腰全体を前に出す以外にない。
ユニスに退路がなくなったところで、ティサが伸びた先端から指

を放し、両手をまた柄へと伸ばしかければ、早くもユニスの槍は高さを取り戻しつつあった。繰り返すが、言葉を口にすることは重要であり、アスリも目にしたものをそのまま述べる。

「またおっきくなってる！」
「うっさい！！引っ張ったからだし！！」
「えー、痛いって言ってたんに？痛くされると、嬉しくておっきくなるん？ヘンタイだー。」
「こんな変態のおちんちん、本当に私に入れんのー？」
「なにティサー？さっき、ユニスのなら汚くないって言ってたじゃーん。それとも私かアスリで、先に入れちゃうー？変態ちんちんだけど。」
「バカ、いいからユニス、大人のおちんちんにするよ？」

今、ティサはユニスを受け入れることに疑念を呈したが、その真意はためらいではなく、あくまでユニスを追い詰めていながら、責めることに喜びを見出しているのだろう。その根拠は、やりとりが冗談めいているためだけに限らず、アスリもユニスに愛と優しさをかけながら、激しく辱めたくて、厳しくいじめたくて仕方ないからに他ならない。
その上で、ラリーヤも軽く向き先をティサに変えたものの、ティサは意に介さずにユニスに注目を続けている。やはりティサは、強くなった。

またしても、紐をほどく形を、ティサの両手の指先が取った。それら指先が、今度はユニスの付け根ではなく、皮で覆われ丸みを帯びた上方の、段差の箇所へと置かれた。日の出が近い。

「いくよ……？おとなーーー。」

昨日と同じ掛け声を小さくつぶやいたティサが、ゆっくりと指先を奥へと流していく。たるんだ表面の余剰が、徐々に槍の根元に向けて集まり出す。
ティサが伸ばしゆく皮膚は、一度では全てを後退させきれず、まだあの中に控える肉も姿を見せない。中間に押し戻されたその皮余りを、ティサは左手の指で押さえながら、右の指はまた段差に戻して、さらにユニスを大人に向上させる。

丸い粘膜の頂と、ユニスの内的な最先端たる、ラリーヤのものとはまた異なった縦向きの割れ目が、少しずつ究極を現わし始めた。
先ほどのラリーヤの予見通り、男子の乳の残滓を薄くまとって、今にも再び涙の一滴をこぼしてしまいそうなユニスの核は、昨日に続いて今日もまた、桃色を超えて赤色に近く、熱い湯気でも立ち昇らせそうである。
思えば3日前、最初にユニスを剥き上げた直後は、アスリが覚えている限り、今より多少桃色に近かったはずだ。それが昨日と今日は赤いのだから、一度乳を搾ってしまうと、男子はここまで赤く腫れてしまうのかもしれない。

ところが、その全貌が未だ見えぬうちに、湯気よりも先に立ち昇ったのは、暴力的な狂気であった。鼻孔からアスリに侵入した乱暴なユニスは、視界をくらませかねないほどに、すぐにアスリの脳を著しく殴打する。

「くっさぁ！！」
「うっわ……！！」

正気を保つのに精一杯で、一言も発せられないアスリに代わって、ティサが匂いを述べ、ラリーヤは驚きの声を上げた。この匂いに、ティサは顔をしかめるような仕草を一瞬見せたものの、臭いと言いながら瞳を輝かせているのだから、着実にティサも変態に進化しつつあるようだ。

対してラリーヤは、昨日はほぼ同じ状況で今のティサに近い振舞いであったにも関わらず、直前から一転して、頬を引きつらせて何か言いたげである。ユニスの顔を見上げたラリーヤは、ティサが途中まで剥き出した狂気の1点を指さしながら、物言いをつけていった。

「え、ちょっとユニス、さっき水浴びしたんよね？」
「なんだよ！してたし。ってか、俺が体拭いてる時、俺の布取ってこうとしたじゃん！」

どうやらラリーヤは、アスリとティサがいない間に、ユニスにちょっかいをかけていたようである。この4人組が、仮にもラリーヤとユニスだけの2人ペアであれば、とっくにユニスは捕食されていたことだろう。怪訝な視線を、アスリもティサもラリーヤに送りつける間もなく、ラリーヤはユニスに素直な疑問をぶつける。

「ちゃんとちんちん、洗った？」
「洗ったし。」
「じゃあ、なんでこんな臭いん？」
「知らん。ティサがなめたからっしょ。」
「はぁ？」

今度はティサも浮かべていた笑みの量を大きく減らし、尻上がりの一声をユニスにかけた。もっとも、ティサの手中には、すでにユ

ニスの最大の弱点が収められていることに変わりはない。ユニスの理屈はあまりにも無防備であって、戦う前から勝敗は決しているのに等しい。

「何？全部剥くよ？」

案の定、ティサは声を低くして、ユニスを威嚇した。別にティサは今の言葉を述べなくとも、ユニスの剥き上げはもともと決まっているのであるし、昨日あれほど子どもに戻して、大人に剥いてを繰り返したのだから、内容面でユニスを威圧する効果は薄い。それでもティサは中途半端になったままであった皮膚を、勢いよく付け根に向かって推進させると、もう一度槍の柄を持ち直して、奥へ奥へと剥きあげたのであった。

くっきりとしたユニスの先端を一周する段差が、全て露呈した。昨日のアスリは、上から槍を見下ろしていて見抜けなかったが、こうして目の前で見るユニスの裏側、先端の割れ目の真後ろから伸びて、袋までつながる縫い目とをつなぎとめている、不思議な一筋の真横には、ぬめりを帯びた白っぽい何かも付着している。

狂気はより強度を増して、濃縮しつつある。自慰がしたい。性器が寂しい。アスリの体のどこかの血管は、きっと数本が弾けて、破れてしまっている。

「うっわ！！マジでくっさい！！私の口、こんな臭くないし！！なんかもしかして、昨日より臭い？」

「うわー、全然ちんちん洗えてないじゃん？後ろっかわのとこ、お乳が固まっちゃってる。きたなーい。」

ティサもラリーヤも、完全にユニスの糾弾に舵を切った。だが、ここまで責められても、ユニスは弁解の余地を見出しているのか、

強く展開する。

「いや！！だからさっき洗ったってば！！」
「ウソ？ちゃんとちんちん剥いて洗ってないっしょ？」
「は……？」

居直ったはずのユニスの形勢は、ラリーヤの一撃で早くも悪化した。思えばアスリですら、今日の先ほどはあまりに強い欲求のせいで、丁寧に洗うことができなかったとは言え、中央にはしっかりと水をかけ、大きく飛び出している左右も伸ばして清めているのだ。ユニスにとって清潔とは、見かけだけの外側だけが対象なのだろう。

「ほら、やっぱり！じゃあ、もしかして、昨日私がなかよしするとこ見てぴゅっぴゅしちゃったあとも、あと、この前ここでぴゅっぴゅしてからも、ずーーーっと、ちんちん中身このまんま？」
「なんだよ！別に普通だし！」
「普通じゃないっしょ？こんな汚くしてたら、腫れちゃって痛くなっちゃうよ？」

この狂気は、アスリからしてみれば、文字通り狂おしくなるほどに芳醇である。だが、ユニスの言うような普通でなく、一般的な普通に照らし合わせれば、ラリーヤの方が明らかに正義で、このまま放置すればユニスは病んでしまうだろう。
そういえば、アスリの父がカインタに偵察に行き、母とともに泥酔して深夜帰りしたあの日以来、アスリはダカクの核がどうなったのか目にもしていないし、言葉もかけていないが、ダカクもこの個所の衛生を保てているのだろうか。今はユニスが最優先であるし、自身だけでなくティサもラリーヤも全裸であって、ダカクを介在させる余地は一切ないとは言えども、アスリも記憶の断片に留めて、後日、今ラリーヤがユニスに向けた言葉を、そのままダカクにも送

って、脅してみても良いかもしれない。
匂う核に一瞬の思慮をアスリが挟み終えるまでもなく、ラリーヤの普通に対しての疑義を受けたのは、今度はティサだ。その目尻は、アスリと同じく何らかの思索を組み入れていたのか、怪しく細められている。
「うわー。だからユニス昔腫れちゃって、うちのママにおちんちん診てもらってたんだー。ママに剥いて洗ってもらってたん？」
「ティサ、うっさい！あんなん、死ぬほど痛かったし！」
「え、待って待って待って！じゃあ、私知らんとこで、ずっとママにおちんちん洗ってもらってたん？それでママ死んじゃったから、おちんちん洗えんくなって、こんなん？」
「バカ！！んなわけねぇし！！あん時から、もうずっと見せてなかったし！！」
「じゃあさ……、じゃあさ！ってか！ママに看病してもらった時とか、そのあとも、なんか言われんかったん？」
「はぁ？」
「ラリーヤ言ったみたく、おちんちんの中身もきれいにしようよとか？」
「…………いや。」
ラリーヤから引き継いだティサの、畳みかけるような濃度の高い責めに、ユニスは否定の一句をこぼして停止した。ここまででユニスは全てをさらけ出しているが、攻勢をかけるティサはまだユニスをもう一皮剥かせたいのか、指先をより奥地へと押し込んでいる。真っ赤になって、真上を向いているユニスの段差の真下では、桃色だった皮膚が極限まで引き延ばされて白に近づきつつあり、そこに細く青い静脈が数本浮かび上がっている。裏側でなんとかつながっている一筋は、今にも千切れてしまいそうだ。
それでもユニスは、形勢が不利である以上、痛みすら主張せず、

匂う1点を女子の前に出したまま、黙っているしかない。沈黙を決め込むユニスを待ちきれなくなったティサが、ユニスへの切り込みを一段深くする。

「……いやって？ママなんて言ってたん？」
「いや……、何回か……、言われたかも。」
「何？ママに綺麗にしろって言われてたんに、やらんかったん？」
「うっさい！！だって剥いたら、その……。」
「剥いたら、何？」
「………………。」
「………何？」

ティサの低音が、音を下げた。もう、ユニスに黙秘は許されない。

「………剥いたとこ、触ったら…………、変な感じするし。」

つないだままのアスリの右手が、ユニスの左手によって強く握りしめられたのとともに、ティサの指に押さえられているユニスの槍が、持ち主の意思を伝えるように小さく一度震えた。その一点が臨む、筋肉質で引き締まった素晴らしい肉体の先、アスリが見上げたユニスの表情は、明らかな羞恥によって歪められている。
女子3人の面前、丸裸になって、長い皮膚も全てめくりあげられて、匂いも嗅がれ、ついに弱点に触れた時の感覚まで告白したユニスが、今どれほどみじめで、無様で、悔しいのか。その胸中を想起するだけで、アスリの体中に鳥肌が広がり、嗚咽しかねないほどの恥辱がこだまする。愛する人の苦しみは、アスリのいびつな性をより一層捻じ曲げ、熱く煮えたぎらせ、うずいて仕方のない泉の源泉を、祭夜のロマドウのように踊り狂わせていく。

つまりユニスも、この赤い一点がいかに過敏であるか、十分に認識していることになる。やはり男女の作りは、多少は違えども基本は同一だ。現にアスリも今日の水浴びでは、過剰な高揚によって、大して中央には触れられなかった。今、仮にもそこに手をやれば、少ない手数で確実に大波が到来するであろうし、母はそれを常に許さず、昨日のラリーヤも許さず、アスリもまだ自分を許せない。
それでも、アスリは普段からその部分に触れて、母に禁じられた遊びを取りなせてはいるし、いやらしい思いさえ意識しなければ、中に水をかけて洗えるのだから、ユニスの楕円球はアスリのものよりもはるかに感度が高いのかもしれない。そうであるなら、アスリはユニスが泣いて叫んで煙が上がるほどにこすり上げて、ユニスの尊厳が粉々に砕けてしまうほどにいじめぬきたいし、その羞恥を自らにも分け与えた上で共感し、今度は母性でくるみこんで、ユニスを子どもに戻してもみたい。

剥き出しのユニスを見つめながら、アスリは無言で狂気を噛みしめているだけだが、ユニスの羞恥はティサの方にも何らかの衝撃を送ったのか、ティサもこれ以上はユニスに言葉をかけず、預かった攻撃の役目を終えた。大人を形どる狂気の１本だけがもうもうと立ち上る中、髪をかき上げながら、代わってラリーヤがユニスまみれの空気を大きく吸い込んで、吐き出した。

「はぁーーー。ホント信じられん。カインタだったら、ちんちんの皮切る前の子も、ってかもっとちっちゃい子も、ちゃーんとみんなちんちんの皮おろして、中身洗えんだよ？あーーー、せかっく盛り上がってきたんに！こんなんじゃもっかいユニスのちんちん洗わん

とじゃん？」
全て先回りして最短経路を選び続けてきたラリーヤも、ユニスのこの体たらくは完全な計算外だったのだろう。その口ぶりには怒りよりも呆れと徒労感が、ユニスで充満する洞窟の空気ほどに色濃く反映されている。
ここでふと、ダカクの核への懸念を心の片隅に置きやってほどないアスリの脳裏に、ラリーヤのため息に対する解決策が一筋よぎった。アスリにはダカクを荒療治した、藪医者としてのキャリアがある。今回の症例はダカクの際と趣は異なるが、治療の手段に変わりはないはずだ。

「あ、ねぇ、なんかでゴシゴシ拭いちゃうんはどう？ラリーヤ、さっきなんか拭くのも持ってこなかったん？」
「そうだね。ちんちんの洗い方、あとでユニスに教えんとだけど、今から洗うのに下降りりんの、めんどいし。ぬるぬるのお薬なら良い匂いだから、これそのくっさいとこにいっぱい塗って、きれいに拭いちゃおっか。」

乾布摩擦を想定していたアスリの案は、すぐに同調したラリーヤにより一段改良した様式となって、この場の面々に提示された。たしかに真の意味で香り高い薬液であれば、ユニスの狂気もかなり緩和されるであろうし、拭いた布はアスリがあとで洗うことを申し出て保管し、１人で母に謝罪する時に使いまわせるだろう。
ところが、この完璧な案に異議を唱えたのは、自身の要点すら正しく洗えない男子だ。すでにアスリの視線は、器にすくわれておかれたままの薬液に向けられているが、焦ったようなユニスの声も、追いかけるように器の中の薬液に降り注ぐ。

「は……？おい！！そんなんここに塗るんかよ！！」

「そうだけど？なんか嫌？私もティサもラリーヤも、さっきお手てや腕に塗ってたよ？」
「いや、手に塗んのとは違いすぎんだろ！」

先ほどアスリもティサと一緒になって薬液を腕に塗りたくり、今も含めて痛くもかゆくもなかったのだから、おそらく性器に塗ることに懸念はなく、そもそも問題があれば、レシピを提供したラリーヤが企画してこないはずだ。これからその触れるだけで敏感な汚れた個所に対して、薬液が塗布されるにあたり、先端からいかほどのぬめりが走り出すのかユニスも推察して、ただ嫌がっているだけだろう。だらしないユニスを甘やかすべきでないことは一目瞭然で、アスリも厳しく続けていく。

「何？ちゃんときれいにできてないんだから、しょうがないじゃん？ラリーヤ、これっておちんちんに塗っても良いんよね？」
「大丈夫だよ？さっきも言ったけど、なかよしする時も使うんだから、おまんこに塗っても大丈夫だし、口に入って、ってか新しいうちなら食べちゃっても大丈夫。」
「じゃあティサ！塗ろ！」
「おい！！バカッ！！ティサ！！ヤメロ！！」
「こらっ！ユニス、動くな！待って、私、おちんちん押さえとかんと、ユニスが子どもに戻っちゃう！」
「痛っ！！爪立てんな！！」
「だから動くからっしょ！！」

焦るユニスは脱出を試みたいようであるが、ティサが要所を締めて、普段なら粘膜に密着しているはずの裏返した皮膚に爪まで立てている以上、ユニスはむやみに腰を引くことも、ゆさぶりをかけることもできない。門番のティサがユニスを大人に保つことで手一杯であると述べたのだから、アスリはラリーヤと協力して、薬液をユ

ニスの狂気にかけやるしかない。向かい側で、アスリの握りしめるのと反対の手を同じようにつなぎユニスを制するラリーヤに、一目を送ったアスリが、４人の輪の中心に置かれている薬液の入った器に、空いている左手を伸ばしていった、その時だった。

「痛っ！！」

突然、薬液が弾けた。愚かなことに、ユニスが器を蹴ったのだ。ひっくり返った器は、真正面のティサを目がけて、液体を飛び散らせていく。とっさにアスリも、伸ばしかけた左腕を胸のあたりまで持ち上げ、顔全体も左後方へ向けて逸らす。

こつりとした一音のあと、ティサが小さく痛がった。すぐにアスリが視線を戻せば、喉元から両胸、腹部に至るまで薬液にまみれてしまったティサが、地面につけている両膝のうち、右手を右側の皿のところに当て、押さえていた。その前には、中身をぶちまけて空っぽになってしまった器が、むなしく転がっていた。

「あーーー！！！」
「ちょっと！！何してんの！？ユニス！！」

反射するようにアスリが上げた声に、ラリーヤの叱責も連鎖する。しかし、一番の被害者であるティサは、無言でユニスの顔を見上げて固まったままだ。その表情は、無い。
途端に洞窟が、窮屈になった。アスリの握りしめるユニスの手のひらも、ぬくもりに変化はないのに、弱くなる。
ティサが、謝罪を求めている。３人の注目が集まる中、誰からも視線を外すユニスの瞳には、地面の上で斜めになったまま、落ち着きを取り戻した器が映っている。気づけば今のひと騒動で、ユニス

は子どもに戻ってしまっているし、未だにティサが左手を残したままであるものの、槍は直前までよりも柔らかさを帯びつつあるようである。ラリーヤが一生懸命盛り立て、予想外の狂気に道筋までつけ、どうにかここまで作り上げてきた今日の場は、ユニスの一蹴りでとうとう壊れてしまった。

「………………ごめん。」

ついに、耐えきれなくなったユニスが、最もシンプルにティサに詫びた。まだ、ティサの無表情は変わらない。変わりゆくのはティサの目の向け先で、長いまつげは徐々に徐々に、下へ下へと降りていく。アスリもティサを追い、ラリーヤも追って下っていく。

止まった。角度が落ちて、ちょうどティサの両目の高さに合わせて水平になった、子どもだ。

「…………………バカ。」

やっと、ティサが小さくユニスに応じた。一呼吸の間を置いて、器がぶつかった膝を押さえていたティサの右手が、動いた。

優しい手つきだ。その右手が、ユニスの左の太ももに、そっと触れた。

「……何してんの？蹴っちゃって。」

ティサの口元が、わずかに緩んだ。許したのだ。きっと今のこのひとときが、ユニスとティサが長い時間をかけて築き上げてきた、アスリにはなしえない、２人なりのいさかいの収め方なのだろう。

ここまでアスリが耳にした２人の過去や、洞窟に閉じ込められた時までのティサの恥ずかしがり方を踏まえれば、以前は絶対にあり

えなかったであろう道程を、ユニスとティサはたしかに今歩んでいると言える。謝罪のユニスも、許しのティサも、まさに成長する。粗相を犯したユニスに対するティサの容赦の方法も、当然等しく進歩する。

「…………もっとちゃんと、大人になんなきゃ？私がなんとかするから。」

想いのこもったティサの右手の、人差し指、中指、親指が、太ももからユニスの槍へと戻された。難解だ。単純に言葉通りに捉えるなら、アスリもティサが何をしようとしているのか、簡単に理解はできる。ほぼ確実に、ティサは子どもに戻ってしまったユニスを、大人にしようとしているのだろう。

まもなくアスリの予想通り、真上を向いていた時よりも控えめな大きさにはなりながらも、ぬらりと輝く残滓に、むわりとまとう狂気はそのまま、ティサによってユニスは成人した。ただ、これでティサが全てを終えたとアスリは思わないし、ラリーヤもひたすら黙って、ティサに任せたままだ。

ティサの肉体に散った後、重力に従った薬液は、ティサの母が遺した腰元の煌めきまで至って、たき火の柔らかな明かりを反射する。アスリの脳裏に、まさかがよぎる。それより早く、狂気が気配を消した。

ティサが、大人になったユニスを、捕食した。壊れてしまった洞窟が、息を吹き返した。

「ティサッ！！！！」
「うそっ！？」
前に倒れそうになったユニスが、ティサの名前を今日1番大きく呼んだ。あのラリーヤまでもが目を丸くして、ユニスとつないでいない方の手を口の前に広げており、目前の光景が信じられない様子である。加速する洞窟に遅れを取るアスリの精神は、くわえてからまだ動きのないティサに、早くも大きく差をつけられている。
いや、ティサは動いている。その動きは、昨日ラリーヤがイケメンを前にして口を性器に変えた、頭を前後に振ったり、頬をこけさせて吸い込んだりしていた動きのうち、しゃぶり取るようにするものだ。

あれほど性に抑制的だったティサが、今や口いっぱいに含んだユニスを、舌で舐めまわしている。なぜティサは今、眉間にしわを寄せて、おそらく口の中から鼻孔の奥深くまでを、狂おしい濃厚さで満ちさせ、呼吸することすらままならなそうにしてまで、ユニスを舐めあげているのか。

愛だ。ユニスを愛しているからだ。たとえ薬液を蹴られて体中にかけられ、その器を膝に当てられてしまっても、ユニスが嫌だとこねた駄々を、ティサは全力で回収して、その姿勢でもって、子どもでしかなかったユニスを大人に成熟させようとしていのだ。
あの狂気の蓄積は、性の権化たるラリーヤも看過できなかった。
しかしティサにとって、ユニスであれば汚くはない。故に、ティサの口淫は、ユニスの清潔とティサの衛生観念の両面から理に適って

いるだけでなく、ユニスが正しく将来に向かうことも手引きする、正しい選択である。

「あっ……！　ティサ……！」

ユニスがまた、ティサを呼んだ。その直前には、たしかな快楽もあった。

「えっ、ちょっと、それ…………、すごい……！！」

何かを言いかけて止まったラリーヤも、百戦錬磨のラリーヤへと身を戻し、ティサを称賛する。その間もティサの舌は動き、唇の端からはユニスとティサが口と口同士で接触した時と同じく、２人の混ぜあった唾液が少しずつ外へ、さらにティサの体上の薬液へと向かう。

アスリは自ら正しいと下した結論が、果たして本当に正しいのか、わからなくなった。事実に目を向けなければならないことも、また事実だ。一方で、事実は狂ってしまった。ユニスの狂気が、ティサまで狂わせてしまった。

違う。アスリも一緒になって、どうしようもないほどに狂いたい。それが改めて正しい結論だ。もう、自慰を行っても許されるだろうか。

それも違う。自慰でもない。アスリが今したいのは、夢中で昨日のラリーヤを真似るティサと同じく、凄まじいユニスを口中で堪能し、本能を満たすことだ。

悔しいほどに、ティサが羨ましい。今、確実にティサは、脳で直接ユニスを味わっている。我慢を痛感すればするほど、涙がこみ上

げてきそうな感覚が胸の奥からせりあがり、胸のずっと下、泉の奥でも噴出し、アスリから徐々に距離を遠くするティサの口とユニスの性器の密着に、追いすがるアスリの魂と、より後方に置き去りされていく肉体は乖離していく。

「あっ……！ティサ、ティサ！ティサティサティサティサティサティサッ！！！」

つないだままのユニスの左手が、強くアスリの右手を握り返した。ティサに前傾していたユニスが、一気に突き上げるようにして上体を起こす。

連続してティサを呼び続けたユニスの、無駄なく美しく割れた腹筋の中央を、1滴の汗が周囲の汗を巻き込んで、水流として落ちていく。その流れをさかのぼって見上げたユニスの、前に突き出した顎の奥では、すでに何かが噛み殺されている。

「あ！！！ダメ！！！ティサ！！！ちょっと！！！」

その何かを直感したラリーヤが、ティサの左肩を右手で掴んで、後ろに下げようと試みた。しかし、ティサは両手で押さえる槍の中央から指を離さない。当然唇も離さなければ、ティサは口中の動きを止めることもしない。ティサが口の中で、ユニスと世界を作り出していく。

止められない。止めてはいけない。アスリは空いた左手を、ユニスのすねに置きやってさすり、波に飲まれそうなユニスを誘って、自身の切なさをユニスに累乗する。

「あー！あー！！ティサ！！ティサー！！！」

愛の返答だ。快楽の奥のユニスが、献身のティサに愛を返した。

「あーっ！　あーっ！　あーっ！！」

「あーーー！！！」

ユニスが、流出する。ユニスに心を重ねようとするアスリの本能も、欲求に苦しむ肉体に感嘆の声を上げさせる。

再びユニスが前傾し、びくり、びくりと、全身を大きく震わせた。まだ震える。まだ震える。

5回、6回。まだ震える。

「あーあーあー、もうー！！あー！！」

諦観に満ちたラリーヤが、少ない言葉で状況を語る。何を言わんとしているのかはアスリも想像がつく。ただ、覆水は盆に返らないし、蹴り上げて飛び散らせた薬液も、器には戻らない。漏らしてしまったユニスの乳も、ユニスの槍に帰すことはなく、あとはティサが受け止めるのみだ。

そうであった。ティサの口内では、狂気が乳とないまぜとなって、愛が暴力となっているはずだ。

我に返ったアスリが、未だに微動するユニスの寂寞の眉から、ティサへと視線を戻せば、こちらは目じりが裂けて眼球を落としそうなほどに瞼を開かせきっていて、現物よりずっと太い丸太を、突然口に放り込まれしまったかのようである。自らここまでしておきながら、受け止めたユニスの愛の答えは、ティサが考えていた以上に凄まじい速度を伴っていたのかもしれない。

アスリの頭上から聞こえてくる、荒々しいようで女々しい、連な

る吐息のリズムは変わらないものの、右手に込められていた握力は、直後に急速に弱まっていった。ユニスは、余韻の時間に進んだのだろう。中身の蓄えられたティサの頬も、もうこれ以上は膨らまないはずだ。

「もう！また出ちゃったじゃん！」

「ん一っ！！！ん一っ！！！」

「あーっ！！ティサ！！ヤメロ！！」

自分を表現し切ったユニスと、口いっぱいに愛を留めるティサの2人を、やや甲高くラリーヤが諫めた。ティサが何か言いたくても喋れないのは仕方ないが、余韻に浸るだけで口が空いているユニスは、何をやめてほしいのかはっきりすべきだろう。それでもユニスの働きかけは、ティサの口づけを終えさせるのには有効であったようで、高度を下げつつある槍が、洞窟中のティサの洞窟から引き抜かれていった。

「んあっ！！！」

ティサから離れる瞬間、ユニスがまた一度歓びを滲ませて、身をよじる。ティサもユニスを一滴もこぼしたくないのであろう、尖るような形の薄い上下の唇はいやらしいし、その唇に挟まれて子どもに戻ってしまった、全てがずぶ濡れの子槍もいやらしい。頼りない茂みの付け根から、ティサは両手も放しながら、驚くように見開いていた目を今度は細め、なお皮を見つめながら、ユニスの乳を保持する口元を、空いた両手で覆っていく。

「ん一っ！！ん一っ！！」

「あーあー、どうする？ぺってする？」

言葉を口にできないその背に、乳房を揺らすラリーヤが片手を回して、ティサに配慮をかけた。風が吹けばはためきそうな皮に包まれたことで、立ち上っていたユニスの狂気は、湿った唾液の匂いへと置き換えられた一方、ティサの口内は未だに狂気で充満しているはずだ。

一体ティサは、今どのような味わいを得ているのだろうか。再び眉間にしわを寄せてしまったティサの顔は、それが決して優れたものでないことを物語っているが、あの強烈なユニスをティサは口いっぱいに広げているのだから、ラリーヤの言うように吐き出すとなど、もしアスリが当事者であれば絶対にしないし、言語道断である。もっと踏み込んで言うのであれば、アスリが口中でユニスを受け止め、どうしてもこれ以上口に含んでいられなくなってしまった時には、ユニスがどうあったか、しっかりと記憶してから全て飲み込んで、ユニスと永遠に一体になることを選ぶはずだ。

「ん…………………っ！」

ティサの喉が、一度小さく引き締まってから、弛緩する。口から鼻までを覆っていた両手のひらをよけたティサが、左手の甲で口元を拭い、続けてつぶやく。

「…………変な味。」

狂気を飲み干したティサが、薄い唇を笑みの形に変えた。ティサも、ユニスを無駄にしなかった。

成し遂げたその口元には、まるでラリーヤのものかのような、悪さが控えている。ティサが狂い、己の理性に打ち克った。

「うわぁ、飲んじゃった……。大丈夫そ？気持ち悪くない？」
まさかラリーヤが、ティサに一歩引いた態度を見せている。ティサの得た嘸下という帰結は、ティサが口に含んでいる時点で、自身ならどう行動すべきか思慮に当たったアスリも、同一であった。
しかし、カインタの男子を食べつくしたラリーヤでさえも、アスリが念じティサが成した行動は型破りであったのだろう。いずれにしても、ティサはすでに胃中に意中の相手の精一杯を取り込んでしまっていて、ラリーヤに返す口ぶりも怪訝になる。

「何？うわぁって、どゆこと？」
「いや、あんな汚いちんちんから出たんは、さすがに……。」
「だから、ユニスんなら汚くないし。」
「やば……。」

平然と放たれたティサの信頼に、ラリーヤはそれよりつなげる言葉が見当たらなかったのか、それともまだ他にもティサに何か物申したいのか、目元には何らかの思考が染み出している。一方、ラリーヤが予想外の常識を見せたことで、ティサも今更ながら口にしたものの内容を意識したようで、改めて唇に指を触れる仕草に紅潮した頬を重ね、ラリーヤから視線を外す素振りを見せた。あわせて、しおれかけのユニスの皮もぴくりと一度上下し、残る涙が一筋、糸を引きながら洞窟の地面へと向かっていった。

正直に言って、アスリは今、ティサに全面的に賛同しているし、ユニスの性に限れば不潔には当たらない。加えて、ティサに残され

ているはずの狂気の風味がいかなるものか、ぜひ問いたいところである。
そうは思えども、先ほど以来、高ぶってばかりのアスリは何も口を挟めなかった上に、もはや何が正義か見通せない中、ラリーヤが失調し、ティサも羞恥をぶりかえし、変態は皮槍を子どものように泣かせているだけである以上、次はアスリが切り出す以外に術はない。おそらく本来のラリーヤも、この局面なら深呼吸を挟んで、真の目的に向かうはずだ。
アスリも軽く息を吸って吐き出すと、真正面で常識ぶる女の変態を見定める。もう全員が裸なのだから、ラリーヤには最後まで圧倒的な変態でいてもらわなければならないし、今日の行きつく先はラリーヤしか図れない。

「…………んで、ラリーヤ。どうするん？」
「…………………………んふふふふ。」

出た。思った通りの変態だ。
悪いラリーヤが、ティサのように己の理性を圧倒した。その悪意は、ティサが見せたものの比ではない。性のしもべと化したラリーヤが、２つの目に胸上の大きな２つの輪をも加えた４つの瞳で、食い殺すような視線をアスリに送る。

「……何？」

同じく、変態だ。あまりにいやらしい。ひとつ返しただけで、両膝を地面につけて、折りたたんでいるアスリの足首のあたりに、水気が上乗せされてしまった。変わらずラリーヤの大きな胸は、アスリを視界から外さないが、真実の目はティサに向けられていく。

「ティサ、上手にできたね？」

「え？」
「今度はティサの番にしよっか？」
「…………は？」
ユニスには響く低音が、響かない。アスリに響かないのだから、当然ラリーヤにも響かないだろう。怠惰なユニスの槍だけは、より角度を落とす。
答えないラリーヤが、困惑が主体となったティサの左手を取った。アスリの右手から、ユニスの左手、右手、ラリーヤの左手、右手、ティサの左手までが一帯となる。欠けた個所をつなぐべきか、アスリが判断するよりも早く、アスリの目の前には、ラリーヤの一筋が立ち上がっていた。
上方に手を引かれたティサも、ラリーヤに釣られる。３人が立ったのなら、アスリも立つ。
「……んふふ。ティサも……、ってかアスリも、すっごい興奮してんじゃん。」
「え？」
「何？」
出てきた名前に、次は背を伸ばしたアスリも、ティサのように低く応じる。だが、ティサとアスリに対したのは、悪くにやつくラリーヤが地面へと送った、乳房からのものでなく、目からの視線だ。
洞窟の地面に、２枚の布が広げられていた。それは、文字通りの布ではない。かつてラダンとともに並ぶ中、母に広げられて以後を禁じられてしまった、あの２枚の布だ。
濡れていた。アスリとティサの足元に、水染みができあがってい

る。これは、どう見てもユニスが蹴り上げてまき散らした薬液とは異なっているし、何の言い訳をすることもできない。
あの時、アスリはラダンの真横で嘔吐した。今日も、アスリは嘔吐する。しかし、吐き出す口は、ティサがユニスを飲んだ口ではない。

泉は、両太ももへ伝える。とっさに強く合わせた太ももの付け根に、思わずアスリが目を向ければ、腰を引いたにも関わらず薄毛の下でも目立つ、挟まる肉が熟れていた。
垂れた。太ももを経ずに、かかとのあたりに伝わった。
恥ずかしい。間の肉がまた中央の肉を押して、許されないはずの快楽を催して、恥ずかしい。

アスリはユニスを見る。集まる皮の奥には真っ赤な肉があることを、浮かび上がる段差が伝えている。
ティサも見る。ティサも股を見ているが、内股で腰を引く姿勢はアスリと同様だ。ティサのつむじと、重力に従いつつ外へと向いた乳房のうち右側が、ラリーヤの胸のようにアスリを見つめている。あるであろう割れ目を覆い隠す、茶色い髪と同色の体毛も、アスリをかく乱する。
もう一度、アスリは右に向く。弱くなってしまった、強さをひた隠すユニスだ。アスリもティサの胸のように、左右に視野を広げたい。

「……恥ずかしいね？　みんな、もじもじして。」

アスリの正面から、ひどく恥ずかしい声がかかる。目をやる暇もない、正面で無毛を晒す変態の足元には、濡れた形跡はない。さすがだ。

「変態っ！！！！！」

羞恥のティサが、一切何も垂らしていないラリーヤに向けて、でたらめな正論を叫んだ。今に限って言えば、洞窟の地面に濡らした布を広げているティサとアスリの組み合わせと、何の証拠もないラリーヤと比べて、どちらの方が本当に変態だと言えるのだろう。アスリの足元は、自分で濡らした池が海となって、波になりつつある。

「いいから！！こっち来る！！」

ティサの一喝を上書きしたラリーヤが、ティサとユニスの手を強く引いた。つま先ばかりに力の入っていたアスリも、容易にユニスに連なって、転ばぬように足を前へ出すしかない。また垂れた。

向かう先は目と鼻の先の、一昨日集めた大量の草に布をかけた一角だ。ここに、ラリーヤが手首をきかせてティサを送り込む。

「うわ！！ちょっと！！」

ティサは簡単に、草の上に飛ばされた。あわせて振られるラリーヤの大きな乳房は見事だが、その腹部から足腰にかけての瞬時の動きもまた、凛々しいユニスのようであった。感心する暇も今のアスリにはないものの、普段ラリーヤは女性らしく振る舞っている一方で、体力的な潜在能力はかなり高いのだろう。

突然ティサの体重の載った草の山からは、ラリーヤが事前に仕込んだ香草の香りが、ふわりと立ち上って、先ほどのユニスの芳醇を完全にかき消した。そこにラリーヤも飛び込んで、ユニスも引かれる。アスリの体幹も、大きくバランスを崩す。

ユニスは続かない。左手はアスリの右手とつないだまま、ラリー

ヤを素早く放したユニスの右手は、アスリの左胸を押さえ静止しようとする。
転ばぬ先の、ユニスだ。ユニスがまた、アスリを守った。
ところが、ユニスはまだ2人分の均衡を取り切れない。火照るユニスの汗ばんだ右手のひらが、アスリの小さな膨らみの上にかろうじて実りつつある、大人の女へと向かう突出の真上を滑る。

「んあぁぁっ！！！」

反射的な快楽とともに、自らも信じられないほどに甘い声が、アスリから漏れた。なんという声を出してしまったのだろう。それだけでなく、小さな波がアスリの手前までやってきて、かろうじて保っていた足の力まで、骨抜きにしてしまった。
まだ、ユニスはアスリを守る。即座に1歩2歩とアスリを引きつつ進み、倒れる体が柔らかく包まれる感覚をアスリが得た直後、気づけばアスリは草の上で横向きになって転がっていて、ユニスも草に突っ伏していた。

幸いアスリはどこも傷めていないし、うまく足も閉じて折り曲げている。これなら足元のユニスが顔を上げても、中身は見えない。
見えないという断言は、撤回だ。足を閉じていても、アスリであれば外に置く道具が見えてしまう。
我に返ったアスリが勢いよく身を起こすと、すでに草の山の上では、真隣にティサが折り立てた両膝の後ろ側に両腕を回して、身を縮めるように座っていた。一方、その奥ではラリーヤが右足を伸ばし左膝を立てて、その上に左手を置きやっていて、酔った大人のようにくつろいでいる。いくらラリーヤが美しい1本の線を性器に有していても、あの姿勢では見えるものが見えてしまうだろう。

「…………2人とも、何してるん？アスリはティサの次っしょ？」

そのラリーヤが、アスリとユニスに余計な一言を寄越した。今の一瞬で、本当にラリーヤは酒でも飲んだのだろうか。当然、ティサの首がアスリの方に振り向けられる。取り繕うための島を、アスリが探そうとした、その矢先だった。

「だから、今はティサの番だってば。」

ティサの真横で、悪魔がつぶやいた。言葉に合わせてぐっと全身をティサに寄り添わせたラリーヤが、左手の置く先を、自らの左膝からティサの左膝へと移し替える。びくりと体を震わせたティサの頭は、ラリーヤに向けて急旋回する。

「…………え？何？怖いんだけど……？」

「怖くないっしょ？さっきあんなちんちんペロペロして、ごっくんまでしちゃったんだし。」

「はぁ？」

これは理詰めであって、何らかの前段階だ。ラリーヤが、ティサを一手ずつ包囲している。低くなりきらない声で威嚇し身構えるティサも、全身をより小さくして、立てた膝で豊かな胸を押しつぶしていく。

「ユニスんなら、汚くないんよね？」

「……うっさい！なんでもいいじゃん！」

「じゃあユニスも、ティサんなら、汚くないんよね？」

「おっ……？」

論理が飛躍した。草に顔を当てたまま、伸びるようにしていたユニスも、突如降ってわいた対話の役目を前に、飛び起きて膝立ちになる。起きない下向きの槍は、だぶついた皮を揺らす。腫れたユニスばかりアスリは目にしているが、子どものユニスはどこまで小さくなれるのだろう。

「……どゆこと？」

一気に余裕のなくなったティサが、不安げに疑問を挟んだ。そもそもティサがユニスであれば不潔でないとするのは、ティサがそのように捉えているからであり、実際に言質がある。対して、今ラリーヤが述べたように、その図式が直接的に反転できるかと言えば、必ずしもそうとは限らず、ティサの方が、ここでは理にかなっている。理屈で責めていたラリーヤが、突然ユニスに向かって、一貫しないリスクを負ったのはなぜか。

勢いだ。勢いが必要だからだ。では、勢いが必要な事柄とは、何か。

アスリは理解した。同時に気を失いかねないほどの興奮が、アスリの全身の血液を真っ赤に染め上げる。

昨日、ティサとユニスとアスリが、サバンナの真ん中で赤い砂の地面と化して、ラリーヤがイケメンと取りなした一連は、性の全てではなく、おそらくほんの一部にしか過ぎないのだ。ラリーヤは今、その範囲外で埋もれてしまっている強烈さを、ティサとユニスに提示しようとしている。

相変わらず左手はティサの左膝の上に置いたまま、また体勢を少し移したラリーヤは、器用に右手を伸ばしてティサの髪を撫でつつ、額をティサの方へと寄せた。顎を軽く前に突き出したラリーヤが、

とろけてしまいそうな視線をティサに送って微笑む。答え合わせだ。

「…………今度はティサのおまんこ、ユニスにペロペロしてもらお？」

「はぁぁあああああああ！？！？！？！？」

ティサの声に乗せられていたのは、ただただ上ずった驚きだけだ。もう、ティサの声は低くない。
今のラリーヤの提案は、組み立て方に関しては強引であったものの、示唆そのものに難しさはなく、ティサもアスリと同じように、きっとラリーヤの結論を予想できたはずだ。それがこの反応なのだから、やはりユニスを口にすると、どうしても馬鹿になってしまうのだろう。アスリもユニスを飲んで、馬鹿になりたい。
対して、悪く賢いラリーヤは、ティサが大きな声を出しながら脱力したのとともに、太ももの下を囲うように回している両腕も、等しく緩ませたことを見逃さない。実践の面でも跳躍するラリーヤは、ティサの左膝の上で待機させていた左手を、一気にラリーヤの側に向けて押し倒す。

「アスリ！！そっち！！」

ラリーヤが、アスリに挟み撃ちを願った。瞬時、友人としてティサの自尊心を守ろうとする理性と、またとない絶好の機会を逃すまいとする、同性にすら向く本能による興味と好奇心が、アスリの心中でせめぎあう。
迷うアスリの隙を、羞恥に舞い戻ったティサも許さない。すぐさまティサは、ラリーヤの力が加わった膝に引っ張られるように体全体を横倒しすると、太ももの裏から両腕も引き抜いて、左手はラリーヤが行使する手首を掴み、右手は上から股へと回して、アスリが中身を目にする前に、股の中央を覆ってしまったのであった。

「ちょっと！！！無理無理無理無理無理！！！ホント無理！！！ホント無理！！！ホント！！！ホントだめ！！！！！」

行動に見合ったティサの抑止の言葉が、後から続いて発せられた。アスリは甘かった。こうなればもうティサは岩であり、難儀するに違いない。

ところが、ラリーヤの方に向くティサの横顔に浮かんでいるのは、じゃれあって遊ぶ最中の、純真な子どものような笑みである。見れば、ティサのまっすぐ伸ばした右足は、かかとを突き出しつつ、つま先を手前に引き、ふくらはぎを張りつめさせているだけで、ラリーヤが数を数えながら洞窟に追い込んだ時に比べて、守備の度合いを高め切っていない。

アスリが再度、ティサを審理する。次は、アスリも迷わなかった。ユニスを飲み干したティサは、本当に馬鹿になって、狂ってしまっているのだ。故に、アスリと同じように理性と本能が並立し、理性はこれまでと同じく貞淑であろうとしているのにも関わらず、本能の方は先走って笑い、あえて無防備を見せているのだろう。そうであるのであれば、この真っすぐ伸びた右足も、ラリーヤの方の左足と同じく大きく開脚させて、ティサは辱められるべきだ。今、アスリがラリーヤの側に加勢すれば、ダカクを押さえつける時と同程度の力で、まず伸びた右足を折りたたんでアスリの方へと押さえ、広げてしまうところまでは容易だ。

しかし、力ずくでティサをこじ開けたとして、果たしてそれでティサは良いのだろうか。たしかにティサはそれなりに満足し、ふざけ合う線の延長で楽しんではくれるはずではある。

普通だ。今日は濃い1日であるのに、糧として一回り小さい。仮

にたった今、アスリとティサが立場を置き換えたとして、歯茎も目玉も全て飛び出してしまいそうな羞恥とは、何か。

自主による、意思をもとにした行動だ。先ほどアスリが自ら脱ぐ申し出をして、自分で裸になった時のように、ティサも自己意志で飛び降り、打ち克ったばかりの理性を今度は殺すのだ。

悪さがいやらしいラリーヤと手段は異なれど、ティサを連れていく先はアスリと同一だ。基調を揃えるように、悪をたぎらせたアスリは、伸びきったティサの右太ももに右手をそっと置き、左手はラリーヤと同じく茶色い髪を撫でてやりながら、耳に吐息を当てるように語りかけていく。

「………なんでー？ユニスのおちんちんみたいに、ティサも洗ってこなかったんー？」

「いや、洗ってきたし！！」

アスリがティサへ、言葉による攻撃を開始した。直後にティサは、びくりと体を正面に戻し、アスリに乱れた茶髪の載った顔を向けて、それ以外に解のない答えを強く主張する。その表情は、耳にした問いの内容だけでなく、アスリの矢の放ち方自体にも驚いているのか、微笑みを元にしながらも、やや崩れている。

一方、ティサの伸ばした右足はわずかに曲がって、つま先を丸めて内側へと向かうようになった。ティサの意識は早速足にも向けられているようで、まだ内向きであっても、こちらは良い傾向かもしれない。

「じゃあ良いじゃん？」

「いや、普通に無理っしょ！？ってか、アスリだって無理っしょ？」

打てば響くように、ティサがアスリの想定内を走っている。今で

こそティサはアスリの術中にはまっているが、ラリーヤからしてみれば、この数日のアスリとティサとユニスの、３人との触れ合いは、全てがこのような状況であったのだろう。
アスリが掴みかけているラリーヤの定石に従えば、ティサに返すべき言葉の原則は意外性だ。常識を振舞うようにするアスリが、さも当然と言わんばかりにラリーヤの真っすぐな道筋を進んで、ティサの前提に立ちふさがっていく。

「…………そうかな？」
「はぁあああああああ！？！？！？いや……、嘘っしょ！？だって、あんなとこ…………、なめられるとか……！！！」

務めて冷静にアスリもティサを追い詰めたが、ティサの述べた通り、あの部分を、それもユニスに真正面から舌で触れられることを思い浮かべると、非常に厳しい。アスリにとって、たった一瞬で全身が流されてしまいそうなほどに気が引けるし、信じられないほどに魅力的な試みだ。現に発想が脳裏をよぎっただけで、まるでアスリの乗っている草の山全体は、ぐらぐらと大きく揺れているかのようだ。

「ユニスはー？ユニスもペロペロできるよね？」
「俺っ……！？」
「バカ！！無理っしょ！？汚いから！！」

泉に潤いを加えながら、次が続かなかったアスリを前に、すかさずラリーヤが割って入り、ユニスにやり水した。恥ずかしいばかりのティサとアスリを、ラリーヤはよく見ている。
先にティサの口内にまで全部出してしまって、もう恥ずかしがる必要などないはずのユニスは、例の伏し目だ。この目を見つめながら、アスリはずっと耽っていたいが、ティサが堂々巡りを試みたか

らには、アスリも誘惑を振り切って応じるしかない。

「……だからティサ、洗ってこなかったん？」

「違って！！違うって！！でも、汚いから！！」

「ユニスんなら、汚くないんしょ？ねぇ！ユニスはどうなん？」

「ティサ！？」

４人の声が、錯綜する。この間も勝手なアスリの本能による右手は、優しくかつ淡々とティサの右ひざの裏を取り、ティサの自主を重視するアスリの理性が、慌ててそれより先の動きを止めさせる。

「バカ！！！！！ダメッ！！！ダメ！！！」

今度はティサから、ふざけた趣きが全て消え、完全に本気の拒否を発した。ティサは自分で自分を殺す、意思を固めきれるのか。

今の声色では、ティサには難しいかもしれない。ほんの少しだけ、アスリの手助けが必要だろう。

「ティサ、大丈夫だから！！」

根拠もなければ、出所がどこかもわからない言葉を、アスリがティサにかける。ラリーヤが勢いで突破したように、アスリも波を送る。

心も、鬼にする。本能も理性も悪で包まれたアスリが、ティサの右膝を強く持ち上げながら、自身の側へと引き広げていく。

「いやぁぁあああああああああああ！！！！」

アスリの物理に、悲鳴を上げるティサは、頭から真後ろに倒れよ

うとする。とっさにアスリもラリーヤも、それぞれ左腕と右腕で、ティサの背後をカバーする。
　しかし、理性の配慮に反して、鬼と化したアスリのもう一方の腕は容赦がなく、ティサの右膝はさらに外へと向かう。それはラリーヤも同様で、降り曲がった膝の先、ティサの左右のかかとは、大きくユニスの前に掲げられていく。
　嫌がるティサは、全身をこわばらせるようにねじって動き、腰全体が地すべりを起こす。ラリーヤを構っていられなくなったティサの左手も、右手と合わせて、中央の防御に動く。

　何度も何度も何度も、孤独なアスリが母に謝罪しながら思い返した、見覚えのある眺めができた。ラダンだ。成長の証を没収され、針の刑までも宣告されたラダンだ。

　目がやけどしてしまいそうな視界の再現を、アスリがくまなく観察する。あの日、涙のラダンを照らした木漏れ日は、今日は洞窟のたき火をユニスの背が遮って、地面とティサの口内に漏らしたユニスを漏らす灯りだ。また、言いつけを守らなかった娘に向ける厳格な母の眼差しは、ティサの直前の動きで前に回転した腰飾りの宝石の煌めきとなって、娘をにらむ役を担っている。何より、かつてラダンが開示した全てを、ティサはまだ両手で覆って秘匿している。
　明かりの差異は小さい。どこにもないはずの母の視線も、なぜかあの日に近い。ティサの手だけは、決定的に違う。
　あと少しだ。残された違いがいかに脆いか、もうアスリは直感している。あと少しで、羞恥のラダンが洞窟の中にティサとなって蘇る。

「いやっ……！　いやっ……！」

背中の中ほどまでを草に横たえ、左右のアスリとラリーヤに肩を支えられながら、首を起こすティサの顔の上では、しかめた眉と歪んだ唇が、ティサの今が何たるかを代弁している。そこに涙はないものの、うるみゆくある2つの瞳に、もはやユニスを飲んだ直後の余裕は、どこにも残されていない。

アスリも見ていていたたまれないが、急な展開を伴ったのだから、しかるべきだ。ラダンもこうして嫌だとしか言えなくなって、赤子のようだと母に揶揄されていたのだし、アスリが同じように無様な体勢を取らされたのならば、これほど優良な糧はない。

むしろティサは、まだ両手で最も重要なところを隠しているのだから、卑怯だ。もう守る手の横から、茶色い毛がところどころがはみ出てしまっているのだし、いつまでも隠しきろうとするべきではないだろう。刻一刻と、ティサの自殺が迫っている。

「ティサ？がんばろ？」
「やぁああだ！！！」

ティサがラダンなら、あの罰の時、姉と妹の立場を逆転させたように、アスリも姉になる。励まされるティサは、大人の証を伴ったまま、幼く退行する。

「んふふふふ……、ティサ、やーやーしちゃダメでしょー？ほら、ユニスも、もっと近くおいで？」

拒むティサに、ラリーヤも一切動じず笑ったのだから、やはりこちらは相当な変態の手練れだ。草の上で何もかもをさらけ出す膝立ちの男子も、ラリーヤの勧めに伏し目をやめて、ティサを直視する。

「ティサ……。」

「だめぇぇぇぇぇぇ！！！だめぇぇぇぇぇぇ！！！ユニスだめぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ティサが声を張り上げる。拒否を貫くティサの声に、なぜか甘く上ずった女子が滲む。アスリもこうして、悲鳴とも歓声ともつかない声を上げて狂ってしまいたい。

「ティサ。」

もう一度、ユニスがティサを呼んだ。ユニスの喉骨が、上下する。ごくわずかに、ユニスの肩も力む。アスリが、ユニスの決意を直感する。

膝立ちの確固たるユニスが、草の上に両手をつけた。ユニスの顔が、前に進む。

固く目を閉じ口も結んだティサは、ラリーヤの方へ頭を倒して、最後の逃亡を試みる。しかし、その先で待つのもまた、ラリーヤの乳の袋小路だ。

「ティサ、ユニス嫌ぃ？」

「違っ！！！」

「じゃあ好き？」

「…………………バカ。」

意固地なティサが、達者なラリーヤに誘導されて、閉ざしていた

瞼をほんの少し開いた。ティサが斜めに見つめる先、ユニスは首筋をぴくりと動かす。

覚悟はできているはずであるのに、ユニスははにかんでいる。どんなに鈍い人物でも、今のティサの反応は、自身に向けた想いの告白だと受け取るだろう。これまでに数度、ティサのユニスへの好意はラリーヤによって暴露されていたが、全裸で耳にする今回は、同じ情報でも量が多いに違いない。

「んふふふ……、ユニス、お口。」

ぎこちない2人の間に巧みに割って入るラリーヤが、ユニスに口を助言した。ユニスもさらに上体を近づければ、後ろで束ねる長髪は左肩へと流れ、アスリにもユニスの風を小さく送る。ユニスを見られないティサが、また目をつぶった。

まもなく、ユニスの口は、ティサが手でひた隠しにする真下、茶髪の合間に待つ女と口づけするだろう。ユニスが口で、ティサに押し入るのだ。

ユニスの右手が、ティサの左頬に置かれた。ティサが驚くように目を大きく見開いて、正面から目を合わせる。ごく間近な2人の距離に、瞳と瞳を結び付けあう、アスリの目にすることのできない線が張り詰める。

外れた。珍しくアスリが、見誤った。

ユニスが口づけしたのは、ティサの唇だった。その瞬間、ぴたりと洞窟の時間が止まった。口を、ユニスはこうして解釈したのだ。

直後にユニスは後ろに下がって、伏し目に戻り、時間は再度流れ出した。同時に、アスリが触れるティサの足から、内側に向く隠れようとした力も気配を消した。

最後の貞淑を、ティサが失っている。とうとうユニスが唇で、ティサを吸い上げた。

「…………ユニス、ホントにするん？」

とろけたような半開きの目で、ティサがユニスに、とうに決まったことを、繰り返すように問う。早すぎず、かつ遅すぎず、最適な間を置いて、いしおらしいユニスが黙って頷いた。等しい間を挟んで、ティサが続ける。

「…………ホントに？汚いよ？」

「ティサ…………。」

次のユニスは、すぐにティサを呼んで、斜め下に向けていた視線をティサの瞳に戻した。あわせて、ティサの頬に置かれたままだったユニスの右手の親指が、ティサの左の目元を穏やかに撫でた。

「綺麗だよ。」

アスリの視界の隅で、いくつか星が瞬いた。一度も耳にしたことのない、極めて高い耳鳴りが、アスリの右耳から左耳へと抜けていく。

なんと、完璧な一言だろう。なんと、羨ましい一言だろう。なんと、美しい言葉だろう。なんと、綺麗な言葉なのだろう。

たしかに今のユニスの一言を、普段の延長線上にあるシンプルなユニスによるものとして捉えれば、綺麗という言葉は、ティサの発した汚いという発言の打ち消しでしかないのかもしれない。だが、凛々しさと恥ずかしさ、またはティサの想いを受ける嬉しさ、さま

ざまな感情で揺れ動いているであろうユニスの、奥ゆかしい眼差しとぬくもりを得ながら、面と向かって綺麗だと囁かれれば、どう考えようとユニスの言葉の意味は深い。
叶うならばこれからの一生の中で、ユニスからかけられる綺麗という言葉を、一度はアスリも聞きたい。そしてその前には、優しい口づけを1つ、ティサと同じように分けてもらいたい。

「……………………バカ。」

ティサも、星を見たのだろうか。せっかくのユニスに、ティサが突き返したのは弱い罵倒だ。その本心は、確かに愛である。

「…………知らないよ？ホントに。」

ティサの理性も、観念した。もうこれ以上ティサは、ユニスに顔を向けられないのか、ユニスに触れられていない右側、アスリの方へと頭を軽く倒し、ユニスとの視線を終えると、狩りの時のように完璧なユニスもティサを察して、ゆっくりとティサの頬から手を引いた。そうしてユニスは、両手を草につき腰は落として、ティサ全体を俯瞰する体勢を取っていった。
たたまれたユニスの両太ももの奥には、やや角度を戻しつつある皮が控え、袋もせりあがりつつあるようである。今、ユニスの余計なところまで凝視すると、アスリは発狂してしまう。正しい目のやり場は、別な1点だ。
アスリに限らず、ユニスとラリーヤの視線も、自然とティサの両手に集まっていく。この手が諦めた時、やはりアスリは発狂するしかないのかもしれない。

「…………やだ、恥ずかしい……。」

心を落ち着けるように空気を吸いこみながら、アスリが上がってきた苦しい言葉の出元にも一度顔を向ければ、勇気をもらったはずのティサの唇は、前歯で甘噛みするように織り込まれている。眉も歪ませ、大きな瞬きを続けるティサが、自身の理性と闘っている。

「大丈夫、もうちょっと！」

「ティサ、がんばろ？」

思わずアスリも、友人として声援を送る。悪に包まれていたはずのラリーヤも良心に満ち、心を込めてティサを励まし、ティサの背に回す手を動かす。ティサを、撫でているのだろう。アスリの左手も、ラリーヤに歩調を合わせる。

動いた。ティサの手が、動いた。

まず最も後ろを守っていた右手が、上方へと後退した。今の姿勢のアスリからほとんど景色が変わらないが、ユニスにはティサの尻の穴が見えてしまっただろうか。

そのユニスは、ティサの手が断念した個所を、当然直視している。肛門を晒すことも重要だが、この先がさらに重要だ。手は、ティサをここで躊躇させる。

「頑張って！ティサ！」

再度、アスリはティサを応援しながら、裏をかくようにティサの膝裏に回す腕の力を強める。高く切り立った崖の真上のティサが、まだためらう。

しかし、後ずさりしない。少しずつ、少しずつ、前へ前へと進んでいく。

ほんの一瞬、ティサの指が、水面に広がった布をすくい上げた時のように、真上に上がった。ティサが、崖の上から身を乗り出して、真下を見たのだ。

何かを、アスリは見た。ラリーヤも、ユニスも見たはずだ。だが、布は水面でまたすぐに広がる。

またティサが、崖の淵から下を見る。もう一度、アスリが見た。肛門と泉と思しき個所の間に、皮膚の空間が見えた。少し褐色もあった。まだアスリは、詳細を掴めない。

「恥ずかしい…………。」

おかしくなる言葉だ。ユニスの狂気を受け止めた口からは、狂気が言葉となって、アスリの頭の中でこだまする。

「ティサ。」

強いユニスが、ティサの名とともに、瞳を送る。満潮のティサが、眉間にしわをよせながら両目をしっかりと閉じ、顎を手前に倒すようにしながら、頭と上体全体をアスリの方へと傾ける。

「やだ……、見ないで…………！」

願いと相反するように、ティサが広げていた両手を、干した布を取り込む時のように、へその前へと引きあげて、その形をこぶしへと変えていく。出来たばかりのこぶしもせり上がって、手首だけが少し前に出る。

ティサの髪と同じ、茶色の台形だ。まだ色がある。ティサの色が、アスリを駆け抜ける。褐色と、潤った桃色だ。とうとう、ティサが

全てを明らかにした。

「わぁぁー！！！」
「いやあぁあああああああ！！！！！」

思わずアスリは、歓声を上げてしまった。丸出しのティサも、アスリに続いて鳴き声を上げ、倒した頭をアスリの左胸へと擦りつける。それでも握りしめる手を覆い戻すことはないのだから、ティサは理性の殺害に成功したのだろう。
意図を尊重するアスリは、さらにティサの右膝裏を手前に引いて、ティサの全てをつまびらかにしようと試みる。開け放たれるティサからは、何とも例えがたい、獣が寝転んだ後の干し草のような香りが、ほんのりと立ち上っていく。

めまいがしそうだ。ユニスだけでなく、ティサも狂気の淫臭を漂わせられるのだ。全部、ユニスを飲んでしまったせいだ。
しかし、これがティサだ。愛する相手が同じでも、やはりティサとアスリは別人だ。無論、罰の姿勢が同じであれども、香りの質の面でラダンとも別人だ。
アスリの心臓が、痛むほどに高鳴っている。また甲高い耳鳴りが、アスリの右耳から左耳に抜けていった。唾液すら飲み込む間もないアスリが、初めて会う知らなかったティサの顔を、全力で記憶する。

まず高い密度で奥に向かって狭くなる、直毛とも縮れ毛ともつかない茶髪の流れは、途中で2手に分かれて、後ろに向かって茂っている。アスリとは比べ物にならない毛量だ。こうしてしっかりと目にすると、特に台形部分の毛は長く、ティサが発毛して久しいことがわかる。

ただ、体毛だけで比較するなら、これより当時のラダンの方がさらに多かった。あの時、母が全てを没収する前、羞恥の体勢を取らされたラダンを見て、アスリが抱いた印象は、まだなお毛でしかなかった。しかし、今のティサの左右に分かれた茶髪は、両側の上方までが主体で、それより後方の少なくなった間からは、堤に加えて中州まで覗くことができる。

その堤は、手で割れ目を広げなければ見えなかったラダンとは反対に、ティサの方がよく発達していて、例の褐色を外に向けて濃くしながら飛び出している。もっとも、ここはアスリとは正反対の意味で比べ物にならず、ティサが羽ならアスリは翼である。

縮こまって左右を合わせる羽の中、内側では出水が起きており、羽の後方の隙から垣間見える桃色でしなかない、正確な位置が不明瞭な源泉近くの粘膜からは、肛門の方へ向け何やら白っぽい粘液が流れ出ている。まるで早くもユニスがよだれまみれにしたところに、乳までかけてしまったかのようだ。これが、洞窟の地面に2枚の布を描いてしまった、2人の女子の、1つの原因として間違いない。

繰り返しになるが、漏水によって水浸しになってぬめる羽の堤は、当然アスリとは比べ物にならず、むしろかわいらしいとも言える。一方、ティサの口元の唇に比べると同程度か、それより少しの厚みがあって、しわがありつつも、ふっくらとしていて柔らかそうである。この左右の出元は、台形の体毛直下の中州の起点であり、そこには手の小指の爪が皮膚になったかのような塊が、小さく突出している。この部分も大小の個人差はあれど、アスリやラダン、男子のユニスやダカクと同一だ。

この皮膚を指で少し上に押しやってやれば、直下にはあの素晴らしい1粒が控えているはずだ。たまに、と述べたティサの自慰も、この1点との対話なのだろうか。息のあがりそうなアスリは、ティサの敏感に触れたいし、一緒に自分の持ち物も刺激したい。

「わぁ！ティサよくできたねー？んふふふ、ティサもびらびらしてるー。」

「やめて！！恥ずかし、マジ死にそう………。」

これほど性にまみれた空間で、明るく声をかけたラリーヤは、ティサの左膝裏に回している左手を伸ばして、太ものきわどい部分を優しく撫でている。死にそうだと口にする、すでに亡き者となってしまったティサは、ここまでの羞恥に直面しても暴れないのだから、本当に理性は死んでしまったに違いない。

ここで、なぜかラリーヤからアスリに向けて発信されたのは、1つの不敵な笑みだった。この変態が何をアスリに伝えようとしているのか、アスリの理解はすぐに及んだ。カインタの男子全員では飽き足らず、女子まで食して、おそらく様々な模様を目にしてきたであろうラリーヤに、ティサはひだの大きさを指摘されているのだから、この羽の堤は大がかりなのだろう。

では、アスリはどうなるか。言葉すら介さず、笑み1つで人のことを辱められるのだから、変態も極めれば便利なものだ。こっそりと羞恥を蓄えるアスリも、ティサの右膝裏に回しただけで、手持無沙汰となっている右手を伸ばし、ティサの体毛の真横を撫でやって、気を紛らわすしかない。

とにかく泉の奥が余計に苦しくなるアスリを、ラリーヤはそれ以上責めなかった。代わってラリーヤの目が向けられる先は、真向いだ。

「んふふふ、どお？ユニス？」

「………！！」

返事が続かない。アスリも見る。

獲物を見つめる時の、真剣な眼差しだ。ユニスが、ティサを狩るのか。沈黙のユニスに、ティサもわずかに頭を起こし、斜めの薄目をユニスに送る。

「…………何？恥ずかしいんから、そんな見ないでよ。」
「……………すげぇ。」
「やめて、恥ずかしい。」
「………全然違う。」
「………………は？」

今のティサの問いに、威圧はない。あったのは、疑問だ。この時点では、ユニスの真意をくみ取ろうとするアスリの推論も完了しない。しっかりと両目を開いたティサが、体をさらに起こして、ユニスを見つめる。

「違う？」
「アスリんと違う。」
「はっ…………？」

さっきまで完璧だったユニスが、いつものユニスに戻ってしまった。裏返ったティサの声の直後、ティサの両手がまた中央の全てを覆い隠していく。慌てた両足も閉じるように力がこもり、アスリもティサが閉じないよう、一気にティサの膝裏に回す腕を強める。

「待って待って待って！！何？変ってこと！？ビラビラ！？どうしよう！？見ないで！！」
「大丈夫大丈夫！普通だから！」
「いや！！！もう見ないで！！！」
「だから大丈夫だってば！！」

ラリーヤもアスリの反対から膝裏を押さえながら、急に不安に支配されてしまったティサに、落ち着かせるように声をかける。ここはアスリも、ラリーヤと立場は同じはずだ。

しかし、今ユニスは、アスリがラリーヤから受けていた責めを、勝手に再開した。ラリーヤとユニスの間に、不敵な笑みはなかった。つまりこの責めは、単純にユニスの感想でしかないということである。神妙そうな表情には悪気が一切なく、質が悪い。ティサの足を引きつつ、アスリの羞恥も混乱する。

思い出すほどのこともない。ユニスはまだ森の奥で暮らしている頃から、サバンナの真ん中の川辺に牛たちを連れてやってきたアスリを発見し、裸体に限らずアスリの秘密まで盗み見ていた。そして、つい3日前、この洞窟でラリーヤが変態に豹変した後の帰り道、結果的に4人全員が自慰の経験を自供してから、たしかアスリの性器に袋のようなものがあった旨も触れていた。

どう考えても、ティサの大きさを指摘する権利は、アスリにはない。おかしいのはアスリの方だ。恥ずかしい。もっと馬鹿にしてほしい。アスリの腕までもが、羞恥に焼かれて力を抜こうとした時であった。

収拾のつかなくなったティサの内太ももに、ラリーヤが平手を放った。乾いて響くその一発に、ティサの抵抗の方がさらに弱くなる。

「痛っ！！！」
「こら！！もういいから！！やーやー終わり！！」

腰飾りの宝石の輝きのほかに、ここにもう1人母がいた。決して怒気が含まれていたわけでもないのに、この声を前にすれば、ユニスに限らずティサもアスリも子どもだ。ラリーヤは一息吐き出すと、

厳しさの中にも優しさと思いやりをこめ、ゆっくりと諭すように、
3人に少しずつ目をやりながら、短く語り掛けていく。

「…………ティサもアスリも、女の子だよ？」

3日前、この場で男女の仕組みを語り指導者となったラリーヤが、また3人に性を授けようとしている。今、母のような振る舞いも見せるラリーヤの声に、悪さは一切なく、むしろ絶対的に不足している知識を3人に与えようとする良心の方が色濃く見える。だが、高鳴る心臓とともに興奮ばかりが先行するアスリにとって、頼もしいはずのラリーヤはひたすらにいやらしく、ラリーヤの授業の内容次第では、アスリは人前で禁忌の自慰をせざるをえないかもしれない。

「い〜い？ティサ、まずお手てどかして？」
「…………えっ？」
「いいから。」

母のままのトーンでラリーヤに言われては、ティサも手を引かざるを得ない。一瞬のためらいの後、ティサの両手が挙動不審に腰飾りまで後退し、へその真上で重ね合わされれば、再び皮膚の粒に続く左右の堤が、今度は両方の唇をしっかりと合わせた形となって姿を見せた。

その動きに合わせてラリーヤは、ティサの上体もさらに起こすように自身の右手で促していく。4人を乗せる草は、その重さで徐々に沈むように山体の形状を変えつつあり、中央で背を丸めるようにして、ティサは堤を主役にする。

アスリが直面する恥ずかしいティサは、ラリーヤが始めた指導の進め方が不安なのか、口を半開きにしてラリーヤの顔を見つめるのみだ。ティサの右側を取るアスリも、まだラリーヤがどうするのかを見通せず、ひとまずラリーヤにならって、ティサの上体の位置を

調整する。

「ティサ、ちゃんとおまんこ見える？」
「やぁあ！！！何！？そゆこと？」
「こらっ！！だから手！！」

次の通過点を徐々に明らかにしていくラリーヤが喝を飛ばして、羞恥に敗北しかけたティサの手を追い払った。行き場を失った両手は、ティサの顔面へと避難する。

「ほらティサ、ちゃんと自分のなんだから、見てよ？」

これは恥ずかしい。ティサの役目がアスリであれば、アスリは3人に直視されながら、自分でも直視して、自慰をしてみたい。そこまでせずとも、十分恥ずかしい。素晴らしい。

案の定、ラリーヤに促され、手のひらの範囲から外れたティサの、鼻に近い辺りと目尻の辺りの両方の白目は、真っ赤に充血している。そして下へと向き、自分の持ち物を映す瞳の奥には、おそらくぐずぐずになってしまった苦しい恥ずかしさが、ティサの泉と直結しているはずである。こんな辱めを受けていれば、ティサの性は歪んで、まもなく壊れてしまうかもしれない。

「そしたらアスリも反対。」
「ん？」
「広げるよ？」

視線はティサの性器に置いたまま、ラリーヤがティサの左膝裏を経由する左手をさらに伸ばして、2手に分かれた茶髪の外側の土手に中指と人差し指をやりながら、アスリにも反対と開示を声掛けした。その意味は、ひとつしかない。

破壊だ。ラリーヤが求めるティサの性への破壊行為を、アスリは把握した。

羽の堤を、広げるのだ。アスリの血が、煮える。

どうすべきか、考えるまでもなく決まっている。アスリも、ティサの右側の体毛を、右手の人差し指と中指で触れる。

柔らかい。あまりはみ出る肉の外側まで、アスリは気にしたことがなかったが、アスリも同じように柔らかいのだろうか。

「良い？ちゃんとユニスも見てね？」

無言のティサの片隅で、ユニスがこくりと頷いた。これで頷く方も変態だが、ラリーヤの声からも母性が消えている。代わりに、悪さといやらしさだ。ティサに恥辱を与えようとしているラリーヤは、また変態が優勢だ。

左のラリーヤが動けば、右のアスリも同じように実行しなければならない。これほど高い意識をもって臨める仕事は、アスリにとって滅多にない。ティサは絶対に、恥ずかしい。

「……はい、せーの！」

ラリーヤの号令だ。左側を取る2本の指が、斜め上に引っ張る動きを始める。アスリの指も即座に従う。

「くぱあぁぁー！！」

アスリが初めて耳にする言葉を、ラリーヤが発した。音を表す言葉は様々あれど、性器を開く時に使うものがあるなど、アスリは知りもしなかった。

ただ、無知のアスリのことなど構いなく、ラリーヤは手元のティサも先導する。ぐっと引き上げられる左側のティサの肉に、右のアスリの指先も急いで続く。

接触しあっていたしわが、離れた。閉ざされていた堤が、真横に糸を引きながら、全貌を明らかにしていく。

美しく潤った桃色だ。やはり、堤の隙間から少し覗くだけでは不十分だった。全体を通して俯瞰しなければ、この光景は見られないのだ。その表面には小さな気泡がいくつか立っていて、たくさんの小さな生き物が呼吸をしているかのようである。

生態系の中央は、泉だ。湧いている。蟻が1匹通れるかとまでは言えないものの、随分と小さな泉だ。桃色の一面の中、泉より少し上に位置する、尿が出てくるはずの穴よりも、一回り大きい程度だろうか。アスリにしても指1本分程度しか幅はないが、ここまで小さく狭くはない。

それよりもっと上、桃色の外側の皮膚の塊は、まだ形状を変えていない。堤はこの皮膚の下へ続いているのだから、ティサにもあの点がないわけがない。

ふとティサが、泉と後ろの門の間のぬかるんだ肌に力をこめれば、ひくりと大きく泉全体が引きあがって、気泡と混ざり合った湯が流れ出していった。桃色から褐色になりゆく岸辺には、一部は途中で

白さを帯びた藻が打ち上げられており、今の漏出がすでに何度も繰り返されていることを示している。先ほどは獣や干し草に似た匂いをアスリは感じたが、今の香りは水草に近いようでもある。
　ごくごく小さなティサの泉そのものが、またしても引き上げて弛緩する動きを見せて、呼吸する。まるでティサの心臓が、そのまま外に飛び出してしまったかのようだ。３日前、ラリーヤは赤子の成り立ちまで説いていたが、たしかにこの心臓から新たに生命が生まれてきても、何らおかしいところはない。おかしくなるばかりなのは、アスリの方だ。
　何にしても、性から遠くあろうとしたティサですら、たまにすると告白した通り、結局これほどいやらしく、神秘的なのだ。そして、ユニスの言葉を没収すれば、桃色も茶色も白色も、何から何まで綺麗だ。

「すごい……！！綺麗……！！」
「最悪……、吐きそう。」

　思いをそのまま、アスリが口に出せば、ティサの首がさらに斜めになって、汚くなった。アスリは褒めているのだから、ティサは最悪であるはずがないし、本当に吐くわけがない。

「んふふふ、ホント、綺麗だよね。」
「やめてよ！！！マジで恥ずかしい…………、おかしくなりそう！！」

　ラリーヤも続き、ティサも良く反応する。同性の友人であるというのに、アスリもティサと同じように泉が湧いているし、アスリの座る真下の草の山にも、生態系ができあがってしまっているかもしれない。事実、ユニスから見えないよう、たたんで合わせている足の奥の中央、火照る１点から内部にかけてが張りつめてるかのよう

で、アスリは苦しい。早くアスリは自慰がしたい。
「んふふふふ！ってか、ティサのおまんこ、全然変じゃないし？」
「ウソ？だってさっき……、ビラビラって！あと、ユニスもアスリと全然違っ………、ってかユニス、どこまでアスリんこと、どこまで！？そんなめっちゃ細かく見てたん！？」
「うっさい！！」
ぼんやりしかけていたアスリを前に、ラリーヤとティサが本題に戻ろうとして、ティサの内側を見つめるばかりだったユニスに飛んで行った。ティサが変であれば、アスリはもっと変で、アスリは恥ずかしいし快楽に浸りたい。ただし、ユニスには勝手にティサの問いをないがしろにする権利などなく、述べた一言は正しくない。代わって、ラリーヤが不正なユニスの流れを転換する。
「……ってか、別にビラビラ、ちょっとおっきめかもだけど、そこまでっしょ？」
「ラリーヤ自分でさっき言ってたし。しかも結局、おっきいってこと？」
「そんなん、見えたら言うし、いいっしょ？」
「何それ？じゃあ、ラリーヤは？ラリーヤもビラビラ？」
「私んは……。」
たしかにラリーヤは経験からティサについて語って、見たもの述べただけだとしているが、ティサの展開には、自身の肉体でもって説明づけるのが最もわかりやすい手段だ。加えて、ラリーヤはここまで終始開放的だったのだから、あっという間に片足を持ち上げて、見せつけてきてもおかしくはないはずである。それがどういう訳かためらった以上、大きな乳房に無毛の割れ目、さらには実際の性行為まで見せつけたラリーヤにしてみても、ティサが見せる桃色だけ

は厳しすぎるということにつながっていく。
　厳格さをティサにだけ求めるなど、言語道断だ。ラリーヤもティサの隣に並べてしまうべきだし、アスリも平等に見てもらうしかない。
「……ってかユニスも違うって言ってたけど、さっきティサだって、ちょっと見えたじゃん？アスリの……。」
「ちょっ！！やめてよ！！私もアレ……、ホント恥ずかしいんだから！！」
　頭がのぼせているアスリが、誤算した。今、ラリーヤはためらったのではなく、アスリに向けるべきか配慮して、結局アスリに責めを流したのだ。恥ずかしくて悩むアスリの中身が、切に苛立ってくる。やや本気を見せたアスリに、ラリーヤが冷静とともに乳輪の瞳にしおらしさを載せて、声を詫びさせる。
「ごめんて……。まぁ、でも、女の子は最初は外っかわはみんな違うけど、結局みんな一緒だから。ティサも、アスリも、私だって。」
「んなわけないじゃん？私ん、全然違うし……。」
　口にして思えば、アスリにとって信じられないほどの羞恥だ。それにも関わらず、興奮で卒倒しそうなアスリの姿は、まだただコンプレックスに落ち込むようにしかラリーヤの目には映らなかったのか、次もまたアスリのフォローだ。
「違っても、一緒なんだって。男の子だっておんなじで、最初は一緒。昨日のおちんぽも、ユニスのちんちんも、色も形も、あとユニスんは特に、ちんちんの先のビラビラとか。……そうじゃん？あとちっちゃい。」
「うっさい！！」

「いいから。でもどっちも毛が生えて、ピンピンに固くなって、ぴゅっぴゅするでしょ？ユニスだって、その先っちょのビラビラ切っちゃえば、中身は昨日のおちんぽと形一緒になるかもじゃん？ちっさいまんまだけど。なんないかな？」
「だからうっさい！！切んな！！」

否定しかできないユニスは、草につけていた右手を素早く股間に送り、親指と人差し指で女子のひだに例えられた自身の皮膚をつまんでから、筒をまるごと握りしめると、ここで伏し目で逸れた。ユニスが生まれてからこれまで、誰とも比較することのなかったであろうこの1本は、この3日間でさんざんいじめられて、ユニスにも羞恥心が芽生えつつあるようである。

しかし、今になってアスリも気づいたが、ユニスの手の角度は、また槍が腫れてしまっていることを示唆している。これほどの至近距離にティサの心臓があるのであるから、ユニスの気分が高揚するのは致し方ないが、仮にも羞恥を紛れさせて喜んでいるなら、どうしようもない変態だ。大人にする罰を与えるべきだろう。

対して、ラリーヤの訴えはもっともだ。アスリの仮説に従えば、もう1歩進んで中央の一粒は男女間でも共通となるが、翼と羽と、何もはみ出ない1本線に関しては同じ女子間でも一般性がない。それにそもそも今のアスリは本能が中心で、むやみに口もはさめないし、理論では語れない。

「で、ユニス……、どうすんだっけ？今から。」

ぶれゆく議論を集約できるのは、正道の一筋を背でなく股に負うラリーヤだけだ。これができるから、ラリーヤは無毛でも大人だ。皮を手放せない、子どものユニスとは違う。ラリーヤの問いかけに、ユニスもティサへの視線を捉え直した。

まだアスリとラリーヤは、左右からティサの堤を広げたままだ。

ティサの桃色を全て見たユニスに、ラリーヤの声が導きを再開する。
「ねぇ、ペロペロすんだよね？そしたらユニス、ちゃんと見てて。ティサとアスリは、わかってると思うけど……。」
まるで自分の何かを見せるかのような言い様だが、確定的に見るべき先として示したのは、ティサの広げられた箇所だ。ティサがどんな顔をしているか、アスリも目にしたいが、今ティサに目をやれば、ティサの口元を覆う両手が下に降りてしまうだろう。
顔より、桃色だ。それはラリーヤも同じで、ティサの中央を覗き込むようにしながら、茶髪の上で押さえている左手の指の位置をずらして、人差し指を性器に向ける。指し示す先は、まだらな毛の間、後ろの門に向けて引き締まって凹む間を流れる、気泡を含んだ小川の出元の水源だ。
「……まず、このおつゆ出てきてるとこ、ここが、おまんこの穴。ユニス、あとでここにちんちん入れんだよ？お尻の穴がこっち、今日入れんのはこっちじゃなくて、こっちね？」
不覚にもアスリはまた、ティサに共感してしまった。恥ずかしい。肉体が、手本とされている。ティサは恥ずかしい。顔も見られないし、ティサも顔を見られたくないだろう。だが、顔は見られていないのに、違う顔を指さされているのだ。恥ずかしい、恥ずかしい。ティサの羞恥を、アスリは察しきれない。
これで終わるわけがない。ラリーヤの指は、桃色の庭の中を案内して回る。
「ここ、わかる？これがおっしこ出る穴。」
「…………ねぇ、ラリーヤ。マジで無理、めっちゃ恥ずかしい……
……。」

ティサの反応は、至極まっとうだ。むしろ、この言葉が出てこないようでは、ティサはラリーヤやユニスと同じで、どうしようもない変態だ。指さす変態も、おそらくこのような局面はすでにカインタでさんざんくぐってきたのだろう。難なくラリーヤは、ティサを言葉で鎮圧する。

「ダメっしょ、ティサ？自分のなんだから、ちゃんと見てよ？ってか、おしっこどっから出るか、ティサわかってた？血出てくるとこと違うよ？」
「そんなん知ってるし！！」
「ホントに？あとでしーしーも、一緒に練習する？」
「バカ！！！マジで殺すよ？」

ティサの脅し文句には、敗北の調べが色濃くにじんでいる。勝者となって堤の内側を蹂躙するラリーヤの人差し指は、まだ北上する。止まった。小さな指の肉のようになっている、皮膚の塊だ。開ききってしまった羽とは対照的に、この肉は芽先すら現さず、ぴっしりと戸を閉ざしたままである。

「……で、ここ。んふふふふ……。」
「バカ！！！変態！！！ホントもうやめて！！！」
「こら！足！やーやーすんなら、もっと恥ずかしいよ？」

具体を伴わないが、耳にするだけで恥ずかしい制止だ。ラリーヤが恥ずかしいというのだから、かなりアスリも期待できるが、ティサの暴れかけた脚は、すぐに諦める。
対するラリーヤは、指さしをやめて左手を移動させると、直前まで指摘していた1点の斜め上に指を移動させて、強く上方に引き広げるように動かした。当然、右側のアスリの指先も、無意識に同調

する。

あった。アスリの仮説は、ティサにも通った。皮膚の下に、小指の爪の先端にも満たない、小さな1点が、ほんの少しだけ頭を出した。

またひくりと、ティサが桃色全体を躍動させて、泉から湯を流す。それにあわせて、1点もわずかにせりあがって、戻る。

「……わかる？このちっちゃいまんなかのとこ？女の子が最初、いっちばん敏感で、すっごく気持ちよくなる、お豆。」

「………………っ！！！」

ラリーヤの解説は、これが何たるかを知るアスリでもティサでもない、自身の性器を押さえたままの唯一の男子、ユニスへのものだ。汗ばむユニスも、ティサの性器のように喉ぼとけを上下させる。

「……だから、どしたら良いんかな？」

ユニスに問うのとともに、ラリーヤがティサの外周を押さえながら指差ししていた左手を放し、ティサの膝裏に回す腕に力をこめた。急なラリーヤに、アスリも追従する。

「ダメッ！！！！」

ティサも、ラリーヤの問いの答えを察した。ラリーヤとアスリの腕に反抗する両太ももは、外に引く力に完敗しているが、左右の羽の堤だけは触れ合って、桃色の範囲を狭めた。外へのはみ出しと茶髪にもたらされるのは、一時的な安寧だ。

ユニスは、ティサから視線を動かさない。ユニスが、判断する。

握りしめたまま隠していた槍から、ユニスがゆっくりと手を放した。ティサの口内に注ぎ込んだ槍は、またしても上を目指している。同時に、普段矢を取る時と同じく、ユニスの指先は何かを掴むかのように、ティサの中央へと伸びていった。

「やっ！！！！だめぇっ！！！！！」

アスリが、ティサの膝裏を確保する腕を、さらに強める。ユニスは、手の平を広げた。

「んっっ…………！！！！！」

ユニスの親指が、ティサのあの1点を、ぴったりと押さえた。あ

わせて、ティサが全身を大きく一度身震いさせる。
　この1点をどうしたら良いか、ユニスに提起したラリーヤの真意は、ティサがユニスに行ったように、性器と口の接触であるのは、アスリもわかるし、鈍いユニスでもそうであるに違いない。その上で、まずユニスがあえて向かわせた親指の意味するところは、おそらく下調べであって、露払いなのであろう。
　押し当てた親指を凝視しているユニスは、肉の質感を指で受け止めるように、ひたすらに固まっている。尻をすぼめるティサには、かなりの快楽だ。だが、続いてティサがあげたのは、アスリにとって意外な一言であった。

「………痛い！！！！！」
「おっ！！」
「ちょっと！！そんな強くしたら！！」

　痛みを訴えたティサに、驚くユニスもすぐに手をよけた。アスリならおそらくユニスの指から伝わる刺激だけで波にさらわれてしまうであろうが、ラリーヤも割って入った通り、たしかに今のユニスの触れ方は、あれほど多感なところに対して、やや強かった。身を引いたユニスはティサをうかがい、2人はそのまま目だけで語り合っている。

「……………ほら、そうじゃないっしょ？だから、どしたら良いんかな？」

　外の滝の音だけになった空間を挟んで、ごくごく小さな粒と、ユニスが止めてしまった手に、ラリーヤが落ち着いた声で、先ほどと同じ問いかけを加える。今度も、ラリーヤは詳細を示さず、あくまでユニスに考えさせ、ユニスを主体にしている。アスリも、ユニスに委ねる。

茶色く広がる草原のずっと先に、思慮の深淵にあるユニスが、小さな獲物となったティサを見定めている。今、賢い助手の犬は外だし、弓も矢も、ユニスの手元にはない。しかし、どんな時でも、ユニスの狩りは、超一流だ。

もうユニスは、ティサの1粒の実態を、親指1本で掴みきっている。アスリの知る猟師のユニスは、ここで絶対に外さない。

次の瞬間、ぐっと身を倒したユニスが、ティサの下腹の茶髪間近に両手を置いた。ユニスに、勇気がみなぎった。放たれた矢のようなユニスの両手の親指は、直前までラリーヤとアスリが保っていた最上部の外を捉え、桃色の1点を中心に押し広げていく。

「ちょっと!?!?ユニス!?!?」

上ずったティサの声の中に、きらりと、ティサの腰飾りの宝石が輝いた。狩りの時間が、始まった。ユニスの唇が、一粒の真正面にたどり着いた。

「ティサ、ごめん。」

「……えっ!?」

ユニスがティサを呼び、謝罪した。実に凛々しい謝罪だ。何に対しての謝罪かは明らかでなくとも、息を込めて言葉を乗せた今のユニスは、最高だ。

現れた粒の先端へとかかった、ユニスの最高の吐息は、困惑するティサの両太ももの筋肉を硬直させる。吐かれた息を、アスリは飲む。

「綺麗だから。」

「ユニス！？！？」

追いつかない。追いつけない。アスリのすぐ前にいるティサとユニスが、遠くなって2人だけになる。ユニスが、来る。

「だっっっっっっっっ！！！！！！」

一気に歯を食いしばって忍耐するティサが、肘を曲げた両腕を大きく開きながら、こぶしを握り締め、全身をよじった。ついにユニスが、ティサの極地に口づけした。

「ヤダッ……！！！……ダメッ！！！！……ダメッ！！！！！……………………ツッ！！！！！！！」

犬が水を飲む音が、ティサの股の間から響いている。1つ音が鳴る度にティサは、首を左右に振って、顔に乗った髪の合間に見せる、噛み締めた歯の隙間から、息を吸って吐き出し、こらえている。子牛を産む時の、母牛のように苦しそうだが、今のティサが得ているであろう感覚は、アスリの想像に容易い。

「………………！！ぐっ…………！！！！……！！！！！」

「……ティサ？良いんだよ？声出しなよ？」

「っ！！！！」

ラリーヤがティサに助言する。なお、ティサがまだ強情と見るや否や、次のラリーヤの助言はユニスにもかかる。

「……ユニス、ちんちんの皮みたく、ティサのお豆、お口の中でもっと剥けそう？」

「？」

ユニスの口内では、実際舌がどう動いているのかは、アスリには把握しきれない。それでもラリーヤの言葉に、素直に従おうとするユニスは、茶髪の傍に置きやる両手の親指を、さらに中央に近づけて引き上げ、唇の形を変え、まぶたを閉じて集中する。

「んあっ……！！！！！　ああああん！！！ダメ………！！！！ダメッ！！！！！」

太く声を上げたティサが、ラリーヤとアスリの腕を振り切って、ユニスの頭を太ももで潰そうとした。アスリもラリーヤも、ティサを許さない。ティサの太ももの上で、閉じる力と開く力が拮抗する。

「んっ……！！！んっ……！！！！んーーーーーーーっ……！！！！！」

「ユニス、もっとさっき、ティサにぴゅっぴゅさせられた時みたく！自分のちんちん剥いたところ、なめられてると思ってなめて！」

ラリーヤから技術の指示が飛んだ。一度目を開き、ラリーヤを一瞥したユニスが、再び目を閉じて猟師に身を戻す。全力のユニスが、体得する。

「んんあああああああああああああん！！！！！！！！！！！」

すぐさま、甲高くうるさい女子の声を、ティサが大きく洞窟に響かせた。愛する人の口づけは、著しい快楽のはずだ。ティサの両太ももが、間に入ったユニスの頭をより強く挟みこもうとする。よがるティサの両脇のアスリとラリーヤは、一糸乱れずティサの膝裏をさらに引き込んで、ユニスにティサの割れ目を提示する。

「んんんんんあああああああああああああっ！！！！！ダメ！！！ギャッ！！！！ギャッ！！！んんんああっ！！！！あああああんんんんんあああ！！！ギャッ！！！ンギャッ！！！！！！んぐぁあああああああん！！！！！」

　ほんの少し前にあったユニスのなめる音が、アスリの耳に入らない。全てを、暴れるティサが打ち消している。瞼を閉じたユニスは、一生懸命そのものだ。性器をひたすらなめるだけのユニスすら、アスリは愛おしい。それをまさに施されているティサは、ユニスに追われる獣となって、発狂の最中にある。

　力をこめて、ティサを乗り越えさせねばならない。先ほどよりも一段と強くなったティサの全身の硬直に、アスリの裸の脇下までが泉になる。

「きぃゃああああああ！！！！んぎゃあああああ！！！！ダメぇええええええ！！！！！ああああああっ！！！！！ああああああああっ！！！！ああああああっ！！！！！」

「ティサ！！頑張って！！！」

　また、アスリも応援する。ティサの顔面は、見たことがないほどにくしゃくしゃだ。首も肩も、叫び声に合わせて大きく揺れる。

「ダメダメダメダメダメダメダメダメ！！！！！！！無理無理無理無理無理！！！！！！！！これんああああああああああ！！！！無理無理無理！！！！！！ああああああああああああああ変になるよおおおおおお！！！！！！！ユニスだめぇあああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

「ティサ！！！！いいから！！！！！イッちゃえ！！！！！ユニスもがんばって！！！」

ラリーヤも声を大にする。ティサがふくよかな胸を突き出して、飛び出す乳首をさらに外に向けた。顎が持ち上がる。背が反る。ティサに触れるアスリの肌が、全て汗になる。皮膚の紅潮が、ティサの胸元から首元へと進んでいく。大きな波が、ティサをまもなくさらう。

「きゃあああああ！！！！何これ何これ何これ！！！！無理無理無理無理無理！！！怖いんぁあああああああああああああああ！！！！！変になっちゃう！！！！！」

「ティサ！！！！ほら！！！いつもみたく！！！」

ラリーヤの声援の中、アスリの脳裏にまさかがよぎる。なぜ、恐怖を今、ティサは抱くのか。

ここまでされながら、ティサは大波を迎えたことがないのかもしれない。それはつまり、ティサがたまにと言った自慰が、本質を伴っていないということにつながる。そうであるなら、ティサには、理解してもらわないといけないだろう。

「ユニス！！！もっと頑張って！！！」

張り上げたアスリの声に、ティサの股間のユニスもアスリを見た。伏し目はない。ユニスがティサの下腹を捉えなおして、両手の親指をさらに強く押さえる。

一旦唇を離して、軽く息を吸ったユニスが、また瞼を閉じた。唇が、ティサに触れる。ユニスの額も、一気に真っ赤に紅潮する。ついにユニスが、ティサを追い詰めた。ユニスの唇が、尖った。

「きぃいいやゃああああああああああああああ！！！！！！！！やぁあああああああん！！！！きゃっ！！！！！！！！！！！！！

！」

獣だ。雌の獣を、ユニスが生け捕りにしている。胸元までせりあがっていたティサの紅潮は、一気にティサの顔面を凌駕する。波に流されまいと、虚空を握りしめるティサは、意に反して沖へと向かっていく。

「きゃっ！！！！！！！！！！！！！！！！きゃっ！！！！！！！！！！！！！！！！んあっ！！！！！！！！！！！！！！！！んあっ！！！！！！！！！！！！！！！！んあっ！！！！！！！！！！！！！！！！あっ！！！！！！……………………がっ！！！！！！……………………あっ！！！！！！」

赤面のティサの頂だ。ティサが、ユニスの唇に導かれた。

「………やっ！！！！！！………あっ！！！！！！………あっ！！！！！！」

汗だくで全身を硬直させるティサは、波を受ける度に太く短く女を叫び、その都度大きく身震いする。激しい動きは、アスリとラリーヤが抱え倒しているティサの両膝の裏を汗で滑らせ、股間でティサに吸いつくユニスの頭は、徐々に太ももに挟み込まれつつある。
　頭も唇も離すこともできないユニスは、驚くように見開いた目だけを上に向けて、ティサの絶頂を固唾を呑んで見届けている。今はユニスも捕らえた獲物が静まるのを待っているのか、口元は茶髪の間に埋もれているものの、そこに動きはないようだ。

「………………ゃっ！！！……………………………………ぁっ！！！」

アスリが抱えるティサの膝の先、つま先の形状が、何かを掴もうとするように張り詰める。あの切なさが、ティサの足の指１本１本にまで、着実に送り込まれているのだろう。現に半開きの口元で奥歯を噛み殺し、眉間にしわを寄せたティサの顔には、アスリも慣れ親しんだ母に謝罪する時の甘美が広がっている。
　美しく、いやらしいティサの薄い唇に、アスリも口づけしてみたい。ティサが全身で被っている波が、アスリにも波紋を広げる。今は、決して流されてはいけない。

「……………………………………！！……………………………………！！」

叫びだったティサの声が、息になった。同時に、こわばっていたティサの足は脱力し、荒々しい呼吸だけが連続していく。

嵐が去って、穏やかな余韻に包み込まれたティサが、本質の理解を進めている。思えばアスリが初めて波を得た、自宅の高窓から差し込む月光下、アスリは声を殺すしかなかった。まだティサの絶頂が初めてだと決まったわけではないが、あれほど叫びながら得る理解は、どれほど良いのだろう。あるいはユニスになめ上げられれば、アスリも獣になってしまうのだろうか。

落下する滝の水のように急だったひと時が、静かな小川の流れに変わろうとした、その時であった。ティサの茶髪の真上で、ユニスが大きく鼻から息を吸い込んだ。直後に、犬が水を飲む音と、それを上書きするティサの絶叫が続く。

「んあっ――！！！やっ――！！！あっ！！！あっ！！！あっ！！！あっ！！！ああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

突如として、再び波は高くなり、ティサの両膝はアスリとラリーヤの制御を外れてまっすぐ伸びて、両太ももがユニスの頭を食い殺すように挟み込む。ユニスの額には、必死になったティサの両手も送られて、押さえこまれようとしている。

「ダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメ！！！！！！ああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

確実にユニスが、一生懸命に再開してしまった。一体ユニスは、何を考えているのだろうか。ティサにとっては区切りでも、ユニス

にとっては終わっていなかったのか、または単にユニスの性的興味なのか、それとも計り知れない変態の本能によるのか、とにかく事実は至ったティサの1点を、ユニスがまた口内で弄んでいるということに他ならない。

「んあっ！！！！がっ！！！！あっ！！！！！やがっ！！！！！あああああああああああはあああああああんんあああああああああんあああああ！！！！！！！」

ティサの声は苦悶の快楽であって、厳しい。しかし、これほどの幸福はない。止めるべきなのか。

「ああああああああああああはああああああああああんんああああああああああんああああああ！！！！！！！死ぬぅううあああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

「ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ちょっとユニス！！もうここまでにしとこ！？！？」

アスリの迷う間、とうとうラリーヤが介入しユニスの肩に触れ、やっとユニスもティサの一極から唇を離して、両太ももの間からするりと頭を引き抜いた。それに合わせて、とうにアスリとラリーヤの腕から逃げ出しているティサの足は、膝を立てたまま草の上に両方のつま先だけをつけて、ガクガクと痙攣させる骨盤全体を突き上げた。ユニスの束ねる、前に流れた後ろ髪は、水浴びをした直後のようにずぶ濡れだ。

「あああああっ！！！！！ああっ！！！！！！！んぎゃあゃっ！！！！！！」

水だ。水が、飛んだ。ティサが声をあげるごとに、広がってしま

った堤を突っ切って、中央から少量の水が途切れ途切れに勢いよく飛んで、ユニスにかかっていく。先ほど、ユニスが飛ばしたどろりとした乳と違って、ティサのは明らかに水だ。いや、尿だ。
　ティサがユニスを濡らして、目も開けられないユニスは横顔で受け止める。どうなっているのか。狂っている。過去、どんなに波にさらわれても、自ら尿の波を送りつける経験は、アスリにはない。
「んっ…………、んっ…………、んっ……、んぁああああああああああああああん！！！！！！！！ああああああああああああああ！！！！！！！！ああああああああああああ！！！！！」
　尿が飛ばなくなれば、今度はティサの悲しみの嗚咽と、目からの号泣だ。ティサは壊れて、おかしくなってしまった。どれほど気持ちよく泣いているのだろう。

「ああーもう、ユニス！！ティサ、頑張ったんに？」
「ティサ、ごめん。良さそうだったから……。」
「ああああああああああああああん！！！！！！！！！ああああああああああああああああ！！！！」
「でも、ちゃんと女の子のぴゅっぴゅもできたねー？えらいねー？ティサ！」

　目の前の状況に、アスリは灰になりかけている。もう、状況の分析が追いつかない。ユニスはティサをしっかり仕留めた上で、さらにティサを自己判断で良化させようと継続し、ティサは追い打ちの波を堤から吐き出しつつ泣いて、ラリーヤはユニスを大して責めもせず、むしろティサを褒めている。
　アスリだけはわからない。しかし、そこはかとなくティサが羨ましくて仕方がない。アスリもこうやって、快楽に冒涜されてから漏らし、羞恥を味わって、赤子のように心行くまで泣いてみたい。

「ああああああああああああ！！！ああああああああああぁあああ！！ああああ！！！」
「ほら、よーしよーし。アスリもよしよししてあげよ？」
　呆然とするアスリに、ラリーヤからも声がかかる。ラリーヤにならって、アスリも手だけはティサの頭に置くが、次に出てくるのは疑問だ。
「え、アスリ、くちゅくちゅすんのに、イったことないん？」
「イっちゃったんしょ？」
「イっちゃった……？」
「今の何……？」
　表現そのものについて、アスリは過去に聞いたことがなかったが、ラリーヤの言わんとするものが、アスリにとっての波であることはわかる。ただ、アスリが聞きたいのは、波でなく尿についてだ。
「バカ。何ていうか知らんけど、私聞きたいんは、それ。おしっこ？」
「女の子のぴゅっぴゅだよ？アスリ出たことないん？」
「なんそれ？ユニスみたく、おっしこと違うんが出るってこと？これで赤ちゃん作れるん？」
「いや、多分おしっこだけど。」
　ラリーヤの回答に、ユニスがティサを受け止めた頬を右手で拭って、振り払う仕草を見せた。ティサはユニスを飲んだのだから、ユニスも本来は飲むべきだ。突き上げた腰をまだ震わせているティサの泣き声を越えて、アスリが続ける。

「じゃあ、おしっこじゃん！」
「アスリだって、あの穴ん中ぐりぐりして、すっごく気持ちよくしたら、ティサみたくぴゅっぴゅしちゃうんだよ？」
「あん中ぐりぐりって……、でも、今はティサさ。」
「お豆だけだったけどー、ほら、ティサって前もおもらししてたじゃん。だから出やすいのかも！ティサ、しーしー上手だねー？」
「あああああ！！！バカバカバカ！！！！！」

涙のティサが、アスリとラリーヤのやりとりを遮断し、ここで腰を草の上へと落とした。たしかにティサは、先日墓地の近くで怪奇を体験し、足元に池を作ってしまっている。あの時、ティサが得たのは恐怖であったが、快楽でも作用するのだろう。
また、ラリーヤはティサに限らず、アスリも可能だと述べていた。そうであるなら、ラリーヤも尿を飛ばした経験があるのだろうか。アスリが次の問いかけに向けて頭を回す中、先に動いたのはラリーヤだった。

「もうティサー、気持ちいいんしょ？泣かんでよ？」
「うっさい！！黙れ！！」
「そんなん言わんで、ほら、ユニス。ちんちん持ってきて？」
「……おっ。」
「もっとこっち。」

器でも取らせるかのようにラリーヤはユニスに指示したが、持ってくるように頼んだものが立つ場所は股間だ。自身の汗とティサの尿にまみれて、全身に怪しいつやを出しているユニスが膝立ちで草の上を進み、ティサの太ももの間に割って入ると、ラリーヤは手招きしてからユニスの尻に触れ、洞窟の天井を目指して固くなった皮槍をティサの方へと近づけた。

「ティサも起きて？」

優しい口調で、ラリーヤが草の上に転がるティサに起きるように促し、肩を取った。アスリも反対側を支えていく。

「ほら、もっかいちんちんペロペロして、落ち着こ？」

「…………ぐっ！！」

意味不明だ。どうしてそうなるのか、アスリはここでもわからない。

ところが、この提案は今のティサに非常に効果的であったようである。上体を起こされたティサは、目元と鼻を右腕で拭うと、ユニスの皮槍をすぐさま手に取って、そのまま一気に指を送り、ユニスを大人にした。

「っ！！」

切なさの残り香、羞恥、怒り、涙、心中で渦巻いているはずの様々な感情が、自棄のような態度として現れている今のティサに、もはやためらいは残されていない。匂いすら立ち込める間もないうちに、ユニスの赤い1点は、前傾したティサの口内に収まった。

目を閉じて、ユニスを堪能するティサから、涙の気配が急速に消えていく。唾液が、音になって、ゆっくりゆっくり動き出す。直前の醜態を打ち消すように、ティサの舌が、大人になったユニスを愛している。

「んっ…………、んっ…………、んっ…………。」

無言のユニスに対し、ティサは小さく喉を鳴らすような声を出している。しかし、アスリが見上げたユニスは、早くも顔中が崩れて

いる。

「よーしよーし。ティサいいこだねー？」

母になったラリーヤが、言いつけを守るティサの頭に手をやって、乱れた髪をとかすようにして撫でた。アスリもティサに羨望を抱く前に、母となってティサを撫でる。

「……っ！！」

ユニスが、何かを鳴らした。もう、苦しいのかもしれない。だが、せっかく出来上がったばかりの新しい流れに、制止を差し込んだのはラリーヤだ。

「はい！ティサ、ここまで！！」

誘導した張本人であるラリーヤが、ティサを止めた。ティサも、アスリも、ユニスも、ラリーヤに視線を送る。

目の前しか見えていない3人が疑問を挟むよりも早く、俯瞰するラリーヤがユニスの腰に触れて、ティサから離すように押し込んだ。それによって、小さく抜ける音とともに出てきた、大人だったはずのユニスは、吸いつこうとしたままのティサの唇によって、すっかり子どもに戻ってしまった。槍に浮き上がる血管は、ユニスがほどなく波が来ることを伝えるように血液を運び、全体を鼓動させている。

「これで準備できたね？」

「準備……？」

ラリーヤに、ティサがつぶやくように問う。続くラリーヤの言葉

に、アスリも我に返る。

「なかよしの準備、できたっしょ？」

今日、最も重要な目的だ。ラリーヤがティサに、昨日結んだ約束の履行を迫った。

「えっ……、ちょっと待って！」
「何？もうユニスのちんちん、ピンピンだし、ティサもおまんこぬれぬれっしょ？」
「いや、待ってって！」
「はい、ティサ、後ろにごろーんしようね？」

ティサは待ったをかけているが、ラリーヤの言う通り、機は熟している。ティサの上体を強引に草の上に押し倒したラリーヤが、ティサの左太ももに手を置けば、察したアスリもティサの右太ももを取る。

「ほら、足も開かんと？」
「ちょー、やああー！！」

左右で協調するラリーヤとアスリが、ティサの両足を外へと倒し、ユニスの面前に尿で濡れたティサがさらけ出されていく。一方ティサも、あれこれ言いはすれども、直前まで威勢よくユニスをしゃぶっていた以上、もう無駄には抵抗せず、ただ両手で顔を隠しただけだ。

「よーし！ユニス！ちんちん！」

ユニスにも、ラリーヤから指示がかかった。広げられたティサの御前でしゃがんだユニスの皮槍が、ティサの羽の堤と対峙する。

「…………さっき言ったとこ、どっかわかる？」

ラリーヤの確認に、こくりとユニスは頷いた。時が近くなり、最初は顔を隠したティサも両肘をついて首から背中にかけてを起こし、伸び広がる自らの乳房の間から、ユニスへと紅潮した顔を向けた。

「ティサ…………、触るよ？」

「………………恥ずかしい。」

ティサの声を耳にするアスリまでが、恥ずかしい。しかし、これは同意だ。ゆっくりと、ユニスの右手がティサの中央の上部へと伸びていく。

「………んっ！」

左右の堤の真横に、ユニスの親指と人差し指が置かれた。２本の指が、そのまま桃色の内側を開く。

「ユニス、おまんこに入れる時は、おちんぽだよ？」

「……？」

「ティサに入れる前に、大人にしよっか？」

ラリーヤからユニスに、カインタのルールであろう言葉がかかった。それがなぜ必要であるか、アスリも計り知れないが、ユニスは一度自らの槍に目をやって、ラリーヤの言葉通り左手でくるりと中身を剥き出しにして、槍の半ばの空気に触れていなかった薄桃色の皮膚を留め持つと、真っ赤な一球をティサの庭の前に掲げた。

ユニスの方が赤い。２人の粘膜と粘膜が、対面している。性の持ついやらしさと、生命的な神秘が、アスリの目の前で男女として同居している。

「ティサ…………、良い？」

もう一度、ユニスがティサの顔に視線を戻した。今度はティサが、黙ってゆっくりと頷いた。ユニスも、小さく頷く。

ティサもユニスも、現場に目を向ける。アスリも、ラリーヤも、桃色に直面した赤色に注目する。

ほんの少し前、ティサが2度目を頬張ったユニスの先端には何の残滓もなく、球にあるのは美しく縦に入った男子の割れ目だけだ。段差まで続くつやつやとしたユニスの楕円が、ティサの泉に距離を近づけていく。

「…………！！」

「…………んっ！！」

接触した。またユニスが、ティサの顔に目をやる。

「ティサ、いくよ？」

「来て、ユニス。」

ユニスが、接点に戻る。アスリが、集中する。ユニスは、進む。

進まない。止まった。

「…………痛いかも。」

「これ、入んなくね？」

ティサとユニスが、率直に現況を述べた。入らないのだ。

「大丈夫。最初はちょっと痛いかもだけど、入っちゃえば大丈夫だ

から。」

この場で唯一の経験者が、２人を落ち着かせようと見解を述べた。何がどう大丈夫なのか、ラリーヤは口にしていないが、昨日ラリーヤにもっと太い１本が入っていた以上、説得力は十分にある。ラリーヤはユニスの腰に手を伸ばして、続ける。

「もっとユニス、押し込んで！」

「痛たたたたた！！！！！」

「あっ！！俺も！！折れる！！」

ここでティサの両手が、ユニスが堤を広げている右手を掴むと、ユニスも一度腰を後ろへと引きやった。ラリーヤが指さしながらティサの庭を案内した時、たしかにティサの泉の入り口は、かなり小さく狭かったが、やはりユニスの固い１本が折れてしまいそうなほどに、大きさに差があるようだ。

「ちょっと！ユニスもっと頑張ってよ！」

「痛っ！」

「はい！もっかい！」

進行を止めたユニスの尻に、ラリーヤがピシャリとビンタを飛ばした。このように、元気良くラリーヤに励まされては、ユニスもまた押し込むしかない。しかし、入らないものは入らないし、結果は目に見えている。

「痛い痛い痛い痛い！！！！！！！」

「………いや、これマジ入らんぞ？」

「いや、こんな細いちんちん絶対入るって！！ちょっとユニス、貸して！」

とうとう、しびれを切らしたラリーヤは、ティサの真横から抜け出して、大きな乳房を揺らしながらユニスの隣からティサの股間に割って入ると、ユニスに代わって左手でティサの桃色を大きく広げていった。怪我を見る巫女のような眼差しのラリーヤは、右手の人差し指で開け放たれたティサの庭の内部を、何やら検分している。

「ちょっ……、ラリーヤ！！何してんの！？！？」

「ちょっと動かんで！！」

「……やっ！！痛っ！！ちょっと！！」

「……………あぁー、やっぱこれよねー。」

「何！？これって！？なんかあんの！？ってか、そこ！そんな触んないでよ……！！」

「前にカインタにもいたんだよねぇ、こういう子。アレ………、しんどいけど、しょうがないかぁ。」

「はっ！？どゆこと！？」

ラリーヤは本当に、巫女か聖女なのだろうか。無論、そのはずはないが、万が一にも性器に限っては、ラリーヤの方が深い見識を持っているのかもしれない。何にせよ、ティサの庭にはラリーヤの知る何らかが存在し、ティサは難儀することになるようである。

「ちょっとこのまんまだと、たしかにユニスのちんちんでも、入らんね。」

「じゃあ、やっぱ無理なんじゃん？」

予想外にラリーヤが、ユニスの細槍でもティサには入らないことを簡単に認めると、直前とは打って変わって、ティサから安堵の滲んだ声が上がった。これを機にティサも、目の前の課題をすり替えようと動く。

「……ねぇ、もうそんなんいいじゃん？それよりユニス、やんなら、さっきみたく………お口でしようよ？私、そっちしたい。」
「また俺の……、なめんの？」
「そうじゃなくて！」
「俺がティサの、なめるん？」
「バカ！じゃなくて、お口とお口！ぎゅってしながら、してほしい。」

大胆な提案だ。だが、性器と性器に比べれば、衝撃の程度は大きく軽減する。ユニスに来るように言ったにも関わらず、こうして翻ったティサをアスリが見るに、あの柔らかそうなユニスの先端の楕円でもってしても、泉に入れようとする試みは思った以上に痛みを伴ったのかもしれない。

「んふふふ、ティサ、ユニスとちゅっちゅがいいの？」
「ラリーヤうっさい！何したくなったって、別にいいじゃん！ユニスなんだし！あともうラリーヤ、あっ……！そこいじんのやめてよ！」
「はいはい、じゃあユニス、ティサのお願いだよー。ぎゅってして、ちゅっちゅだって？いけー！」
「痛っ！！」

またラリーヤはユニスの尻をビンタして、ユニスをティサへと向かわせると、ここでもあっさりラリーヤはティサの秘所から指を離して、草の山の脇へと立ち上がった。送り込まれたユニスは、ラリーヤとは入れ替わりに、両腕を伸ばすティサに吸い込まれるようにして、ティサの上に覆いかぶさっていく。特に意味はないが、アスリもユニスの引き締まった尻を、思いっきり叩いてみたい。

「じゃあ、ちょっとちゅっちゅしといて！　ふたりとも、ぴゅっぴゅは我慢だよ？」

草の上で熱くなりかける2人に対し、くるりと背を向けたラリーヤが、小走りで洞窟の入り口の方へと裸で駆けだした。早速、真下にあるはずのティサの顔に向けて動き出すユニスの頭を前に、アスリだけは何からも自由だ。今の隙に、高ぶった波をひと被りしておくべきか。

「………………あ、アスリ！」

残念ながら、アスリが好き勝手にすることを、ラリーヤは許さない。一度、洞窟の外に出た逆光のラリーヤの上半身が、アスリを呼んだ。

「さっきの器にさー、ぬるぬるのお薬またすくっといてもらえん？　あと切れるやつ、さっき適当に置いちゃってて危ないし、果物とお薬と一緒に、その辺にわかるように置いといてー。」

愛に包まれている2人のすぐ近くで、アスリにかかった依頼は洞窟の片付けだ。あまりに理不尽な仕事ではあるが、そう言われてはアスリも致し方ない。

「わかったー。」

ぶっきらぼうに一言返したアスリは、誰の注目も集まらない裸体をただ洞窟の空気にだけ晒しながら、ユニスがティサに向かって蹴って転がったままになっていた器を拾い上げ、洞窟の奥の釜から薬液をひとすくいした。続いて、こちらもラリーヤがティサの口の一切れを放り込んで、そのままになっていた果物の残りに、真横の地

面に直に置かれていた手持ち刃を突き立てると、ラリーヤの言いつけ通り、草の山のすぐ近くに置きやっていった。
草の上では、相変わらず上に乗るユニスをティサが独占し、ユニスの後頭部で結ばれた髪は左右して、その両方の肩甲骨ではティサのかわいらしい手が揺れている。ユニスはティサのものであるのだから、こうするのは当然であるが、羨ましいアスリは身の置き場がない。2人を邪魔しないように注意しながら、中身が見えぬよう足をぴったりと閉じて、草の山の隅に座ったアスリは、忙しくもぞもぞと動くユニスの背部を、ただじっと見つめるしかなかった。

「お待たせー！」

そうこうしているうちに、女の変態が乳房を弾かせながら、息を切らして洞窟へと戻ってきた。この声に顔を向けたのはアスリだけで、抱きしめあう2人は目前の世界に没頭している。
そもそも今、ラリーヤは何をしにいったのか定かではないが、手には濡らしたようである布切れと、乾いた布切れがそれぞれ複数ある。ティサの泉にはユニスでも入らないと語ったラリーヤは、これから何をしようとしているのか、アスリは想像するだけの余力もないし、没頭する2人の真横で気まずいばかりである。

「よしよし、ユニス、そのまんまちゅっちゅしながらでいいから、もっと上にずれて！んで足広げる！もっと、ぐっと！」

その2人だけの集中に、ずけずけと侵入するラリーヤは、牛たちを追い立てる犬のように、ユニスをティサの上方へ向けてスライドさせる。ティサにまたがるように両ふとももを広げたことで、ティサの茶髪の上にはユニスの袋がせり出していく。

肛門だ。色素が濃く、ぴったりと閉じ切ったユニスの肛門から、

袋に向けてまっすぐ線が伸びている。ユニスのここには、１本の毛もない。凄まじい光景だ。アスリはユニスを記憶する。

「痛っ！！歯が！！」

「ユニス、もっと上行って、ティサの頭、両手で抱きしめてあげて！」

ティサが歯を痛がった。この姿勢では、もう口づけを続けられないのだ。それでもラリーヤはユニスを上に追い詰めて、アスリが覗き込むユニスのせりあがった袋と肛門も、奥へと進む。ユニスの折り曲げられた両膝は、ティサの胴の両脇まで登り、ユニスは草に顔を押し付けて、ティサの上半身全体をくるみこんでいる。

「そしたらティサ、足いっぱいに広げて！」

声をかけながら、ラリーヤも手を伸ばして、ユニスの尻の割れ目の真下に、まっすぐに伸びたティサの両足をたたんで、ティサを広げていった。ユニスの作り出す優しい暗闇だけを見上げているはずのティサの足は、嫌がりもせず、すんなりと簡単に開いていく。

「よしよーし。じゃあアスリ、おまんこくぱぁしよっか？」

ラリーヤの声が、アスリにかかった。置いてきぼりにされてはいけない。言うまでもなく、広げる先はアスリでなく、ティサに決まっている。念のためにラリーヤの意図を確認すべく、アスリが一度、絶景から視線を外してラリーヤに目を向けた、その瞬間だった。

鈍い光を、アスリの瞳が捉えた。ラリーヤの右手だ。

ラリーヤの右手に、真上に向けた手持ち刃が握られている。アス

リが、息を呑む。

「ラリーヤ……！」

思わずラリーヤを呼んだアスリに、ラリーヤは左手の人差し指を立てながら口元を押さえると、悪さよりも怪しさが際立つ笑みを浮かべた。たしかにここでアスリが騒いで、股を広げて無防備になっているティサが刃を一目でもすれば、ティサは確実に暴れだしてしまうはずだ。

とは言え、不穏なラリーヤをこのまま放置して良いかは、アスリも判断が迷うところである。手にしているものが刃であるのだから、ラリーヤが何かを切ろうとしていることは明白だが、では何を切ろうというのか。

果物か。それとも布か。または、と次の思考に至って、アスリの脳裏にまさかがよぎる。

「……ほら、アスリ。」

目を見開いて動きを止めたままのアスリを、ラリーヤが再度促した。言葉で刃を指摘できない以上、もうアスリもラリーヤの共犯になるしかないし、ティサの広げられた両足の間へ、腰をずらすしかない。

きっと、ラリーヤが割くものは、果物か、持ってきたばかりの布だ。刃を入れたそれを今どう使うのか、アスリには考えが全く及ばないが、そう信じるのがティサへの思いやりだ。

何もなければ、口づけしてしまいたいユニスの肛門の直下、開け放たれたティサの両太ももの奥、2手に分かれた茶髪にアスリが両

手を伸ばせば、アスリが触れたそばから、ティサは腰全体を一度びくりと震わせた。すでに半開きだった左右の堤の中には、ぬらめく桃色の実体が控えている。

「アスリ、ビラビラんとこつまんで、もっとくぱぁってしてもらえん？」

「えっ……？」

「あと、手はさ、こう、下からじゃなくて、上から回して？」

「ちょっと！？何してんの！？」

ここでユニスの背が遮る下側から、くぐもったティサの声がかかった。制止を求めつつも、ティサの両太ももはそのままで、アスリも手を股間に置いたままだ。濡れた方の布を左手に取ったラリーヤが、適当にティサに返す。

「何って、ユニス入りやすくしてる。」

「俺ん？」

「え、何すんの！？」

「いいから！で、アスリ、手、左こっちで右こっち！」

「えっ、……これでいいん？」

何か言いかけたユニスと、自身の性器が気がかりであろうティサの言葉をラリーヤは流して、アスリにさらに指示を加えた。ティサの広がった足の扇状地、アスリの右側で行われた刃と濡れた布のジェスチャーにアスリも応じて、左手を上から回してティサの左側の、小さくたたんだ右手で右側の、それぞれ褐色の堤をつまんで、外へと引っ張るように広げていく。

ティサの羽はアスリの思ったよりもよく伸び、広げた時の長さは指の関節2つ分ほどだ。羽には固まってしまった白っぽいティサの

湧出物が、乾いた皮膚の欠片のようになって、ところどころ付着している。ユニスが入れなかった小さな泉も全てが明らかで、泉のすぐそばの薄い膜のような桃色の小さなひだに空いた穴からは、引き続き白と透明の中間の湯が湧出する。

恥ずかしい。同じくアスリが広げられれば、羽は翼で羽ばたいてしまうだろうし、白と透明はどれほどか、推し量ることもできない。

「え、待って、そこ今触ってるん、アスリ？」
「そう、私。大丈夫？」
「待って待って！ウソ！？もしかして、さっきのお薬、そこに塗るん！？」

盲点だった。アスリは、ラリーヤの手にした刃ばかりを見すぎていた。ラリーヤはアスリに、わざわざ薬を器に入れて用意させたのだ。このごく小さな、小指すら入るか怪しいほどの桃色に薬を塗布したところで、ユニスは入りうるのか。

「大丈夫。ちょっとティサ、おまんこすっごいから、次、私が拭くよ？」
「え！？だから…………！！！」

ところが、ラリーヤは相変わらず右手に刃、左手に濡れた布の布陣を崩していない。アスリの広げるティサの庭に、ラリーヤは濡れた布を伸ばして、発言通り上から下へと拭きあげる。

「んーっ！！！…………やあああぁ！！！」
「こらぁ、だからやぁやぁしちゃダメだって！ユニス！ティサのおでこ届く？」
「えっ？」

「おでこにちゅっちゅ！頭もなでなでしてあげて！」

ラリーヤの指示を、ユニスは無毛の肛門で受け取る。すぐに、上部から唾液を含んだ唇を動かす音が、一定間隔で響き出していく。

ティサが力を入れた太ももも、自然と脱力する。それを目にしたラリーヤも、包皮に覆われた堤の付け根から、桃色の庭全体、泉の真上を抜けて、肛門の直前までを、３度、４度と、濡れた布で拭う。

「…………うっ！…………んっ！」

布が上部の1点を通過する度に、ティサがうめく。波に流されたくないティサが、岸辺にしがみついている。一方、庭に残っていたティサの欲求の欠片は、ラリーヤが拭くごとに量を減らし、白の下にあった褐色と桃色が、ティサの主人公となっている。

「よしよーし！キレイキレイできたから、いくよティサー？」

左手でティサを拭っていた布を、ラリーヤが横に置きやって、ティサに呼びかけた。ラリーヤは薬液の器に、一切目を向けておらず、アスリが広げる庭内をじっと見つめているだけだ。

「やあぁ！！真ん中、その……そこは絶対塗っちゃダメ！！」

見えないティサは、薬液が塗布されることを直感しているし、アスリもそこに賭けている。ユニスは愚直に、ティサの額に口づけし、撫でている。ラリーヤだけを、アスリは見通せない。

にこやかと冷静の間にあるラリーヤが、左手の小指を突き立てて、薬液の入った器へと手を伸ばした。薬液がティサの泉から湧いた湯のごとく糸を引き、泉に戻るかのようにラリーヤの小指も出所に向

かう。

「…………んっくっ！！！何！？！？」

ラリーヤの小指の爪が、ごくわずかにティサに侵入した。瞬時、アスリも安堵する。今のラリーヤの目的は、薬液による潤滑なのだ。

悪い笑顔が、ラリーヤからアスリに届いた。その笑顔の口元には、先ほどの人差し指に代わって、洞窟の天井に先を向けた刃が当てがわれている。

言葉を、口にしてはいけない。わずかにアスリが抱いていた安堵が、破壊されていく。刃が、泉に入りかけるラリーヤの左手の小指に向かう。

ラリーヤの小指の爪を受け入れたティサの泉の入り口で、爪に沿うようにして、刃が添えられた。ティサの羽を伸ばすアスリの指が、緊張で硬直する。

罰を受けたラダンの、針の刑どころではない。本気でラリーヤは、ティサの泉の入り口を、割いて広げようとしている。

アスリの心臓が、頭の中に移動してしまったかのように、激しく鼓動する。波が、あまりにもアスリに近い。

苦しい。意識を失ってはいけない。今日は、最後まで全てを見届けるのだ。

今や、ラリーヤの表情からも笑みは消え、残っているのは真剣さだけだ。アスリが左右に持つ堤の内側で、泉に入りかけのラリーヤの爪が、ほんの少しだけティサの肛門側に落ちる。爪の真横で、入

り口が縦方向に狭く暗い余白を取る。

「んっ……！ちょっと痛い。ねぇ、ホント何してるん？」

「ティサ、あとちょっとで終わるから。ちょい動かんでね。」

ユニスが抱え込んでいる下から、ティサがまた問う。それに答えるラリーヤの声は優しさが偽っているが、手元の実情は予断を許さない。

いよいよ斜めの形を取った刃の先端が、ラリーヤの爪の真横に位置した。小指と刃の先を凝視するラリーヤも小さく息を吸って吐き出す。備えるアスリも、呼吸する。

掛け声もなく、刃がティサを圧迫した。ラリーヤの爪が、押さえるティサの膜の下側、肛門へと向かうところに、刃が正中する。

「いっ……！？！？」

ティサが、何かを感じている。しかし容赦なく、ラリーヤは刃を真後ろに引いていく。

「んきいいいいいいいいああああああああああああああああああ！！！！！！！」

直後に、割れ目の内側に新たにできあがった小さな縦の裂け目から、真っ赤な血がティサの肛門へと向けて滴っていった。

痛みが、ティサに届いた。絶叫する声の大きさは、ティサの痛みの大きさだ。

何ということだろう。ラリーヤが刃で、ティサのあの泉の淵を、切り開いてしまった。この結末は、刃がラリーヤの爪の真横に到達した時点で、アスリも十分に見通しがついていた。
しかし今、アスリの両手も、ラリーヤが残した左手をも、一気に両太ももで挟みこんでしまおうとしているティサが、股の間から流しているのは、紛れもなく自身の血であり、ユニスの真下から上げているのは絶叫だ。ティサが、性器を傷めつけられたのだ。

自慰がしたい。アスリは、性器を切られて痛がるティサを見つめながら、自慰がしたい。自分で自分の考えが、アスリは理解できない。なぜ今、アスリはそう感じているのか。

とてつもなく、興奮しているからだ。ティサは、アスリにとっての同性の友人であり、本人に向かって口にはできないが、同時に性も向けられる。
思えばアスリは、3日前にユニスが皮膚を伸ばされて、この刃を当てられ脅されている時も、恐怖の中に興奮を得ていた。ユニスは愛で、また性だ。
その前は、針を向けられた、ラダンだ。ラダンで行ってきた積り積もった自慰が、母が傷めつけようとした性器を、性の対象として倒錯させてしまったのだ。

これまでは全て、未遂だった。ところが今日は、ティサが本当に切られてしまった。

最高だ。最高で、究極で、未だ得たことがないほどの糧だ。波が来ていないのに、すでにアスリは波の先に連れていかれてしまっている。短い時間が、アスリの中でじっくりと進んでいく。

「いだああいいいい!!!!!!いだぁいよぉおおお!!!!!!」

「んおい！！！ラリーヤ！！！アスリ！！！………おい！？マジかよ！？！？」

　異常なティサの様子に、覆いかぶさっていたユニスも身を起こし、真後ろに振り返って、ラリーヤの右手の血が付着した刃を目にし、絶句した。ティサの両太ももに両手を挟まれ、今も奥の堤に指が触れたままのアスリの指先も、泉の湯とは異なる流出を捉えている。アスリは何も喋れないし、動けない。

　1人、冷静なのは、この施術を行ったラリーヤだけだ。同じく挟まれたままだった左手をラリーヤはティサの太ももから引き抜くと、乾いた布を1枚取って、血まみれの指先を拭い、刃も拭いながら続けた。

「ティサごめんね、ちょっと痛かったねー？ユニス、ティサ頑張ったんだから、よしよししてあげて？」
「いや、ラリーヤ。何切ったん？ティサのこと、切ったんか？」

　ティサの涙の上に、ユニスが声を低めて重ねた。いつになく、ユニスの声には怒りが滲んでおり、ラリーヤを見つめる眼差しは、狩りの時よりも厳しい。ユニスにとって、ティサは守護の対象だ。普段、仲の良いラリーヤであっても、ティサが傷つけられることを、ユニスは許さないのだ。

「大丈夫、ユニス。切ったんはホントに1番手前っかわの、普通はおちんぽ入れたら裂けちゃって、どっちしたって血出る、入り口のせまーいとこ。ビラビラとか、お豆や、うちっかわは切ってないし、あとはティサ、きもちよーくなれるんよ？」
「いや、そんなん………、ありえんぞ？ティサんこと、切ってんじゃん？」
「大丈夫。カインタん時も何やっても入らん子、結局切んなきゃい

けんくて、スパッとこうしたら入るようになったんだから。まぁ、切ったんは私も2回目だし、めっちゃ珍しいけど。」
「マジかよ………。」
ここまでで、信じられないといった様子を見せつつも、ユニスは何とか納得したようで、涙のティサへと視線を落とす。アスリもラリーヤがティサに害意を向けることなどないことはわかっているが、やはり信じられないし、自慰がしたい。アスリは、クズだ。
またしても涙しているティサの泣き声が響く洞窟は、混沌に包まれてしまった。一通りを拭き終えて、半分になった果物を取り、果肉にティサに用いた凶器を突き立てたラリーヤが、改めてユニスに顔を向ける。
「ほら、今度はユニス、ちんちん入れるよ？」
カオスに、ラリーヤが求めた正常は、ユニスの狂気だ。カインタの経験が、森で育った狂気に、切り開かれたティサを突き刺すことを求めている。

横！」
「いいから！ユニスはまた、下おいで！私とアスリはさっきみたく
「やぁだ！！痛い！！無理！！マジで痛い！！」
もっかい広げて！」
「ティサ、こんなに頑張ったんに、かわいそうっしょ？ティサも足、
「マジか！！」

ラリーヤから移動を求められたアスリが、ティサの羽に触れたまま
まだった手を引き抜けば、指先は真っ赤に染まっている。血液その
ものだけを目にすれば、ティサを殺してしまったかのように恐ろし
いが、この出所はあの泉の真下であって、おそらく湯も混ざりあっ
ているだろう。

そこにラリーヤから、はらりと乾いた布が投げかけられると、ア
スリも布で手をぬぐって、閉じた足の中身が見えないよう注意しな
がら腰をずらし、再びティサの右隣の位置を取っていく。切った勢
いで突破を試みるラリーヤも、薬液が入った器の隣の地面に、刃の
刺さった果物の残りを置きやると、代わりに器の方を手にして、当
初のティサの左隣へとしゃがみこんだ。ひとまず、これ以上の切開
はないようだ。

一度振り返って、ラリーヤの手元を確認し、少し落ち着いたので
あろうユニスもティサの腹上から降りて、両膝を立てて中央を強く
押さえているティサを、膝立ちで真正面から見下ろした。切られた
ティサに誠実な思考を見せたせいか、槍の角度は落ち、先端の皮は
ティサの押さえるところを見つめている。

「ティサ、ごめんね？お願い、ちょっと足開いて？」

「やぁだ！　もう無理！　！」
涙の途絶えないティサの左膝に、ラリーヤが左手をかけたが、ティサは閉じたままの足を開こうとしない。加害者のラリーヤは、もう一段、声を落ち着かせて続ける。
「もう切んないから、血拭くだけ。外から見たら全然だから、ティサもちょっと見てみてよ？」
この言葉には、痛みに続いて患部の容態を気にかけているはずのティサも反応し、右手を股間から顔へと送って、まずは涙や汗をひと拭いした。アスリとしても、ティサの泉がどのようになってしまったのかは、気になるところだ。ラリーヤが触れていない方のティサの膝に、アスリが自然と手を伸ばしていけば、ティサも上体を起こして、涙を拭いた手で草の山をつき、覗き込むように頭を屈めていった。
「ほら、見て？」
ここでラリーヤもタイミングよく、ティサの足を優しく開き、アスリも同じくラリーヤに合わせていく。今日、ティサの左右でこの動きをするのは、何度目だろうか。
広げられた両脚の付け根の茶髪を、ティサが残った左手で上側に引くようにすると、左右の堤は血濡れで、尻の肉までが赤だ。まるで戦化粧を性器に施したかのようだが、血液の出どころ自体は、こうしてアスリが見る限り把握できない。
「…………うわ、アレん時みたいじゃん。」
「アスリ、拭いてあげて？」
「うん、ティサ、ちょっと触るよ？」

「……うっ！！」
「ごめん！痛い？」
「…………私拭くから、いい？」

ラリーヤから渡され、アスリが指先を拭った布は、血の源泉の前でティサへと渡った。しかめた顔で股間を見つめるティサの左の指先が、布越しに押さえるのは、泉の入り口の尻寄りの周囲である。痛む個所にあてがわれた白地の布は、ティサの血の染物に姿を変えていく。

「ちょっとティサ、そこ見せてもらえん？」
「……まだ血出てんよ？」
「ティサも気になるっしょ？」

真隣で布に注目するラリーヤの診察提案は、痛みに耐えるティサにとっても有益だ。ラリーヤの依頼通り、ティサはその布をおそるおそる上方へとずらしていった。

布が離れてすぐ、アスリが目にしたものは、ティサの桃色の庭内、泉の入り口の肛門付近から、じんわりとにじみだす、真っ赤な血だった。ラリーヤが切ったのは、まさに先ほどラリーヤが刃を当てたところである。

傷は、ユニスが太ももで矢を受けてしまった時のものとは比べ物にならないほど小さく、ティサが中央に有する核の幅程度で、ごくわずかに縦に裂け目ができただけだ。切開の成否は、今のアスリには判断がつかないが、少なくともラリーヤが刃越しに触れたところ以外に切り傷はなく、ティサをロマドウの巫女たちの元に緊急搬送する必要はないだろう。ただ、切った場所は、身の毛がよだち、アスリがおかしくなってしまいそうな粘膜に他ならない。

「ちょっと見るよ？」
「あっ、ちょっ……！！痛ぃ！！」

左手に薬液の器を手にしたまま、ラリーヤはティサの膝の上にあった右手を、ティサの会陰に伸ばして押し込むと、泉は縦へとほんの少し開いた。小さく痛がったティサの泉からは、次の赤がラリーヤの触れる個所へと向けて、流れ出していく。

「おー！！よーしよし！！」
「うわ、何！？ラリーヤこんなとこ切ったん！？信じられん！！」
「何言ってんの！？大成功！！」
「はぁ！？めっちゃ痛いんけど！？」
「別に、この前まで血出でたとこだし、いいじゃん？アレんときより痛くないっしょ？」
「いや、切ったんだから痛いに決まってんしょ！？あっ、痛ぁ……
……。」

またティサの患部に、ティサの手にする布の一端をラリーヤが押し当て、アスリに見えるのは広がりゆく血液だけとなった。ティサは相変わらず痛がっているままだが、ラリーヤ曰くこれで大成功だそうである。玉のような汗を浮かべ、渋い顔のティサにとってはそう思えないであろうものの、現状は涙が引きつつあるから、ティサの号泣は小さな傷そのものによるものよりも、性器を切開されてしまったということによる、混乱とパニックによるところが大きかったのかもしれない。

「よーし。じゃあ次ユニスだよ？」
「おっ！？」

またアスリに、よぎった。ティサが切ったのなら、次はユニスだ。

アスリが、思い浮かべたことを口にする。

「えっ!?ユニスのおちんちんの皮も切んの!?」
「はっ!?おい!?!?ヤメロ!!!」
「何嫌がってんの!?私、切ったんだよ!?」
「マジで絶対無理!!!ホントにヤメロ!!!」
「意気地なし!!!」
「んふふふ………。」

突如、刃が次に向けられるとアスリに予言されると、ユニスは大分縮んでしまった槍と袋を、両手で一気に覆い隠した。厳しい体験を得たばかりのティサも追い打ちをかけ、ラリーヤもユニスを脅迫するように怪しく微笑んでいる。

「なぁに?ユニスもちんちんの皮切って、大人になりたいん?ほら、お手てどかして?」
「バカ!!ラリーヤ!!やだよ!!」
「そんなに子どもちんちんがいいのー?はずかしーねー?」
「うっさい!!別に子どもじゃねーし!!」
「子どもだよー?でもさー、今日はユニス、まだ頑張らんと?」
「はぁ?」

怪しさから悪さへ、ラリーヤが速度を切り替えた。薬液の器を手にしたままのラリーヤも、膝立ちとなって、ユニスの右耳に顎を近づける。
ついアスリは、ラリーヤ全体を見てしまったが、あの割れ目はいやらしいまま健在だ。乳の変態が、皮槍を隠す変態の耳元で、軽く息を吸い込む。

「……うわぁ、すっごいティサの香りする。」

「ちょっ！！ラリーヤ！！」

出血地の真上から、恥ずかしい声が上がった。ラリーヤは構わず、ユニスに声をかける。

「……これから、なかよしじゃん？ちんちん、おっきおっきしとこ？お手てはうしろ？」

弱い。伏し目だ。ユニスはラリーヤの前に完敗だ。アスリが瞬き1回を挟むうちに、だらりとユニスの両手は脱力し、随分と小さくなって皮ばかりが主張する1本と、草の上に落ちてしまいそうな袋が明らかになった。それでもなお、槍自体は皮の鞘の中でふっくらとしているようであるのだから、まだまだユニスは充血気味なのかもしれない。

「んふふふ……。かわいいこどもの皮ちんちん。赤ちゃんだから、よしよししよーね？ぴゅっぴゅは、我慢だよ？」

耳にしているだけで、アスリまでが恥ずかしい。ユニスに至っては、両目を閉じてしまった。しかし、それでも手で隠せないほどに、ラリーヤにユニスは何かを期待してしまっている。この先、まもなくラリーヤからもたらされるのが刃でなく、何らかの甘露であることは明白だ。

それとも、その希望を欺いて、急な血しぶきなのだろうか。いずれにしてもアスリの心臓は高鳴るし、布を血で濡らすティサの視線も、ユニスの伸びた皮膚へと集中している。

軽やかに踊るようにしなやかに、ラリーヤが右手の人差し指でユニスの右肩から手首までをそっと撫でると、しっかりと両目をつぶって真下に顔を向けるユニスが、全身を大きく身震いさせた。たっ

たこれだけで、槍も真上に一度びくりと跳ねる。
ラリーヤが、口角を上げて、アスリに視線を送る。何をするのだろうか。見通しはつかないが、アスリもラリーヤとユニスと同じく、草の上に膝立ちになる。アスリからラリーヤの割れ目は見えてしまっているが、アスリの側にはちょうどティサの立てた右膝が盾になる。
左手の器に、ラリーヤがユニスを撫でた右手を浸した。器から離れる右手は、大きく透明な糸を引く。
「……っ！！！！」
薬液にまみれたラリーヤの右手が、ユニスの槍を取った。その手がゆっくり、槍を皮ごしに上下する。
「んぁ！！おい！！それ、そこに塗っちゃ！！」
「さっきも大丈夫だって言ったじゃん！ほら、よしよしするよー？」
瞬時、ユニスがラリーヤに向き直って目を大きく見開いたが、止まらないラリーヤの手の動きに、ユニスもそれ以上、抗えなかった。弱きユニスは、また目を閉じて拳を作り、両肩を震わせる。
「ラリーヤ！！！」
「だから大丈夫！ほら、アスリもユニスのちんちん、くちゅくちゅしよ？ユニスもお目め開けて、ティサのお顔見て？」
ティサがラリーヤを呼べば、ラリーヤはアスリとユニスに指示を加える。固く唇を閉じたユニスが、目を半開きにする。アスリもラリーヤがユニスを握る手の方向に合わせて、そっとユニスに寄り添うように、左手を槍へと伸ばしていく。

熱い。硬い肉だ。
ラリーヤを見上げたアスリに、ニヤリと笑みが飛ばされた。アスリの左手は、指と指を絡めあうあの形でラリーヤの右手とつながって、２人の手中でユニスが、ただ１人、男子であることを伝達する。
「あぁんぐ……！！やばい……っ！！あぁ……！！ぎもぢいっ……！！！！！」
ユニスが眉を歪ませた。また波が、ユニスに接近している。
「ティサ、布どかして？」
「え？」
「大丈夫！じゃ、ユニス、はい腰落として。」
器を地面にふわりと放り出したラリーヤが、強引にティサから血の布を没収して、こちらも放り投げた。その血の泉にラリーヤが先導し、アスリも誘導し、ユニスが進んでいく。
「待って待って待って！まだ血が！」
ティサが待ったをかける。しかし、すでにティサの入り口には、ユニスがいる。
「よし、大人ね？」
ラリーヤがアスリに声をかけ、アスリも目で頷いた。槍のだぶついた皮は全て剥き上げられて、真っ赤な一球が、真っ赤に染まったティサの血と癒合する。

「……ティサ？痛い？大丈夫？」

震えるように、ユニスがティサに声をかけた。今、ユニスの心中の何かが、ユニスの声を震わせてしまっても、ティサに向けたのは優しさだ。

「痛いけど……。」

ユニスの伏し目を、ティサが浮かべた。言い淀んだティサにも、痛みのほかに、心中に何かが控えている。

「もっかい頑張ってみる……？」

優しさに、ティサも優しさで応えた。ティサが、ユニスを見定める。ユニスも、もう一度覚悟を決める。

頷いた。猟師の目が、２人の赤に向いた。

ラリーヤもアスリも、介助をやめる。ここからは、ユニスとティサの、初めてだ。

「ユニス……、大好き。」

ティサが、両手を大きくユニスに広げた。その声に、アスリの脳は砕かれる。

思わずアスリが目にしたティサの表情に浮かぶのは、痛みではなく、愛だ。公然である事実を、ついにティサも自認した。

次の瞬間、赤い一球が、ティサの血の泉へと沈み込んだ。同時にユニスは、愛を告げたティサへと覆いかぶさって、熱い口づけを初めていった。

とうとうユニスとティサが、仲良しになった。泉に沈み込むまっすぐな槍は、先端の赤をティサへと伝えて、後ろに赤を流出させる。泉が、ユニスの中ほどまでを、まさに食している。ユニスもティサも、止まっている。血液と粘液だけが、泉からあふれ出す。

音が、上から小さく続く。耳に任せたアスリが目を向けた先では、幼馴染としての優位を活かすティサが、ユニスに重ねる唇の奥で、舌同士の握手をしているようである。こちらはよくわからないし、アスリも見えない。ただ、ティサが抱きかかえるユニスの背の中で、2人は世界を創っている。

「………………んうぅーっ！！！」

アスリが直接目視できない角度の、上体をとるユニスの唇から、我慢の呻きがこぼれた。均整のとれたユニスの尻と無毛の会陰が、上空に逃げようとする。外に脱出を試みる槍の中部は、ティサの血愛で染め上げられている。

それを逃がすまいと、ティサが両足を持ち上げて、組んだ両足でもユニスを抱え込めば、再び赤く染まった槍が、尻とともに沈み込んでいった。羞恥と痛みを乗り越えたティサが、2人だけで触れ合うユニスを通じて、自己の本能に対面している。

「あぁああ………！！！ティサッ！！！」
「ユニスッ！！大好きっ！！」

唇は離れたようだが、ティサの名前と、ユニスの名前が続いて、

またティサの心情が連なった。ユニスが後ろで結ぶ髪が揺れ、背では肩甲骨が浮き上がる。尻の上で組まれたティサの両足は、痛むはずの泉に、さらにユニスを迎え入れるように結ばれる。

「大好き！！大好き！！大好き！！大好き！！大好き！！」

「ティサッ！！ティサッ！！！」

「ユニス大好き！！」

「あっ！！！ティサッ！！！やばい！！！」

「ユニス大好き！！」

引き締まったユニスの尻が、一段と引き締まった。唇と、唇が音を醸し出す。ほとんど動いていないユニスの袋も、肛門に向かってせり上がる。

アスリが直感する。来る。ユニスに、波が来る。

「あっ！！！！！ユニス！！！！！ダメ！！！！！中はダメ！！！！！中はダメ！！！！！こらっ！！！ティサッ！！！足！！！！！！」

ラリーヤも直感した。つい3日前、ラリーヤがアスリたちに授けた知識に基づけば、今日ユニスが手をつないでアスリとティサとラリーヤの裸体の前で漏出し、その後ティサの口内にも送り込んだあの凶器の白乳は、ティサに子どもを孕ませるための聖液だ。

槍の中ほどまでしかユニスはティサに侵入していないとは言え、このままユニスがティサに食されたまま波を迎えれば、ティサは母となり、ユニスは父だ。傍から見れば明らかであったにも関わらず、ここまでどんな時もユニスに対して抱いている感情を直接表現しなかったティサが、今その思いを連呼している以上、アスリがその新しい関係性に介入する余地はない。しかし、性の達人のラリーヤは、

ユニスの尻を離すまいとしがみつくティサの両足に手をかけ、排除を試みる。

「あぁああああ！！！！！」

「ユニス！！！！大好き！！！！！」

「あああああああティサァアアアッ！！！！！」

波だ。ユニスが、ティサの海に流された。流れていったユニスの、湯気が昇りそうなほどに一気に汗ばんでいく背は、岸となったティサの両腕によって、強く抱きかかえられ、ティサの海でユニスは洗われている。ビクリ、ビクリと、小刻みに震えるユニスの全身とは独立して、唇と唇は幸せの音を鳴らして、ティサの足もユニスを真正面から受け入れる。

ユニスがきっと今、奥歯を噛み殺しているであろうことは、アスリもわかる。翻って、性器と性器、全身と全身で、1つにつながっているティサが、性感に頼らない、純なユニスを実感していることもわかる。

2人が呼吸し、鼓動すらアスリの耳に届きかけている。2人の女性の、別の腹から生まれてきた2人が、肉体として1つとなる。

あのラリーヤですら、成すすべはなかった。ティサの足から諦めるように手を下ろし脱力したラリーヤの表情には、ティサがユニスの子を宿そうとしたことはさておき、こうして初めて仲を深めた2人に対しての祝福なのか、安堵があった。一方、森での愛を肉体で実現した2人を見下ろすその瞳には、アスリが図り知ることのできない、変態らしからぬ寂しさで満ちていた。

「……………………ティサ？いい？」

まもなく、誰にも邪魔のできない時間を終えるよう提案したのは、

まさかのユニスであった。息の上がったユニスの言葉に、ティサの両足が緩んですぐ、ユニスが腰を真後ろに引いて、草の上で膝立ちとなれば、アスリがラリーヤと大人にしたユニスは子どもで、ちょうど皮にくるまれた段差までが、ティサの血とともにあった。ユニスの皮膚のここまでが、ティサに入ったのだろう。

血塗れの子どもからアスリが目線を移すと、ユニスの顔に浮かぶのもまた伏し目ではなく、じっと見つめるティサへの、何らかの思考だ。今の凛々しいユニスの思考そのものも、アスリは全く見透かすことはできない。ただ、ユニスはティサと初めてを終えて、今は肩で息をしながら思いを巡らせている。ラリーヤさえも沈黙し、外の滝の音と、ユニスとティサの吐息だけが洞窟に小さく広がる中、アスリはユニスが見つめる先、ティサに目を向けていく。

両膝を草の上に立てて、広げたままの両足の奥、ティサの両太もも間の草の扇状地には、まず切開の血が広がっている。ティサにとって、ユニスと達成するまでの道のりは、あまりにも険しかった。アスリの目がその沢を登っていけば、左右の茶髪と堤に挟まれて、まだなおユニスを受け入れようと開いたままの桃色の源泉からは、荒々しいティサの呼吸に合わせて、白濁したユニスの狂気が、とくり、とくりと漏出していた。

ティサの赤と、ユニスの白が、2つ混ざりあって、新しい1つの命となろうとしている。消えかけた森の暮らしが、遠く離れた洞窟で、次の時代を紡ぎだそうと挑戦している。洞窟の中に立つ、芽吹いた若木の愛のめしべに、共に育ったもう1本の若木が、未来を描いている。

「…………いやぁああ!!ねぇ!!みんな……、そんな、じーっと見ないでよ?」

この生命的な光景は、ティサが両足を閉じてしまって、あえなく終わった。アスリはラリーヤがどうか見ていないが、ユニスはティサを見つめて思案に暮れているし、アスリも見つめていたのだから、ラリーヤもティサを凝視していたのだろう。３人とも、ティサに注目しすぎたようだ。

両手で顔を隠し、草の上で顔を横に倒すティサは、全体的に赤らんでいる。しかし、手で隠し切れないところからこぼれるティサの頬の形は、微笑みとともに、ユニスと１つになった幸せに満ちているようである。羞恥の上に流血したティサの初めては、成功したと評価して良いだろう。

「…………はぁーっ……。マジでもう！！！　ユニスもティサも！！！」

ここでようやく、最強の変態がため息を言葉の形にして漏らし、ユニスとティサを叱責した。ユニスの真横で膝立ちとなり、両手を腰に当てて、大きな胸も乳輪も、剃り上げた割れ目まで惜し気もなくさらす美しい変態は、今の耳に入るほどのため息で、もういつもの調子に戻っているようである。

「ティサ！！！　あとユニス！！！　どうするん！？！？　こんなんじゃ、赤ちゃんできちゃうかもっしょ！？　この前教えたばっかかじゃん！？」

ラリーヤの指摘にティサも寝ころばせたままだった上体を起こし、草の上に両肘をついてラリーヤを見定めた。その通りだ。現にラリーヤはイケメンと昨日仲を深めたが、ラリーヤは直前でイケメンの波を見極め、体内への注入を許していなかった。いくらティサもユニスも大して動いていなかったとは言え、本来ユニスかないしティサも、危険を察知した時点で引き抜くしかなかったのだ。

「………なんか、ごめん。」

弱く、ティサが謝罪した。ティサの赤に、白を混ぜ込んだ張本人も、ユニスなりに謝罪する。

「………あんなん、………やばかった!!!無理だ、我慢すんの………。ティサ、すげぇよ。」

「ユニス……!?」

正直なユニスが、ティサを鼓舞してしまった。遺品の腰飾りが、きらりと置きたいまつの灯りを反射して、アスリたち3人にティサの本心を届けていく。

「………でも、でもさ!!良くない!?私、そん時も言ったけど、私……、ユニスの赤ちゃん、欲しい!!!」

やはり、ティサは大胆に成長した。あれほど恥ずかしがりだったティサが、ユニスに抱く本当の思いを連呼し、痛む性器までユニスに捧げて、この発言だ。
対して、ここで黙るユニスは言葉を学ぶべきだ。今、凛々しいユニスを、ティサの立場であればアスリは見たいし、自身に基づけば見たくはない。達人のラリーヤだけは、口調の温度感を一段引き上げていく。

「アホか！？！？ティサがユニス大好きなんはわかったけど、私らどうなってんか、わかってんの！？！？」
「はぁ！？！？別にいいじゃん……！！！ラリーヤ教えてくれたんだし！私、ホントにユニスの赤ちゃん作りたい！！！ラリーヤさっき、私のおま……んのとこ、切ったんしょ！？今もマジで信じられんくらい痛いよ！！！でも、でも…………、でも！！！ユニスんなら大丈夫な気がする、かも…………。」

たとえ全裸であっても、ラリーヤがどれほど真剣であるかは、アスリも理解できる。そこに、こちらも理解できるティサが、愛をまっすぐぶつけていく。アスリも裸のままではありつつ、軍配を上げたいのは愛のティサだ。実直なティサの愛を前にすれば、ラリーヤの理論は補強不足だと言わざるを得ない。

「…………ティサ、いいけどさ。」

性でなく、理性でティサと対話するラリーヤが、草の山から静かに降りた。そのままラリーヤは、先ほどユニスの槍に塗りつける際

に適当に放り投げた器を、丁寧に拾っていった。器も、ユニスに蹴られ、ラリーヤに投げられ、散々だ。

「私ら、今、アスリのロマドウにお世話になってんだよ？族長さんたちに。今、赤ちゃんできたら、どうなん？」

「……どゆこと？」

ラリーヤが視線を、手元の器に落とした。美しく完璧な女に、哀愁がまとう。

「…………………カインタって、ロマドウみたいじゃなかったじゃん。わかるっしょ？ティサも、ユニスも？」

「………正直、……わかる。ロマドウはすげぇよ。マジで。カインタとは、全然、マジで全部違うわ。」

「私も、森にいた時とは全然違う……。今もまだビックリすることあるし。でも、私は、カインタはママに行くなって言われてたから……、カインタんこと、よく知らないんよね。」

アスリは、カインタを知らないし、ティサもカインタを知らないようだ。ラリーヤと、ユニスの知るカインタは、ロマドウと違うらしいが、文脈に基づけば、ロマドウが全般的に優れているということだろう。それ以上はまだ、アスリもラリーヤの真意がどこにあるのか、見定められない。

「………そっか、ユニスは昔来てたからわかるけど、ティサはあんま知らんか。………………じゃあいいや！！」

「いや、ちょっと待ってよ！？どゆこと！？」

不意に流そうとしたラリーヤに、ティサに代わって、アスリもここぞとばかりに食いついた。髪をかき上げ、左手を柔らかそうな自

らの腹に置きやったラリーヤが、一息置いて続ける。
「………その、カインタは、森ん中だからさ、……いっぱい増えても、食えんの。」
「………えっ？」
「でも、ロマドウは周り砂しかないんに、すごいよ。水もあるし。森のおかげって聞いて育って、そう思ってたんに、ロマドウ来たら、全然しょぼかったなって思った。」
ラリーヤがまた、視線を落とす。ラリーヤの胸中を追うアスリは、その深い視線に突き放され、次の言葉が続かない。
「でも、頭から抜けんし。カインタ……、ってか、お兄ちゃんのこと……。」
涙は、なかった。ラリーヤは、ここにいる。
「………ごめん、せっかくティサとユニスの初めてのあとなのに、変な風になっちゃったね………！！でも！！とにかく！！赤ちゃん作ったら、その子がおっきくなるまで、大変なんは、みんなわかるっしょ？………なんだかんだ、1回ぴゅっぴゅくらいだと、なかなかできんから、さっきのユニスのぴゅっぴゅでティサにできちゃうか、わからんってか、多分できんと思うけどさ。」
アスリも、ティサも、ユニスも、黙して頷いた。カインタでは、むやみに子を成すことが許されなかったのだろうか。
軽く息を吸ったアスリが、疑問を声にしようとする。しかし、性の達人はその間を許さない。まばたきをし終えたアスリの前に、もはやカインタのラリーヤはおらず、代わりに著しく悪い笑みを浮かべた、どうしようもない変態がアスリでなく、ティサを見つめてい

た。

「まぁ、この話は、これで終わり！！それよりさ！！ティサ、初めて気持ちよかった？」

「ごめん…………、でも、めっちゃ痛かった。なんか変なとこ、切られたし。ビラビラんとこ、切ったん？」

謝罪はあったが、その後はためらいもなく、率直な感想をティサが吐いた。刃に痛みがないわけがなく、ティサもラリーヤに切られた事実は忘れない。

「違う違う、入り口の丈夫だったとこ、ほんのちょっと！でも、じゃあティサは、もうユニスとはなかよし、やらん？」

「…………またやる。」

弁解から流れるラリーヤの次の質問に、今度はティサもためらいつつ、肯定した。どうしても普段は素直に伝えられない愛をユニスに告げたのだから、何もないサバンナで大声でこっそり愛を叫ぶよりも、実のところ精神は穏やかになるのだろう。

「よしっ！！じゃあ、ユニス！！もっかいちんちん！！」

「おっ……！？」

「いや、待って待って待って！！今からすんの？今日はマジで、もう痛いから無理だよ！？」

「痛くて今日できないんに、またやりたいん？」

「うっさい！！！なんでもいいじゃん！！！痛くなくなったら………、その……、ユニス。また、してあげても、……いいよ？」

アスリが見ているだけで共感する羞恥のまなざしが、ティサからユニスへと飛ばされた。やはりティサが今日得たのは、痛み以上の

幸福だったのだ。

「……いいよ。またやろう、ティサ。」

応じるユニスも、ティサと羞恥を分かち合う。この様子では、ティサが本当に子を成しても、おかしくはない。アスリはティサが、羨ましい。十分すぎるほどにいやらしいラリーヤも、さらにいやらしさを深めて、まだ進む。

「じゃあティサ、今日はもう、いいんね？」
「……痛いから。もう今日は無理。」
「そしたら次、私の番でもいいかな？」
「はぁ！？！？！？いっっっっ……！！」

貪欲にユニスをうかがうラリーヤに、がばりとティサが体を全て起こそうとして動き、股に手をやって痛がる素振りを見せた。痛みよりも、物言いが先なのだろう。ティサが問う。

「何！？！？私とユニス終わったら、もうラリーヤ、ユニスのこと食べちゃうん！？」
「なぁに、ティサ？だってティサこの前、ユニスと初めて終わったら、あとはユニスのこと、何でもして良いって言ってたじゃん？」
「いや、そうかもだけどさ………、終わってすぐって思わんじゃん？」
「大好きなユニス、取られたくなくなっちゃった？」
「うっさい！！！！」

もう十分すぎるほどにユニスに思いを伝えたにも関わらず、ティサが何もない方向の草に目をやった。ユニスの槍が抜けてしまうと、ティサの勇気も抜けてしまうのかもしれない。ユニスもティサから

抜けてしまって、ただの伏し目である。ラリーヤが、つないでいく。

「……んふふふふ。ティサ、かわいいね？」

「バカ！！！ほんっと、信じられん！！！！！そんなにすぐヤりたいんなら、ヤればいいじゃん！！！ユニス、次はラリーヤだってよ！！！」

アスリに対しては、何も間に挟まれない。ただただ、場の流れに、アスリは身を置くだけだ。ユニスが次々に、ティサとラリーヤに上書きされていく。

「よーし！！ユニス！！ティサが良いってよ！！ちんちんだ！！ちんちん！！」

ユニスへと向き直って歓声を上げたラリーヤが、両手を大きく一度叩き、乳房が弾けるような音がした直後であった。ゆっくりとユニスが頭を持ち上げて、じっくりとラリーヤを見つめていく。

「ラリーヤ……、あと、ティサ……、ごめん……。」

ティサと、ラリーヤが動かなくなった。洞窟も、静寂の向こうの滝と、燃える火だけが、４人の耳に音を届ける。ユニスが、ラリーヤからアスリへ、顔を傾けた。

「………俺、次、アスリとする、約束なんだ。」

静かに、力強く、ユニスがアスリを指名した。アスリがユニスと交わした、ティサに続く2番目の約束を、ユニスは忘れていなかった。

次はアスリの番だ。

アスリに緊張が走る。当初、ティサはユニスを泉に受け入れられず、ラリーヤに切られ、絶叫していた。ラリーヤが切っていたのは泉の入り口であったが、それ以外の堤も核も、ティサと比べるまでもなく、どう考えてもアスリの方が圧倒的に大きい。細かな部位は関連しない可能性が高いとは言えども、場合によってはラリーヤにアスリも切開されなければ、アスリはユニスと1つになれないだろうか。

しかし、今、アスリは深く杞憂すべきではない。念頭に置くべきことは、3日前にまさにこの洞窟でアスリがユニスに、ティサが初めてを終えた後、初めての2番目を頂戴することをせがみ、受諾したユニスもその要請に従って、正しく行動に移したことである。

この際アスリにとって、ラリーヤによる切開の痛みなど、どうということはない。この、外にはみ出る真実をアスリはユニスたちに晒し、死に至ってしまいかねないほどの羞恥を受けて、辱められ、ラリーヤの刃すら受け入れて、そうまでしなければユニスの思いに応えることはできないのだ。

「…………は？」

短い間の興奮を伴うアスリの無言を前に、低い声が洞窟に続いた。ティサがユニスへの愛を変換し、一音でアスリを威嚇したのだ。

直後に、声に乗った圧力が、ティサの瞳からアスリに届いた。急に脇で湧いた汗が、アスリの腰へと滑る。

「なん、それ……？約束……？私、そんなん、アスリがユニスとし

てるなんて、知らんかった。」

ユニスに本心を開示し、その愛を語りながら苦労したティサは、股間の茶髪の上に置きやった手の奥から、未だに草の山に向けて赤と白の混ぜ物を垂れ流している。怪訝な表情に変わったティサの疑問は当然で、どうしようもなく性にだらしないラリーヤが変態で押し切って、ようやくユニスとつながることを認めたばかりなのだ。

故に、ユニスの性器が使用できるかは、所持するユニス本人の意思によらず、ティサが司っているのである。それにも関わらず、ここでユニスが見せた発言は、ユニス自らが起点であって、さらに元を辿ればアスリとの約束という、ティサにとって寝耳に水でしかない代物であり、到底看過できる訳がないのだ。

「んふふふふ……。アスリ、やるじゃん？」

それぞれアスリへと突き刺さる、緊迫に向かうティサからの視線と、共犯となったユニスの気まずい視線に、怪しくいやらしい、まとわりつくような視線も加わった。この視線は眼だけでなく、大きな胸の上に乗った2つの輪も合わせて、4つの視線を1人で放つのだから、性的恐怖である。

「……ねぇ、アスリ。どゆことなん？」

再び厳しい問いが、ティサからアスリに飛んだ。これでは、3本の矢を同時に放つユニスの姿をティサに話し、ティサが2本までしか見たことがないと言って、詰問された時と同じ流れだ。随分と前にも思えるが、最近の記憶が濃厚すぎるだけで、ラリーヤの教育が始まるきっかけとなったユニスの裸につながっていく、あの記憶すらたった3日前のものだ。その3日前と比べて、今のティサの方が、初めてを終えて強くなったせいか、口調が尖っている。

アスリがユニスと約束を取り付けたのは、ラリーヤの教えの時間のあと、3人が洞窟から去って、1人で母に謝罪をしながらユニスの狂気の残り香で波を受けて流され、そこに自慰の対象である本人が戻ってきた時だ。その際、自慰の現場を見てしまったユニスは良いとしても、またアスリは、ティサとラリーヤの前で自慰の自供をせねばならないか。答えを選ぶ間に続くアスリの沈黙に、ティサの眉も徐々に険しく角度を傾けていく。

「…………ねぇ、ティサ。いいじゃん？　そんなん？　アスリだって、ティサと一緒なんだよ。」

救いの手だ。ティサに向き直ったラリーヤが、言葉でアスリに手を差し伸べた。

「はぁ？　何？　私と一緒って？」
「えー！？　わからんのー！？　だから、アスリだって、ティサと一緒でー！」

悪さが一切ない、無邪気で輝かしい笑顔が、ラリーヤからアスリに送られる。思考を続けるアスリの脳裏を、今日の昼食前にラリーヤと2人で過ごした、ひと時の会話がよぎる。

まずい。これは違う件の自供だ。正しくは自供ではない。ラリーヤが、アスリのあることを暴露しようとしている。

「ラリーヤ！！」

そこまで追いついたアスリが、ラリーヤを呼び、右手を前に突き出した。だが、すでにラリーヤの喉は、事実を音に変える直前であった。

「……ユニスのこと、好きなんだよー！！！」
「えええええぇええええええ！？！？！？！？」
「！…………。」
「あああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

終わった。思わずアスリは、両手で目元を隠したのと同時に、ティサの驚きを上書きするように大きく叫んだ。
今、ユニスからは、驚きの声は聞こえなかった。つまり、鈍感なユニスでさえ、あれほどアスリがいろいろしていたのだから、アスリの胸中はバレていたということだ。

恥ずかしい。アスリはあまりに恥ずかしい。なぜ恥ずかしいのか、アスリもよくわからない。アスリは現に、全裸なのであって、本来ならそちらの方が恥ずかしいはずだ。それだけでなく、全裸にも気づいたアスリは、余計に恥ずかしい。
正直に言えば、ティサにアスリがユニスに抱く思いを知られてしまったのは、恥ずかしいというより、申し訳ないという思いに近い。森で育まれた愛に、よそ者のアスリが立ち入るべきではないからだ。

では、ユニスに知られてしまったことについて、より正しく表現するのであれば、アスリの愛も公然となったことについてはどうか。これは、恥ずかしい。本当に恥ずかしい。よくティサはあんなことをしながら、ユニスに向かって思いを連呼できたものだ。考えただけで、アスリの頭はおかしくなりそうである。

「えっ！？！？えっ！？！？えっ！？！？ちょっ、待って待って待って！？！？アスリが、ユニスを！？！？！？」
「なん、ティサ？わからんかったん？ティサとおんなじで、バレバレだったっしょ？」

「はぁあああ！？！？んなん、どこで！？」
「えー、たとえばー……、あぁ、私がここで赤ちゃんの作り方教えた時、アスリもユニスの赤ちゃんほしい？って聞いた時とか！！」
「バカッ！！！！！マジで恥ずかしいから！！！！！ちょっとやめてよ！！！！！」

恥ずかしさが限界を超えているアスリも、顔を上げて腕を伸ばし、ラリーヤの肩を掴む。あのタイミングで、ユニスへのアスリの思いがラリーヤに知られていたとは、アスリも初耳だ。直前にティサから救ってもらった恩義を感じつつも、アスリはラリーヤに反撃をかけていく。

「ってか！！！ラリーヤ！！！さっきそんな話して、もう、すぐ……、その……、ユニスの前でバラすとかさ！！！マジでありえん！！！」
「え、待って待って！！アスリとラリーヤ、何話してたん！？！？」
「何って、アスリの恋とか？」
「バカ！！！ラリーヤ！！！！」
「バカ！！！ユニス！！！！」
「俺！？！？」

アスリがラリーヤを罵ったのに続いて、ティサがユニスを罵った。火のついたように騒がしいとは、まさに今の洞窟のことだ。実際、アスリの顔は火で炙られているかのように火照っている。ラリーヤに切られた痛みはどこへ行ったのか、ティサは得られる情報を貪るかのように勢いよく続ける。

「えっ！？じゃあさ、待ってよユニス！！ユニスも、アスリがユニスんこと好きなん、知ってたってこと！？」
「えっ…………。」

「……どうなん？」
「そりゃ…………、なんとなく？」
　ラリーヤの肩を手放して、アスリが脱力しながら見つめたユニスは、あの伏し目で、もじもじしながら草を見つめている。今、ユニスの皮槍は、また真上を向いて硬直しているのだろう。どうして恥ずかしいアスリは、本当におかしくなってしまいそうだ。
「…………はぁあ～～～～～…………。」
　半分は言葉の、ティサのため息だ。ただただ、アスリはティサには申し訳ないし、ユニスには恥ずかしい。今のアスリは、ティサの吐いた息すら直視できない。ユニスの伏し目が、アスリに感染してしまった。
　羞恥のアスリに対して、先に動いたのはティサだった。草が踏まれる音とともに、視界の外からアスリに腕が2本伸び、アスリの両方の二の腕に置かれれば、続いてきらりと、腰飾りについた宝石の輝きがアスリの目に飛び込んでくる。アスリもティサの顔を、見ざるを得ない。
　長いまつ毛の瞳の奥に、怒りはなかった。腕を通して伝わるティサのぬくもりもまた、静かだ。薄く美しい唇が、アスリに問う。
「…………ねぇ、アスリ。あの…………、ユニスんこと好きって、本当……？」
「…………ごめん、ティサ。私なんて……、ダメだよね？」
　答えよりもまず、アスリが謝罪を先行させる。耳にしたティサが、アスリの体全体を、わずかに近づけた。

「……いいから。ユニスんこと、本当に好きなん……？」

本心を、ティサが求めている。真剣で澄んだまなざしに、アスリも覚悟を決める。

「……私も、ユニスのこと………、好き。」

言った。アスリは、ティサに、ユニスを告白した。ティサも、つぶやくように続ける。

「……私も。ユニスのこと………、好き。」

最後の一言とともに、ティサに柔らかな笑みが広がった。アスリは、視線を落とす。あまりに貧相な自身の胸に対し、ふくよかなティサの乳房は、ユニスに誰が適しているか、如実に示している。ここまでで、アスリはやはり引かなければならないだろう。

恥ずかしい思いの中で、アスリはひどく勘違いをしていたが、ユニスに思いを伝えて良いのは、ティサだけなのだ。誰もが沈黙する中、引くように戻る冷静さとともに、アスリの心が、失った恋を涙に変化させようとした、その時であった。

「……………でも、いいよ？」

「……………え？」

ティサが、何かを返した。再びアスリが、視線をティサの顔に戻す。

「……アスリなら、ユニスとなかよし、……してもいいよ。」

微笑むティサが、優しく首を傾げた。半開きのアスリの口元が、

息をのむ。ティサが続く。
「ユニスのこと、私も好きで、アスリも好き。でも、アスリなら、いいよ?」
「………それって……?」
「……アスリは、私の大事な友達。アスリがいなきゃ、ユニスも私も、生きてない。だから、アスリもユニスんこと好きなら、……ユニスと初めて、やってみなよ。いつしたんか知らんけど、初めての約束しちゃうぐらい、ユニスんこと、好きなんしょ?」
迷わずこくりと、アスリが首を縦に振った。これが、アスリの真意だ。
直後に、柔らかな感触がアスリの左頬に届いた。ティサが、アスリの頬に口づけをしたのだ。
突然の触れ合いに、アスリが驚く間もないうちに、早くもティサはアスリの目の前に戻っている。しかし、ティサの微笑みは大きな笑みへと代わり、左右の口角が上がった薄い唇の奥には、白い歯が並んでいた。
「……アスリ、頑張ってね?」
「……ティサ、ありがとう。」
ユニスと結んだアスリの約束を、ティサが許した。ユニスに抱くアスリの好意が、ティサに認可された。

二の腕にあったぬくもりが去るのに合わせて、ふわりとティサの髪がアスリの目の前を舞い、頭を横たえていた草由来の香りが、アスリに送られる。今度はティサが、ユニスの両手を取った。

「ユニス。アスリんこと……、優しくしてあげて？」

「…………わかった。」

森の2人による、独特の間合いだ。ティサの初めての血液を中ほどにまとうユニスの皮槍は、真上を向いて興奮を主張するが、ティサと手を取り合い、しっかりと見つめあうユニスに、頼りなさはない。

これからアスリは、この瞳に見つめられ、ティサが手にする腕の中に抱かれる。別にユニスが初めてでなくても、アスリは良い。むしろ初めてをこのティサにユニスは捧げたのだから、筋道は通っている。

そして、当のティサは快くアスリに次の道を譲っているし、何よりアスリ自身にとっての初めてだ。まもなく迎える初めての相手がユニスで、アスリは良かった。このまま順調に進めば、昼前にラリーヤがアスリに助言した通り、アスリにとって良い思い出となるだろう。

「んふふふふ…………。じゃあ、しょうがないね？私より先に、アスリだねー？」

アスリと2人きりで語った時とは打って変わって、変態の化身になり下がっているラリーヤも、アスリの優先を認めた。同時に今の

発言は、アスリとユニスに、次に進めという合図以外の何物でもない。まずユニスに何をすべきかに思いを馳せ、アスリが巡るめく羞恥に赤らみ、肉深くの源泉は、湯を沸かしていく。

「よーし！！！じゃあアスリ！！！ヤろっか！！！まずはおまんこ、くぱぁするよ！！！ティサも手伝って！！！」
「えっ！？！？！？！？」
「ちょっと！！！！！！」

不意打ちだ。気づけばアスリの右隣は、一気に回り込んだラリーヤによって確保されている。再び右の二の腕にアスリが感じるのは、ラリーヤの乳房の爆発的な柔らかさだ。
当然、膝立ちだったアスリは、とっさに草の山の上でしゃがみこむ。続いてアスリは周りの草を掴んで、足をたたんで座った股間へと、次々に草をかけやって、３人から性器を隠そうと試みた。驚きを見せたティサも、ユニスの手から右手だけを放して、アスリの左肩に触れていく。

「ほら！！！アスリ！！！足広げるよ！？」
「やぁ！！！ちょっと待ってよ！！！」
「何！？アスリさっき、ティサにやーやーやーしないようにしたんに、自分でもやーやーすんの！？！？」
「いいから、ちょっと！！！」

良い思い出を願っていながら、このラリーヤは強引だ。たしかにティサが恥ずかしがり、ためらい、延々と遮った挙句、ラリーヤとアスリも協力と応援をしながら、やっとユニスとつながった以上、ティサを推進させたアスリにためらいは許されない。
だが、急転する時間の直前、ユニスと何から始めるべきかの想起を終えていたアスリには、１つだけ、先に試してみたいことが、す

でに心に決まっていた。このまま、直にユニスを泉に招く前に、アスリはそれだけは先に成しておきたい。

「ねぇ！！！ラリーヤ！！！待ってってば！！！」
「なん、アスリ！？ほら、おまんこくぱぁ！！！」
「いいから！！！待ってってば！！！ちょっと！！！」
「なに！？」

やっとラリーヤの、アスリの右手と右足に伸ばした両手が、動きを止めた。アスリは、ラリーヤか、ユニスか、あえてティサか、どこを見つめるべきか悩む。泳いだアスリの両目は、結局ユニスの皮槍にたどりついた。

用はないのに、目が向く先はここだ。もっとユニスの上をアスリは見るべきだったが、感情が先に、口内に待機する。

「…………私、………………ちょっとやってみたいこと、……………あるかも。」

上目遣いを、言葉尻にアスリが乗せれば、斜め上からユニスの視線も降り注ぐ。困惑がともに控える中でも、猟師がアスリの意図を捕えようと、アスリのサバンナを見渡している。

あまりに凛々しくて、アスリは見ていられなかった。本当に、アスリはやるのか。

「……ふーん？なぁにぃ？やってみたいことってー？」

アスリの右の耳元で、性の悪魔が問う。内ふとももを線上についたう、ティサの赤と白のまぜものに伏し目を送りながら、この血と精の筋に続いていく前の、羨ましかったティサの行為を、アスリは自

らの肉体に重ねていく。

「…………私も、ユニスと…………、まず…………、ぎゅってしながら…………、ちゅっちゅ、してみたい、かな？」

欲望を、アスリは声にした。恥ずかしい。

「…………ユニス？」

「おっ…………。」

森で育った2人が、すぐにアスリの意を汲んだようだ。すぐさまティサが、左手でつないだままだったユニスの手を引けば、膝立ちのユニスが、真正面からアスリと対峙する。

4人の密度が、高い。右隣の悪魔は、まだアスリに問い続ける。

「…………どっちと？」

「…………えっ？」

「ユニスの、どっちとちゅっちゅしたいん？」

「……どゆこと？」

いやらしさしかない問いの出所に、アスリもわき目を向ける。案の定、ラリーヤの顔に広がっているのは、悪さでしかない。悪は、二択を迫る。

「だからぁ、ユニスのお口とちんちん、どっちとちゅっちゅしたいん？」

無論、アスリの想定は、ユニスの口だ。先ほどのティサのように、アスリはユニスと抱きしめあいながら、舌同士で握手がしたいのだ。

それは、今も変わらないはずだ。ところがアスリの本能は、別解

を理性に示し、理性も本能を称賛する。

「…………………どっ、…………どっちも、かも。」

「んふふふふ…………。アスリ、どっちもちゅっちゅしたいってよ？ ユニス？」

恥ずかしい。ラリーヤの囁きが、アスリの内耳を回転させている。うつむくアスリは、喉の奥が突き刺されたかのようだ。

「ユニス？……できる？」

「……………アスリ？」

母性に富んだティサの声が、ユニスに可否をうかがった。そこで、ユニスは声で返事せず、代わりにアスリを呼んだ。ユニスはティサに、目でできると答えた上で、次はアスリを気にかけているのだ。

「…………ほら、アスリ？」

隣のラリーヤは、アスリを促している。両取りを選択してしまったが、アスリはユニスのどちらから口づけすべきか。判断に当たって、アスリはティサの時のように、あまり時間を多くかけることはできない。

正攻法だ。口と、口で対話し、アスリの愛をユニスに伝えるのだ。口と性器は、そのあとだ。

決意したアスリの鼓動は、洞窟中に鳴り響くようにアスリの頭をぐらぐらと揺らし、たぎる血潮は全速力で体中を駆け回る。アスリが、正面で膝立ちを取るユニスに、瞳を向ける。それにあわせて、アスリがまだユニスとつないでいた左手を放したティサは、そっと寄り添う

ように、アスリの左隣に腰を下ろしていく。
ユニスの瞳の中で、熱いアスリが左右に1人ずつ、アスリを見返している。なんという顔をしているのだろう。アスリは今、この苦しいほどに高鳴っている心臓を、ユニスに直に触れてもらって、愛を心から伝えたい。
想いのままに、静かにアスリが両手を伸ばし、ユニスの手をそれぞれ取った。この手も、熱い。ティサはこの熱を、ユニスから感じていた。今から少しだけ、アスリもユニスをティサから借りて、我が身にユニスの熱を加えてゆくのだ。

心臓を、ユニスに伝えなければならない。狩りの目をしながら、ユニスはアスリに手を捉えられている。2人の小さく、熱を帯びた呼吸の中、アスリの引き寄せるユニスの弓のような両手は、心脈の元へと近づいていく。

「…………………っ！！！」
「！！！！！」
「！！！」
「！？！？」

アスリの胸の色づいた左右の頂点に、ユニスの両方の手のひらが、ぴったりとおさまった。これだけで波を被りそうなアスリが息を1つ吸った以外、誰も声を出さない。
ただ、ユニスは目を大きく見開いて、喉ぼとけを一度上下させており、ティサもユニスがアスリの胸に触れた瞬間に、アスリの左の二の腕に自分の身を寄せながら、視界の隅で左手で口元を隠す仕草を見せた。ユニス以外、左右の2人の表情をアスリは細かく見られないが、ラリーヤも茶化すことなく、ただじっと、成り行きを見守っているようである。

小さなアスリの膨らみは、これで全てユニスの手中だ。ユニスは、アスリの鼓動を理解しているだろうか。

「…………私のどきどき、わかる？」

自然と、アスリの口から思いがこぼれる。真一文字に結んだ口で、さらに唇を内側に小さく噛みながら、ユニスがわずかに頷いた。愛しい人だ。

愛を求めるアスリの手は、アスリの成長を手にするユニスの両手から離れ、次は女子と見まごうほどにきめ細やかでかわいらしい、ユニスの両頬へと伸びていく。アスリの求めに応じるユニスもまた上体を前傾させて、頭をアスリに下ろしていく。

こめかみに浮かんだ汗が、ユニスの頬を流れ、伸び行くアスリの手の中に落ちる。ほどなく、心臓と向きあうユニスの頬を、アスリの両手が取り上げた。

「…………アスリ？」

ユニスが優しく、はにかんだ。一段と、アスリの心臓がこだまする。

「…………ユニス。」

言うべきことを、言う時だ。ごくりと唾を、アスリが飲んで、勇気とともに恋を形にする。

「…………………………好き。」

言えた。心臓は、壊れそうなほどに高鳴っている。言葉に続いて、ユニスの両頬に触れるアスリの手を、本能が引き寄せる。アスリに任せるユニスもまた、アスリと距離を近づけながら、瞼を閉じる。
美しい顔だ。安堵とともに、瞼を閉じたアスリも、穏やかな暗闇で照らされる。

唇と、唇が、触れた。アスリは、幸せだ。唇とは、なんと柔らかいのだろう。草の山に座ったたまだったアスリは、もっとユニスに近づきたくて、自然と腰を持ち上げ、ユニスに合わせた膝立ちの姿勢を取っていく。それとともに、ユニスの両頬に置いていた両手も、目を閉じた暗がりの中、ユニスの首筋から胸をたどって、背中へと回していく。
小さな胸に触れていた、ユニスの両手も胸からアスリの背中に回る。寂しくなったアスリの胸を、次はユニスのたくましい胸板が受け止めた。一方で腰回りでは、固く主張する上向きの1本が、アスリに女子を求めていて、生えかけの薄っすらとした茂みが、男子を2人の間に包み込む。

2人の体に、距離の概念がなくなった。今、ここにいるのは、アスリと、アスリの大好きで大好きで大好きな、ユニスだ。
時間も、止まる。

動いた。時間が、動く。アスリの口元で、時間が動いている。
ユニスの舌が、アスリに会いたいと伝えている。互い違い、斜めに傾げあってつながる唇の端から、アスリがユニスとつながっている証が、2人の混ぜ物となって、流れていく感覚をアスリが得る。
小さく開いた唇に、やっとユニスがやってきて、アスリに入る。

舌が、とろけてしまいそうだ。ユニスの、味だ。2人の接する唇から、鼻孔に赤子のもののような、唾液の匂いが上って、とけゆく

舌とともに、アスリの閉じた目から脳の前部まで、ユニスがアスリに付き添っていく。

ただ、アスリもユニスを訪問したい。やってきたユニスと絡めあう舌の隣から、アスリもユニスに向かう。

歯に舌が触れた。ユニスの家だ。伸びる舌と舌が、こすれ合う。

ふいにユニスが、舌の力を抜いた。硬く伸ばしていたアスリも、ユニスを真似て力を抜く。柔らかく、ユニスがアスリの舌先をなめあげて、アスリもユニスを舌で休める。

波が、近いのに遠い。切なくて、もどかしい。それでも今は、この時間をいつまでも、アスリは続けていきたい。ユニスと、１つの舌で暮らしたい。愛を、アスリが送る。

やりたいこと

舌に、アスリとユニスが没頭する。触れ合う唾液と唾液が、水の音を醸し出す。ユニスの舌が、アスリの全てをユニス一色に塗り替えていく。

「…………………ねぇ。」

ふいにどこかで、ラリーヤの声がした。どうでもいい。

「…………ねぇ、アスリ、ユニス。」

どこかではない。アスリのすぐ隣だ。邪魔だ。

「ねぇ！！聞いてんの！？」

ついにラリーヤが、アスリの肩を掴んだ。こうまでされては仕方なく、アスリもユニスも唇を放し、真横のラリーヤを見ざるをえない。もちろん、アスリはユニスを抱きしめたまま放さないし、ユニスもアスリを放さない。

「キミら、熱いとこ悪いんけど、いつまでそんなちゅっちゅしてるん？」

横やりを入れたラリーヤの顔に浮かんでいるのは、明らかな呆れだ。２人の時間を冒涜するラリーヤに、アスリもぶっきらぼうな返事をする。

「何！？別にいいじゃん！？私とユニスに任せてよ！！」
「いや、たしかにそうっちゃそうなんけどさ………、ちょっとティサんこと、見てみ？」
やりとりに、ティサが引き合いに出された。ラリーヤの指摘に、アスリもユニスも頭をぐるりと回し、ラリーヤと反対側でアスリのもう一方の肩に触れるティサに目を向ければ、紅潮させた頬に、左手で口元を覆い隠したティサが、目を大きく広げて2人を見つめたまま、一切動きを見せずに固まっていた。我に返ったアスリは、ひとまず目先にあった言葉を口に出す。
「あ………、ティサ。なんかごめん。」
今はアスリがユニスとともにある時間であり、謝罪を口にしたアスリ自身、ティサに何について詫びたのかは理解できていない。ただ、ここでユニスにもティサの視線が刺さったのか、ようやくアスリとユニスの体の密着は解け、2人の間に拳が2つ分ほどの間隔が生まれた。
「………あのっ、えっと、アスリ？」
「何？」
「………ごめん！！！！」
ティサもまた、不明瞭な謝罪をアスリに投げた直後だった。すぐさまティサは、ユニスの両頬を手にすると、自らの方へと引き寄せた。
「ユニス！！！！好き！！！！」
突如、ティサがユニスにまた愛をぶつける。アスリのすぐ近くで、

もう1組の口づけが始まった。
「ん―――!!!!!」
「えっ!?!?ちょっ、ティサ!?!?」
これにはユニスも目を閉じられないし、むしろ目玉が落ちてしまいそうなほどに、両目を大きく開いている。腕の中のユニスがいきなりティサに奪われたアスリも、信じられないティサの行動に、ただただ唖然とする。
「あーあー、アスリとユニスがいっぱいちゅっちゅするから、ティサ我慢できんくなっちゃったじゃーん?」
相変わらず余裕とともに声かけするラリーヤは、アスリとユニスが口づけにのめりこむ間にティサの様子をうかがって、ティサが暴走することを予見していたのだろうか。とにかく、アスリも目の前でユニスがさらわれてしまった以上、何らかの行動を起こすしかない。
「ティサ、ごめんね!!!!!私もユニス好き!!!!!」
焦るアスリの下した決断は、ティサへの再度の謝罪と、ユニスへの告白だ。目を閉じたアスリは、わずかにとがらせた唇を、ティサとユニスのつながりへと割り込ませていく。
「わぁ!!!ユニスめっちゃモテモテ!!!うれしいね!?ユニス!!美人さん2人から、一緒にちゅっちゅだよー?」
ラリーヤが何を思って、ユニスに状況を伝えているのか、ここでもアスリはわからない。また、ティサは美人で良いとしても、アス

リの自己認識は美人でない。
しかし、目を閉じた再度の暗がりの中、左はティサ、右はユニスだ。唇と唇と唇が触れ合い、左から伸びる舌をアスリはなめ、さらに右からも伸びた舌に絡ませ、アスリも右に伸ばし、どういう訳か左にも伸ばす。

ユニスは、アスリの愛の対象だ。したがって、口づけをすることは正しい行為だ。
では、ティサとの口づけが意味することは何か。ティサは、アスリの大切な友人で、ティサもアスリを同じように大切だと述べていた。それにも関わらず、気づけばアスリは右だけでなく、左ともユニスにしたように激しく唇と舌で握手している。
同性だ。それなのにティサは、性の対象だ。おかしい。加えてアスリの本能は、確実に興奮を得ている。
やはり、アスリの性の垣根は、倒壊してしまっているようである。残した右手はユニスを感じ、進む左手はティサのふくよかな膨らみに這わせ、自分のものに触れるかのように、ティサの特徴的な先端を転がしていく。

「…………んっ！　んっ！　んっ！」

一度は軽くティサが手で払ったが、二度目はティサもそのままアスリの指先を受け入れた。艶めかしくティサが呻けば、同性としての反撃がティサからアスリにも届く。左胸が、切ない。
せっかくの機会だ。アスリが右のごくごく小さな先端にも指先を伸ばせせば、男子のユニスも胸の突起を固くしている。切ない思いを、アスリの巧みな手技がユニスに伝える。下部の男子の皮突起も、アスリの太ももとティサの茶髪がもてあそぶ。

「んっくっ！！んっ！！」
「うわぁー！！ちょっとー！！すごーい！！ティサもアスリも、すっごいえっちになってるー！！」
「んーっ！！！んーっ！！！」
「ユニス！！！ぴゅっぴゅは絶対我慢だよ！？！？」

視覚に頼らず、触感と味覚、嗅覚だけに頼るアスリに対して、見たままの情景を口走るラリーヤに、ユニスが何か言おうとしているが、女子の唇がユニスを塞ぎ、ラリーヤもユニスを諫める。３人のカオスの中に、愛と性が入り混じって、アスリは寂しさに襲われる。

いつの間にかユニスの胸から腰へと回って、よりユニスの近くを取ろうとしていたアスリの右手に、引き締まったユニスの割れ目が触れた。同時に腰回りから、ユニスだけが退出した。ユニスが腰を引いている。

唇も、右側がいなくなった。左だけを味わうアスリは、真っ当な理由もなくティサの唇を求め、ティサもアスリに応える。

「……やばい！出そう！！」

ユニスが、急を告げた。アスリもティサも快楽を中断し、ユニスに即応する。右側で触れるユニスの肉体が、硬直する。

「あ、ちょっと！！！だからぁ！！！ほら！！！！アスリもティサもやりすぎ！！！」

究極の変態が、アスリとティサの過ぎた行為を責めた。すなわちアスリとティサは、変態から見てもどうしようもないのだ。事態の急変に、アスリもティサも、唇と身を離す。

ティサのぷっくりとした乳輪の先、アスリがいじめた右の突起は、

固くなってユニスの槍のように主張している。これは、色濃く小さなアスリの左側も、またそうだ。
本家のユニスは、アスリやティサから腰を引いて、ティサの血の残る皮の槍を、鼓動とともに揺らしている。また皮の出口には、涙だ。涙が糸を引いて、ユニスの膝へと垂れ向かう。

「……っ！！！……っ！！！……っ！！！」

耐えている。ユニスが、波を過ぎ越していく。涙だけが、ユニスが男子たる矜持として、立ち上がっても余る先端の皮膚の出口から、ティサに注いだ残り香の、落ち行く一筋を見せる。いやらしい。
もう一度、アスリはティサにも目をやる。名残惜しそうな恍惚が、ティサだ。なぜ同性のアスリに、この視線を向けるのか。いやらしい。

その、いやらしい目元が、ちらりと下を見た。ティサが目を向けた先にあるのは、アスリのはみ出る現実だ。
これではいけない。アスリは見られてはいけない。不自然に感じられないようにしつつも、素早く草の上に足をたたんで腰を落としたアスリを前に、ラリーヤは主にティサに対して、大きく苦言を呈していく。

「もう！！！2人とも！！！ってか、ティサ！！！我慢できんのはいいけど、ティサはさっきヤッたんだから、今度のぴゅっぴゅはアスリんっしょ！？！？」

ティサの口づけは、ラリーヤが横やりを入れた点から始まっただけでなく、それ以前にユニスが誰のものかなど、ティサのもので決まり切っているのであって、論理は破綻している。だが、今のラリ

ーヤに説得力があるのは確かだ。

「ぐっ……！ごっ……、ごめん、アスリ。」

訳が分からないが、ティサもラリーヤの理に圧迫された。まだなお、ティサの表情は、いやらしい。ずぶ濡れの内ももを、アスリはこの中の誰にも気づかれたくはない。恥ずかしいし、愛は右手側、性は左手側、それぞれやや上方だ。

「で……？だからアスリは、どうしないといけないん……？」

「…………えっ？」

面倒な女だ。故に、完璧だ。ラリーヤだけは、全部を見ているのだろう。問われたアスリの１つ目の返事は自慰だが、すぐさまそれを打ち消して、アスリは押し黙る。

ところが、変態はそれを許さない。大きな乳輪とともに、大きな乳房も揺れ、アスリを質す。いやらしい。

「お口でちゅっちゅしたんなら、次ちんちんっしょ？さっき自分で、どっちもって言ったんに、お口とお口だけで、ぴゅっぴゅさせちゃダメじゃん！？…………ユニスももう今日、何回も出したんだから、ちんちん、そんなよわよわで、どうするん？子どもちんちんだから悪いんよ！！そんなんだど、今度先っちょの皮、ホントに切っちゃうかんね？」

「ふざけんな！！！ヤメロ！！！」

熱い。波が、危ない。

ユニスの怒号まで、いやらしい。苦しい。ユニスの大人になる成長まで、ここで持ち出されれば、アスリは気絶しかねない。

もう、アスリが意識を保つことを救えるのは、ユニスしかいない。
アスリが備える。
「………ってかさ。」
回りゆく血液に耐えるアスリの面前で、ユニスが会話を区切った。
転換を、ユニスが作るのはアスリが知る限り異例だ。目前の異例に
アスリの理性はこらえ、あと少しだけで到達可能な本能を黙らせる。
「………ってかさ。」
ユニスが繰り返した。全員が、ユニスを待つ。
額に浮かびゆく汗は、こうして生じるのだ。うつむく視線を、う
るさいラリーヤですら、待つ。静寂は、力だ。これが、ラリーヤの
言葉であり、アスリとティサの疑問だ。
汗が、落ちた。ほどなく、ユニスが心中を吐露した。
「…………………俺も、……………………あの、アスリと………
………、やっ………、やってみたいこと、ある、………
……かも？」

本心

アスリも、ティサも、ラリーヤも、たしかにユニスの思いを聞き届けた。まだ静寂が、続く。
今のアスリは、無に近い。正確には、背景で様々な考えがよぎっているが、ユニスが珍しく口にした希望が、何であるか不明である今、ユニスの考えをアスリは予測できないのだ。それはほかの2人も同じであるのか、吸って、吐いて、呼吸を2度、3度と行っても、次の言葉は女子の誰からも出てこなかった。

「…………あの……、やっぱ何でもない。」

気まずさに耐えかねたユニスが決壊し、前言を撤回した。しかし、皮肉にもユニスが取りやめたあと、アスリの右隣では、草がずれる音がしている。
まっすぐ立った小指に、親指と触れ合うように伸びた薬指と中指、角度する人差し指が妖しくユニスに伸び、筋肉の浮き出るユニスの脇腹に触れた。ラリーヤが、ユニスを拾ったのだ。その中指とともに、ラリーヤが第一声を上げる。

「…………………アスリと、何したいん？」

「…………えっ？」

改めて、ユニスとラリーヤの短いやりとりを聞き直して、アスリは今更ながら耳を疑った。ラリーヤは、今、なんと言ったか。
アスリの名前を出していた。その前のユニスの途切れ途切れになった吐露をアスリは耳にしながら、アスリが引き合いに出されていたことを、十分に認識できていなかった。ユニスは、アスリを指名

していたのだ。
もう、無ではいられない。ユニスは、アスリと何をなしたいのだろう。愛の求めなら、本当に心臓に直に触らせることも、アスリは容易にこなすことができる。心が、躍動する。
「………だからユニス、アスリと何したいん？」
もう一度、ラリーヤがユニスを問う。すらりと、中指が浮き出た腰骨まで下降し、ユニスがびくりと体を震わせ、涙の皮もひとつ震える。
「んっ…………！！！」
「ユニス？」
次は、ティサもユニスに問う。ただ、こちらの声色はラリーヤのように性に溢れてはおらず、むしろ不安がにじみ出ているかのようなトーンである。調子をそのまま、ティサが続ける。
「…………アスリとなん？」
「こらぁ、ティサぁー。だから今はアスリの番っしょ？さっきはアスリだって我慢してたんだから、ティサもちゃんと良い子にして待たんとー？」
ティサの一言に、性はそのまま、ラリーヤがたしなめ、アスリの肩を持った。ただ、それでもティサの不満は収まらない。
「……でも、さっきユニス、私にはそんなん、言わんかったよ？」
「うーん。じゃぁ…………、ねぇユニス？それって、アスリだけじゃなく、ティサにもできるん？」

「…………いいよ。」
「じゃあ、いいよね？ティサ？」
裁定をするのがラリーヤであっても、まずこの形の提案をティサに行うに違いない。当然、ティサも首を縦に振って、これ以上は異議を申し立てなかった。
一方、最もシンプルな同意をしたユニスは、ひどい伏し目で、また涙を先端からこぼしそうである。何をしなければならないのか、アスリはまだ見当もつかないが、なぜかすでに何かを始めているかのようだ。

「で、ユニス。もっかい。アスリと何したいん？」
「……なんでもねぇし。」
「いいから、そういうん。言ってたじゃん？自分で。」
「………………………。」
「……ほら？なに？」
「…………んおっ！！おいっ！！」

戒めとして、ユニスの腰元で待機していたラリーヤの指先が、するりと前に回り、涙の皮先をつまみあげた。そのままラリーヤが皮を手前に引けば、固い角度は下に向き、包皮の長さも子どもとして成長する。

「ほら？早く言わんと、ちんちんびろーんってしちゃうよ？」
「っざけんな！！！」
「ちゃんと言えんなら、さっきティサん切ったみたく、ユニスのここも切っちゃおっか？」
「痛たたたたたっ！！！ヤメロ！！！」
ラリーヤがユニスの皮に、爪を立てた。これにはユニスも、伸び

た先端に手を向かわせるが、ラリーヤもユニスを掴んだまま放さない。予断を許さないアスリはユニスを待つ間、余計な口は利かないに越したことはないが、この遊びは楽しそうで、アスリも混ざりたい。

「じゃあ、早く言ってよ？アスリと、何したいん？」

「……………………痛たたた！！！爪ヤメロ！！！マジで痛い！！！」

「ほら、ホントに言えんの？ちょん切って、大人にならんと言えん？」

「言うから！！！言うから！！！ラリーヤ放せよ！！！」

歪んだユニスの表情が、弛緩した。尋問するラリーヤの指先が、ユニスが覆い隠す手の下で、一時的に優しさを見せているのだろう。だが、ユニスが言わなければ、すぐにラリーヤによる罰は再開される状態に変わりない。秘めたる願望を言葉で表現できないユニスが、またしてもひどい伏し目で、どこかに視線を逸らす。

「で？アスリと何なん？」

「……だから、……その、…………。」

「アスリにちんちんの皮、切ってもらいたいん？」

「バカ！！！じゃなくて！！！」

それは結構なことだ。任せてもらえるなら、アスリはぜひやりたい。その際、自慰もしたい。

「じゃあ何？アスリと？」

「……………アスリの。」

「アスリの？」

「………………アスリの。」

「アスリの何？」

男と女の変態に、アスリの名前が、連呼される。愛する男の変態は、アスリに何を求めるのか。こうして待つ間に、アスリは狂ってしまいそうだ。そろそろ、ユニスも佳境だ。

「……………アスリの、…………………………おまん…………の。」

「アスリのおまんこ？」

「ウソッ！？！？」

「ちょっ！？！？ユニス！？！？」

平然と述べたラリーヤの響きに、アスリが点火し、ラリーヤはユニスを呼ぶ。性器だそうだ。本能は喜びに叫んでいるが、理性は激しく混乱している。ついアスリと顔を見合わせたティサは、驚いているにも関わらず、どこか心の奥がいやらしい。

2人の反応にも、性の魔人であるラリーヤは動じない。ラリーヤはユニスに、またアスリの名前と、あの呼称をつなげる。

「で、アスリのおまんこが？」

「……………………………………そこん……………………………、ビランとこ。」

「アスリのおまんこのビラビラ？」

脳天が、かち割れそうだ。まさかの、アスリの究極のコンプレックスだ。一気にアスリの体温が、外のサバンナを優に超えていく。もう驚きの声すら、アスリは上げられないし、ティサも続けられない。

また、アスリがティサを見る。少し笑っているのだろうか。この笑みは、恥ずかしさだ。ティサまで共感して、温度をともにしてい

るのだ。

「…………………………。」
「で、アスリのおまんこのビラビラが、何？」

ユニスが息を吸って、吐き出し、また黙った。ユニスも、恥ずかしがっている。ラリーヤだけは厳しく、ユニスを許さない。言葉は、アスリも許さない。

部位はもう、アスリもわかった。これだけで苦しいのに、ユニスは何がしたいのか。考えたくもないし、考えたいが、考えがまとまらない。

「…………何？」

ラリーヤが責める。もう、時間はいっぱいだ。まもなく、ユニスがアスリに、自らの欲望を語る。

「……………………………見たい、近くでいっぱい。」
「うわぁあああああ！！！！！」
「わぁああ！！！ユニスえっちー！！！！！」
「ウソでしょ！？！？変態だぁあああ！！！！！」

洞窟が、爆発した。ティサが叫んで、ラリーヤも変態を指摘し、再びティサが文字通りの変態を指摘した。

「え！？！？待って！！！そしたらユニス、さっきの話だったら、ティサのビラビラもまた、近くでいっぱい見るってことじゃん！？」
「バカ！！！！！私は無理！！！！！」
「いや、いいじゃん！！もうさっき初めてのなかよししたんだし！！」

「ホントバカなん！？さっきラリーヤ切ったんから、痛くて足広げられんよ！？」
「じゃあまた今度見せる！？」
「見せるわけな…………………、きっ、気が向いたら？」
「うわぁああ！！！ティサもへんたーい！！！」
「バカッ！！！！ラリーヤと違うし！！！！」

発した言葉に対して、2人の声は弾んでいる。喜んでいるのか。楽しんでいるのか。

アスリは、灰だ。爆発で、骨まで灰になってしまった。嘘だ。灰になったのは理性だけで、本能は2人と同じく、最高に弾んでいる。

盛り上がる声を聴きながら、アスリの理性は考える。ユニスは、何を言っているのだろう。なぜ、あんなに外側に大きくはみ出して、色づいている2つの肉を、見てみたいのだろう。ユニスは口に出していないが、確実に中央の大粒まで丸出しだ。それも、近くで、長時間とのことだ。変態は、頭がおかしい。

本能も、考える。嬉しい。あんなところを、ユニスは見たいのだ。最高だ。最高で最高で最高だ。しかし、なぜユニスは、あのはみ出しを目にしたいのか。

「…………………………なんで？」

ちょうど、会話の切れ目となったところで、アスリの本能がそのまま、ユニスに向けて震えを抑えながら声を出した。気づけば両手は、たたんで座った股間の真上を、きつく押さえている。この奥を、なぜユニスは見たいのか。

「…………………………………………。」

ユニスが、恥ずかしくて喋れない。それでもアスリは、もう嬉しくてたまらない。本当に最高の人を、アスリは愛することができた。

「ほら、アスリがなんで見たいん？って聞いてるよ？」
「変態だから見たいんしょ？へんたーい！！」
「バカ！！！ティサ！！！うっさい！！！」
「じゃあなんでなん？私にはそんなん言わんかったくせに！！」
「ティサん………、綺麗だったよ。痛くなくなったら、また見せてよ？」
「……バカッ！！！…………いいけど？」
「このバカ2人！！！！！アスリがなんでって言ってんしょ！？ってか、ティサにまた見せてなんて言うなら、アスリにも答えられんじゃん！？」
「あっ、たしかに！！！アスリともちゃんとおしゃべりしてあげてよ！！！」
「…………………恥ずかしい。」
「なんで私に言えんのに、アスリには恥ずかしいん！？！？」

もうろうとして、1人で完成しかけているアスリが、3人に置いてきぼりにされながら救われる。ラダンの罰の日よりも、今日の刺激はアスリにとって強い。
それでも、あの日のように気絶してはならない。まだ、見届けなければならないアスリの本能は、ユニスが意図して最後のティサを無視して生じたのであろう無言に、もう一度疑問を挟み込む。

「…………ねぇ、ユニス？」
「…………何？」

次を、アスリが迷った。自身に、ユニスが恋をしているか、聞くべきか。自分を、好きでいるのか、聞くべきか。

いけない。ユニスのことをどんなに愛していても、ユニスには、ティサだ。アスリが問いの、原初へと立ち返る。

「…………なんで、…………なんで、…………私のあんなとこ、近くでいっぱい見たいん？」

「……………………………。」

「こら、ユニス？」

黙ったユニスを、ティサがけしかけた。改めてアスリが、ユニスを問う。

「ねぇ、ユニス。なんで？」

「…………アスリの、……………アスリの！！！！」

恥じらいが、アスリとユニスの４つの瞳を行き来する。アスリの左右からは、別な４つの瞳が、ユニスの口元を注視する。

もう、ユニスは沈黙できないし、ごまかせない。伏し目が、大きく息を吸ってから、唇が動いた。

「…………ホントは…………、ホントはずっと………………、前からずっと…………、見たいって思ってた！！」